静岡県埋蔵文化財センター調査報告　第51集

赤土政所遺跡・一反田遺跡

菊　　川　　市

平成19～20年度（掛川浜岡線原発関連道路整備事業）及び
平成24年（掛川浜岡線原発関連道路整備事業）に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

（第１分冊）

２０１６

静岡県埋蔵文化財センター

▼ 一反田遺跡 ▼ 赤土政所遺跡 ▼

▲ ▲ ▲

１．赤土政所遺跡・一反田遺跡遠景（南西から）

▲の交点が調査対象範囲

２．赤土政所遺跡・一反田遺跡遠景（南から）

▲の交点が調査対象範囲

巻頭図版２　赤土政所遺跡

2-3 区第４面　水田完掘状況（北から）

整然と並ぶ水田跡

3-1 区第４面　水田完掘状況（北西から）

整然と並ぶ小区画水田

巻頭図版４　赤土政所遺跡

１区第２面　掘立柱建物群完掘状況　（北西から）

１区第４面　SD403 出土遺物

巻頭図版６　赤土政所遺跡

１．第３面　SH301 出土遺物

２．第３面　SH302 出土遺物

１．第３面　SH304 出土遺物

２．第１面　主な貿易陶磁器及び施釉陶器　（中世）

巻頭図版８　赤土政所遺跡

第２面　SD206 出土の主な土器・石製品

第２面　SD206 出土の主な木製品

巻頭図版 10 一反田遺跡

北区（5-1・2 区）第 1 面　完掘状況全景（北から）

南区（3-2 区）第 1 面　完掘状況全景（北西から）

区画溝に囲まれた屋敷跡

巻頭図版 12 一反田遺跡

１．南区（3-2 区）第１面　SH101 ほか完掘状況（北西から）

２．南区（3-2 区）第３面　水田完掘状況（北西から）

北区第１面　SD101 出土の主な土器・土製品・石製品

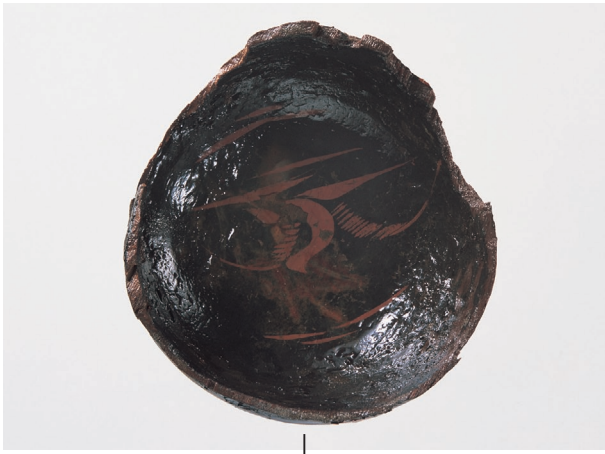
巻頭図版 14 一反田遺跡

第１面　SD101 出土の主な木製品

第１面　SD101 出土の主な木製祭祀具

巻頭図版 16 一反田遺跡

1．主な貿易陶磁器及び施釉陶器（中世）　遺物番号は図版 112-2 参照



2．SD101・105 及び SK117 出土漆椀・漆付着土器・古瀬戸

序

赤土政所遺跡・一反田遺跡は、静岡県の西部の菊川市に所在します。両遺跡は、菊川の支流である丹野川が形成した平地部分に位置しており、丹野川のすぐ南側を一反田遺跡、さらにその南側が赤土政所遺跡と呼ばれています。

赤土政所遺跡は、すでに周知の埋蔵文化財包蔵地として知られていましたが、掛川浜岡線バイパスの整備に伴い、静岡県袋井土木事務所より埋蔵文化財の有無の照会を受け、平成 19 年度に開始した試掘・確認調査で新たに「樋詰遺跡」と「一反田遺跡」が発見されました。

今回の発掘調査では、当地にはじめて人の痕跡が確認できるのは弥生時代後期末から古墳時代初頭の頃であることがわかりました。その後、人による開発の手が入り集落を築くのは、古墳時代前期に入ってからのことです。これ以降、人々は比較的安定したこの土地を居住の地としていたことが明らかになりました。

特に赤土政所遺跡では、奈良時代から平安時代にかけて大型の掘立柱建物跡が列を成して並び、建て替えも行われています。さらに、出土した墨書土器の数々などから、ここが一般的な集落ではなく、この地域を取りまとめる役割を持った人々がいた場所であったことを物語っています。

今回の調査で見つかった建物群は、必ずしも人々がいた中心域ではなく、ごく一部に過ぎません。今後、この周辺における遺跡の存在を注視していくとともに、全容を明らかにしていく必要のある重要な地域と言えます。

本書が、研究者のみならず、県民の皆様に広く活用され、地域の歴史を理解する一助となることを願います。

最後になりましたが、本発掘調査にあたり、静岡県袋井土木事務所掛川支所ほか、各関係機関の御援助、御理解をいただきました。この場を借りて厚く御礼申し上げます。

2016 年３月

静岡県埋蔵文化財センター所長
赤　石　達　彦

例　　言

1　本書は静岡県菊川市赤土 502 他に所在する赤土政所遺跡と、菊川市赤土字一反田 608-2 他に所在する一反田遺跡の発掘調査報告書である。

赤土政所遺跡　菊川市赤土 502-1・904

一反田遺跡　　菊川市赤土字一反田 491・491-1・607-1・606・608-1・608-2・610・766-1

2　調査は（主）掛川浜岡線原子力発電所関連道路整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査業務として、静岡県袋井土木事務所の委託を受け、静岡県教育委員会文化財保護課（平成 22 年度まで静岡県教育委員会文化課）の指導のもと、財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が実施した。平成 23 年度以降は、静岡県埋蔵文化財センターが同研究所の業務を引き継いで実施した。

3　赤土政所遺跡・一反田遺跡の確認調査・本調査及び資料整理の期間は以下のとおりである。

試掘・確認調査　平成 19 年 11 月 7 ～ 9 日　調査対象面積 720 ㎡　実掘面積 26 ㎡（樋詰遺跡）

平成 20 年 1 月 24 日　調査対象面積 400 ㎡　実掘面積 6 ㎡（赤土政所遺跡）

平成 20 年 9 月 17・22・23 日　調査対象面積 560 ㎡　実掘面積 32 ㎡（一反田遺跡）

平成 24 年 5 月 7 日　調査対象面積 680 ㎡　実掘面積 50 ㎡（一反田遺跡）

※試掘・確認調査は文化財保護課が実施。

本調査　平成 20 年 9 月 10 日～平成 21 年 3 月 26 日　調査対象面積 1,040 ㎡　実掘面積 403 ㎡

平成 21 年 6 月 24 日～平成 22 年 3 月 25 日　調査対象面積 3,332 ㎡　実掘面積 3,932 ㎡

平成 22 年 3 月 9 日～平成 23 年 3 月 15 日　調査対象面積 600 ㎡　実掘面積 600 ㎡

平成 22 年 7 月 27 日～平成 23 年 3 月 15 日　調査対象面積 600 ㎡　実掘面積 600 ㎡

平成 24 年 7 月 12 日～平成 25 年 3 月 29 日　調査対象面積 860 ㎡　実掘面積 530 ㎡

資料整理　平成 23 年 7 月 6 日～平成 24 年 3 月 16 日

平成 24 年 7 月 12 日～平成 25 年 3 月 29 日

平成 25 年 5 月 24 日～平成 26 年 3 月 28 日

平成 26 年 6 月 6 日～平成 27 年 3 月 26 日

平成 27 年 6 月 6 日～平成 28 年 3 月 31 日

※資料整理には、保存処理期間、報告書刊行作業期間を含む。

4　調査体制は以下のとおりである。

財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所

平成 20 年度

所長兼常務理事　清水　哲　　次長兼総務課長　大場正夫　　総務係長　山内小百合

会計係長　杉山和枝　　次長兼調査課長　及川　司　　次長兼事業係長　稲葉保幸

保存処理室長　西尾太加二　　東部総括係長　中鉢賢治　　東部調査係長　笹原千賀子

中部調査係長　河合　修　　西部調査係長　富樫孝志　　調査研究員　村松健史・坂下　誠

平成 21 年度

所長兼常務理事　天野　忍　　次長兼総務課長　松村　享　　総務係長　山内小百合

会計係長　杉山和枝　　次長兼調査課長　及川　司　　次長兼事業係長　稲葉保幸

保存処理室長　西尾太加二　　次長兼東部総括係長　中鉢賢治

東部調査係長　笹原千賀子　　中部調査係長　河合　修　　西部調査係長　富樫孝志
調査研究員　村松健史・坂下　誠

平成 22 年度
所長兼常務理事　石田　彰　　次長兼総務課長　松村　享　　専門監兼事業係長　稲葉保幸
総務係長　瀧みやこ　　調査課長　中鉢賢治　　調査第一係長　勝又直人
調査第二係長　岩本　貴　　調査第三係長　溝口彰啓　　調査第四係長　富樫孝志
調査研究員　坂下　誠　　（ここまで財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所）

静岡県埋蔵文化財センター
平成 23 年度（資料整理）
所長　勝田順也　　次長兼総務課長　八木利眞　　主幹兼事業係長　村松弘文
総務係長　瀧みやこ　　総務課事業係　青木　修・青井拓司
調査課長　中鉢賢治　　調査第一係長　富樫孝志　　調査第二係長　溝口彰啓
調査課第二係　主査　井鍋誉之（資料整理担当）・大森信宏（保存処理担当）

平成 24 年度
所長　勝田順也　　次長兼総務課長　八木利眞　　調査課長　中鉢賢治
主幹兼事業係長　　前田雅人　　総務係長　瀧みやこ　　総務課事業係　青木　修・橋野大輔
調査第一係長　富樫孝志　　調査第一係　大谷宏治（現地調査・資料整理担当）
主査第二係長　溝口彰啓　第二係　主査　大森信宏（保存処理担当）

平成 25 年度
所長　勝田順也　　次長兼総務課長　南谷高久　　調査課長　中鉢賢治
主幹兼事業係長　　前田雅人　　主幹兼総務係長　大坪淳子
総務課事業係　青木　修・橋野大輔
主幹兼調査第一係長　及川　司　　調査第一係　主査　大谷宏治（資料整理担当）
第二係長　溝口彰啓　第二係　主査　大森信宏（保存処理担当）

平成 26 年度
所長　赤石達彦　次長兼総務課長　長谷川明子　調査課長　中鉢賢治
主幹兼事業係長　杉山智彦　　主幹兼総務係長　大坪淳子
総務課事業係　　青木　修　　総務課総務係　橋野大輔
主幹兼調査係長　及川　司　　調査係主査　中川律子（資料整理担当）
　　調査係主査　大森信宏（保存処理担当）

平成 27 年度
所長　赤石達彦　次長兼総務課長　田中雅代　調査課長　中鉢賢治
主幹兼事業係長　杉山智彦　　主幹兼総務係長　大坪淳子
総務課事業係　　青木　修　　総務課総務係　河井義治
主幹兼調査係長　富樫孝志　　調査係　主幹　中川律子（資料整理担当）

5　本書の執筆は、パリノ・サーヴェイ株式会社、日鉄住金テクノリサーチ株式会社、鈴木三男（東北大学植物園）が行った。執筆分担は下記のとおりである。

第１・２・３・４・５・６章　大谷宏治　中川律子

第７章第１・３・４節　パリノ・サーヴェイ株式会社

第７章第２節　日鉄住金テクノリサーチ株式会社

第７章第５節　鈴木三男

6　本書の編集は静岡県埋蔵文化財センターが行った。

7　委託業務については下記の期間に委託して実施した。

掘削業務委託　沖開発株式会社

基準点測量等測量業務委託・遺跡測量等測量業務委託　株式会社フジヤマ

整理作業・保存処理業務委託　株式会社パソナ

木製品樹種同定業務委託　東北大学

金属製遺物（耳環）蛍光Ｘ線分析調査業務委託　パリノ・サーヴェイ株式会社

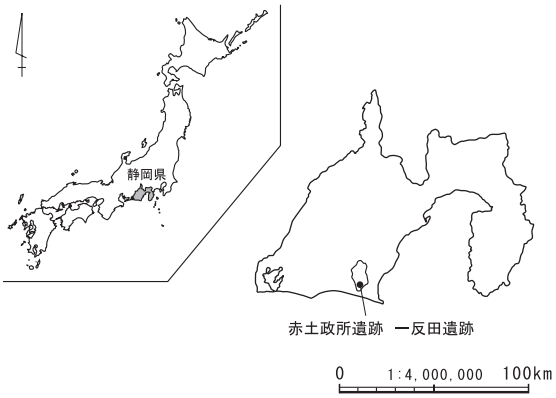
鉄滓分析調査業務委託　日鉄住金テクノリサーチ株式会社

同定調査及び年代測定業務委託（放射性炭素 14 分析、種子同定、動物骨・貝殻同定）　パリノ・サーヴェイ株式会社

8　発掘調査では以下の方々・機関に御指導、御助言を賜った。厚く御礼申し上げる。

井鍋誉之　岩本　貴　河合　修　菊池吉修　蔵本俊明　桑田訓也　佐藤達雄　杉井尊器
鈴木一有　鈴木三男　高木　淳　塚本和弘　中村一郎　馬場　基　樋上　昇　平野吾郎
藤原　治　松井一明　向坂鋼二　山本　崇　山本祥隆　渡辺晃宏（五十音順・敬称略）
独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所（藤原史料研究室・平城史料研究室・写真室）

9　発掘調査の資料は、すべて静岡県埋蔵文化財センターが保管している。



菊川市の位置

凡　　例

本書の記載については、以下の基準に従い統一を図った。

1　本書で用いた遺構・遺物などの位置を表す座標は、すべて平面直角座標第Ⅷ系を用いた国土座標、日本測地系（改正前）を基準とした。

2　調査区の方眼設定は、上記の国土座標を基準に設定した。
赤土政所遺跡・一反田遺跡（X＝144550，Y＝36810）＝（0，A）

遺構ごとの略号は下記のとおりである
SA　柵列・杭列　　SB　掘立柱建物　SD　溝状遺構　SK　土坑　SP　小穴　SR　自然流路
P　掘立柱建物・竪穴建物に伴う柱穴

なお、遺構番号の変更に当たり、赤土政所遺跡・一反田遺跡ともに遺構番号の最初に面数が判断できるよう、第１面～第４面の番号を付加した。なお、小穴（SP）番号については変更していない。
SB101 ＝第１面の掘立柱建物、SR302 ＝第３面の自然流路

3　出土遺物は４桁の通し番号(＝遺物番号)を付して取り上げた。報告書中の挿図番号とは同一でない。

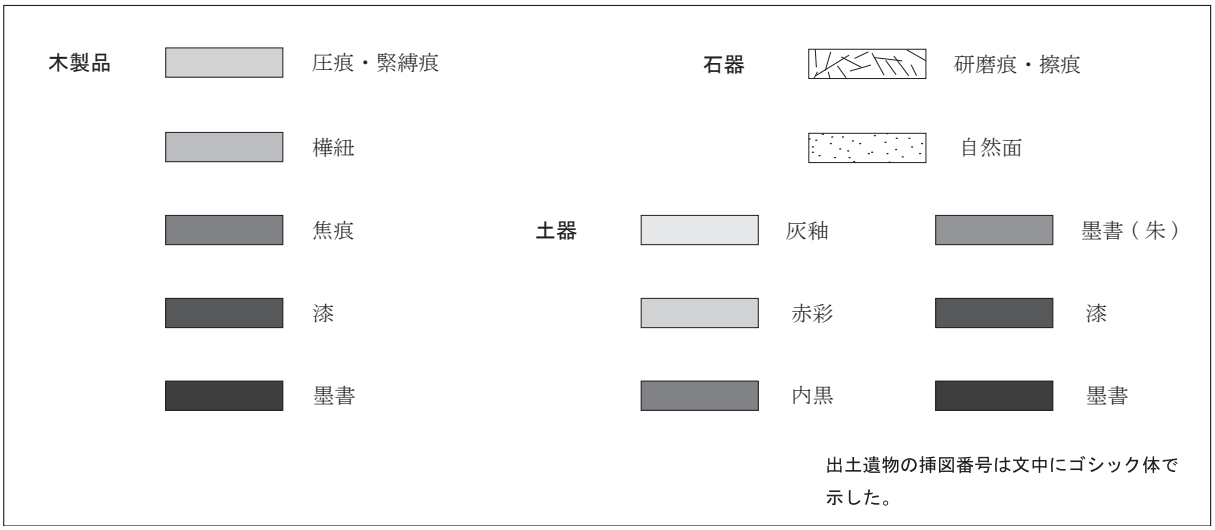
4　遺構図、遺物実測図の縮尺は、遺構 1/80 および 1/50、土器 1/3、石器 1/2 を原則とし、それぞれにスケールを付した。

5　色彩に関する用語･記号は､新版『標準土色帳』(農林水産省技術会議事務局監修 1992) を使用した。

6　土層名は第２章第２節の基本土層状図（第２図）に表示した名称を用いる。

7　第３章第２節の周辺遺跡分布図（第３図）は国土地理院発行１：25,000 地形図を複写し加工・加筆した。

8　遺構番号の変更
調査が複数年時に亘ること、遺構ごとに時期を関係なくとおしで番号を付加したことから、報告書作成に当たっては、下記のとおり新旧遺構番号の対応関係を示した。



遺構番号対応表

区	グリッド	旧遺構名	新遺構名	
1	Q30	SP058	SA101-P1	1 面
1	Q30	SP059	SA101-P2	1 面
1	Q30	SP060	SA101-P3	1 面
1	Q30	SP061	SA101-P4	1 面
1	Q30	SP062	SA101-P5	1 面
2-3	K20,L20	杭列 1	SA201	2 面
1	R30	SP068	SB101-P1	1 面
1	R30	SP072	SB101-P2	1 面
2-2	M24	SK103	SB103-P1	1 面
2-2	M24	SK102	SB103-P2	1 面
2-2	M24	SK101	SB103-P3	1 面
2-2	N24	SK100	SB103-P4	1 面
2-2	N24	SK099	SB102-P1	1 面
2-2	N24	SK098	SB102-P2	1 面
2-2	N24	SK097	SB102-P3	1 面
1	R30	SP174	SB201-P1	2 面
1	R31	SP144	SB201-P10	2 面
1	R31	SP142	SB201-P11	2 面
1	R31	SP143	SB201-P11	2 面
1	R31	SP193	SB201-P11	2 面
1	R31	SP169	SB201-P2	2 面
1	R31	SP175	SB201-P3	2 面
1	R31	SP139	SB201-P5	2 面
1	R30	SP137	SB201-P6	2 面
1	R30	SP154	SB201-P7	2 面
1	R31	SP155	SB201-P8	2 面
1	R31	SP156	SB201-P9	2 面
1	R30	SP117	SB202-P1	2 面
1	R30	SP151	SB202-P10	2 面
1	R31	SP118	SB202-P2	2 面
1	R31	SP119	SB202-P3	2 面
1	R31	SP120	SB202-P4	2 面
1	R31	SP140	SB202-P5	2 面
1	R31	SP190	SB202-P5	2 面
1	R31	SP161	SB202-P6	2 面
1	R30	SP136	SB202-P7	2 面
1	R31	SP178	SB202-P8	2 面
1	R30	SP152	SB202-P9	2 面
1	Q30	SP090	SB203-P1 SB204-P11?	2 面
1	Q29	SP122	SB203-P10	2 面
1	Q29,30	SP164	SB203-P11	2 面
1	Q30	SP091	SB203-P2	2 面
1	Q30	SP116	SB203-P3	2 面
1	Q30	SP115	SB203-P4	2 面
1	Q30	SP177	SB203-P5	2 面
1	Q30,R30	SP097	SB203-P6	2 面
1	R30	SP096	SB203-P7	2 面
1	R30	SP095	SB203-P8	2 面
1	R30	SP135	SB203-P9	2 面
1	Q30	SP093	SB204-P1	2 面
1	Q30	SP121	SB204-P10	2 面
1	Q30	SP176	SB204-P11	2 面
1	Q30,R30	SP108	SB204-P2	2 面
1	Q30	SP109	SB204-P3 SB205-P4	2 面
1	Q30	SP191	SB204-P4 SB205-P6	2 面
1	R30	SP114	SB204-P5	2 面
1	R30	SP134	SB204-P6 SB205-P9	2 面
1	R30	SP131	SB204-P7	2 面
1	R30	SP159	SB204-P8	2 面
1	R29	SP123	SB204-P9	2 面
1	Q29,30	SP103	SB205-P1 SB206-P4	2 面
1	R30	SP132	SB205-P10	2 面
1	R30	SP130	SB205-P11	2 面

区	グリッド	旧遺構名	新遺構名	
1	Q29	SP099	SB205-P12 SB206-P7	2 面
1	Q29	SP087	SB205-P13	2 面
1	Q29	SP101	SB205-P14	2 面
1	Q30	SP105	SB205-P2	2 面
1	Q30	SP092	SB205-P3	2 面
1	Q30	SP110	SB205-P5	2 面
1	R30	SP113	SB205-P7	2 面
1	R30	SP094	SB205-P8	2 面
1	Q29	SP196	SB206-P1	2 面
1	Q29	SP079	SB206-P10	2 面
1	Q29	SP205	SB206-P2	2 面
1	Q29,30	SP089	SB206-P5	2 面
1	Q29	SP088	SB206-P6	2 面
1	Q29	SP098	SB206-P8	2 面
1	Q29	SP125	SB206-P9	2 面
1	Q29,30	SP106	SB207-P1	2 面
1	Q29	SP085	SB207-P2	2 面
1	Q29	SP102	SB207-P3 SB206-P3	2 面
1	Q29	SP128	SB207-P4	2 面
1	Q29	SP202	SB207-P5	2 面
1	Q29	SP199	SB207-P6	2 面
1	Q29	SP197	SB207-P7	2 面
2-1	Q29	SP036	SB208-P1	2 面
2-1	Q29	SP043	SB208-P10	2 面
2-1	Q28	SP049	SB208-P11	2 面
2-1	Q28	SK032	SB208-P12	2 面
2-1	Q29	SP048	SB208-P13	2 面
2-1	Q29	SP037	SB208-P2	2 面
1	Q29	SP195	SB208-P3	2 面
1	Q29	SP206	SB208-P4	2 面
1	Q29	SP203	SB208-P5	2 面
1	Q29	SP086	SB208-P6	2 面
1	Q29	SP127	SB208-P7	2 面
1	Q29	SP124	SB208-P8	2 面
1	Q29	SP167	SB208-P9	2 面
1	Q29	SP204	SB209-P1	2 面
1	Q29	SP166	SB209-P2	2 面
1	Q29	SP148	SB209-P3	2 面
1	Q29	SP201	SB209-P4	2 面
1	Q30	SP082	SB210-P1	2 面
1	Q30	SP070	SB210-P2	2 面
1	Q30	SP063	SB210-P3	2 面
1	Q30	SP084	SB210-P4	2 面
2-1	P29	SP034	SB211-P2	2 面
2-1	P29	SP035	SB211-P3	2 面
2-1	P29	SP033	SB211-P4	2 面
2-1	P29	SP032	SB211-P5	2 面
2-1	P28	SP046	SB211-P6 SB212-P6	2 面
2-1	P28	SP006	SB212-P1	2 面
2-1	P28	SP006'	SB212-P1	2 面
2-1	P28	SP005	SB212-P2	2 面
2-1	P29	SP004	SB212-P3 SB211-P1	2 面
2-1	P29	SP045	SB212-P4	2 面
2-1	P29	SP044	SB212-P5	2 面
2-1	P28	SP047	SB212-P7	2 面
2-1	P28	SP003	SB212-P8	2 面
2-1	P29	SP051	SB213-P4	2 面
2-1	O28	SP028	SB214-P1	2 面
2-1	O28,P28	SP029	SB214-P2	2 面
2-1	P28	SP030	SB214-P3	2 面
2-1	P28	SP031	SB214-P4	2 面
2-1	P28	SP027	SB214-P5	2 面
2-1	P28	SP026	SB214-P6	2 面
2-1	P28	SP025	SB214-P7	2 面

遺構番号対応表

区	グリッド	旧遺構名	新遺構名	
2-1	P27,28	SP014	SB214-P8	2 面
2-1	P27	SP038	SB215-P1	2 面
2-1	P27	SP039	SB215-P2	2 面
2-1	P27,28	SP041	SB216-P1	2 面
2-3	L20	SP230	SB217-P1	2 面
2-3	L20	SP232	SB217-P2	2 面
2-3	L20	SP234	SB217-P3	2 面
2-3	L20	SP246	SB217-P4	2 面
2-3	M20	SP236	SB217-P5	2 面
1	R31	SD071	SD101	1 面
1	R31	SD070	SD102	1 面
1	R31	SD064	SD103	1 面
1	R31	SD062	SD104	1 面
1	Q30,R30	SD056	SD105	1 面
1	Q30,R30	SD057	SD106 SD116	1 面
1	Q30,R30	SD055	SD107	1 面
1	Q30,R30	SD061	SD108	1 面
1	Q30	SD059	SD109	1 面
1	Q29	SD063	SD110	1 面
1	Q30	SD058	SD111	1 面
1	Q30	SD060	SD112	1 面
1	Q29	SD068	SD113	1 面
1	Q29	SD065	SD114	1 面
1	Q29	SD069	SD115	1 面
1	Q29	SD066	SD117	1 面
1	Q29	SD067	SD118	1 面
2-1	P29,Q28	SD043	SD119	1 面
2-1	P27,Q28	SD036	SD120	1 面
2-1	P27	SD040	SD120	1 面
2-1	Q28,29	SD042	SD120	1 面
2-1	P28,27	SD038	SD121	1 面
2-1	Q28	SD046	SD122	1 面
2-1	Q28	SD047	SD122	1 面
2-2	O26	SD088	SD123	1 面
2-2	O26	SD087	SD124	1 面
2-1	P28	SD037	SD125	1 面
2-2	O25	SD093	SD126	1 面
2-2	O24,25	SD094	SD127	1 面
2-2	N24,O24	SD095	SD128	1 面
2-2	N24,O24	SD097	SD129	1 面
2-2	N24	SD098	SD130	1 面
2-2	N24,O24	SD099	SD131	1 面
2-2	M23,N23	SD100	SD132	1 面
2-2	M23,N23	SD101	SD133	1 面
2-3	K19,20,L20	SD077	SD134	1 面
3-1	K18	SK3015	SD134	1 面
2-2	O25,26	SD089	SD135	1 面
2-2	O25	SD092	SD136	1 面
2-2	O24	SD096	SD137	1 面
2-3	L20	SD078	SD138	1 面
2-1	O27	SD049	SD201	2 面
2-1	O26	SD048	SD202	2 面
2-3	L21,M21	SD080	SD203	2 面
2-3	L21	SD081	SD204	2 面
2-3	K19	SD079	SD205	2 面
2-3	K19	SK080	SD205	2 面
2-3	K19	SK081	SD205	2 面
2-2		SD107	SD206	2 面
2-2	N24	SD108	SD206	2 面
2-2	O26,P26	SH07	SD206	2 面
1	Q30	SD074	SD301	3 面
1	Q30	SD072	SD302	3 面
1	Q30	SD073	SD303	3 面
2-1	P28	SD051	SD304	3 面
2-1	P29	SD050	SD305	3 面
2-1	P29	SD050	SD306	3 面
2-1	P27	SD050	SD307	3 面

区	グリッド	旧遺構名	新遺構名	
2-1	P29	SD050	SD308	3 面
2-1	P29	SD050	SD309	3 面
2-1	P29	SD050	SD310	3 面
2-1	P29	SD050	SD311	3 面
2-1			SD312	3 面
2-1	P28		SD313	3 面
2-1	P28		SD314	3 面
2-3	K19,L19	SD082	SD315	3 面
1	Q30,R30	SD075	SD401	4 面
2-1	P28,29	SD054	SD402	4 面
2-1	P27,28	SD053	SD403	4 面
2-1	O26,P26	SD052	SD404	4 面
2-1	P27	SH01	SH301	3 面
2-1	P26	SH02	SH302	3 面
2-1	O27	SH03	SH303	3 面
2-1	O27	SK038	SH303	3 面
2-2	N24,O24	SH08	SH304	3 面
2-2	O26,P26	SH09	SH401	4 面
1	R31	SH05 内土坑	SK101	1 面
1	R30	SK054	SK102	1 面
1	Q29	SK053	SK103	1 面
1	Q29	SK051	SK104	1 面
1	Q30	SK050	SK105	1 面
1	Q30	SK049	SK106	1 面
1	Q30	SK048	SK107	1 面
2-1	Q29	SK015	SK108	1 面
2-1	P29	SK013	SK109	1 面
2-1	P29	SK014	SK110	1 面
2-1	Q28	SK018	SK111	1 面
1	Q29	SK052	SK112	1 面
2-1	P28	SK003	SK113	1 面
2-1	P28	SK002	SK114	1 面
2-1	P28	SK005	SK115	1 面
2-1	P28	SK001	SK116	1 面
2-1	P27	SK021	SK117	1 面
2-1	P27	SK022	SK118	1 面
2-1	Q28	SK019	SK119	1 面
2-3	L20	SK077	SK120	1 面
2-1	P29	SK012	SK121	1 面
2-3	L20	SK079	SK122	1 面
2-3	L20	SK076	SK123	1 面
2-3	L20	SK078	SK124	1 面
2-2	M23	SK104	SK125	1 面
1	R31	SK059	SK201	2 面
1	R31	SK058	SK202	2 面
1	Q30	SK056	SK203	2 面
1	R30	SP160	SK204	2 面
1	Q30	SP129	SK205	2 面
1	Q30,R30	SP112	SK206	2 面
2-1	Q29	SK011	SK207	2 面
2-1	Q28,29	SK008	SK208	2 面
2-1	P29	SK025	SK209	2 面
2-1	P28,Q28	SK009	SK210	2 面
2-1	P28,Q28	SK010	SK210 に統合	2 面
2-1	P27	SK023	SK211	2 面
2-1	P27	SK027	SK212	2 面
2-1	P28	SK028	SK213	2 面
2-1	P27,28	SK029	SK213	2 面
2-1	O26	SP011	SK214	2 面
2-1	O27	SK031	SK215	2 面
2-1	O26	SP013	SK216	2 面
2-1	O26	SP012	SK217	2 面
2-1	O26	SP018	SK218	2 面
2-1	O26	SK030	SK219	2 面
2-1	P26,27	SK024	SK220	2 面
2-1	O27	SP016	SK221	2 面
2-1	O27	SP021	SK222	2 面
2-1	O27	SP022	SK223	2 面

遺構番号対応表

区	グリッド	旧遺構名	新遺構名	
2-1	P27	SP024	SK224	2 面
2-2	O25	SK105	SK225	2 面
2-3	L19	SK082	SK226	2 面
2-3	L18, 19	SK084	SK227	2 面
2-3	L18	SK085	SK228	2 面
2-3	L18	SK083	SK229	2 面
3-1	K17	SK3102	SK230	2 面
3-1	K17	SK3103	SK231	2 面
3-1	K17	SK3105	SK232	2 面
3-1	K17	SK3104	SK233	2 面
3-1	J17	SK3101	SK234	2 面
2-2	O25	SK106	SK235	2 面
1	R30	SK064	SK301	3 面
1	Q30, R30	SK063	SK302	3 面
1	Q30	SK062	SK303	3 面
1	Q29	SK066	SK304	3 面
1	Q29	SK065	SK305	3 面
1	Q29	SK067	SK306	3 面
1	Q30	SK061	SK307	3 面
1	Q29	SK068	SK308	3 面
2-1	Q28	SK036	SK309	3 面
2-1	P28	SK043	SK310	3 面
2-1	P28	SK035	SK311	3 面
2-1	O27	SK039	SK312	3 面
2-1	O27	SK034	SK313	3 面
2-1	O27	SK037	SK314	3 面
2-1	O27	SK040	SK315	3 面
2-1	O26	SK033	SK316	3 面
2-1	P26	SK041	SK317	3 面
2-1	P26, 27	SK042	SK318	3 面
2-1	P27	SK044	SK319	3 面
2-3	L21	SK093	SK320	3 面
2-3	L20, 21	SK092	SK321	3 面
2-3	L19	SK091	SK322	3 面
2-3	L19	SK090	SK323	3 面
2-3	K19	SK089	SK324	3 面
2-3	L21, M21	SK088	SK325	3 面
2-3	L21	SK094	SK326	3 面
3-1	K17	SK3301	SK327	3 面
3-1	K17・18	SK3302	SK328	3 面
1	R31	SK075	SK401	4 面
1	R30	SK069	SK402	4 面
1	Q30	SK074	SK403	4 面
1	Q29, 30	SK070	SK404	4 面
1	Q29	SK071	SK405	4 面
1	Q29	SK072	SK406	4 面
2-1	P28, Q28	SK047	SK407	4 面
2-1	P28, Q28	SK046	SK408	4 面
2-1	P26	SK045	SK409	4 面
2-2	O26	SD086	SR101	1 面
2-2	O26	SD090	SR102	1 面
2-2	O25	SD091	SR103	1 面
2-3	K18, 19, L18, 19	SR01	SR104	1 面
			SR105	1 面
3-1	K18	SR3011	SR106	1 面
3-1	K18	SR3012	SR107	1 面
3-1	K17・18	SR3010	SR108	1 面
3-1	K17・18	SR3009	SR109	1 面
3-1	J18, K17・18	SR3008	SR110	1 面
3-1	J18	SR3013	SR111	1 面
3-1	J17・18, K17・18	SR3005	SR112	1 面
3-1	J17, K17	SR3007	SR113	1 面
3-1	K17	SR3006	SR114	1 面
3-1	J17, K17	SR3004	SR115	1 面
2-2	O26	SD102	SR201	2 面
2-2	O26	SD104	SR201 の一部	2 面
2-2	O26	—	SR202	2 面
2-2	O26	SD103	SR203	2 面

区	グリッド	旧遺構名	新遺構名	
2-2	O24, 25	SD106	SR204	2 面
2-2	N25	SD105	SR205	2 面
2-3	L19	SD111	SR209	2 面
2-3	L19	SK086	SR205	2 面
3-1	K17・18, L18	SR3101	SR206	2 面
3-1	K18	SR3102	SR207	2 面
3-1	J17・18	SR3103	SR208	2 面
2-2	N23, 24	SD110	SR301	3 面
2-2	N23	SD109	SR302	3 面
2-3	L21, 22, M21, 22	SD083	SR303	3 面
2-3	L20, M20	SK087	SR304	3 面
3-1	J17・18, K17・18	SR3301	SR305	3 面
2-2	N 24, O24	SH08 周溝	SR306	3 面
1	R30, 31	SH05	SX101	1 面
1	R30	SH04	SX102	1 面
1	R31	SX02	SX103	1 面
2-2	N25, O25	SX04	SX104	1 面
1	R30, 31	SH06	SX201	2 面
1	R30, 31	SX03	SX201	2 面
1	Q29	SK055	SX202	2 面
2-1	P28	SX01	SX301	3 面
2-2	N24	SK107	SX302	3 面
2-2	N23, N24	小区画水田 23	水田 201	2 面
2-2	N24	小区画水田 24	水田 202	2 面
2-2	N24, O24	小区画水田 26	水田 203	2 面
2-2	N24	小区画水田 25	水田 204	2 面
2-2	N23	小区画水田 19	水田 205	2 面
2-2	M24, N24	小区画水田 20	水田 206	2 面
2-2	N23, 24, M24	小区画水田 21	水田 207	2 面
2-2	N23, 24, M24	小区画水田 21	水田 208	2 面
2-2	N23, 24	小区画水田 22	水田 209	2 面
2-2	M23, N23	小区画水田 17	水田 210	2 面
2-2	N23	小区画水田 18	水田 211	2 面
2-2	N23	小区画水田 35	水田 401	4 面
2-2	M23, 24	小区画水田 34	水田 402	4 面
2-2	M23	小区画水田 33	水田 403	4 面
2-2	M22	小区画水田 27	水田 404	4 面
2-2	M22, N22, M23	小区画水田 30	水田 405	4 面
2-2	M22, N22, 23	小区画水田 31	水田 406	4 面
2-2	N22, 23	小区画水田 32	水田 407	4 面
2-2	M, N22	小区画水田 29	水田 408	4 面
2-2	M22	小区画水田 28	水田 409	4 面
2-3	L20, 21	小区画水田 15	水田 410	4 面
2-3	L20, 21, M20, 21	小区画水田 16	水田 411	4 面
2-3	L20	小区画水田 13	水田 412	4 面
2-3	L20	小区画水田 14	水田 413	4 面
2-3	K20, L20	小区画水田 11	水田 414	4 面
2-3	L20	小区画水田 12	水田 415	4 面
2-3	K20	小区画水田 08	水田 416	4 面
2-3	K19, 20, L19, 20	小区画水田 09	水田 417	4 面
2-3	L19, 20	小区画水田 10	水田 418	4 面
2-3	K19	小区画水田 05	水田 419	4 面
2-3	K19, L19	小区画水田 06	水田 420	4 面
2-3	L19	小区画水田 07	水田 421	4 面
2-3	K18, 19	小区画水田 03	水田 422	4 面
2-3	K18, 19, L18, 19	小区画水田 04	水田 423	4 面
3-1	K18・19	—	水田 424	4 面
3-1	K18・19	—	水田 425	4 面
2-3	K18	小区画水田 01	水田 425	4 面
3-1	K18, L18	—	水田 426	4 面
2-3	K18, L18	小区画水田 02	水田 426	4 面
3-1	J17・18, K17・18	—	水田 427	4 面
3-1	K18	—	水田 428	4 面
3-1	K18, L18	—	水田 429	4 面
3-1	J17・18, K17	—	水田 430	4 面
3-1	K17・18	—	水田 431	4 面
3-1	J17	—	水田 432	4 面
3-1	J17・18	—	水田 433	4 面

遺構番号対応表

区	グリッド	旧遺構名	新遺構名	
3-1	K17	―	水田 434	4 面
4	G10,11	SD01	SD102	1 面
4	F8	SD02	SR101	1 面
4	G9	SD03	SD304	3 面
4	G10・11,H10	SD04	SD305	3 面
5-1,2	D2・3,E2	SD05	SD101	1 面
5-1	D2,E2	SD06	-	1 面
5-1,2	C2,D2,E2	SD07	SD301	3 面
5-2	B3,C2・3	SD08	-	3 面
5-2	B3	SD09	-	3 面
5-2	B3・4,C3	SD10	-	3 面
5-2	C4	SD11	SD302	3 面
4	G8	SK01	SK107	1 面
4	F7	SK02	包含層	1 面
4	F78	SK03	SK102	1 面
4	F8	SK04	SK103	1 面
4	FG8	SK05	SX102	1 面
4	F8	SK06	SK104	1 面
4	G8	SK07	SK105	1 面
4	G8	SK08	SK106	1 面
4	G9,10	SK09	SK109	1 面
4	F9・10,G9・10	SK10	SK108	1 面
4	F7	SK11	SK307	3 面
4	F8	SK12	SK308	3 面
4	G9・10	SK13	SK309	3 面
5-1	E3	SK14	SK302	3 面
5-1	D3	SK15	SK301	3 面
5-1	D3	SK16	SK303	3 面
5-1	E5	SK17	SK305	3 面
5-1	D4,E4	SK18	SK304	3 面
5-2	C3	SK19	S D101	1 面
5-2	CD6	SK20	SK101	1 面
5-2	D6	SK21	SK306	3 面
4	E8,F7,8	SR01	SD303	3 面
5-2	B3 ～ D6	SX02	SX101	1 面
3-2		SP002	SB101-P1	1 面
3-2		SP026	SB102-P7	1 面
3-2		SP027	SB102-P8	1 面
3-2		SP030	SB102-P9	1 面
3-2		SP031	SB104-P11	1 面
3-2		SP034	SB104-P10	1 面
3-2		SP036	SB104-P9	1 面
3-2		SP039	SB104-P12	1 面
3-2		SP041	SB102-P1	1 面
3-2		SP045	SB105-P1	1 面
3-2		SP049	SB105-P2	1 面
3-2		SP053	SB105-P3	1 面

区	グリッド	旧遺構名	新遺構名	
3-2		SP055	SB104-P4	1 面
3-2		SP056	SB102-P2	1 面
3-2		SP066	SB104-P5	1 面
3-2		SP076	SB104-P7	1 面
3-2		SP082	SB104-P6	1 面
3-2		SP089	SB102-P3	1 面
3-2		SP090	SB104-P8	1 面
3-2		SP091	SB102-P4	1 面
3-2		SP097	SB102-P5/SB103-P1	1 面
3-2		SP103	SB102-P6	1 面
3-2		SP104	SB103-P2	1 面
3-2		SP143	SB106-P3	1 面
3-2		SP147	SB104-P3	1 面
3-2		SP152	SB106-P1	1 面
3-2		SP156	SB104-P1	1 面
3-2		SP160	SB107-P1	1 面
3-2		SP165	SB104-P5	1 面
3-2		SP168	SB104-P4	1 面
3-2		SP175	SB107-P2	1 面
3-2		SP198	SB106-P2	1 面
3-2		SP199	SB106-P6	1 面
3-2		SP202	SB104-P2	1 面
3-2		SP204	SB106-P4	1 面
3-2		SP212	SB106-P5	1 面
3-2		SK3001	SK119	1 面
3-2		SK3002	SK117	1 面
3-2		SK3003	SK118	1 面
3-2		SK3004	SK114	1 面
3-2		SK3006	SK112	1 面
3-2		SK3007	SK116	1 面
3-2		SK3008	SK115	1 面
3-2		SK3012	SK113	1 面
3-2		SK3013	SK111	1 面
3-2		SK3014	SK110	1 面
3-2		SD3001	SD105	1 面
3-2		SD3002	SD104	1 面
3-2		SR3001	SR103	1 面
3-2		SR3002	SR102	1 面
3-2		SR3201	SR202	2 面
3-2		SR3202	SR201	2 面
3-2		SR3202-SA3201	SA201	2 面
3-2		SR3202-SA3202	SA202	2 面
3-2		SA3301	SA301	2 面か 3 面
3-2		SA3302	SA302	2 面か 3 面
3-2		―	水田 1	4 面以下
3-2		―	水田 2	4 面以下
3-2		―	水田 3	4 面以下

目　次

巻頭原色図版

第１章　調査に至る経緯 …… 1

第２章　調査の方法と経過
第１節　調査の方法 …… 2
第２節　調査の経過 …… 5

第３章　地理的環境・歴史的環境
第１節　地理的環境 …… 12
第２節　歴史的環境 …… 13

第４章　赤土政所遺跡
第１節　調査の概要 …… 17
第２節　第４面の遺構と遺物 …… 20
第３節　第３面の遺構と遺物 …… 38
第４節　第２面の遺構と遺物 …… 59
第５節　第１面の遺構と遺物 …… 139

第５章　一反田遺跡
第１節　調査の概要 …… 175
第２節　北区第３面の遺構と遺物 …… 177
第３節　北区第１面の遺構と遺物 …… 183
第４節　南区第３面の遺構と遺物 …… 216
第５節　南区第２面の遺構と遺物 …… 221
第６節　南区第１面の遺構と遺物 …… 236

抄録・奥付

挿図目次

第１図　調査区配置図 …… 3
第２図　基本土層図 …… 7
第３図　遺跡の位置と周辺の地形図 …… 12
第４図　周辺遺跡分布図 …… 14
第５図　第４面・第３面全体図 …… 18
第６図　第２面・第１面全体図 …… 19
第７図　第４面全体図 …… 21
第８図　SH401 実測図 …… 22
第９図　SK401・402・403・404・406・406・409 実測図 …… 23
第 10 図　SK407・408 実測図 …… 24
第 11 図　SK403・404・406・407 出土遺物実測図 …… 25
第 12 図　SK408・409 出土遺物実測図 …… 26
第 13 図　SD401・402・404 実測図 …… 28
第 14 図　SD403 実測図 …… 29
第 15 図　SD401・403 出土遺物実測図１ …… 31
第 16 図　SD403 出土遺物実測図２ …… 32
第 17 図　SD403 出土遺物実測図３ …… 33
第 18 図　SD404 出土土器実測図 …… 34
第 19 図　水田区画実測図 …… 35
第 20 図　水田足跡実測図 …… 36
第 21 図　第４面包含層出土遺物実測図１ …… 37
第 22 図　第４面包含層出土遺物実測図２ …… 38
第 23 図　第３面全体図 …… 39
第 24 図　SH301 実測図 …… 41
第 25 図　SH301 出土遺物実測図 …… 42
第 26 図　SH302・303 実測図 …… 43
第 27 図　SH304 実測図 …… 44
第 28 図　SH302・304 出土遺物実測図１ …… 45
第 29 図　SH304 出土遺物実測図２ …… 46
第 30 図　SK301・302・303・304・305・306・307 実測図 …… 48
第 31 図　SK308・309・310・311・312・313・314・315・316 実測図 …… 49
第 32 図　SK317・318・319・320・321・322・323・324・325・326・327・328 実測図 …… 51
第 33 図　SK303・306・309・312・313・314・316・318・319 出土遺物実測図 …… 52
第 34 図　SD301・302・303・304・312・315 実測図 …… 53
第 35 図　SD304 出土遺物実測図 …… 54
第 36 図　SR301・302・304・306 実測図 …… 55
第 37 図　SR303・305 実測図 …… 55
第 38 図　SX301・302 実測図 …… 56
第 39 図　SX301 出土遺物実測図 …… 56
第 40 図　第３面包含層出土遺物実測図 …… 58
第 41 図　第２面全体図 …… 60
第 42 図　第２面住居群配置図 …… 61
第 43 図　SB201 実測図 …… 62
第 44 図　SB202 実測図 …… 63
第 45 図　SB203 実測図 …… 64
第 46 図　SB204 実測図１ …… 65
第 47 図　SB204 実測図２ …… 66
第 48 図　SB205 実測図１ …… 67
第 49 図　SB205 実測図２ …… 68
第 50 図　SB206 実測図 …… 69
第 51 図　SB207 実測図 …… 70
第 52 図　SB208 実測図１ …… 71
第 53 図　SB208 実測図２ …… 72
第 54 図　SB209 実測図 …… 72
第 55 図　SB210 実測図 …… 73
第 56 図　SB211 実測図 …… 74
第 57 図　SB212 実測図 …… 75
第 58 図　SB213 実測図 …… 76
第 59 図　SB214 実測図 …… 77
第 60 図　SB215・216 実測図 …… 78
第 61 図　SB201・202・203・204・205・206・207・208・210・211・212・213・214 出土遺物実測図 …… 79
第 62 図　SB202・203・204・205 出土遺物実測図 …… 80
第 63 図　SB208・209 出土遺物実測図 …… 81
第 64 図　SB210 出土遺物実測図 …… 82
第 65 図　SB211 出土遺物実測図 …… 83
第 66 図　SB212・214 出土遺物実測図 …… 84
第 67 図　SK201・202・203・204・205・206・207・208 実測図 …… 86
第 68 図　SK209・210・211 実測図 …… 87
第 69 図　SK212・213・214・215・216・217・218・219 実測図 …… 88
第 70 図　SK220・221・222・223・224・225・226・227 実測図 …… 89
第 71 図　SK228・229・230・231・232・233・234・235 実測図 …… 90

第 72 図　SK206・207・209・211・212・214・215・235 出土遺物実測図 …… 91
第 73 図　SK208 出土遺物実測図１ …… 92
第 74 図　SK208 出土遺物実測図２ …… 93
第 75 図　SK210 出土遺物実測図１ …… 94
第 76 図　SK210 出土遺物実測図２ …… 95
第 77 図　SD201・202・203・204・205 実測図 …… 98
第 78 図　SD206 実測図１ …… 100
第 79 図　SD206 実測図２ …… 101
第 80 図　SD206 実測図３ …… 102
第 81 図　SD206 出土遺物実測図１ …… 103
第 82 図　SD206 出土遺物実測図２ …… 104
第 83 図　SD206 出土遺物実測図３ …… 105
第 84 図　SD206 出土遺物実測図４ …… 106
第 85 図　SD206 出土遺物実測図５ …… 108
第 86 図　SD206 出土遺物実測図６ …… 109
第 87 図　SD206 出土遺物実測図７ …… 111
第 88 図　SD206 出土遺物実測図８ …… 112
第 89 図　SD206 出土遺物実測図９ …… 113
第 90 図　SD206 出土遺物実測図 10 …… 114
第 91 図　SD206 出土遺物実測図 11 …… 115
第 92 図　SD206 出土遺物実測図 12 …… 117
第 93 図　SD206 出土遺物実測図 13 …… 118
第 94 図　SD206 出土遺物実測図 14 …… 119
第 95 図　SD206 出土遺物実測図 15 …… 120
第 96 図　SD206 出土遺物実測図 16 …… 122
第 97 図　SD206 出土遺物実測図 17 …… 123
第 98 図　SD206 出土遺物実測図 18 …… 124
第 99 図　SD206 出土遺物実測図 19 …… 125
第 100 図　SD206 出土遺物実測図 20 …… 126
第 101 図　SD206 出土遺物実測図 21 …… 127
第 102 図　SX201・202 実測図 …… 129
第 103 図　SX201・202 出土遺物実測図１ …… 130
第 104 図　SX202 出土遺物実測図２ …… 131
第 105 図　SR201・202・203・204・205・206・207・208・209 実測図 …… 132
第 106 図　SR201 出土遺物実測図 …… 133
第 107 図　SA201 実測図 …… 134
第 108 図　SA202 実測図 …… 135
第 109 図　SA202 出土遺物実測図 …… 135
第 110 図　水田区画実測図 …… 136
第 111 図　SP168・208 出土遺物実測図 …… 136
第 112 図　第２面包含層出土遺物実測図１ …… 137
第 113 図　第２面包含層出土遺物実測図２ …… 138
第 114 図　第１面全体図 …… 140
第 115 図　SB101・102・103 実測図 …… 141
第 116 図　SB102・103 出土遺物実測図 …… 141
第 117 図　SK101・102・103・104・105・106・107・112 実測図 …… 142
第 118 図　SK104・106・113・117・120 出土遺物実測図 …… 143
第 119 図　SK108・109・110・111・113・114・115・117・118・119・121・125 実測図 …… 144
第 120 図　SK116・120・122・123・124 実測図 …… 145
第 121 図　SX101・102・103・104 実測図 …… 146
第 122 図　SX102・103 出土遺物実測図 …… 147
第 123 図　SD101・102・103・104・114・115・116・117・118・122・123・124・126・127・128・136・137 実測図 …… 149
第 124 図　SD105・106・107・108・109・110・111・112・113 実測図 …… 150
第 125 図　SD119・120・121・124・125・134 実測図 …… 151
第 126 図　SD101・102・103・104・105・106・107・109・110 出土遺物実測図 …… 152
第 127 図　SD110・111・115・119・120・122 出土遺物実測図 …… 154
第 128 図　SD129・130・131・132・133・135・138 実測図 …… 155
第 129 図　SD123・124・131・134 出土遺物実測図 …… 156
第 130 図　SR101・102・103・106・107・111・113・114・115 実測図 …… 157
第 131 図　SR104・105 実測図 …… 158
第 132 図　SR108・109・110・112 実測図 …… 159
第 133 図　SR101・102・103・104・110・111・113・118 出土遺物実測図 …… 160
第 134 図　SR110 出土遺物実測図１ …… 161
第 135 図　SR110 出土遺物実測図２ …… 162
第 136 図　SA101 実測図 …… 162
第 137 図　流路内遺物出土状況図 …… 164
第 138 図　SP65・69・78 出土遺物実測図 …… 165
第 139 図　第１面包含層出土遺物実測図１ …… 166
第 140 図　第１面包含層出土遺物実測図２ …… 167
第 141 図　第１面包含層出土遺物実測図３ …… 169
第 142 図　第１面包含層出土遺物実測図４ …… 171
第 143 図　第１面包含層出土遺物実測図５ …… 172
第 144 図　第１面包含層出土遺物実測図６ …… 173
第 145 図　第１面包含層出土遺物実測図７ …… 174
第 146 図　第３面・第２面全体図 …… 176
第 147 図　第１面全体図 …… 177
第 148 図　北区第３面全体図 …… 178

第 149 図　SK301・302・303・304・305・306・307・309 実測図 …… 180
第 150 図　SK308 実測図 …… 181
第 151 図　SD304 出土遺物実測図 …… 181
第 152 図　SD301・302・303・304 実測図 …… 182
第 153 図　SD305 実測図 …… 183
第 154 図　北区第１面全体図 …… 184
第 155 図　SK101・102・103・104・105・106・107・108・109 実測図 …… 185
第 156 図　SR101 実測図 …… 186
第 157 図　SD101 実測図１ …… 187
第 158 図　SD101 実測図２ …… 188
第 159 図　SD101 実測図３ …… 189
第 160 図　SD101 実測図４ …… 190
第 161 図　SD101 実測図５ …… 191
第 162 図　SD101 実測図６ …… 192
第 163 図　SD101 出土遺物実測図１ …… 193
第 164 図　SD101 出土遺物実測図２ …… 195
第 165 図　SD101 出土遺物実測図３ …… 197
第 166 図　SD101 出土遺物実測図４ …… 198
第 167 図　SD101 出土遺物実測図５ …… 199
第 168 図　SD101 出土遺物実測図６ …… 200
第 169 図　SD101 出土遺物実測図７ …… 201
第 170 図　SD101 出土遺物実測図８ …… 203
第 171 図　SD101 出土遺物実測図９ …… 204
第 172 図　SD101 出土遺物実測図 10 …… 205
第 173 図　SD101 出土遺物実測図 11 …… 206
第 174 図　SD101 出土遺物実測図 12 …… 207
第 175 図　SD101 出土遺物実測図 13 …… 208
第 176 図　SD101 出土遺物実測図 14 …… 209
第 177 図　SD101 出土遺物実測図 15 …… 210
第 178 図　SD101 出土遺物実測図 16 …… 211
第 179 図　SD101・301・302 出土遺物実測図 …… 211
第 180 図　SD102 実測図 …… 212
第 181 図　SX101・102 実測図 …… 213
第 182 図　SX101 出土遺物実測図 …… 214
第 183 図　SP12・第１面包含層出土遺物実測図１ …… 214
第 184 図　第１面包含層出土遺物実測図２ …… 215
第 185 図　第１面包含層出土遺物実測図３ …… 215
第 186 図　第３面全体図 …… 216
第 187 図　SA301・302 実測図 …… 217
第 188 図　SA301 出土遺物実測図１ …… 218
第 189 図　SA301 出土遺物実測図２ …… 219
第 190 図　SA302 出土遺物実測図 …… 220
第 191 図　畦畔実測図 …… 220
第 192 図　包含層出土遺物実測図 …… 221
第 193 図　第２面全体図 …… 222
第 194 図　SA201・202 実測図 …… 223
第 195 図　SR201 実測図 …… 224
第 196 図　SR201 出土遺物実測図１ …… 225
第 197 図　SR201 出土遺物実測図２ …… 226
第 198 図　SR201 出土遺物実測図３ …… 228
第 199 図　SR201 出土遺物実測図４ …… 230
第 200 図　SR201 出土遺物実測図５ …… 231
第 201 図　SR201 出土遺物実測図６ …… 232
第 202 図　SR201 出土遺物実測図７ …… 232
第 203 図　SR201 出土遺物実測図８ …… 233
第 204 図　SA201・202 出土遺物実測図 …… 234
第 205 図　SR202 実測図 …… 235
第 206 図　SR202 出土遺物実測図 …… 235
第 207 図　包含層出土遺物実測図 …… 236
第 208 図　第１面全体図 …… 237
第 209 図　SB102 実測図 …… 238
第 210 図　SB103 実測図 …… 240
第 211 図　SB104 実測図 …… 241
第 212 図　SB105 実測図 …… 241
第 213 図　SB106・107 実測図 …… 242
第 214 図　SP 出土遺物実測図 …… 243
第 215 図　SB101・102 出土遺物実測図 …… 244
第 216 図　SB102・105・106、SP84 出土遺物実測図 …… 245
第 217 図　SD104 実測図 …… 246
第 218 図　SD105 実測図 …… 247
第 219 図　SD105 出土遺物実測図１ …… 248
第 220 図　SD105 出土遺物実測図２ …… 249
第 221 図　SK112・117・119 出土遺物実測図 …… 250
第 222 図　SD104 出土遺物実測図１ …… 251
第 223 図　SD104 出土遺物実測図２ …… 252
第 224 図　SK110・111・112・113・114・115・116・117・118・119・120・121 実測図 …… 253
第 225 図　SR102・103 実測図 …… 254
第 226 図　SR102 出土遺物実測図 …… 254
第 227 図　SA101・102 実測図 …… 255
第 228 図　第１面包含層出土遺物実測図１ …… 257
第 229 図　第１面包含層出土遺物実測図２ …… 259
第 230 図　第１面包含層・攪乱出土遺物実測図１ …… 260
第 231 図　第１面包含層・攪乱出土遺物実測図２ …… 261

挿表目次

第１表　調査面積一覧表 …… 10
第２表　本調査工程表 …… 11
第３表　周辺遺跡地名表 …… 15
第４表　第３面土坑計測表 …… 50

挿写真目次

写真１　赤土政所遺跡・一反田遺跡遠景 …… 1
写真２　作業状況１ …… 4
写真３　作業状況２ …… 4
写真４　作業状況３ …… 4
写真５　作業状況４ …… 4

巻頭原色図版目次

[赤土政所遺跡]
巻頭図版１　１．赤土政所遺跡・一反田遺跡遠景（南西から）
２.赤土政所遺跡･一反田遺跡遠景(南から)
巻頭図版２　2-3 区第４面　水田完掘状況（北から）
巻頭図版３　3-1 区第４面　水田完掘状況（北西から）
巻頭図版４　１区第２面　掘立柱建物群完掘状況（北西から）
巻頭図版５　１区第４面　SD403 出土遺物
巻頭図版６　１．第３面　SH301 出土遺物
２．第３面　SH302 出土遺物
巻頭図版７　１．第３面　SH304 出土遺物
２．第１面　主な貿易陶磁器及び施釉陶器（中世）
巻頭図版８　第２面　SD206 出土の主な土器・石製品
巻頭図版９　第２面　SD206 出土の主な木製品

[一反田遺跡]
巻頭図版 10　北区（5-1・2 区）第１面　完掘状況全景（北から）
巻頭図版 11　南区（3-2 区）第１面　完掘状況全景（北西から）
巻頭図版 12　１．南区（3-2 区）第１面　SH101 ほか完掘状況（北西から）
２．南区（3-2 区）第３面　水田完掘状況（北西から）
巻頭図版 13　北区第1面　SD101 出土の主な土器･土製品･石製品
巻頭図版 14　第１面　SD101 出土の主な木製品
巻頭図版 15　第１面　SD101 出土の主な木製祭祀具
巻頭図版 16　１．主な貿易陶磁器及び施釉陶器（中世）
２．SD101・105 及び SK117 出土漆椀・漆付着土器・古瀬戸

第１章　調査に至る経緯

静岡県道掛川浜岡線（県道 37 号線）は、掛川浜岡線は掛川駅前からJR東海道線にほぼ平行して菊川駅前を経由した後、菊川に沿う形で南下し、掛川と御前崎を結ぶ主要道路である。この道路は第１次緊急輸送路に指定され、地域の経済活動を支えるとともに、地域間交流にも極めて重要な役割を担っている。しかし、掛川浜岡線は道路際に人家が密集している上道幅が狭く、生活交通と通過交通が混在し、近年の大型車両の増加に伴い交通環境が悪化していた。このため静岡県では防災機能の強化、交通渋滞の緩和と歩道や右折レーンを設置し、渋滞の解消や安全性の向上を目的として、掛川浜岡線バイパスの道路整備事業を計画した。

この道路整備事業の一環として、赤土政所遺跡内に道路建設が予定されたため、静岡県袋井土木事務所と静岡県教育委員会文化課（当時）は遺跡の取り扱いについて協議した。道路建設対象範囲には赤土政所遺跡他、遺跡の存在が想定される箇所が多く存在することから、予定地内で試掘・確認調査を実施し、記録保存のための本発掘調査を実施する必要があるかどうかの取り扱いを決定することとした。この協議を受けて、静岡県教育委員会文化課が道路予定地内で試掘確認調査を実施したところ、周知の埋蔵文化財包蔵地である赤土政所遺跡と、それに近接する場所で新たに遺構・遺物を確認した。菊川市教育委員会と協議の結果、新菊川市棚草地区で新たに確認した遺跡については小字名をとって「樋詰遺跡」とし、菊川市赤土地区で新たに確認した遺跡については、小字名をとって「一反田遺跡」と命名した。試掘確認調査の結果、３遺跡が路線内に該当することになったが、「樋詰遺跡」については、遺物は出土したものの、路線内は攪乱が著しく遺構が存在したとしてもすでに失われた可能性が高いことから、記録保存のための本発掘調査は実施せず、工事立ち会い調査を実施することとした。一方、「赤土政所遺跡」及び「一反田遺跡」については、やむを得ず遺跡が破壊されることとなったことから、記録保存のための本発掘調査（以下、本発掘調査）の実施を決定した。

本発掘調査は、静岡県教育委員会と袋井土木事務所の協議により、平成 20 年度から財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が本発掘調査を受託して実施することとした。しかし、財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が平成 22 年度末で解散したため、平成 23 年度からは静岡県埋蔵文化財センターが業務を引き継ぐこととなった。

写真１　赤土政所遺跡・一反田遺跡遠景

第２章　調査の方法と経過

第１節　調査の方法

１　試掘・確認調査の方法

試掘・確認調査は、（主）掛川浜岡線原子力発電所関連道路整備事業対象箇所が広範囲に渡ること、その対象地周辺での調査例が少なく未周知の遺跡が存在する可能性が高いことから、対象範囲内におおむね 50 mに１箇所試掘坑を設けて試掘調査を実施し、周知の赤土政所遺跡範囲内は 20 ～ 30 mに１箇所試掘坑を設けることとした。

試掘･確認調査は、基本的に重機（バックホウ）を用いて、表土除去を実施した後で、人力にて遺構･遺物の確認を行う方法を採用した。遺構・遺物の有無に関係なく、調査箇所及び土層図の作成と、写真撮影を行い、遺構が確認された試掘坑については平面概略図を作成し、本発掘調査に備えた。

２　現地調査

現地調査は、静岡県教育委員会の「静岡県埋蔵文化財発掘調査の作業標準・積算基準」に基づき、文化財保護審議会刊行の『発掘調査の手びき』（文化財保護委 1966）及び文化庁文化財部記念物課監修の『発掘調査のてびき』（文化庁 2010）を手引きとしながら、現地調査を実施した。

遺構掘削など　表土等除去は、重機（バックホウ）を用いて実施した。包含層掘削・遺構検出・遺構掘削は発掘作業員の人力にて実施し、包含層掘削は出土する遺物に留意しながら慎重に掘削した。包含層の遺物については、グリッド別層位ごとに取り上げた。遺構検出は包含層掘削後、土色や土質の違い、遺物の有無などを基準に人力にて精査した。遺構掘削は、遺構検出で確認した遺構について、大型のものについては十字に土層帯を残し、小型のものは一文字に土層帯を残し、遺物と土層に留意しながら掘削した。

基準点　調査の基準となる座標杭（以下、グリッド杭）の設置は、国土座標に基づき、近くの２級基準点から、遺跡近くに３・４級基準点・水準点を設置し、その基準点をもとに調査区内に国土座標に基づき、10 × 10 mを単位としてグリッド杭を設置した。

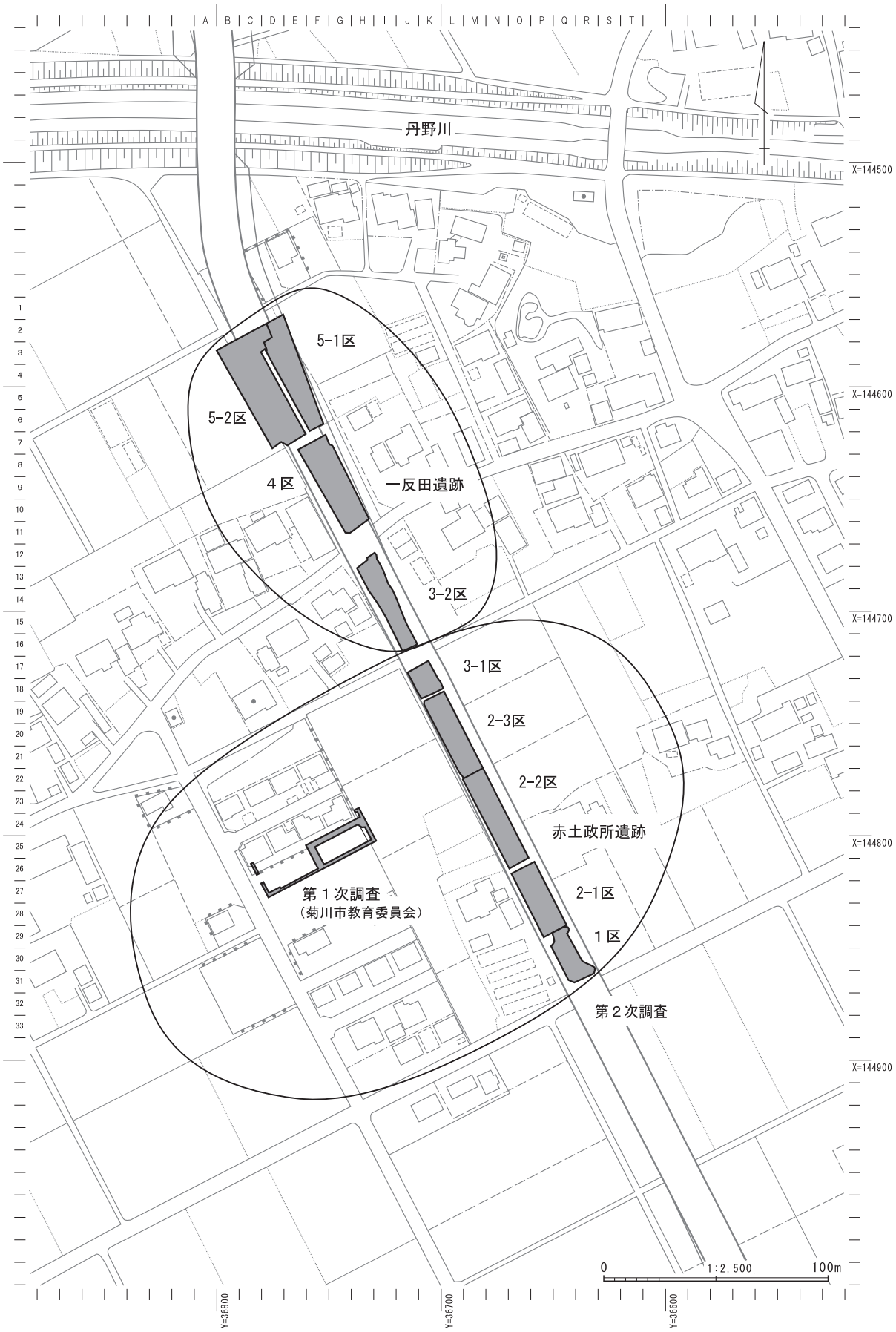
実測　遺構の実測は､グリッド杭を基準とし､トータルステーション（以下､TS）や手実測で実測した。遺跡の全体図については､空中写真測量（３区を除く）で実施し､3-1 ～ 3-3 区は TS を用いて測量した。

写真撮影　写真撮影は、調査区の全体写真については、ラジコンヘリコプターを用いた空中写真撮影（６× 4.5 リバーサル･白黒フィルム）と､高所作業車を用いた大判カメラ（４×５リバーサル･白黒フィルム）による写真撮影を併用した。ただし、調査区が狭小となった 3-1 ～ 3-3 区については、大判カメラによる写真撮影のみ実施した。

遺構の写真撮影は、中判カメラ（６×７白黒フィルム)、小判カメラ（35 ㎜リバーサルフィルム）を中心に撮影し､補助的に小判カメラ（35 ㎜カラーネガフィルム）で撮影した。また､公開普及用として、デジタルカメラにて一部の遺構について撮影した。

基礎整理　基礎整理作業は、現地調査の中で実施した。出土した遺物の洗浄・注記、台帳作成作業および記録類（実測図，写真）の台帳作成を実施した。

応急保存処置　木製品の応急保存処理は、取上げ後洗浄を行った上で、シーラーパック詰めを行い、のちの保存処理作業に備えた。


丹野川
5-1区
5-2区
4区
一反田遺跡
3-2区
3-1区
2-3区
2-2区
赤土政所遺跡
2-1区
1区
第１次調査
（菊川市教育委員会）
第２次調査
X=144500
X=144600
X=144700
X=144800
X=144900
Y=36800
Y=36700
Y=36600
0
1:2,500
100m

第１図　調査区配置図

３　資料調査・報告書刊行作業及び保存処理

資料整理及び報告書刊行作業は、静岡県教育委員会の「静岡県埋蔵文化財発掘調査の作業標準・積算基準」に基づき、文化財保護委員会刊行の『発掘調査の手引き』（文化財保護委 1966）及び文化庁文化財部記念物課監修の『発掘調査のてびき』（文化庁 2010）を手引きとしながら、現地調査を実施した。

資料調査・報告書刊行作業　出土品の整理作業は、分類・仕分を行った上で、時期ごと・種別ごとに分類し、その中で接合・復原が必要なものを抜き出し、接合・復原を行った後、実測・版組・トレース・観察表作成とともに、写真撮影を行い、写真の版組を行った。記録類の整理作業は、遺構編集図の作成、版組・トレース作業を実施し、一部の遺構については観察表を作成した。

なお、遺物の写真撮影については、個別遺物については基本的に中判カメラ（６×７リバーサル・白黒フィルム）を用いて実施し、集合写真については大判カメラ（４×５リバーサル・白黒フィルム）を用いて撮影することとした。

これらの作業と並行して、報告書の原稿執筆を行い、原稿と図面・写真が出来上がった段階で、報告書刊行のための編集作業することとした。印刷製本は委託作業として実施し、業者決定後校正を行い、報告書を刊行することとした。

保存処理　保存処理について出土数が多いことから、一反田遺跡→赤土政所遺跡の順に実測・写真撮影が終了した木製品から実施することとした。保存処理前記録の作成後、PEG 含浸・真空凍結乾燥を行い、遺物の形状を安定化し、修復を行った。修復終了後、保存処理後の記録の作成を行い、保存処理を終了することとした。

写真２　遺構掘削作業状況１

写真３　遺構掘削作業状況２

写真４　保存処理作業状況

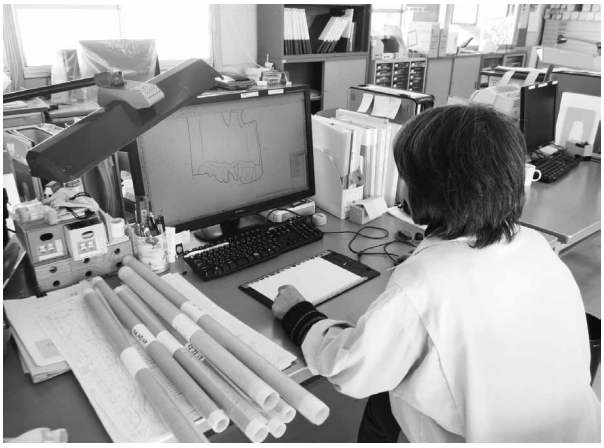


写真５　整理作業状況

第２節　調査の経過

１　確認調査の経過

確認調査は、静岡県教育委員会文化財課（平成 21 年度まで、現文化財保護課）が実施した。

樋詰遺跡　まず、菊川市棚草地区で、平成 19 年 11 月７日～９日に 13 箇所の試掘坑を設定し、重機により表土等除去を実施した後で、人力で遺構の有無の確認を実施した。13 箇所設定した中で、Tr. ３・５・９・13 で遺物が出土した。これ以外の場所では、遺構・遺物などは確認できなかった。Tr. 11・12 部分は撹乱されており、遺構が存在したとしてもすでに失われて可能性が高いことが確認できた。この結果を受けて、静岡県教育委員会と菊川市教育委員会が協議し、遺構は確認されないものの遺物が出土することから遺跡として周知することとし、「樋詰遺跡」と命名した。遺構は確認できないこと、撹乱されている可能性が高いことから、記録保存のための工事立会いを実施することとした。

赤土政所遺跡・一反田遺跡　赤土政所遺跡周辺では、丹野川から菊川市道嶺田川上線の間の道路建設対象範囲内に 18 箇所の試掘溝を設定し、３次にわたる確認調査を実施した。まず、平成 19 年度に周知の赤土政所遺跡の範囲内３箇所に試掘坑を設定し、平成 20 年１月 24 日に Tr. １～３の確認調査を実施し、人力にて表土除去を実施した後、遺構・遺物の確認を行った。続く平成 20 年度に、平成 20 年９月 17・22・23 日に、13 箇所の確認調査を実施した。このうち Tr. ４～９・15・16 で遺構・遺物が確認された。これ以外では遺構・遺物ともに出土しなかった。この範囲では少なくとも第２面の遺構面が存在する可能性が高いことが判明した。

これにより調査対象は平成 19･20 年度に遺構が確認された箇所とし、順次調査を実施することとなった。また、静岡県教育委員会と菊川市教育委員会の協議により周知の赤土政所遺跡の範囲とするには広いこと、試掘調査が終了していない場所に昭和初期頃まで川があったとの地元の話により、平成 20 年度に遺構・遺物を確認した範囲については、小字名をとって「一反田遺跡」と命名された。

土地の買収が終了した平成 24 年度に２箇所の試掘坑を設定し、平成 24 年５月７日に調査を実施した。重機による表土等除去後、今回の調査区３・４区で確認された遺構面の高さを基準に遺構・遺物の確認を行った。この結果、第３面の文化層と包含層が確認できた。また、掘立柱建物と想定される柱穴が確認された。この結果、この範囲も本発掘調査対象とすることが決定した。

なお、今回確認された範囲については、静岡県教育委員会と菊川市教育委員会の協議により、「一反田遺跡」の範囲に含めることとなった。

２　現地調査の経過

（１）調査の経過の概要

現地調査は、調査区が全長 326 mにわたること、事業該当地内の土地の買収状況等を考慮して、大きく５区９調査区に区分して、調査を実施した。

第１年次調査は、平成 20 年度、平成 20（2008）年 10 月 21 日～平成 21 年３月 12 日に 2-1 区及び 5-1 区の調査を実施した。

第２年次調査は、平成 21(2009)年度、平成 21 年７月６日～平成 22(2010)年２月 26 日に１区及び４区、5-2 区の調査を実施した。

第３年次調査は、平成 22（2010）年度、平成 22 年４月５日～ 12 月 28 日に 2-2･3 区の調査を実施した。

第４年次調査は、平成 24（2012）年度、平成 24 年９月 18 日～３月 25 日に 3-1･2 区の調査を実施した。

以下、第１年次調査から順に、調査の経過を報告する。

（２）第１年次調査（平成 20 年度）

第１次調査（平成 20 年度）は、平成 20 年 10 月 21 日～平成 21 年３月 12 日に実施した。

2-1 区　平成 20 年 10 月 21・22 日に重機による表土等除去を実施した。23 日から第１面の包含層掘削を開始し、11 月６日に終了した。11 月６･10 日に遺構検出を実施し、11 月 11 日から遺構掘削を行った。掘削した遺構から実測及び写真撮影を実施し、遺構掘削が終了した 11 月 20 日にラジコンヘリコプターを利用した空中写真撮影・空中写真測量を行い、第１面の調査を終了した。

第２面の調査は第１面の調査終了後 11 月 20 日から包含層掘削を開始した。12 月３日に包含層掘削を終了し、12 月４日に遺構検出を行い、確認した遺構から順次遺構掘削を実施し、遺構実測図の作成及び写真撮影を実施した。遺構調査が完了した 12 月９日に２回目の空中写真撮影・測量を実施した。

第３面の調査は、年明けの平成 21 年１月６日から包含層掘削を実施し、12 月 13 日に遺構検出を行い、検出した遺構から慎重に精査を進めた。遺構調査が終了した２月６日に空中写真撮影・空中写真測量を実施した。

第４面の調査は、３面の調査が終了した翌日２月７日から包含層掘削を実施し、２月 16 日に遺構検出を行い、検出した遺構から慎重に掘削を行い、実測図の作成、写真撮影を行い、遺構調査が終了した。

３月９日に４回目の空中写真撮影・測量を実施した。

最終的に３月 12 日に現地事務所の撤収を行い、平成 20 年度の調査を終了した。

（３）第２年次調査（平成 21 年度）

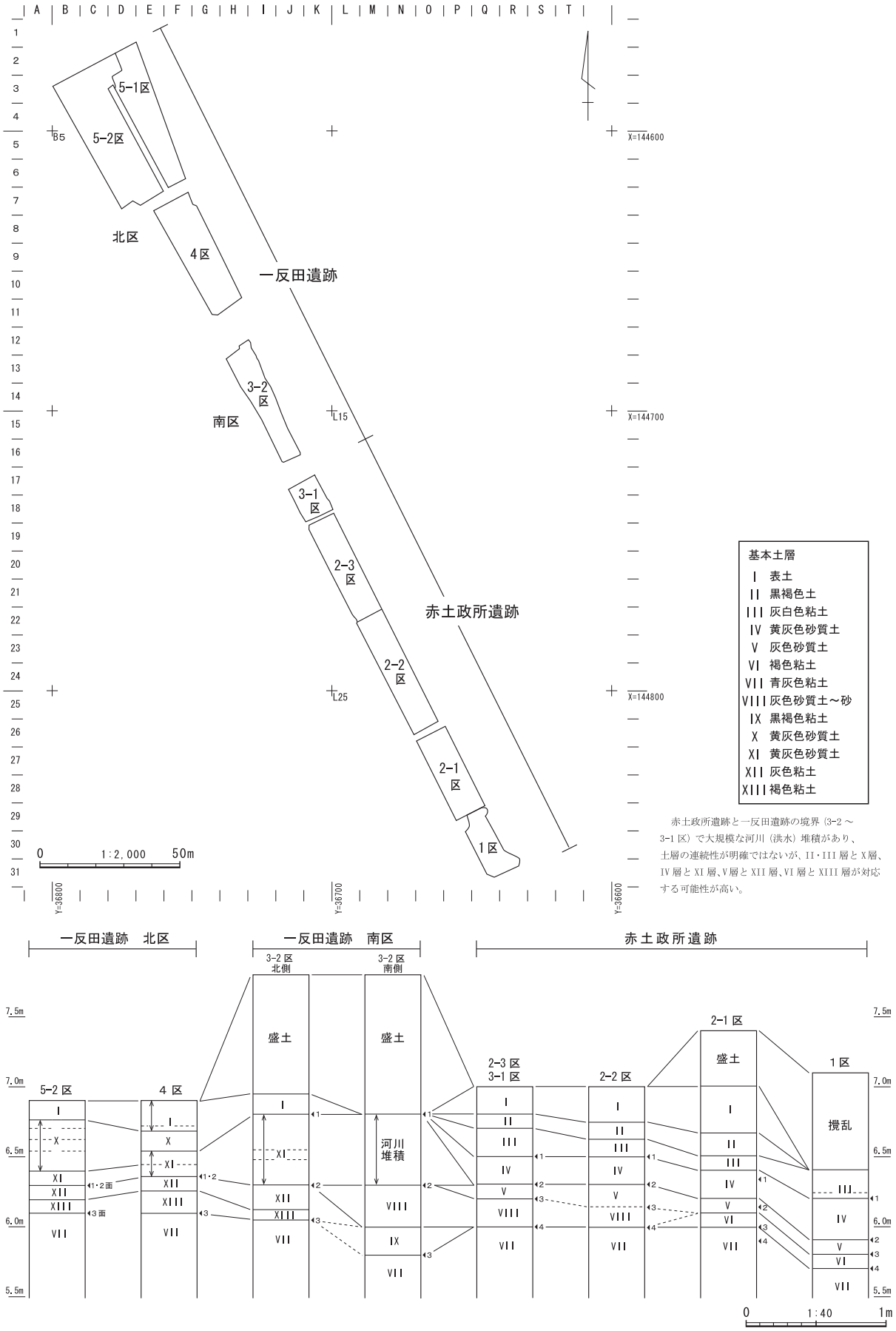
第２次調査（平成 21 年度）は、平成 21 年６月 29 日に調査のための準備を開始させた。

４区　平成 21 年６月 29 日に調査のための安全フェンスの設置等を開始した。この作業が終了した７月６・７日で重機（バックホウ）による表土除去を実施した。７月 10 日から発掘作業員による４区第１面の包含層（第１包含層）の掘削を開始し、それが終了した７月 15 日に遺構検出を行った。検出した遺構から精査を開始し、調査の終了した遺構から実測図作成、写真撮影を実施した。16 日に４区第１面の完掘状況の写真撮影を実施した。

７月 16 日の４区第１面調査終了後、第１面と第２面の間にある中間層を重機により除去した。７月 23 日から包含層（第２包含層）の掘削を実施し、それが終了した７月 23 日に遺構検出を行い、７月 24 日から遺構の掘削・精査を実施した。それらの調査が終了した７月 31 日に第２面の完掘状況写真を高所作業車及びラジコンヘリコプターを用いて撮影した。併せて写真空中写真測量・補測を行い、４区第２面の調査を終了した。

つづいて８月３日から４区第３面の包含層（第３包含層）の掘削を開始した。調査中の８月 11 日に駿河湾沖地震が発生したものの遺構には特に影響はなく事なきを得た。地震の翌日８月 12 日から包含層掘削と並行して遺構検出を行った。８月 27 日に３回目の空中写真撮影・測量を実施し４区の調査を終了した。

１区　４区第３面の調査と並行する８月 18 日に重機による表土除去を開始した。４区の調査がほぼ終了した８月 25 日から人力による包含層掘削を開始し、９月１日に遺構検出を実施した。確認した遺構から精査を行い、図化、写真撮影を行い、９月 17 日に空中写真撮影・測量を実施し、第１面の調査を終了した。9 月 24 日から第２面の包含層掘削を行い、9 月 28 日に遺構検出を行った。遺構検出すると、2-1 区同様、掘立柱建物の柱穴と想定する小穴が多数確認され、第２面の調査は掘立柱建物を中心として慎重に調査を進めることを考えた。調査は柱の並びや抜き取りの有無などを見極めながら調査を進めた。調査が進むと予想以上に柱・礎板などの建築部材が残存していることが判明し、慎重に記録を取りながら調査を行った。これらの遺構の図化、写真撮影を終了した 12 月２日に空中写真撮影・測量を行い、２面の調査を終了した。12 月４日から第３面の包含層掘削を開始し、12 月８日に遺構検出を実施し、


5-1区
5-2区
北区
4区
一反田遺跡
3-2区
南区
3-1区
2-3区
2-2区
2-1区
1区
赤土政所遺跡
X=144600
X=144700
X=144800
Y=36800
Y=36700
Y=36600
0　1:2,000　50m
基本土層
Ⅰ　表土
Ⅱ　黒褐色土
Ⅲ　灰白色粘土
Ⅳ　黄灰色砂質土
Ⅴ　灰色砂質土
Ⅵ　褐色粘土
Ⅶ　青灰色粘土
Ⅷ　灰色砂質土～砂
Ⅸ　黒褐色粘土
Ⅹ　黄灰色砂質土
Ⅺ　黄灰色砂質土
Ⅻ　灰色粘土
ⅩⅢ　褐色粘土
赤土政所遺跡と一反田遺跡の境界（3-2～3-1区）で大規模な河川（洪水）堆積があり、土層の連続性が明確ではないが、Ⅱ・Ⅲ層とⅩ層、Ⅳ層とⅪ層、Ⅴ層とⅫ層、Ⅵ層とⅩⅢ層が対応する可能性が高い。
一反田遺跡　北区
一反田遺跡　南区
赤土政所遺跡
3-2区 北側
3-2区 南側
盛土
河川堆積
撹乱
7.5m
7.0m
6.5m
6.0m
5.5m
0　1:40　1m

第２図　基本土層図

確認した遺構から順次掘削を開始した。遺構数が少なかったことから調査は順調に進行し 12 月 16 日に空中写真撮影・測量を実施し、第３面の調査を終了した。翌 12 月 17 日から第４面の包含層掘削を開始し、18 日に遺構検出を実施した。確認した遺構から順次慎重に掘り進め、図化・写真撮影を実施した。１月８日に空中写真撮影・測量を実施し、１区の調査を終了した。

１区は工事が及ぶ範囲が拡張したことにより、１区拡張区の調査を進め、１月 14 日～１月 25 日まで実施した。

5-1 区　１区の調査と並行して、９月９日より重機による表土除去を実施し、11 日から第１面の包含層掘削を行った。８月 17 日に遺構検出を行い、引き続いて遺構掘削を開始した。特に SD101 は掘削を進めると多量の土器とともに木製品が多く出土したことから、遺物を残しながら慎重に掘削を進めた。SD101 の調査がほぼ終了した 10 月 22 日に空中写真撮影・測量を行った。SD101 の調査は 10 月 28 日まで補足調査を実施した。10 月 27 日から第２面の包含層掘削を開始し､11 月４日に遺構検出を実施した。この面では遺構は一切確認できなかったことから４区第２面に伴う遺構はないと判断し、引き続いて同日から３面の包含層掘削を開始した。11 月 16 日に遺構検出を行い、遺構掘削を開始した、少数の遺構を検出した。遺構調査が終了した 11 月 20 日に空中写真撮影･測量を実施し､本調査区の調査を終了した。

5-2 区　5-1 区の終了後、１区の調査に平行して、12 月 14 日から重機による表土除去を開始した。翌 12 月 15 日から人力による包含層掘削を開始し、5-1 区から続く SD101 を確認した。5-1 区と同様調査を進めると多量の土器とともに木製品が出土したことから調査を慎重に進めた。図化・写真撮影、遺物の取り上げを進め、それらが終了した２月８・９日に空中写真撮影・測量を実施した。第２面は２月 10 日より包含層掘削を開始した。その後２月 16 日に遺構検出を行ったが、5-1 区同様遺構が確認されなかったため調査区の図化、写真撮影後２月 17 日に第３面の包含層掘削を開始した。２月 19 日に遺構検出を実施し、２月 22 日から遺構掘削を行った。それらが終了した２月 23・24 日に空中写真撮影・測量を実施し、翌日補足調査を行って 5-2 区の調査を終了した

2-3 区　平成 22 年２月 10 日に重機による表土除去を実施した。２月 18 日より第１面の包含層掘削を開始した。5-2 区が終了した、２月 28 日をもって現地調査を中断し、３月４日に現地事務所を撤収し、平成 21 年度の複数箇所かつ複数面に亘る調査を終了した。

公開普及（現地説明会）　平成 21 年 10 月 31 日に一般県民を対象に現地説明会を開催し、調査中の赤土政所遺跡の現地を公開するとともに、出土品の一部を展示し、好評のうちに終了した。

また、東京文化財研究所の要請に基づき、アフガニスタンからの文化財保護技術習得のための研修生の実習の場として発掘調査技術の実地研修を行い、アフガニスタンの文化財保護技術の向上にも協力した。

（４）第３年次調査（平成 22 年度）

第３年次調査は、平成 22 年４月９日から平成 22 年 12 月 28 日まで調査を行った。

2-3 区　2-3 区第１面の包含層掘削を開始し、４月 13 日に遺構を検出し、検出した遺構から順次遺構掘削を実施し、写真撮影・図化を行った。遺構掘削が終了した４月 21 日にラジコンヘリコプターによる空中写真撮影・測量を実施した。合わせて高所作業車による撮影も実施した。補測調査が終了した４月 26 日から 2-3 区第２面の包含層掘削を開始した。包含層掘削が終了した５月 10 日に遺構検出を実施し、検出した遺構から順次精査を行い、合わせて写真撮影・図化を実施した。遺構掘削が終了した５月 26 日にラジコンヘリコプターによる空中写真撮影・測量を実施した。

５月 28 日から 2-3 区第３面の包含層掘削を開始した。包含層掘削が終了した６月３日に遺構検出を実施し、検出した遺構から順次精査を実施し、合わせて写真撮影・図化を実施した。遺構掘削が終了した６月 10 日にラジコンヘリコプターを用いた空中写真撮影・測量を実施するとともに高所作業車を用

いた撮影も合わせて実施した。

６月 11 日から第４面の包含層掘削を実施した。包含層掘削が終了した６月 15 日から遺構検出を実施し、水田畦畔の確認を行った。遺構検出が終了した６月 17 日から水田面の精査を実施し、小区画水田であることを確認するとともに一部に足跡が残存していることも確認できた。水田面の精査が終了した６月 30 日にラジコンヘリコプターを用いた空中写真撮影・測量を実施した。水田面で確認した足跡の実測、基本土層図の作成などを７月９日まで行い、2-3 区の調査を終了した。

2-2 区　2-2 区の表土除去は８月 24 日から重機による表土除去を開始した。８月 27 日から人力による包含層掘削を開始し、９月 10 日に遺構検出を行った。９月 14 日から遺構掘削を開始した。主に溝状遺構が出土しただけであったことから切り合い関係を見極めながら調査を進めた。９月 22 日に空中写真撮影・測量を行い、第１面の調査を終了した。つづく９月 27 日から第２面の包含層掘削を開始した。10 月 13 日に遺構検出を行い、畦畔が確認されたことから、それらを破壊しないように水田を検出するとともに、それ以外の遺構を掘削した。それが終了した 10 月 27 日に空中写真撮影・測量を実施し、第２面の調査を終了した。11 月１日から第３面の包含層掘削を開始し、11 月８日に遺構検出を行い竪穴建物と想定する遺構を確認した。慎重に掘り進め、竪穴建物の可能性が高いことが判明したが、竈は確認されなかった。遺構の図化、写真撮影が終了した 11 月 18 日に空中写真撮影・測量を行い、第３面の調査を終了した。翌 11 月９日から第４面の包含層掘削を開始し始めると、2-3 区で確認した水田畦畔が確認できたため慎重に遺構検出を行いながら包含層掘削を進めた。12 月２日に遺構検出を行い、水田と調査区南側で SD206 を確認した。SD206 は掘削を進めると木製品や土器が多く出土し、中には第３面に伴う可能性が高い土器が出土していることから、第３面で確認できなかった遺構である可能性がある。この溝については同一面の他の遺構の時期と比較しながら判断する必要があると判断し、現地調査では判断せず、資料調査での出土遺物の検討により、どちらの面に伴う遺構であるのかを判断することとした。SD206 の掘削が終了した年も押し迫った 12 月 27 日に空中写真撮影・測量を行い、2-2 区の調査を終了した。

また、12 月 28 日に現地事務所の撤収等を行い、平成 22 年度の現地調査を終了した。

（５）第４年次調査（平成 24 年度）

第４次調査は、平成 24 年９月 18 日から平成 25 年３月 25 日まで実施した。

3-2 区　3-2 区の調査は、平成 24 年９月 18 日に重機による表土等除去を開始し、21 日まで実施した。表土等除去終了後、24 日から第１面の包含層掘削を実施し、10 月９日に終了した。その後、遺構検出を実施した。遺構検出の結果、溝に囲まれた掘立柱建物で構成される屋敷跡の可能性が高いことが想定できたため、まず掘立柱建物を構成する柱を認定したうえで、同一の掘立柱建物については同一の土層帯を残し、土層や遺物に留意しながら掘削を進めた。また、土坑や溝については、適宜土層帯を設定し掘削を進めた。作業が進むにつれて掘立柱建物の柱材や礎板が残存していることが判明した。掘削が終了した11月２日に高所作業車を用いた全景写真撮影を行った。また、11月３日に空中写真測量を実施し、遺構全体図の作成を行った。11 月５～ 15 日に実測作業を行い、第１面の調査を終了した。なお、区画溝に囲まれた屋敷跡であることの重要性から、11 月３日に県民対象の現地説明会を開催し、90 名の参加があった。

第２面は 11 月７日より包含層掘削を開始した。11 月 20 日に包含層掘削を終了し、遺構検出を行った。遺構は幅 10 ｍを超える自然流路（SR201）のみであった。21 日から SR201 の掘削を開始し、12 月５日に掘削を終了した。12 月６日に高所作業車を利用して調査区第２面の全体写真撮影を実施し、12 月６・７日に調査区の測量を行い、第２面の調査を終了した。

第３面は、12 月 11 日から包含層掘削を開始した。包含層掘削を進めるにしたがい、2-3 区の調査か

ら古墳時代に該当する面が想定された標高付近は自然堆積層の可能性が高いことから、2-3 区の第４面に該当する標高・層位まで掘削を進めた。

１月 25 日に基本土層図の作成を実施し、調査を終了し、１月 29 日から埋め戻しを行い２月 18 日に埋め戻しを完了した。

3-1 区　3-1 区は平成 25 年１月８・９日に表土等除去を実施し、１月 16 日から第１面の包含層掘削を実施した。包含層掘削が終了した１月 28 日に遺構検出を行い、確認した遺構を掘削した。遺構掘削が終了した１月 29 日に完掘状況写真撮影、30・31 日に測量を行った。２月１日から第２面の包含層掘削を開始し、２月５日に遺構検出を実施し、確認した遺構を慎重に掘削を行った。遺構掘削が終了した２月７日に完掘状況写真撮影を行い、２月８日に調査区の測量を実施し、第２面の調査を終了した。２月 12 日に第３面の包含層掘削を開始し、包含層掘削が終了した２月 20 日に遺構検出を行い、確認した遺構の掘削を実施した。２月 21 日に完掘状況写真撮影を行い、２月 22 日に調査区の測量を実施した。つづく２月 25 日から第４面の包含層掘削を開始し、包含層掘削が終了した２月 26 日に遺構検出を実施し、同日から水田跡の精査を実施した。２月 28 日に調査区の写真撮影を実施し、３月４日に調査区の測量を実施した。３月５・６日に水田畦畔の構造調査及び足跡の有無の調査を実施し、写真撮影及び図化作業を実施した。３月７日に調査区基本土層確認のための調査を行うとともに、独立行政法人産業技術総合研究所地震研究センター　藤原治先生に現地にて指導を受けた。この結果、3-1 区内では津波堆積物は確認されず、洪水・水成堆積であることが判明した。この土層状況の調査をもって 3-1 区の調査を終了し、３月 11 日に埋め戻しを行い、3-1 区の調査を終了した。この後、３月 25 日まで基礎整理作業を実施した。

最終的に、平成 25 年３月 25 日に現地事務所の撤収を行い、掛川浜岡線原子力発電所関連道路整備事業に係る赤土政所遺跡・一反田遺跡の現地調査のすべてを終了した。

３　資料調査・報告書刊行作業及び保存処理の経過

（１）資料調査・報告書刊行作業

第１表　調査面積一覧表

遺跡名	調査区	調査期間	対象面積	実掘面積
赤土政所遺跡	2-1	平成 20 年 10 月 21 日～平成 21 年 3 月 12 日	1,040 ㎡	403 ㎡
一反田遺跡	5-1	平成 20 年 10 月 21 日～平成 21 年３月 12 日		
赤土政所遺跡	1	平成 21 年 7 月 6 日～平成 22 年 2 月 26 日	3,332 ㎡	3，932 ㎡
一反田遺跡	4	平成 21 年 7 月 6 日～平成 22 年 2 月 26 日		
一反田遺跡	5-2	平成 21 年 7 月 6 日～平成 22 年 2 月 26 日		
赤土政所遺跡	2-2	平成 22 年 4 月 4 日～平成 22 年 12 月 28 日	1,200 ㎡	1,884 ㎡
赤土政所遺跡	2-3	平成 22 年 4 月 4 日～平成 22 年 12 月 28 日		1,668 ㎡
赤土政所遺跡	3-1	平成 24 年 9 月 18 日～平成 25 年 3 月 25 日	860 ㎡	530 ㎡
一反田遺跡	3-2・3	平成 24 年 9 月 18 日～平成 25 年 3 月 25 日		

平成 22 年度　平成 22 年度は、平成 23 年１月４日から開始し、３月 31 日まで実施した。

平成 23 年度　平成 23 年度は、整理等作業を実施した。

平成 24 年度　平成 24 年度は、基礎整理作業と、出土品本整理作業の分類・仕分け作業及び接合作業を実施した。

平成 25 年度　平成 25 年度は、基礎整理作業と、出土品本整理作業全般、記録類本整理作業全般を実施した。

平成 26 年度　平成 26 年度は、出土品本整理作業・記録類本整理作業のうち主にトレース作業と、報告書を刊行するための編集作業を行い、合わせて記録類及び出土品の収納を行った。

平成 27 年度　平成 27 年度は、報告書を刊行した。

（２）保存処理

木製品　一反田遺跡、赤土政所遺跡出土の木製品については、保存処理が必要な点数が多かったことから、平成 22 ～ 26 年度にかけて保存処理作業を実施した。平成 23 年度に 72 点、平成 24 年度に 127 点、平成 25 年度に 202 点、平成 26 年度に 390 点の保存処理を実施した。

また、PEG 浸透作業や真空凍結乾燥作業に先立ち、木製品の実測・写真撮影後樹種同定ためのサンプリング採取を行い、樹種同定に備えた。こののち樹種同定は東北大学名誉教授鈴木三男氏に委託して実施した。

木製品の保存処理は、処理前記録の作成、写真撮影後、保存処理する木製品の種類や劣化度に応じて PEG 含浸を行うものと、真空凍結乾燥を行うものに区分して実施した。そののち修復作業を実施し、最終的に処理後の記録を作成し、保存処理を終えた。

金属製品　金属製品の保存処理は、平成 25 年度に 12 点を実施した。処理前記録の作成、写真撮影を行った後、Ｘ線写真撮影、クリーニング、修復の順で実施し、最終的に処理後の記録を作成し、金属製品の保存処理を終了した。このうち耳環の蛍光Ｘ線分析を業務委託し、その結果を第７章に掲載した。

骨貝類他　骨貝類等の保存処理は、平成 26 年度に 14 点を実施した。保存処理は同定調査及び年代測定とともに分析業務委託とした。分析結果は第７章に掲載した。

第２表　本調査工程表

遺跡名	調査区	平成 19 年	平成 20 年	平成 21 年	平成 22 年	平成 23 年	平成 24 年	平成 25 年	平成 26 年	平成 27 年
試掘・確認調査										
赤土政所遺跡	2-1									
一反田遺跡	5-1									
赤土政所遺跡	1									
一反田遺跡	4									
一反田遺跡	5-2									
赤土政所遺跡	2-2									
赤土政所遺跡	2-3									
赤土政所遺跡	3-1									
一反田遺跡	3-2・3									
基礎整理										
資料整理・報告書刊行										

第３章　地理的環境・歴史的環境

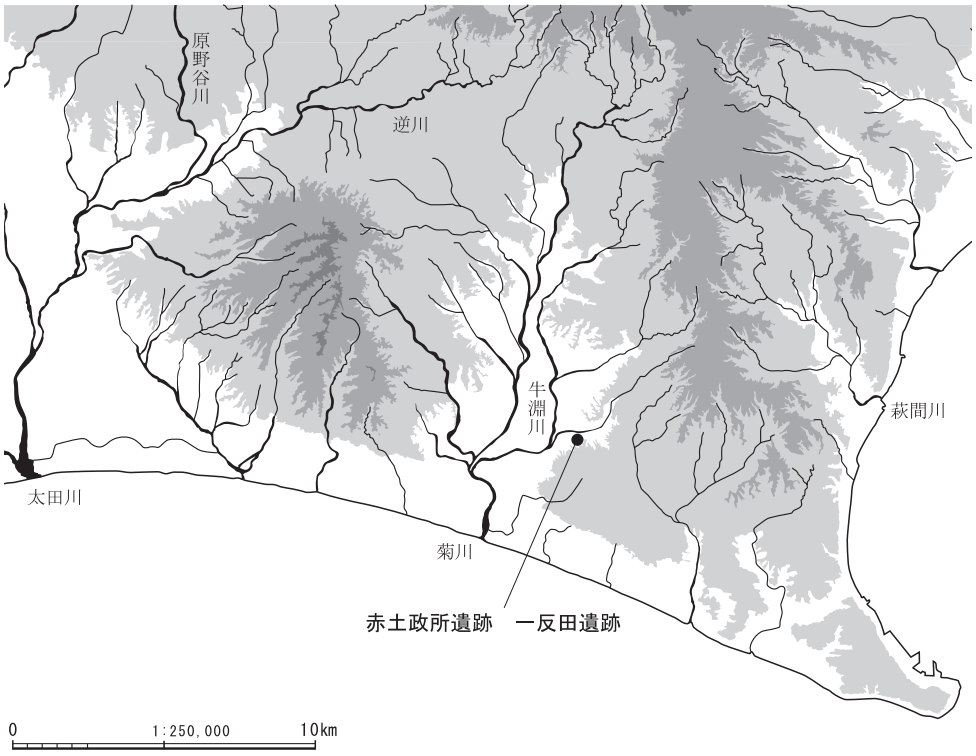
第１節　地理的環境

赤土政所遺跡・一反田遺跡は、静岡県菊川市（合併前は小笠郡小笠町）赤土地区に位置する。両遺跡が所在する菊川市は、平成 17 年に小笠郡菊川町と同小笠町が合併し、菊川市となった。現在は北側から西側を掛川市、南側を御前崎市、東側を島田市と接している。菊川市は、八高山から延びる北部の丘陵地帯、西部の小笠山丘陵、東部の牧ノ原台地の丘陵、南部を遠州灘に囲まれた範囲の中央を牛渕川、西方川等を合流しながら菊川が貫流する。

赤土政所遺跡と一反田遺跡は、菊川の支流である牛渕川の枝流、丹野川と江川に挟まれた低地部に立地する。丹野川は天井川で、赤土地区の古老によれば、昔はよく氾濫したので、太平洋戦争前後に人海戦術で堤防を作って今の位置に治めたとのことである。したがって、赤土政所遺跡、一反田遺跡は調査前から旧河川によって遺跡が区画されたり、破壊されたりしていることが予想できるような地形であった。赤土地区には現在も溜池が残っており、水量は豊富であるが、ひとたび雨が降れば河川が洪水を引き起こすような土地であったことが想定できる。

菊川を遡り、東海道に至り、それを東に進めば金谷や島田方面に、西に進めば掛川方面へ向かうことができる交通の要衝にあたる。特に菊川と牛渕川が合流する両遺跡周辺は、小笠山から伸びる尾根と、牧ノ原台地から伸びる尾根によって平野部が最も狭まる場所であることなどから、菊川流域の大型河川が近づく場所であり、陸上・水上交通の要衝であった可能性が高い。これを証明するように、古墳時代では遠江でも数少ない三角縁神獣鏡を有する上平川大塚古墳が築造されたり、弥生時代には嶺田遺跡が形成されたり、平安時代～戦国時代までは赤土荘園の政務をつかさどる「政所」が置かれたり、江戸時代には黒田代官屋敷が置かれるなど、菊川地域の重要な遺跡が多い。また、旧小笠町役場が置かれるのもこの地域であり、弥生時代～現代まで菊川下流域の中心的な地域として考えられる。

両遺跡の北側に流れる丹野川は、蛇行していたことが予想でき、遺跡周辺の土地形成や遺跡の盛衰に大きく影響していたことは明らかである。



第３図　遺跡位置図と周辺の地形図

第２節　歴史的環境

１　旧石器・縄文時代

菊川流域では、旧石器時代は三沢西原遺跡（４）で槍先形尖頭器やナイフ形石器、剥片や石核、叩き石などが出土している（菊川町 1985）。

縄文時代の遺跡は、前述の三沢西原遺跡でも縄文時代早期・中期の縄文土器が出土している。久保之谷遺跡では縄文時代中期の石囲炉を持つ竪穴建物が見つかっている。石畑遺跡（菊川町 1983・1984）では後・晩期の遺跡であることが分かっており、竪穴建物６軒のほか、土坑などが確認された。出土遺物には宮滝式土器など関西系のものが多いが、東北の亀ヶ岡式土器に類する精製土器なども出土している。当遺跡は浜松市蜆塚遺跡とともに遠江、ひいては静岡県を代表する後・晩期の遺跡である。このほか赤土政所遺跡・一反田遺跡から 900 m程北東にある釜太夫遺跡（32）で縄文時代の石器が表採されているが、詳細は分かっていない。

２　弥生時代

赤土政所遺跡が所在する赤土地区周辺には、遠江の弥生土器の標識遺跡となっている嶺田遺跡（27）、白岩遺跡（菊川町 1983）が所在するなど、古くから周知されていた重要遺跡がある。

嶺田遺跡は赤土政所遺跡・一反田遺跡から北西方向に 900 m程離れた位置で、丹野川と牛渕川、黒沢川が合流点する付近にある（小笠町 1982・1983）。弥生時代中期の土器が出土する遺跡として知られており、それらの土器は菊川流域の弥生時代中期の標識である「嶺田式」と言われている。すでに嶺田式土器が出土する周知の埋蔵文化財包蔵地となっていた当地で、一級河川丹野川の護岸工事を建設するための改修工事がなされ、1981 年（昭和 56 年）に発掘調査されている。調査では弥生時代の土器が出土しているが、砂層より出土した細片で、河川内に流れてきた土器と判断されている。それ以外、過去の発掘調査歴がないことから、未だ遺跡の全容や性格については明らかになっていない。

嶺田遺跡よりさらに北側にある川田・東原田遺跡（28）は弥生時代中期～後期の集落遺跡である。1998 年（平成 10 年）に大規模な発掘調査が行われている（小笠町 2001）。調査では弥生時代中期から後期にかけての竪穴建物や弥生時代後期の大型の掘立柱建物を検出した。特に掘立柱建物は県内最大級と言われる棟持ち柱を持つ建物跡が注目された。棟持ち柱のある建物の柱穴からは、マツの芯持ち材を使った巨大な柱根が出土している。出土遺物も弥生土器・石器・骨角器・木製品などが数多く出土した。

西方川流域の弥生時代中期後半の標識遺跡である白岩遺跡では、弥生時代中期後半期の土器が出土している。白岩遺跡より出土した土器は「白岩式」と呼ばれている。最も古い発掘調査は 1951 年（昭和 26 年）、静岡県立掛川西高等学校郷土研究部が八幡橋下流で河川改修工事に伴う発掘調査を実施した（田辺 1972）。その後、1966 年（昭和 41 年）に静岡大学が東名高速道路建設に伴って発掘調査が実施され、竪穴建物が発見された。1973・1974 年（昭和 48・49 年）には西方川の旧流路と思われる溝から、ほぼ完形の桧が出土した（白岩遺跡調査団 2015）。さらに 1982 年（昭和 57 年）にも西方川の改修工事に伴う発掘調査が町主体で行われている（菊川町 1983）。2007 年（平成 19 年）には西方川総合流域防災事業工事に伴う発掘調査が財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所（現県埋文センター）により実施された（財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所 2010）。

菊川流域の祢宜屋敷遺跡、赤谷遺跡（菊川市 2006）では後期の集落が確認されている。弥生時代後期の土器は「菊川式」土器とも言われ、やはりこの地域の標識となっている。

そのほかの遺跡は表採資料により集落跡の包蔵地である可能性が期待されるところである。しかしこ

第４図　周辺遺跡分布図

の地域における沖積地の遺跡は未だ開発行為に伴う発掘調査の事例が少なく、その実態は明らかとなっていない。

３　古墳時代

古墳時代前期では、遠江の弥生時代後期末～古墳時代前期の標識遺跡となっている三沢西原遺跡（４）では、竪穴建物が複数軒検出され、それとともに古式土師器が出土している。赤土政所遺跡から東に約1.4㎞にある宮ノ前遺跡（41）では前期から中期にかけての遺物が出土している。

菊川流域の古墳は、菊川およびその支流に面する丘陵先端部に築かれている。菊川流域で最も早くに築かれたのは上平川大塚１・２号墳（11）であり、菊川と牛渕川の合流地点付近の平地に築造されており、菊川流域で唯一の三角縁神獣鏡が出土している（大谷 2011）。古墳時代中期以降は、菊川流域の大徳寺古墳、高橋川流域の舟久保古墳（45）、菊川流域の法明寺古墳や掛川市（旧大東町）五塚山古墳（佐束川流域）など、流域全体に中規模な古墳が散在的に築造される。連続的に中規模の古墳が築造される地域はなく、規模も 50 m以下のものが多い。こうした規模や立地面から判断すると、菊川流域では古墳時代を通じて求心的な集団はなく、河川ごとに小首長が併存するような状況であった可能性が高い。

菊川流域は、遠江でも横穴墓が採用される地域であるが、横穴式石室はほとんど採用されず、横穴墓が大多数を占めている。横穴墓の導入も早く６世紀前半には導入されている。九州との関連が想定できるため、横穴墓の導入に当たって直接その地域から伝播してきている可能性が高い。

また、足立順司氏の研究によれば、湖西古窯群の須恵器が流通する遠江にあって、尾張系（猿投古窯群）須恵器が多いという特徴が指摘されている（足立 2011）。広範な交流範囲を想定することが可能である。遺跡の北東側の丘陵上に位置する釜太夫横穴群（31）では、2003（平成 15 年）の龍昌山安興寺の建替えに伴う発掘調査で、２基の横穴を確認した。横穴内ではフラスコ形土器をはじめとする須恵器が主体を占め、大刀などの金属製品、装身具などが少量出土した。

同じ北東方向にある低位丘陵上に立地しているのが釜太夫遺跡（32）と赤土上ノ段遺跡（34）である。両者ともに平安時代から中世までが主体の複合遺跡である。釜太夫遺跡はこの地域の最も古い時期の集落跡である可能性が高く、今後の調査成果が待たれる。

2005 年（平成 17 年）に実施された赤土政所遺跡の第１次調査（菊川市 2006）では、溝跡や土器溜りを検出し、古墳時代後期（６世紀後半頃）の土器が出土した。当地での発掘調査は第１次調査以来で

第３表　周辺遺跡地名表

No.	遺跡名	No.	遺跡名	No.	遺跡名	No.	遺跡名
1	古川遺跡	17	八幡ヶ谷古墳	32	釜太夫遺跡	47	虚空蔵横穴墓群
2	高田大屋敷遺跡	18	下平川神社西遺跡	33	八幡古墳	48	虚空蔵堂
3	山王裏遺跡	19	下平川八幡谷遺跡	34	赤土上ノ段遺跡	49	五丁池横穴墓群
4	三沢西原遺跡	20	八幡ヶ谷横穴墓群	35	樋詰遺跡	50	池之谷遺跡
5	興嶽寺原遺跡	21	堤の城跡	**36**	**一反田遺跡**	51	糯田遺跡
6	猿田谷遺跡	22	棚草横穴墓群	**37**	**赤土政所遺跡**	52	高根山横穴墓群
7	赤峯屋敷	23	堤城跡	38	赤土四反田遺跡	53	前岡横穴墓群
8	上平川遺跡	24	志茂組遺跡	39	八丁遺跡	54	高橋城跡
9	城向遺跡		黒田代官屋敷跡	40	榎田遺跡	55	平組横穴墓群
10	猪森遺跡	25	東嶺田遺跡	41	宮の前遺跡	56	高橋遺跡
11	上平川政所遺跡	26	朝日神社古墳	42	市場Ａ遺跡	57	高橋城山遺跡
	上平川大塚古墳	27	嶺田遺跡	43	市場Ｂ遺跡	58	青木前遺跡
12	堤遺跡	28	川田・東原田遺跡	44	川上城山遺跡	59	下平川六反田遺跡
13	大鹿横穴墓群	29	春日山横穴墓群		作兵衛屋敷跡	60	寺の谷古墳群
14	志味堂横穴墓群	30	春日神社古墳	45	舟久保古墳		
15	志味堂古墳群	31	釜太夫横穴墓群	46	寺ノ谷横穴墓群		
16	瑞泉寺古墳		安興寺	47	虚空蔵横穴墓群		

あり、今回の発掘調査は第２次調査にあたる。

４　古代（奈良・平安時代）

赤土政所遺跡・一反田遺跡が所在する菊川市赤土地区は、城飼郡川上郷と想定されている。古代の城飼郡は現在の行政区画で御前崎市の一部、菊川市、掛川市の一部を含む範囲であったと推測される。城飼郡は内田郷・高橋郷・川上郷など 12 郷で構成されており、上郡に位置づけられていた。

この時代の遺跡としては、規格的な建物の配置が確認された宮ノ西遺跡（菊川町 2002）や宇藤遺跡群のほか、宮ノ西遺跡に近在する加茂廃寺などが確認されている。

後述するように赤土政所遺跡・一反田遺跡が所在する菊川市赤土地区は、比叡山延暦寺の「千僧供領赤土荘」が置かれていたと想定されている。荘園の成立がいつのことか明確ではないが、鎌倉時代初頭には荘園となっていることから、それ以前にはある程度開発が進んでいたと考えられる。今回の発掘調査でも奈良時代～平安時代の遺物も多数出土しており、「荘園」の成立時期を検討する材料を提供しているといえる。

５　中世（鎌倉時代～戦国時代）

『倭名類聚抄』によると、小笠郡には加美郷、新井、荒木、河（川）上郷などの十一郷が存在していたことが判明し、赤土地区周辺は「河上郷」であった可能性が高い。

一方、『天台座主記』によれば、建久９（1198）年９月 16 日条に「延暦寺千僧供領遠江国赤土荘」との記載がみられ、さらに『華頂要略門主伝』によれば、文明３（1471）年５月 25 日条に「千僧供遠江国赤土荘」との記載が確認できる。また､赤土地区には小字名として「政所」が残ることから､この「赤土荘」の政所が存在している可能性が高い。

なお、内田荘、横地城、赤土荘などの政務中心機関が所在した場所は、古墳時代前期に上平川大塚古墳が築造された菊川と佐束川、牛渕川が最も近づく上平川地区の周囲に存在しており、古くから菊川流域で最も重要な地域と認識できる。

６　近世

遺跡から 1.5km 北西側には、旗本本多助久の代官であった黒田氏の居宅「黒田代官屋敷」が位置している（24)。黒田家は永禄年間の 1558 ～ 1569 年に当地へ縄張りし居住している。1973 年（昭和 48 年）に重要文化財に指定された主屋と長屋門が「黒田家住宅」と呼ばれる。その後、米蔵や東蔵、宅地が追加指定となり屋敷地全体が整備・保存されている。

第４章　赤土政所遺跡

第１節　調査の概要

１　遺跡の概要

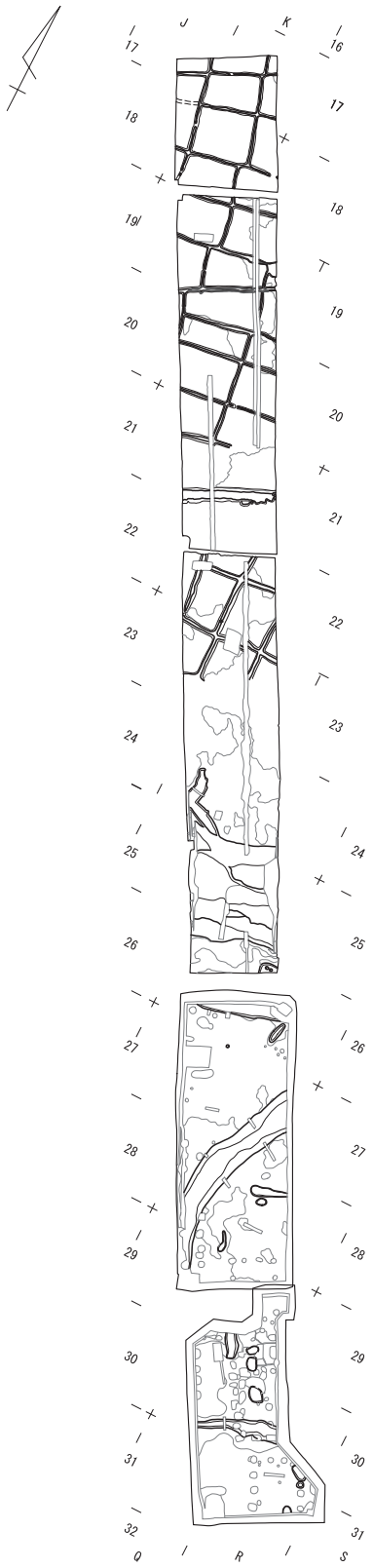
赤土政所遺跡、一反田遺跡は時代により遺跡の境界域が不分明であるが、埋蔵文化財包蔵地としては、１～ 3-1 区が赤土政所遺跡、3-2 ～ 5-2 区が一反田遺跡として登録されている。赤土政所遺跡、一反田遺跡の境界付近に建物等の明確な遺構が存在しないが、赤土政所遺跡の 2-3 区から続く第４面の水田跡が 3-1 区まで延びることなどから判断して、3-1 区は一反田遺跡として調査したものの、１～ 3-1 区を赤土政所遺跡、3-2 ～ 5-2 区を一反田遺跡として報告する（第１図）。

現地調査の経過については第２章第２節で触れていることから、ここでは各遺構面の年代と基本土層について述べることとする。赤土政所遺跡は第４面の遺構面調査を実施している。第１面はⅣ層上面で検出した中世以降の遺構面である。掘立柱建物と土坑、区画溝、自然流路、不明遺構等がある。第２面は奈良時代末から平安時代の遺構面である。Ⅴ層上面では大型の掘立柱建物群と土坑、区画溝、水田、自然流路、不明遺構等が検出された。第３面はⅥ層またはⅧ層上面で検出した古墳時代中期から終末期までの遺構面である。主な遺構は竪穴建物、溝、土坑、自然流路などが見つかっている。第４面はⅦ層上面で古墳時代前期から中期中頃までの遺構面を検出した。南半部には竪穴建物のほか、溝、土坑、自然流路があり、北半部一帯に水田が見つかった。

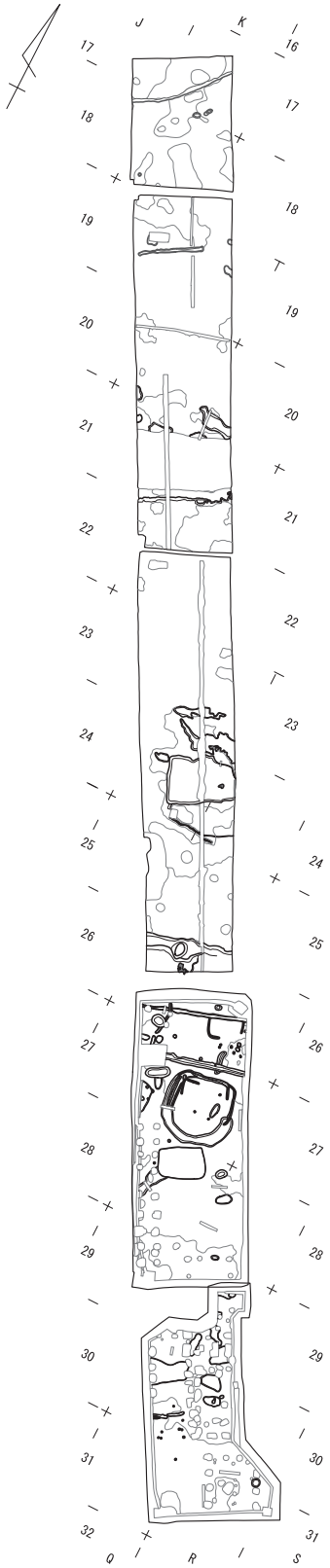
第２図内の基本土層図に想定される赤土政所遺跡と一反田遺跡の基本土層の対応関係を文字で示した。各調査区の土層注記がかなり異なるため明確にできなかったが、概ね同じような層位をつないでいる。3-1 区と 3-2 区の調査で両遺跡間の土層を繋げる予定であったが、洪水による堆積層が多く水平堆積ではなかったため、厳密に赤土政所遺跡と一反田遺跡を繋げることは不可能であった。したがって同一標高で同一の層位の可能性は高いものの、基本土層としては別区分（別番号）としている。

２　微地形と遺構の広がり

遺跡は北側を丹野川、南側を江川に挟まれた沖積地に位置している。こうした立地から見ても河川の影響は避けて通れない土地柄であっただろう。河川は東側の低丘陵地から南西方向に流れ下る。そうした自然地形の通り、赤土政所遺跡の調査面は各面とも北から南へ標高値が緩やかに下がっている。東西方向は東から西へわずかに傾斜している。発掘調査のなかでも調査区内を東西に横断する自然流路の痕跡が数箇所確認されている。河川に近い沖積地という立地上、微高地を上手く利用して集落と水田が営まれている状況が発掘調査で明らかとなった。当地に初めて人為的な開発が入ったのは、第４面で確認された古墳時代前期～中期中頃（註１）である。2-2 区より南側は居住域、北側は水田域として使われていた。水田は北側や東西方向に続いており、広範囲に広がっていた可能性がある。遺跡の周辺部の平地には弥生時代後期末から古墳時代前期の集落や前期古墳が点在することから、低地への開発が進んでいても不思議ではない。古墳時代中期以降も基本的な土地利用は変わっておらず、南側に住居建物が位置している。菊川流域では６世紀前半には横穴墓が導入されており、遺跡周辺の低丘陵にも数多くの横穴墓が存在する。本遺跡でも同年代の土器が数多く出土していることから、関連する集落として位置づけられよう。再び当地が居住域として利用されるのは平安時代に入ってからのことで、１区から 2-1 区で大型の掘立柱建物群が見つかっている。掘立柱建物群の北限は調査で確認されている。１区南側の試



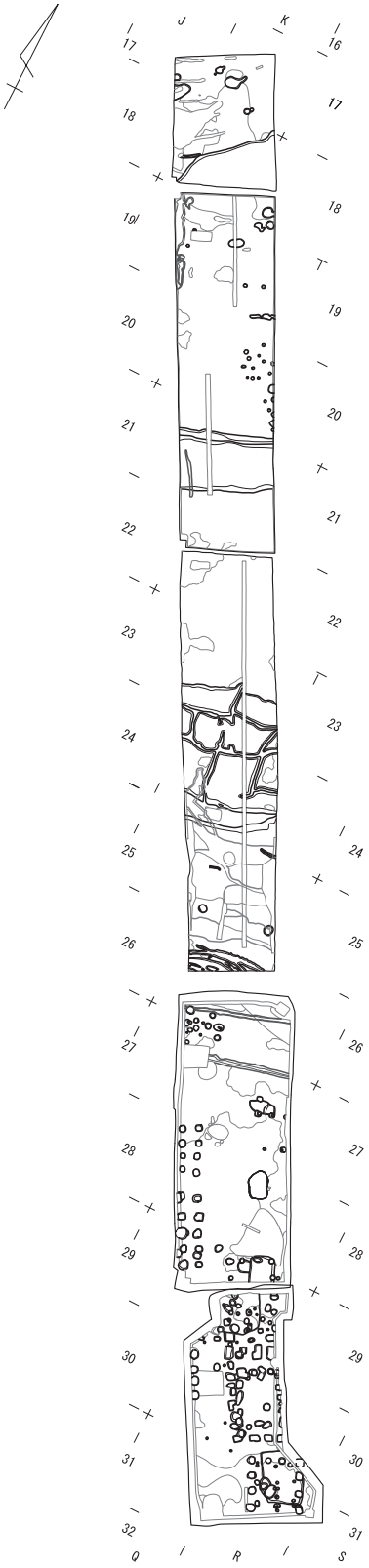
第４面



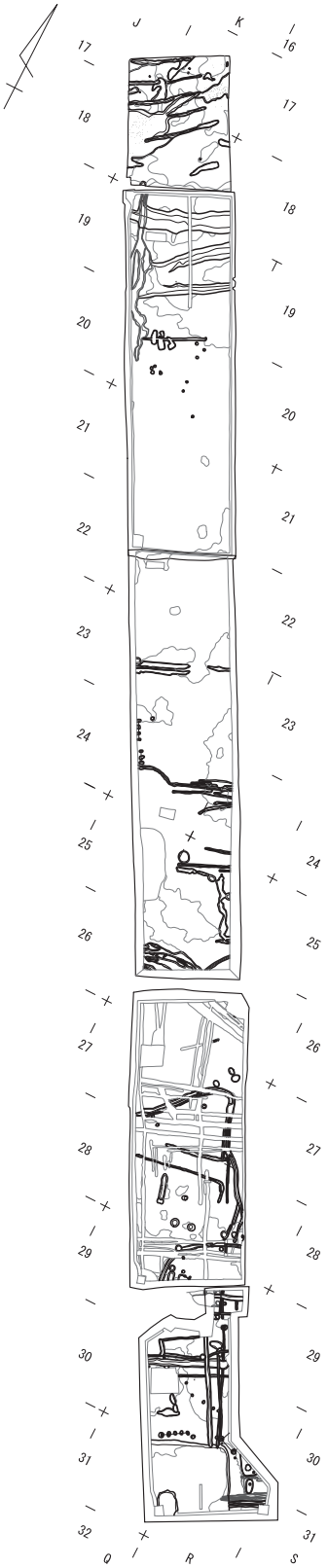
第３面

0　1:800　20m

第５図　第４面・第３面全体図



第２面



第１面

0　1:800　20m

第６図　第２面・第１面全体図

掘確認調査では遺構がなかったことから１区南端が南限と想定される。建物群は東西方向に広がる可能性が高い。その後、赤土政所遺跡と一反田遺跡の境界（3-2 ～ 3-1 区）辺りでは大規模な河川の洪水堆積があり、地形の変化により中世以降は 3-1 ～ 3-2 区のほうにも居住域が存在している。これは現在の地形にも影響しており、同区辺りの微高地上に集落が集まり、１区の南側は水田域が広がっている。

第２節　第４面の遺構と遺物

１　遺構

第４面では北半部で水田、南半部で竪穴建物、溝、土坑、自然流路などを検出した。2-2 区から 3-1 区に広がる水田面の標高値は 6.0 ｍ、2-2 区にある竪穴建物が 5.9 ｍ前後、南に位置する１区の遺構検出面は 5.7 ｍ前後と標高差はさほど大きくない。

１区では第２面の遺構によって撹乱を受けているものの、溝と土坑（SK401 ～ 406）を確認した。

2-1 区では溝と土坑がある。調査区内を蛇行する溝 SD403 は幅 3.5 ｍと規模が大きい。覆土からは古墳時代前期～中期に属する土器・土製品と木製品が出土している。溝 SD404 でも古墳時代の土師器が出土している。このほか土坑 SK407 ～ 409 がある。

2-2 区は南東端で竪穴建物が１軒、北側に水田の畦畔が見つかっている。水田の畦畔はほぼ東西南北の方向である。畦畔は杭列などを伴わない盛土畦畔である。

2-3 区でも 2-2 区に続く水田の畦畔を検出した。途中、Ｋ -19 ～Ｌ -19 グリッド付近より北側の南北畦畔の方向がやや西へ傾く。包含層内から出土した土器は非常に少ない。

3-1 区の畦畔も 2-3 区と同様、南北方向の畦畔がやや西へ傾いた方向である。

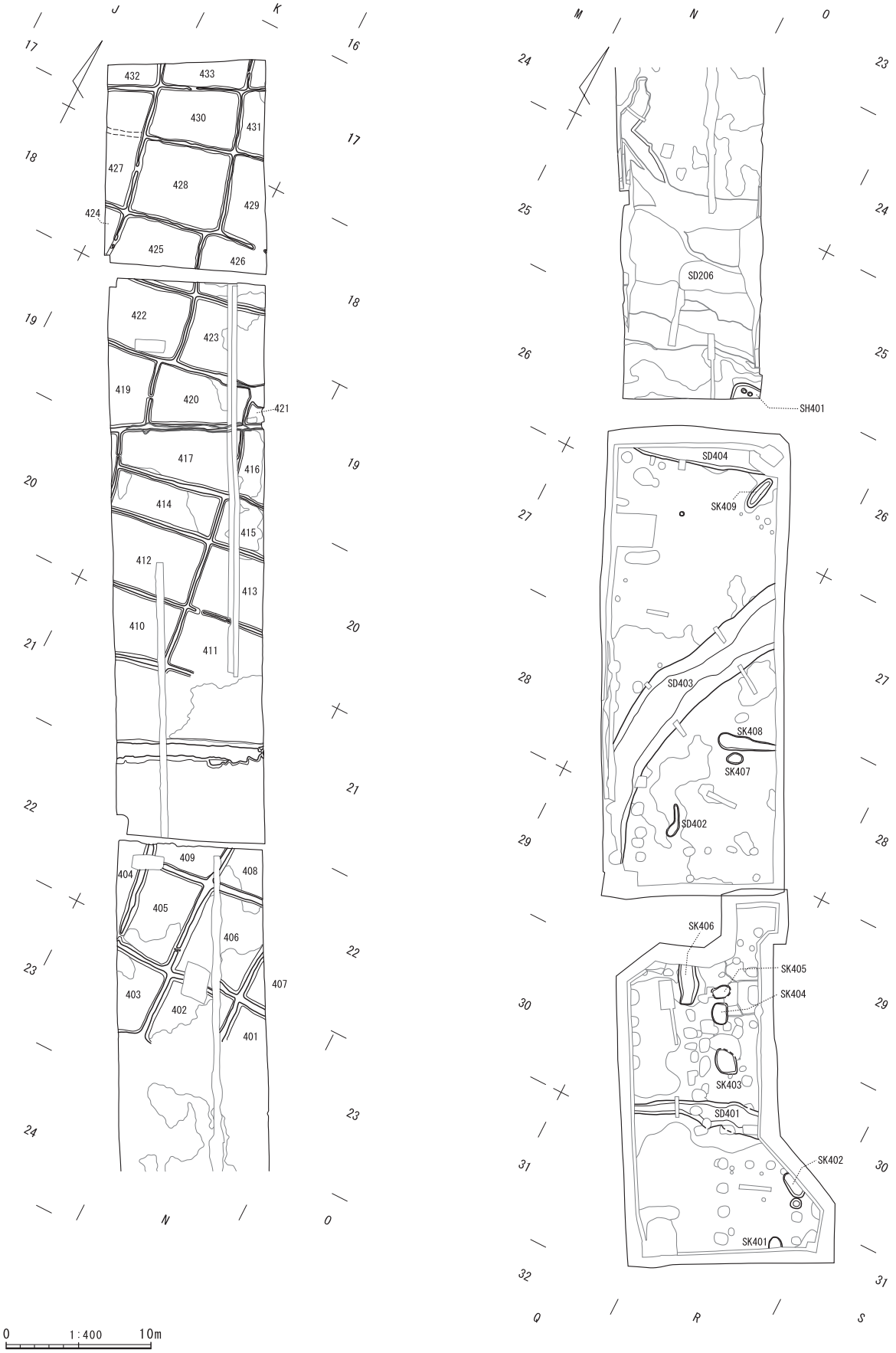
なお、2-2 区で検出した溝 SD206 は本調査面で発掘調査を実施したが、第２面の上空からの写真を確認すると、水田が破壊されているような状態に見えること、出土した遺物が古墳時代終末期以降の遺物が含まれるなど、第４面で確認した遺構から出土する土器と時期年代が合わない。SD206 は本来第２面で確認できた可能性が高いことから、第２面で報告することとした（第 78 ～ 80 図）。

（１）竪穴建物

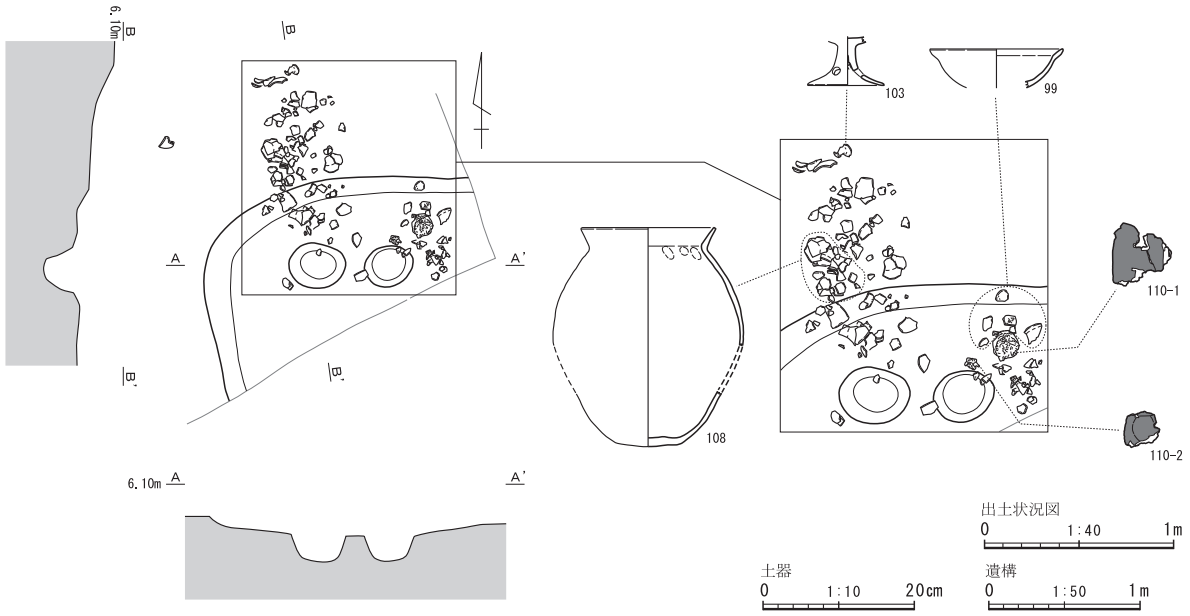
SH401（第８図、図版５）　2-2 区の南東端に位置する。調査区の南東角にあたる場所であることから、建物の一部しか検出できていないが、建物は隅丸方形の輪郭をもつと思われる。検出面からの掘り込みも浅く、壁の立ち上がりは明瞭ではない。主柱穴と思われる SP251・SP252 も竪穴の最下面で検出した。柱穴どうしが近過ぎることから建て替えの可能性もあるだろう。調査当初は土器が集中して出土した箇所と捉えられていたが、下層より竪穴建物が検出されたことにより、土器・土製品はこの遺構に伴うものである可能性が高まった（第 21 図 **99**・**103**・**108**、第 22 図 **110-1**・**2**）。しかし土器は竪穴建物の床面よりもやや浮いた状態であったことから、土器が竪穴建物の直接の時期を示すものではないだろう。

99 は建物北側の側壁付近で出土した土師器の鉢である。体部は碗状で、口縁部分は外へ緩く外反する。**103** と **108** は竪穴建物の輪郭よりも外側で出土している。**103** は円形の透かし孔を３方にもつ高坏の脚部である。**108** は甕である。胎土に径５㎜以下の粒子が多く混じる。単純口縁で、断面形は「くの字」状となる。**110-1** と **110-2** は竪穴建物の覆土内より出土した焼けた陶土である。胎土に粒子等の混じりはない。近接した位置であったことから同一個体と思われるが接合点はない。当遺跡の竪穴建物は竈跡が確認されていないが、曲面を持っていることから竈に伴う支柱の可能性がある。

出土土器の年代からみて竪穴建物は古墳時代前期末～中期初頭に属する遺構と思われる。


J
K
M
N
O
Q
R
S
SD206
SH401
SD404
SK409
SD403
SK408
SK407
SD402
SK406
SK405
SK404
SK403
SD401
SK402
SK401
0
1:400
10m

第７図　第４面全体図



第８図　SH401 実測図

（２）土坑

１区では土坑 SK401 ～ 406、2-1 区では土坑 SK407 ～ 409 がある。

SK401（第９図）　１区南端で一部を検出した。南半分は調査区外である。掘り込みは浅く、最大幅は1.2ｍ程で遺物を含まない。

SK402（第９図）　南東端で検出したが一部は調査区外にかかっている。長楕円形の形状で、長軸は 2.5ｍ程ある。30 ㎝ほど掘り込まれているが覆土に遺物は含まれていない。

SK403（第９図）　１区中央部に位置する。最大長は 2.4ｍ、形状は楕円形に近いが不定形である。掘り込みは浅い。覆土内より土師器の壷が出ている（第 11 図１）。古墳時代前期末の年代に属するだろう。

SK404（第９図、図版５・６）　北半部中央で検出した。SK403 がすぐ南に、SK405 が北側に位置する。SK404 は隅丸の長方形で、長軸は 2.0ｍ弱の大きさがある。掘り込みは 25 ㎝ほどで上層から土器が複数個体出土している（２～ 11）。２～６は土師器の高坏である。坏部はやや内湾する。脚部は３のように直線的なものもある。６は小型器台の脚部の可能性がある。７は土師器の小型壷、９は大型の壷である。調整痕は表面の風化で観察できなかった。８は土師器の甕で単純口縁をもつ。10・11 は台付甕の脚部で脚の高さが短い。出土土器の年代から SK404 は古墳時代前期末～中期初頭の遺構であろう。

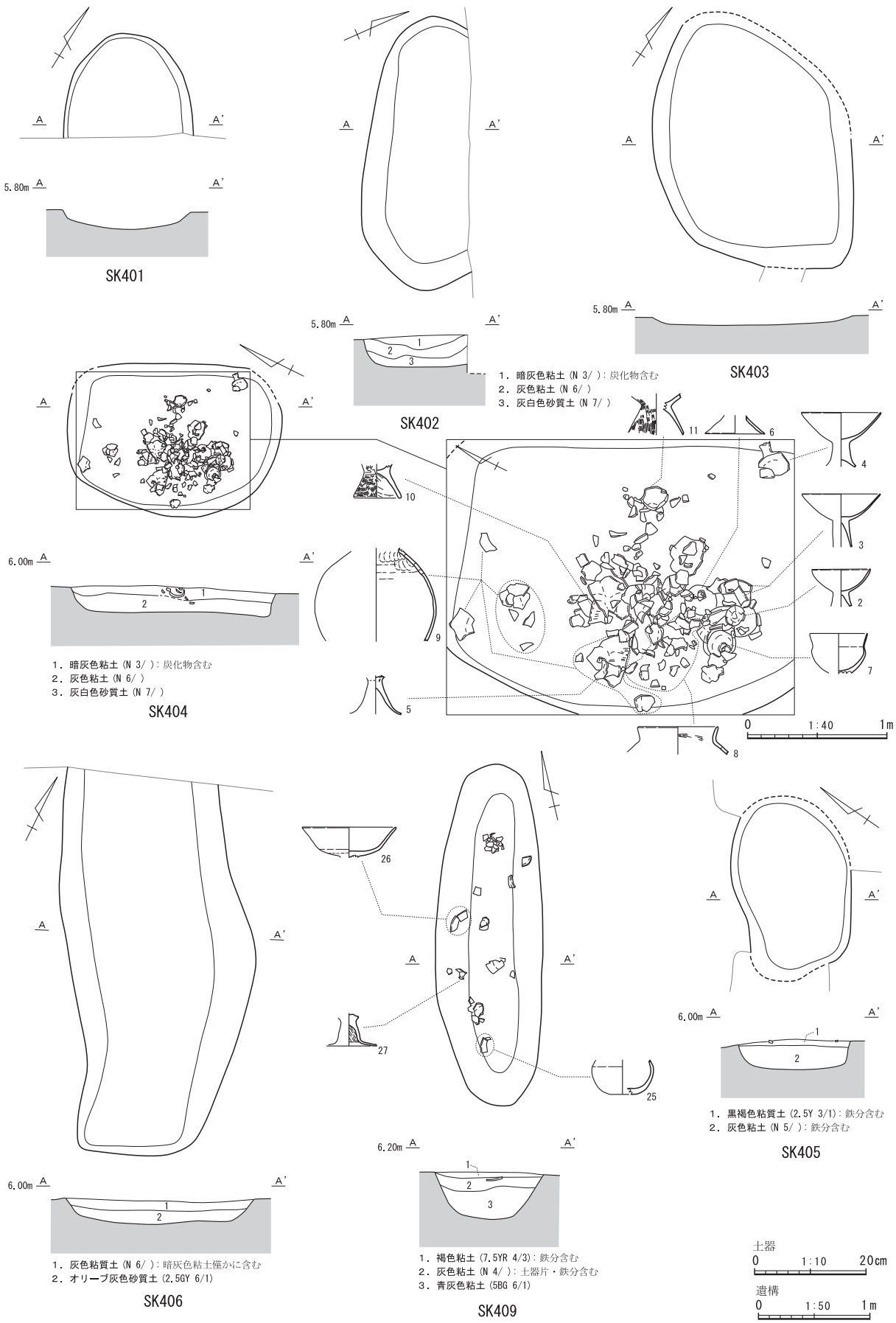
SK405（第９図）　やや不定形な楕円形状の土坑である。後世の柱穴で東西の掘形が壊れている。掘り込みは 25 ㎝程で覆土内より土師器片が出土した。

SK406（第９図）　１区の北端で検出したが、北側は調査区外で切られている。輪郭は長方形に近いがやや不定形である。覆土内より土師器が数片出ている。

2-1 区の土坑は３箇所ある。SK407 と SK408 はＰ・Ｑ -29 グリッド内で隣り合っている。

SK407（第 10 図、図版６）　調査区の南半部で SK408 の南側に位置する。形状は楕円形で長軸は 1.14ｍ、短軸は 0.8ｍの大きさである。30 ㎝程の掘り込みがある。覆土からは土師器が出土している（第 11 図 12・13）。12 はＳ字状口縁甕の口縁部である。胎土は白く雲母はほとんど含まない。13 は伊勢湾岸系と思われる壷の口縁部である。いずれも古墳時代前期後半～末の時期であろう。

SK408（第 10 図、図版６）　SK407 の北側に位置する。溝状に４ｍほどの長さがあり、東端は調査区外で切れている。最大幅は 1.1ｍほどある。土器は溝の覆土内で底面よりもやや浮いた状態で出土した



第９図　SK401・402・403・404・405・406・409 実測図

（第 12 図 14 ～ 24）。14 は土師器の坏である。15 は小型の鉢、16 ～ 19 は高坏の脚部と坏部が混じっている。脚部は下方で外側に大きく開く。19 は胎土が白い。20・21 は土師器の壷である。20 は口縁を折り返し強く外湾する。21 は土師器の壷の底部で、底面には木葉痕がある。また底部から体部にかけて黒斑がある。胎土には砂礫粒子が混じっている。22 は土師器の甕の口縁部である。胎土中には目につくような砂礫粒子が混じっている。23 は土師器の壷の口縁部である。口縁は短く厚みがあり、口唇部がやや外側へ屈曲する。24 は甑である。把手の部分が長めで、口唇部がわずかに外側へ開く。同遺構内では土器のほかに炭化した木材もあった。土器他は廃棄されたような状態で西半分に散在していた。

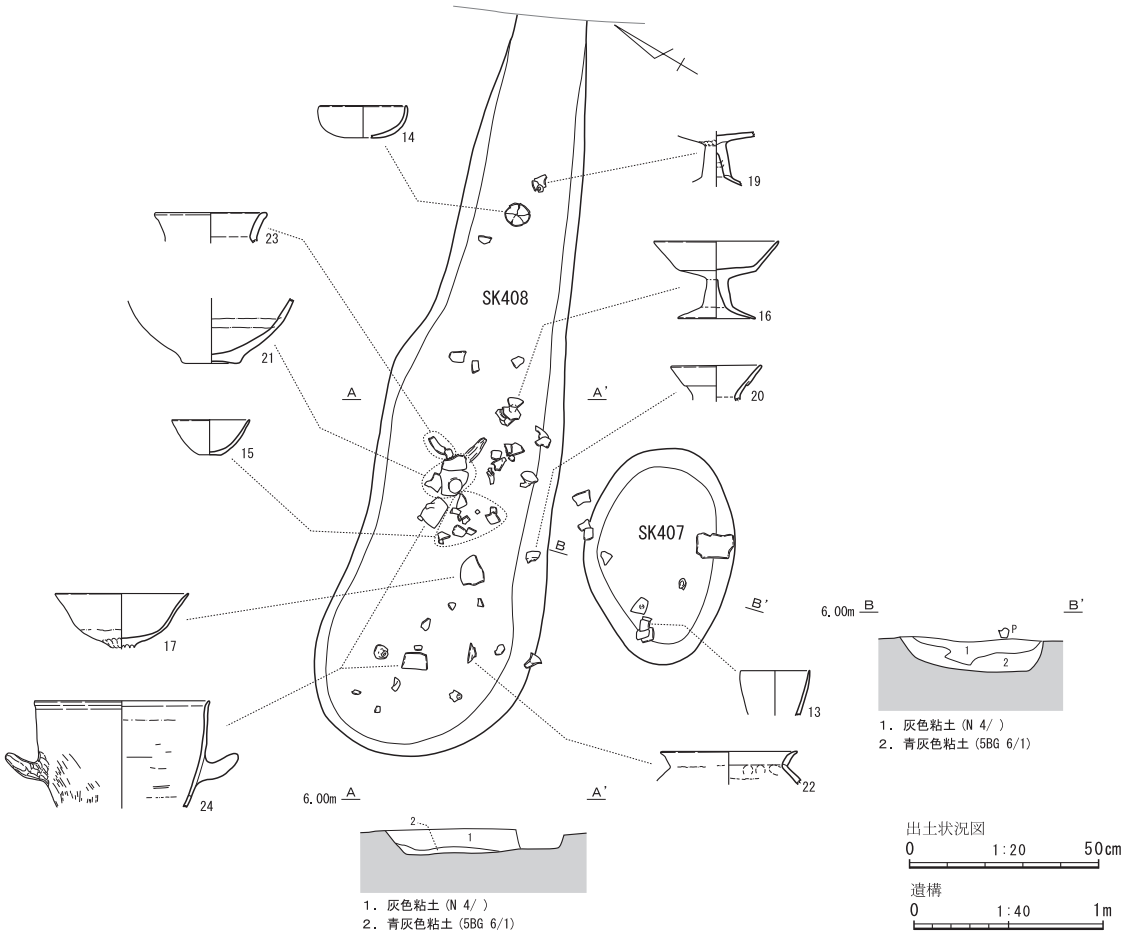
SK409（第９図、図版６）　北東端で検出した土坑で、長さ 2.45 ｍの長楕円形である。掘り込みは 40 ㎝ほどある。覆土内の上層より土師器が出土した（第 12 図 25 ～ 27）。25 は土師器の小型丸底壷の胴～底部である。底部は厚みがある。26・27 は土師器の高坏で、26 は坏部、27 は脚部である。やはり廃棄されたものであろう。

（３）溝・自然流路

溝および自然流路は１区で１箇所、2-1 区で３箇所を検出した。

SD401（第 13 図）　１区中央付近で調査区を横切るように東西方向に約 8.6 ｍある。溝の形状は不定形で、人為的に掘り込まれた溝というよりも自然流路の可能性がある。出土土器は非常に少なく溝中央の覆土内より土師器の器台が出土している（第 15 図 28）。28 は小型器台で、坏部と脚部の中心部は貫通している。脚部の穿孔はない。

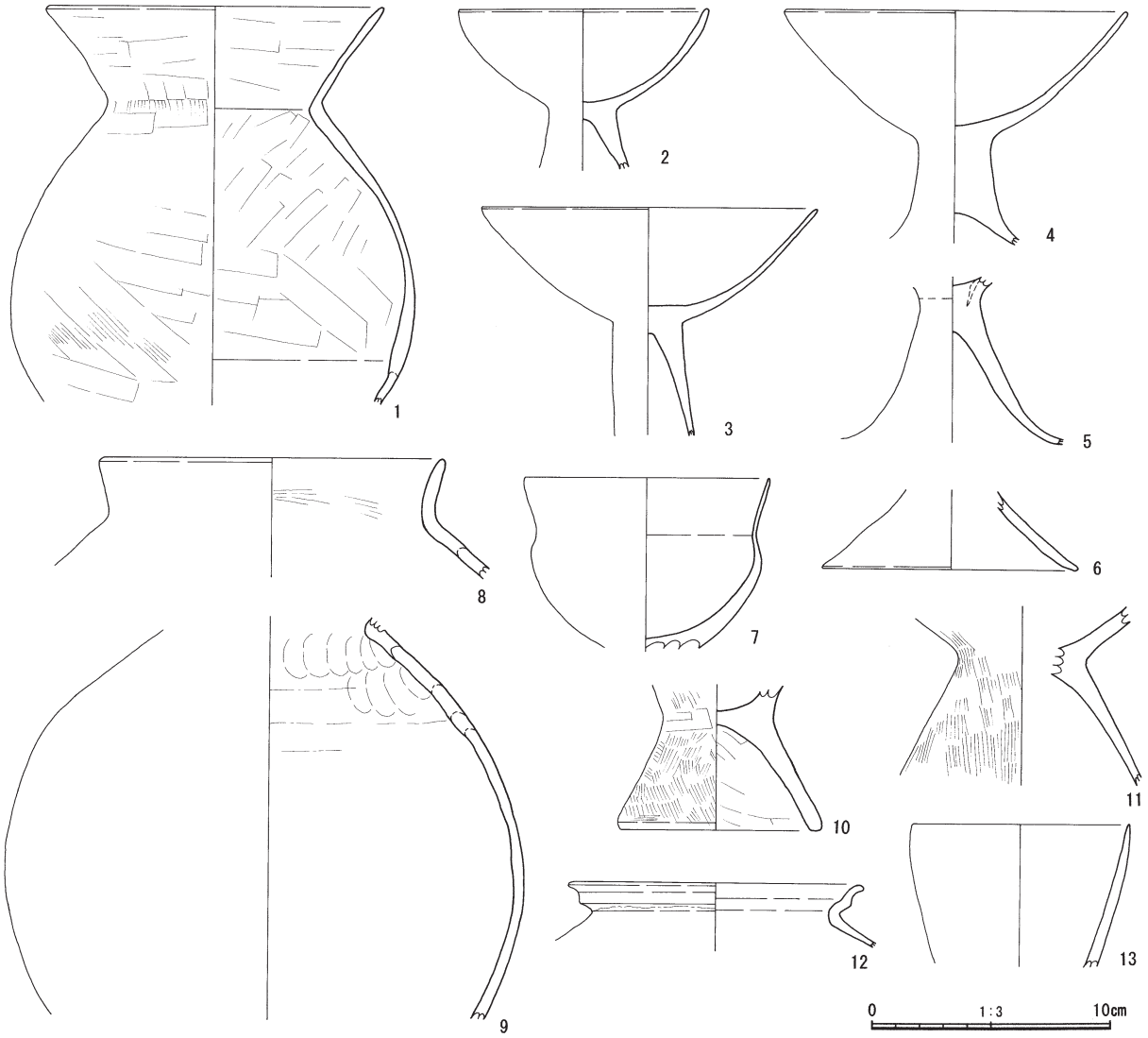
SD402（第 13 図）　2-1 区の南端で検出した。溝の形状は不定形で人為的な要素が見られない。覆土内より土師器片が出土した。



第 10 図　SK407・408 実測図

SD403（第 14 図、図版７・８）　2-1 区中央を北方向から斜めに横切り南西隅へ大きく蛇行する。全長は 22m ほど、幅は最大 3.4 ｍある。堆積層は時間の経過とともに徐々に堆積した跡が見られる。SD403 は上流から下流にかけて、さほど高低差はなく比較的緩やかであったようで、流路の堆積土は砂質土と砂の互層でレンズ状に堆積しており、ある程度の期間は存在し、時間をかけて埋没していった様相が見える。調査範囲が狭小であるため周囲の遺構の存在状況が掴めないが、遺構の形状や堆積状況から見て、人為的に掘削された溝ではなく自然の流路である。出土遺物は上層から下層にかけて土器や木製品、種子等の自然遺物が出土している（第 15 図 **29** ～第 17 図 **86**、図版 40 ～ 42）。木製品や流木の状況からみて、自然に流されたような出土状態である。２～７層は炭化物を含むがほとんど遺物はなく、８～ 11 層にかけて土器や木製品を含んでいる。最下層（12 層）よりもやや上の 11 層で土器や木製品、流木等が多く出土しているが、全体の遺物出土量はさほど多くない。出土土器は須恵器を含まず、土師器を主体としており、年代幅も古墳時代前期末から古墳時代中期の間に納まる。上面で検出した竪穴建物でも５世紀代の土器が出土していることから、SD403 は古墳時代中期の早い段階に埋没していたと思われる。近くに同時期の集落が存在した可能性も指摘できよう。

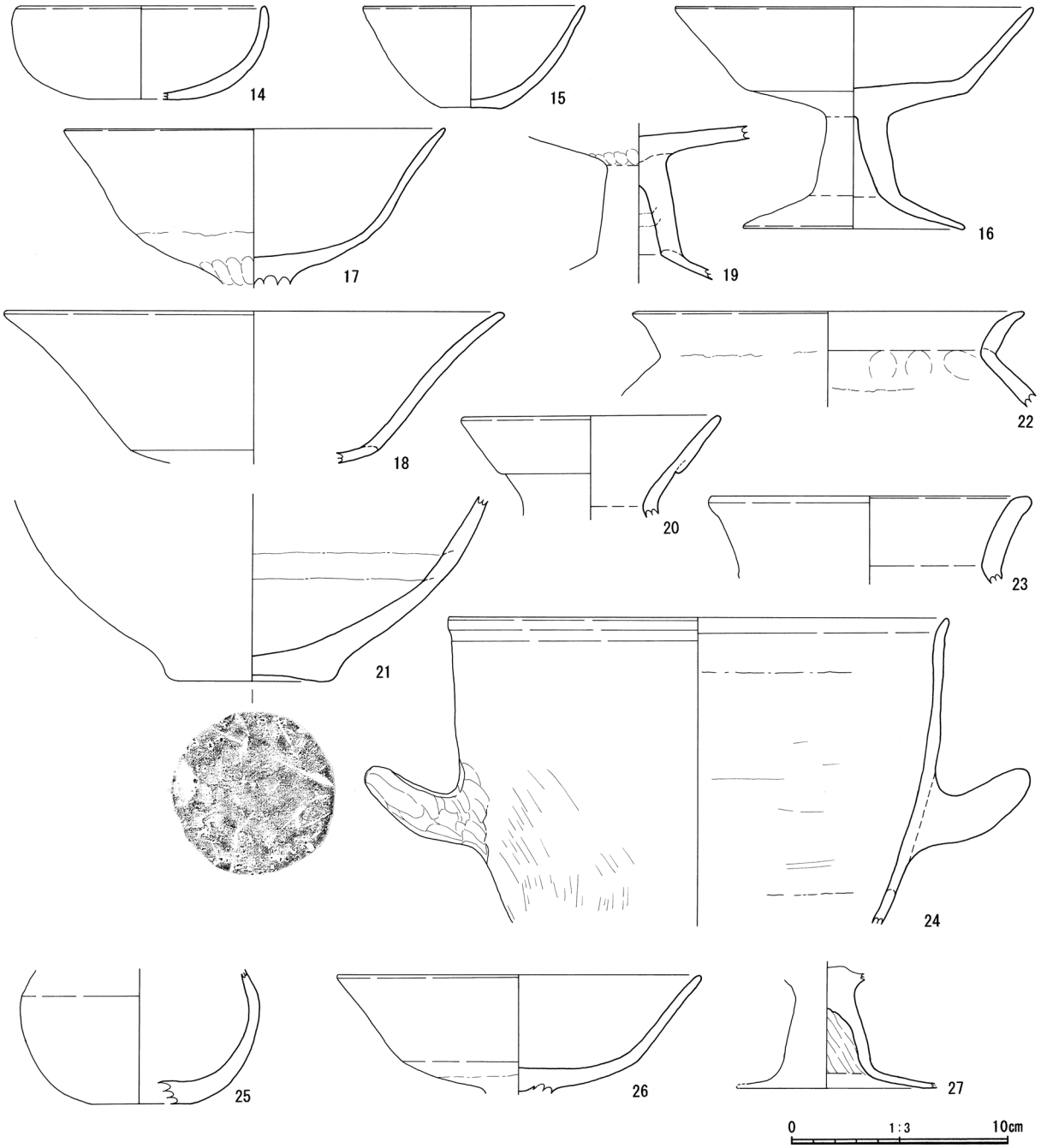
SD403 の出土土器（第 15・16 図、巻頭図版５）は高坏や小型坩、甕等を含む土師器の一括資料としてまとまった出土量がある。弥生土器の小破片が少量混じるものの、主体は土師器群で古墳時代前期末



第 11 図　SK403・404・405・406・407 出土遺物実測図

から古墳時代中期初頭までの時期である。土器は流路の最下層よりもやや浮いた覆土内より出土している。土器の出土位置は特にまとまりがあるということはなく、流路のところどころに散らばった状態であった。

29・30 は小型の坩。30 は内・外面にミガキが残る。31 は小型丸底鉢か高坏の坏部であろうか。32・33 は小型の坏。32 は平底で内面を放射状に磨いている。33 はレンズ状に凹んだ底部で外面の一部に黒班がある。34・37 は器台。34 は小型器台で坏部と脚部の中央が貫通しており、脚部には円形の透かしが２箇所以上入る。37 は小型の器台脚部である。35・36・38 ～ 44 は高坏。35 は小型高坏の坏部である。36 以下は高坏の脚部である。36・38・39・43・44 は透かしをもたない。40 ～ 42 は脚部に円形の透かしが３方向に入っている。他の高坏脚部は裾部が緩やかなハの字状に開いているのに比べ、44 は脚部付け根から円柱状を呈し、裾部がほぼ直角に開くような形状である。



第 12 図　SK408・409 出土遺物実測図

45 は弥生時代の壷である。装飾をもたず頸が長く細い特徴を有する。46・47 は土師器の坩で、46 は口縁部、47 は胴～底部である。内外面とも全面にミガキが施されている。48 ～ 50 は土師器の壷。48 は小型で装飾をもたない。49 は小型の壷。細頸で口唇部がアサガオ状に開く。胎土に小粒子が混じる。

50 は折り返し口縁の大型壷になるだろう。51 は棒状浮文を２条もつ口唇部の破片であるが、壷の口縁部にしては接合部がなく薄い。手焙り型土器の一部の可能性もある。52・53 は受口の口縁をもつ土師器である。52 は外面にＶ字またはＸ字の文様描きがある。精製された胎土だが小粒子が混じる。53 は口縁の外面に工具によるＶ字状の文様描きが施されている。54 ～ 58 も土師器の壷である。54・55 は無紋の壷口縁部。55 は外面に縦横のミガキをもち、口縁の内面も横方向のミガキがある。56・57 は単純口縁で内面の縁に縄文があり、56 は羽状、57 は一方向に施されている。こうした口縁部に縄文を施す壷は古墳時代前期後半に見られる。58 も土師器の大型壷である。壷の肩に半円形の刺突で区画された３段の縄文帯と 8.5 ㎝間隔に円形浮文が２箇所に配されている。胎土は乳白色で小粒子が混じる。いわゆる大廓式土器と呼ばれる壷形土器である。59 は弥生土器の壷頸部である。肩部に文様帯がある。櫛刺突による羽状文様の下に、上下交互に連続した半竹管文が線状を成している。60 ～ 64 も土師器の壷である。60 は無文で口唇部は外側に強く屈曲する。61・63 は単純口縁で無文である。62 は底部から胴部途中まで外面を磨き、最も胴が張り出すところは刷毛目が顕著に残る。64・65 は土師器だが、折り返し口縁の壷か、あるいは高坏の口唇部の可能性がある。64 は壷の頸部に粘土帯を貼り付けたものだろうか。粘土帯は指腹で押し付けている。

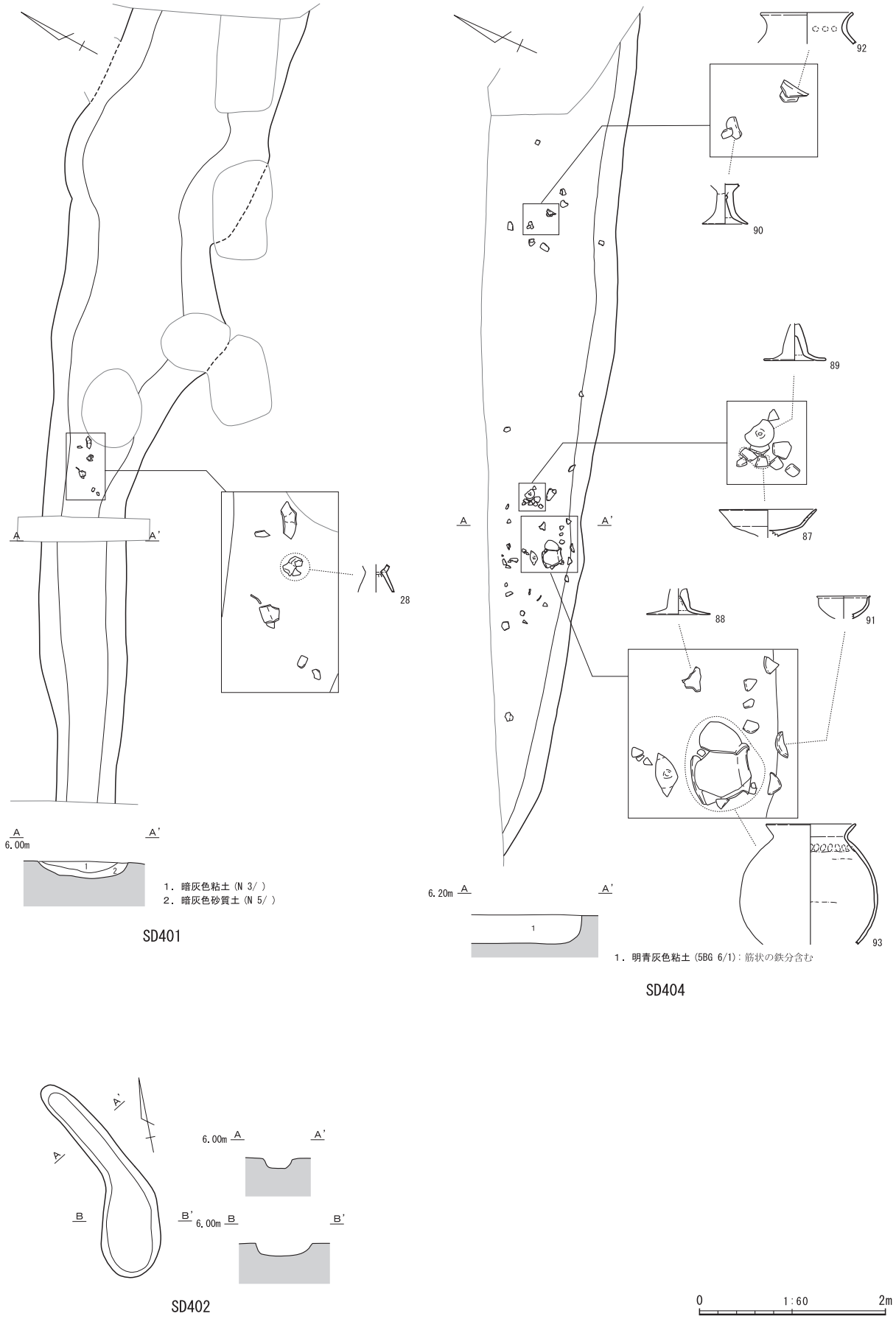
66 ～ 68・70 ～ 73 はいずれも台付甕である。66 は口唇部に刻みをもつ。67 の口縁部内面は横方向の刷毛目を残し、体部内面は刷毛目を丁寧になで消してある。68・70・72・73 も小型の甕だが 67 と同じ内面調整の特徴をもつ。胎土には灰や白色粒子が多く混じる。71 は胎土に雲母が混入するが単純口縁の甕である。

69･74 ～ 77 は土師器のＳ字状口縁甕である。胎土に雲母が多く混じり､非常に薄く焼き締まっている。69 の口縁部と 75 の脚部は胴部片がなく接合しないが胎土が非常に似ていることから同一個体と考えられる。74 も口縁部から頸部の屈曲は直角に曲がる。肩部には横刷毛が外周を巡っている。76・77 は台付甕の脚部だが低めの脚である。

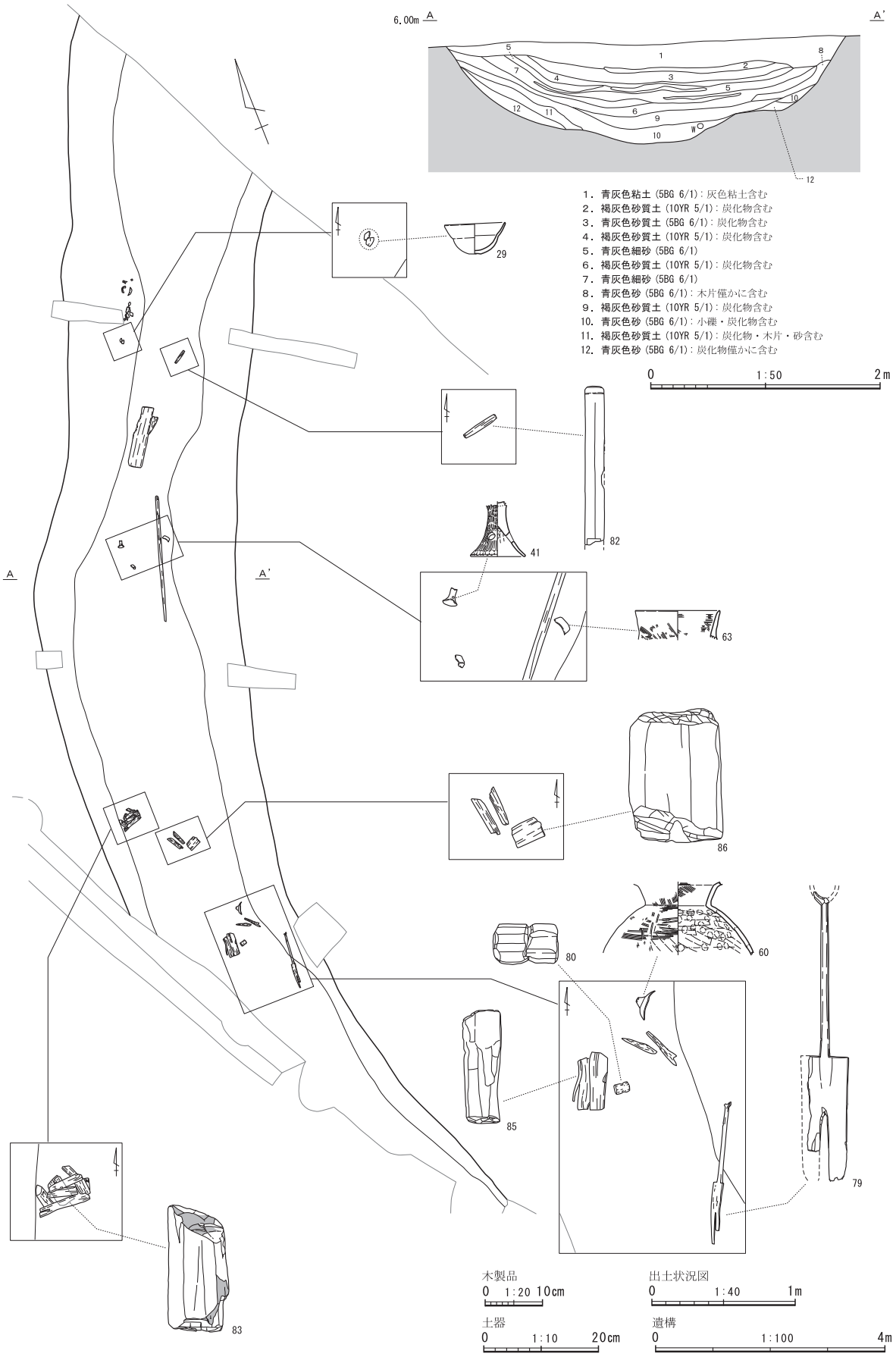
78 は高坏の脚部でやや外側へ張り出してから内側へ湾曲した形状である。胴部と台部の接合部に粘土帯が剥がれたような痕跡がある。胎土には小粒子が混じる。

第 17 図 79 ～ 86 は自然流路 SD403 より出土した木製品である。79 は SD403 の 11 層より出土した一木鋤である。握部と鋤先の一部が欠損しているものの、全体の形状が想定できるほど残りが良い状態である。樹種はイチイガシ（註２）。全長は長さ 101.3 ㎝、幅 14.3 ㎝、厚さ 2.8 ㎝で、握部を有した軸部と二又の身部から成る。軸部は長さ 57.8 ㎝で、上端部には逆三角形で中央を刳り貫かれた持ち手が作り出されている。軸部の断面は円形で身の付け根近くは太く隅丸方形状になっている。鋤身は両側へ真横に開くような肩をもち、長さ 43.6 ㎝で、途中から二又に整形されている。軸部と近い部分は 2.4 ㎝の厚みをもつが、鋤先へ行くほど薄くなる。鋤先は細かく欠けていることからかなり使い込まれた痕跡と見られる。

80 は紡織具の編み台に伴う木錘である。長さ 11 ㎝ほどに切られた自然木の真ん中に切り込みを入れただけの簡素な造りである。両端は面取りして丸く加工されている。材はヤマグワである。ヤマグワ材は静岡県内から出土する木製品に使われることが少ない材のひとつであるが、浜松市恒武西浦遺跡（古墳時代中期）では竪杵、恒武山の花遺跡（古墳時代中期）では鎌柄や木錘、梶子北遺跡（古墳時代末～平安）では鎌柄、角江遺跡（弥生中期～後期）では板状木製品などにもヤマグワ材を使っている。本遺跡の木錘も同じような樹種選択を行っている。



第 13 図　SD401・402・404 実測図



第 14 図　SD403 実測図

81 は建築部材の梯子である。左半部と下端部が欠損し、残存長は 162.4 ㎝、右半分の幅が最大 8.2 ㎝ほど残っている。階段状の高まりは４箇所あり、約 30㎝ 強の間隔がある。上端部角は丸く仕上げてある。木目からして直径 10 ～ 12 ㎝程のツブラジイの丸太から半裁した材より作り出されている。

82 は剣の鞘の一部と思われるスギ材の木製品である。本来、木鞘は同一形状の部品が２枚合わせとなっているものだが、本品は片側だけであり、下部が欠損している。流路底に近いところから単独で出土した。細長い長方形を呈し、上端部は角を丸く削り落としている。表面の上端から 1.4 ㎝下を削り、浅い段差を作ってある。縦方向中央に稜を作り、稜から側面までの加工は丸みを帯びた形に作り出している。裏面は上端より 2.8 ㎝下を山形に浅く刳り、上部は 0.2 ㎝、下部は 0.1 ㎝ほど浅く刳ってある。大きさからして収められていた剣は推定長 25㎝ 以上、幅 2.6 ～ 2.7 ㎝ほどであったと思われる。木鞘は県内古墳から出土した鉄剣等に付着した木質としていくつか樹種同定されている（註３）。樹種同定の結果はスギ（針葉樹）であることがわかっている。

83・85・86 は SD403 の上層より出土している。下層の木製品とは 40 ～ 50 ㎝程の標高差がある。2-1 区第２面では古代の掘立柱建物跡が検出されており、建物の柱穴の下場や礎板がちょうど同じくらいの標高値であることから、これらは自然流路に伴うものではなく第２面の柱穴に伴う礎板である可能性が高い。83・86 はクリ材、85 はツブラジイ材であった。いずれも芯部に近い板状だが整形された板ではない。平坦面には圧痕が見える。２面の柱穴より出土した柱や礎板もクリ材やツブラジイ材であることから、第２面の掘立柱建物の柱穴に伴う礎板であろう。

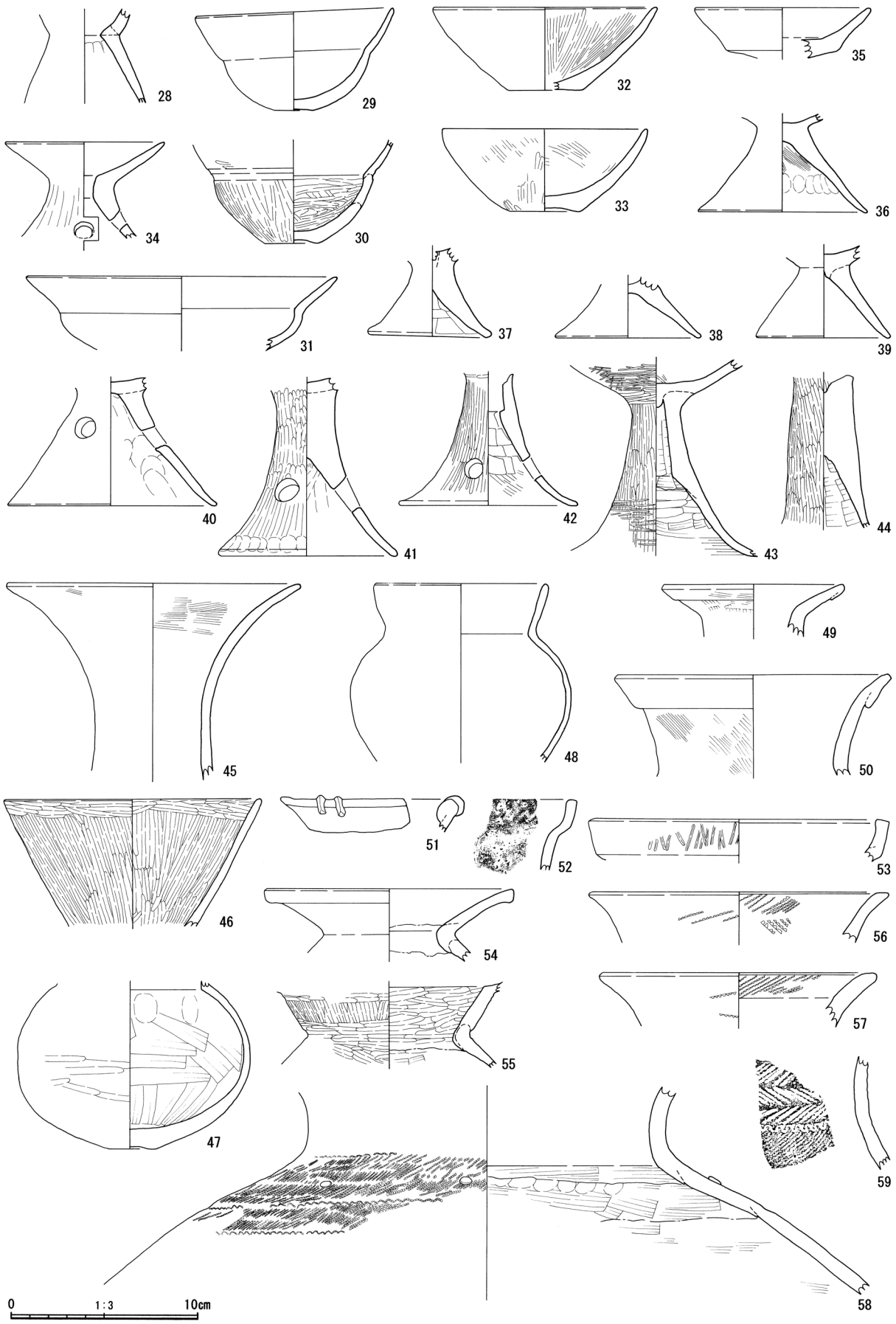
84 は流路下層より出土した。アカガシ亜属の芯持ち材で、表面には一部樹皮も残っている。表裏の一部を平坦に削って面を作っている。作業台のような工具であることも考えられるが用途は不明である。SD403 より出土した遺物は日常的な製品がある反面、器台や高坏などのような非日常的な製品も多く含まれている。

SD404（第 13 図、図版９）　2-1 区の北端で東西方向に走る。遺構は左岸の一部のみで右岸側は調査区外である。溝は９ｍ程あり、幅は1.5ｍ以上ある。溝の形状は直線的で人為的に掘削された可能性がある。覆土からは土師器が出土している（第 18 図 87 ～ 93）。87 ～ 90 は高坏である。87 の坏部は精製された胎土で作られている。88・89・90 は脚部片で各々形状が微妙に異なる。89 は丸く膨らみをもった脚部である。91 は坩で、碗状の形態を持ち口唇部が外側へ屈曲する。92・93 は甕である。いずれも風化により表面調整が見えないが内面の一部に指ナデ押さえが見える。無紋の単純口縁の甕であろう。93 は球胴型で丸味を持っている。出土土器の年代から古墳時代前期後半から中期初頭の遺構と考えられる。

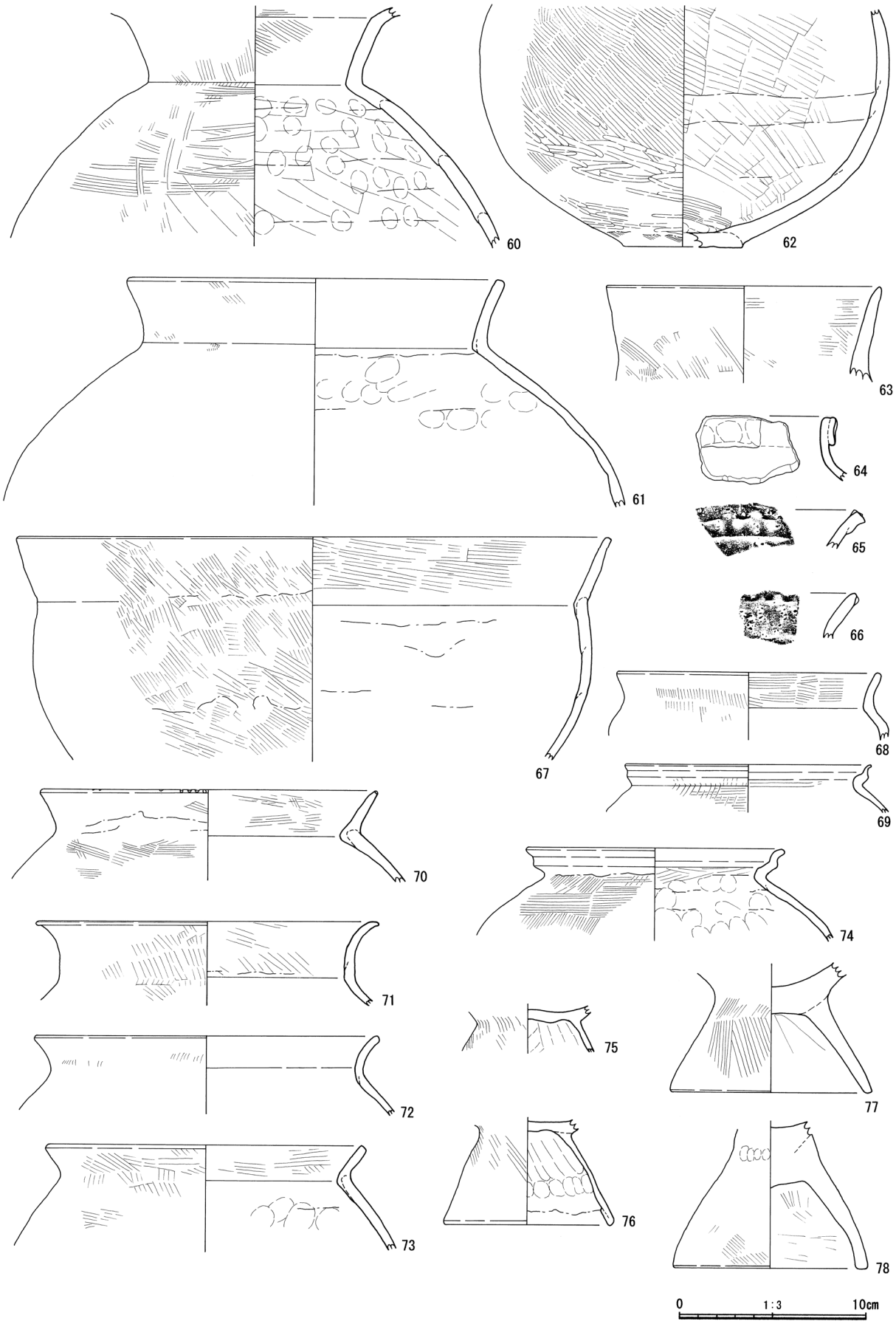
なお、第２面で報告する 2-2 区の溝 SD206 の左岸肩部で立ち木が出ている（図版 3-1）。樹種は不明だが、年代としては古墳時代前期末から中期初頭の時期に相当するであろうと思われる。

（４）水田

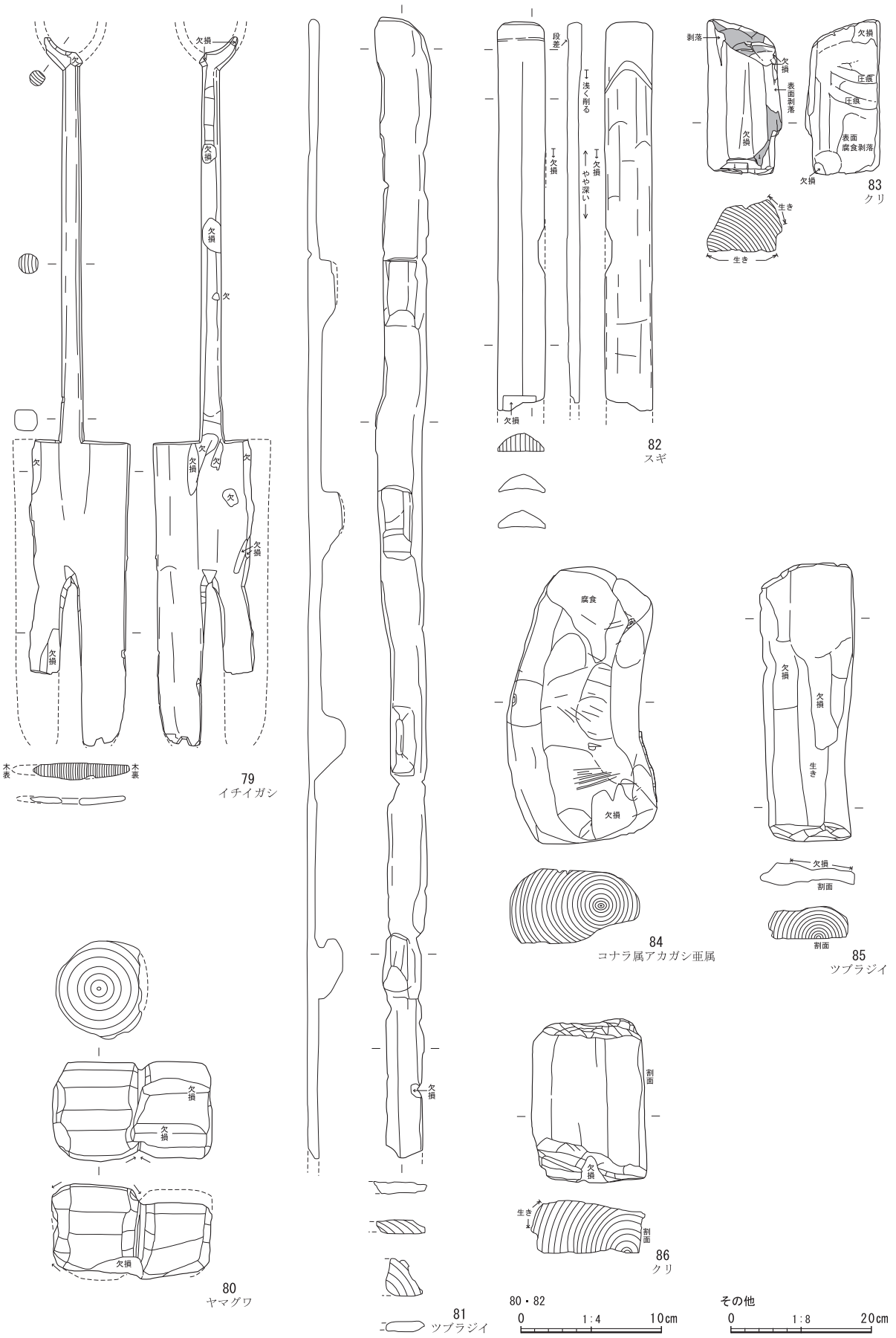
2-2 区の北側以北で大畦畔および整然と配置された小区画水田 34 枚を検出した（401 ～ 434）。畦畔は東西方向で、2-3 区内で２箇所を確認した。Ｌ-21 ～Ｍ-21 グリッド内に位置する大畦畔は長さ 10 ｍ、幅２ｍ程で、東北東から南南西方向である。畦畔の高低差は最も大きいところで 30 ㎝ほどある。一方のＫ-19 ～Ｌ-19 グリッド内、水田 417 と 420 の間の畦畔も 40 ㎝幅程だが大畦畔と考えられる。これら２本の大畦畔は同じ方向性をもち、畦畔間の距離は 23m である。この大畦畔の中を小畦畔で区画した水田が広がっている。水田は南北方向と東西方向の小畦畔で構成されているが、規則性を持って構築されている。調査区が狭小のため、完全な形で検出された田面はわずかしかなかった。水田域の南北総延長は 70 ｍを超える距離があった。東西方向にもさらに広がるであろう。水田域は 3-1 区よりも北側に続いているが、一反田遺跡の範囲となる 3-2 区で検出した水田は、3-1 区以南の水田よりも下層であったことから、別時期のものと考えている。2-2 区から 3-1 区までの水田を被覆する砂層等の堆積物は古



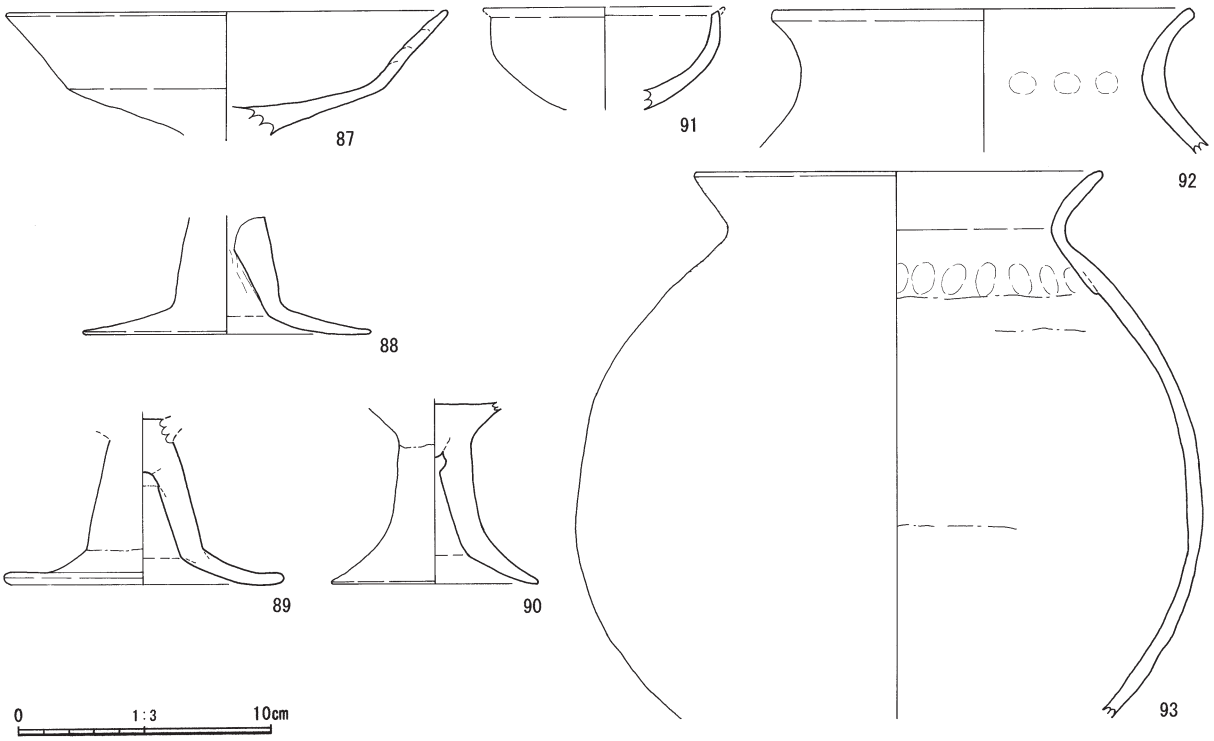
第 15 図　SD401・403 出土遺物実測図 1



第 16 図　SD403 出土遺物実測図２



第 17 図　SD403 出土遺物実測図３



第 18 図　SD404 出土遺物実測図

墳時代中期～後期と考えている。そのため水田が使われていた年代はその直前の古墳時代前期末から中期初頭の年代であろう。水田の継続期間については、開田時期が古墳時代前期末頃、その後古墳時代中期初頭には一旦、廃絶しているだろう。

水田の畦畔は杭列を伴わない盛土畦畔である。田面の標高値は６ｍ前後である。所々に畦畔が途切れている箇所は水口等の痕跡である。2-1 区の南北畦畔はほんのわずかに西側へ傾くが、ほぼ南北方向に沿っている。田面の形状は縦長で、面積は約 12 ～ 14.4 ㎡を測る。2-3 区では調査範囲の南端では畦畔を検出できなかったものの、大畦畔以北では 2-2 区に続く畦畔を検出した。2-2 区の畦畔よりも 2-3 区の南北畦畔の方向は西へ 10 度ほど傾いている。田面の形状は横長の長方形で、面積は 10 ～ 15.2 ㎡ほどある。更にＫ -19 ～Ｌ -19 グリッド付近、水田 417 と 420 の間の畦畔を境に、また方向が変わる。南北畦畔はさらに 20 度ほど西へ傾く。田面の面積は 15.6 ㎡と大きなものもある。3-1 区の畦畔も 2-3 区と同様、南北方向の畦畔が西へ傾いた方向である。田面の面積は 10 ～ 15.6 ㎡ほどある。水田内の包含層内より出土した土器は非常に少なかった。

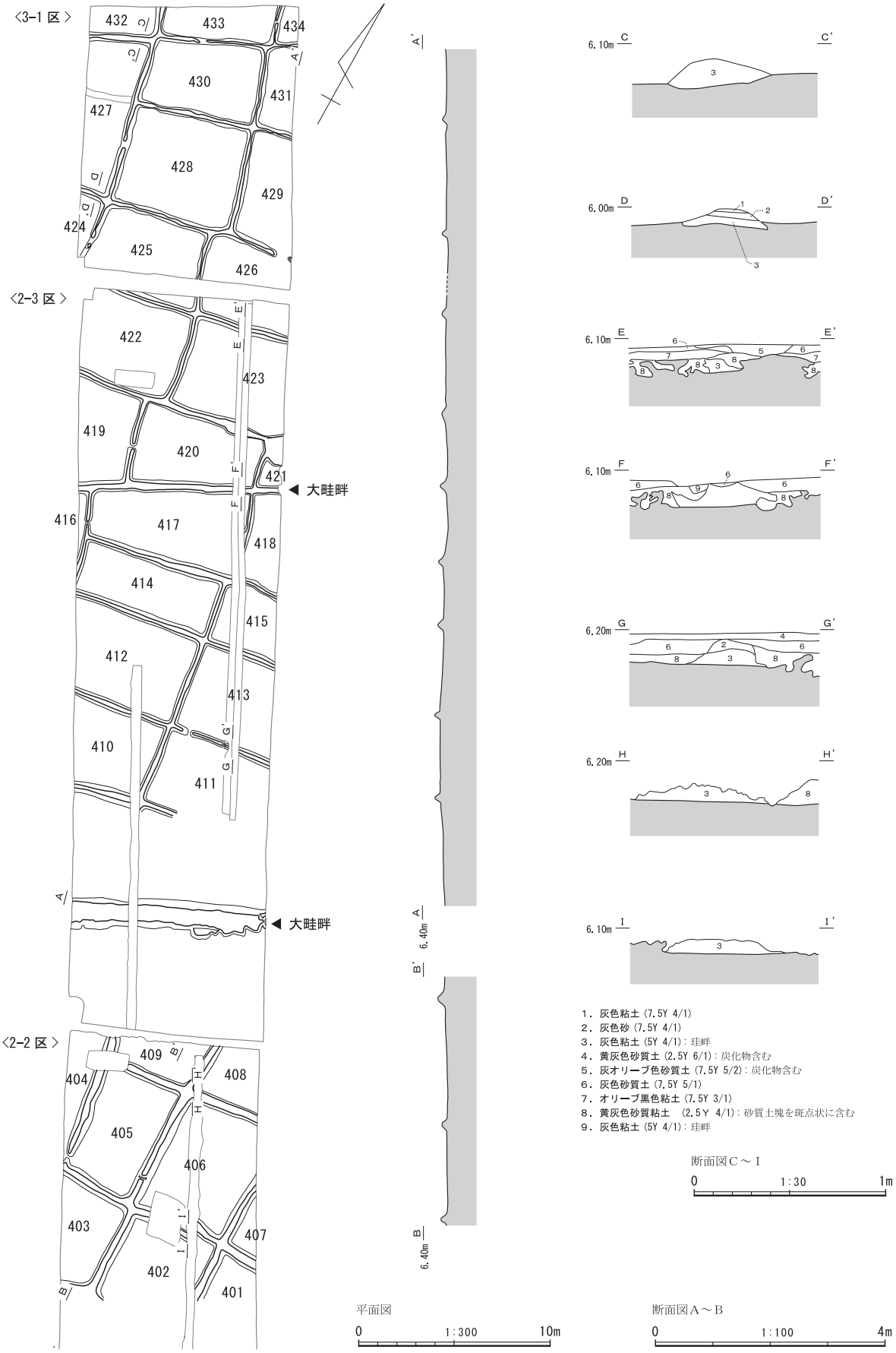
2-3 区の水田 410 と 412 間の畦畔の北側で足跡を確認した（第 20 図）。足跡は全部で 32 箇所あり、左足、右足と両方ある。足の寸法は 18 ～ 25.5 ㎝であった。足跡の方向性は特にない。

水田は水回りを良くするために畦の方向も地形の高低差に左右される。第４面の水田もこうした影響から場所によって畦畔の方向が微妙に異なるのであろう。

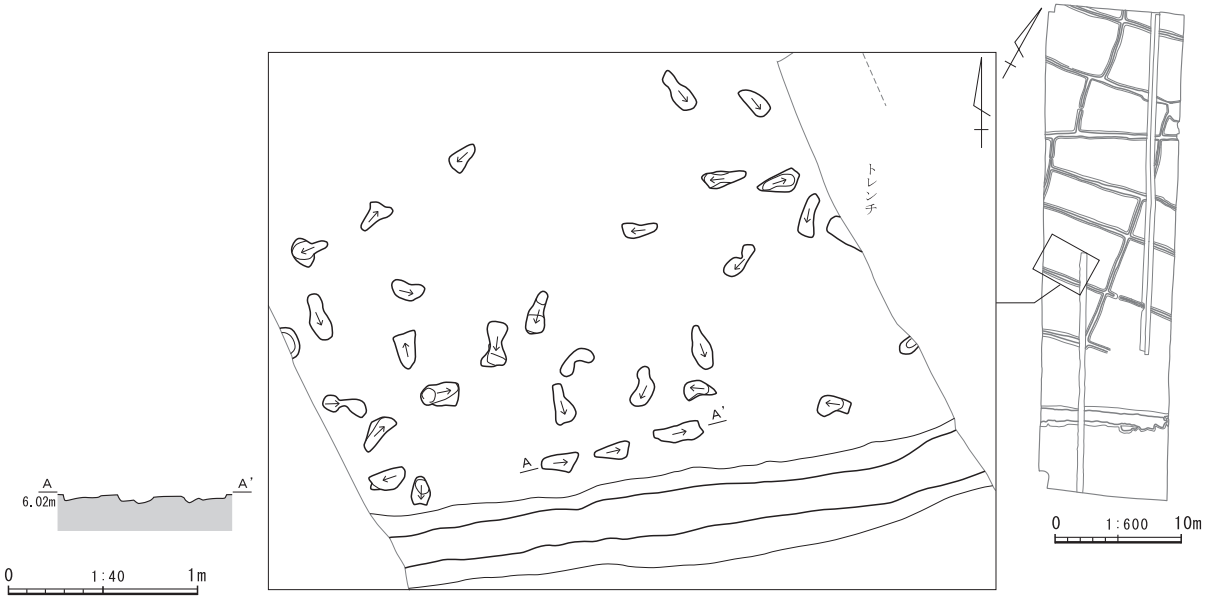
２　包含層出土の遺物（第 21・22 図、図版 42）

94 ～ **110** は第４面直上包含層より出土した土器・土製品・石製品である。第４面では 2-2 区より北側で水田跡を検出したことから出土遺物は少なく、図化した遺物は１区、2-1 区、2-2 区より出土したものである。

94 は鏡を模した石製模造品である。正円形ではなく、やや歪な楕円形の有孔円盤である。石材は板



第 19 図　水田区画実測図



第 20 図　水田足跡実測図

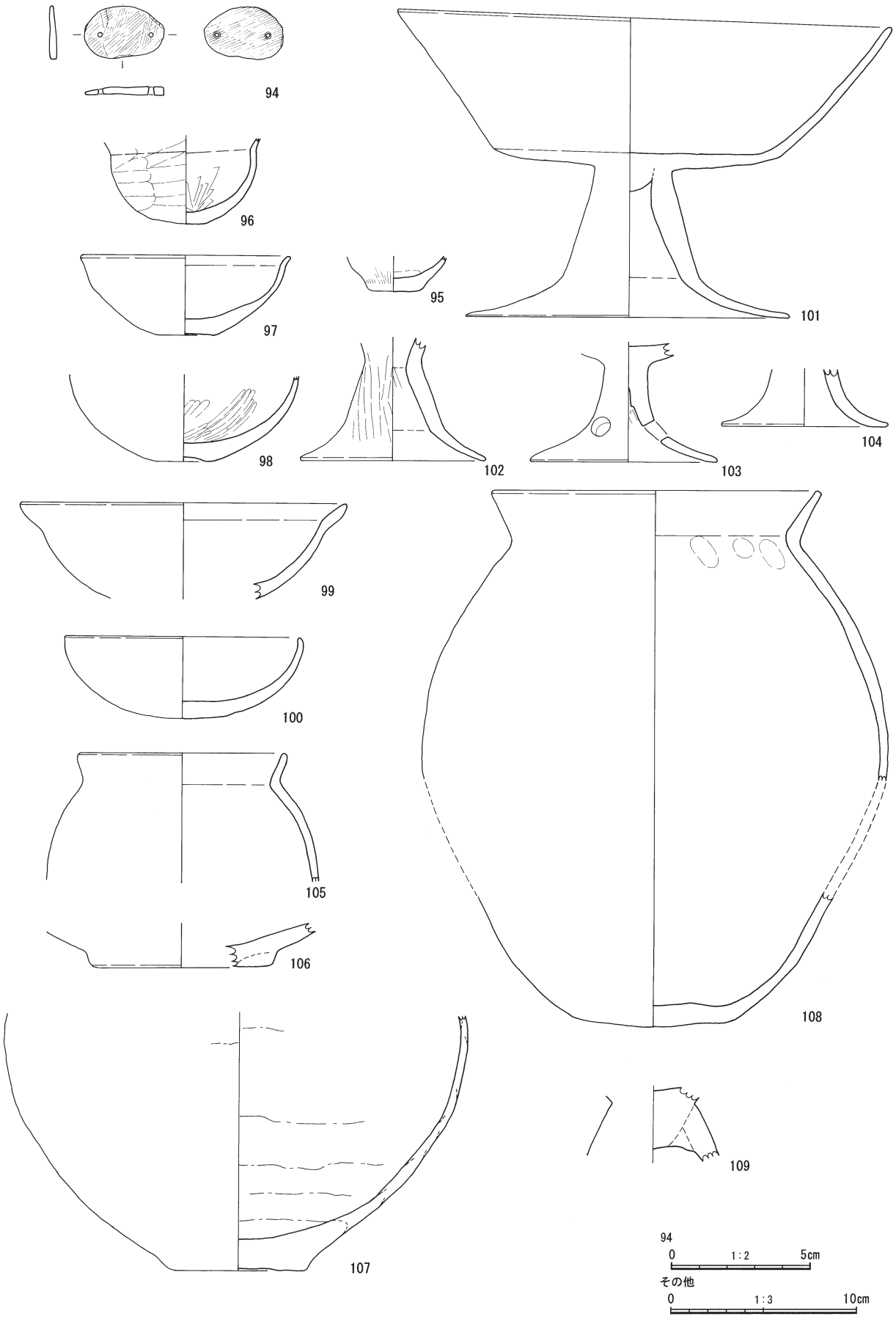
状に剥離する滑石製緑色片岩で、板状に割れた薄い石板を使って作られている。表裏の一部と側面を磨いて、より薄板状にしている。孔は 1.8 ㎝の間隔をあけて横並びに２箇所穿孔し、貫通孔は 1.5㎜の径がある。出土位置はＯ－25 グリッド内の第４面直上層で、SD206 を検出した範囲でもある。また竪穴建物 SH401 がすぐ南側に位置することから、こうした遺構に関連する可能性もあるだろう。有孔円盤は５世紀代の古墳時代の祭祀儀礼に使われることが多い。

95 ～ 108 は土師器である。95 は小型ミニチュア土器の底部にあたる。底部から胴部にかけてハケ調整の痕跡があることから、壷のミニチュアとも考えられる。底部に黒斑がある。96 ～ 100 は土師器の坏等である。96 も小型の鉢である。実用品ではなくミニチュアの可能性が高い。97・98 も小振りの坏である。97 は径 10 ㎝程の坏で口唇部が緩やかに外側へ開く。底部はレンズ状にくぼむ。98 の直径は 12.3 ㎝で、内面に放射状のミガキがある。99 は鉢であろうか。口径は 18 ㎝ほどある。前述した SH401 の真上から出てきたことから竪穴建物に伴う土器の可能性がある。100 は口径が 13 ㎝近い丸底の坏である。口唇部は内側へ傾く。

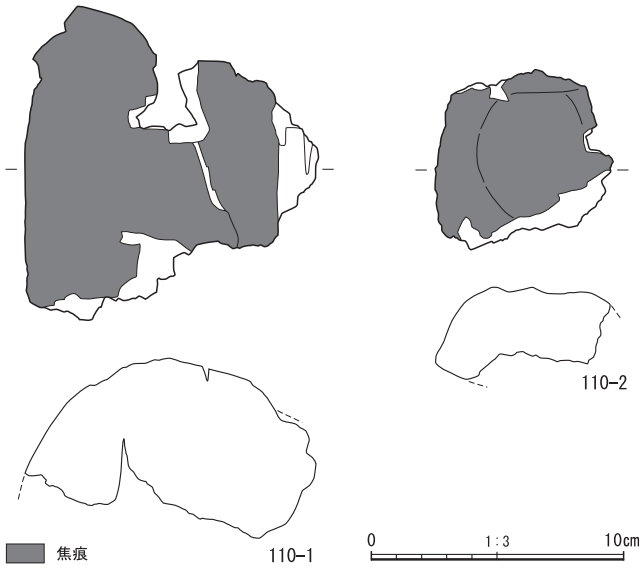
101 ～ 104 は高坏である。101 はやや歪んでいるが坏部から脚部まで残存している。坏部の底が水平に近いことから５世紀代の高坏に近い特徴をもつ。102 の脚部も 101 とよく似ている。表面に縦方向のミガキが残っている。103 の高坏脚部は３方向の円形透かしが入っている。103 も竪穴建物 SH401 の直上で出ていることから同年代と思われる。104 はやや小振りな高坏脚部である。ミニチュア品とも考えられる。

105・108・109 は甕である。105 は小型の甕で 2-1 区包含層より出土した。口縁部内面はナデ消し、胴部内面にはハケ調整痕が残る。108 は胎土に径５㎜以下の粒子が多く混じる。単純口縁で、断面形は「くの字」状となる。108 も竪穴建物 SH401 の直上で出土しており、竪穴建物との関連性もあるだろう。109 は台付甕の胴部と脚部の接合部である。接合部外側には粘土を付け足して貼り付けた痕跡が見えるが付け足した粘土部分は剥がれて無くなっている。

106 ～ 107 は土師器の壷である。106 は壷の底部で 1/2 程残存している。底部から強く外側に開く形状で、底径も 10cm ほどあることから、大型の壷になるであろう。107 は壷の胴部から底部である。径 7.5 ㎝程の平底で、胴部の張り出しは高い位置にある。表面の調整痕は剥離して見えない。胎土には小粒子



第 21 図　第４面包含層出土遺物実測図１



第 22 図　第４面包含層出土遺物実測図２

が混じっている。

94・99・100・102・103・107・108 は 2-2 区南半部で出土した土器・石製品である。2-2 区南は自然流路 SD206 のあった場所にあたることもあり、同遺構から出土した土器の可能性もある。

110-1 と 110-2 は当初、包含層出土としたが、2-2 区南で検出した竪穴建物の直上でまとまって出土した土器群と同じ範囲で出土している。土器群はやや浮いているものの竪穴建物の覆土内より出土した土器と考えている。110-1 と 110-2 焼けた陶土である。胎土に粒子等の混じりはない。近接した位置であったことから同一個体と思われるが接合点はない。当遺跡の竪穴建物は竈跡が確認されていないが、曲面をもっていることから竈に伴う支柱の可能性がある。

包含層出土の土器も古墳時代前期末～中期の範囲に収まる年代である。

第３節　第３面の遺構と遺物

１　遺構

第３面では１区､2-1 区､2-2 区､2-3 区､3-1 区の範囲で遺構面を調査した。遺構は南端の１区では土坑、2-1 区では竪穴建物と土坑、2-2 区では竪穴建物と溝・自然流路、2-3 区と 3-1 区では土坑、溝・自然流路などを検出した。2-1 区の居住域では標高 6.0 m前後、南側の１区では標高 5.85 m前後、北半部の 2-3 区・3-1 区では標高 6.2 ～ 6.3 mである。南西方向に緩やかに傾斜している地形である。また第４面との標高差は 10cm 程度である。

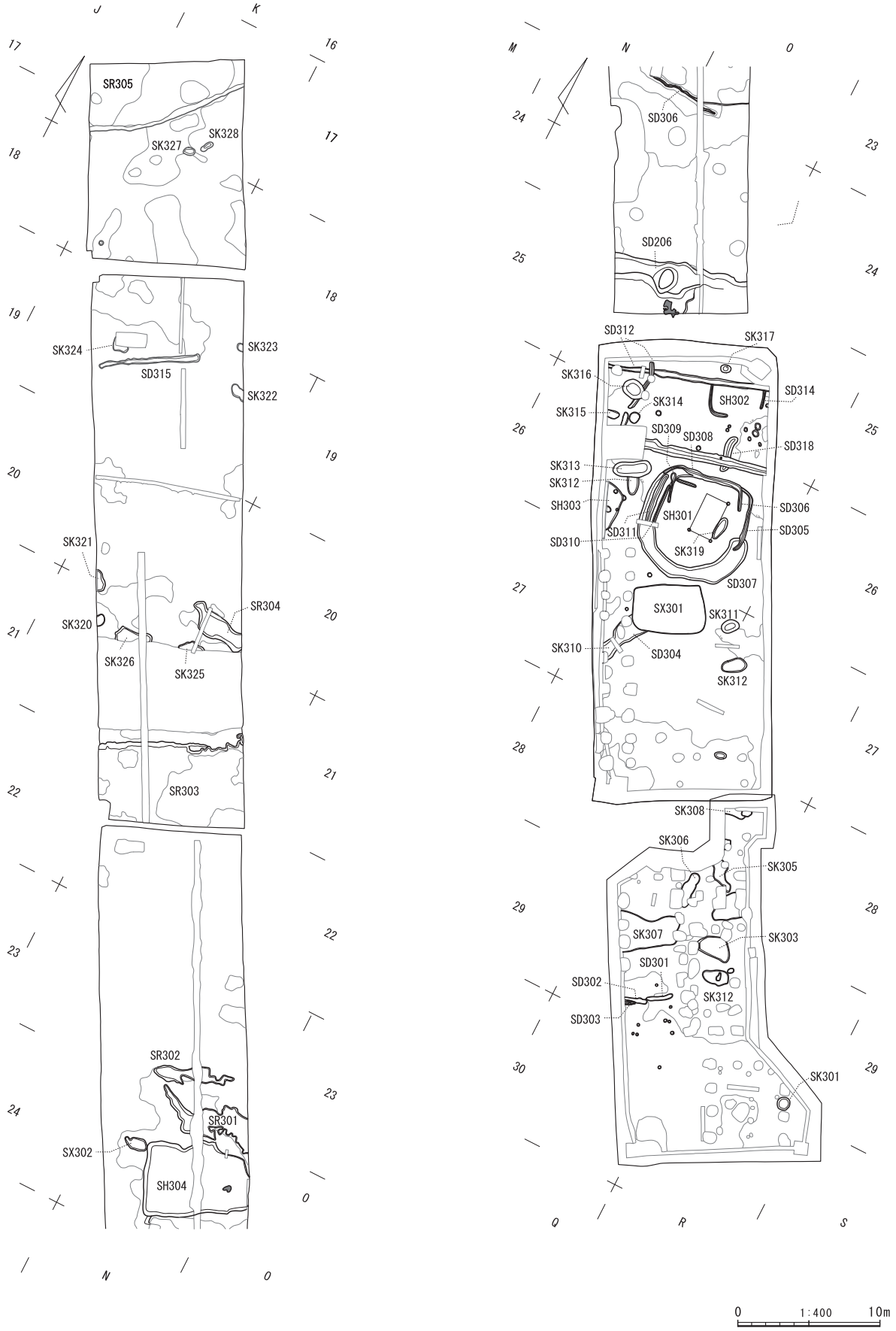
１区と 2-1 区では第２面の遺構によって撹乱を受けているが竪穴建物３軒（SH301 ～ 303）と土坑 19 基（SK301 ～ 319)、不明遺構１箇所（SX301）を確認した。竪穴建物の覆土内より出土した土器は須恵器を伴っておらず、古墳時代中期の土師器の一括資料を得た。土坑内からも古墳時代中期～後期の土器が出土した。

2-2 区では竪穴建物１軒（SH304）と溝 SD206、自然流路 SR301・302・306、不明遺構 SX302 がある。溝や自然流路は規模の大きなものではなかったため、出土遺物も少ない。

2-3 区と 3-1 区では、土坑 SK320 ～ 328、溝 SD315、自然流路 SR303・305 の調査を行った。集落域からは大きく外れた位置であり、遺構も薄いことから出土遺物も数少ない。

（１）竪穴建物

SH301（第 24 図、図版 15）　竪穴建物 SH301 は 2-1 区中央よりやや北側に位置する。ちょうど調査区内に収まる範囲で検出したため、建物の全容がわかる。北半分では竪穴の壁溝と思われる溝が隅丸方形状に廻っている。ただし溝は複数本あることから建て替えが行われて、その都度、溝を切り直している可能性がある（SD305・306・308・309・310 ・311)。南半部は北西側から東側まで幅の広い円形の溝が廻っている（SD307)。溝の幅は１m前後である。こちらは周溝の一部であろう。主柱穴と思われる穴は


SR305
SK327
SK328
SK324
SK323
SD315
SK322
SK321
SR304
SK320
SK326
SK325
SR303
SR302
SR301
SX302
SH304
SD306
SD206
SD312
SK317
SK316
SK314
SH302
SD314
SK315
SD309
SD308
SD318
SK313
SK312
SH303
SH301
SD306
SD311
SD305
SD310
SK319
SD307
SX301
SK311
SK310
SD304
SK312
SK308
SK306
SK305
SK307
SK303
SD301
SD302
SK312
SD303
SK301
0
1:400
10m

第 23 図　第３面全体図

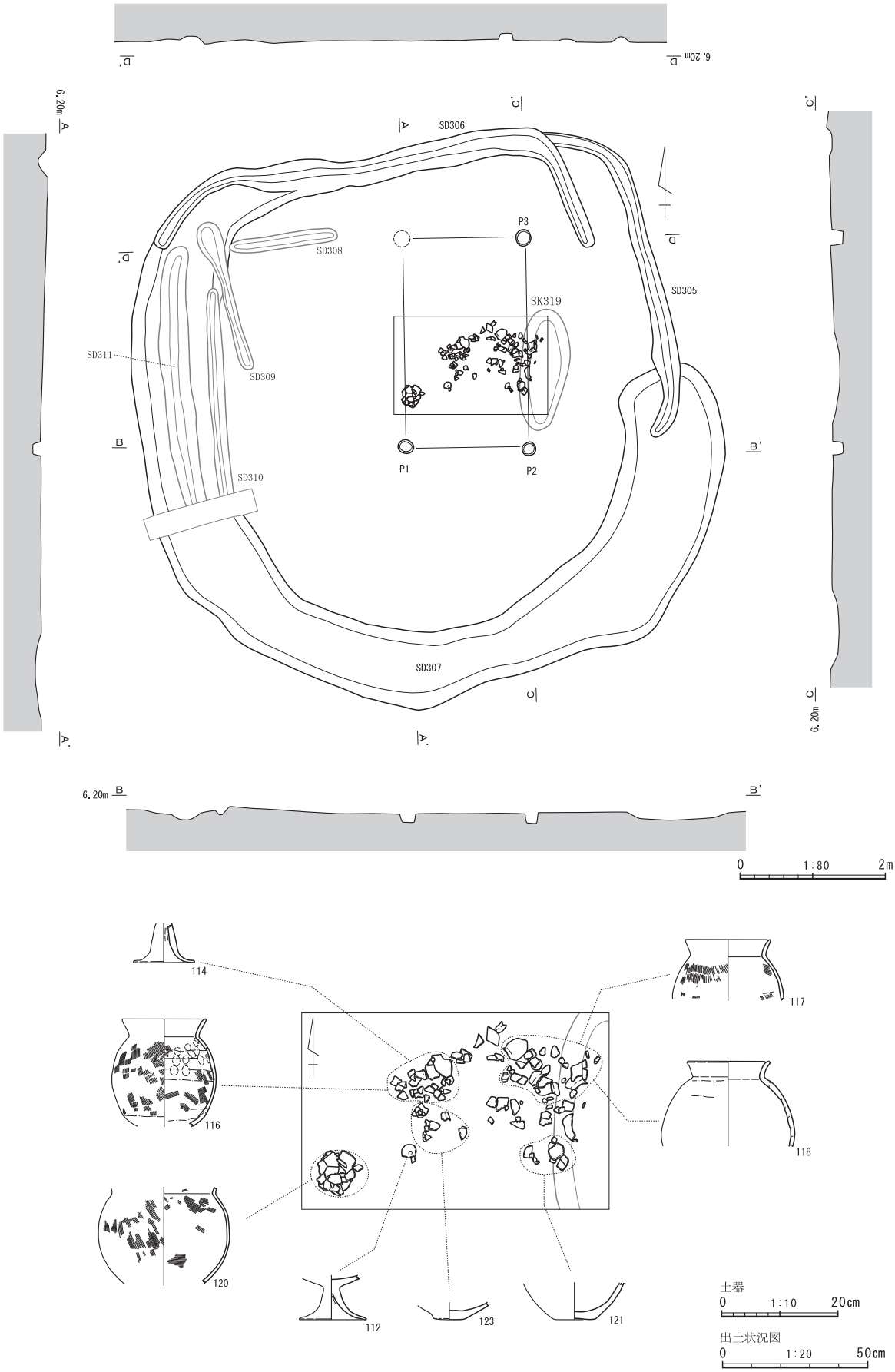
Ｐ１～３まである。北西側の主柱穴が検出できなかったが、おそらく元々は、存在したと思われる。主柱穴の長軸方向はほぼ正北位で、やや南北に長い長方形である。主柱穴の位置は溝に対して必ずしも中央に位置する訳ではなく、やや北東へずれたところに位置する。竈や焼土などの痕跡は見られない。

竪穴建物の主柱穴に囲まれた範囲に複数個体の土器が出土した（第24図拡大図、第25図112・114・116～118・121・123）。竪穴建物の床面は調査段階では確認できなかったが、おそらく土器が出土した位置が床面だったところなのであろう。111～114は土師器の高坏である。111は高坏の坏部である。表面剥離が激しいものの、粘土の継ぎ目にはハケ目がある。112は脚部と坏の一部が残っている。113・114は脚部片である。いずれも表面の調整痕は剥離している。115～121は土師器の甕である。115は壁溝SD307より出土した甕の口縁部である。口縁から胴部にかかる断面形は「くの字」状で、口縁部は厚みがある。胎土は精製された粘土内に径３～４㎜の小礫が混じる。同じく北東側の壁溝から出土した119もよく似た形状をもつことから、同一個体である可能性が高い。116は底部が欠損している。口縁部は厚みをもち、胴部は薄い球胴状である。口縁部の内外面は調整をナデ消し、胴部内外面はハケ調整痕と指押さえ痕がある。作りとしてはやや雑な感がある。口縁部内外と肩の一部に赤彩色が残っている。これも117と作りや直径の寸法が似ていることから同一個体の可能性がある。118も厚みのある口縁部と球胴状の体部をもつ甕である。表面は剥離して調整痕は見えないが、内面の輪積み痕は残っている。120は甕の胴部の一部である。内外面にわずかにハケ調整が残るが表面の風化が著しい。胴部は丸みをもつ。口縁部の形状もおそらく「くの字」状になるであろう。主柱穴の内側で出土した土器群の南西端に位置している。121は底部がくぼんでいる。底部から斜めに立ち上がる形状であることから甕の底部と思われる。122・123は壷の底部である。122の底もくぼんでいる。SD307の覆土より出土している。123は平底の底部である。高坏や甕の形状からみて５世紀代に属する土器群であろう。

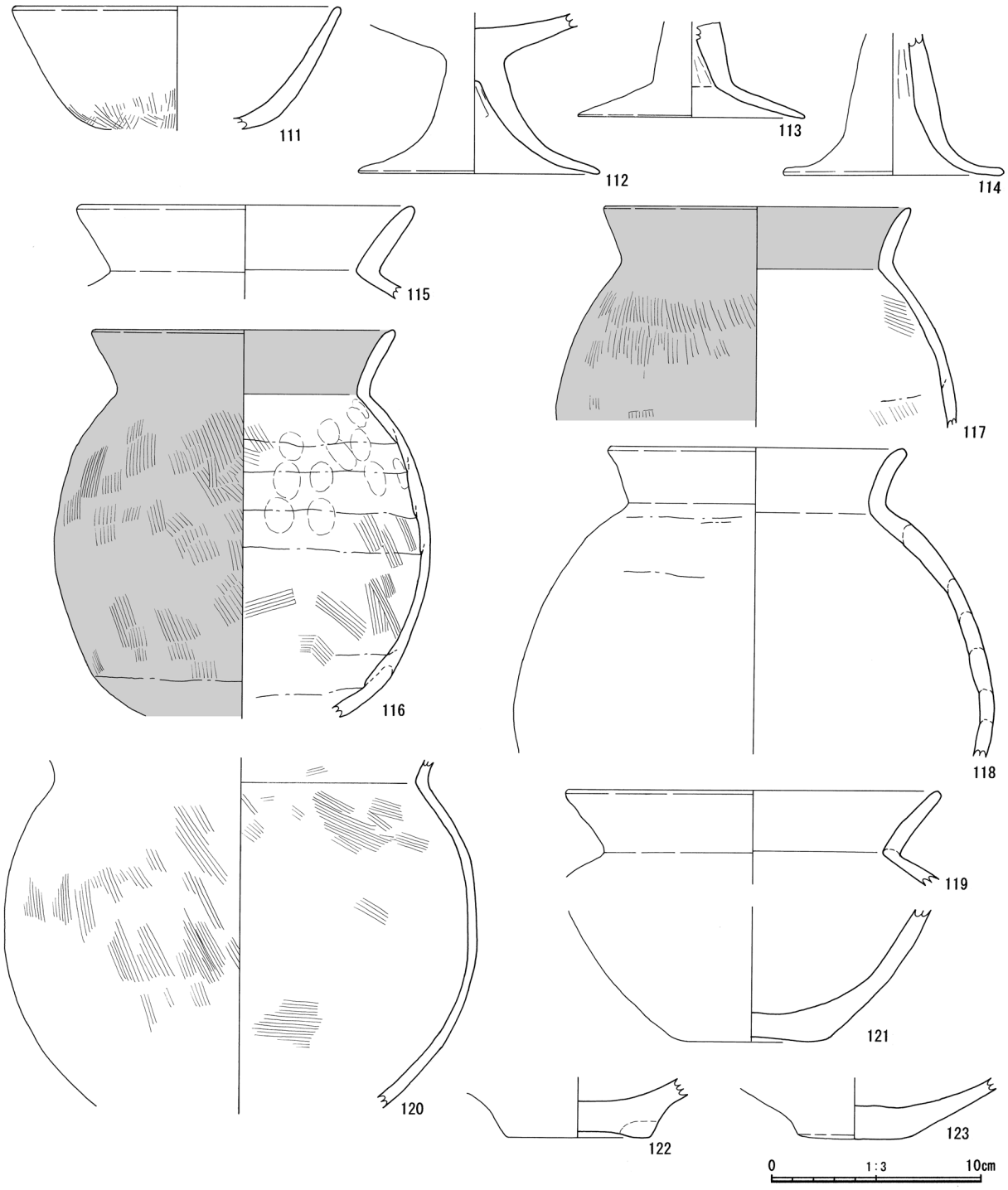
竪穴建物SH301より出土した土器群は高坏と甕の比率が圧倒的に高い。通常の竪穴住居跡から見つかる土器とは明らかに様相が異なる。更に言えば生活感のない土器群といえる。甕には使用されたような焼け焦げた跡もなく、建物に竈や焼土が見つかっていないことから、この竪穴遺構は日常的に居住していた建物ではない可能性がある。

SH302（第26図、図版15・16）　2-1区の北東隅で見つかった竪穴建物である。前述のSH301よりも５ｍ程北側に位置する。見つかっているのは壁溝と思われる幅20㎝前後の溝が南側半分ほどで、北側は調査区外である。溝は方形に廻っているが南東部分の溝は途切れており、東側と南西側の溝だけが残っている状態である。南北方向の規模は解らないが、東西方向は3.8ｍ程の長さがある。建物の主軸は北西に20°傾く。主柱穴はなく、竈や焼土も見つかっていない。建物に伴う出土品は建物の南東端で土器がまとまって見つかっている。土器は標高6.13～6.16ｍ付近で出土していることから、もともとの床面はこの辺りであったと考えられる。

SH302より出土した土器は第28図124～130である。124・125は土師器の高坏である。124は坏部から脚部まで残っている。坏部底の稜線がはっきりとしている。125は脚部のみだが124とほぼ同形である。126は径10㎝程の小型坏である。底部は厚みがある。127は小型壷の胴部であろう。明瞭ではないが平底になっている。128は甕である。口縁部と胴～底部の接合点はないが同一個体である。口縁部は「くの字」状、胴部は球形胴、底部の中心は窪んでいる。外面にハケ調整痕がわずかに見える。竪穴建物SH302では甑が２個体分出土している（129・130）。甑は竪穴建物の南東壁溝に近いところに破片がまとまっていた。129は胴部が下方へ向かって幅を減じ、底部付近で内側に窄まる。把手は細身で長い。130は甑の下半部のみである。内外面共に粗いハケ目が残っている。底部孔の直径は7.5㎝である。甑の胴部は直線的ではなく、底に近いほうで径が小さく窄まる。このほか覆土内からは複数個体の土師器片のほか、軽石が１点出土している。



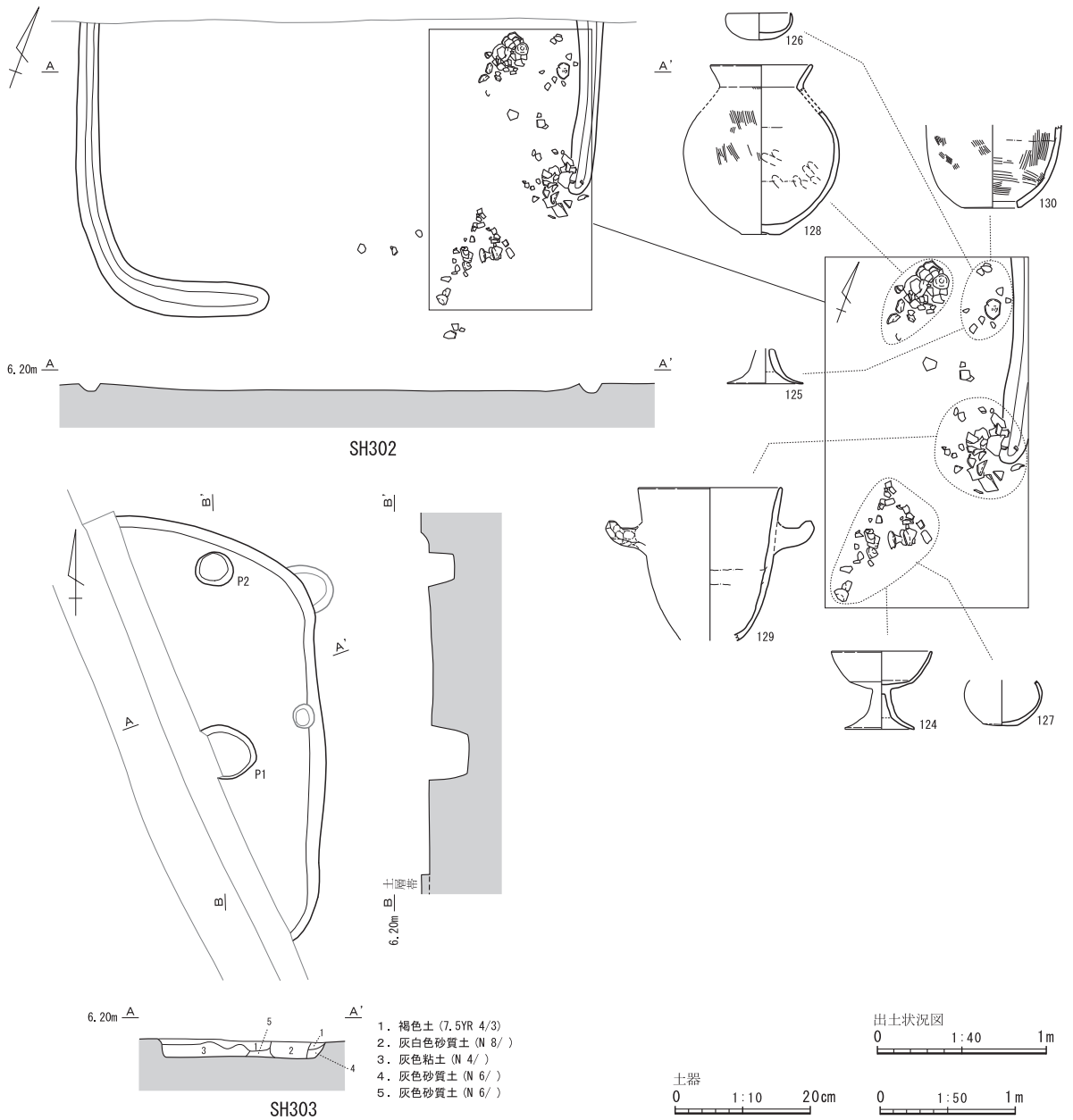
第 24 図　SH301 実測図



第 25 図　SH301 出土遺物実測図

本遺構は甑などの日常生活品が出ているものの、竈の痕跡がなく、高坏などが複数個体見つかっていることから、実際に居住していた建物かどうかは疑わしい。ただし一括資料としては甑をはじめ、壷や甕、坏、高坏が揃っている。土器の年代は５世紀末～６世紀初頭に属する土器群である。

SH303（第 26 図、図版 16）　2-1 区西壁沿いで検出した。建物は SH301 の西隣に位置し、SH301 の壁溝からは 1.5 m程しか離れていない。見つかった竪穴は建物の北東部分で、南北の一辺は３m以上の規模があったと思われる。竪穴の形状はおそらく隅丸方形で、標高６mの検出面からは 13 ㎝程の掘り込みがあった。さらに竪穴内には柱穴が２箇所見つかっている。Ｐ１は径 50 ㎝、深さは 30 ㎝程ある。一方、

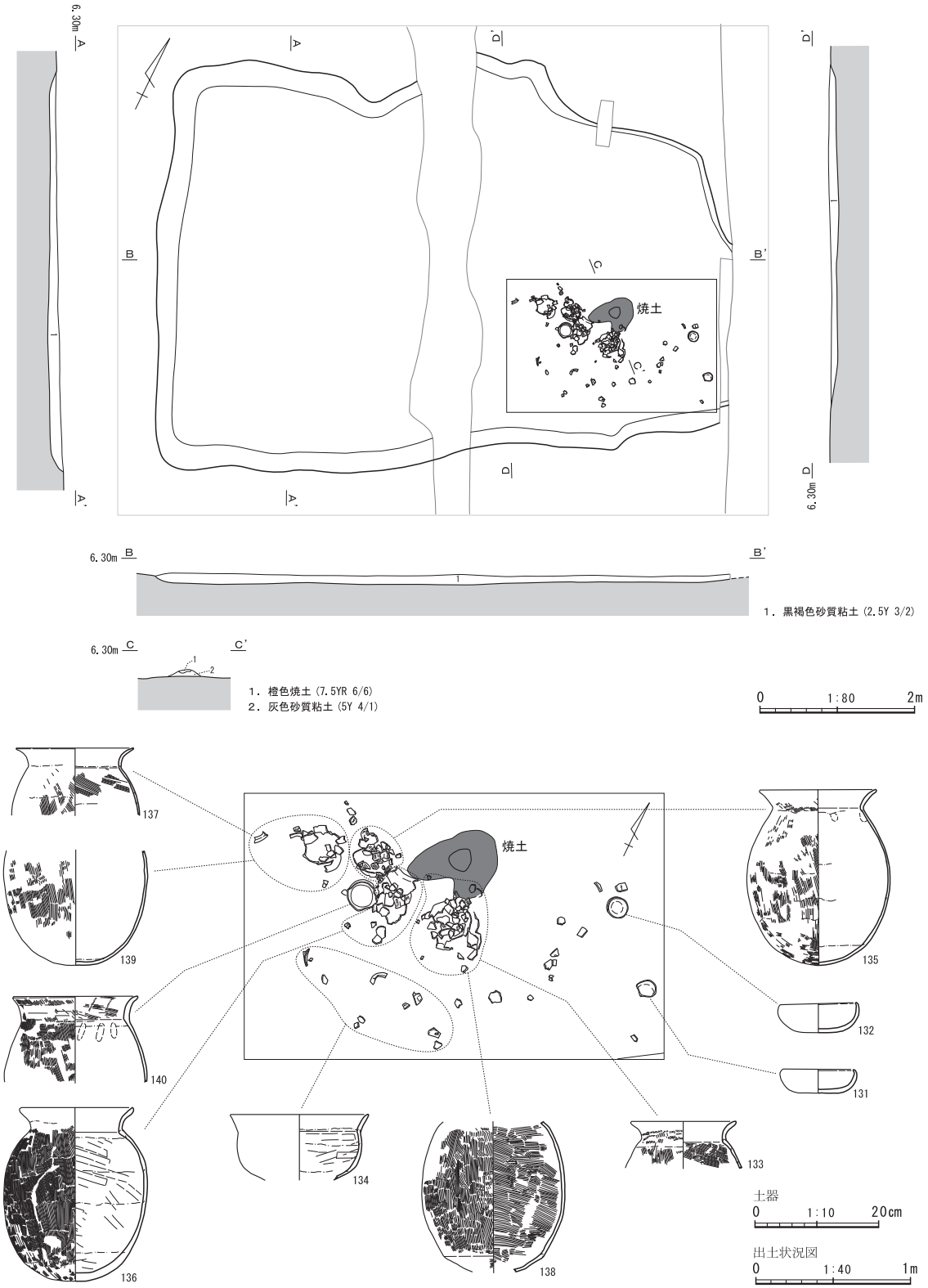


第 26 図　SH302・303 実測図

Ｐ２は径 30 ㎝、深さ 20 ㎝と一回り小さく、北壁に極めて近い位置であることから主柱穴として良いかどうか疑問が残る。仮に柱穴だとすれば主軸はほぼ正北緯である。SH301 の主軸と同じであることから、同時期に共存していた可能性もある。出土土器は極めて少なく、覆土内に土師器片が数点出土したのみである。

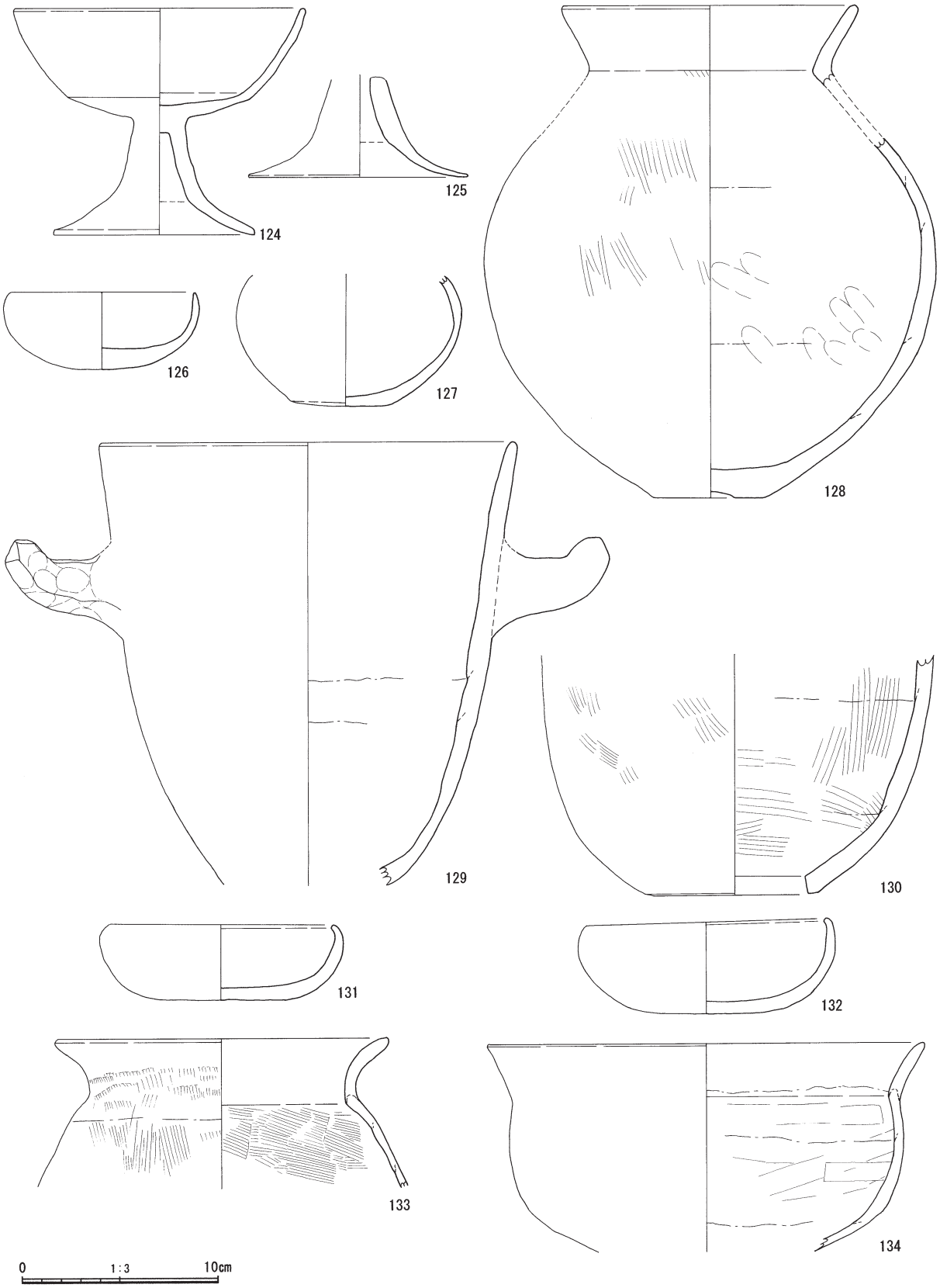
SH304（第 27 図、図版 16・17）　2-2 区のほぼ中央で検出された竪穴状遺構である。南北 50 m、東西 70 m強の横長で、掘り込みは 10 ㎝程度しかない。形状も不定形な長方形で、柱穴や壁溝など建物に繋がるような遺構はない。主軸は西へ 20°程、傾いている。竪穴の南東隅では焼土と灰色粘土の範囲を検出し、その周囲から土器群が見つかっている。焼土の西側には土師器甕が６～７個体、鉢が１個体出土した。焼土よりも東側の壁沿いでは坏が２個体出土した（第 28 図 131 ～ 134、第 29 図 135 ～ 139）。甕の底部には火を受けた痕跡があり、ここで煮炊きをした可能性が高い。

131・132 は土師器の坏である。いずれも体部は丸みを帯び、口唇部は内側に入り込むような形状で



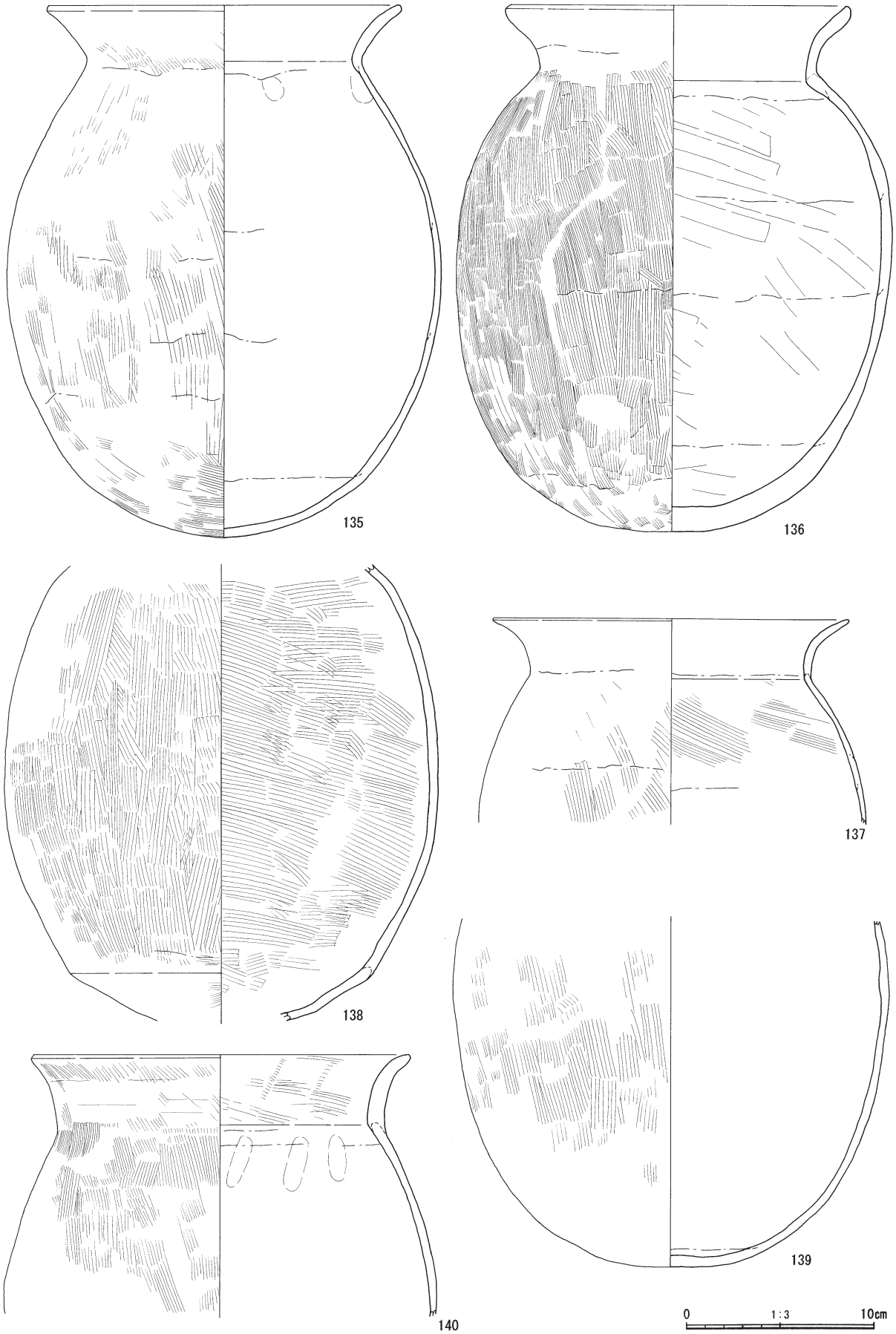
第 27 図　SH304 実測図

ある。131 の直径は 11 ㎝強、132 は直径 12 ㎝ほどある。133 は甕の口縁部から肩部の破片である。口縁部は「くの字」状の形状で、ハケ目はナデ消されている。甕の肩には外面には縦方向のハケ目、内面には指押さえと横方向のハケ目がある。胎土に微量の雲母が混じる。134 は鉢である。復元口径は 22.1 ㎝、高さは 10.6 ㎝である。精製された粘土を用いて作られている。135 ～ 140 は土師器の甕である。135 は「く



第 28 図　SH302・304 出土遺物実測図 1

の字」状の口縁部をもち、やや長めの球形胴で、底部は丸底である。器高は 28.2 ㎝である。非常に薄い作りである。面調整のハケ目は底部にまで及んでいる。底部から胴部にかけて火を受けている。特に



第 29 図　SH304 出土遺物実測図２

底部～５㎝までの範囲は最も火を受けており、器面が荒れている。一部、火を受けていない範囲が帯状にあるのは竈に設置された痕跡かもしれない。136 も焼土のすぐ脇から出土した甕である。口縁部はやや立ち上がってから外側へ屈曲し、内外面ともに調整痕はナデ消されている。胴部は球形胴で、底部は丸底で、やや厚みがある。胴部外面は全面ハケ調整痕がある。内面は板ナデだろうか。外面は底部から肩部まで火を受けており、特に底端部と胴部中央が黒く煤けている。胴部の煤は片面だけ酷く、反対面はさほど酷く煤けてはいない。竈へ設置された位置によって煤の付着具合が違うのだろうか。137 も甕の口縁部である。口径は 18.6 ㎝ある。内外面共にハケ調整痕がある。表面が剥離しているため煤などは見えない。138 は甕の胴部で口縁部と底部は欠損している。底部近くで弱い稜があるものの、丸底になるであろう。外面は縦方向のハケ、内面は横方向のハケで、内外面とも細かいハケ目が全面に残り薄く仕上げてある。底部から２㎝程上まで火を強く受けて黒く変色し、表面が劣化している。139 も甕の胴部～底部片で、長めの球形胴に丸底の形状である。外面はハケによる面調整で、内面は調整痕をナデ消してある。底部は火を受けて黒く煤けている。140 は口縁部から胴部までの破片である。口径は 20 ㎝である。口縁部はやや立ち上がり気味で口唇部が外側へ開く。口縁は内外面ともハケ目がナデ消されている。外面は縦方向のハケ目がある。胴部内面も調整痕はナデ消してある。胎土には微量の雲母が混じっている。

本遺構は出土した土器の年代から５世紀末から６世紀前半頃と考えられる。

（２）土坑

土坑 SK301 ～ 308 は１区にある。

SK301（第 30 図）　１区東端で検出した円形土坑である。覆土に炭化物を含むが遺物は出土していない。

SK302（第 30 図）　１区中央に位置する不定形な土坑である。覆土内に土師器の小片を含む。

SK303（第 30 図、図版 18）　SK302 のすぐ北側に並ぶ不定形な土坑である。後世の柱穴で北側と西側の掘形の一部が切られている。遺構の南端で土師器が数点出土した（第 33 図 141 ～ 143）。141 は復元口径 10.6 ㎝の小型坩である。底部は円形に窪んでいる。胎土には微細な粒子が少量混じる。142 は小型壷である。口径は約 15 ㎝、器高は 25.2 ㎝ほどある。底部は円形平底になっている。精製された粘土に微量の粒子が混じっている。143 は高坏で、復元口径は 16.5 ㎝、器高は 14.1 ㎝、底径は 10.6 ㎝である。坏部は付け根から直線状に開く。脚部は中央がわずかに膨らみをもち、3.6 ㎝ほどの高さから裾へ広がる。出土した土器の年代は４世紀末～５世紀初頭に属するもので、第３面の遺構というよりは第４面の年代に入る遺構としたほうが妥当である。

SK304（第 30 図）　SK303 の１ｍ程北側に位置する不定形な土坑である。土坑の肩部は後世の柱穴で切られている。覆土内に高坏を含む数片の土師器が出土した。

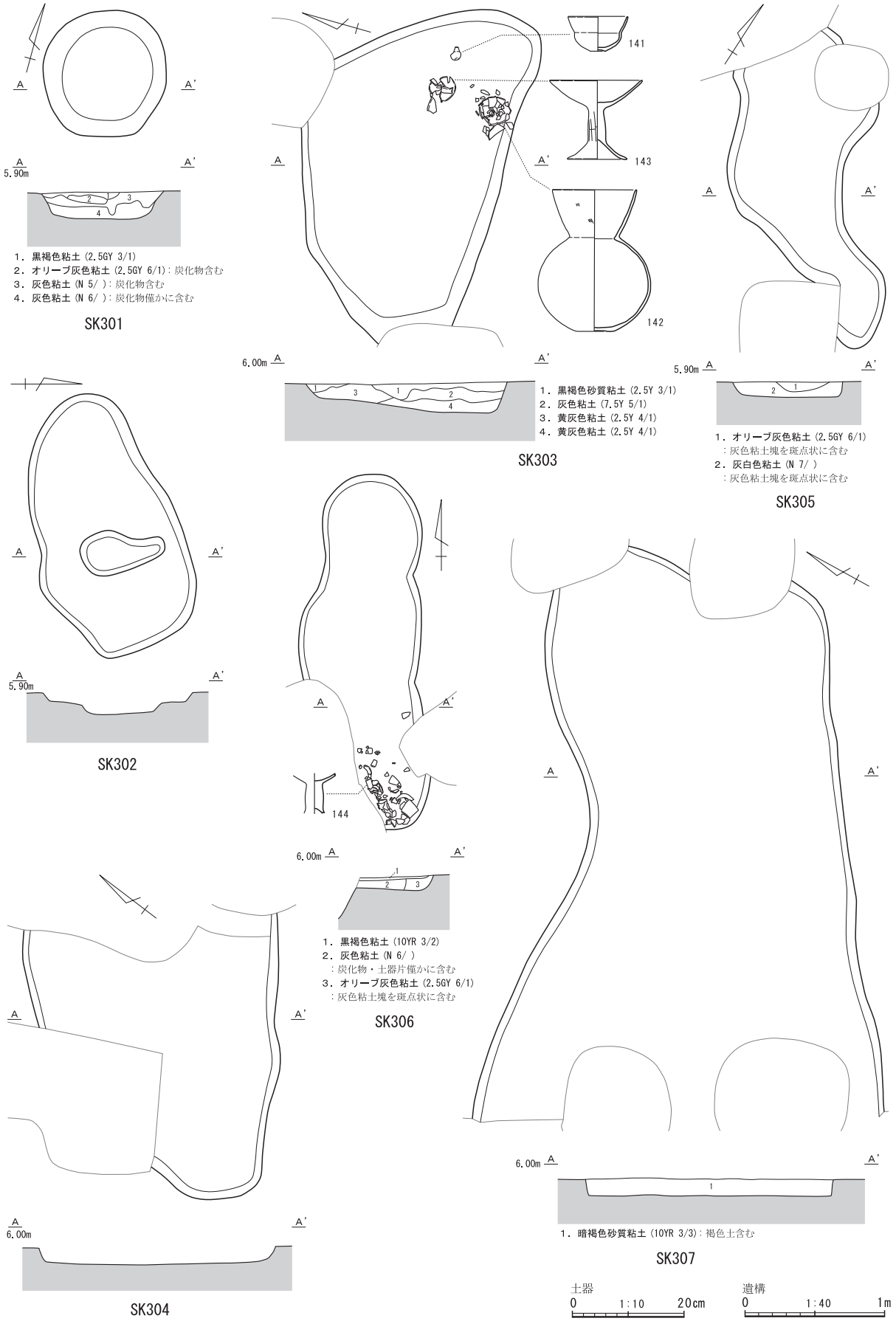
SK305（第 30 図）　SK304 の北側である。不定形で後世の柱穴により数箇所が切られている。覆土内には器種不明の土師器小片が混じっていた。

SK306（第 30 図、図版 18）　SK305 の１ｍほど西側に位置する。長楕円形の不定形な土坑である。後世の柱穴により肩の一部が切られている。南端に土器がまとまって出土した。第 133 図 144 は高坏の脚部で脚の中央が膨らみをもつ形状である。そのほかには高坏片や赤彩のあるＳ字状口縁甕片など土師器片が多数出ている。

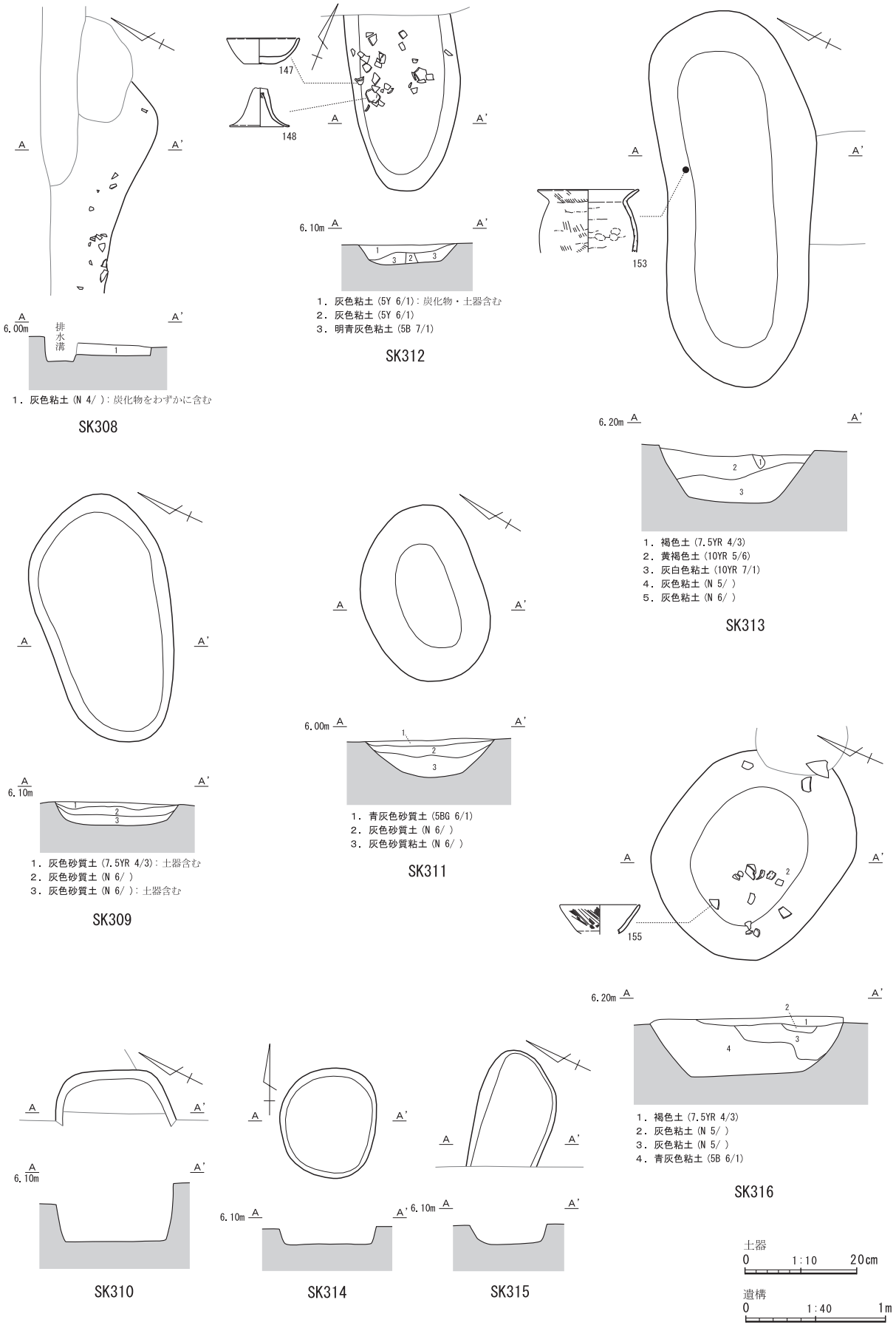
SK307（第 30 図）　１区の西壁に掛かる位置で検出した大型の土坑である。長方形に近いが不定形である。覆土内より甕の破片と思われる土師器が３片出土した。

SK308（第 31 図）　１区の北端で検出した土坑である。炭化物を含む覆土より土師器が 20 片ほど出土している。土器は小片のため器種は確かではないが壷か甕の破片と思われる。

１区で検出した土坑のうち SK303・SK306 は、出土した土器の年代から４世紀末～５世紀初頭に属す



第 30 図　SK301・302・303・304・305・306・307 実測図



第 31 図　SK308・309・310・311・312・313・314・315・316 実測図

第４表　第３面土坑計測表

遺構名	区	グリッド	長軸 (m)	短軸 (m)	深さ (m)	出土遺物	遺構名	区	グリッド	長軸 (m)	短軸 (m)	深さ (m)	出土遺物
SK301	1	R30	0.91	0.9	0.4		SK315	2-1	O27	0.84	0.66	0.15	
SK302	1	Q30,R30	1.91	1.26	0.16		SK316	2-1	O26	1.51	1.46	0.39	155
SK303	1	Q30	2.41	1.73	0.28	141 ～ 143	SK317	2-1	P26	1.67	0.68	0.14	
SK304	1	Q29	2.05	1.87	0.14		SK318	2-1	P26,27	2.53	0.57	0.17	156・157
SK305	1	Q29	2.32	1.14	0.11		SK319	2-1	P27	0.73	0.56	0.3	158
SK306	1	Q29	2.57	0.96	0.1	144	SK320	2-3	L21	0.85	0.55	0.08	
SK307	1	Q30	4.14	2.98	0.12		SK321	2-3	L20,21	1.53	0.59	0.08	
SK308	1	Q29	1.55	0.85	0.18		SK322	2-3	L19	0.84	0.84	0.15	
SK309	2-1	Q28	1.78	1.05	0.17	145・146	SK323	2-3	L19	0.63	0.44	0.06	
SK310	2-1	P28	0.89	0.41	0.62		SK324	2-3	K19	1.11	1.02	0.11	
SK311	2-1	P28	1.29	0.94	0.28		SK325	2-3	L21,M21	1.86	0.65	0.05	
SK312	2-1	O27	1.31	0.85	0.16	147・148	SK326	2-3	L21	2.60	1.13	0.10	
SK313	2-1	O27	2.70	1.21	0.42	149 ～ 154	SK327	3-1	K17	0.85	0.59	0.10	
SK314	2-1	O27	0.79	0.69	0.13		SK328	3-1	K17・18	0.98	0.42	0.13	

る遺構と考えられる。

土坑 SK309 ～ 319 は 2-1 区に位置する。

SK309（第 31 図、図版 17）　長楕円形の土坑で、調査区の南東寄りで検出した。覆土上層から下層に土器を含んでいる。第 33 図 **145** は高坏の坏部片である。坏部の底辺にははっきりとした稜をもつ。**146** は環状土錘の一部と思われる。復元直径は 5.6 ㎝程である。SK313 で出土した環状土錘と似ているが、石製のようにも見える。このほかにも高坏の脚部や壷底部、甕を含む土師器片が多数出土している。

SK310（第 31 図）　SK309 より８ｍ程西側で検出した。西側は調査区外のため全体形は不明である。出土遺物はない。

SK311（第 31 図）　SK309 の３ｍ程北で検出した楕円形の土坑で、28 ㎝ほどの深さがある。覆土からは高坏を含む十数片の土師器破片が出土した。

SK312（第 31 図）　竪穴建物 SH301 の西側､SH303 の北側に位置する。北側は SK313 と切り合っている。切り合い関係から SH312 のほうが古く SK313 が新しい。残っている南側は楕円形に近い形状をしている。覆土内には炭化物と共に出土した土師器の坏（第 33 図 **147**）と高坏（**148**）のほか、高坏等の破片が数多くある。**147** は復元口径 13 ㎝の坏である。底部は 1.2 ㎝と厚く、不整形な作りである。**148** は比較的小型な高坏の脚部である。

SK313（第 31 図）　SK312 の上部に切りあっている土坑である。長楕円形の形状で、50 ㎝程の深さがある。遺構内の覆土より土師器（第 33 図 **150** ～ **153**）や土師器片が多数出土した。**150** はミニチュアの高坏脚部であろう。脚は短く低い位置で外側へ広がる。**151** は小型の鉢である。口唇部近くで外側へ緩やかに屈曲する。**152・153** は甕である。口縁部は「くの字」状で外面はハケ調整痕が残っている。胎土は小粒子が混じる。土器は５世紀後半の年代と考えられる。

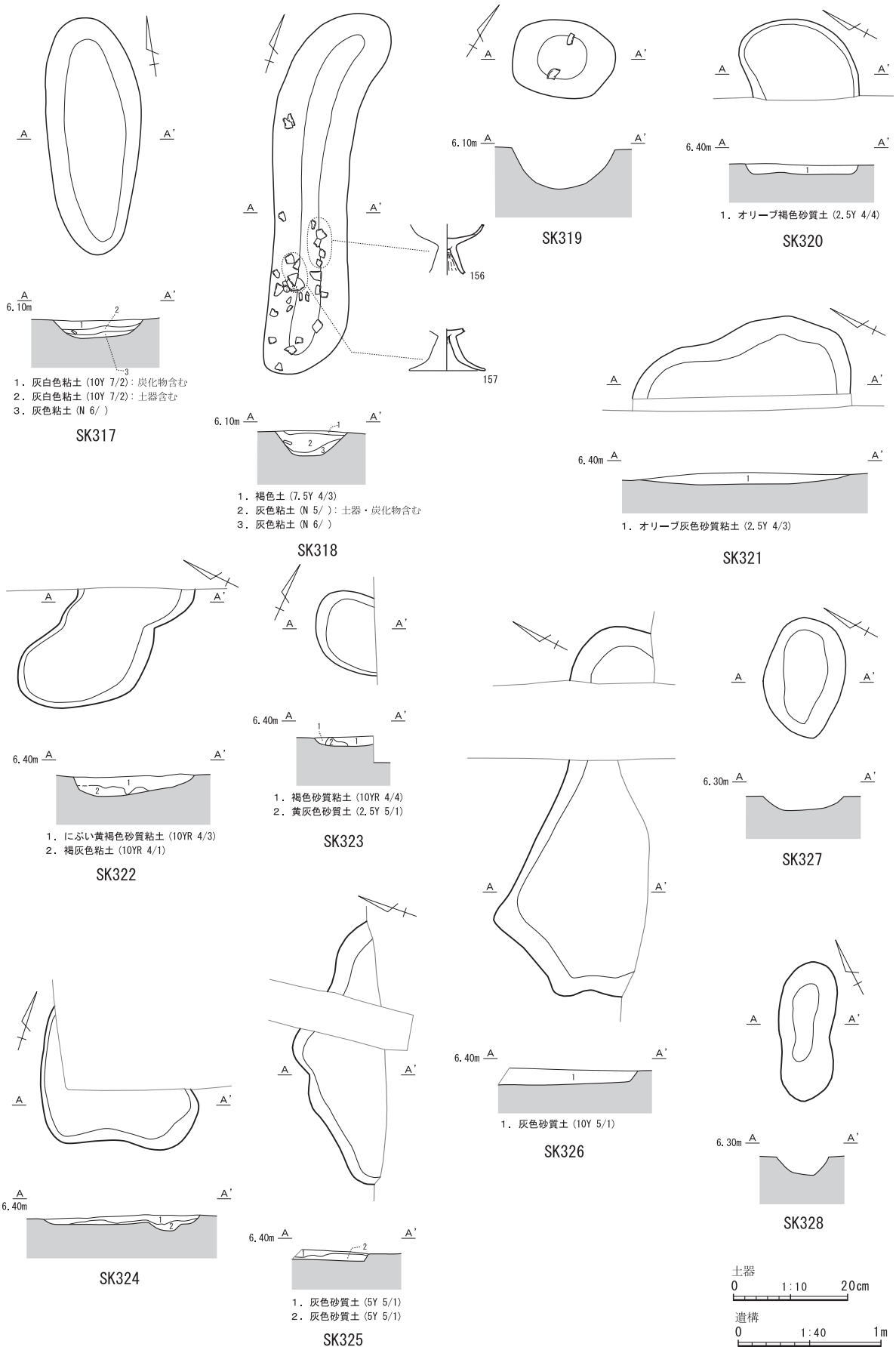
SK314（第 31 図、図版 19）　調査区の北西端で検出した円形土坑である。覆土より土師器の小型鉢（第 33 図 **154**）が出土した。そのほか土師器片が数点ある。**154** は復元口径が 11.6 ㎝､器高は 7.8 ㎝で、厚みのある丸底、口唇部がやや外側へ開く。

SK315（第 31 図）　SK314 の西側１ｍのところにある。西側は調査区外に出ているが元は楕円形であったと思われる。覆土からは高坏と思われる土師器片を含む破片が３点出土した。

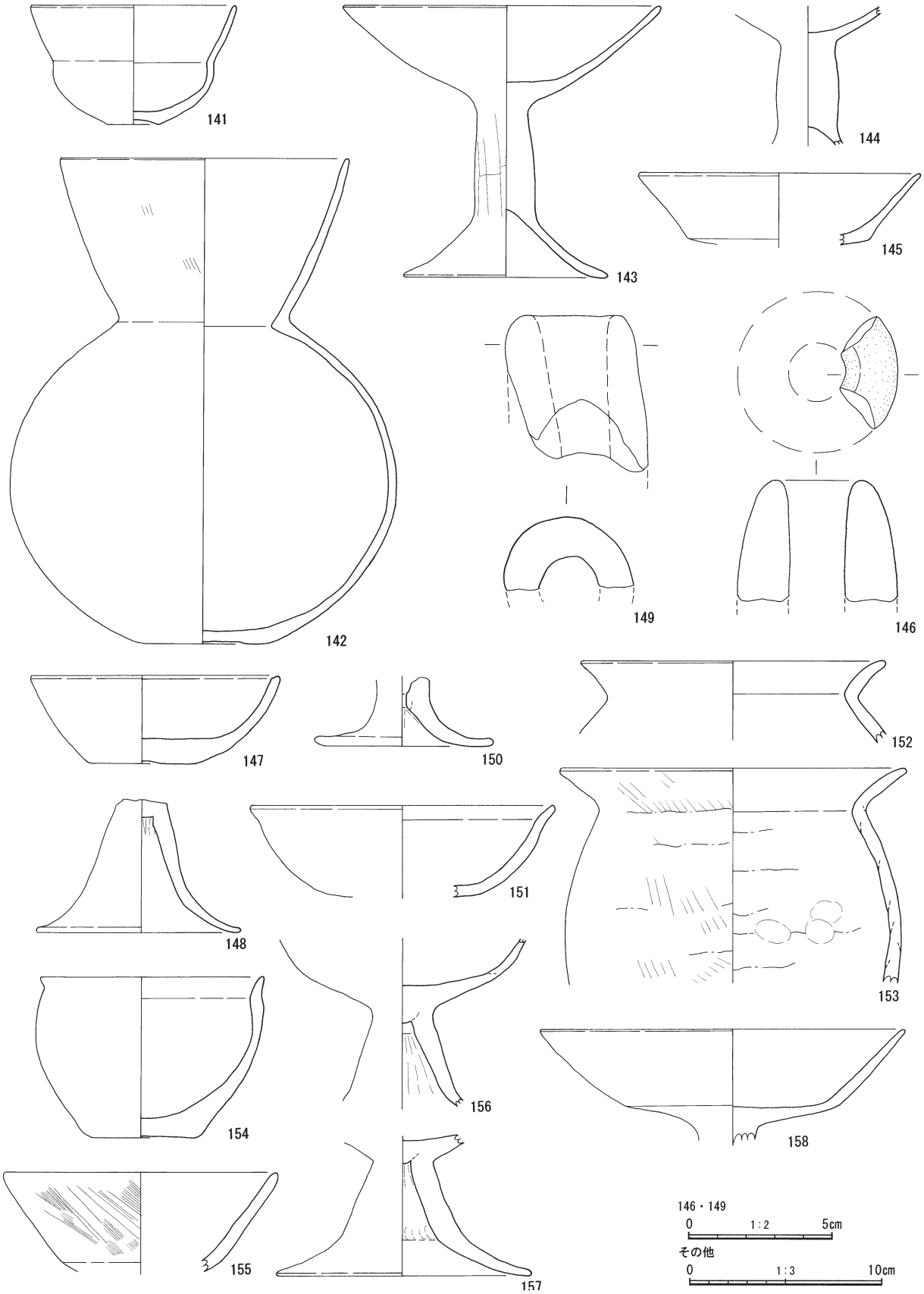
SK316（第 31 図、図版 19）　SK314・315 と同じ 2-1 区の北西端で検出した土坑である。掘形は長いところで 1.8 ｍ程の大きさがあり、やや歪な円形で、40 ㎝の深さがある。覆土内から出土した土器は高坏の坏部（第 33 図 **155**）ほか、土師器の壷・甕等の破片が多数ある。年代は５世紀後半と思われる。

SK317（第 32 図）　2-1 区北端で検出した円形土坑である。70 ㎝程の土坑内覆土からは高坏片のほか、煤が付着した甕の破片も出土している。

SK318（第 32 図）　長楕円形の浅い土坑である。竪穴建物 SH301 の１ｍ程北側で検出した。土坑の南



第 32 図　SK317・318・319・320・321・322・323・324・325・326・327・328 実測図



第 33 図　SK303・306・309・312・313・314・316・318・319 出土遺物実測図

半部、２層で炭化物と共に土師器が出土している。第 33 図 156・157 は高坏である。156 は坏部と脚部が部分的に残っている。157 は脚部のみである。いずれも脚の中央に膨らみをもつ形状の特徴がある。高坏のほか甕等の破片も多数ある。出土土器の年代から５世紀後半代であろう。

SK319（第 32 図）　竪穴建物 SH301 内で検出した長楕円形の浅い土坑である。２層に土器を含む。第 33 図 158 は高坏の坏部で、口径は 18 ㎝程ある。覆土内から出土した破片は高坏や甕等が見られる。

土坑 SK320 ～ 326 は 2-3 区にある。本調査区は遺構も少なく、土坑出土の遺物としては取上げがない。

SK320･SK321（第 32 図）　調査区の中央西端で並んで見つかった土坑で、一部、調査区外に出ている。SK320 は円形に近い浅い土坑である。SK321 は不定形な楕円状の浅い土坑である。

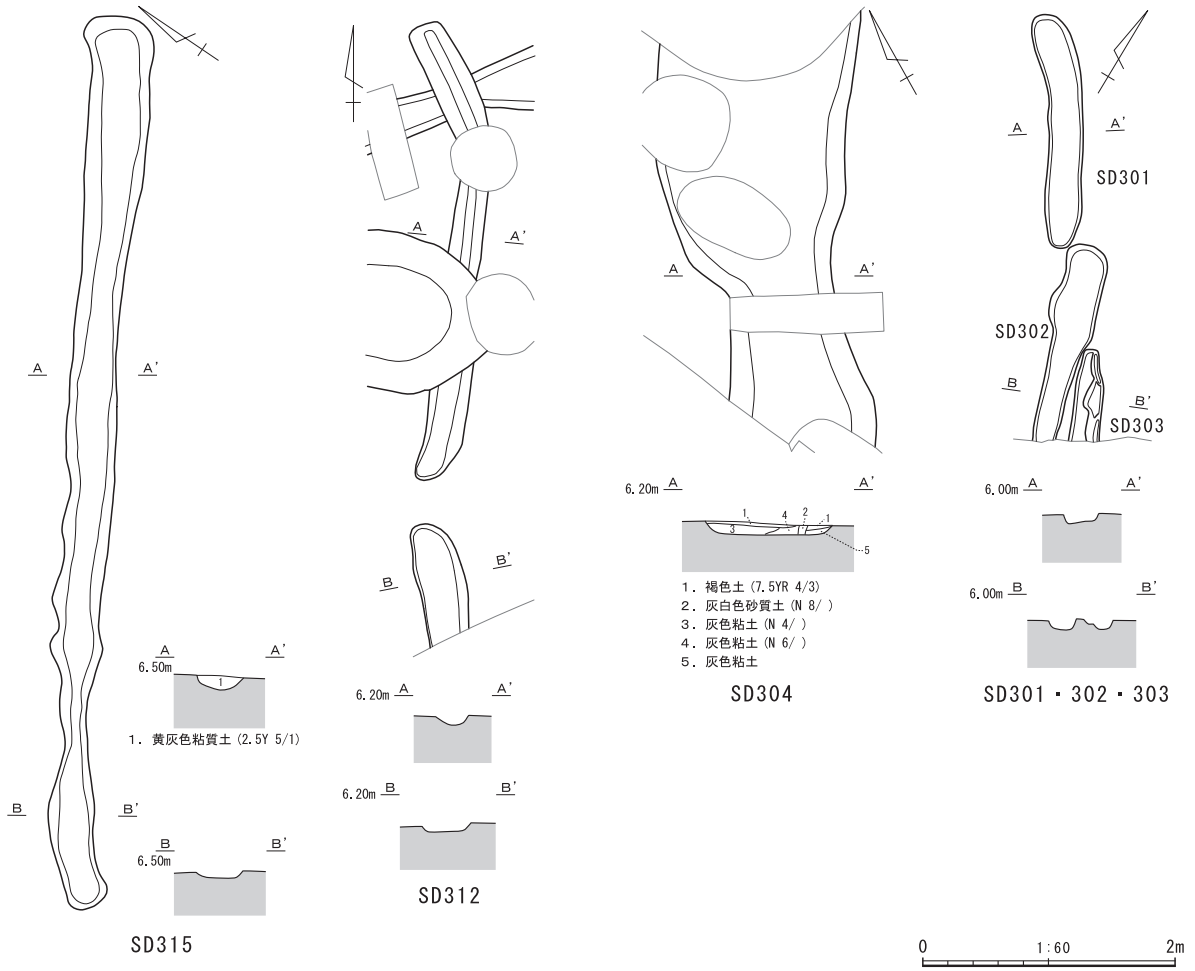
SK322・SK323・SK324（第 32 図）　調査区の北側で検出した。SK322・323 は東端で見つかっており、東側は調査区外に掛かっている。SK322 はやや歪な楕円形を呈する。SK323 は円形に近い形状である。いずれも 10 ㎝程度と浅い。SK324 の北側半分は試掘調査坑に掛かっているが、不定形な浅い土坑である。

SK325・SK326（第 32 図）　第２面の溝 SD206 の北側掘形と切り合っているため、全体の形状は不明である。深さも 10 ㎝以下で浅い。土坑とするよりも SD206 に伴う遺構の可能性がある。

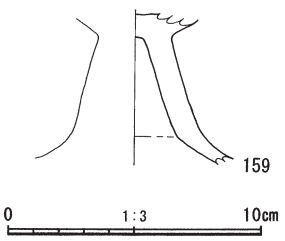
SK327・SK328（第 32 図）　3-1 区で検出した。SK327・SK328 はＫ -18 グリッド内で隣り合っている。長軸方向で 0.8 ～１ｍ程の大きさで、掘形は浅い。出土遺物もなく年代は特定できない。

（３）溝

SD301・SD302・SD303（第 34 図）　１区の第３面で検出した溝である。いずれも１区中央西端のＱ -30 グリッド内で近接した位置にある。総延長も３ｍ程の浅い溝である。同調査区内で見つかってい



第 34 図　SD301・302・303・304・312・315 実測図



第 35 図　SD304 出土遺物実測図

る遺構は土坑が多く、本溝の性格は不明である。

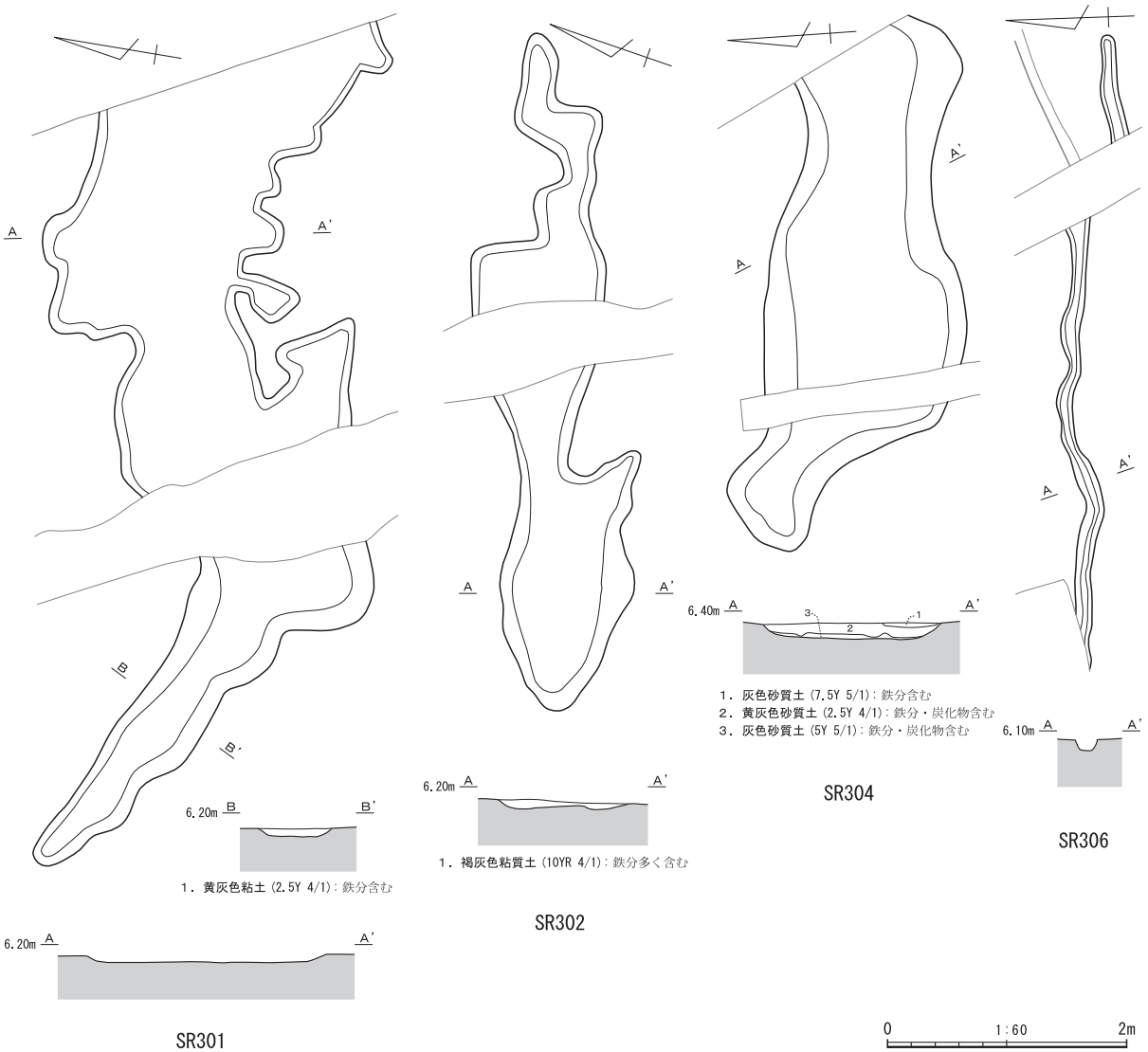
SD304（第 34 図）　2-1 区の南半部西端に位置している。北側は不明遺構 SX301 に切られ、南側は調査区外へ続いている。検出した延長は 2.8 mほどで最大幅は 1.7 m、深さは 10 cmと浅い。覆土からは土師器の高坏脚部（第 35 図 159）が出土している。159 の脚部は短く中央に膨らみをもつ形状であることから５世紀半ばと思われる。

SD312（第 34 図）　北西端で検出した溝である。この周囲では竪穴建物が見つかっており、本遺構も竪穴建物の壁溝である可能性も考えられる。ただ調査区外へ続いているため、溝の全容が解らないことから断定はできない。

SD315（第 34 図）2-3 区の北側で検出した東西方向の浅い溝である。延長は７m強で、最大幅は 50 cmほどある。周囲には溝に関連のあるような遺構はなく、溝自体の性格は不明である。

（４）自然流路

自然流路は１区、2-1 区にはなく、2-2 区以北に存在する。2-2 区以北は集落域よりも外れ、遺構もほとんど見られない。遺跡は北側を丹野川、南側を江川に挟まれた沖積地に立地しているだけに、河川氾濫などの影響は少なからず受けたであろう。



第 36 図　SR301・302・304・306 実測図

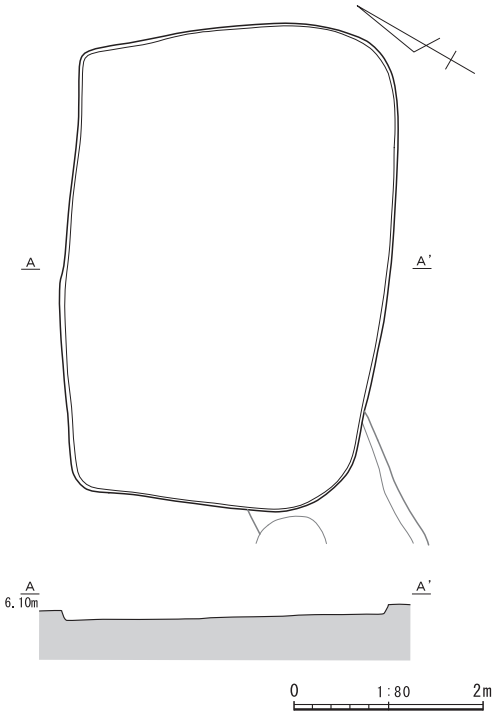
2-2 区では SR301、SR302、SR306 がある。

SR301・SR302（第 36 図）　竪穴建物 SH304 の北側で検出した。SR301 は不定形な浅い流路で東側は調査区外となっている。遺物は出土していない。SR302 は SR301 の北側で検出したが、形状は不定形で浅く、覆土内には遺物も出ていない。

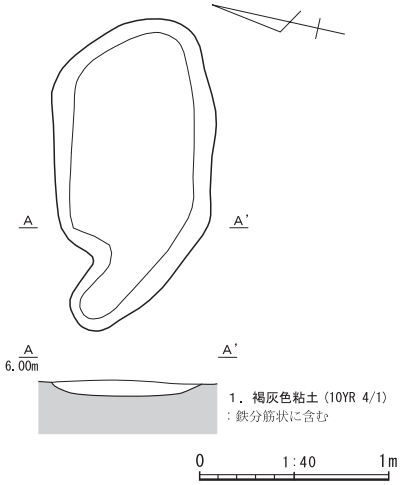
SR306（第 36 図）　SH304 の南側に位置することから当初は周溝かと思われたが、不定形な形状から自然流路とした。出土した土器はない。

2-3 区では SR303 と SR304 がある。

第 37 図　SR303・305 実測図

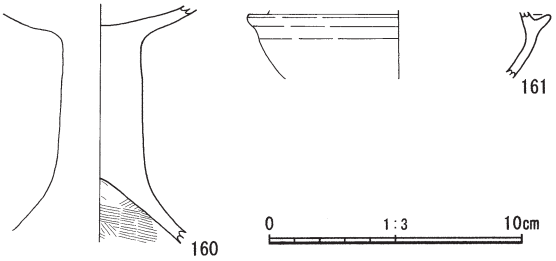


SX301



SX302

第 38 図　SX301・302 実測図



第 39 図　SX301 出土遺物実測図

SR303（第 37 図）　調査区の南端にあり、北側の肩部しかない。大半が調査区外であるため流路の全体形はわからない。遺物も含まれていない。

SR304（第 36 図）　不定形な浅い流路で東端は調査区外へ出ている。覆土下層は炭化物を含む。

SR305（第 37 図）　3-1 区の北端で検出した浅い流路である。南肩の一部だけで調査区外に広がるものと思われる。覆土内からは須恵器の底部片が出土している。底部は回転ヘラケズリの痕が見えるものの正確な時期が追えるものではない。第３面の遺構群よりもやや新しい時期の遺構であろう。

第３面の自然流路は浅い不定形なものが多く、常に流れのあった河川ではなく、一時的に水等が流れた跡であろう。

（５）不明遺構

性格不明の遺構は SX301 と SX302 がある。

SX301（第 38 図）　2-1 区の中央、竪穴建物 SH301 のすぐ南側で検出した。遺構の形状は東西方向に長い長方形で、長軸は５ｍ、短軸方向は 3.5m ほどの規模がある。掘形は浅く、10 ㎝もない。覆土内より土師器の高坏（第 39 図 160）と須恵器の坏（161）が出土している。160 は高坏の脚部である。脚の柱は長く裾は下方で広がる形状である。161 は復元口径が 10 ㎝程の小型の坏身である。口唇部の立ち上がりも短い。その他の破片は土師器の坏や甕、特に高坏の破片が多く見られる。甕には外面が煤けた状態のものもある。須恵器はほんの数片混じる程度で、圧倒的に土師器が多い。第３面で検出した竪穴建物 SH301 には須恵器が含まれていないが、SX301 では須恵器が混入している。人為的な掘形を有する SX301 だが、柱穴や竈、周溝等もなく居住していた場所または竪穴建物とは言い切れない。須恵器の年代でいえば６世紀末から７世紀初頭に下ることから SH301 の時期ではなく、更に新しい時期の遺構である。

SX302（第 38 図）　2-2 区の竪穴建物 SH304 の西側で検出した不明遺構である。不定形な楕円状を呈する。当初、SH304 関連の周溝と思われたが周溝ではないことが解っている。覆土より土師器片が１点出土している。器種は高坏と思われるが年代の決め手になるほどの大きさはない。

２　包含層出土の遺物

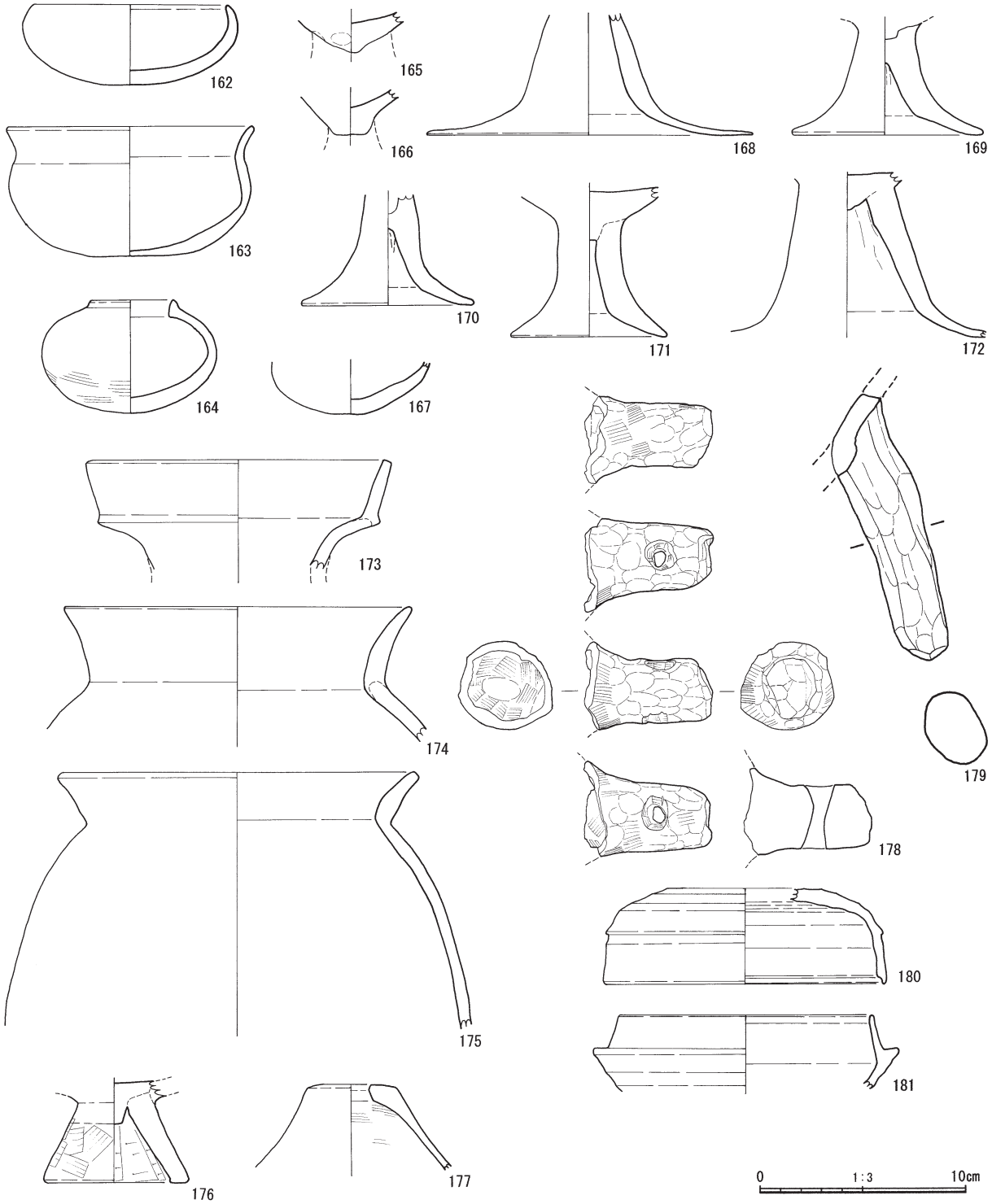
2-1 区・2-2 区の第３面包含層から出土した土器は第 40 図 162 ～ 181 である。162 と 163 は土師器である。162 は 2-1 区で出土した復元口径が 9.3 ㎝の小型の坏である。口唇部は内側に入り込むような形状をしている。体部には厚みがある。口径が 10 ㎝以下であることから、ミニチュア製品に含まれても良いだろう。163 は 2-2 区で出土した小型の鉢である。底部には粘土内に入り込んだ気泡による穴ができているところからも丁寧な作りとはいえない。胎土は精製された粘土である。164 は小型の壷である。口縁部は欠損している。胴部は丸く一部に黒班がある。底部は丸底で厚みがある。壷のミニチュア製品であろう。165 は土師器片で底部に指で絞って摘み出したような痕がある。胎土に径２㎜程の粒子を含むことから、本品は台付甕の胴部底で、台部との接合部分と思われる。166 も 165 とおなじく台付甕の胴部底と思われる破片である。底部は平坦になっている。胎土には径１㎜以下の粒子を含む。167 は 164 と同じような小型壷の底部であろう。底部は丸底で厚みがある。内面底には指ナデで整形した痕が見える。168 ～ 172 は土師器の高坏である。いずれも高坏の脚部である。168 は脚の中央にわずかに膨らみを持ち、裾部が大きく広がる形状である。裾部の広がる形は４世紀後半に見られるが、脚部の付け根から下方は径が大きいことから４世紀末から５世紀代のものであろう。169 は底径が 9.3 ㎝と小型の高坏である。脚部の高さも６㎝程と低い。170 も底径が 8.3 ㎝で小型の高坏である。両者とも坏部と脚部は別に作り、後で接合している。かなり小型であることからミニチュア製品である可能性が高い。171 は脚部と坏部の一部が残っている。脚の裾はあまり大きく開かない。172 は脚部と坏部の接合部が良くわかる資料である。脚部は径が太く、高さも８㎝を超える。

173 は土師器の壷口縁部である。復元口径は 15 ㎝ほどで受け口の形状となっている。口唇部は直立しやや斜めに開く。下端部はちょうど胴部と口縁部との接合部にあたるため丸くなっている。胎土に径３㎜程の粒子が少量混じる。174・175・176 は土師器の甕である。174 は復元口径が 16.6 ㎝になる口縁と肩部の破片である。風化により表面調整は見えないが、口縁部の輪積み痕と胴部内面の指押さえが辛うじて見える。胎土は精製された粘土を使っている。煤などの使用された痕跡はない。175 は口縁部から胴部までの破片である。口縁部は「くの字」形の断面形で屈曲部に厚みをもつ。内面の調整はナデ消されている。胎土中には径１㎜以下から３㎜程の粒子が非常に多く混じる。煤等の付着はない。176 は台付甕の台部である。台は完全な形で、接合部には胴の一部も残っている。底径は 6.9 ㎝、残存高は 4.9 ㎝である。胴部と台部は別々に作り、後で接合している。台の表面は火を受けて赤く変色し、接合部は黒くなっている。胎土中には最大径５㎜からそれ以下の粒子が混じっている。被熱していることからも甕として実用的に使われていたものであろう。177 は甑の底部と思われる土器である。底径は 9.6 ㎝、残存高は 4.1 ㎝である。底は厚みがあり、底の中心へ焼成前に径１㎝程の孔をあけている。胴部は開き気味に立ち上がる。胎土には小粒子が混じる。本遺跡では甑の把手のミニチュアも出土していることから、甑のミニチュア製品の一部と考えることもできるだろう。

178・179 は用途不明の土製品である。178 は把手状の形状をもつ製品であるが、内面にもハケ調整がされていることから甑の把手ではない。径３㎝程の棒状に手捏ね整形されているが、一部にはハケ目もある。中央には工具による両側から開けられた貫通孔がある。「土鈴」のような中空の製品であったとも考えられる。179 は把手付鉢（盌）の把手部分と思われる。表面は手捏ねで作られており、根元には胴の一部もある。鉢（盌）の胴部中央に付けられていたものであろう。

180・181 は須恵器である。180 は坏蓋で上部には回転ヘラケズリを有する。外面には明瞭な稜があり段差がある。181 は坏身で口唇部はほぼ直立に立ち、受けは真横に開く。須恵器の年代は６世紀初頭で、本遺跡のなかでは最も古い年代の須恵器である。

第３面包含層から出土した土器は５世紀代から６世紀初頭までと年代幅は広い。



第 40 図　第３面包含層出土遺物実測図

第４節　第２面の遺構と遺物

１　遺構

第２面では赤土政所遺跡の主要ともいえる遺構群が見つかっている。調査区でいうと１区と 2-1 区内で掘立柱建物群を検出している。検出面の標高値は 5.9 ｍほどである。赤土政所遺跡の調査範囲のなかで建物群は南側に集中している。

１区では掘立柱建物 SB201 ～ SB210 を確認した。建物の柱穴は切り合っており、２～３回程度、もしくは最大４回の建て替えが行われていたようである。このほかに土坑 SK201 ～ 206 がある。

2-1 区では掘立柱建物 SB211 ～ SB216 がある。ほぼ同じ位置に３棟の建物が切り合っていることから、ここでも３回程度の建て替えがあったとみられる。これらの建物群は 2-1 区の北端で検出した２条の溝（SD201・202）よりも南にある。この溝より北側の 2-2 区では同じように平行する溝 SD206 があり、溝内より土器や石製品のほか木製品も数多く出土した。こうした状況から勘案して、建物群はこれより北側には存在せず、１区・2-1 区以南に広がるものと想定される。ただし、調査区の幅が最大 14m 程であることから、東西方向にどこまで広がるかは現段階で想定できない。同区ではこのほかに複数の土坑を検出している（SK207 ～ 219）。このうち土坑 SK208・SK210・SK211 では覆土内より灰釉陶器等の土器がまとまって出土している。出土土器の年代的に見ても掘立柱建物群との関連性が高い。

2-2 区の南側では前出の溝 SD206 を検出した。溝の覆土内より出土した土器は古墳時代後期が主体で、６世紀後半～７世紀初頭の須恵器が含まれている。しかし灰釉陶器の小片も存在することから、SD206 が埋没する最終段階から直後の時期あたりに１区・2-1 区の掘立柱建物群が建てられたと考えられる。土坑 SK225 と SK235 も SD206 の埋没後の時期に伴う遺構であろう。2-2 区中央付近では小畦畔で区画された水田がある。水田の北側では遺構は検出されていない。

2-3 区では南側に溝 SD203･204、北側では杭列 SA201 や土坑 SK226 ～ 229、溝 SD205 などを検出した。3-1 区でも自然流路 SR207・208、土坑 SK230 ～ 234、杭列 SA202 などを検出した。2-3 区と 3-1 区では居住域に伴う遺構はなく人為的な遺構も数少ない。

以上のように２面の包含層や遺構内で出土した土器は灰釉陶器が主体であることから、遺構面の年代は奈良時代末から平安時代であろう。

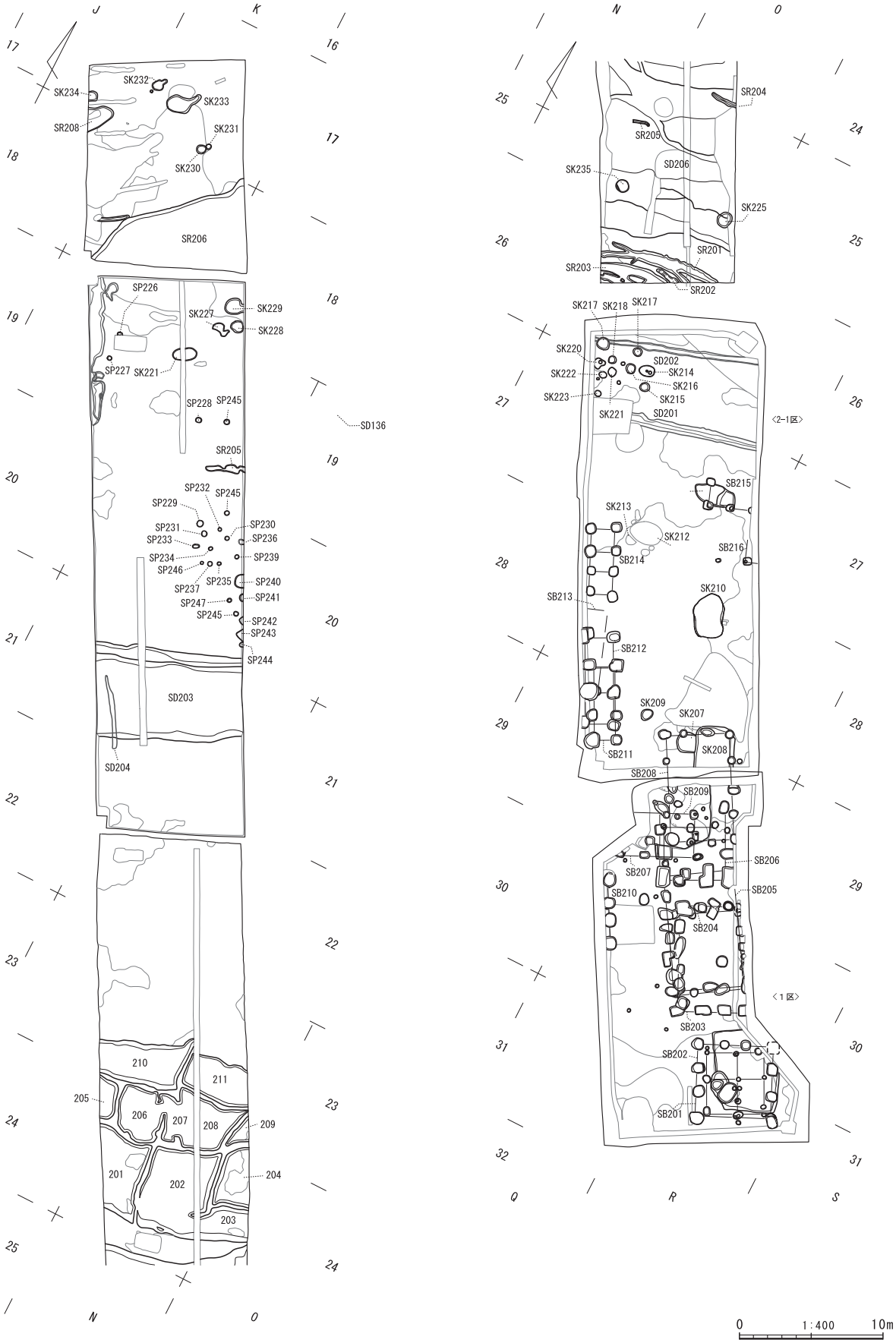
（１）掘立柱建物

SB201（第 43 図、図版 25）　掘立柱建物 SB201 は１区第２面の調査区南東隅で検出した。桁行きの南側は調査区外のため、全体の規模は不明である。また同じ位置に一回り大型の掘立柱建物 SB202 が同一方向であることから建て替えの可能性がある。梁行きは２間、桁行き方向は２間以上の規模をもつ掘立柱建物跡と想定される。梁行きは約 4.5 ｍ、柱間は 1.8 ～ 2.0 ｍの間隔がある。一方、桁行きは 1.8 ｍと 2.0 ｍである。桁行き方向の中央に束柱と思われる痕跡があることから､総柱建物の可能性もある。柱穴の径は遺跡内で見られる柱穴よりもかなり小さく、最大でも 50 ㎝程度の円形または隅丸方形を呈する。掘り込みは検出面から 10 ㎝ほどと浅いものから、深さ 40 ㎝のものまである。

建物の柱穴Ｐ８より柱根を検出した。柱根は残存長が 26 ㎝､直径は最大 16 ㎝である。材はクリである。柱根は芯材が抜け落ち、著しく風化が進み、全体に収縮もしている。元々の柱の直径は 20 ㎝以上あったと思われる。Ｐ８は側柱ではなく束柱と考えられる。

柱穴Ｐ５の覆土からは土師器の坏小片（第 61 図 182）が出土した。そのほかに須恵器の小片もあるが、出土する土器の主体は土師器である。

SB202（第 44 図、図版 25）　第２面の SB202 は調査区南東隅で検出したため、桁行きの南側が切れて


SK232
SK234
SK233
SR208
SK231
SK230
SR206
SP226
SK227
SK229
SK228
SP227
SK221
SP228
SP245
SD136
SR205
SP232
SP245
SP229
SP231
SP230
SP233
SP236
SP234
SP239
SP246
SP237
SP235
SP240
SP247
SP241
SP245
SP242
SP243
SP244
SD203
SD204
210
211
205
206
207
208
209
201
202
204
203
SR204
SR209
SD206
SK235
SK225
SR201
SR203
SR202
SK217
SK218
SK217
SK220
SD202
SK222
SK214
SK216
SK223
SK215
SK221
SD201
〈2-1区〉
SB215
SK213
SK212
SB216
SB214
SK210
SB213
SB212
SK209
SK207
SB211
SK208
SB208
SB209
SB206
SB207
SB205
SB210
SB204
〈1区〉
SB203
SB202
SB201
J
K
N
O
Q
R
S
0
1:400
10m

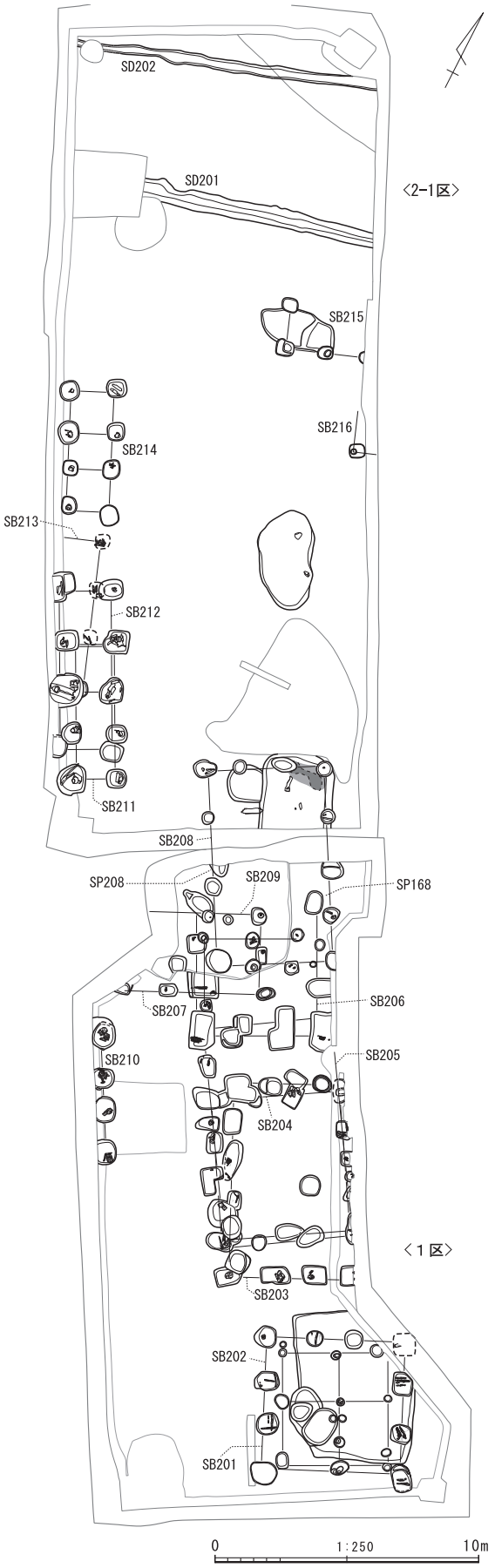
第 41 図　第２面全体図

おり全体の規模が判っていない。梁行きは３間、桁行き方向は３間以上の規模をもつ掘立柱建物跡であったと想定される。梁行きは約 5.25 m、柱間は西から 2.0 m、1.25 m、2.0 mの間隔がある。一方、桁行きは 1.7 mと一定の間隔である。柱穴は 80 ～ 90 ㎝の円形または隅丸方形を呈する。掘り込みは検出面から 50 ～ 60 ㎝ほどの深さがある。20 ㎝程の柱を据えるにしては柱穴の直径のほうが遥かに大きい。こうした傾向は検出した他の建物にも見られる。恐らく予め大きめの穴を掘っておき、後から柱の位置を調整していた可能性がある。この地域の特徴といえるかもしれない。柱穴には板を敷いた痕跡も見られた。Ｐ２・３・５～８・10 の柱穴底には並べた状態の木片を検出した。板は厚い板状のものではなく棒状あるいは薄い板状である。これらは柱の沈み込みを防ぐ礎板の役割ではなく、高さや位置を微調整するために柱の下へ咬ませた板であろう。

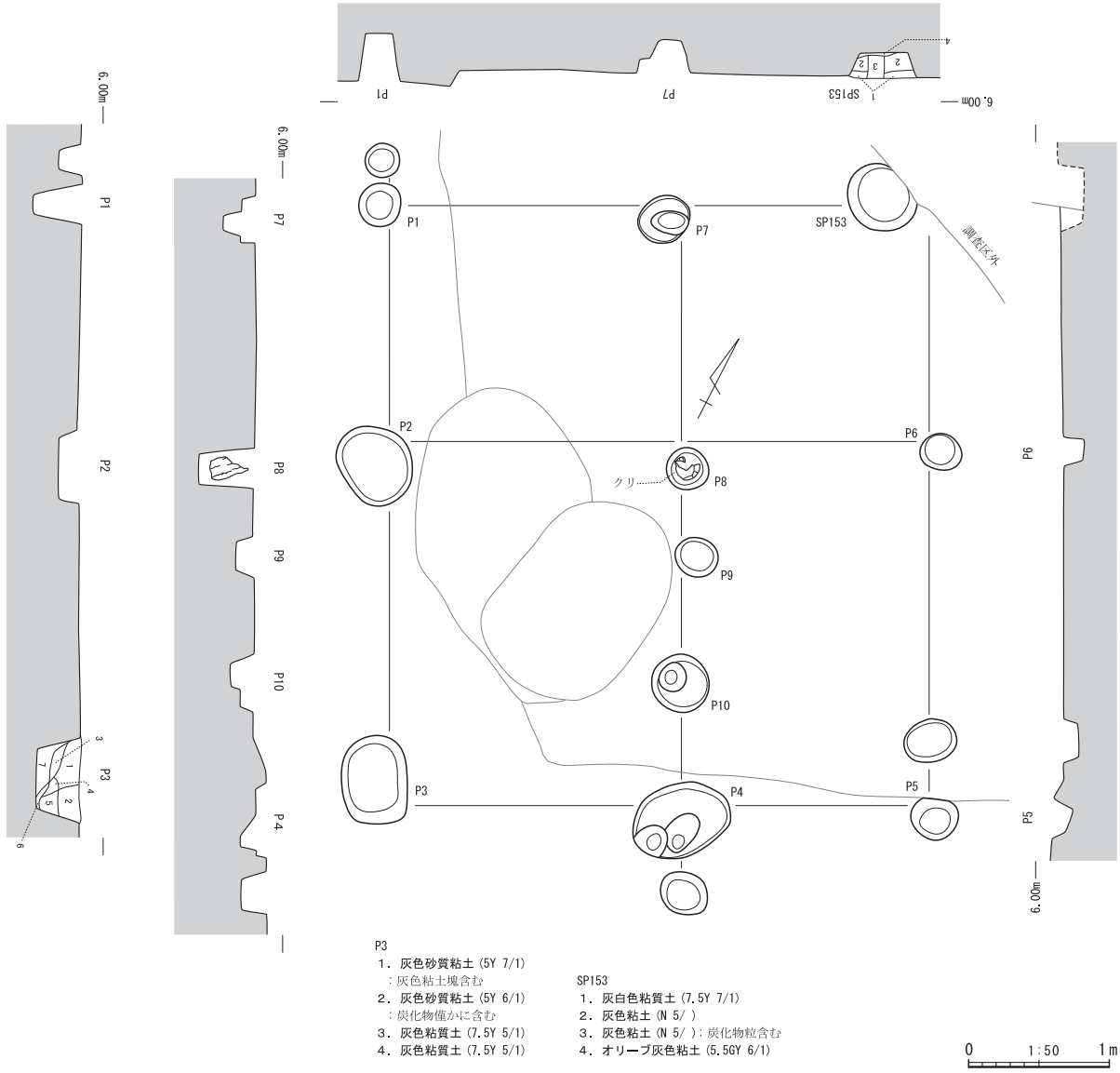
建物の北西角柱穴Ｐ１より柱根を検出した（第 62 図 209）。柱根は残存長が 31.25 ㎝、直径は最大 18.4 ㎝である。材はクリの芯持ちである。柱根は芯材が抜け落ち、著しく風化が進み、全体に収縮もしている。元々の柱の直径は 20 ㎝以上あったと思われる。Ｐ１以外の柱は抜き去られたと考えられる。

柱穴の覆土からは須恵器や土師器の甕（第 61 図 183）が出土した。「コの字甕」と呼ばれる口縁を外側に強く張り出した平底の長胴甕である。大井川以西の遠江では一般的に主流を占める甕である。

SB203（第 45 図、図版 24）　SB203 は１区の中央東寄りで検出した。SB201・202 の北側に位置し、SB204・205 と同じ位置で切り合っている。東側の柱穴列が調査区外で途切れており全体の規模は不明である。しかし周囲の建物の規模からして、梁行きは３間、桁行き方向は５間の規模をもつ掘立柱建物跡と想定される。梁行きは約５m、柱間は 1.5 ～ 1.8 mの間隔がある。一方、桁方向の柱間は 1.5 mと一定の間隔をもっている。柱穴は 70 ㎝の円形から長楕円形、もしくは長軸が１m程の隅丸方形もある。柱に対して柱穴の直径のほうが大きく、形状も統一されているわけではない。掘り込みは検出面から 50 ～ 60 ㎝ほどの深さがある。柱根が残っていた柱穴は南西角柱Ｐ６とＰ８の２箇所である。そのほかに柱穴底より木片が出土した柱



第 42 図　第２面住居群配置図



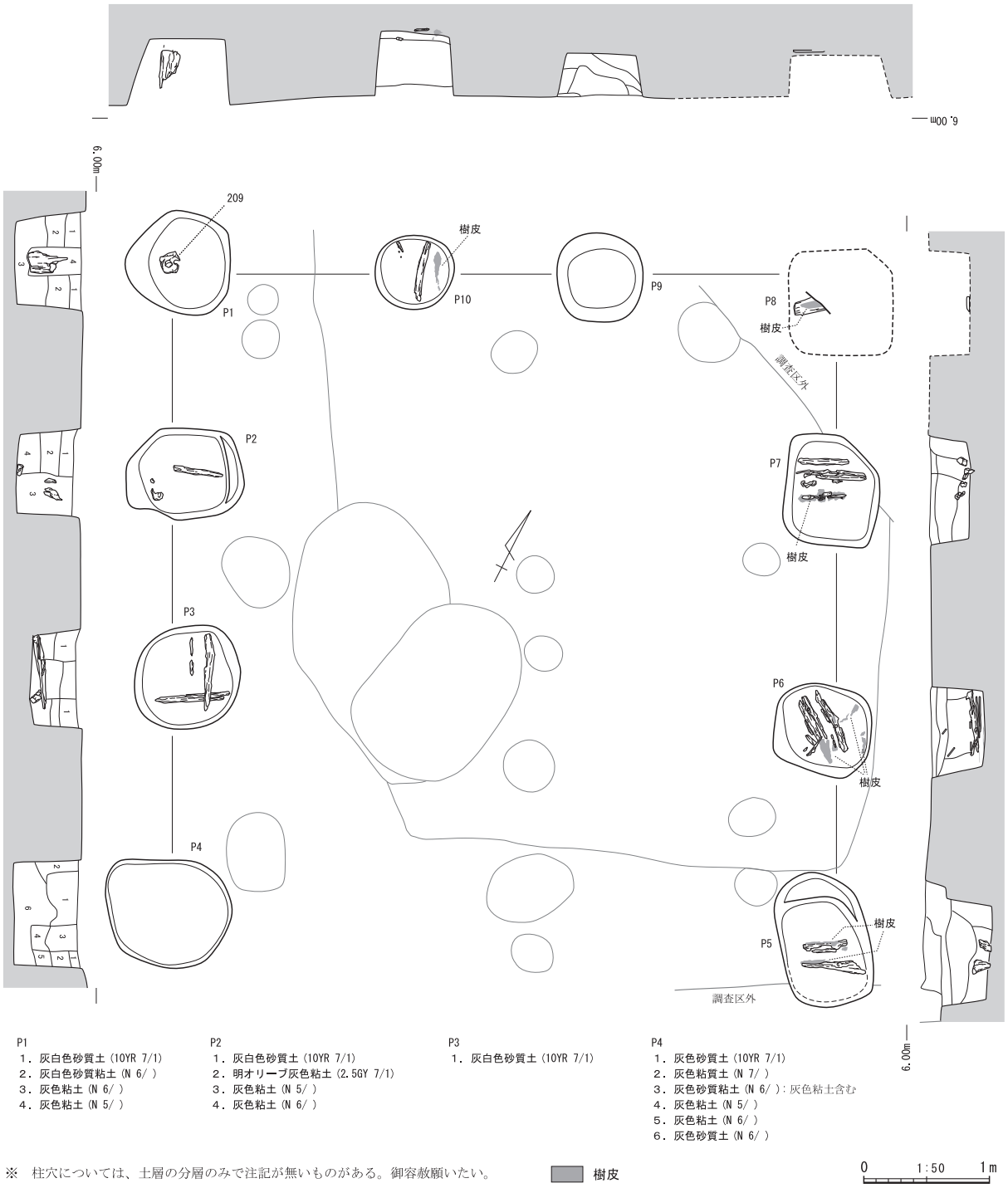
第 43 図　SB201 実測図

穴はＰ３・４・５・７・９の５箇所あった。木片は厚みのある板ではなく、薄い板状破片である。また必ずしも柱根の下に木片があるとは限らないようである。

建物の南西角柱穴（Ｐ６）より検出した柱根（第 62 図 **210**）はクリの芯持ち材である。柱根は残存長が 50.2 ㎝、最大径は 24.0 ㎝である。柱根は表面の著しく風化が進み、全体が収縮している。柱の直径は 25 ㎝以上あったと思われる。Ｐ８の柱根（第 62 図 **211**）はクリの芯持ち材である。広葉樹であるためか風化も著しく残存径は 15 ㎝ほどしかない。角柱と違って間柱はやや細い径を使っていたのだろうか。Ｐ６、Ｐ８以外の柱は抜き去られている。

柱穴の覆土から出土した弥生土器の壷口縁部片（第 61 図 **184**）は堆積土から混じったもので当該時期を示すものではないだろう。

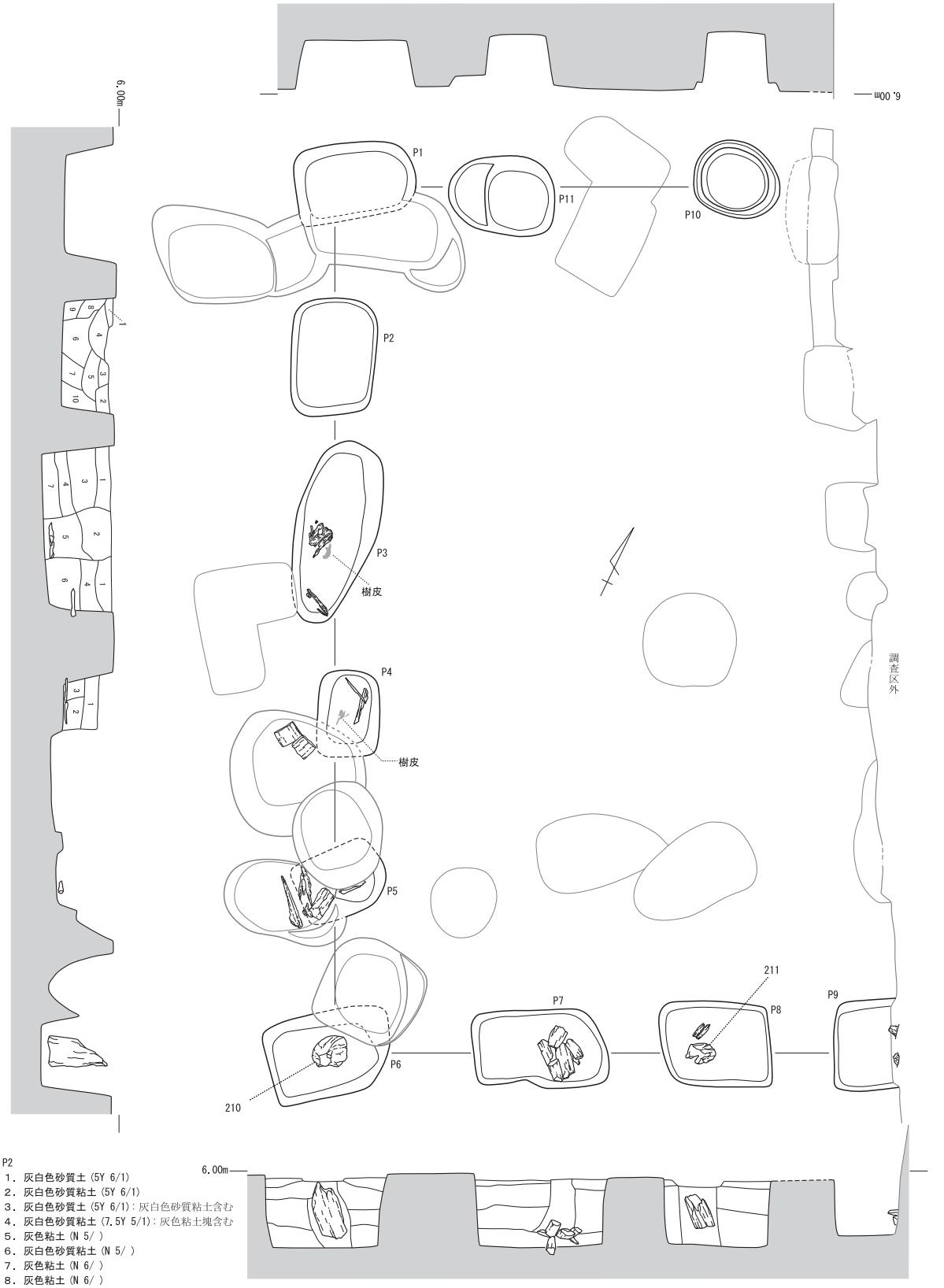
SB204（第 46・47 図、図版 24・27）　SB204 は１区の中央東寄りで SB204・205 と同じ位置で切り合っている。東側の柱穴列が調査区外に一部掛かって欠けているものの建物全貌が判る。梁行き３間、桁行き３間の正方形の掘立柱建物跡である。梁・桁行きは約５ｍ、柱間は北・東西面が 1.5 ～ 1.8 ｍ、南面は 2.5 ｍの間隔がある。柱穴は 40 ㎝の円形から長軸が１ｍ程の長楕円形、もしくは隅丸方形もある。



第 44 図　SB202 実測図

柱穴の径は大きく、穴の方向や形状も様々である。掘り込みは検出面から 40 ～ 60 ㎝ほどの深さがある。確認された 11 箇所の柱穴のうち、柱根が残っていた柱穴はＰ２とＰ７の２箇所である。また柱穴底より礎板または木片が出土した柱穴はＰ４・８・10 の３箇所あった。礎板は４～５㎝の厚みのある板で、木片は薄い板状破片である。柱根や礎板のない柱穴は６箇所であった。

柱穴Ｐ２より検出した柱根（第 62 図 **212**）はヒノキ材である。芯を持っていないことから分割材だった可能性もあるが、著しい風化により原形を留めていないため、元の形状は不明である。柱根は残存長が 32.5 ㎝、最大幅は 23.8 ㎝、厚さは 14.4 ㎝である。柱根の表面は著しく風化が進み、全体が収縮し



P2
1．灰白色砂質土（5Y 6/1）
2．灰白色砂質粘土（5Y 6/1）
3．灰白色砂質土（5Y 6/1）：灰白色砂質粘土含む
4．灰白色砂質粘土（7.5Y 5/1）：灰色粘土塊含む
5．灰色粘土（N 5/ ）
6．灰白色砂質粘土（N 5/ ）
7．灰色粘土（N 6/ ）
8．灰色粘土（N 6/ ）
9．灰色砂質粘土（N 6/ ）
10．灰色粘土（N 4/ ）

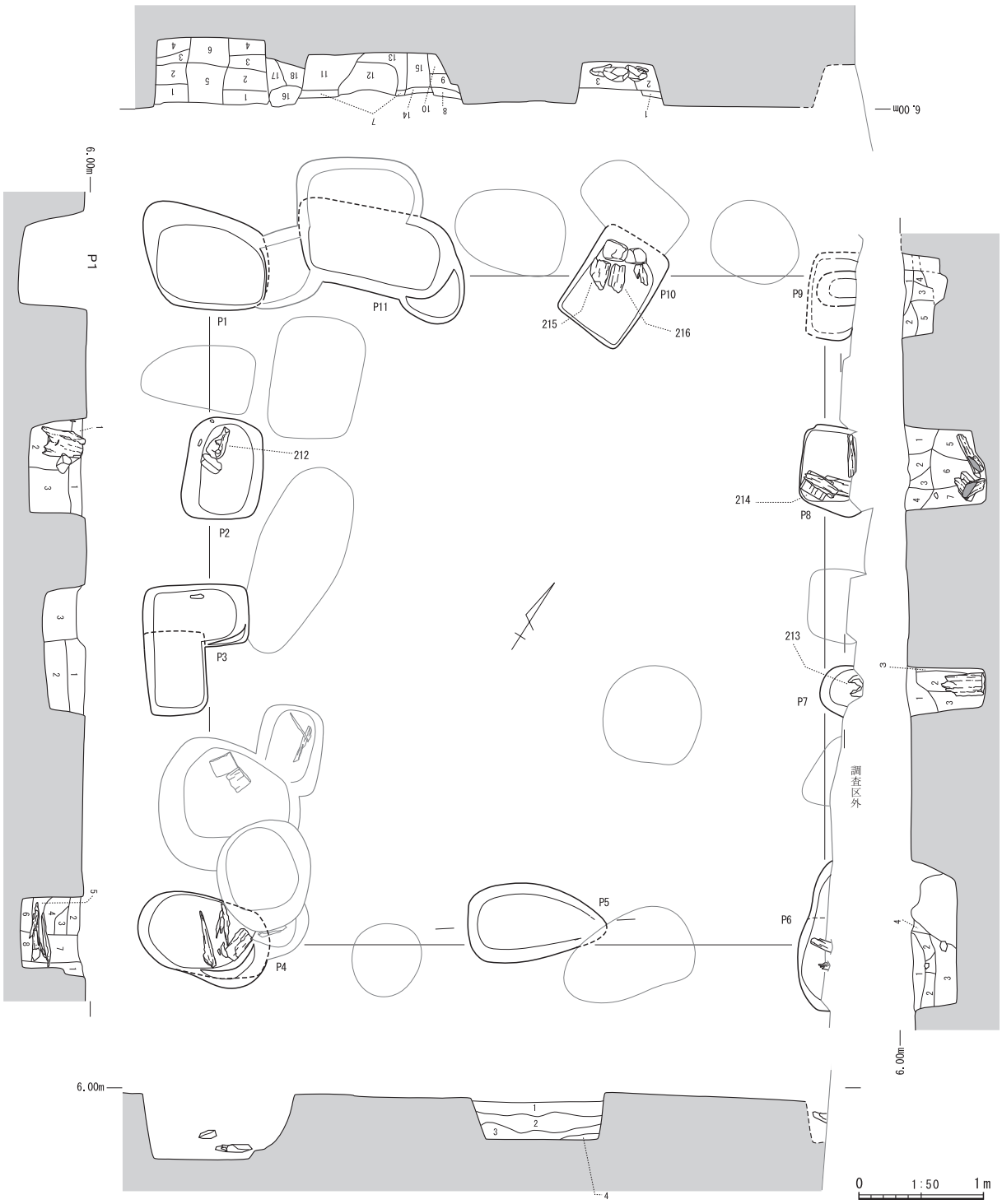
P3
1．灰白色砂質土（7.5Y 7/1）
2．灰色砂質粘土（N 6/ ）
3．灰色粘土（N 6/ ）
4．灰色砂質粘土（N 6/ ）
5．灰色粘土（N 6/ ）：砂粒僅かに含む
6．灰砂質土（N 6/ ）
7．灰色砂質土（N 6/ ）：砂粒多く、炭化物含む

P4
1．灰色砂質土（10Y 6/1）
2．緑灰色粘質土（10G 6/1）：灰色粘質土塊含む
3．緑灰色粘質土（5G 6/1）

※　柱穴については、土層の分層のみで注記が無いものがある。御容赦願いたい。

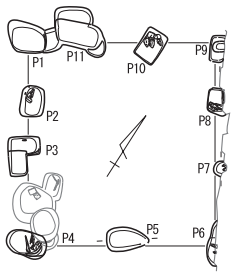
樹皮　0　1:50　1m

第 45 図　SB203 実測図



第 46 図　SB204 実測図 1

ている。Ｐ７の柱根（213）はクリの芯持ち材である。広葉樹材のためか風化も著しく芯は抜け落ちている。残存幅も 17.5 ㎝ほどしかない。SB204 の柱は針葉樹材と広葉樹材が混在している。Ｐ８では柱穴底に礎板（214）が残っていた。板は長方形の厚い板で、25.0 × 16.45 ㎝、厚さは 4.4 ㎝ある。表裏面ともに金属製の手斧で平滑面を作っている。恐らく建築部材として使われていた板を分割して礎板に再利用したものと考えられる。同じような板は掘立柱建物 SB205 のＰ５より検出した礎板（218・219）がある。それぞれ接合点はないが同一材から割り出された可能性が高い。掘立柱建物 SB204 と SB205



P2
1．青灰色粘質土（5BG 6/1）
2．青灰色粘質土（5BG 5/1）：砂粒・粘土塊含む
3．緑灰色粘質土（10G 5/1）：砂粒含む

P4
1．青灰色粘質土（5Y 6/1）：砂粒含む
2．青灰色砂質シルト（5Y 6/1）：炭化物含む
3．緑灰色粘質土（5Y 6/1）
4．暗青灰色粘質土（7.5Y 5/1）：粘土塊を斑点状に含む
5．緑灰色粘質土（10G 5/1）
6．灰色粘質土（N 5/ ）：砂粒含む
7．青灰色粘質土（5BG 5/1）：粘土塊を斑点状に含む
8．灰色砂質土（N 4/ ）

P3
1．緑灰色粘質土（10G 6/1）：砂粒含む
2．緑灰色粘質土（10G 5/1）
3．青灰色粘質土（5BG 6/1）：砂粒・炭化物含む

P5
1．灰白色砂質粘土（N 7/ ）
2．灰色粘土（N 6/ ）
3．明オリーブ灰色粘土（2.5GY 7/1）
4．明オリーブ灰色砂質粘土（2.5G 7/1）

P6
1．オリーブ灰色粘質土（5GY 6/1）：炭化物、粘土塊を斑点状に含む
2．青灰色粘質土（5BG 5/1）：炭化物・粘土含む
3．青灰色粘質土（5BG 6/1）：粘土塊含む
4．緑灰色粘質土（10G 6/1）

P7
1．明オリーブ灰色粘質土（5GY7/1）：炭化物多く含む
2．明青灰色粘質土（5BG4/1）
3．緑灰色粘質土（10G5/1）：炭化物含む

P8
1．オリーブ灰色砂質土（2.5GY6/1）：炭化物含む
2．オリーブ灰色砂質土（5GY6/1）：炭化物含む
3．オリーブ灰色砂質土（2.5GY6/1）
4．明オリーブ灰色砂質土（5GY7/1）
5．緑灰粘質土（10G5/1）
6．青灰色粘質土（5BG6/1）
7．緑灰色粘質土（10G5/1）

P9
1．オリーブ褐色粘質土（2.5Y4/6）
2．明緑灰色粘質土（5G7/1）
3．オリーブ灰色粘質土（5GY5/1）：炭化物含む
4．明緑灰色粘質土（10G7/1）：粘土塊を斑点状に含む
5．灰色粘質土）N6/）：粘土塊含む

P10
1．暗灰色粘質土（5BG4/1）：粘土塊、炭化物を斑点状に含む
2．緑灰色粘質シルト（10G5/1）：粘土塊を斑点状に含む
3．緑灰色粘質土（10G5/1）：木片多く含む

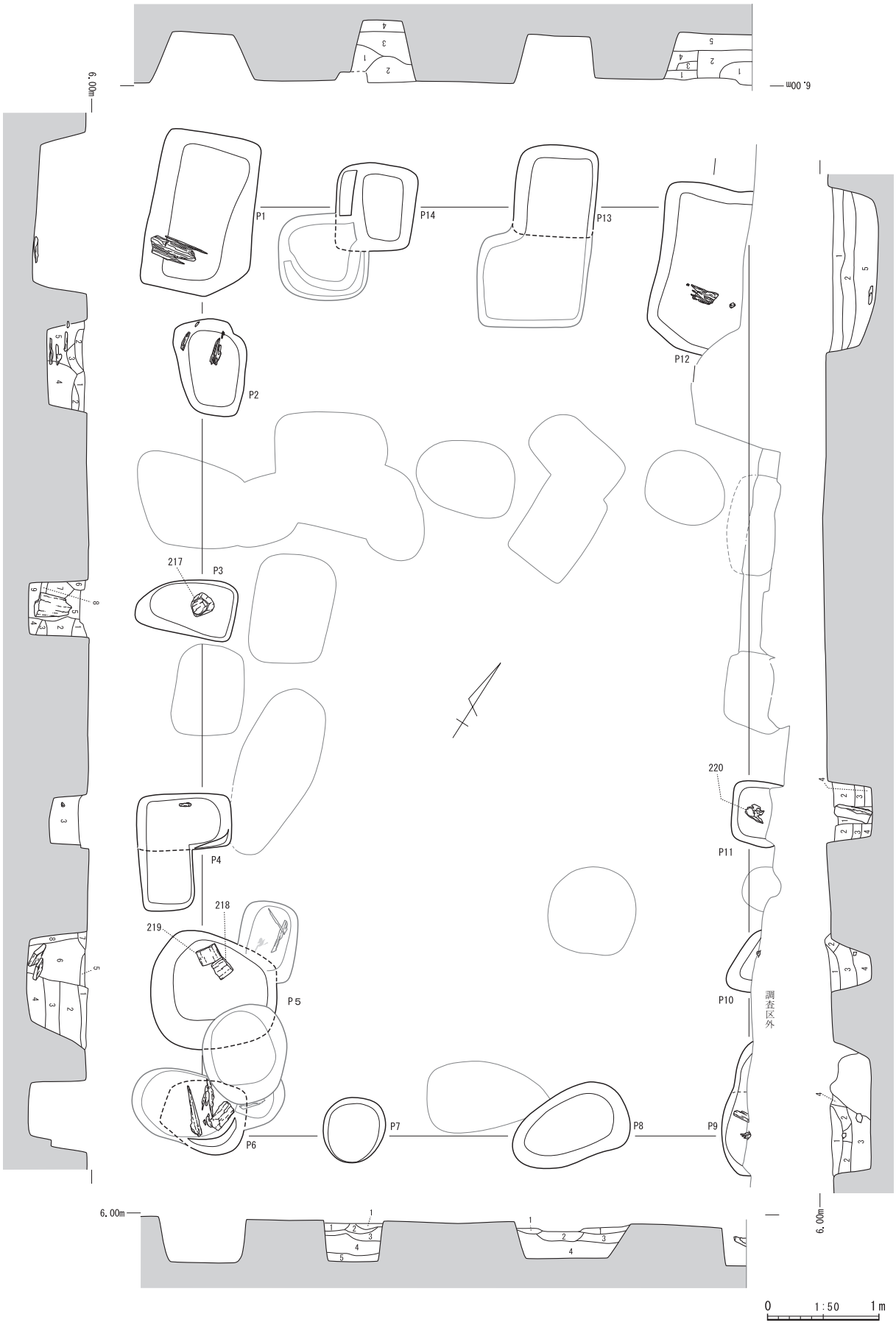
P1・11
1．オリーブ褐色砂質シルト（2.5Y4/4）：炭化物含む
2．緑灰色粘質シルト（10G5/1）：炭化物含む
3．青灰色粘質土（5BG5/1）
4．暗青灰色粘質土（5BG4/1）：砂粒僅かに含む
5．オリーブ灰色砂質シルト（2.5GY6/1）：粘土塊を斑点状に含む
6．暗オリーブ灰色砂質粘土（2.5GY4/1）：砂・炭化物含む
7．オリーブ褐色砂質シルト（2.5Y4/3）
8．オリーブ褐色砂質シルト（2.5Y4/3）
9．青灰色砂質シルト（5BG6/1）：砂・粘土塊を斑点状に含む
10．緑灰色砂質シルト（5BG5/1）:9層より砂質が強く混ざりがない
11．緑灰色粘質シルト（10G6/1）：砂粒含む
12．明緑灰粘質土（5G7/1）：粘土塊と砂を斑点状に含む
13．緑灰色粘質土（10G6/1）：砂粒・粘土塊含む
14．オリーブ褐色砂質シルト（2.5Y4/3）
15．緑灰色砂質シルト（10G5/1）
16．灰色砂質土（10Y6/1）：炭化物含む
17．緑灰色粘質土（10G6/1）
18．緑灰色粘質土（5G6/1）

第 47 図　SB204 実測図２

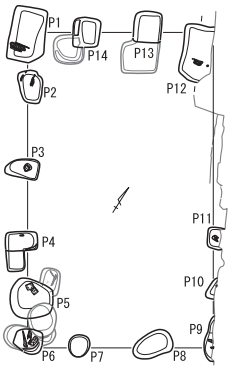
は同じ位置に建て替えられており、建て替え時に再度、礎板が使われたのかもしれない。Ｐ 10 の柱穴からはスギ材の礎板（215・216）が見つかっている。穴底に配された板の傍には拳大の礫が２つあったことから、板は柱の位置ないしは高さを調整するために入れたと考えられる。柱穴Ｐ１の覆土からは須恵器坏蓋（第 61 図 185）や箱型坏（186）が出土している。坏の底部はヘラケズリを施した無高台である。

SB205（第 48・49 図、図版 24・27）　SB205 は１区の中央東寄りで検出し、SB204 とほぼ同じ位置で切り合っている。東側の柱穴列が調査区外に掛かっているものの、ほぼ掘立柱建物の規模が判る。梁行き３間､桁行き５間の掘立柱建物跡である。梁行きは約５ｍ､桁行きは 8.3 ｍ､柱間は南北面が 1.5 ｍ強、東西面は 1.5 ～ 2.0 ｍの間隔がある。柱穴は径 60 ㎝の円形から、長軸が１ｍ程の長楕円形、もしくは隅丸方形の穴もある。柱穴の方向や形状も様々で、柱の太さに比べて大型である。掘り込みは検出面から 50 ～ 60 ㎝ほどの深さがある。14 箇所の柱穴のうち、柱根が残っていた柱穴はＰ３とＰ 11 の２箇所である。礎板または木片が出土した柱穴はＰ２・５の２箇所あった。礎板は４～５㎝の厚みのある板や、薄い板状破片である。柱根や礎板のない柱穴は９箇所であった。

柱穴Ｐ３より検出した柱根（第 62 図 217）はクリの芯持ち材である。著しい風化により芯が抜け落ち､原形を留めていない。柱根は残存長が 32.55 ㎝､最大径は 19.9 ㎝である。柱根の表面は風化が酷く、全体に収縮している。Ｐ 11 の柱根（220）はサワラ材である。風化も著しいが、おそらく元々芯がなく割り材だった可能性がある。残存幅は 18.3 ㎝ほどである。柱穴Ｐ５の底には礎板（218・219）が残っていた。板は長方形のヒノキの追い柾目板で、厚さは４～ 4.5 ㎝ほどある。金属製の手斧で両面を平滑にしてある。建築部材として使われていた板を分割して礎板に再利用したものであろう。同様の板は掘立柱建物 SB204 のＰ８より検出した礎板（214）がある。接合しないが同一材から割り出されたものだろう。Ｐ４やＰ９、Ｐ 10　の柱穴からは小木片が見つかっている。柱穴覆土からは須恵器や土師器が出土した（第 61 図 188 ～ 194）。188 は土師器の高坏脚部で円形孔が２箇所ある。189・191・193・194 は土師器の甕である。いずれも口縁を外側に強く張り出したコの字甕で薄手の作りである。190 は須恵器坏身である。一方、192 は土師器坏身で口径は 10 ㎝程度と小型である。



第 48 図　SB205 実測図 1



P2
1．灰白色砂質土（5Y 7/1）
2．灰白色砂質土（5Y 8/1）
3．灰白色砂質土（7.5Y 7/1）
4．灰白色粘土（N 7/ ）：粘土塊僅かに含む
5．灰色粘土（N 6/ ）：炭化物粒・砂粒僅かに含む

P4
3．青灰色粘質土（5BG 6/1）：砂・炭化物含む

P7
1．明褐灰色砂質土（7.5YR 7/1）：炭化物僅かに含む
2．灰白色砂質土（10YR 7/1）
3．灰白色粘質土（N 4/ ）
4．灰白色粘土（N 7/ ）
5．明オリーブ灰色砂質粘土（2.5GY 7/1）

P3
1．オリーブ褐色砂質シルト（2.5Y 4/4）
2．緑灰色粘質土（10G 6/1）：砂粒僅かに含む
3．緑灰色粘質土（10G 5/1）：砂粒含む
4．灰色粘質土（N 5/ ）：砂粒多く含む
5．青灰色粘質シルト（5BG 6/1）
6　オリーブ褐色砂質シルト（2.5Y 4/4）
7　緑灰色粘質土（10G 6/1）：砂粒含む
8　緑灰色粘質土（10G 5/1）：砂粒含む
9　灰色粘質土（N 5/）：砂粒多く含む

P5
1．オリーブ褐色砂質シルト（2.5Y 4/4）
2．緑灰色粘質土（10G 6/1）：粘土塊と砂を斑点状に含む
3．青灰色粘質土（5BG 5/1）：砂粒含む
4．青灰色粘質土（N 5/ ）：砂粒含む
5．オリーブ褐色砂質シルト（2.5Y 4/6）
6．青灰色粘質土（5BG 5/1）：砂粒含む
7．オリーブ褐色砂質シルト（2.5Y 4/4）
8．青灰色粘質土（5BG 6/1）：砂粒僅かに含む

P8
1．灰色砂質土（7.5Y 6/1）
2．灰白色砂質土（7.5Y 7/1）：炭化物多く含む
3．灰色粘土（N 5/ ）
4．灰色粘土（N 5/）：炭化物僅かに含む

P10
1．オリーブ灰色粘質土（2.5GY 6/1）：炭化物含む
2．灰オリーブ色粘質土（7.5Y 5/2）：粘土塊・炭化物含む
3．オリーブ灰色粘質土（5GY 6/1）：炭化物・粗砂含む
4．灰色粘質土（N 6/ ）：粘土塊を斑点状に含む

P11
1．青灰色粘質土（5BG 5/1）
2．明緑灰色粘質土（10G 7/1）：砂粒含む
3．緑灰色粘質土（10G 5/1）：砂粒含む
4．明青灰色粘質土（5BG 4/1）

P12
1．明オリーブ灰色粘土（2.5GY 7/1）
2．灰色粘土（N 5/ ）：炭化物僅かに、粘土塊含む
3．灰色粘土（N 5/ ）：粘土塊含む
4．灰色粘土（N 6/ ）：粘土塊含む
5．灰色砂質土（10Y 6/1）：粘土塊含む

P14
1．灰白色粘質土（N 7/ ）：粘土塊僅かに含む
2．明オリーブ灰色砂質粘土（2.5GY 7/1）
3．灰色砂質粘土（N 6/ ）
4．灰色砂質土（N 6/ ）

第 49 図　SB205 実測図２

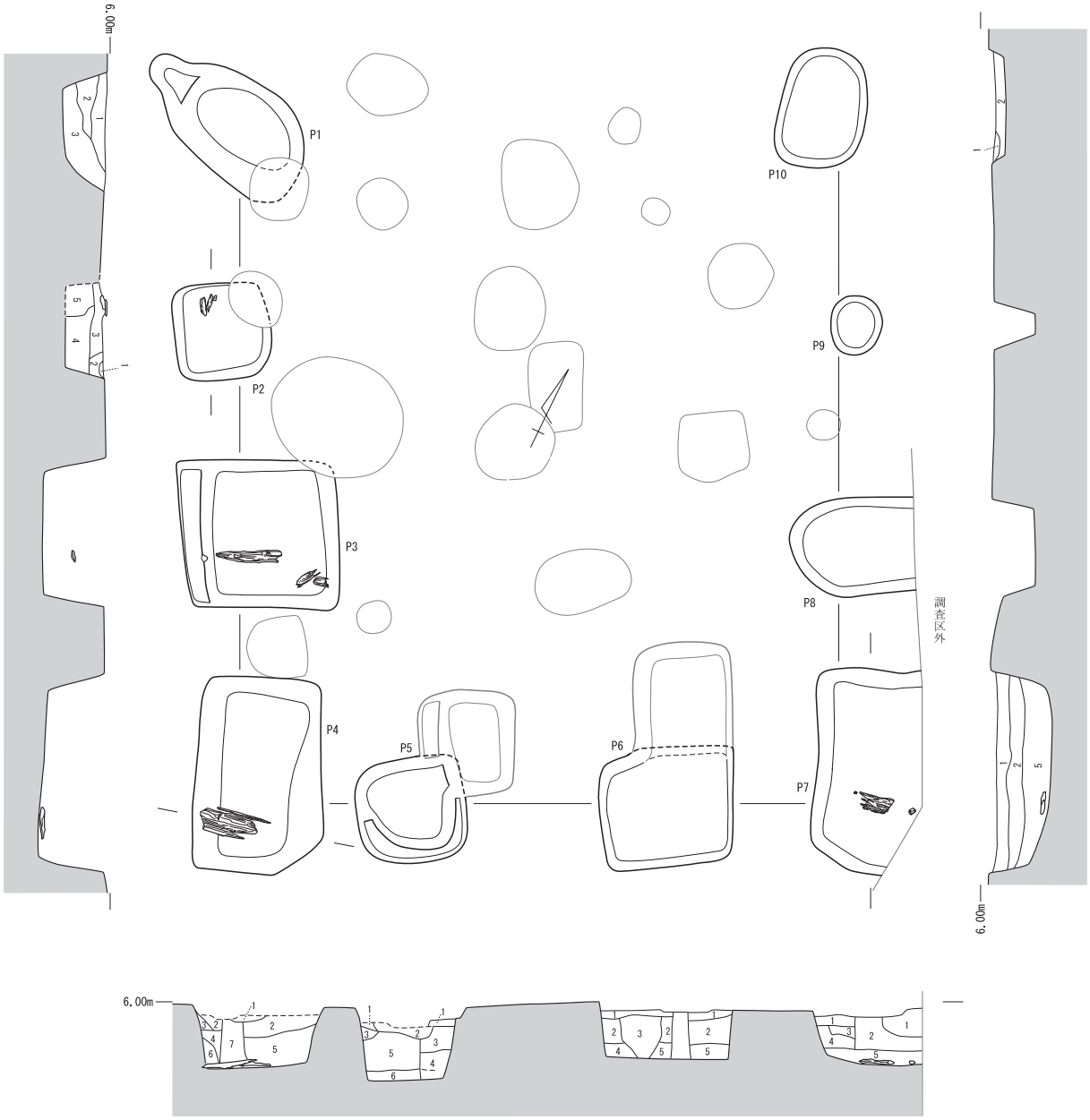
SB206（第 50 図）　SB206 は１区の北端で検出した掘立柱建物跡である。SB207、SB208、SB209 とほぼ同じ位置で切りあっている。また SB205 の北側梁行きの柱穴列と切り合っている。SB206 の北側柱穴列は調査区外に掛かっているため建物の規模は不明である。梁行きは３間、桁行きは３間以上の掘立柱建物跡である。梁行きは 4.4 m、桁行きは残存しているのが約５m、柱間は 1.5 ～ 2.0 mの間隔がある。柱穴は 60 ～ 80 ㎝の楕円形から、長軸が１mを超える隅丸方形の穴もある。柱穴の形状は様々で、柱に比べて穴が大型である。掘り込みは検出面から 40 ～ 50 ㎝ほどの深さがある。10 箇所の柱穴は柱根や礎板が残っていたところはなく、薄い板状の木片が出土した柱穴はＰ２～４、Ｐ７の４箇所であった。木片はいずれも実測に耐えうる残存状況ではなかった。

柱穴Ｐ４の覆土からは古式土師器の台付甕（第 61 図 **187**）、Ｐ６覆土からは土師器甕（**195**）、Ｐ 10 では灰釉陶器（**196**）が出土した。**187** は胎土が白く非常に薄手の作りであることからＳ字状口縁甕の可能性がある。**195** は口縁が外に張り出したコの字甕である。**196** は口径 14 ㎝程の灰釉陶器の碗である。

SB207（第 51 図）　SB207 は１区の北西端で検出した掘立柱建物跡である。また SB206 の西側柱穴列の一部と切り合っている。建物の西側は調査区外に掛かっているため建物の規模は不明である。他の掘立柱建物と違い、長軸方向は東西に向いている。梁行きは２間、桁行きは３間以上の掘立柱建物跡である。梁行きは３m、桁行きは残存しているのが約５m、柱間は 1.5 ～ 2.0 mの間隔がある。柱穴は 50 ㎝程の円形から､長軸が 70 ㎝程の隅丸方形もある。柱穴の形状は統一されておらず､他と比べて小さい。掘り込みは検出面から 40 ～ 50 ㎝ほどの深さがある。柱穴内に柱根や礎板が残っていたところはなく木片が出土している。Ｐ５～７で出土した木片は柱本体か添え木程度か判断がつかないほど小片であった。柱穴Ｐ３の底には薄い木片が敷かれていたが、いずれも実測に耐えうる残存状況ではなかった。

柱穴Ｐ２の覆土では土師器高坏の坏部（第 61 図 **197**）が出土したほか、他の柱穴でも土師器の小片が見つかっている。

SB208（第 52・53 図）　SB208 は１区の北端から 2-1 区の南側にまたがって検出した掘立柱建物跡である。SB206 や SB207 とほぼ同じ位置で切り合っている。建物の中央が排水溝に掛かっているものの、掘立柱建物の全容は判る。梁行き３間、桁行き４間の規模をもつ掘立柱建物である。梁行きは 4.5 m、



P1
1．灰黄褐色砂質土（2.5Y 7/2）
2．灰色砂質土（5Y 5/1）：炭化物含む
3．青灰色粘質土（5BG 6/1）

P5
1．灰色粘質土（5Y 5/1）
2．明オリーブ灰色砂質土（2.5GY 7/1）
3．灰色砂質粘土（7.5Y 6/1）
4．灰色粘土（N 6/ ）
5．灰色粘土（N 6/ ）：粘土塊含む
6．灰色粘土（N 6/ ）：砂粒含む

P10
1　灰白色砂質土（5Y 8/1）
2　オリーブ灰色粘土（2.5GY 6/1）：粘土塊含む

P2
1．灰白色砂質土（5Y 7/1）
2．灰オリーブ色砂質土（5Y 4/2）：炭化物含む
3．黄褐色砂質土（10YR 5/6）：炭化物・木片含む
4．緑灰色粘質土（10G 5/1）
5．青灰色粘質土（10BG 6/1）

P6
1．灰白色砂質土（5Y 7/1）
2．明オリーブ灰色粘土（2.5GY 7/1）
3．オリーブ灰色粘土（2.5GY 6/1）
4．明オリーブ灰色粘土（2.5GY 7/1）：粘土塊僅かに含む
5．オリーブ灰色粘土（2.5GY 6/1）

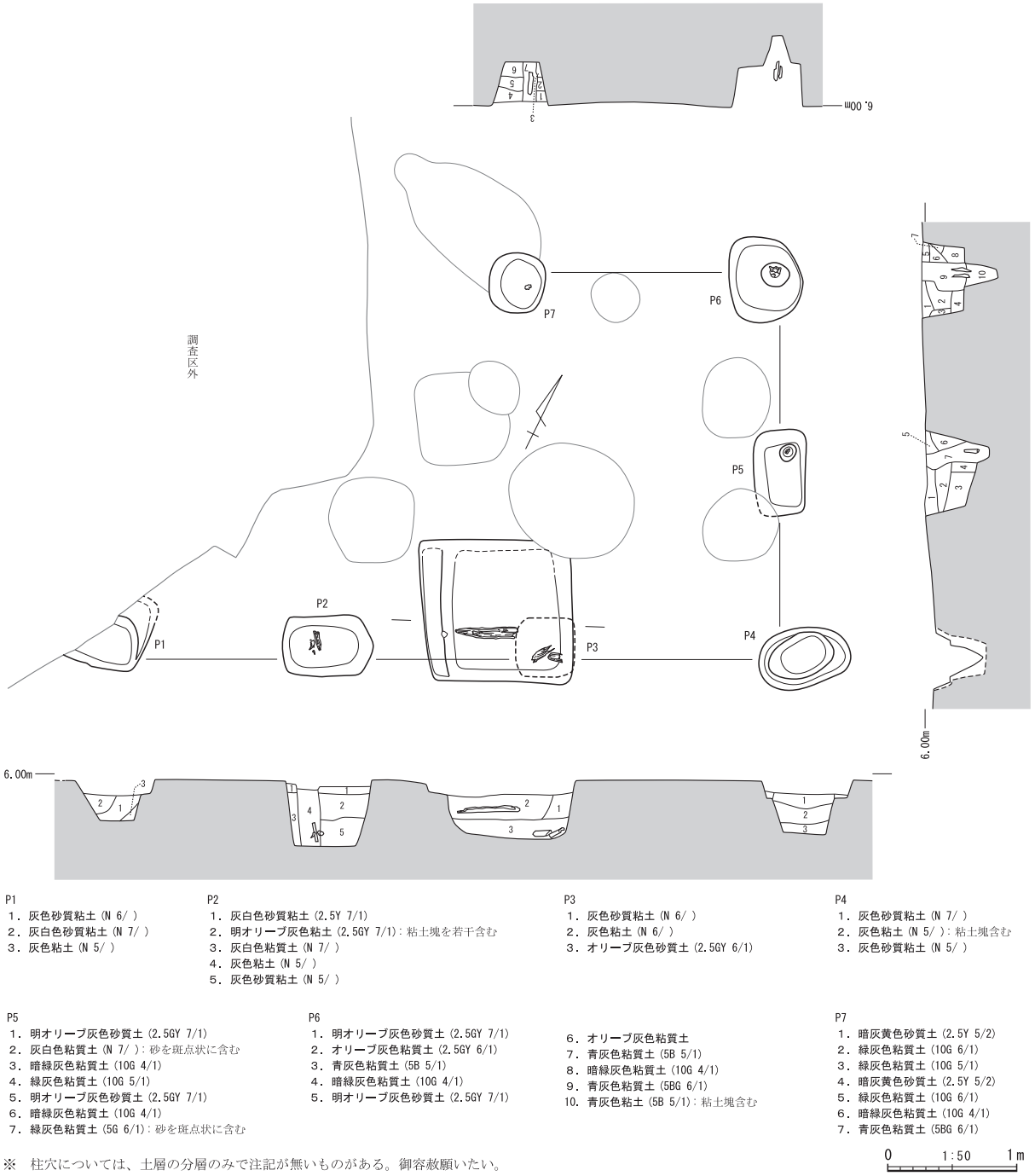
P4
1．灰白色砂土（2.5GY 8/1）
2．明オリーブ灰色粘質土（2.5GY 7/1）：粘土塊含む
3．明オリーブ灰色粘土（2.5GY 7/1）
4．明オリーブ灰色砂質粘土（2.5GY 7/1）
5．オリーブ灰色粘土（2.5GY 6/1）：粘土塊僅かに含む
6．オリーブ灰色粘土（2.5GY 6/1）
7．オリーブ灰色粘土（2.5GY 6/1）：粘土塊含む

P7
1　明オリーブ灰色粘土（2.5GY 7/1）
2　灰色粘土（N 5/ ）：炭化物を若干、粘土塊含む
3　灰色粘土（N 5/ ）：粘土塊含む
4　灰色粘土（N 6/ ）：粘土塊含む
5　灰色砂質土（10Y 6/1）：粘土塊含む

0　1:50　1m

第 50 図　SB206 実測図

桁行きは7.5ｍ、柱間は狭いところで1.5ｍ、広いところでは2.5ｍの間隔がある。柱穴は径50～60㎝から最大１ｍ程の円形穴もある。柱穴の大きさは他の建物に比べて小型のほうである。掘り込みは検

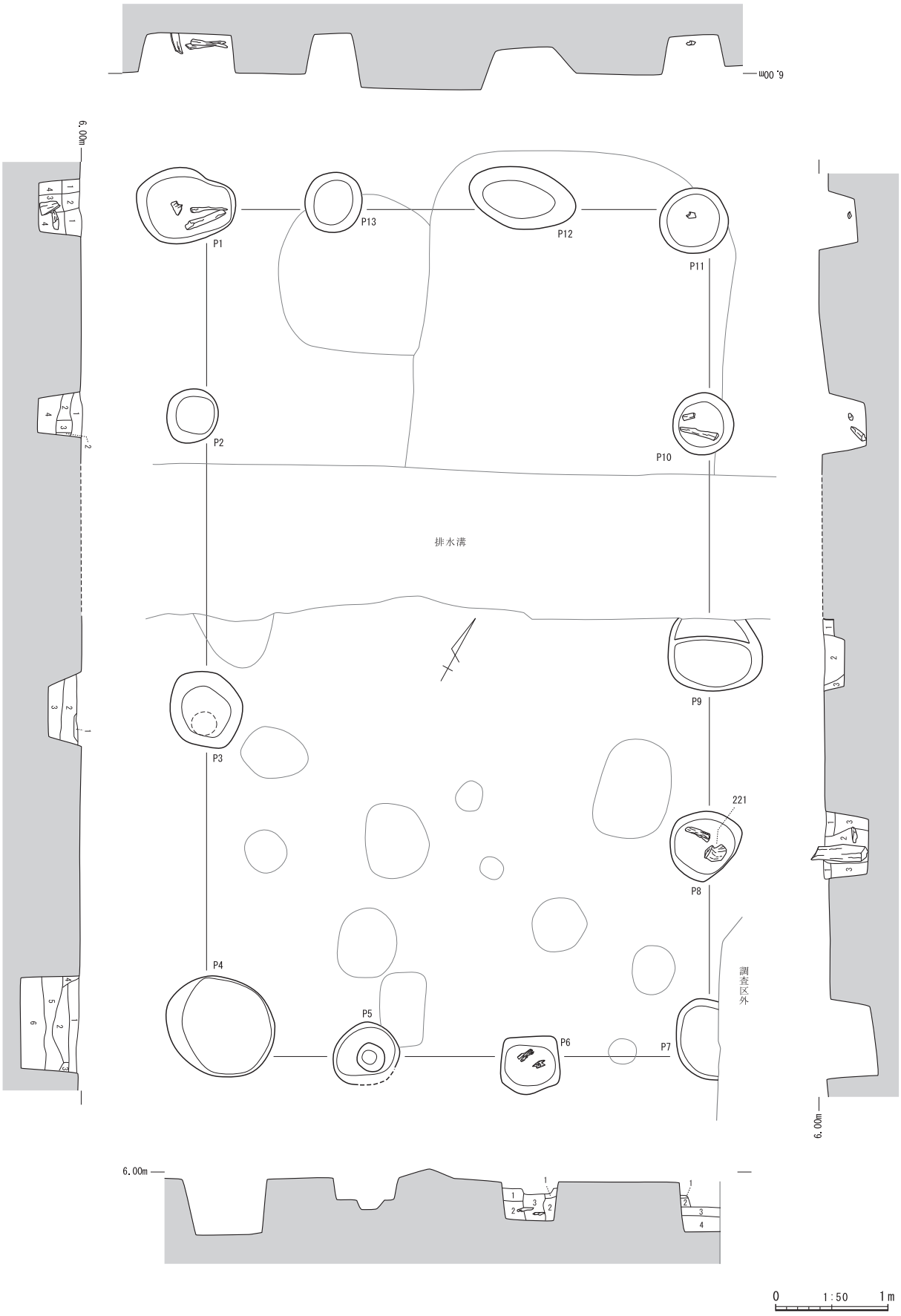


第 51 図　SB207 実測図

出面から 25 ～ 50 ㎝ほどの深さがある。13 箇所の柱穴のうち、柱根が残っていた柱穴はＰ８のみである。穴底に木片が出土した柱穴はＰ１・６・８・10・11 の５箇所あった。

柱穴Ｐ８より検出した柱根（第 63 図 221）はコナラ節の芯持ち材である。著しい風化により芯が抜け落ちている。柱根の表面は風化が酷く全体に収縮しているが、恐らく丸柱だったと思われる。柱根は残存長が 50.3 ㎝、最大径は 13.5 ㎝である。

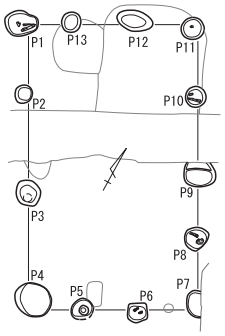
柱穴覆土からは須恵器や土師器が出土した（第 61 図 198 ～ 200）。Ｐ４覆土から土師器坏身（198）、Ｐ 10 覆土では土師器甕片のほか、須恵器平瓶が見つかっている。覆土内から出土する土器は土師器が主体である。



第 52 図　SB208 実測図 1

SB209（第 54 図）　SB209 は１区の北端で検出した掘立柱建物跡である。SB206 や SB207 などと同じ位置で切り合っている。建物の南東側は判らず、掘立柱建物の梁桁の向きや全体の規模等は不明である。柱穴は４箇所あり、柱間は狭いところで 1.7 m、広いところで 2.5 mの間隔がある。柱穴は径 50 ㎝程の円形で、大きさは他の建物に比べて小型である。掘り込みは検出面から 20 ～ 40 ㎝ほどの深さがある。４箇所の柱穴のうちＰ４のみ柱根が残っていた。穴底に木片が出土した柱穴はＰ２～４の３箇所あった。Ｐ１には柱の抜き去り跡があった。

柱穴Ｐ４より検出した柱根（第 63 図 **222**）はクリの芯持ち材である。著しい風化により芯が大きく抜け落ちている。柱根の表面は風化が酷く全体に収縮しているが、辛うじて丸柱だったことがわかる。



P1
1．灰色砂質土（2.5Y 7/ ）
2．灰色粘土（5Y 5/1）
3．灰色粘土（5Y 6/ ）
4．灰色粘土（5Y 4/1）

P2
1．灰白色砂質土（2.5Y 7/）
2．灰色粘土（5Y 6/）
3．灰色粘土（5Y 6/）
4．灰色粘土（5Y 5/1）

P3
1．黄灰色砂質土（2.5Y 6/2）：炭化物含む
2．黄褐色砂質土（10YR 5/8）：土器片含む
3．緑灰色粘質土（10G 6/1）

P4
1．灰オリーブ粘質土（5Y 5/3）
2．緑灰色粘質土（10G 6/1）
3．青灰色粘質土（5B 6/1）：土器片含む
4．暗オリーブ色粘質土（7.5Y 4/3）
5．暗緑灰色粘質土（5BG 4/1）
6．青灰色粘質土（10BG 5/1）

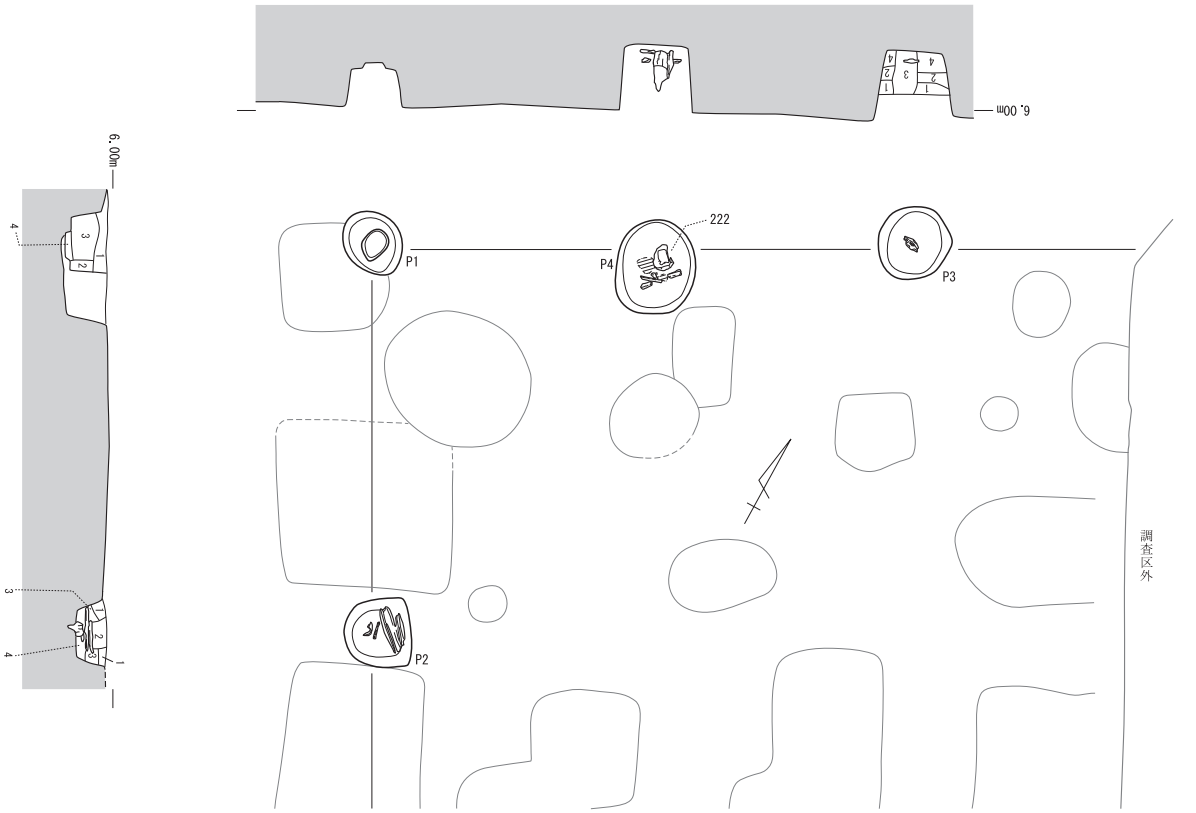
P6
1．明オリーブ灰色砂質土（2.5GY 7/1）
2．灰色粘土（N 6/ ）
3．灰色粘土（N 5/ ）

P8
1．灰白色粘土（7.5Y 7/1）
2．灰色粘土（N 5/ ）
3．灰色粘土（N 6/ ）

P7
1．灰白色砂質粘土（5Y 7/1）
2．オリーブ灰色砂質土（2.5GY 6/1）
3．灰色砂質土（7.5Y 6/1）
4．灰色粘土（N 4/ ）：炭化物僅かに含む

P9
1．灰白色粘質土（5Y 7/1）
2．灰白色粘質土（10Y 7/1）
3．灰色粘土（N 4/ ）

第 53 図　SB208 実測図２



P1
1．明黄褐色砂質土（10YR 6/6）：炭化物含む
2．緑灰色粘質土（5G 5/1）
3．緑灰色粘質土（10G 6/1）：炭化物含む
4．暗緑灰色粘質土（10G 4/1）

P2
1．灰白色粘質土（N 7/ ）
2．灰白色粘土（N 7/ ）
3．灰色粘土（N 5/ ）
4．灰色粘土（N 6/ ）：粘土塊含む

P3
1．灰白色粘質土（10YR 7/1）
2．灰色粘土（N 6/ ）
3．灰色粘土（N 7/ ）
4．灰色粘土（N 6/ ）：砂粒僅かに含む

0　1:50　1m

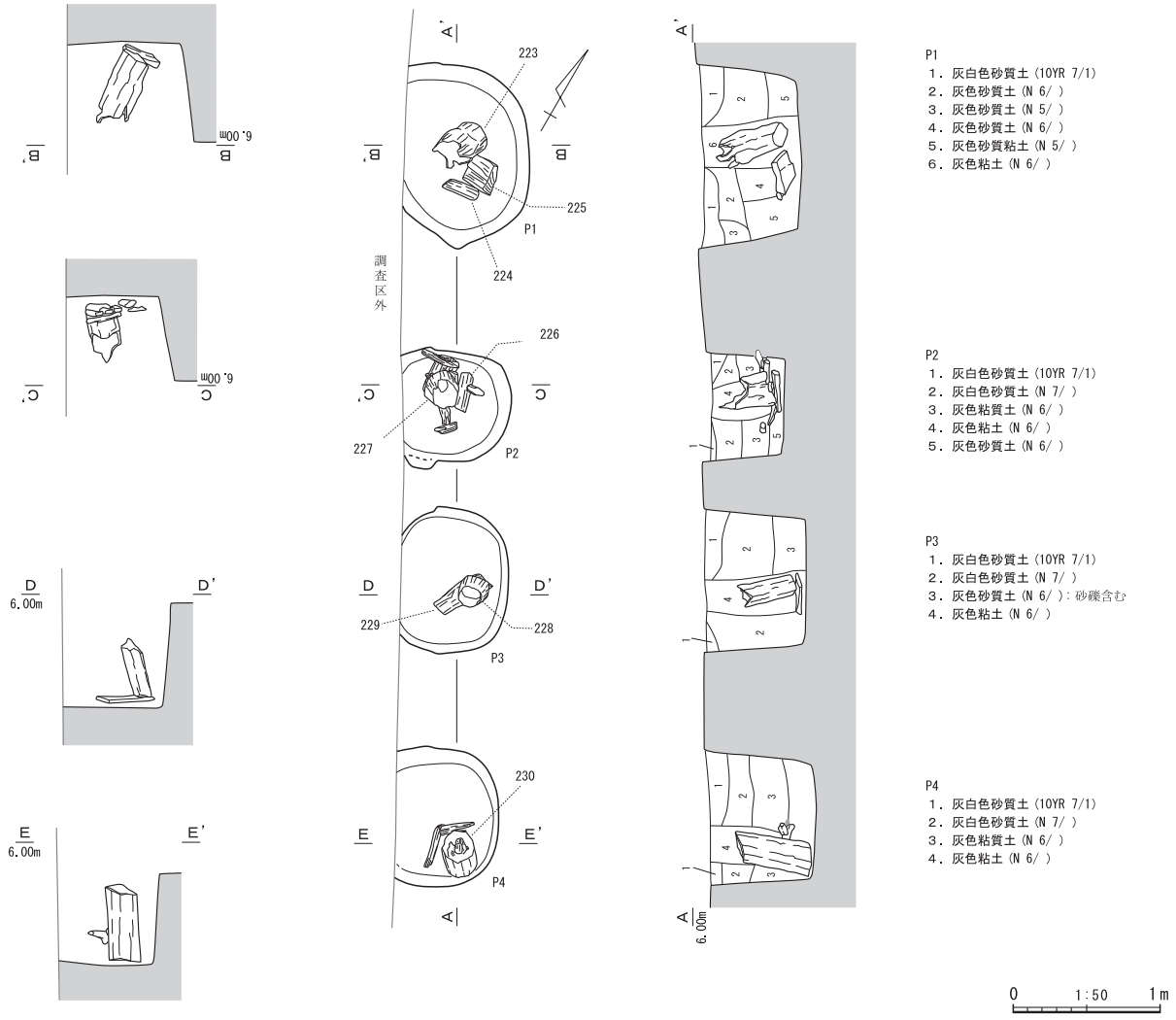
第 54 図　SB209 実測図

柱根は残存長が 24.7 ㎝、最大径は 16. 7 ㎝である。

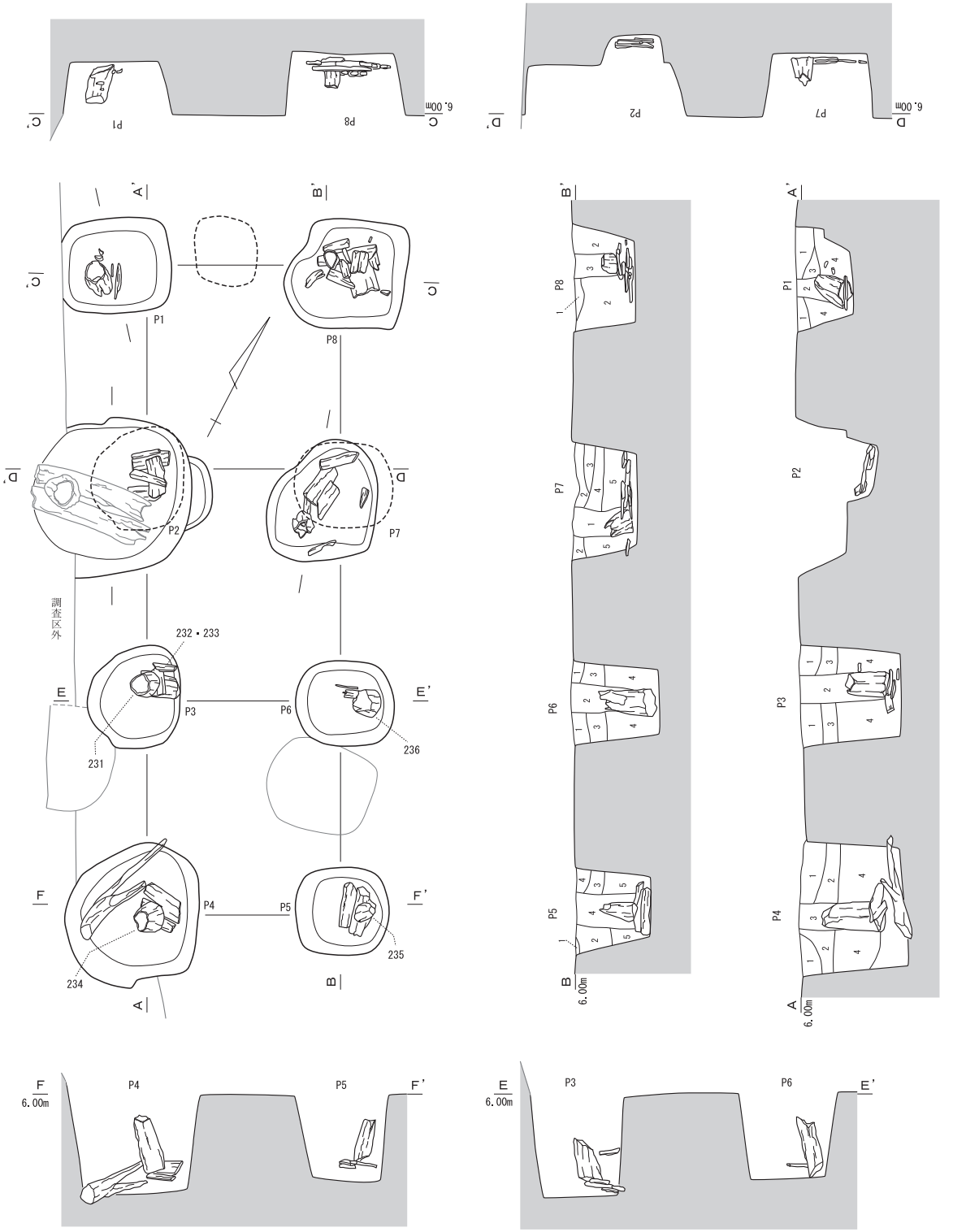
柱穴覆土からは土師器の小破片が出土した。覆土内から出土する土器は土師器が主体である。

SB210（第 55 図、図版 25・27）　１区の北側西端で SB210 を検出した。ちょうど SB207 の南側に位置し、同じ位置で切り合う建物はない。東側の柱穴列のみが残っている。西側が調査区外のため掘立柱建物の規模等は不明である。列としては２区の SB211 や SB212、SB214 と同じ方向性をもっている。恐らく同じ建物群の一部であろう。柱間は３間で５ｍの掘立柱建物跡である。柱間は北側から 1.7 ｍ、1.5 ｍ、1.7 ｍの間隔がある。柱穴の大きさは径１ｍの大型で、形状は楕円形である。掘り込みは検出面から 60 ～ 80 ㎝ほどの深さがある。４箇所すべての柱穴に柱根や礎板・根絡み等が残っていた。礎板は厚みのある板や、薄い板状破片である。

柱穴より検出した柱根（第 64 図 **223** ～ **230**）はすべてクリ材であった。表面は風化により収縮しているものの、比較的残存状況は良い。Ｐ１の柱根（**223**）は残存長が 52.2 ㎝、最大径は 25.5 ㎝である。柱根の表面は風化し芯が抜け落ちている。下端部には切断時の刃物痕が残っている。表面は他の柱と同様に面加工されていた可能性が高い。柱の横にはクリ材の板が２点出土している（**224**・**225**）。礎板か根絡みの用途で使われたものであろう。Ｐ２の柱根（**227**）も風化が著しい。芯が抜け落ちているが表面の一部に面加工した痕跡がある。残存幅は 35.5 ㎝、最大径は 23.3 ㎝ほどある。**226** は柱根の下から出土した。礎板の役割を持つものであろう。柱の近くから河原礫も１点出ている。柱穴Ｐ３の柱根(**228**)



第 55 図　SB210 実測図



P1
1．灰白色砂質土（2.5Y 7 /）
2．灰色粘土（5Y 6/）
3．灰色砂質粘土（5Y 5/）
4．灰白色粘土（5Y 5/）

P3
1．灰色砂質土（2.5Y 7/）
2．灰色砂質粘土（N 8/ ）
3．灰色砂質土（5Y 6/ ）
4．灰色粘土（5Y 5/1）

P4
1．灰白色砂質土（2.5Y 7/ ）
2．灰色砂質土（5Y 6/）
3．灰色粘土（5Y 6/）
4．灰白色粘土（5Y 5/1）

P5
1．灰白色砂質土（2.5Y 7/ ）
2．灰白色砂質土（N 7/ ）
3．灰白色砂質粘土（N 8/ ）
4．灰色粘土（5Y 6 /）
5．灰色粘土（5Y 5/1）

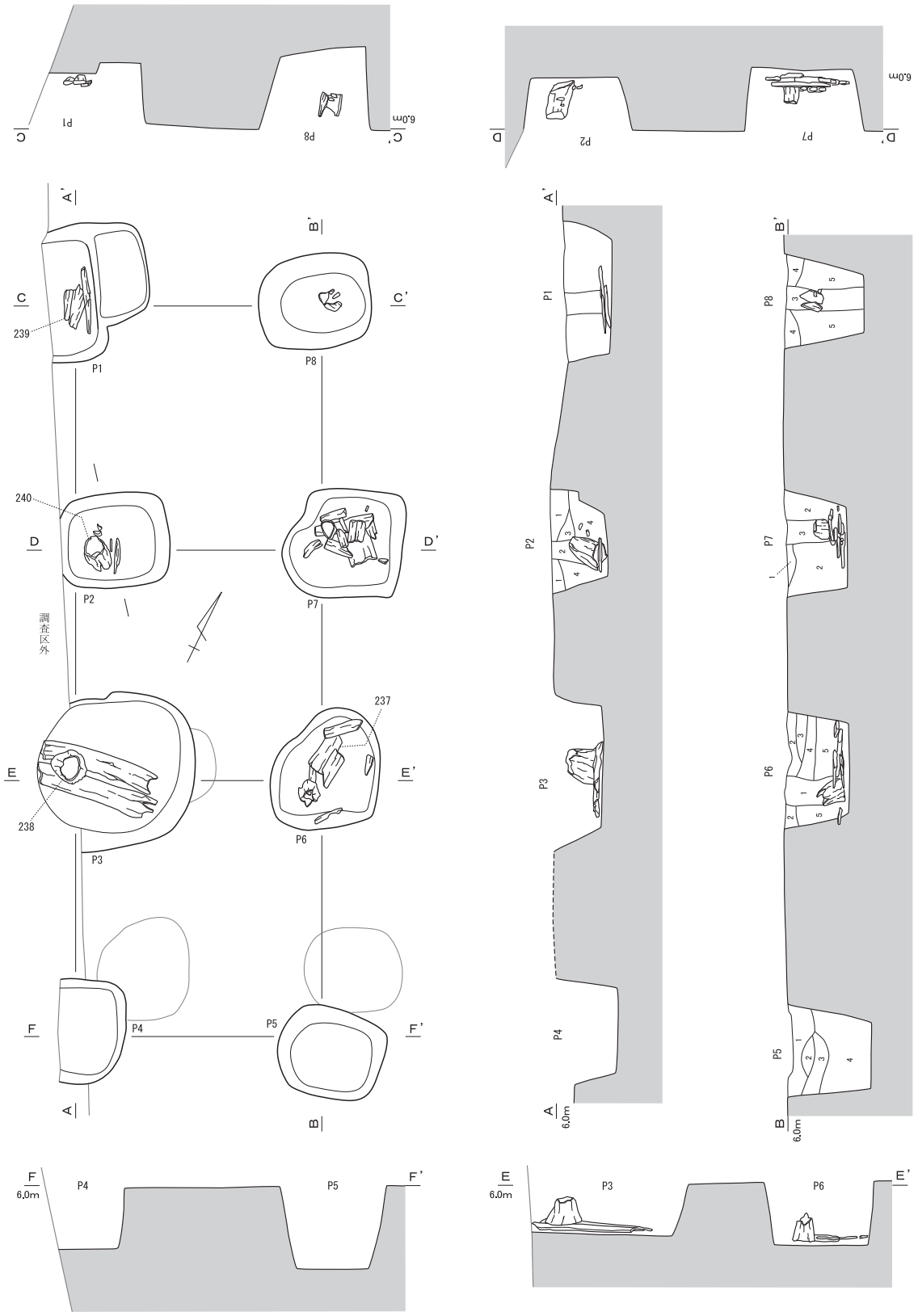
P6
1．灰白色砂質土（2.5Y 7/ ）
2．灰色砂質粘土（N 8/ ）
3．灰色粘土（5Y 6/ ）
4．灰色粘土（5Y 5/1）

P7
1．灰色粘土（5Y 6/ ）
2．灰色砂質粘土（5Y 6/ ）
3．灰色粘土（5Y 6/ ）
4．灰色粘土（5Y 6/ ）
5．灰色粘土（5Y 5/ ）

P8
1．灰色粘土（5Y 6/ ）
2．灰色粘土（5Y 5/ ）
3．灰色粘土（5Y 6/ ）

0　1:50　1m

第 56 図　SB211 実測図



P2
1．灰白色砂質土（2.5Y 7/ ）
2．灰色粘土（5Y 6/ ）
3．灰色砂質粘土（5Y 5/ ）
4．灰白色粘土（5Y 5/ ）

P5
1．灰白色砂質土（2.5Y 7/ ）
2．灰色砂質粘土（N 7/ ）
3．灰色砂質粘土（N 6/ ）
4．灰色砂質粘土（N 5/ ）

P6
1．灰色粘土（5Y 6/ ）
2．灰色砂質粘土（5Y 6/ ）
3．灰色粘土（5Y 6/ ）
4．灰色粘土（5Y 6/ ）
5．灰色粘土（5Y 5/ ）

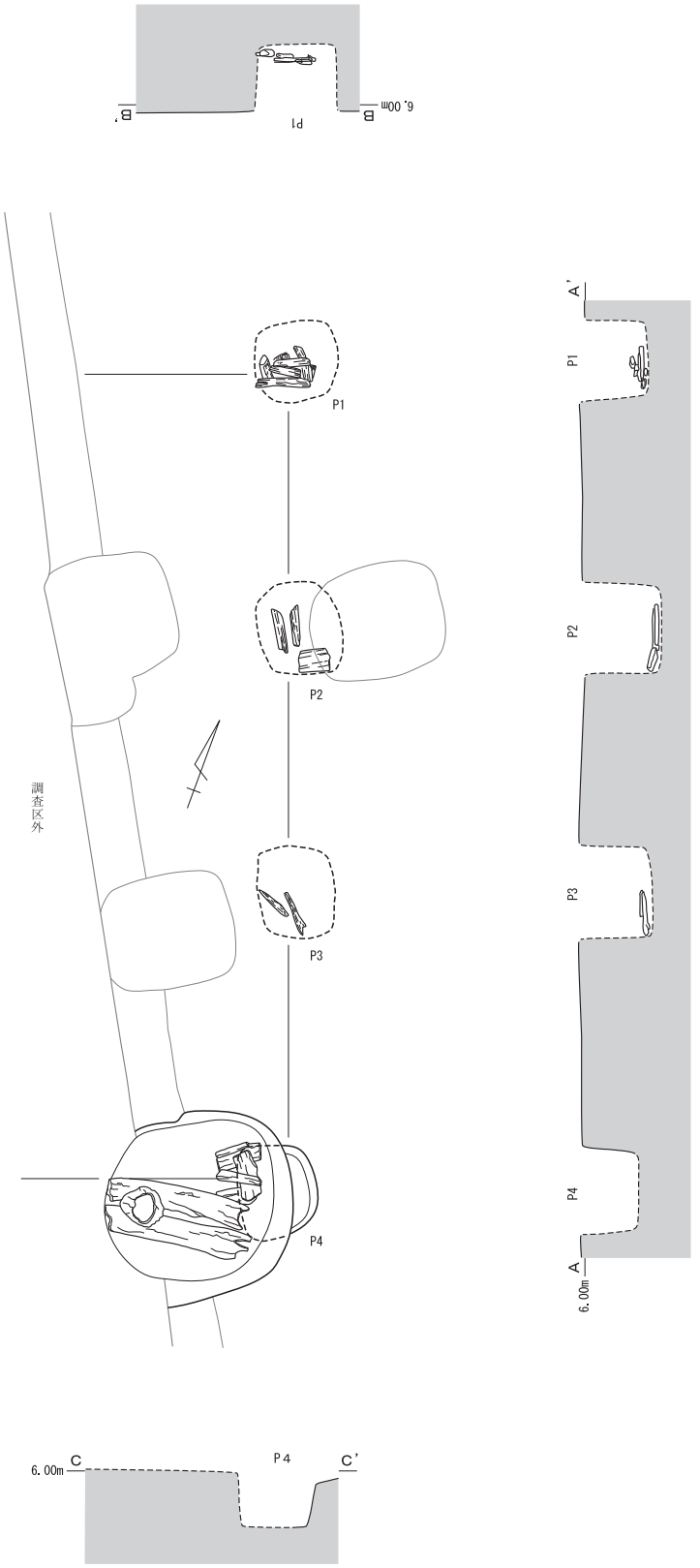
P7
1．灰色粘土（5Y 6/ ）
2．灰色粘土（5Y 5/ ）
3．灰色粘土（5Y 6/ ）

P8
1．灰色粘土（5Y 6/ ）
2．灰色粘土（5Y 6/ ）
3．灰色粘土（5Y 5/ ）

※　柱穴については、土層の分層のみで注記が無いものがある。御容赦願いたい。

0　1:50　1m

第 57 図　SB212 実測図



※SB213の柱穴は、２面検出面では確認できず、下層の調査時に礎板を確認したことで掘立柱建物と認定したものであるため、柱穴の掘形は確認できていない。このため推定ラインを破線で表現している。

0　1:50　1m

第 58 図　SB213 実測図

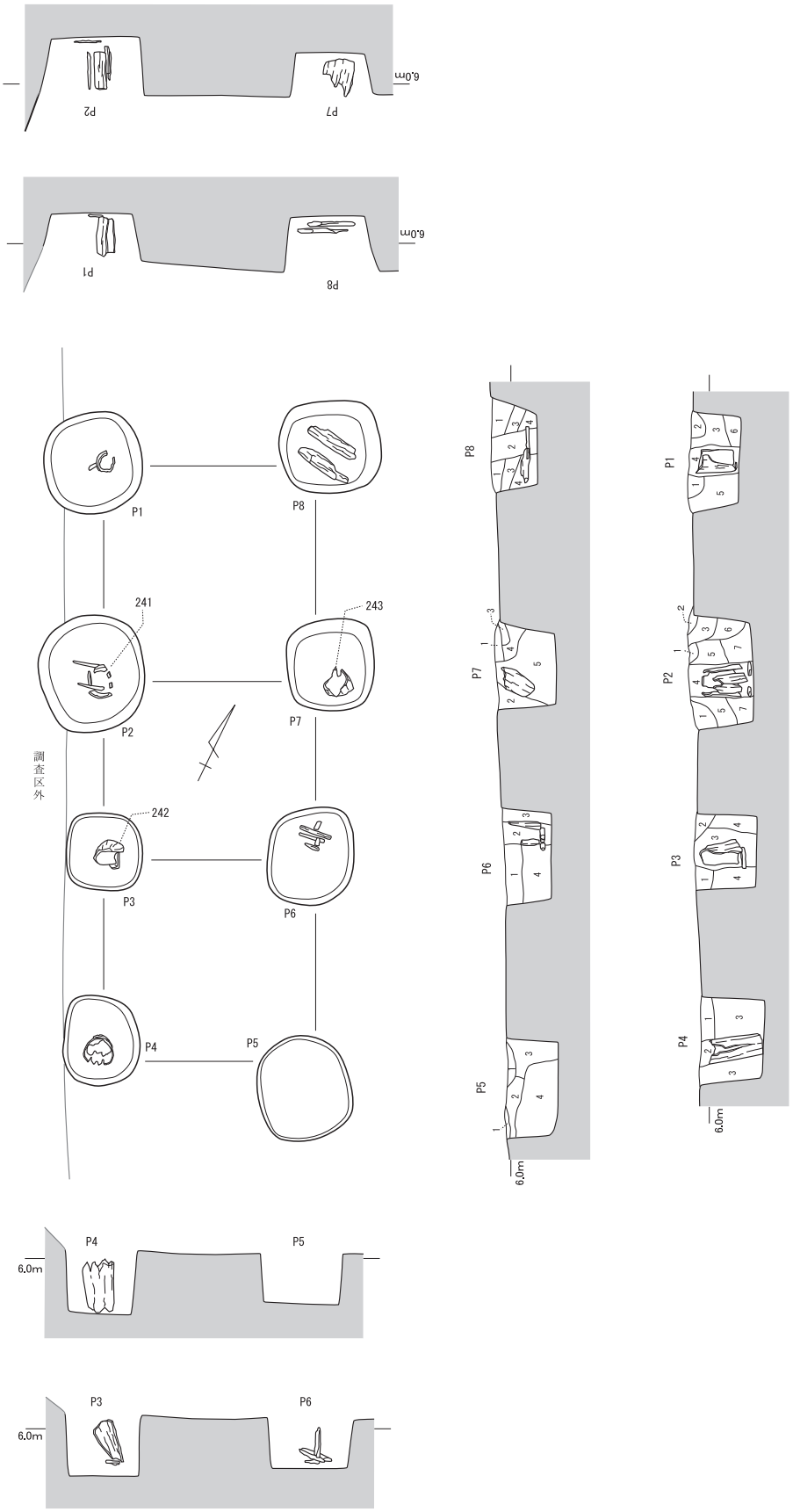
も全側面に面加工した痕跡がある。残存長は 40.7 ㎝、最大径は 19.1 ㎝ある。229 も 228 の柱下に咬ませた状態で出土していることから礎板だったのであろう。Ｐ４の柱根（230）は非常に残り具合が良い。柱の表面は最大 10 面の多面体に加工されている。下端面は平坦に削られている。柱下に敷かれた木製品はなく、周囲に一部根絡みの木片があった。SB210 は建物の一辺しか検出していないが、柱穴の規模も大きく、すべてクリ材で表面加工された柱だったことから規格統一性をもった建物と考えられる。

柱穴Ｐ２覆土からは須恵器坏身が出土した（第 61 図 201）。

SB211（第 56 図、図版 26・28）

SB211 は 2-1 区の南西端で検出した掘立柱建物跡である。ちょうど SB214 の南側に位置し、同じ位置で SB212・SB213 と切り合っている。東側の柱穴列が２列残っている状態で、西側が調査区外のため掘立柱建物全体の規模は不明である。列としては１区の SB210 や 2-1 区の SB212、SB214 と同じ方向性をもっていることから、同じ時期の建物群であろう。東西は１間、南北方向は３間が確認できた。東西の柱間は 1.6 ｍ、南北の柱間は北側から 1.7 ｍ、1.9 ｍ、1.8 ｍの間隔がある。柱穴の大きさは直径 70 ㎝から１ｍ程度のものである。形状は隅丸方形である。掘り込みは検出面から 60 ～ 80 ㎝ほどの深さがある。柱穴のうち６箇所に柱根が残り、礎板や根絡み等が残っていた。礎板は厚みのある板や、薄い板状破片である。

柱穴より検出した柱根・礎板（第 65 図 231 ～ 236）の樹種はクリまたはツブラジイ・スダジイであった。柱の表面は風化により収縮し、一部辺材



P1
1．灰白色砂質土（2.5Y 7/ ）
2．灰白色砂質土（2.5Y 7/ ）
　：土器片含む
3．灰白色砂質土（2.5Y 7/ ）
4．灰色粘土（5Y 6/ ）
5．灰色砂質土（7.5Y 5/ ）
6．灰色粘土（10Y 5/ ）

P2
1．灰白色砂質土（2.5Y 7/ ）
2．灰白色砂質土（2.5Y 7/ ）
3．灰色砂質粘土（2.5Y 7/ ）
4．灰色砂質粘土（N 8/ ）
5．灰白色粘土（5Y 6/ ）
6．灰色砂質土（2.5Y 7/ ）
7．灰色粘土（5Y 5/1）

P3
1．灰白色砂質土（2.5Y 7/ ）
2．灰白色砂質土（2.5Y 7/ ）
3．灰色粘土（5Y 6/ ）
4．灰色粘土（5Y 5/1）

P4
1．灰白色砂質土（2.5Y 7/ ）
2．灰褐色砂質粘土（7.5YR 6/2）
3．灰白色粘土（N 6/ ）

P5
1．灰白色砂質土（2.5Y 7/ ）
2．灰色粘土（N 6/ ）
3．灰色粘土（N 5/ ）
4．灰色粘土（5Y 5/1）

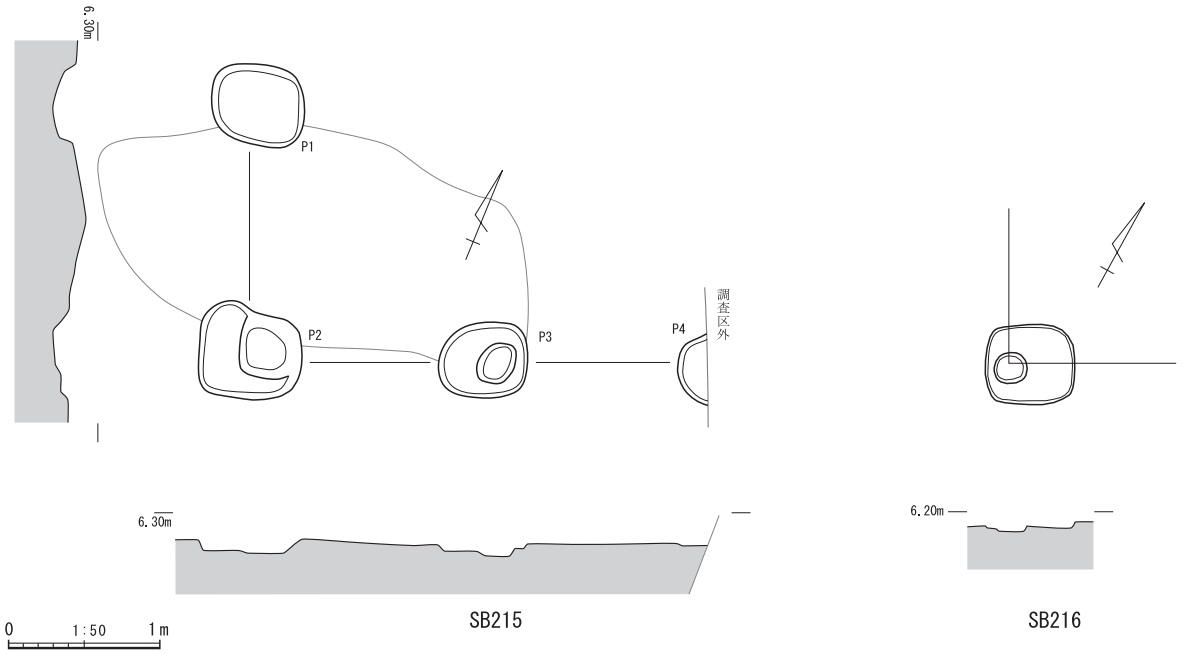
P6
1．灰白色砂質土（2.5Y 7/ ）
2．灰色粘土（5Y 6/ ）
3．灰白色砂質粘土（2.5Y 7/ ）
4．灰色粘土（5Y 5/1）

P7
1．灰白色砂質土（2.5Y 7/ ）
2．灰色粘土（5Y 5/ ）
3．灰褐色砂質土（10YR 6/1）
　：土器片含む
4．褐色粘質土（7.5YR 4/6）
5．灰色粘土（5Y 5/1）

P8
1．灰色砂質土（2.5Y 7/ ）
2．灰色粘土（5Y 6/ ）
3．灰白色粘土（5Y 7/1）
4．灰色粘土（5Y 5/1）

0　1:50　1m

第 59 図　SB214 実測図



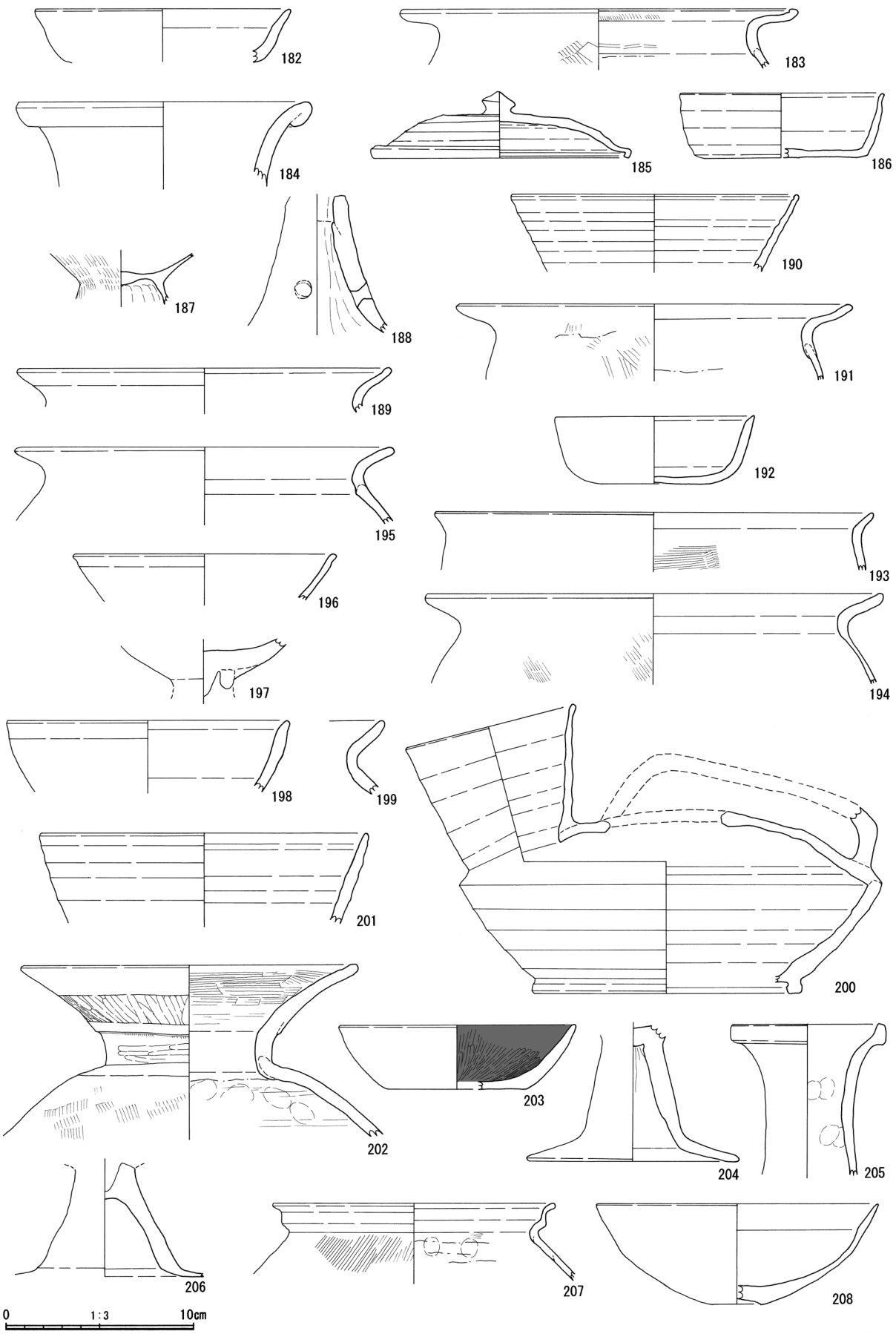
第 60 図　SB215・216 実測図

や芯材が抜け落ちている。Ｐ３の柱根（231）はツブラジイ材で、残存長が 31.8 ㎝、最大径は 18.3 ㎝である。表面は風化し辺材が抜け落ちている。下端部には切断時の刃物痕が残っている。表面の加工は風化によりわからない。柱の下にはクリ材の板が２点出土している（232・233）。礎板として使われたものであろう。礎板 232 には鉄製刃物の痕跡が残る。礎板 233 は長さ 37.1 ㎝のミカン割材である。Ｐ４の柱根（234）も風化が著しく表面の加工は見えない。残存幅は 45.8 ㎝、最大径は 23.3 ㎝ほどある。柱根の下からは礎板の役割をもつ薄い板が出土した。柱の近くから枝分かれした自然木が横倒しの状態で出ている。柱穴Ｐ５の柱根（235）はスダジイ材で全面の風化が著しい。残存長は 33.85 ㎝、最大径は 14.9 ㎝ある。柱下に数枚の板を咬ませ礎板としている。Ｐ６の柱根（236）はクリ材で表面の風化が激しい。残存する長さは 43.5 ㎝、最大径は 21.8 ㎝ある。下端面は平坦に削られている。柱下には薄い木片が敷かれていた。SB211 は建物の東側一辺２列を検出したが、すべての柱穴に礎板・根絡みが存在した。またクリやツブラジイ、スダジイ等の広葉樹を使った柱だったことから、ある程度の統一性をもっている。

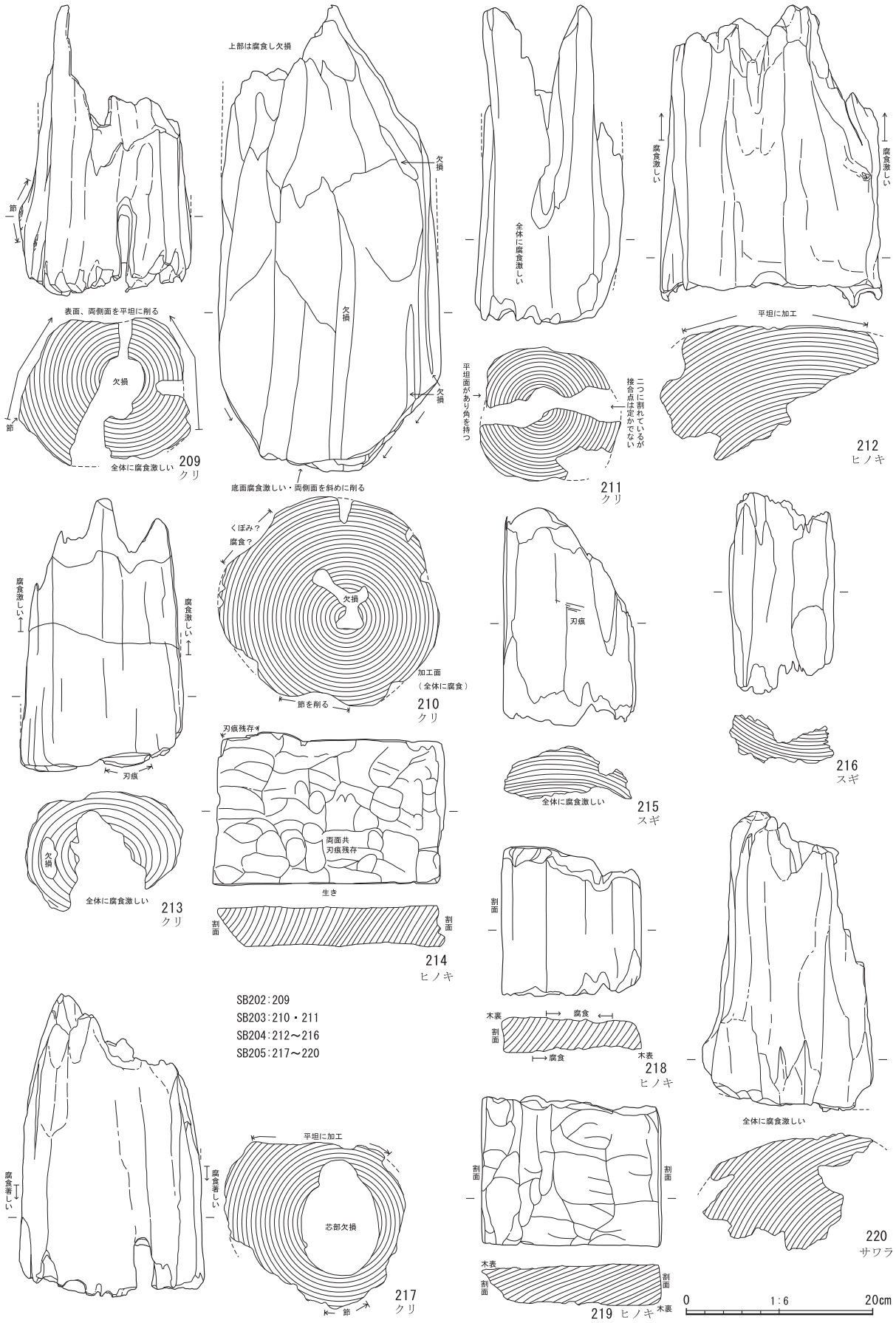
柱穴Ｐ１覆土からは古式土師器の壷が出土した（第 61 図 202）。壷の頸部から口縁部までの部分で残存の状態が良い。無紋でミガキを施した胴部に直立した頸をもち、口縁は外側へ大きく開き内面にはハケ目が残る。そのほかＰ４から灰釉陶器片も出土している。

SB212（第 57 図　図版 26・28）　SB212 は 2-1 区の南西端で SB211・213 と切り合う掘立柱建物である。特に SB211 とはほぼ同じ位置で軸がほんのわずかに東へ傾いただけである。また SB211 と同様に東側の柱穴列が２列残っている状態で、西側が調査区外のため掘立柱建物全体の規模は不明である。列としては１区の SB210 や 2-1 区の SB211 と同じ方向性をもっていることから、同じ時期の建物群であろう。東西は１間、南北方向は３間ある。東西の柱間は 2.0 ｍ、南北の柱間は北側から 2.0 ｍ、1.9 ｍ、2.1 ｍの間隔がある。柱穴の大きさは直径 90 ㎝から１ｍを超えるものもある。形状は隅丸方形や不定形である。掘り込みは検出面から 50 ～ 70 ㎝ほどの深さがある。柱穴のうち４箇所に柱根が残っている。穴底には礎板や根絡み等が残っていた。礎板は厚みのある板や、薄い板状破片である。

柱穴より検出した柱根・礎板（第 65 図 237・238、第 66 図 239・240）はクリまたはツブラジイ・ス



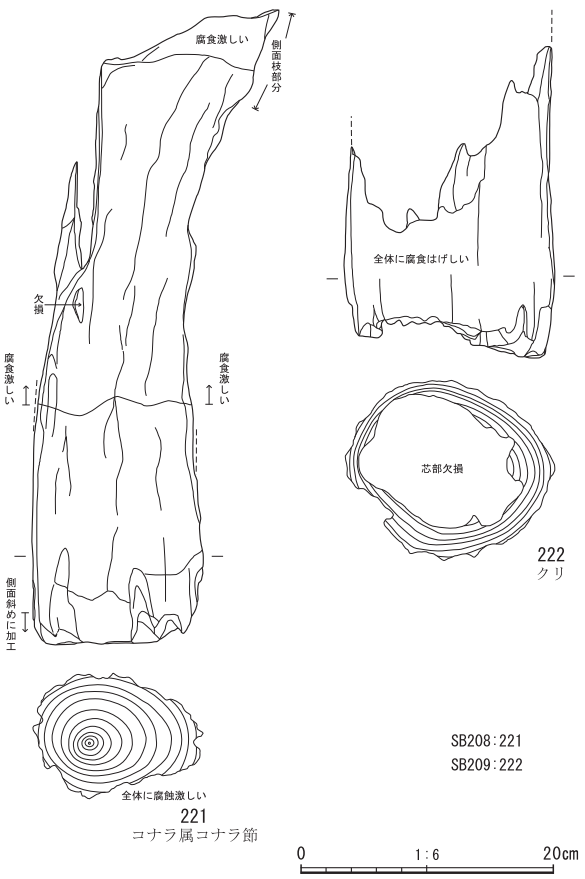
第 61 図　SB201・202・203・204・205・206・207・208・210・211・212・213・214 出土遺物実測図



第 62 図　SB202・203・204・205 出土遺物実測図

ダジイなどの樹種であった。柱の表面は風化により収縮し、芯材が抜け落ちている。Ｐ１の柱根（239）はツブラジイ材で、残存長が 25.8 ㎝、最大径は 19.0 ㎝である。表面は風化して収縮し半身がない状態である。Ｐ２の柱根（240）も風化が著しい。クリ材の柱で芯が抜け落ちている。残存幅は 31.9 ㎝、最大径は 20.3 ㎝ほどある。柱根の下からは礎板の役割をもつ薄い板が出土した。柱穴Ｐ６の礎板（237）はスダジイの板目材である。残存長は 33.0 ㎝で 5.0 ㎝程の厚みがある。Ｐ３の柱根（238）はクリ材で表面の風化が激しく芯材部分が腐食によりなくなっている。残存する長さは 28.8 ㎝、最大径は 25.1 ㎝ある。柱下には薄い木片が折り重なるように敷かれていた。SB212 の東側２列の柱穴に使われていた柱や礎板・根絡みはクリやツブラジイ、スダジイ等の広葉樹を使い、針葉樹は使われていない。SB210 や SB211 も樹種選択の特徴が良く似ている。

柱穴Ｐ１覆土からは内黒の土師器杯（第 61 図 203）や土師器の高坏脚部（204）が出土した。203 は碗の内面を放射状に磨いてある。そのほかＰ７から奈良時代の須恵器片も出土している。

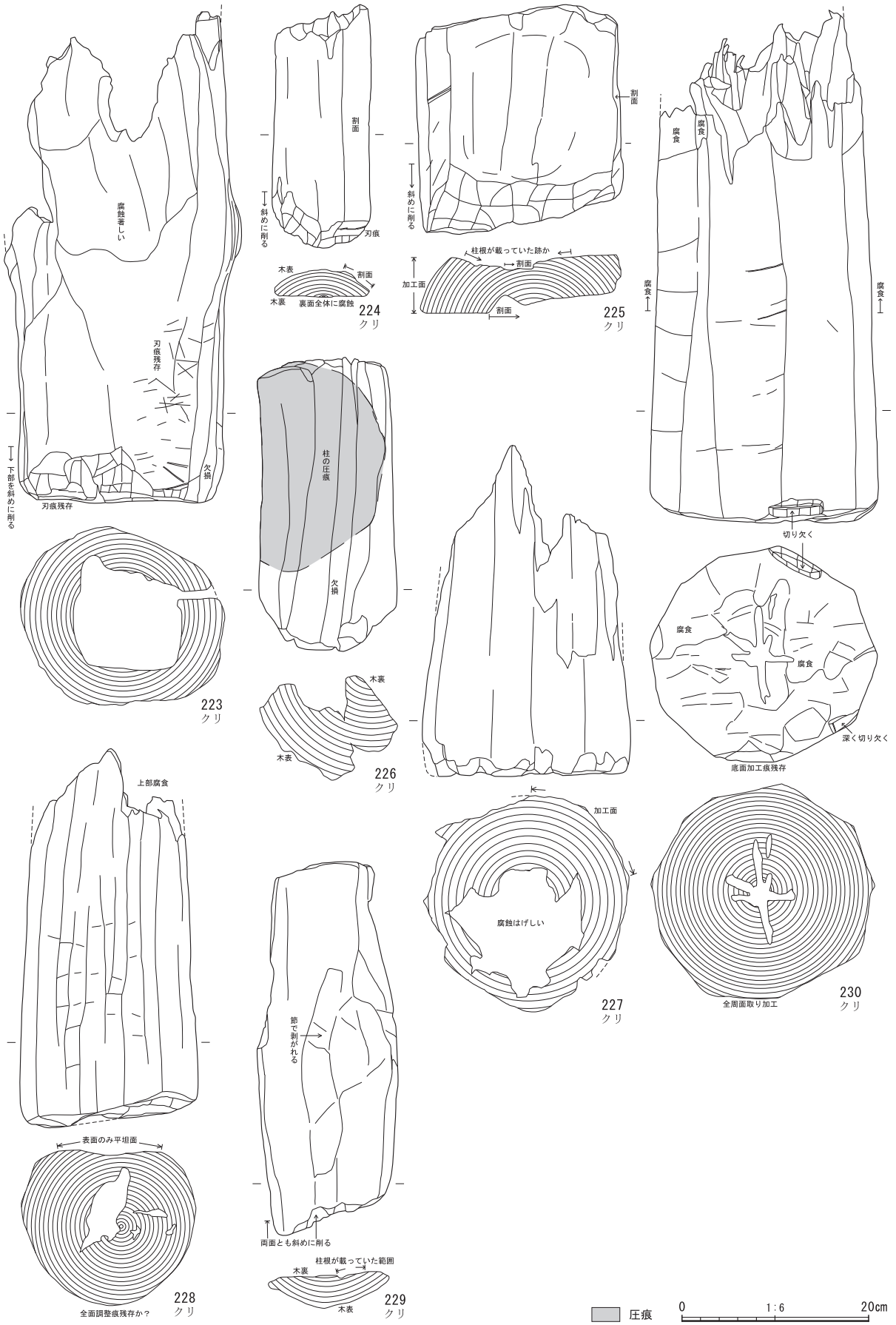


第 63 図　SB208・209 出土遺物実測図

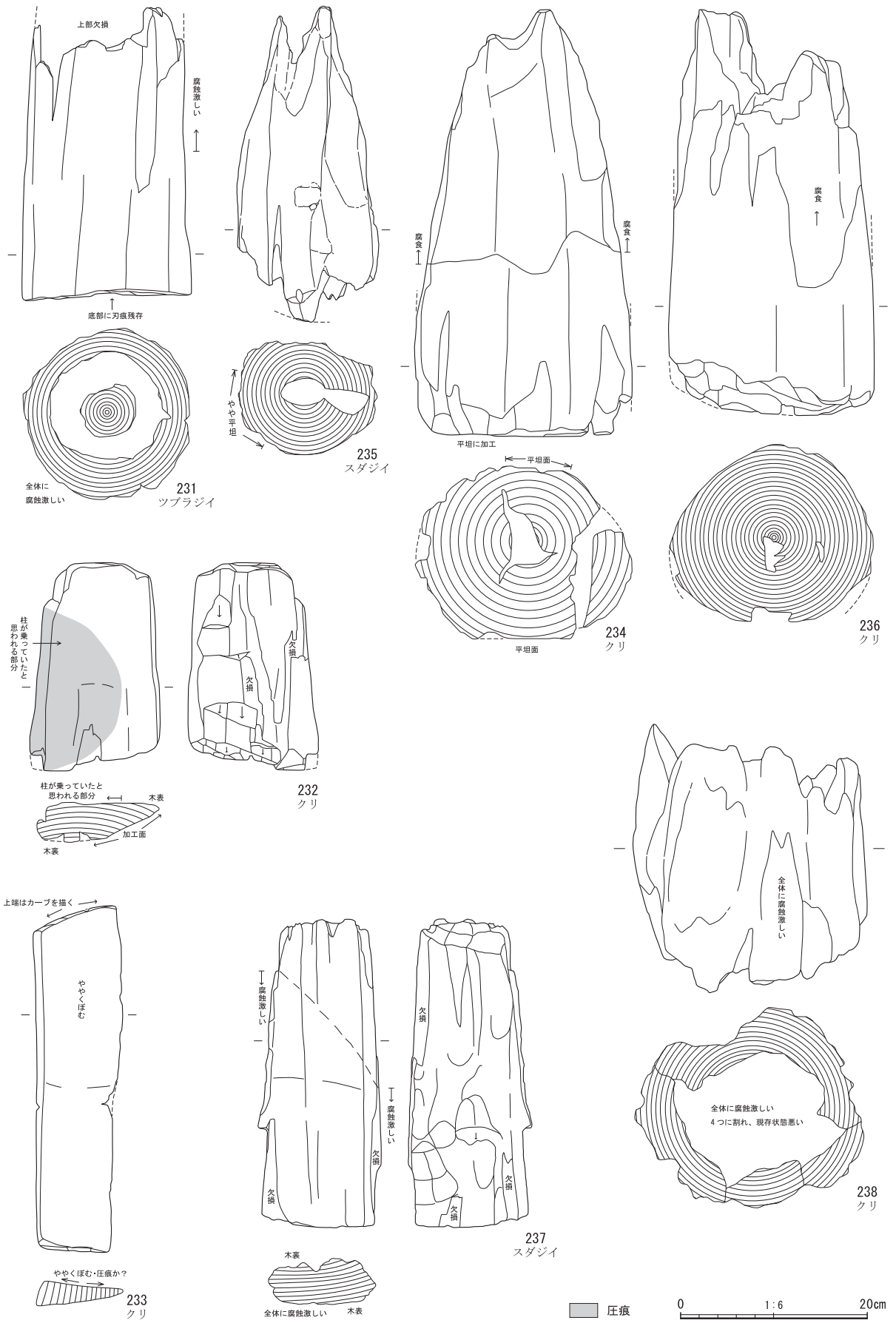
SB213（第 58 図、図版 26・28）　SB213 は 2-1 区の南西端で SB211・212 と切り合う掘立柱建物である。位置的には SB211・212 よりも少し北側で、軸方向は SB211・212 とは異なり東へ傾く。建物は東側の柱穴列が１列残っているだけで、西側が調査区外のため掘立柱建物全体の規模は不明である。１区の SB207 や 2-1 区の SB215 とは棟方向が 90 度違う。柱穴の大きさが他と比べて小型であることから、これらは同じ時期の建物群と想定される。東西は１間以上、南北方向は３間以上であろう。南北の柱間は約 1.7 ｍの間隔がある。柱穴の大きさは直径 50 ～ 60 ㎝程である。形状は隅丸方形で、掘り込みは検出面から 50 ㎝弱の深さがある。柱は抜き去られており、柱穴のうち３箇所の穴底に礎板の痕跡が残っていた。礎板は薄い板状破片である。柱の下に敷かれていたか、高さ調整のため柱の下に咬ませた板であろう。木片は樹種同定されていない。

SB214（第 59 図、図版 26・28）　SB214 は 2-1 区の中央西端で検出した掘立柱建物で、SB211 や SB212、SB213 の北側に位置する。また SB211・212 と同様に東側の柱穴列が２列残っている総柱建物だが、西側が調査区外のため掘立柱建物全体の規模は不明である。列としては１区の SB210 や 2-1 区の SB211 と同じ方向性をもっていることから、一連の建物群であろう。東西は１間以上、南北方向は３間である。東西の柱間は 1.6 ｍまたは 1.8m、南北の柱間は北側から 1.8 ｍ、1.8 ｍの間隔がある。柱穴の大きさは直径 60 ～ 80 ㎝で、形状は円形や隅丸方形である。掘り込みは検出面から 40 ～ 50 ㎝ほどと浅い。柱穴のうち６箇所に柱根が残っていた。また穴底には礎板や根絡みをもつものもあった。礎板は薄い板状破片である。

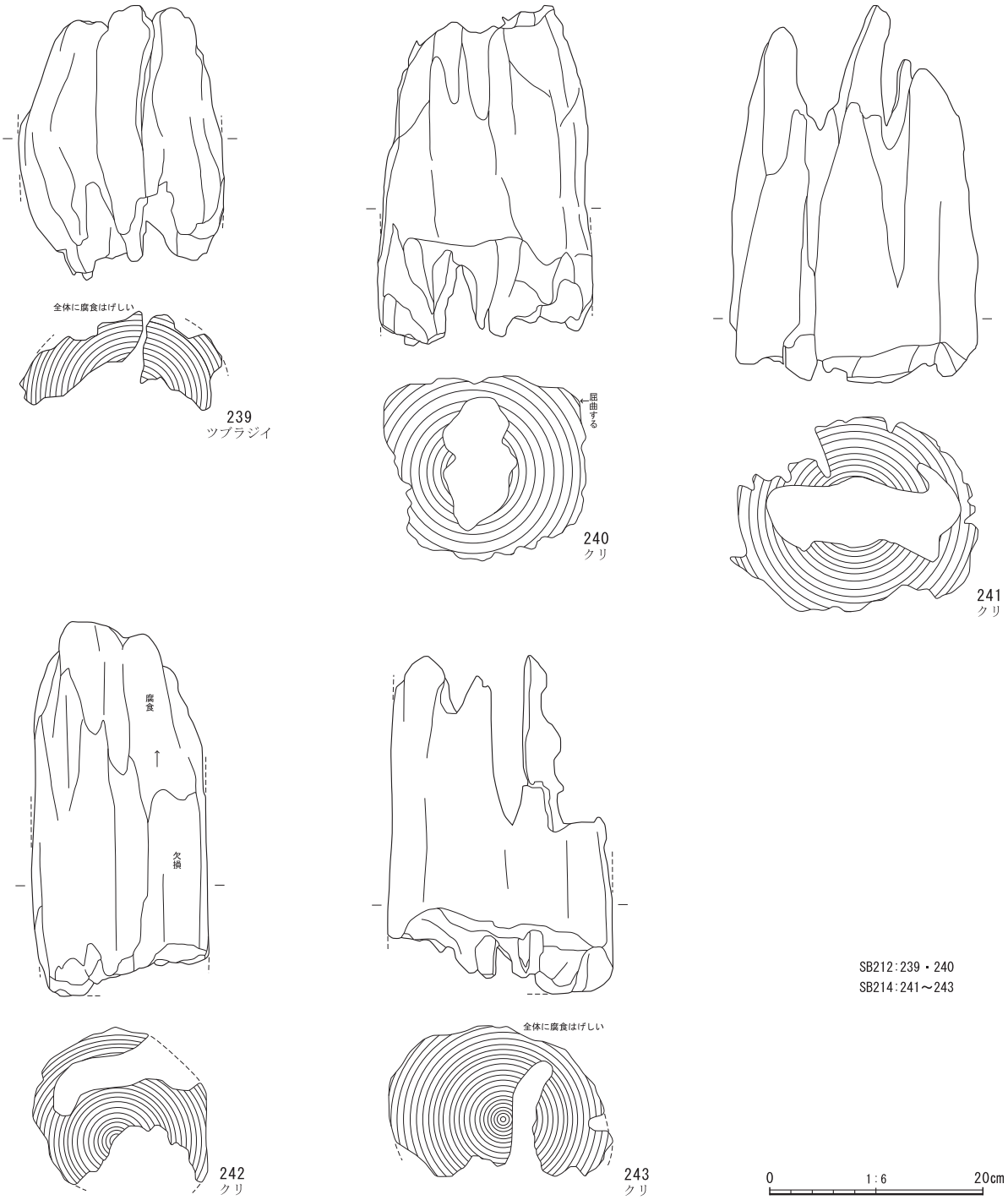
柱穴より検出した柱根・礎板（第 66 図 241 ～ 243）の樹種はクリであった。柱の表面は風化により収縮し、芯材が抜け落ちている。Ｐ２の柱根（241）は残存長が 35.5 ㎝、最大径は 23.2 ㎝である。表



第 64 図　SB210 出土遺物実測図



第 65 図　SB211 出土遺物実測図



第 66 図　SB212・214 出土遺物実測図

面は風化して芯材が抜け落ちている。柱根の下には薄い木片が敷かれていた。Ｐ３の柱根（**242**）も風化が著しい。クリ材の柱で芯材と辺材の一部が腐食してなくなっている。残存長は 35.2 ㎝、最大径は 16.7 ㎝ある。柱根の下からは礎板の役割をもつ薄い板が出土した。Ｐ７の柱根（**243**）は表面の腐食が激しく進み、芯材部分や半身がなくなっている。残存する長さは 31.8 ㎝、最大径は 21.1 ㎝である。SB212　の東側２列の柱穴に使われていた柱はクリ材で、針葉樹は使われていない。SB210 や SB211、SB212 でも樹種選択の特徴が同じである。

柱穴Ｐ５覆土からは土師器の高坏脚部（第 61 図 **206**）、Ｐ７からは古式土師器のＳ字状口縁甕（**207**）

と小型の鉢（208）が出土した。SB214 の位置は下層にあたる第３面で古墳時代中期の竪穴住居跡が見つかっていることから、柱穴覆土内の土器は下層から巻き上げられたものである可能性が高い。

SB215（第 60 図）　SB215 は 2-1 区の北東側に位置する掘立柱建物である。他の掘立柱建物とは重複することはなく単独である。柱穴の状況から側柱建物と想定されるが、建物の北側の柱穴は検出されず、東側は調査区外になるため、掘立柱建物全体の規模や棟方向は不明である。ただ建物の傾きは１区の SB207 や SB209、2-1 区の SB213 と同じ方向性をもっていることから、同じ時期の建物群であろう。東西は２間以上、南北方向は１間以上の建物と考えられる。東西の柱間は 1.6 ｍ、南北の柱間は 1.6 ｍの間隔がある。柱穴の大きさは直径 60 ～ 70 ㎝で、形状は楕円形や隅丸方形である。柱穴の掘り込みは非常に浅く、かろうじて検出できた状況である。柱穴には柱根などはなかったが、柱の抜き去り跡は確認できている。

柱穴Ｐ１・２の覆土からは土師器片が出土した。下層の第３面では古墳時代中期の遺構が見つかっていることから、柱穴覆土内の土器は下層から巻き上がったものである可能性が高い。

SB216（第 60 図）　SB216 は 2-1 区の北東側で掘立柱建物の柱穴である。SB215 の南側に位置し、他の掘立柱建物とは重複しない。建物の北側と北東側の柱穴が調査区外であるため、掘立柱建物全体の規模や棟方向は不明である。建物の傾きは同区の SB213 や SB215 と同じ方向であることから、同時期の建物群と想定される。柱穴の大きさは直径 60 ㎝で、形状は隅丸方形である。検出段階で柱穴の掘り込みは非常に浅かった。柱穴には柱根などはなかったが、柱の抜き去り跡は確認できている。

（２）土坑

第２面では土坑を 35 基検出した。１区では SK201 ～ 206、2-1 区では SK207 ～ 224、2-2 区では SK225・235、2-3 区は SK226 ～ 229、3-1 区は SK230 ～ 234 がある。

SK201・SK202（第 67 図）　掘立柱建物 SB201 の西側柱穴列と同じ位置に切り合った状態で検出した。楕円形状の土坑で浅い掘り込みである。SK201 は長軸方向が 1.5 ｍ、SK202 は 2.2 ｍ以上ある。覆土内から出土した遺物はない。

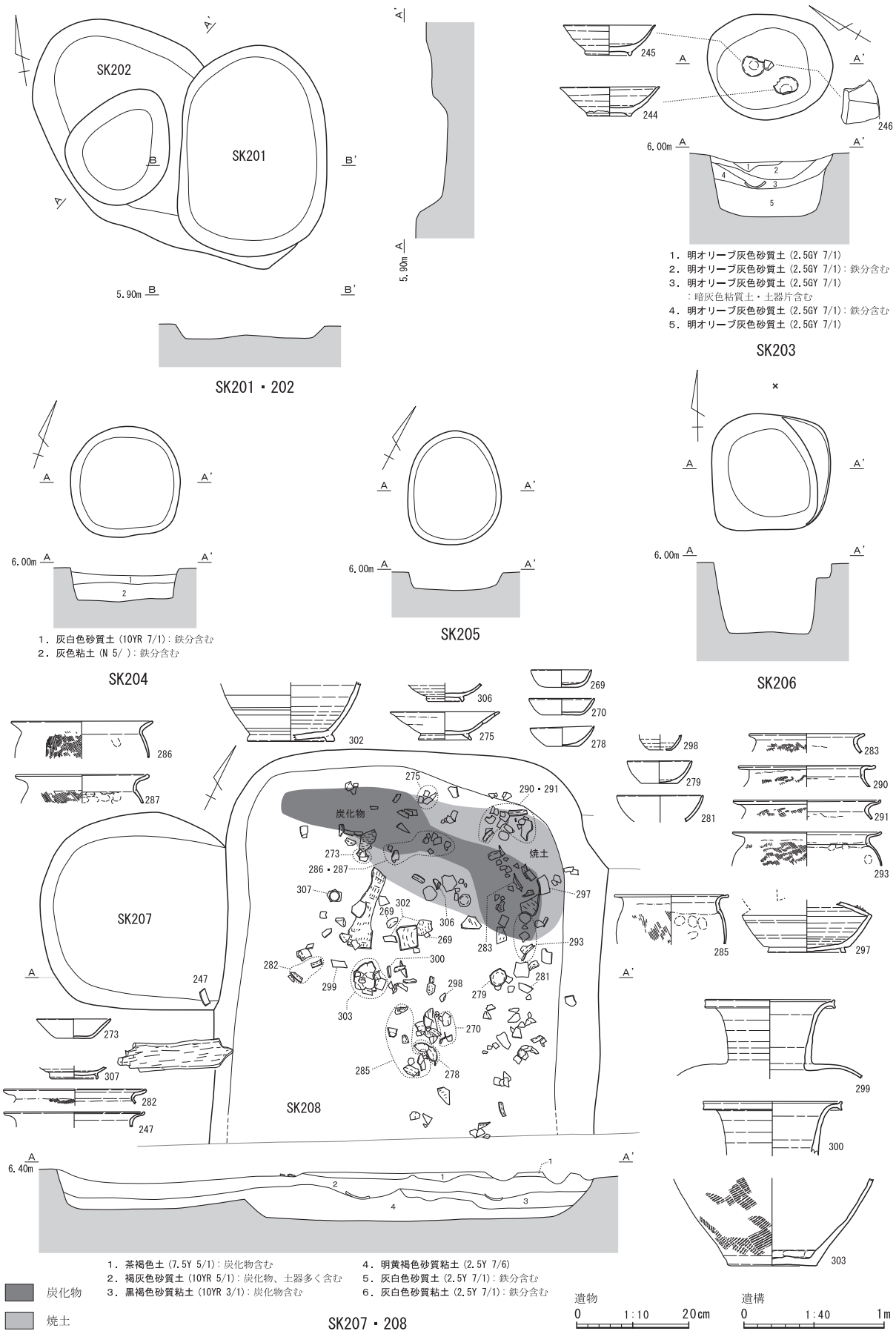
SK203（第 67 図、図版 29）　直径が 90 ㎝ほどの円形土坑で、約 40 ㎝の深さがある。検出位置は掘立柱建物 SB203 の西側柱穴列のＰ５と切り合っている。Ｐ５よりも後に掘り込まれていることから、掘立柱建物 SB203 よりも確実に新しい遺構である。土坑覆土の３層より山茶碗２点がほぼ完全な形で出土している。第 72 図 244 は口縁部の一部を欠く。口径は 17.4 ㎝、器高は 5.2 ㎝ある。全体にやや歪みがある。底部は糸切り後、高台を貼り付けている。降灰の掛かりは少なく、口唇部に一部掛かっている程度である。245 は口径 16.2 ㎝の碗である。口縁部が一部欠損している。内碗面の 2/3 以上に降灰釉があり、中央には重焼きの痕跡がある。底部は回転糸切りの後、高台を貼り付けている。246 は覆土内より出土した礫である。大井川水系に見られる細粒砂岩で、節理に沿って割れている。表面に擦った痕が見えるが人為的な加工である可能性は低い。そのほかには甕の破片や土師器の小片が出ている。出土した土器を見る限りでは 11 世紀以降の年代と考えられる。

SK204（第 67 図）　掘立柱建物 SB203 の内側で検出した円形土坑である。直径は 80 ㎝、掘り込みは 20 ㎝ほどある。覆土内より土師器の小片が１点出土した。

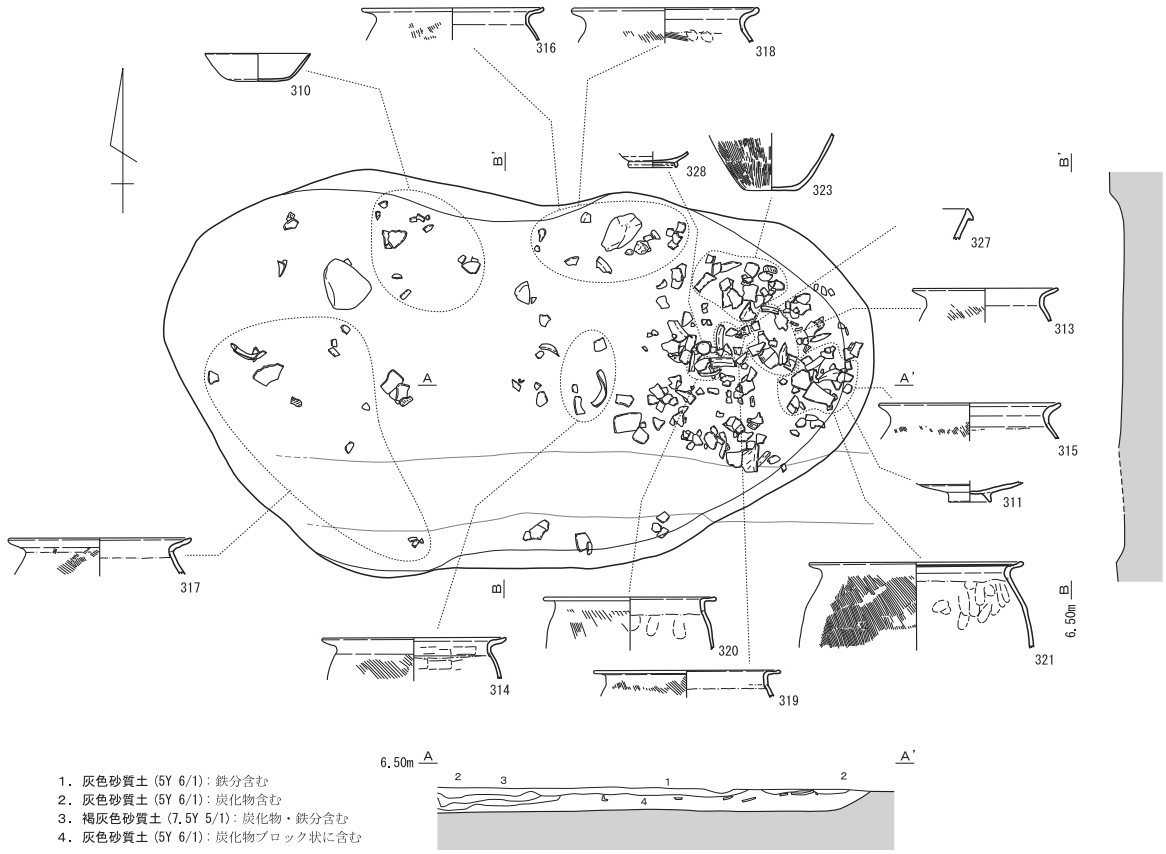
SK205（第 67 図）　１区北半部で検出した円形土坑である。直径は長いところで 80 ㎝を測る。深さは 15 ㎝程度である。覆土内の土器は土師器小片が５点出土した。

SK206（第 67 図）　掘立柱建物 SB203 の南西角柱のＰ６と切り合っている。形状は隅丸方形に近く、長さは 80 ㎝、深さは 50 ㎝ほどある。覆土内より出土した土器は土師器小片が２点ある。

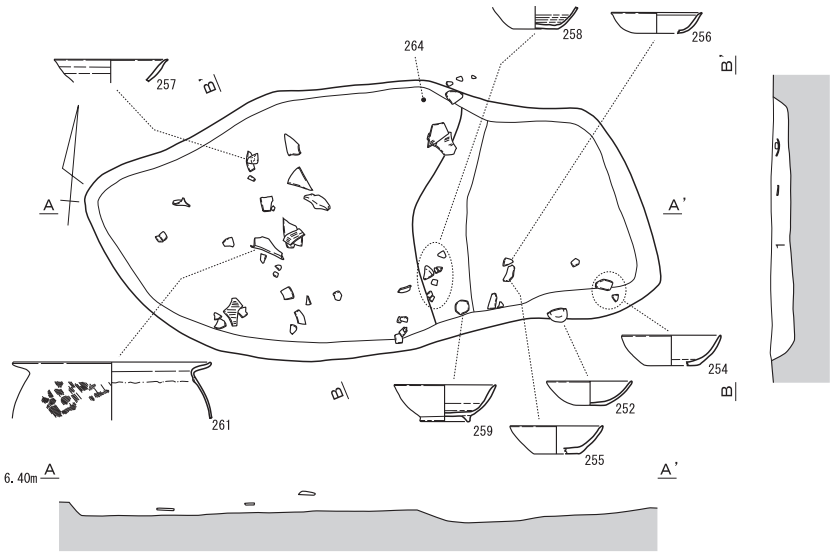
SK207（第 67 図、図版 29）　東側を SK208 に切られており、全体形がわからないが楕円形の浅い土坑と思われる。南北方向は 1.4 ｍ、東西方向は 1.3 ｍほど残っており、検出面から 30 ㎝程度の深さがあった。



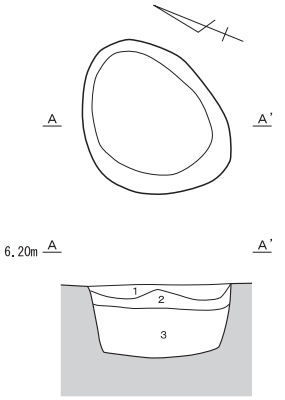
第 67 図　SK201・202・203・204・205・206・207・208 実測図



SK210



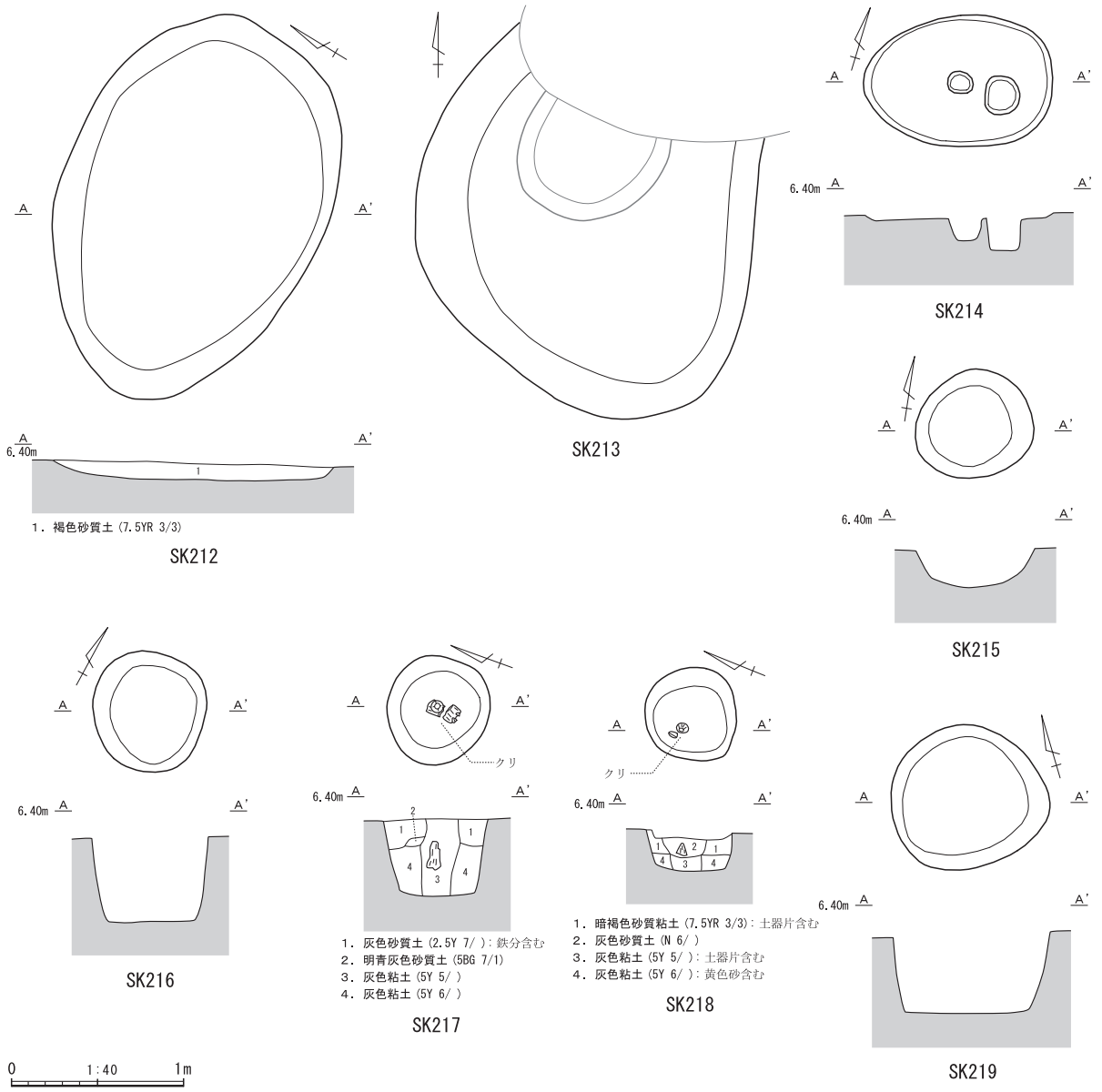
SK211



SK209

土器 0　1:10　20cm　　遺構 0　1:50　1m

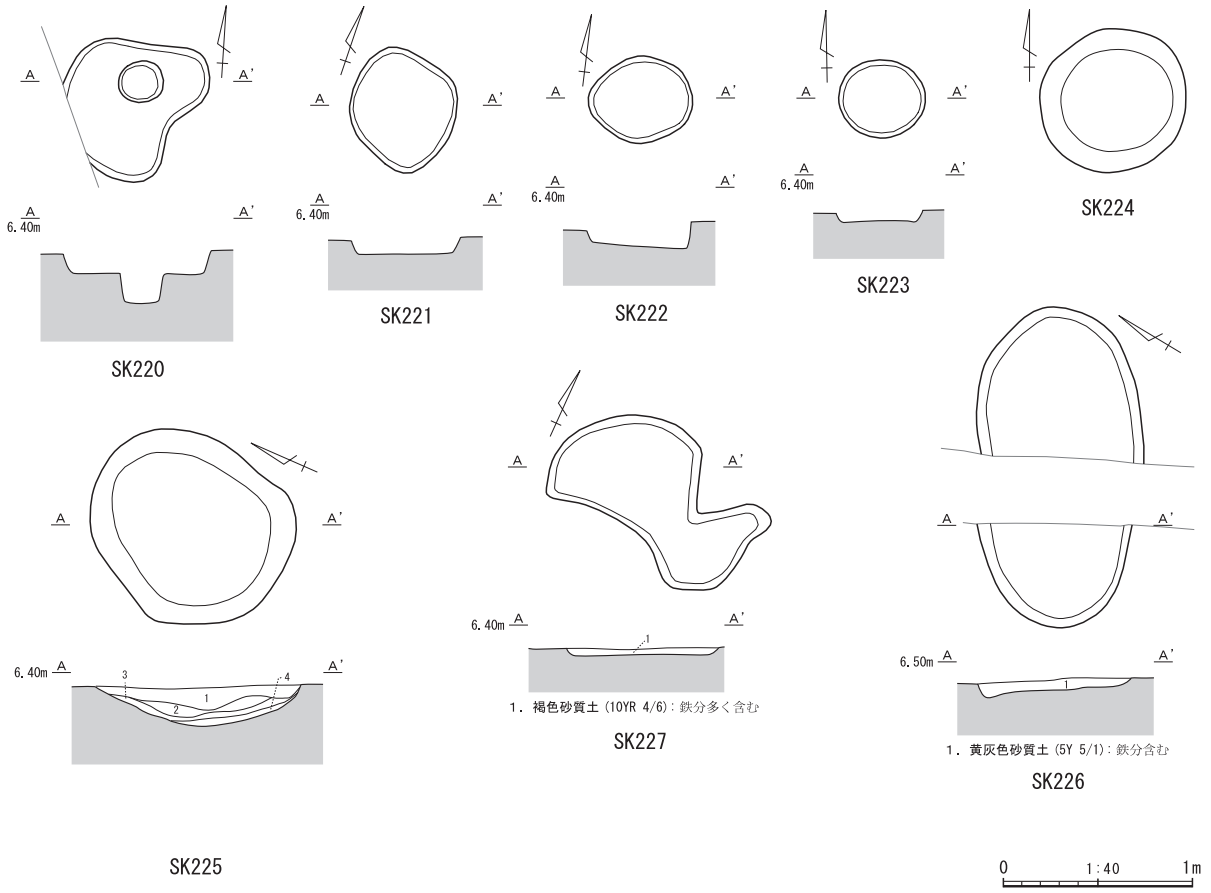
第 68 図　SK209・210・211 実測図



第 69 図　SK212・213・214・215・216・217・218・219 実測図

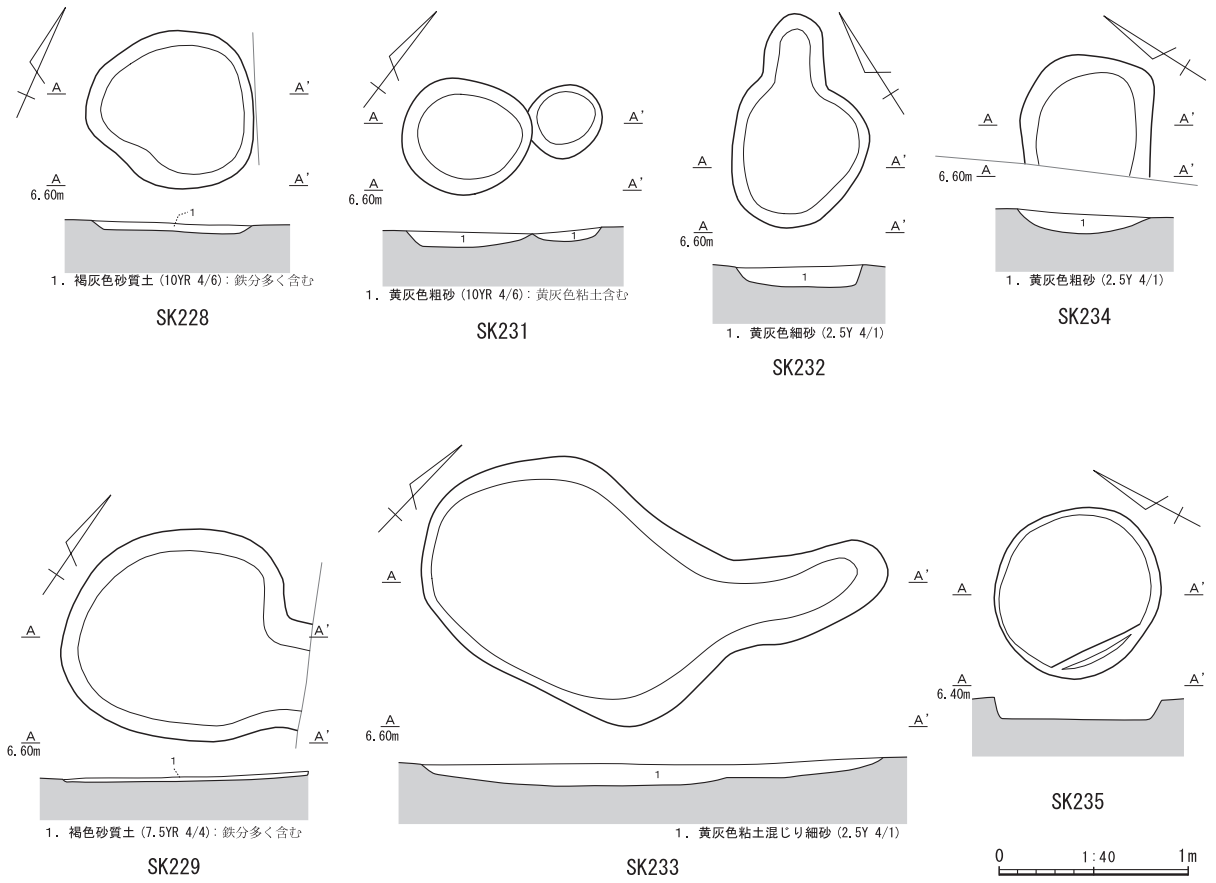
覆土内より出土した土器は土師器の甕や須恵器の皿・坏などがある（第 72 図 247 ～ 249）。247 は土師器の甕口縁部で、大井川以西の遠江で主流を占める「コの字甕」である。復元口径は 25 ㎝である。胎土内に微量の雲母が混じる。248 は須恵器の皿である。復元口径は 11.4 ㎝、器高は 1.7 ㎝を測る。底部は回転ヘラケズリで平底となっている。249 は須恵器の平底無台坏身である。底は回転ヘラケズリによる。このほか覆土内からは須恵器の無台坏や甕の破片、土師器の小片が出土している。須恵器の年代から８世紀後半から９世紀前半の土坑と考えられる。

SK208（第 67 図、図版 30）　SK207 よりも後に掘削された土坑である。調査区の南端で検出されたため、南側は調査区外で途切れている。北半部は東西方向に 2.7 m、南北方向の残存は 2.9 mの長方形を呈し、掘り込みは 35 ㎝と規模が大きい土坑である。上層の１～３層まで炭化物を含み、特に２層では炭化物と共に遺物が多く出土している。遺物の種類は土器や土製品がある（第 73・74 図 268 ～ 308）。268 ～ 281 は土師器の坏である。268・269・270 は復元口径が 11㎝ 強の小型坏である。いずれも丸底部に厚みがある。268 は内面にミガキ痕が残る。271 は 13 ㎝程の口径があったと思われる坏である。体部は厚く、



第 70 図　SK220・221・222・223・224・225・226・227 実測図

底部は薄い。272 は底部を丸底に作り出した無台の皿である。灰釉陶器の模倣であろう。273 は無台の坏で、口径は 13 ㎝を超える。274・275 は土師器の高台坏である。274 の口径は 14.1 ㎝、器高は 6 ㎝ほどである。高台は貼付けられており、端部をやや外側に摘み出しているような形状である。275 は復元口径が 19.4 ㎝、器高は 5.0 ㎝である。口縁部は外側に大きく開く。高台は貼付けでやはり外側に開き気味になっている。274・275 共に灰釉陶器の模倣碗であろう。276 ～ 280 は内黒の坏である。276 は口径 12.4 ㎝の坏で、内碗面底に「夫」または「天」の刻書がある。277 は体部から底に厚みがある。278 ～ 280 は 11 ㎝強の口径をもつ、やや小振りの坏である。280 の内面は残りがよく、ミガキが見える。281 は復元口径が 15.2 ㎝の坏である。内碗面が黒く、これも内黒に含めても良いだろう。282 ～ 293 は土師器の甕口縁部である。甕は大井川以西の遠江では一般的に主流を占める「コの字甕」と呼ばれる長胴甕である。282 は復元口径が約 25 ㎝の甕口縁部である。口唇部は外側に強く張り出す「コの字甕」の特徴を持っている。283 の口縁部は外側に開くが口唇部のかえりがない単純口縁である。胎土が乳白色で他の甕とはやや異なる。外面の肩から下にはハケ調整痕がある。284 は内面がやや薄黒くなっているが煤は付着していない。胎土には微細な雲母が混じっている。285 は胴部まで残る破片で、口縁部は全体にナデ調整されているが、外面はハケ調整、内面には指ナデ押えが顕著に残っている。286 も 283 のように口唇部のかえりがない口縁部の形状をもつ。体部は非常に薄い造りである。287 は体部と口縁部との屈曲が強く、内面には指押さえがある。288 は復元口径が 24.4 ㎝の甕である。口唇部はかなり上部で真横に近く外側へ開く。289 も口縁部はほぼ真横に開く形状で口唇部にかえり部分を持つ。290 は口唇部の内側だけが黒く変色している。291 も被熱しているためか口縁部は橙褐色に変色している。292 の口縁部はやや厚みがあり、口径も 28 ㎝近い。293 も非常に薄い造りの甕である。27 ㎝程の口径

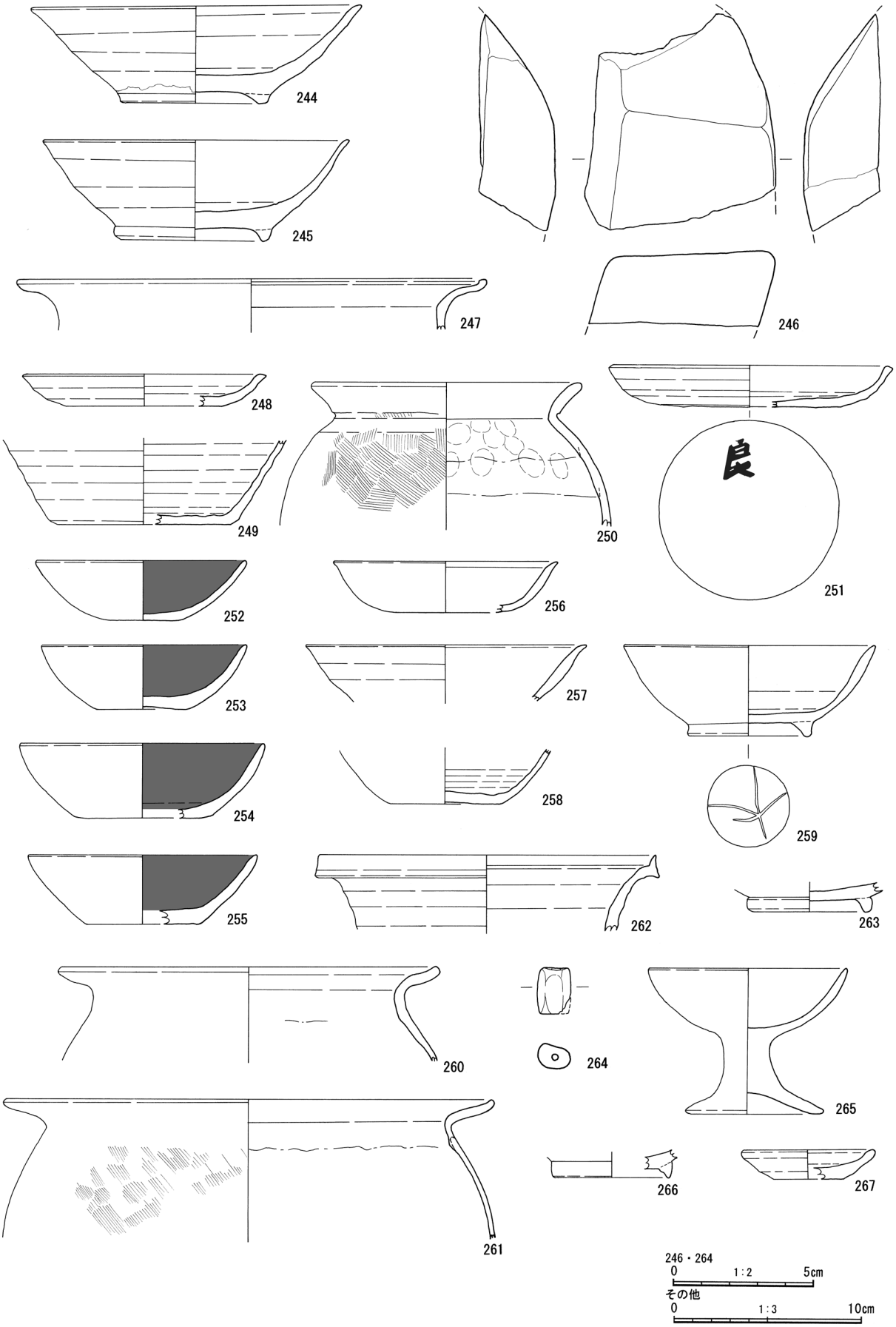


第 71 図　SK228・229・230・231・232・233・234・235 実測図

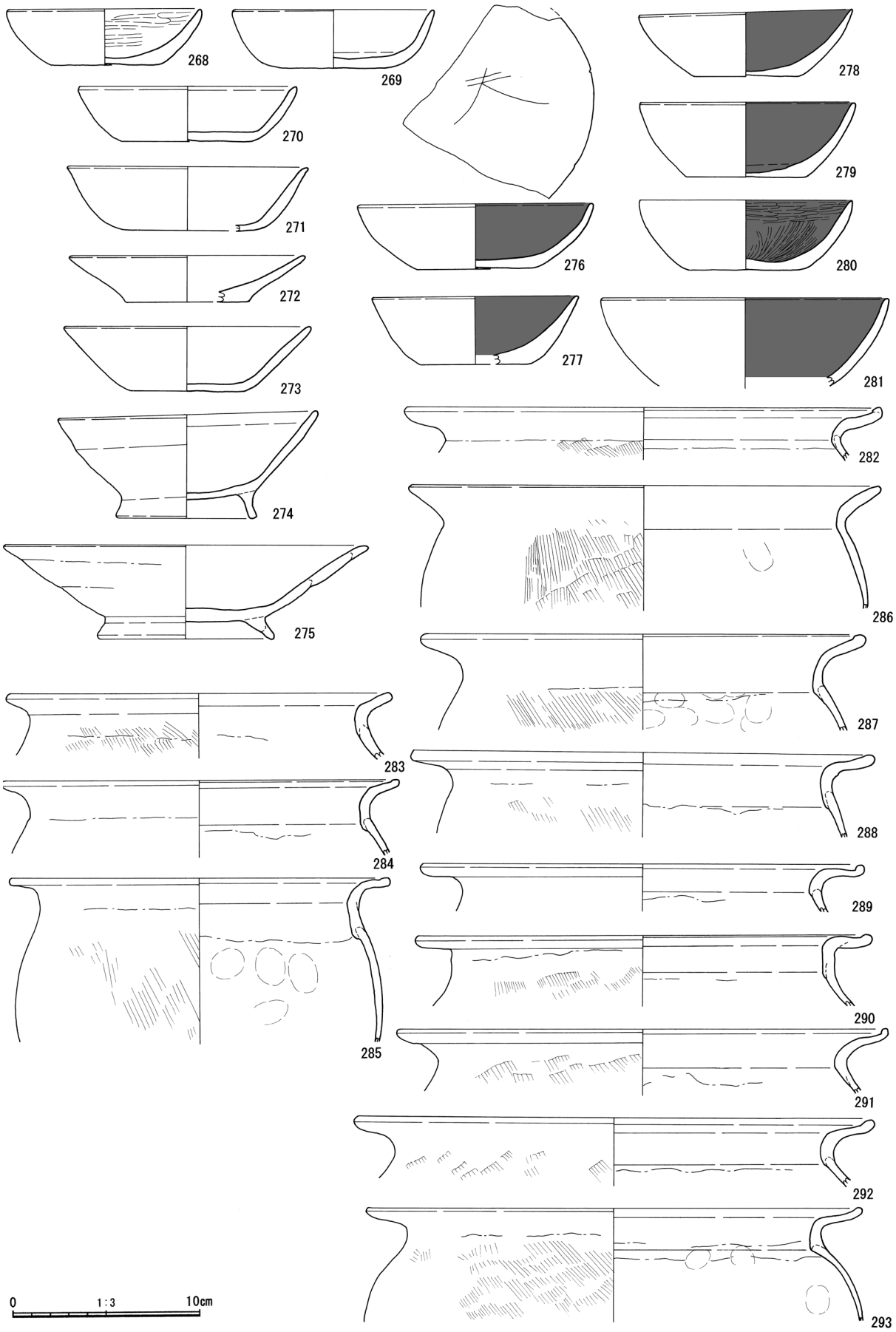
をもつ。内面は指ナデ、外面は細かいハケ調整がある。

294～307はSK208の覆土内で出土した須恵器･灰釉陶器、土製品等である。294は須恵器の坏蓋である。摘みは失われ 1/3 程が残存する破片である。直径は 16 ㎝弱ほどで蓋頂部は回転ヘラケズリされている。295 も須恵器の坏蓋で擬宝珠状の摘みをもつ。蓋の直径は 13.5 ㎝程である。296 は須恵器の高坏脚部の破片である。脚部高からみて小型の高坏である。脚部中央には２条の沈線がある。297 は灰釉陶器の平瓶である。SK208 と切り合っている SB208 の柱穴 P10 でも平瓶（第 61 図 200）が出土していることから、SB208 の平瓶（200）は SK208 に含まれていたものとも考えられる。1/3 程の破片で、上面は一面に降灰釉があり、把手は欠損している。298 は無台の小型壷底部と思われる破片である。内面底に降灰釉がある。299・300 は同一個体の甕である可能性が高い。また 303 の甕底部と出土位置が近接していることから 299・300・303 は同一の甕と想定される。299 は口縁～肩部にかけての破片で、口縁～頸部には黄土刷毛塗りが施されている。肩部全体に降灰釉がある。300 の外面も降灰釉が付着している。303 は平底の甕底部である。体部には火膨れがあり、外面はタタキ目が見える。内・外面とも黄土刷毛塗りがある。301 は甕の口縁部である。頸部には櫛描の波状文があり、黄土刷毛塗りされている。同区の SK210 からも同様の破片が出土しているが別個体である。302 は長頸壷の底部である。内・外面に噴き出しがある。外面は黄土刷毛塗りされている。304・305 は灰釉陶器の蓋である。摘みを持たないものか。いずれも上面には降灰釉がある。304 は直径 10 ㎝で器高は 1.4 ㎝、上面には重ね焼きの付着痕がある。305 は 304 とは別個体で、直径 10.2 ㎝、器高は 1.2 ㎝である。306･307 は灰釉陶器の碗である。306 の内面見込み部分には重ね焼きの痕がある。307 は三日月型の断面高台をもつ碗である。

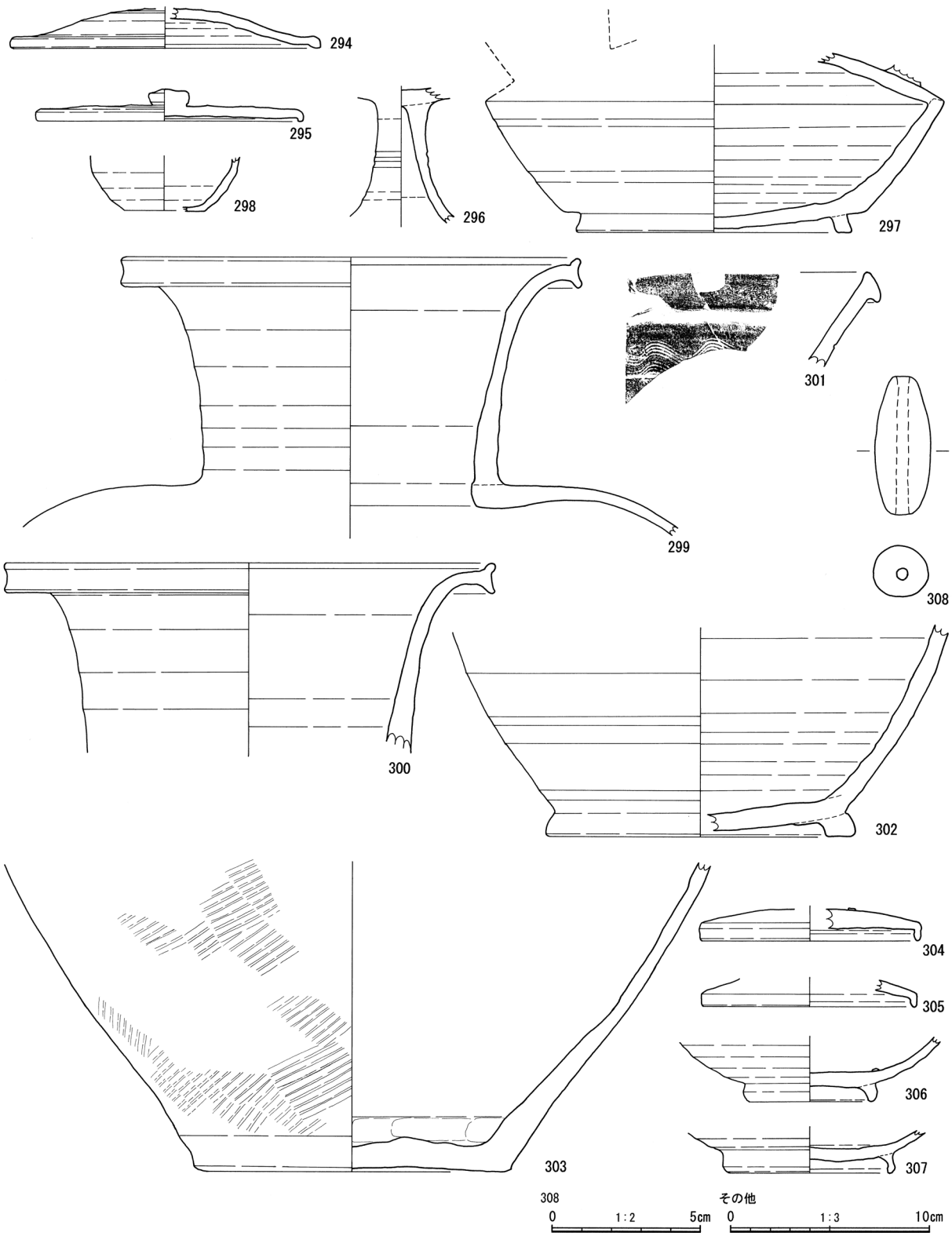
SK208 では完形の土錘が１点出土している(308)。土錘は土師質で紡錘形をしている。中心には径 3.5



第 72 図　SK203・207・209・211・212・214・225 出土遺物実測図



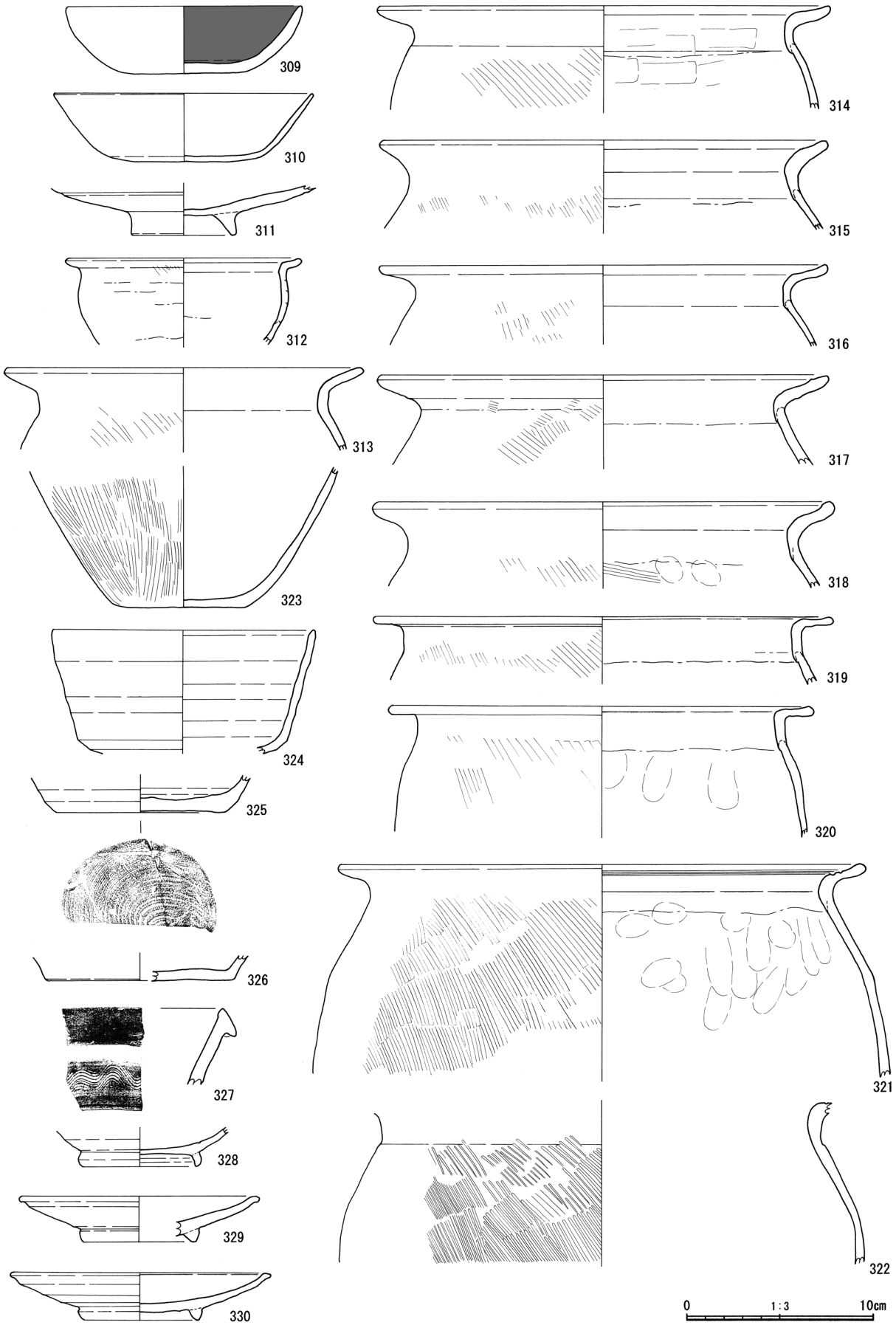
第 73 図　SK208 出土遺物実測図 1



第 74 図　SK208 出土遺物実測図２

㎜ほどの貫通孔がある。

SK208 は１～３層にかけて覆土内に炭化物が多く含まれており、土器等と混じって炭化した木材の塊が所々に見られる。土器は日常的な用途に使われる器種が主体であり、特に煮炊きの用途に使われる甕の個体数が多く見られる。また土器の構成に祭祀的な要素は見られない。以上のことから土坑は廃棄坑

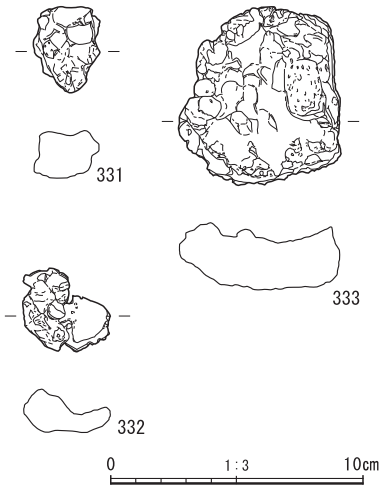


第 75 図　SK210 出土遺物実測図 1

として使われていたと想定される。

SK209（第 68 図）　2-1 区の南で検出した土坑である。直径は 80 ㎝程の円形土坑で、深さは 40 ㎝である。覆土内より土師器の甕（第 72 図 250）と須恵器の皿（251）が出土している。250 はやや小型の甕の口縁から体部の破片で、口縁は「くの字」の単純口縁である。内面は指ナデと指押さえ、外面はハケ調整されている。251 は底部に「良」の墨書がある。復元径は 14.6 ㎝、器高は 2.2 ㎝である。蓋の可能性もあるだろうか。

SK210（第 68 図、図版 30）　2-1 区中央部東寄り付近で検出した大型の土坑である。南北方向は 3.8 ｍ、東西方向は最大 2.2 ｍ、12 ㎝程と浅く、形状は不定形である。覆土は２～４層まで炭化物を含み、特に４層は炭化物の塊がある。土器（第 75 図 309 ～ 330）は２～４層中に含まれ、鉄滓（第 76 図 331 ～ 333）も出土している。



第 76 図　SK210 出土遺物実測図２

309・310 は土師器の坏である。309 は内面が黒くなっている、いわゆる内黒土器である。底部は平底で木葉痕がある。310 は全体に薄い作りの坏である。復元口径は 13.8 ㎝で口縁部は外側へ開く形状である。311 は土師器の皿である。土師器だが形状だけ見ると灰釉陶器の皿に似ている。口唇部や高台の作りが灰釉陶器ほどではないが模倣皿であろう。312 は土師器の甕であるが、復元口径は 10 ㎝程度で、実用に使用されたものではなくミニチュア品である。甕の形状は「コの字甕」を模していると思われるが下方が欠損しているため全体形は不明である。313 ～ 323 までは土師器の甕である。313 ～ 322 までが口縁部破片、323 は底部破片である。また表面の色調はすべて灰白色の「コの字甕」である。供給地が同じであるか、また同一の建物からか、あるいは同時期に一括廃棄されたものかもしれない。それぞれに接合点はないが、同一個体も含まれている可能性がある。313 は体部の荒いハケ目が残っている。314 は口縁部が 1/3 程残っている。315 は復元口径が 23.4 ㎝である。316・317・318 も灰白色の甕口縁部である。体部に残るハケ目もハケ後ナデているが、ハケ目の深い部分が残っているようである。319・320 は口縁部の形状や胎土から同一個体の可能性がある。口唇部内側を強く指ナデしている特長をもつ。内面には指押さえが見える。321・322 も同一の可能性がある。胴部まで残る破片である。体部は全面ハケ調整されているが、内面は全体にナデによる面となっている。323 は体部から底部の灰白色の甕破片である。底部は平底で 6.2 ㎝の径をもつ。体部のハケ調整は細かいハケで底近くから直線的に調整されている。内面はすべてナデである。

324 は底部が欠損しているが須恵器の無台坏であろう。復元口径は 14㎝ 程である。325 も須恵器の無台坏である。9㎝ ほどの平底で回転糸切り痕がある。326 も須恵器無台坏だが、平底はヘラケズリ痕がある。327 は灰釉陶器の甕口縁部破片である。外面は黄土刷毛塗りされ、波状の櫛描きがある。内面は降灰釉がある。SK208 でも同じ形状の甕（第 74 図 301）が出ているが別個体であろう。328 は灰釉陶器の碗である。底部高台は完存している。断面形は三日月高台である。内面は重ね焼き痕と自然降灰釉が見える。329 は灰釉陶器の皿である。内面に段はなく水平に近く外側へ開く。内面は全体に降灰釉がある。330 も灰釉陶器の皿である。復元口径は 14㎝ ほどで、高台径は 6.2 ㎝、器高は 2.6 ㎝である。口唇部は強く外に引き出している。内碗面見込みには重ね焼きの痕跡がある。

331 ～ 333 は土坑 SK210 の覆土内より出土した鉄滓その他である。分析の結果（第７章第２節）、331 は発泡スラグで、炉材の被熱により溶融したものと想定された。332 も同じく炉材近くで生成した発泡スラグと鉄滓が合体したものである。333 は本遺跡のなかでも最も大きな鉄滓であるが、炉材の近くで生成されたものと思われる。こうした鉄滓の残る炉跡は今回の調査では見つかっていないが、集落内で

の鍛冶作業における精錬で出てきた副次的な生産物のひとつであろう。

SK210 のほかに同区では SK207・208、SK211 などの土坑がある。いずれも不定形な浅い土坑で、土器片や炭化物、礫などを多量に含んでいる。特に祭祀的な様相は見られないことから廃棄坑として使われていたと想定している。これらの土坑は１区から 2-1 区で検出した掘立柱建物群の北東側にあり、SK208 を除いて建物の無い空間に位置している。特に 2-1 区の掘立柱建物 SB211 ～ 213 の南北方向の建物列と平行した位置に並んで存在する。こうした位置関係からみて、初期段階の掘立柱建物群の時期に使われた廃棄土坑とも考えられる。

SK211（第 68 図、図版 31）　SK210 の６ｍ北側で検出した土坑である。形状は不定形で、深さは 10 ㎝程度である。東西は３ｍ、南北は 1.4 ｍ程の規模である。掘立柱建物 SB214 とは６ｍほど東に離れている。

土坑 SK211 覆土内からは土師器や灰釉陶器、琥珀玉（第 72 図 **252** ～ **264**）が出土した。**252** ～ **259** は土師器の坏である。このうち **252** ～ **255** は内碗面が黒い内黒坏である。**252** は復元口径が 11.2 ㎝の小型坏である。**253** も口径 11.0 ㎝程の小型である。底部は丸く平底となっている。**254** は口径が 13㎝を超える。底部も丸い平底である。**255** はやや小振りで内面がはっきりとしないが内黒の坏である。**256** は口縁部破片で底部は欠損している。口径は 12 ㎝ほどだろう。**257** は復元口径が 14 ～ 15㎝であることから、通常の坏というよりも灰釉陶器の模倣碗の可能性もある。口唇部は外側に引き出されている。**258** は復元口径 11㎝強の平底の坏である。**259** は土師器の碗である。高台が付き、口唇部が外側へ開く形状から **257** と同様の灰釉陶器を模倣した碗であろう。底部底にはヘラで刻まれた窯印のような刻印がある。**260**・**261** は土師器の甕である。いずれも遠江では一般的に見られる「コの字甕」の形状をもつ。**260** は風化して内外面の調整痕は不明である。**261** は 1/3 程の口径が残っている。外面はハケ後ナデで仕上げられている。また一部に煤けた痕がある。**262** は灰釉陶器の壷の口縁部破片である。外面は黄土刷毛塗りが見られ、内面には降灰釉が付着している。壷の口径は 18 ㎝程度である。**263** は灰釉陶器の碗底部片である。胎土は灰白色で精製された粘土が使われている。**264** は琥珀製の棗玉である。SK211 の北壁端の位置で、覆土内より出土した土器と同様、底面よりもやや浮いた位置で出土した。正面から見た形状は長方形で、断面形は楕円形状、一部下端部が欠損している。長さ 1.6 ㎝程で、重さは 1.0 ｇである。色調は極暗赤褐色をしている。表面は磨かれ、孔は上下から穿孔している。琥珀製の棗玉は富士市の谷津原 14 号墳（古墳時代後期）で４点が出土している。

本土坑の器種は他の土坑と比べて、甕が少なく坏の出土量が目立つ。ただいずれも日常的な器種であるには変わりないことから、やはり廃棄土坑として使われていた場所であろう。出土した土器の年代から本土坑は 10 世紀代と考えられる。

SK212・213（第 69 図、図版 31）　最大長が 2.3 ｍ、短軸方向は 1.5 ｍ程の楕円形で、掘り込みは 10 ㎝と浅い。褐色砂質土の覆土内より土師器の高坏が出土した（第 72 図 **265**）。古墳時代中期に属するもので、本調査面の時期ではない。第３面の包含層より巻き上げられたものである可能性が高い。そのほかにも土師器小片が多数出土しているが古墳時代の土師器が主体である。SK213 は北側を SK212 に切られている。最大長は２ｍほどの楕円形土坑である。覆土より土師器小片が数点出土している。

SK214 ～ SK224 は溝 SD201 と SD202 に挟まれた５ｍ程の範囲で検出した土坑群である。円形～楕円形もしくは不定形な形状だが、１ｍ以下の規模である。柱穴とも考えられるが、掘立柱建物状には並ばなかった。

SK214（第 69 図）　長軸が１ｍ程の楕円形の浅い土坑である。内部に２箇所の小穴がある。SK214 の覆土より出土した第 72 図 **266** は灰釉陶器の碗の高台破片である。小片であるため詳細は不明だが高台の断面形は三角形を呈する。

SK215（第 69 図）　65 ㎝ほどの円形土坑である掘形は擂鉢状である。

SK216（第 69 図）　直径 66 ㎝の円形土坑で、深さは 50 ㎝である。

SK217（第 69 図）　SK216 の北側で検出した円形土坑である。直径は 60 ㎝、深さは 45 ㎝を測る。孔の中央で柱根状の木製品等が５点出土している。木製品は柱根状が１点、用途不明が４点である。柱根状は芯持ち材で、おそらく建築材の柱であろう。その他は根絡みかあるいは礎板であろう。樹種同定の結果（第７章第６節）、いずれもクリ材であることが判っている。第２面の掘立柱建物に使われていた柱もクリ材が多いことから、SK217 は掘立柱建物の柱穴である可能性が高い。

SK218（第 69 図）　SK217 の南西側で見つかった円形土坑である。覆土内では土器の小片が出ているほかに、覆土中央で柱根状の木製品等２点が出土している。柱根状木製品は樹種の同定が不可能であったが、もう１点はクリ材であった。SK218 も柱穴の可能性がある。

SK219（第 69 図）　径 90 ㎝ほどの円形土坑である。深さも 42 ㎝ある。検出した場所は調査区の西端で SD202 に一部掛かっている。SK219 の方が後で掘削されている。覆土から土師器の小片が出ているが器種は不明である。

SK220（第 70 図）　西壁沿いで検出した不定形な土坑である。底面中央には柱根があったような径 20 ㎝程の小穴がある。柱根は出ていないが柱穴の可能性がある。覆土内より土師器が１点出ているが器種不明である。

SK221 ～ 223 は更に小規模な土坑である。

SK221・222・223・224（第 70 図、図版）　SK221 は径 56 ㎝程度で掘形は 10 ㎝以下である。SK222 も径 56 ㎝である。SK223 は径 45 ㎝と最も小規模である。SK224 は径 77 ㎝で、SD201 のすぐ北側に位置する。

2-2 区では SK225 と SK235 がある。

SK225（第 70 図）　調査区の南端に位置する。径 1.1 ㎝のやや歪な円形土坑である。掘形は擂鉢状で覆土もレンズ状に堆積している。覆土内より山茶碗の小皿（第 72 図 **267**）、灰釉陶器の甕片、土師器片２点等が出土した。小皿（第 72 図 **267**）の復元口径は 6.8 ㎝と小型である。高台はなく、底部には糸切り痕の一部が見える。

SK235（第 71 図）　南西端で検出した円形土坑である。径は 80 ㎝強で、掘り込みは浅い。覆土内から灰釉陶器の碗口縁部片と土師器が出ている。

2-3 区では調査区の北側で SK226 ～ 234 を検出した。

SK226（第 70 図）　Ｌ -20 グリッド内で検出した楕円形の土坑である。長軸は 1.7 ｍで掘り込みは非常に浅い。

SK227・228・229（第 70・71 図）　SK226 から北東に３ｍ程離れた位置にかたまっている。SK227 は不定形土坑で掘り込みも浅い。SK228 は径 90 ㎝ほどの円形土坑である。SK229 はそのすぐ北側にあり、不定形で浅い。

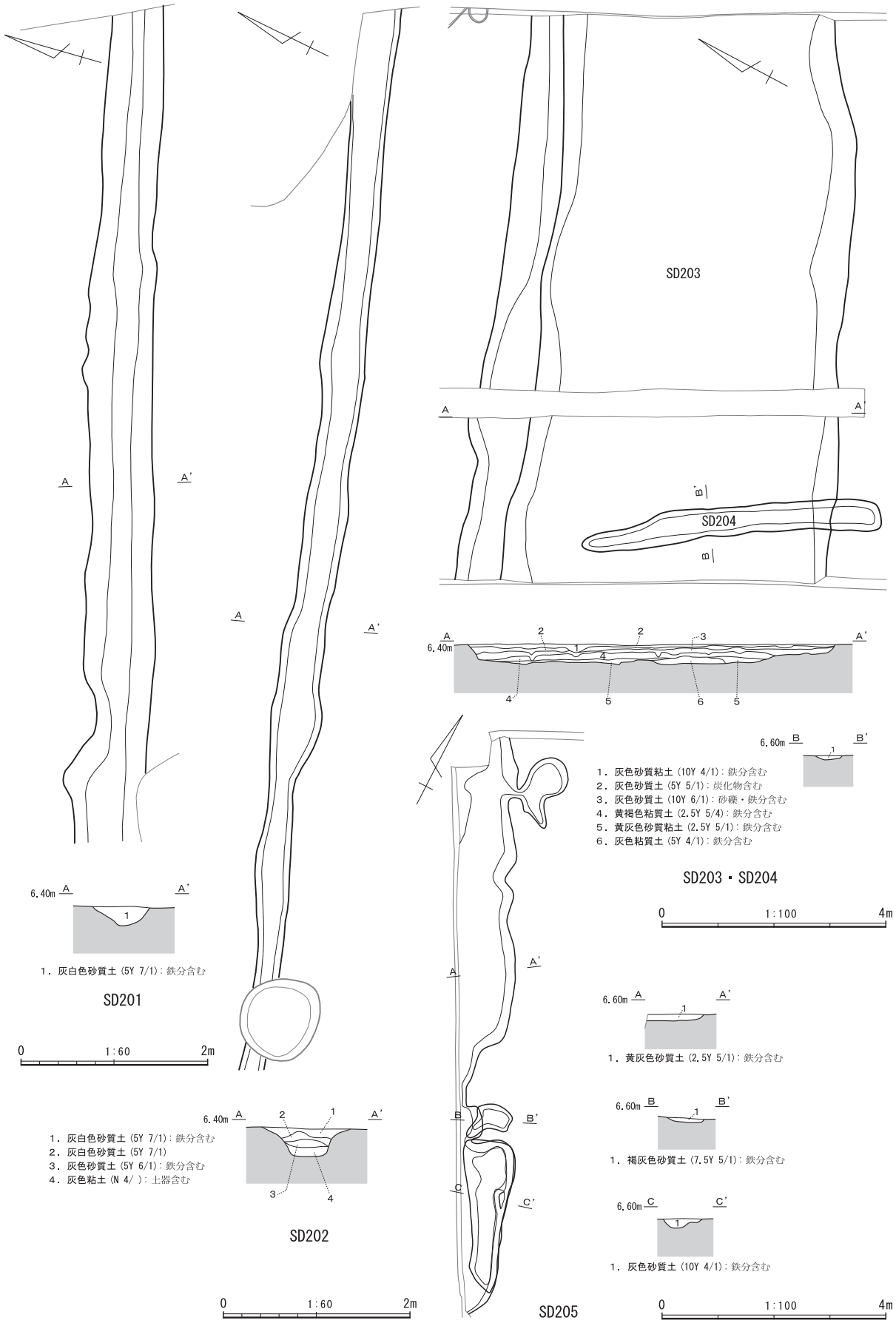
3-1 区の土坑は SK230 ～ 234 がある。土坑は調査区の北半部、杭列 SA202 よりも西側に位置する。

SK230・231（第 71 図）　隣り合った土坑で、SK230 は径 68 ㎝で SK231 は 38 ㎝の円形で浅い掘形である。新旧は判断できない。

SK232・233・234（第 71 図）　SK232 は長いところで 1.1 ｍの不定形な土坑である。掘り込みも 10 ㎝と浅い。SK233 は長軸が 2.4 ｍの不定形な浅い土坑である。SK234 は調査区の西壁寄りで検出した土坑で、北側が調査区境で切られている。

（３）溝

2-1 区の北側 SD201 と SD202 の溝跡を検出した。溝はほぼ東西方向で、西側と東側は調査区外で切られている。



第 77 図　SD201・202・203・204・205 実測図

SD201・202（第 77 図）　延長約９ｍ、最大幅は 66 ㎝で、深さは 20 ㎝と浅い溝である。一方、SD202 は全長８ｍの溝で 30 ㎝程の深さがある。溝の覆土から出土した出土品は弥生土器や土師器の小片で、須恵器や灰釉陶器は含んでいない。

両溝の方向はⅠ群とした掘立柱建物群の棟方向と平行又は直交する。また一連の掘立柱建物群の最も北端に位置し、これ以上、北側には掘立柱建物群が見られないことから、この溝は建物群の北限を意味する区画溝としての役割をもっていた可能性が高い。Ⅱ期以降もこの方向は意識されていたようで、建物の棟方向が大きくずれることはない。

SD203（第 77 図）　2-3 区南側で検出した。溝は調査区を横切るような東西方向である。西側と東側は調査区外で切られている。延長約 10 ｍ、最大幅は 6.6 ｍで、深さは 35 ㎝程と浅い溝である。溝の覆土から出土した出土品は弥生土器や土師器、須恵器の小片で、灰釉陶器は含んでいない。溝は赤土政所遺跡の掘立柱建物群とは 70 ｍほど離れており、建物群との関連性は低いと思われる。また溝の南側には目立った遺構はなく、北側も杭列などが疎らにみられる程度である。人為的な構築された溝かどうかも疑わしい。

SD204（第 77 図）　SD203 の西側で切り合う溝である。SD203 の方向とは異なり、南北方向に走る。溝の延長は 5.3 ｍほどで、深さも 10 ㎝と非常に浅い。自然流路などの方向とは明らかに異なるため、人為的に掘削された可能性もあるが遺構の性格は不明である。

SD205（第 77 図）　2-3 区の北西端で検出した。半分以上は調査区外で溝の肩部は直線ではなく不定形である。また深さも 10 ㎝ほどしかないことから、自然流路の一部と捉えたほうが妥当であろう。

SD206（第 78 ～ 80 図、図版 33・34）　SD206 は 2-2 区の南端、Ｎ -25 ～Ｏ -25・26 グリッド内に位置している。検出できた全長は９ｍ、最大幅は 15 ｍ、深さは 2.2 ｍ程の規模である。水流は北東から南西方向への流れである。当初、調査時に第４面で確認した SD206 であるが、本調査面の上空からの写真と SD206 の範囲を確認すると、本面の水田畦畔が破壊されているような状態が把握できること、出土した遺物が古墳時代後期以降の遺物が含まれるなど、第３面や第４面で確認した遺構から出土する土器と時期が合わないことから、SD206 は本来第２面で確認できた可能性が高い。以上のことから本調査面の成果として報告することとした。併せて本調査面の完掘状況写真には SD206 該当部分は水平のままになっているが、本来は SD206 があったとして観察されたい。SD206 の堆積土は１～ 36 層に分層され、レンズ状に堆積している。堆積土はほとんどが砂質土である。７層以下の覆土には土器や木製品のほかに炭化物を多く含む。１～６層までには粘土層や砂礫を含むことから、この頃にはほとんど埋没していたと思われる。木製品と一部の土器の出土状況は第 79・80 図に示した。本遺構は溝として調査されているが、その規模や堆積状況、遺物の出土状況等からみて自然流路と考えたほうが妥当であろう。

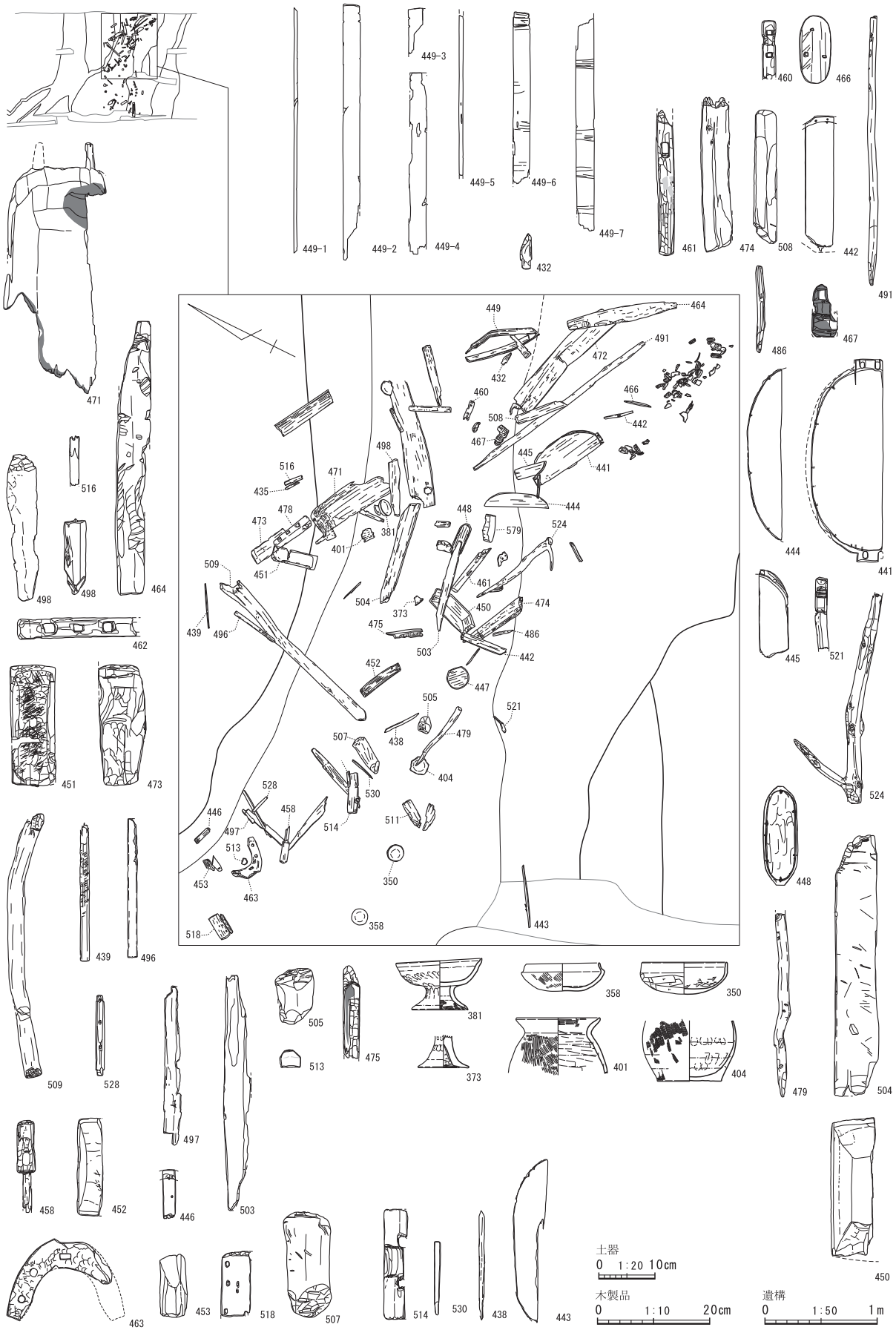
SD206 の覆土内より出土した土器はテン箱にして 13 箱の量がある。このうち図化したものは第 81 ～ 87 図 **334** ～ **428** である。土器群の主体は古墳時代後期の土師器だが、数少ないものの同時期の須恵器も出土している。**334** は土師器の壷胴部片である。SD206 の最下層から出土した。壷の肩部には工具による横線が連続し、その下に櫛状工具による刺突文がある。内面はナデている。**335** ～ **337** はミニチュア土器である。**335** は完形品で手捏ねにより作られている。口径は 3.1 ㎝、高さは 2.9 ㎝、表面の一部に黒斑がある。**336** もほぼ完形のミニチュア品である。ただしこれについては手捏ねではなく、破損した高坏の脚部片の割れ口を磨いている。高坏を再利用していると思われる。窪んでいる底部は、もともと高坏の坏部と脚部の接合部分であろう。**337** は手捏ねで作られたミニチュアである。口縁部は、やや外側へ開き、底部は平底になっている。外面には一部黒班がある。胎土には微量の雲母が混じっている。**338** は小型の坏である。手捏ねで作られたようで歪みもある。底部は平底になっている。これもミニチュア土器の１つであろうか。

1．灰色砂質土（5Y 4/1）
2．灰オリーブ砂質土（5Y 4/2）
3．灰色粘土：砂礫多く含む（5Y 4/1）
4．オリーブ黒色砂質土（5Y 3/2）：砂礫多く含む
5．暗オリーブ黒色砂質土（2.5GY 4/1）
6．オリーブ黒色砂質土（5Y 3/1）
7．黄灰色砂質土（2.5Y 4/1）：木片多く含む
8．灰色砂質土（5Y 4/1）
9．オリーブ黒色砂質土（5Y 3/1）：木片多く含む
10．灰オリーブ砂質土（5Y 4/2）：砂礫多く含む
11．灰オリーブ砂質土（5Y 4/2）：炭化物含む
12．オリーブ黒色砂質土（5Y 3/2）
13．灰色砂質土（5Y 4/1）：木片含む
14．灰色砂質土（5Y 4/1）：炭化物含む
15．灰色砂質土（7.5Y 3/2）
16．オリーブ黒色砂質土（5Y 3/2）：木片含む
17．オリーブ黒色砂質土（5Y 3/1）：炭化物含む
18．灰色砂質土（10Y 4/1）：炭化物多く含む
19．灰色砂質土（10Y 4/1）：木片含む
20．灰色砂質土（7.5Y 5/1）：炭化物筋状に含む
21．灰色砂質土（7.5Y 4/1）
22．灰色砂質土（10Y 4/1）：砂礫筋状に含む
23．オリーブ黒色砂質土（5Y 3/2）：木片多く含む
24．灰色砂質土（5Y 4/1）：炭化物わずかに含む
25．灰色砂質土（7.5Y 5/1）：木片わずかに含む
26．灰オリーブ砂質土（5Y 5/2）
27．灰オリーブ砂質土（5Y 5/2）：木片筋状に含む
28．灰色砂質土（10Y 4/1）：炭化物わずかに含む
29．オリーブ黒色砂質土（5Y 3/2）：炭化物多く含む
30．灰オリーブ砂質土（5Y 2/2）：木片わずかに含む
31．灰オリーブ砂質土（5Y 2/2）
32．灰色砂質土（5Y 5/1）：炭化物含む
33．灰色砂質土（10Y 5/1）
34．灰色砂質土（10Y 4/1）
35．灰色砂質土（7.5Y 4/1）：炭化物含む
36．灰色砂質土（7.5Y 5/1）

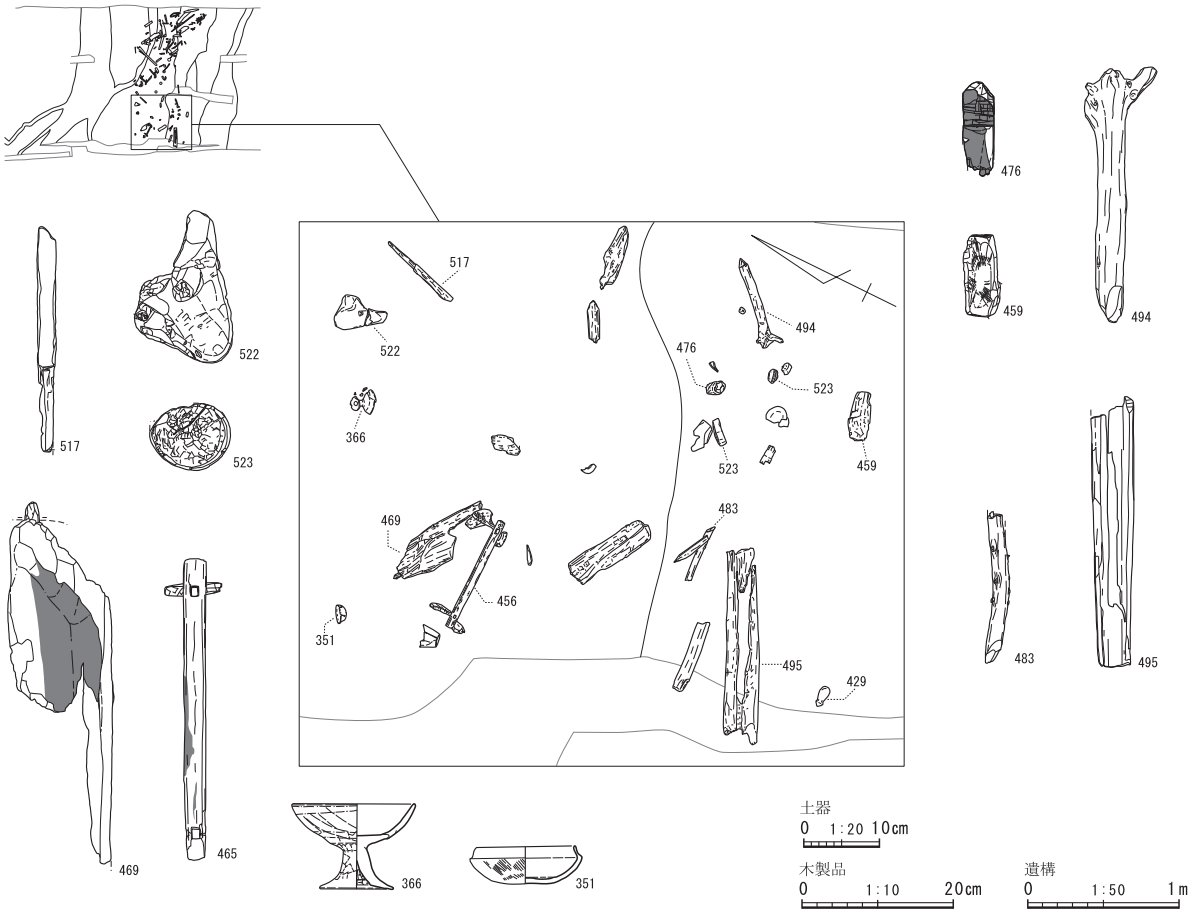
0　1:100　4m

第 78 図　SD206 実測図 1

339 ～ 351 は土師器の坏である。339 は口径 12.3 ㎝の丸底坏である。底部には指頭痕がある。340 は完形の坏で口径は 11.7 ㎝、底は 4.5 ㎝である。口縁部はやや内側へ内湾している。底部は浅く窪み、底部近くには指頭痕が残っている。341 は最下層から出土した坏である。口縁は内湾している。342 は復元口径が 12.9 ㎝の坏である。底部は丸底に作られている。343 は完形の坏で、口径 12.8 ㎝、器高は５㎝を測る。口縁部は内湾し、底部は丸底である。外面の状態は指頭痕があり、粘土に空気穴が入っている。344 も同形態の坏である。内面は丁寧なナデが施されている。345 も丸底で口縁部が内湾する坏



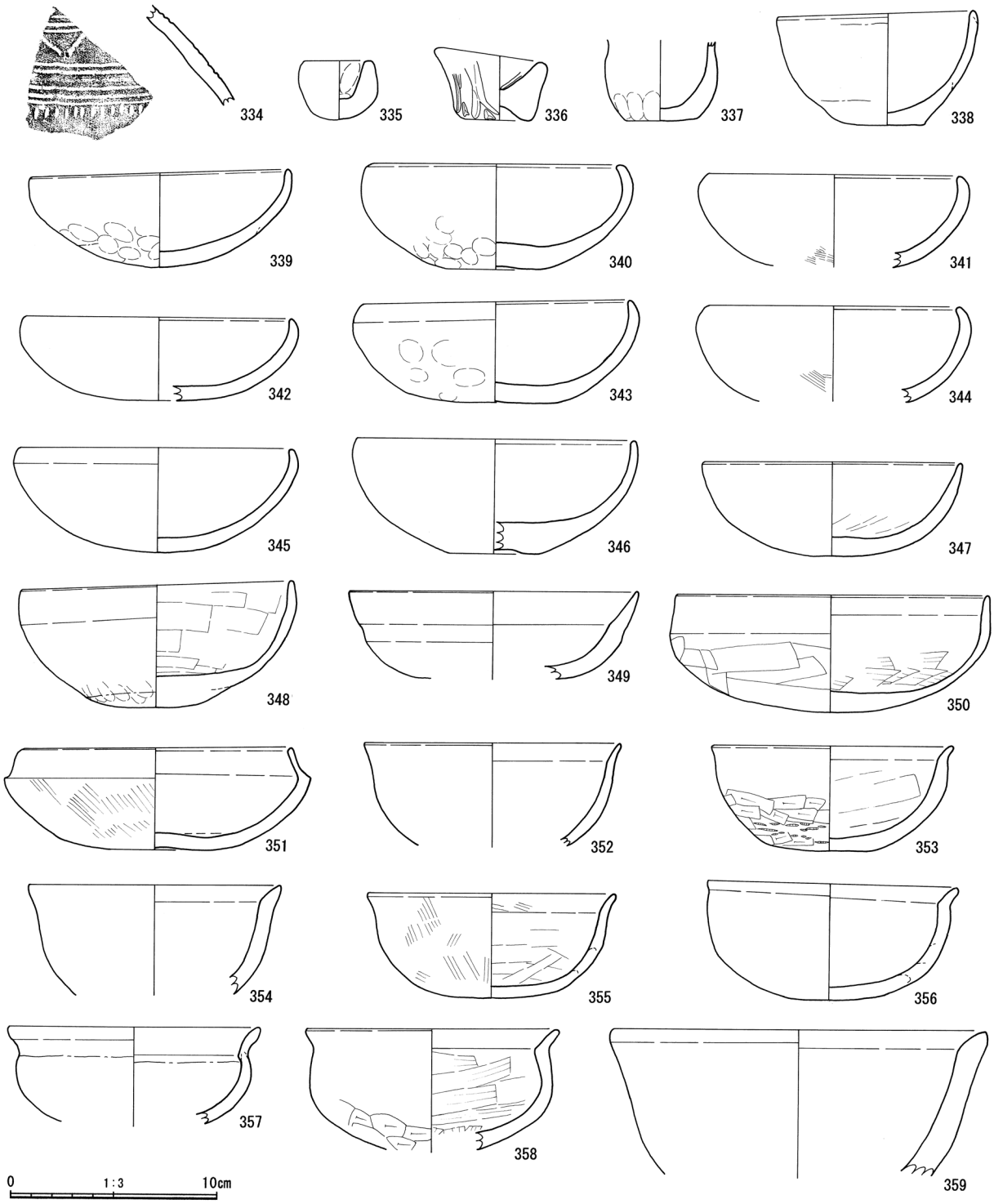
第 79 図　SD206 実測図２



第 80 図　SD206 実測図３

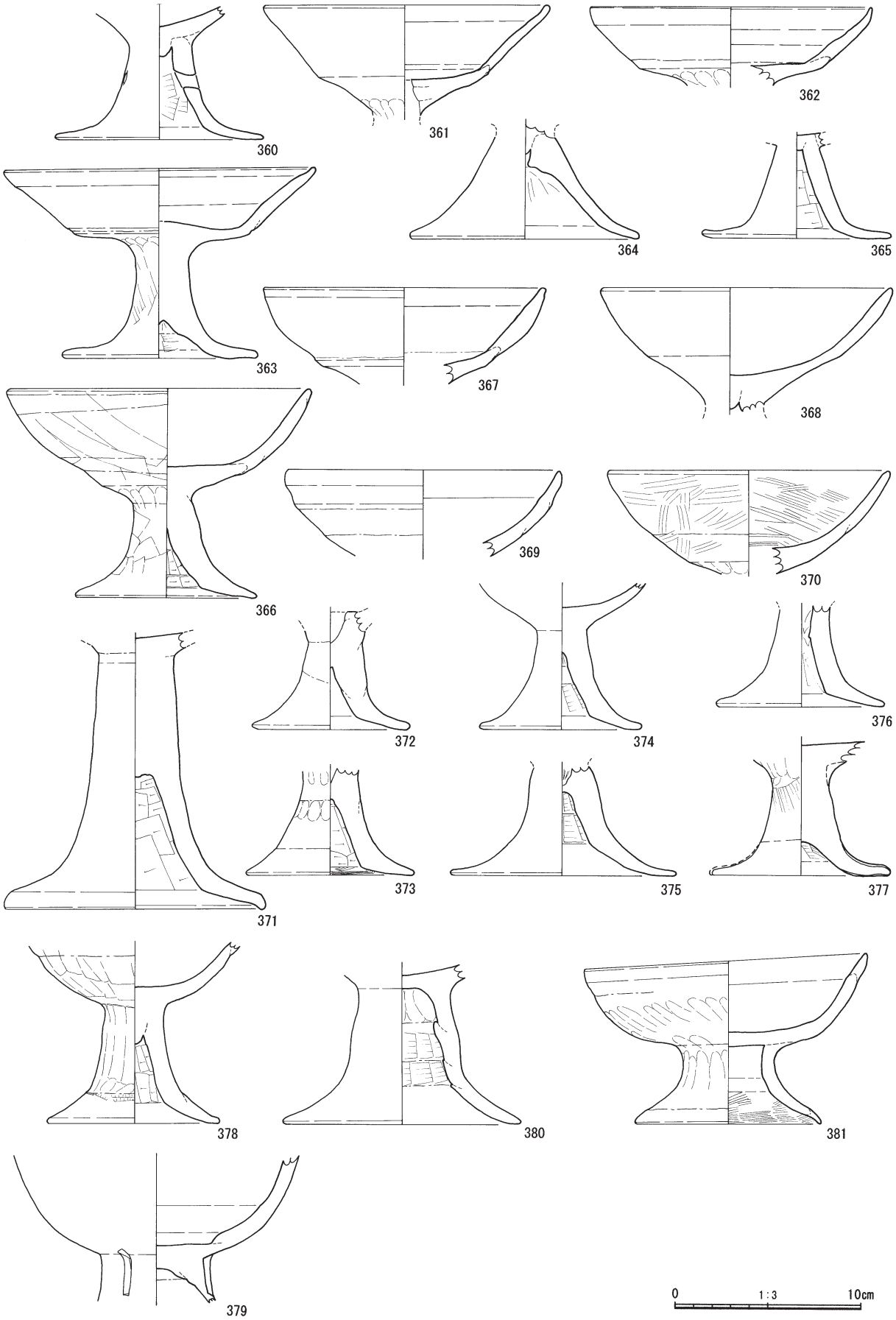
である。復元口径も 13.0 ㎝で他の坏と同様の大きさである。**346** は復元口径が 13.3 ㎝、器高は 5.5 ㎝の坏である。底が厚く、底部は浅く窪んでいる。**347** は口径が 12.4 ㎝、器高は 4.5 ㎝のやや小振りの丸底坏である。胎土はその他の坏が精製された粘土を使っているのに比べて、胎土に微粒の礫が混じる。**348** はほぼ完形の坏である。口径は 13.3 ㎝、底部が非常に厚く、器高は 5.9 ㎝ほどある。底部は丸く作り出されている。内面は丁寧にナデている。**349** は復元口径が 13.8 ㎝の坏である。口唇部から 2 ㎝ほど下の内面と外面に稜をもつ。胎土には微粒子が混じる。**350** はほぼ完形、口径は 15.0 ㎝とやや大振りな須恵器の坏身の模倣坏である。内面は見込み部分を板状工具により面調整している。外面は稜があり、底部は工具によるナデ調整がある。**351** は須恵器坏身を模倣した土師器の坏である。ほぼ完形で、口径は 12.8 ㎝、器高は 5.0 ㎝である。口縁部の作りは須恵器の坏身の受けを意識した形状になっている。内面はナデによる調整、外面は底部から体部まではハケ調整後にナデている。胎土には細かい粒子を少量含む。

352 ～ **358** は小型の鉢である。**352** は底部が欠損しているが口径 11.0 ㎝程の大きさである。**353** は完形の小型鉢で、口径は 11.5 ㎝、器高は 6.1 ㎝である。内面は丁寧にナデを施し、口縁部は外側に開く。この口縁部は後で粘土紐を継ぎ足したようで、外面側に輪積み痕が見える。底部は丸底であるが、外面の底から 1 ㎝程上の部分に籠目らしき痕跡がある（図版 117）。圧痕は横方向へ水平に回ることからハケとは異なる。籠編物などのような容器に粘土を入れて整形したものであろうか。圧痕はナデにより大部分が消されている。**354** も底部が残っていない。口縁部は内側に稜をもち、外側へわずかに開く。**355** は復元口径が 12.0 ㎝、高さは 5.0 ㎝の鉢である。内面見込みには工具による整形痕があり、外面

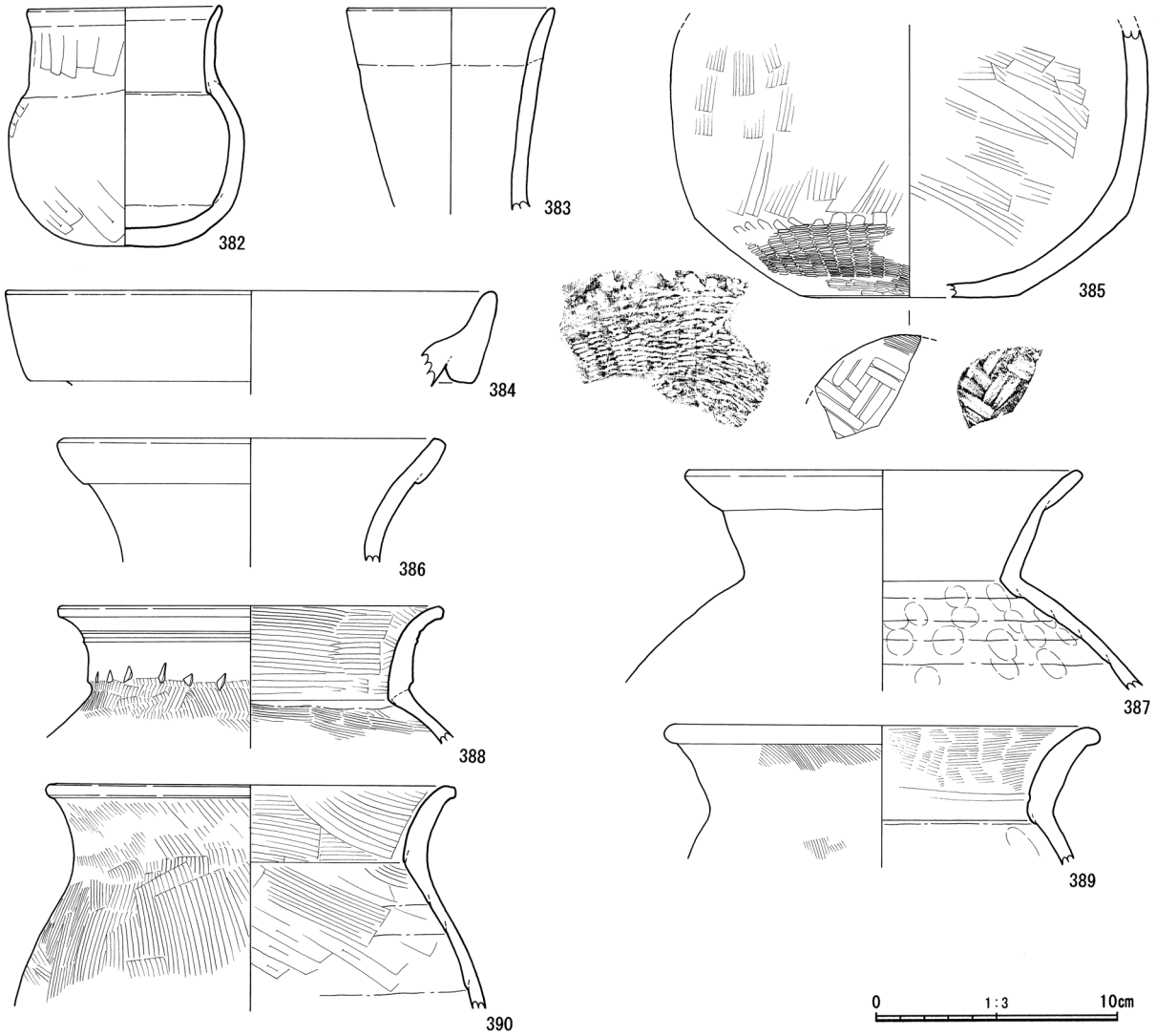


第 81 図　SD206 出土遺物実測図 1

にも細かいハケの痕が底面に近い部分に残っている。356 は完形の小型鉢である。口径は 12.1 ㎝、高さは最大 5.7 ㎝である。口唇部は強く外側に屈曲する。357 は SD206 の最下層より出土した小型鉢である。口縁部の内外面にかなりはっきりとした稜をもち、屈曲させている。体部は丸みがある。358 も最下層より出土した小型鉢である。内面はナデにより整形され、口縁部ははっきりとした稜がある。外面は工具で底面を調整している。体部は粘土内の空気により亀裂が入っている。359 は小片であるため口径の復元ができないが、土師器の大型鉢の可能性がある。口唇部はわずかに外側へ広がる。

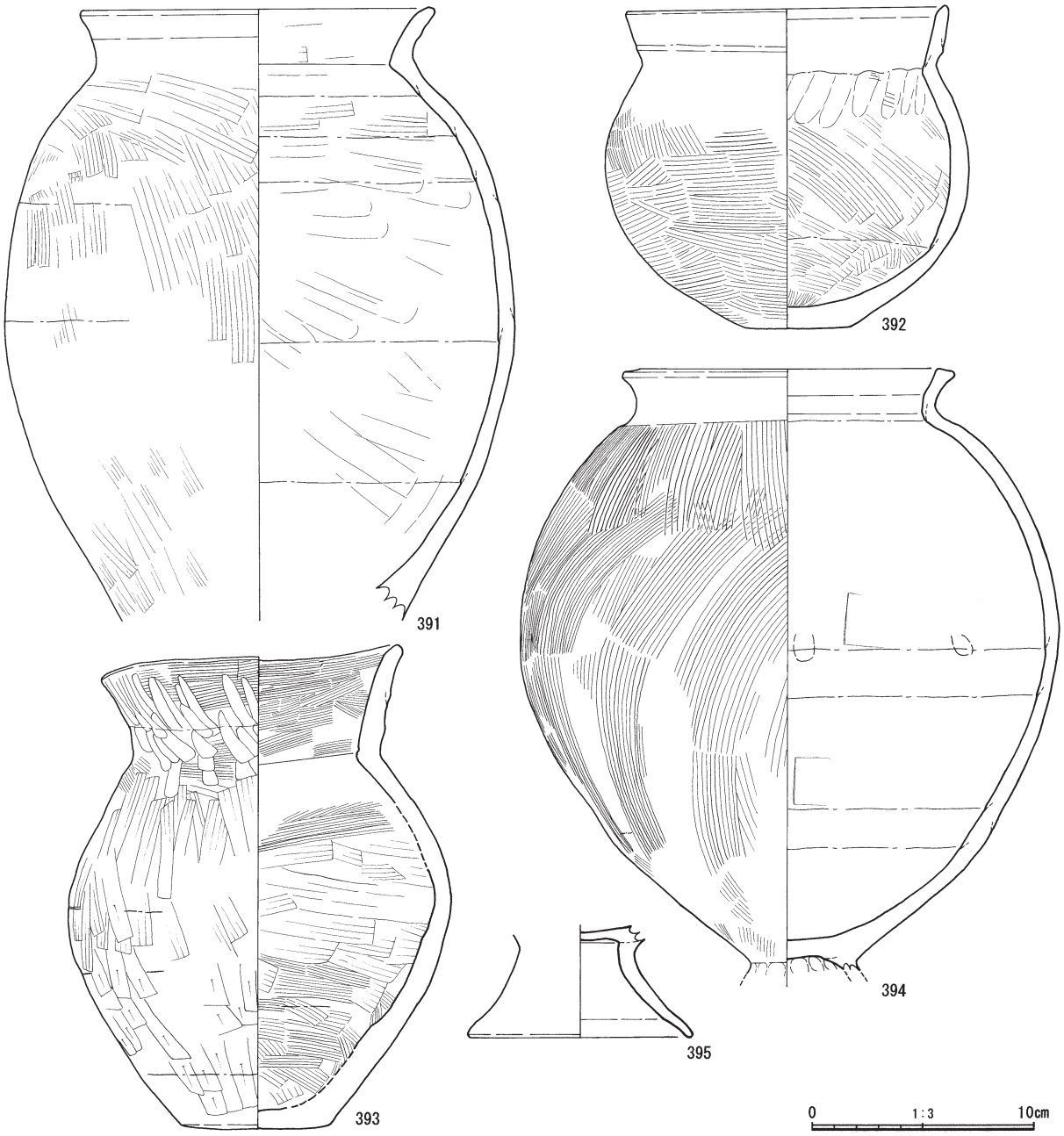


第 82 図　SD206 出土遺物実測図２



第 83 図　SD206 出土遺物実測図３

360 ～ 381 は土師器の高坏である。360 は坏部の一部と脚部の破片である。脚部中央には円形孔が２箇所あけられている。脚は緩やかに広がり、裾近くで外側に開く。脚内部には絞り痕と坏部の接合部が見える。361 は高坏の坏部である。口径は 15.2 ㎝で斜め外側へ直線的に開く。脚部とは別に作っている。362 も坏部の破片で復元口径は 15 ㎝ほどである。脚部との接合部で欠損しているが、坏底には脚部と接着したときの指ナデ押さえがある。363 は坏部から脚部まで残っている。復元口径は 16.6 ㎝で、坏の底は平坦で口縁部へ斜め外側に開く。脚部はわずかに膨らみをもつが細身で、下方で外側へ広がる形状である。364 は太めの脚部片で擂鉢状に開いた形をしている。坏部との接合部には絞り痕が見える。365 は高坏の脚部がほぼ完存している。底部径は 10.0 ㎝で、裾は底部近いところで広がる形状である。366 はほぼ完形に近い。口径 15.7 ㎝の坏部内面は工具による整形後なでている。外面には輪積み痕が数箇所残っている。脚部との接合部には指頭痕がある。脚部内面にはヘラ状工具で粘土を削り落とした痕がある。全体に荒い整形が目立つ。367 ～ 370 は坏部片である。367 は内外面が黒く煤けている。368 は口径 15.5 ㎝で坏部は擂鉢状の形をしている。脚部との接合部で欠損している。369 も口径が 15㎝ほどの坏部である。内外面にナデ整形時の稜が残っている。外面には黒斑がある。370 は内外面にハケ調整痕が残る坏部片である。ハケ目を全体にナデ消している。371 ～ 378 は高坏の脚部片である。371 は脚部と坏の一部が残っている。高さは 14.7 ㎝あり、大型の高坏である。脚部内面は工具で削ら



第 84 図　SD206 出土遺物実測図４

れた痕があり、脚部の設置面はわずかに内側へ入る形状である。372 は高さ 6.2 ㎝ほどの小型脚部である。粘土の継ぎ目で大きく歪み傾いている。373 も小型の脚部である。外面はナデと指押さえがあり、内面は内側が工具で削られている。374 は坏の一部も残っている。小型で作りも粗い。375 は脚部径が 11.8 ㎝あり、裾が広がる形状である。脚の頂部は坏を接合するための穴が空いている。376 も小型高坏の脚部である。作りは 372 ～ 374 と同じで、外面はナデと指押さえ、脚中央の内側は工具で粘土を削っている。377 は坏の一部が残っている。また坏と脚部との接合状態が良くわかる資料である。脚部中央は刳り貫かれていない。378 も坏が一部残っている。粘土を継ぎ足したところにハケ状工具の痕が見える。379 は脚部が短い高坏である。坏部は碗形、脚部には３方向に縦方向のスリットが切り込まれている。上下端部が欠損しているため全体形がわからないが、須恵器の高坏の模倣と考えられる。380 は高坏の坏の一部と脚部である。脚部中央がやや膨らむ形状で裾部は緩やかに広がる。脚の内面には粘土の継ぎ目を

指押さえして繋げている。381はほぼ完形の高坏である。坏部の口径は15.2㎝、高さは最大9.2㎝を測る。脚部は短めである。坏の内面は丁寧になでている。外面は指ナデ押さえ、脚部内面は櫛状工具により調整後、ナデられている。粘土の継ぎ目が残ったり完全にナデ消していない部分があったりと、全体に作りは粗い。

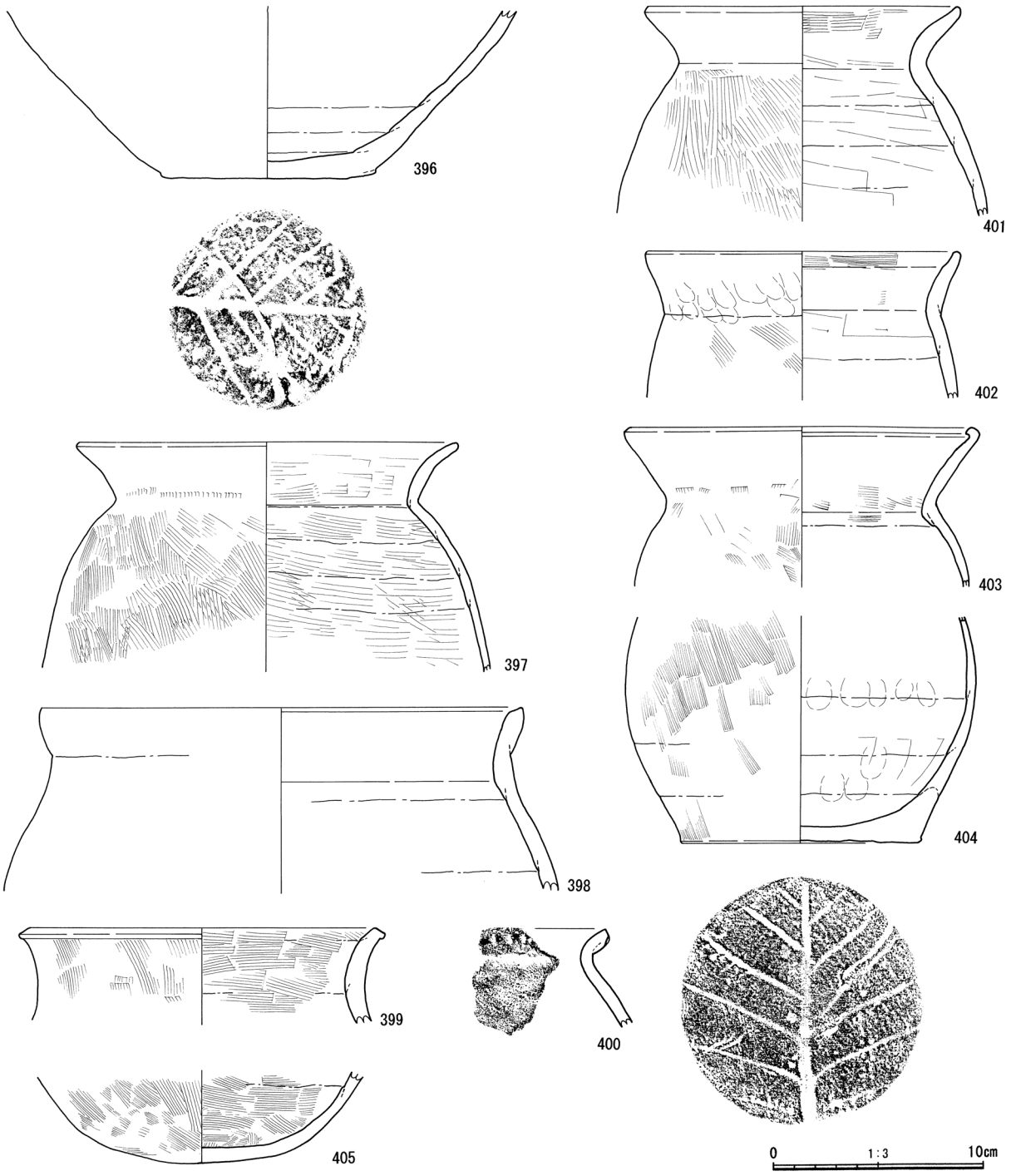
382は小型の短頸壷である。口径は7.9㎝、高さは9.8㎝、丸底で、ほぼ完全な形で残っている。外面はハケ調整後になでてハケ目を消している。実用的な大きさではないことからミニチュアに含まれるであろう。383は長頸壷の口縁部である。頸はやや広がり気味に直行する。口縁部近くに輪積み痕が見える。384は二重口縁の壷口縁部である。胎土には細かい粒子が多く入る。表面は風化が進み剥がれ落ちている。385- １・２は土師器の壷である。底部から体部まで残っている。底部は平底で網代痕がある。網代は二本取りの網代編みである。底から高さ3.6㎝ほど上までは笊目の籠編み痕が付いている。土器は底部を籠編物に貼り付けて整形し、そのまま焼成されたと思われる。385-2は接合しないが同一個体である。386は折り返し口縁の壷口縁部片である。胎土には小粒子が混じっている。387も壷口縁部片である。復元口径は16.2㎝ほどである。胎土には小礫などの粒子が混じる。内面の輪積み痕は指押さえのみではっきり残っている。

388～394は土師器の甕である。388は復元口径が15.4㎝ほどの甕の口縁部である。口縁部外面はナデにより整形しているが外面体部と内面にはハケ調整痕がそのまま残っている。外面はわずかに煤けている。389は口縁部に厚みがある甕である。外面はかなり使い込まれたようで煤が付着している。内面は口縁部に細かいハケが見えるものの後でナデ消している。復元口径は17㎝ほどであったと思われる。390は口径が16.6㎝ほどに復元できる甕の口縁部で、外面に煤等は見えないが、内面には被熱した痕跡がある。内外面ともハケ調整痕があるが口縁部と内面はナデ消している。391は口縁から体部まで残っている。底部は欠損のため形状不明だが、長胴の甕になるであろう。口縁部は内外面ともナデによる整形、体部外面はハケ調整後ナデ、内面は指ナデにより輪積み痕は消されている。392は広口の小型甕である。復元口径と高さは14.4㎝を測る。外面は平底の底部にもハケ調整してあり、胴部中央から上はハケ目がナデ消されている。内面はハケ目が残り、口縁部と接合部は指押さえである。393は小型の平底甕とした。割れているがほぼ完全な形を復元できる。口径は12.8㎝、高さは21.4㎝、底径は6.5㎝を測る。口縁部は直立に近くわずかに外側へ広がる。胴部は中央に最大径をもつ。外面はハケ調整後、部分的にナデ消されている。内面はハケ調整痕が残っている。全体に作りが粗く、実用にされたかは不確かである。394は台付甕である。台部は欠損している。口径は13.1㎝、残存高は27.2㎝ある。胴部の形状や外面のハケ調整痕はＳ字状口縁甕に似ている。口縁部は内側にわずかな屈曲があるもののＳ字状にはなっていない。胴部は肩が最も張り出し、全面ハケ調整痕がある。また胴部張り出しの辺りまで煤が付着している。内面は調整痕がナデ消されている。覆土内では古い方の土器に入る。

395は土師器の高坏脚部である。坏と脚の付け根は径が広くなっている。高さは５㎝と低い。表面は風化し調整痕は見えない。

396は土師器の壷底部である。底部径は9.6㎝で、木葉痕がある。底部全体が黒斑となっている。胎土は小粒の礫が多く混じっている。内面には輪積み痕が残っている。

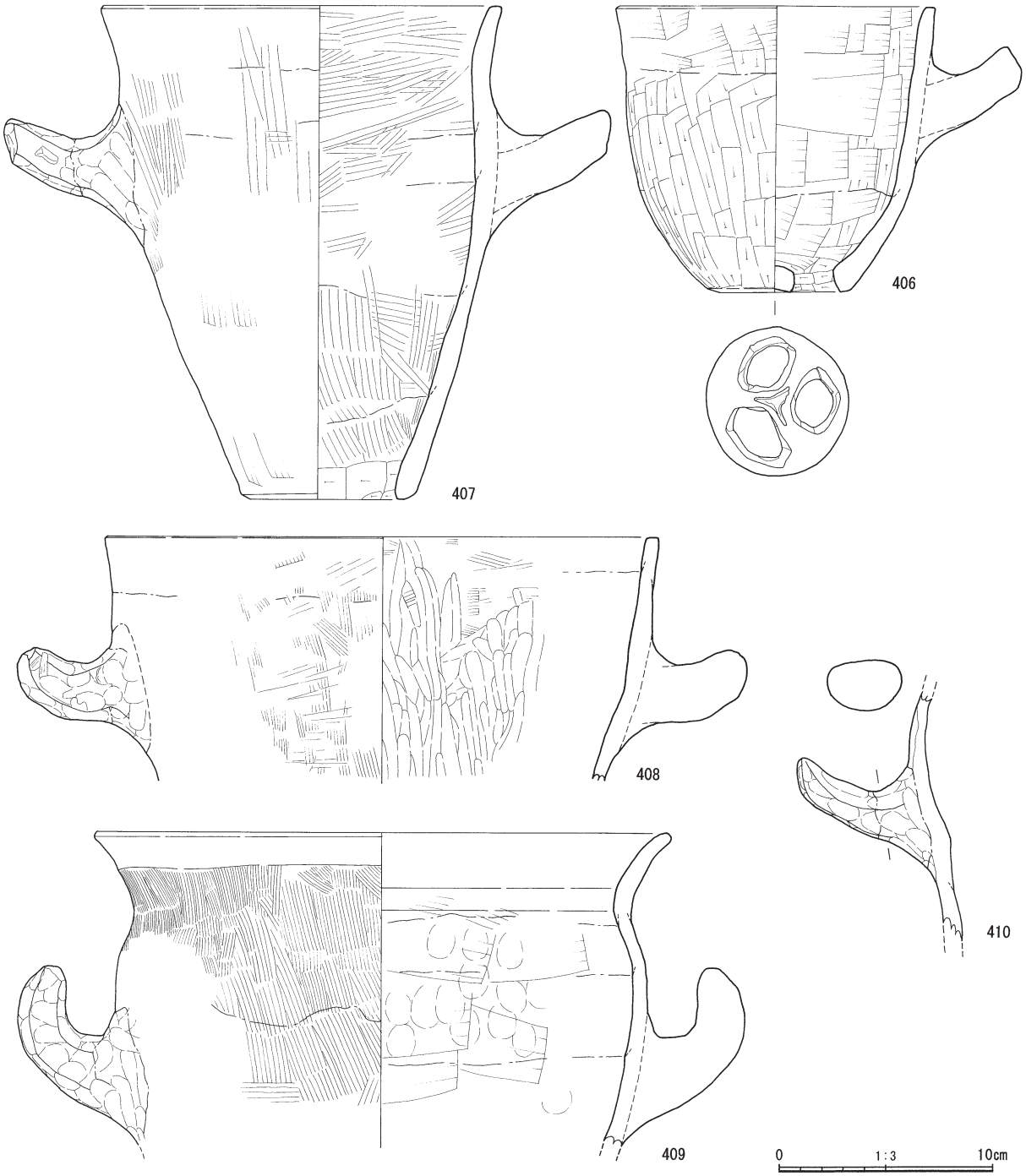
397～405は土師器の甕である。397は17.8㎝の口径が復元できる口縁部破片である。口縁部はなでてあるが、外面はハケ調整があり、全体に煤が付着している。胴部内面はハケ調整痕が残っている。398は397と違って、まったく使用された痕跡が見られない。風化により表面の調整痕は見えないが、口縁部や内面には輪積み痕がある。399は甕の口縁部片である。外面は風化により表面が剥がれているが、わずかに煤が付着している。内面はハケ調整がされている。400は最下層より出土した弥生土器の甕の口縁部破片である。小片であるが外面口唇部には工具による刻みが入っている。胴部はハケ調整が



第 85 図　SD206 出土遺物実測図５

見える。SD206 覆土内では最も古い土器である。401 は口径が 14.8 ㎝に復元できる甕口縁部片である。胴部外面だけにハケ目を残し、あとは整形時のハケ目をナデ消してある。胎土には微量の雲母が入っている。402 は口縁から胴部肩の破片である。煤は付着していない。輪積み痕ははっきりと見える。403 も使われた形跡のない甕口縁部片である。口唇部が内側に入っている。404 は平底の甕底部片である。底部径は 11.8 ㎝で木葉痕がある。底部は黒斑になっている。外面は細かい目のハケ目で面調整後、ナデている。内面は輪積み痕とそれを押える指圧痕がある。

405 は長胴甕の丸底底部である。内外面とも全体にハケ調整されている。外面は火を受けて煤が付着



第 86 図　SD206 出土遺物実測図６

している。

406 ～ 410 は甑である。406 は把手が片方のみ付いた甑で、その把手は一部を欠いているが、ほぼ完形品である。口径は 14.3 ㎝、高さは 13.4 ㎝、底径は 5.7 ㎝である。底部には３箇所の楕円形孔があけられている。形状は上部に向かってやや広がり、下方はわずかに窄まる。表面は幅の狭い板状の工具で調整された後にナデて工具痕を消している。内面も工具で面調整されている。407 は上部から底部までの破片が残っていることから全容が復元できる。口径は 18.6 ㎝、高さは 23.0 ㎝、底径は 8.6 ㎝である。底部には透かしなどはなく貫通している。底から口縁部までは緩やかに広がっていく形状である。把手は片方しか残っていないが、細身で長さがある。外面はハケ調整後ナデており、内面には粗いハケ

調整により整形されている。408 は口縁部から把手までの破片である。復元口径は 25.5 ㎝と大型の甑である。外面はハケ調整後ナデ消されている。内面はハケ調整後、縦方向に強くナデてある。409 は口縁部がやや外側に開く形状の甑である。復元口径は 26.6 ㎝と、こちらも大型である。把手は太く幅があり、上部へ反りあがった形をしている。外面はハケ調整、口縁部はなで消されている。内面は指頭痕や工具での面調整の痕がある。410 は把手部分の破片で径は復元できない。表面は風化して調整の痕跡も見えない。把手は細身で先が尖っている。

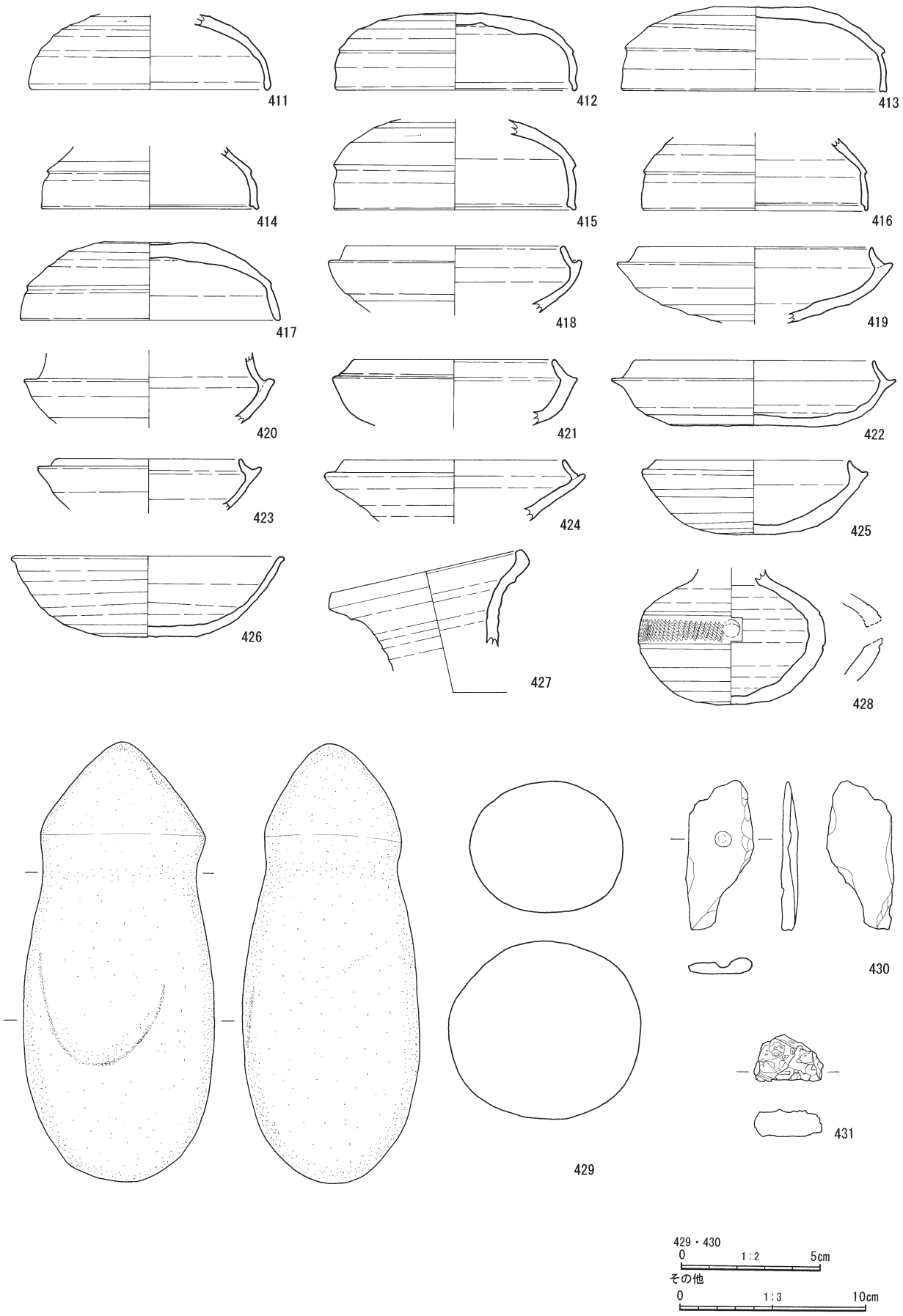
411 ～ 428 は須恵器である。SD206 で出土した須恵器は蓋坏、瓶、瑳である。本遺構の土器全体の出土量に比べて須恵器の割合は低く、主体は圧倒的に土師器と言える。

411 ～ 417 は坏蓋である。口縁部が立ち上がる身と対になる。411 の坏蓋は天井部と口縁部の境に区画がない。復元口径は 12.7 ㎝である。412 は天井部と口縁部の境に明瞭な突帯状の稜をもつ。口唇部内側もわずかに段になっている。径は 12.7 ㎝、器高は 4.1 ㎝を測る。413 は稜を鋭く作り出している。径も 14.1 ㎝、器高 4.6 ㎝と大きめである。天井部は回転ヘラケズリで調整されている。口唇部は平坦な面に削られている。年代は６世紀中頃だろうか。414 は工具で鋭い稜を削り出している。口唇部は段のある面を作っている。復元口径は 11.6 ㎝と小振りである。415 も突出部の稜がある程度はっきりと出ている。復元口径は 12.8 ㎝、天井高は 4.8 ㎝である。口唇部は斜めに削られた面になっている。416 は復元口径が 11.9 ㎝、境目の稜が鋭く突出し、口唇部は接地面が細く、内側で段になっている。417 は完形の坏蓋である。口径は 13.8 ㎝、器高は 4.2 ㎝を測る。天井部は降灰が付着している。天井部と口縁部の境は稜を意識して作り出しているが、鋭くはない。口唇部は細く尖っている。

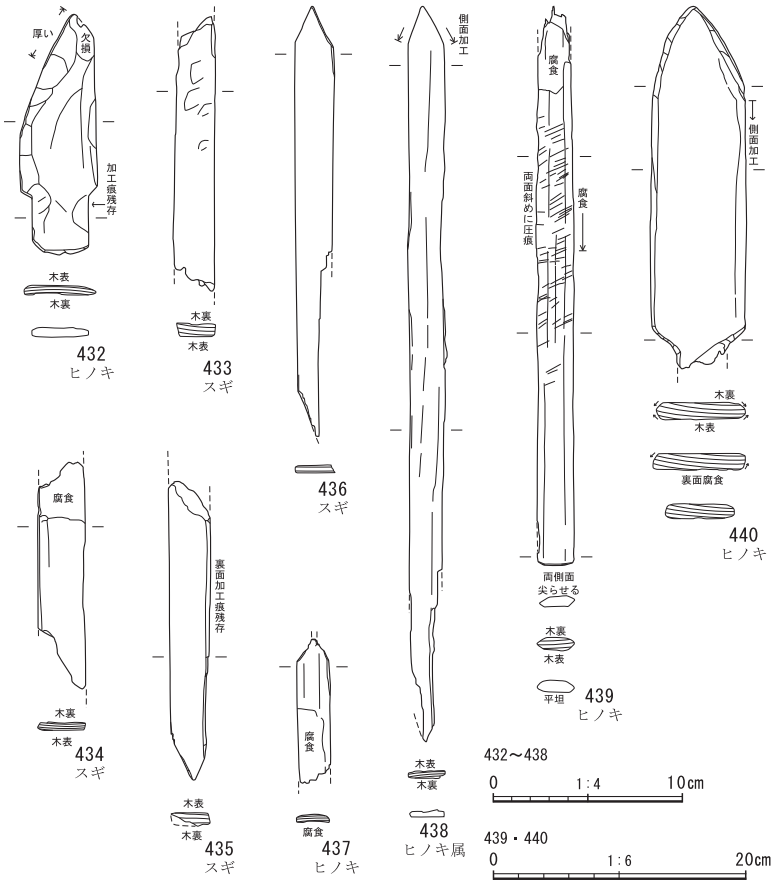
418 ～ 426 は坏身である。418 は復元口径が 9.6 ㎝と小振りの坏身である。口縁部は直立気味に立つ。419 は口径が 11.6 ㎝、器高は 4.0 ㎝に復元できる。口縁部は垂直気味に立つ。口縁部には蓋の一部が降灰釉によって熔着している。底部は一面降灰釉が付着し調整痕は見えない。420 は口縁部の立ち上がりが長く垂直気味に立つ。小片のため径が定かではないが小振りの坏身だろう。口唇部は欠損している。421 は口縁部の立ち上がりが短く斜めに傾いている。受け部も焼き歪みのためか窪みがない。径は 10.2 ㎝と小さめに復元できることから遠江編年Ⅳ期前半（TK217 型式併行）で７世紀初頭の時期であろう。422 は 1/2 ほど残存している坏身片である。復元口径は 11.9 ㎝、器高は 3.5 ㎝とやや扁平気味である。口縁部は高く垂直気味に立つ。底部は全体に降灰釉が被っている。423 は小片の坏身口縁部である。口径は復元すると 10 ㎝程度の大きさである。口縁部の立ち上がりは短い。424 も小片ながら口径は 11.4 ㎝に復元できる。やや歪んでいるが口縁部は高さがある。425 は胎土が灰白色で焼きが甘い完形の坏身である。口縁部は短く傾斜している。口径は 10.3 ㎝、器高は 4.0 ㎝と小振りである。421 と同様、７世紀初頭の坏身であろう。426 は返り蓋と対になる須恵器無台坏身である。底部は回転ヘラケズリを施すが口唇部は外側へ開く。426 は遠江編年Ⅳ期以降でやや年代が新しい。

427 は瓶の口縁部と思われる破片である。口径は 9.8 ㎝。平瓶の口縁部か。428 は瑳である。胴部の 1/2 破片で口縁部は欠損している。胴の張り出し部に波状の櫛描文が沈線区画の中に施されている。張り出し部には円形孔が１箇所ある。

SD206 から出土した石製品他は第 87 図 429 ～ 431 に図示した。429 は中粒砂岩製の有頭状石錘である。石錘は完形で、重量は 899g ある。形状は頭部先端が尖り、下に向かって傘状に開き、上部から 3.5 ㎝ほどのところで括れを作り出している。括れから下はやや膨らみをもった楕円形状を呈する。断面形は円形に近い。全面敲打により整形している。430 は用途不明の石製品である。天竜川水系の緑色片岩製で板状に剥離している。上下短部は折損しているが、左右側面は端部を剥離調整した痕跡がある。正面中央に径 0.6 ㎝程の未貫通の円形穴がある。穴には回転による擦痕は見られず、人為的な穿孔かどうか疑わしい。表裏面は剥離面であり研磨痕はない。431 は自然科学分析の結果、ガラス化した炉材とい



第 87 図　SD206 出土遺物実測図 7

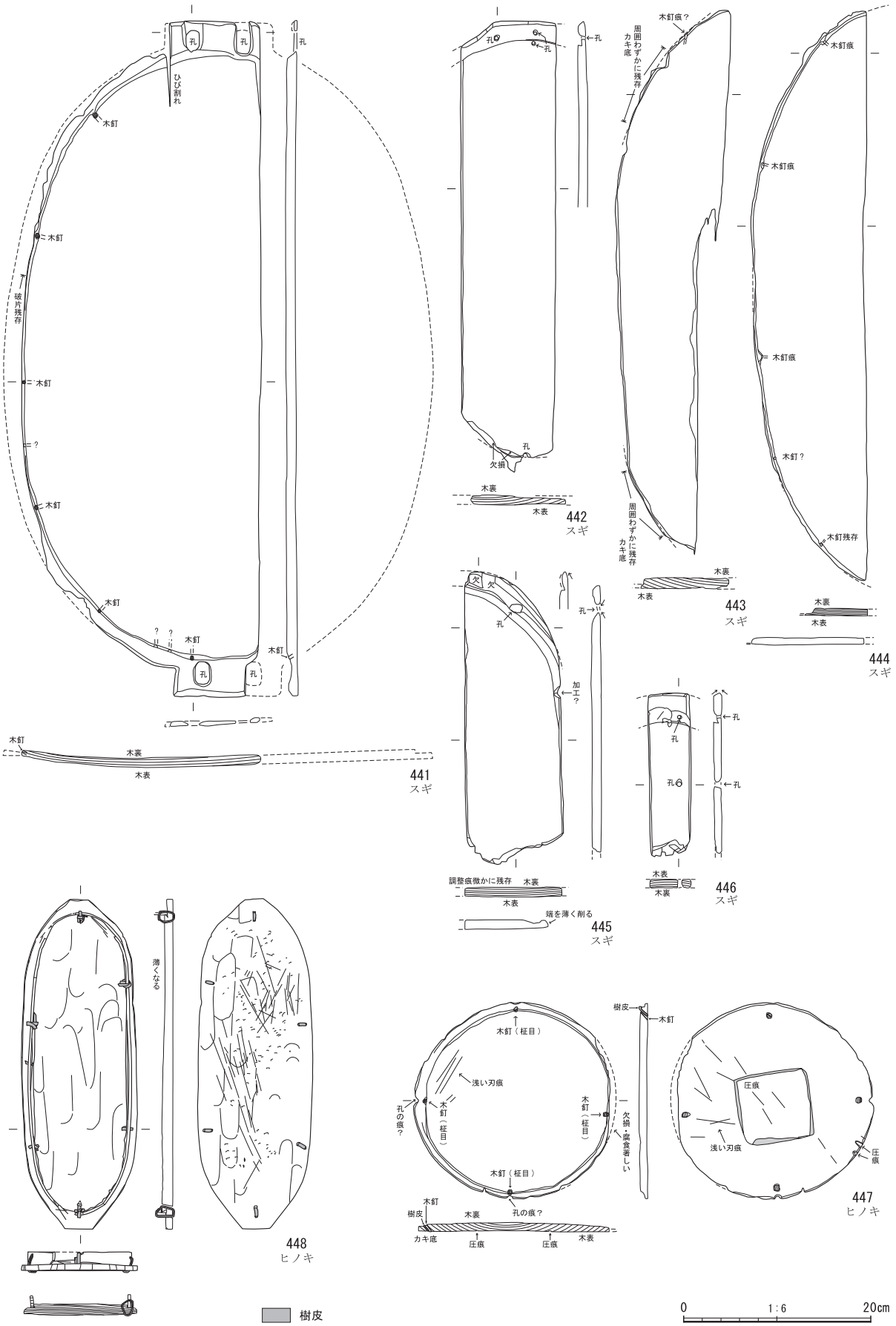


第 88 図　SD206 出土遺物実測図８

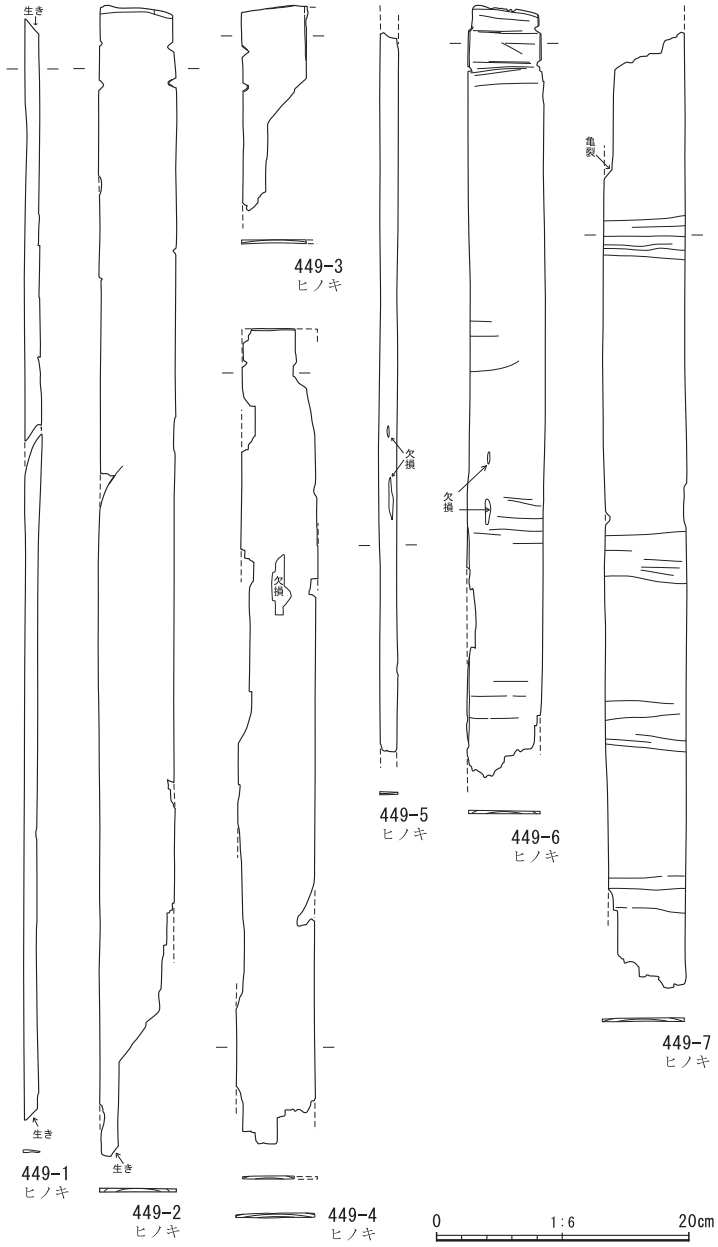
うことがわかっている（第７章第２節）。炉材の微粉末が凝集・塊状化して、さらに被熱により焼結をしたものである。一反田遺跡 3-2 区包含層から出土した第 91 図 **453** とほぼ同じ組成と特徴をもっている。

SD206 より出土した木製品は第 88 図 **432** ～ **531** である。木製品は器種別に図へ配置した。第 88 図 **432** ～ **440** は用途不明品である。スギやヒノキなどの樹種を使っていることからして斎串または形代の可能性がある。**432** は長さ 12.7 ㎝の薄板で刃先のような形状をし、下方は幅を狭く加工している。右側面側を刃部のようにしていることから武器形かもしれない。**433**・**434** は上下端部が欠損しているが薄板状になっている。**435** は下端部を両脇から削り、先端を尖らせている。斎串であろうか。**436** も長さ 22.7 ㎝の上下を圭頭状に尖らせてある薄板である。**437** は下方が欠損している。上部に圭頭状の加工がある。**438** は長さ 38.9 ㎝、幅 2.1 ㎝、厚さは 0.4 ㎝のヒノキ属で作られた斎串である。頭部は圭頭状に加工され、下方は一部欠損しているが端部は先を尖らせている。**439** は剣形と思われるヒノキ製の木製品である。残存長は 44.3 ㎝、幅 3.0 ㎝で 1.0 ㎝の厚みがある。上部は腐食により欠損しているが下端部は面取りされている。左右は表裏面から削り刃部のように尖らせている。さらに表裏面の中央付近には、何かが巻きつけられていたような斜め方向の圧痕が残っている。**440** は 28.6 ㎝のスギの薄板である。形状は幅 7.7 ㎝の板の上部を圭頭状に尖らせ、上から 25 ㎝ほど下のところから括れを付けて 3.8 ㎝と幅が狭くなっている。下端部が欠損しているため全体形が不明だが、武器形の可能性がある。

第 89 図 **441** ～ **454** は容器類である。このうち **441** ～ **448** は曲物底板（蓋板）である。樹種は **441** ～ **446** がスギ、**447** がヒノキである。**441** は大型の楕円形曲物の底板（蓋板）である。SD206 覆土内より多量の木製品とともに出土した（第 79 図）。全長は 72.5cm、幅は 45 ～ 46 ㎝ほどあったと思われる。底板は長軸方向の端部に長方形の把手を作り出した「カキゾコ」の形態をもつ。端部の把手には２箇所の楕円形孔がある。左側面には７箇所の木釘痕がある。**442** も「カキゾコ」の曲物底板（蓋板）である。残存長は 48.3 ㎝で、左右側面と下端部が欠損している。長軸方向の端部をわすかに突出させて、円形孔を穿っている。孔は 0.3 ㎝ほどで上部に３箇所、下部に１箇所残っている。**443** は腐食破損が激しいが「カキゾコ」の底板（蓋板）である。0.3 ㎝径の木釘が１箇所残っている。**444** も 60 ㎝を超える楕円形の曲物底板（蓋板）である。**441** とは径が異なり接合しない。「カキゾコ」の形態で、側面には木釘痕が４箇所残っている。このうち木釘は２箇所ある。**445**・**446** は曲物底板（蓋板）の破片である。**445** は曲線の角度から楕円形の「カキゾコ」の形態である。端部に近い位置の破片で上部に楕円形の孔が１

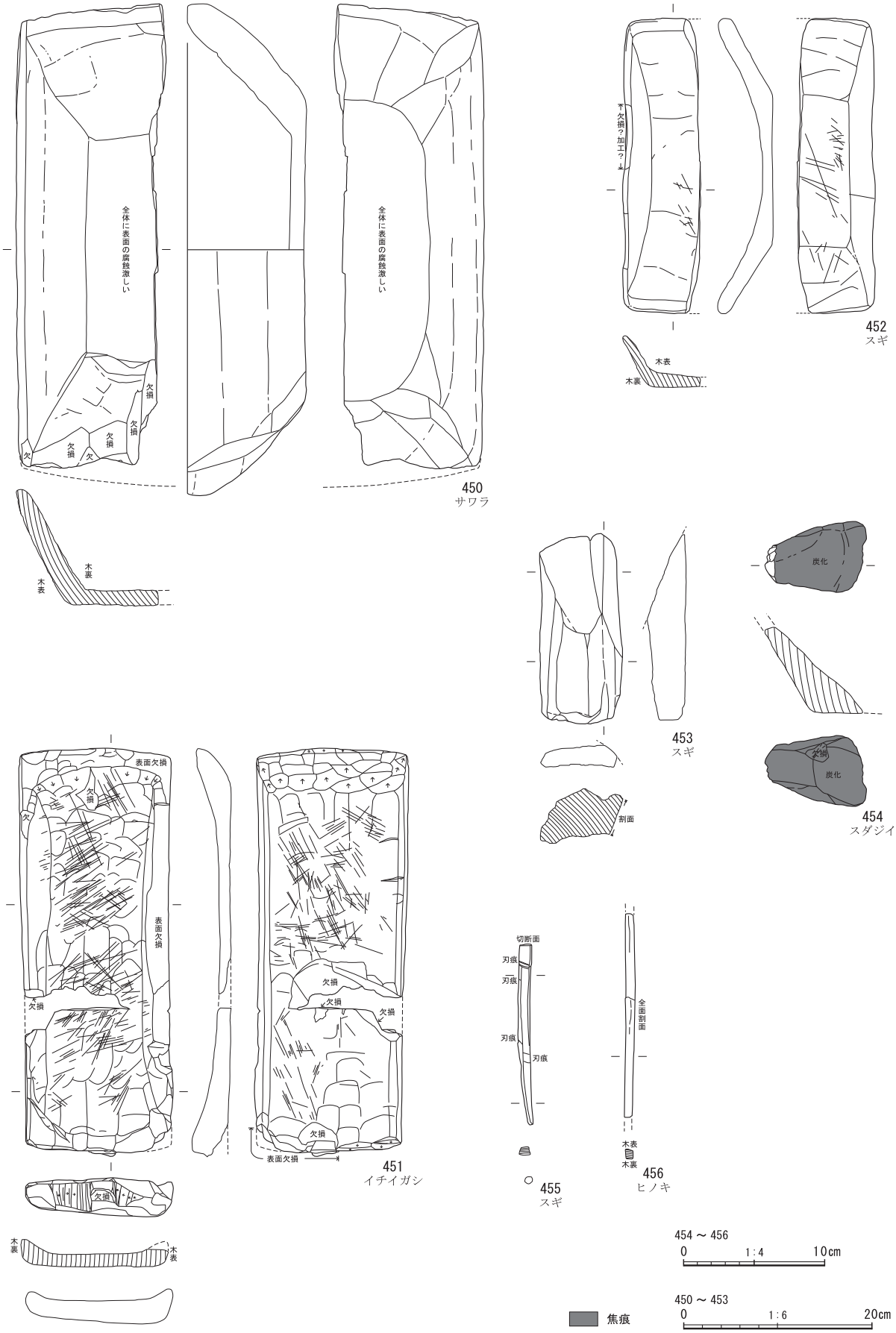


第 89 図　SD206 出土遺物実測図９



第 90 図　SD206 出土遺物実測図 10

箇所穿たれている。**446** も「カキゾコ」の曲物であるが小片のため形状は不明である。小孔が４箇所残っているが補修孔の可能性もある。**447** は径 21 ㎝程の円形曲物の底板(蓋板)である。「カキゾコ」の形態で周囲に４箇所の木釘と樺紐が一部残っている。裏面中央には 7.1 × 7.0 ㎝の方形の圧痕がある。**448** は長楕円形の曲物底板（蓋板）である。ほぼ完形に近い形状で残っている。長軸は 35.3 ㎝、短軸は 12.4 ㎝、「カキゾコ」の形状で側板の一部も付いた状態で残っている。長軸方向の端部は、わずかに突出させて直線の面を作っている。側板の高さは 1.4 ㎝ほどで、樺紐を二重以上巻いて６箇所で固定している。裏面には細かい刃物痕のような傷が無数に付いている。**449-1** ～ **7** は曲物の側板である。側板の高さは最大 6.2 ㎝で板を二重にして巻かれていたと思われる。板の端部には両脇に２箇所ずつの切り欠きをもつものもあり、綴じ合わせ部分は切り欠き部分に紐状のものを巻いて固定されていた可能性がある。**441** と **449** は近接した位置で出土していることから、**449** は **441** の側板という可能性もある。**450** ～ **454** は刳物である。**450** は長方形の刳物である。半分ほど欠損しているが、残存長は 49.3 ㎝、幅は 32 ㎝ほどあったと思われる。容器の深さは 10 ㎝ほどある。内面底は長方形だが、外面の底は楕円形に近い。木取りは横木取り柾目で、樹種はサワラ材である。**451** は浅い盤状の長方形刳物である。長軸は 43.4 ㎝、幅は 16.45 ㎝、高さは最大 4.15 ㎝である。樹種はイチイガシの柾目材。下端部中央に把手らしきところがあったようだが欠損している。表面に加工時の刃物痕が鮮明に残っており、まだ加工途中の未製品であろう。**452** は長さ 31.4 ㎝の長方形の刳物である。1/2 ほど残存している。スギの横木取り柾目材を使って作られている。内面は 3.55 ㎝の深さをもち、外面は丁寧に面取りされている。**453**・**454** は刳物容器の破片と思われる。**453** は上部の斜めに加工した部分だけが容器であった面で、それ以外は欠損している。スギ材であることや横木取り柾目の木取りであることから方形刳物等の容器の一部とした。**454** は全面炭化している。木取りは横木取り柾目で、樹種はスダジイ材である。刳物容器の底部片と思われる。**455**・**456** は箸状木製品である。形状が箸のような形のため箸状木製品と呼んでいるが、実際に箸の用途で使われたかどうかは不明である。**455** は長さ 12.8 ㎝の角柱状で下端部に向かうほど断面は丸くなる。**456** はヒノキ材で上下端部は欠損している。残



第 91 図　SD206 出土遺物実測図 11

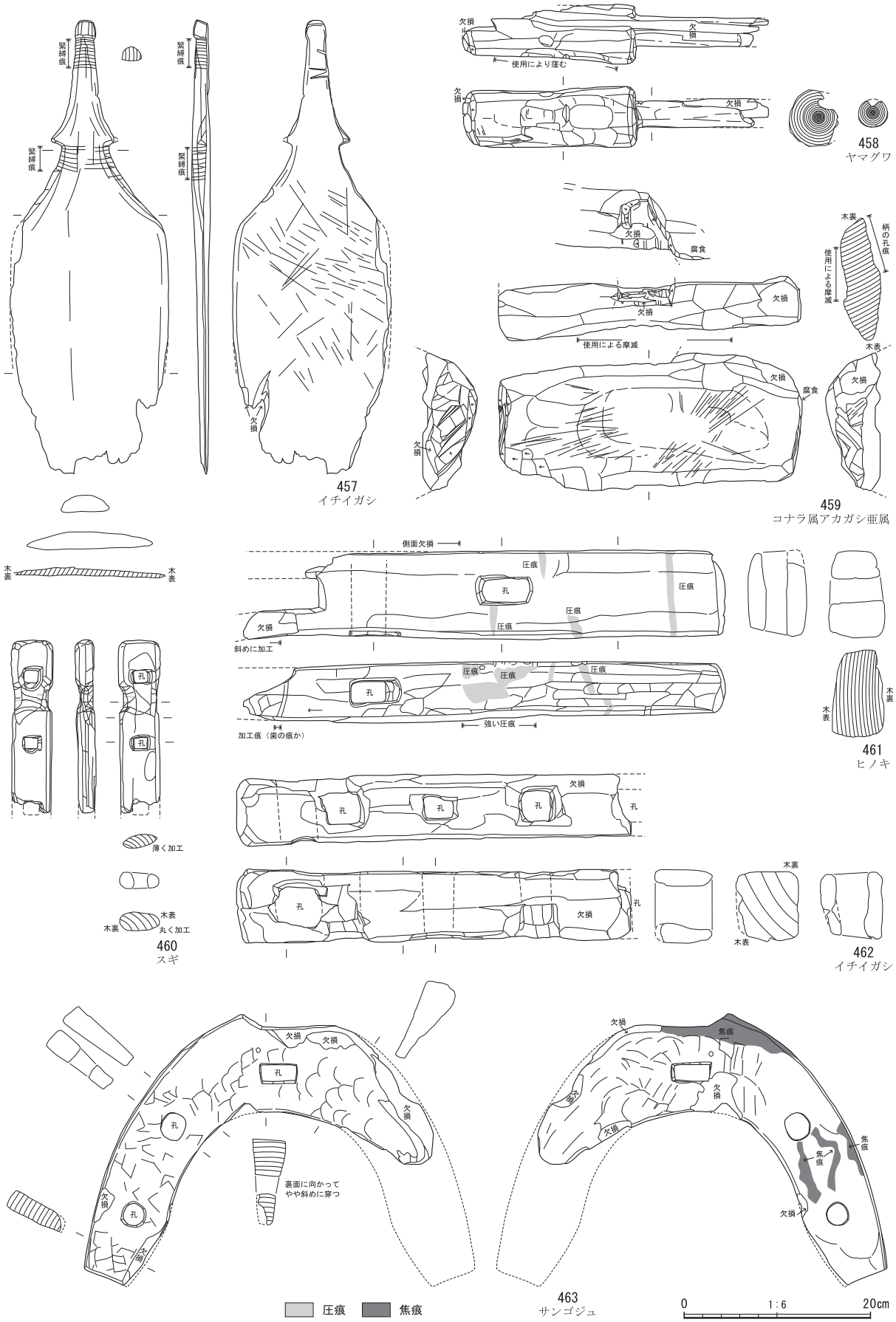
存長は 14.5 ㎝で角柱状をしているが、すべて割り面で加工の痕がない。

457 ～ 462 は農耕土木具である。457 はイチイガシ製の曲柄平鍬の身である。柄は反柄の形状をもつものが付くであろう。全体に腐食が進み下方は欠損している。着柄部はナスビ形をしており、上端部は丸い突起部が作られている。下方に緩やかに広がり、更に突起部を作っている。軸部には柄を装着したときの緊縛圧痕がある。身の肩は張り出さずになだらかに幅を増す。６世紀後半～７世紀初頭に属する鍬身は出土例が少ないことからも好資料となるであろう。458 は横槌である。槌部の一部と握部の端部が欠損している。樹種はヤマグワの芯持ち材である。槌部は 19 ㎝ほどあり、握部も 14cm 以上ある。槌部は使用により中央部分がかなり窪んでいる。459 は組み合わせ式掛矢の頭部であろう。樹種はコナラ属アカガシ亜属の柾目材である。1/2 以下に割れている。割れ口面のほうには柄孔の一部があり、幅６㎝程の柄が差し込まれていたと思われる。ただし小口面の端部には使用痕跡がなく、表面側中央に使用による摩滅で窪んでいる。破損した後の再利用かどうかは定かではない。460 は角枠型田下駄、通称「大足」の縦枠と思われる。下方は欠損しているが方形の貫通孔が３箇所残っている。孔と孔の間は緊縛痕があり摩滅によりかなり窪んでいる。大足の縦枠としているが、それ以外に紡織機（地機）の部材という可能性も捨てきれない。461 は角柱状の木製品である。当初、馬鍬の台木の可能性を考えたが、貫通孔が垂直であることや台木に多用されるカシ材ではないことから、別の用途が考えられる。角材には正面側に方形孔が２箇所、その直交方向に１箇所の方形孔が貫通している。角材の表面には幅 0.8 ㎝の圧痕が数箇所にある。貫通孔は直交方向に別材を差し込む抜き孔とも思われる。用途は井戸等の角柱などが考えられる。462 は馬鍬の台木である。材はイチイガシで一辺が７㎝程の角材である。腐食が激しく右側が欠損している。正面側の左端に方形孔が１箇所、側面に４箇所の方形孔が穿たれている。正面の孔は引き手側、側面の孔は歯が差し込まれる孔と思われる。

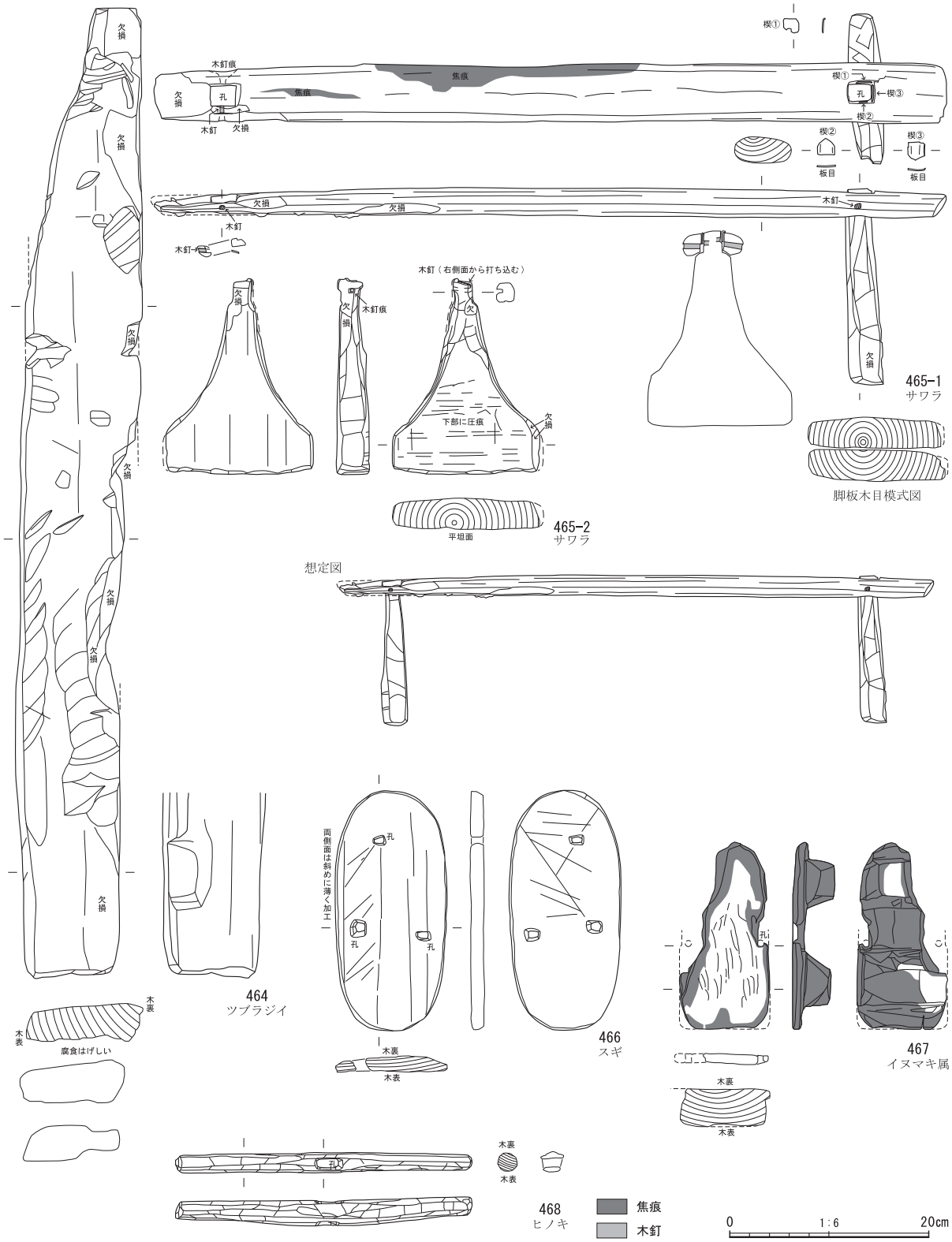
463 は牛馬の鞍またはくびきと思われる運搬具である。右側は欠損している。最大長は 29.0 ㎝、残存幅は 37.4 ㎝である。円内は摩滅していることから未製品ではなく使用していたものであろう。時期としては鞍があってもおかしくない年代である。樹種は落葉低木のサンゴジュで丘陵から山地まで普通に自生する樹木である。この木の根元に近い曲がった部分を使って作られている。上部中央に長方形孔、左側に円形孔が２箇所ある。しかし右側には左右対称の孔の痕跡は見られない。牛馬耕に使われたものか橇等の舵として使われたものかは断定できない。

464 は用途不明品である。長さが 97.7 ㎝ほどある角材で、樹種はツブラジイ材であることから建築部材の可能性もある。幅 12.9 ㎝、圧さが 4.3 ㎝の柾目の角材である。表面には面調整の手斧痕がある。下方には 6.8 × 4.9 ㎝の長方形の窪みがある。

465-1・2 は覆土より出土した。細長い台板と三角形に加工された２枚の脚板とから成る台状木製品である。脚板は２枚で一対となっており、脚板の１つは台板と組み合った状態で出土した。台板は長さ 79.6 ㎝、幅 5.7 ㎝、厚さ 2.7 ㎝の細長い板である。表面は平坦面ではなく中央になだらかな膨らみをもち、角は丸く削り落とされ、厚さは均一である。しかし、全体に華奢な作りで人が乗るあるいは物を載せるという加重のかかる行為に使用するには不向きに見える。表面の一部は炭化している。小口面は上面から斜め内側に切られている。両端に開けられた枘孔は 2.4 × 2.8 ㎝の長方形である。脚板は長さ 19.7 ㎝、幅 14.8 ㎝、厚さは 3.3 ㎝の板で、上端部に方形の突起を作り出している。下端部から４㎝ほどの高さまで最大幅をもち、上部よりも厚みがある。脚板の下方には横方向の圧痕がある。木目からして２枚の脚板はもともと１枚の板を分割したものであることがわかる。脚板は台板の枘孔に差し込まれ、枘孔の左右隙間に楔を打ち込んだ後、両脇から木釘で固定している（第 93 図想定図参照）。現状の装着角度は外側で 85 ～ 86°であることから横から見ると脚板はハの字状に装着されていたであろう。一方の脚板は外れた状態であったが近接した位置で出土している。樹種は台板・脚共にサワラ材である。サワラは



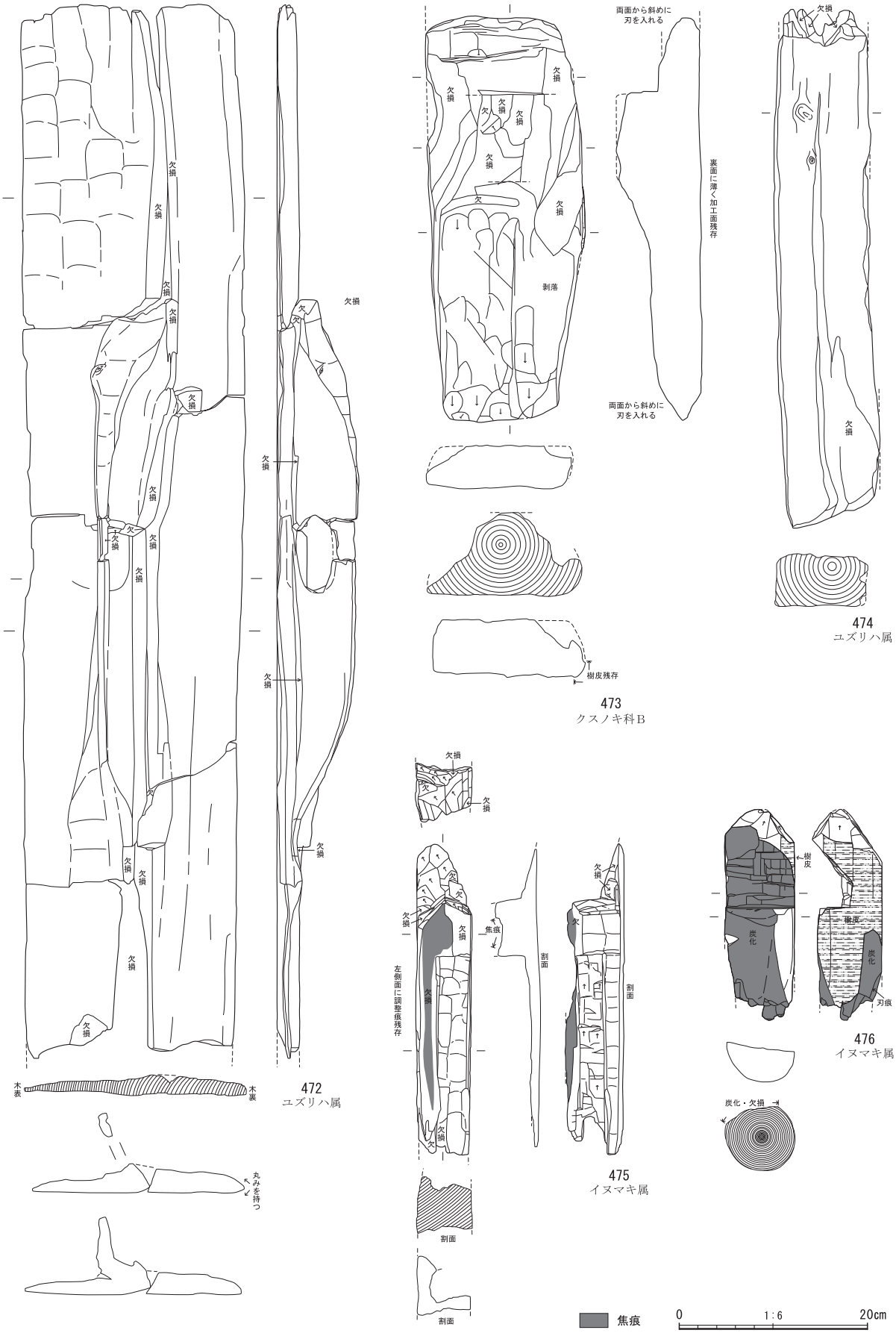
第 92 図　SD206 出土遺物実測図 12



第 93 図　SD206 出土遺物実測図 13

スギに良く似たヒノキ科の針葉樹で、中部高地で出土する木製品によく見られる材である。県内では中世以降、曲げ物や桶などに散見される。他所から持ち込まれた搬入品の可能性もあるだろう。首都大学東京の山田昌久教授によれば、本品は工作者が作業時に腕を固定するために肘をのせた肘当てか。脚部分にある圧痕は紐状のもので固定したか、または装飾的なものではないかとの所見を得た。

第 94 図　SD206 出土遺物実測図 14



第 95 図　SD206 出土遺物実測図 15

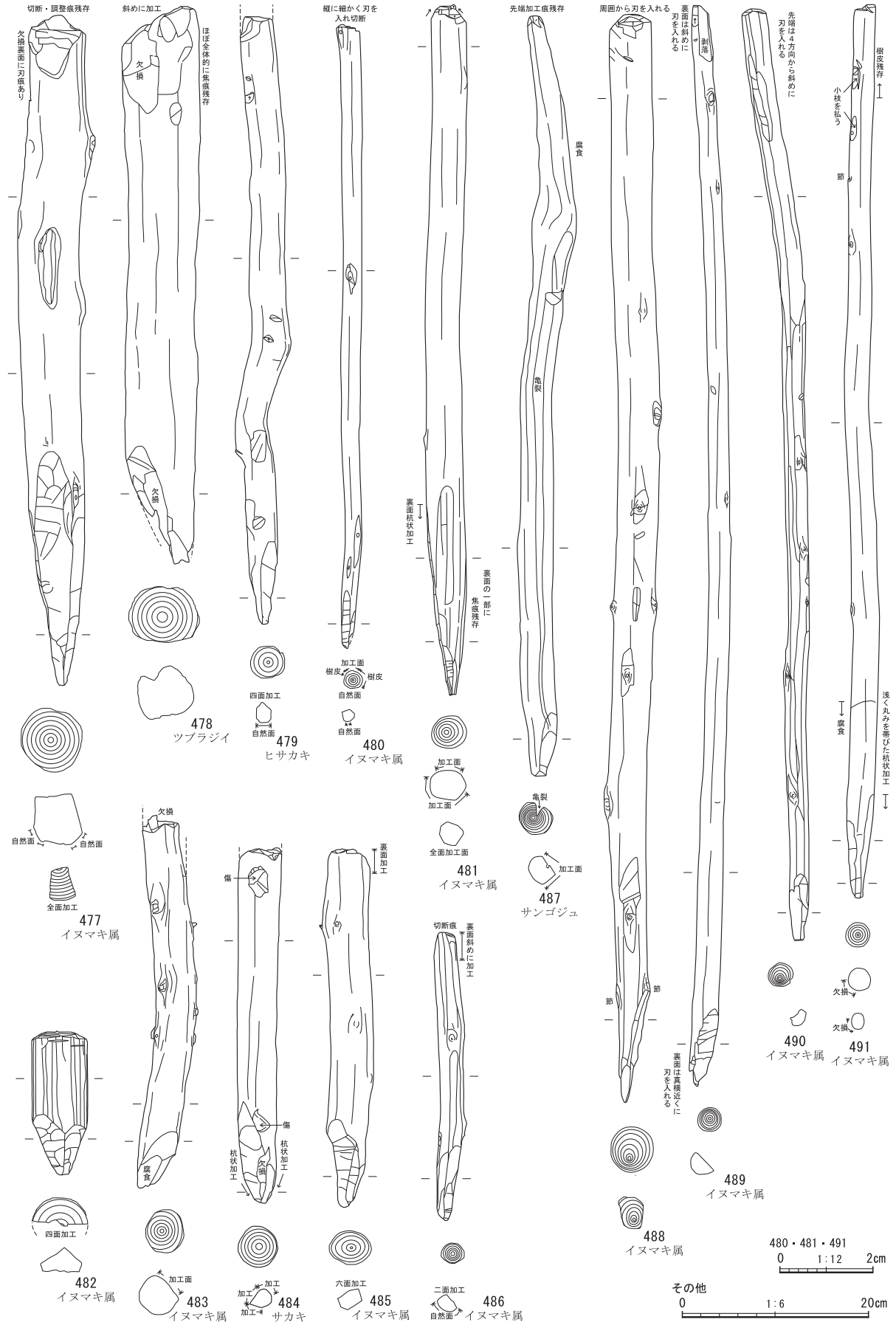
466・467 は服飾具の履物に属する下駄である。466 は長さ 24.2 ㎝、幅 11.3 ㎝の楕円形のスギ板目板である。板は３箇所の貫通孔がある。孔は鼻緒のように上部に１箇所、下方に左右並んで２箇所穿たれている。下駄の様相を呈しているが、連歯や差歯ではなく一枚の板であり、また使用された痕跡はない。田下駄の一つであろうか。467 は一木で作られた連歯下駄である。連歯側面と下駄の周囲が火を受けて炭化している。樹種はイヌマキ属の板目材で木裏面を表にしている。全体形は隅丸方形だったと思われ、緒孔は右下方に１箇所、円形の孔が残っている。

468 は紡織具に属する糸巻具の桙の腕木である。長さは 29.8 ㎝、最大幅は 2.0 ㎝の寸法をもつ。ヒノキ材で、表面は丁寧に面取りされ、棒状の形をしている。中央には方形孔が貫通している。この孔に支え木を組み合わせるため、孔の周囲は厚みをもっている。

469・471 は大型の楕円形刳物で、いわゆる農耕土木具の「田舟」と呼ばれる製品である。469 はスギの横木取り柾目材で作られている大型の田舟であるが、全体の 1/4 程度しか残っていない。腐食が著しく、表裏面とも火を受けて炭化している。把手は長軸方向の端部に１箇所残っている。同遺構から出土した 471 とは別個体である。471 もスギ材を使った大型の田舟である。残存長は 89.45 ㎝、下方と右側面が欠損し、やはり全体に炭化している。把手は上端部に１箇所残っているが、左側にもう１本あった痕跡が残っている。469 とは木目や寸法が異なることから別個体である。470 は大型の刳物の一部と思われる破片だが、片口鉢の一部の可能性がある。材はケヤキで横木取り柾目である。大型の片口鉢は注ぎ口の反対方向に枘穴や把手を作り出している事例が見られる。470 もこうした枘穴や把手の部分の破片であろう。

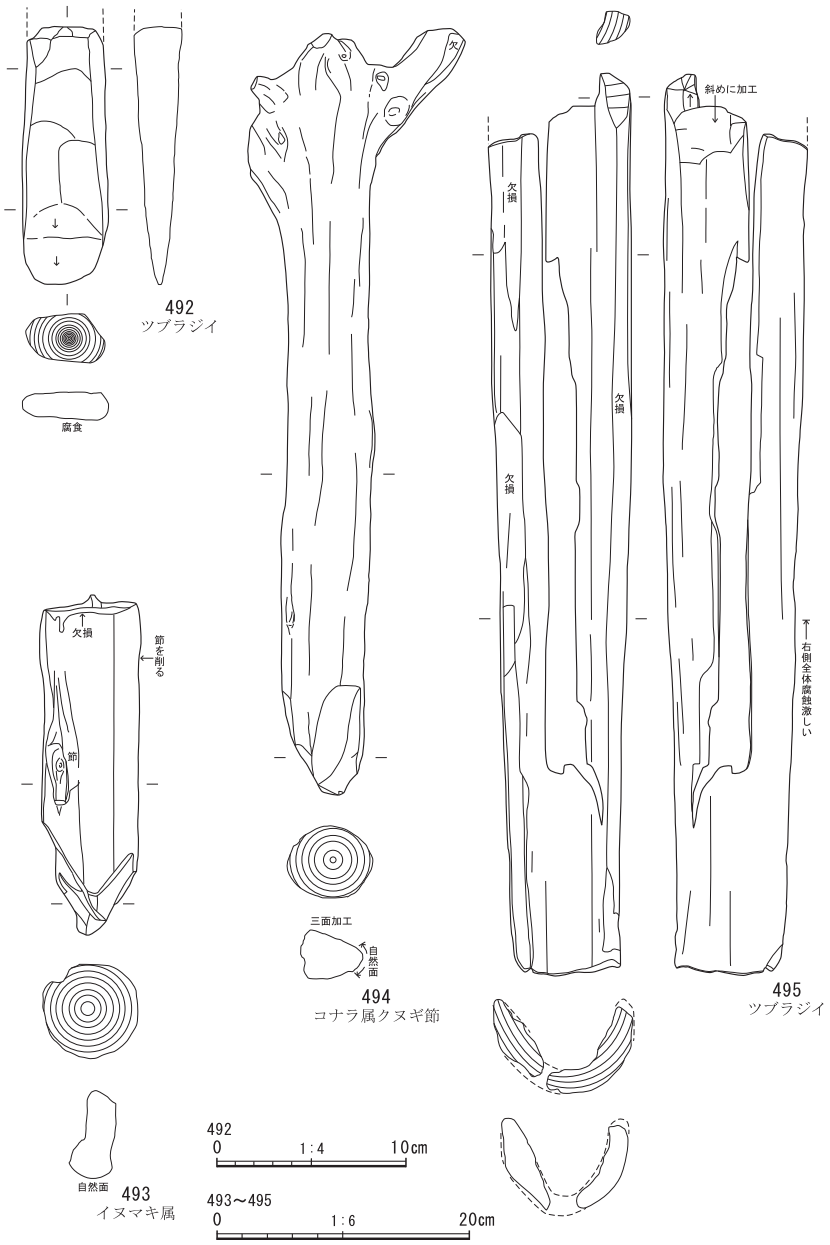
472 ～ 476 は建築部材である。472 は扉である。下端部は欠損し、さらに乾燥のため収縮してしまっているが残存長は 112.15 ㎝、幅は 23.7 ㎝、厚さは 8.45 ㎝ある。扉は左右対になる両開き戸の抜き孔に閂を差し込み開閉する形態のもので、本品は扉の片側にあたる。抜き孔は突出部の中央に位置し、縦 8㎝ほどの長楕円形孔である。扉の樹種はユズリハ属である。本遺跡では角材（474）にもユズリハ属があることから、高床式倉庫等の建築部材へ普通に使用されていたのであろう。473 は梯子である。梯子は最下段の部分で、上部は切断されている。樹種はクスノキ科Ｂの芯持ちで、さほど大木ではない径 17 ～ 18 ㎝の材から削り出して作られており、右側面には樹皮も残っている。残存長は 48.2 ㎝、幅は 16.0 ㎝、最大厚は 8.9 ㎝である。階段部は推定 4.5 ㎝程の平坦部を作っている。下端部は表裏両側から斜めに切断され、断面はＶ字状になっている。表面には面調整痕が残っている。クスノキは木製品に使われることが少ない材のひとつだが、強い芳香性から防虫効果等があるという点で倉庫等の部材に使われていたと考えられる。474 は幅 10.4 ㎝、厚さ 5.6 ㎝の長方形の断面を有する角材である。上下端部や表面は火を受けて炭化している。ユズリハ属の芯持ち材で表面に節が残っていることから、径は 15㎝以下の材から削り出されたのだろう。高床倉庫等の部材として使用されていた可能性がある。475 は右側面から下方、裏面にかけて欠損しているため全体形が判らないが建築部材の一部ではないかと思われる。樹種がイヌマキ属であることから容器とは考えにくい。表面の一部は炭化している。本体から 2.9 ㎝の深さを方形に彫り窪めている。底面は刃物痕が残っている。476 は垂木である。上端部の切り欠き部分のところで、下方は焼失している。表面全体に炭化している。垂木の径は 7.4 ㎝で、上端部は先端が笠状に尖り、切り欠きは４㎝程の深さに切り込んでいる。

477 ～ 491 は土木材に属する杭である。ただし SD206 内で見つかった杭は護岸等に使われていたものではなく、覆土内の木製品と同じように出土している。樹種は 15 点中、11 点がイヌマキ属で、その他はサカキ、ヒサカキ、ツブラジイ、ガマズミ属などがある。いずれも集落に近い丘陵地に植生する樹木であることから、手近にある小径木の芯持ち材を使っている印象である。478 は全体に炭化している。480・481 は 1.3 ～ 1.4 ｍを超える長さがある。488・489 は 1.14 ～ 1.17 ㎝、491 は 1.92 ㎝の長さをもつ。



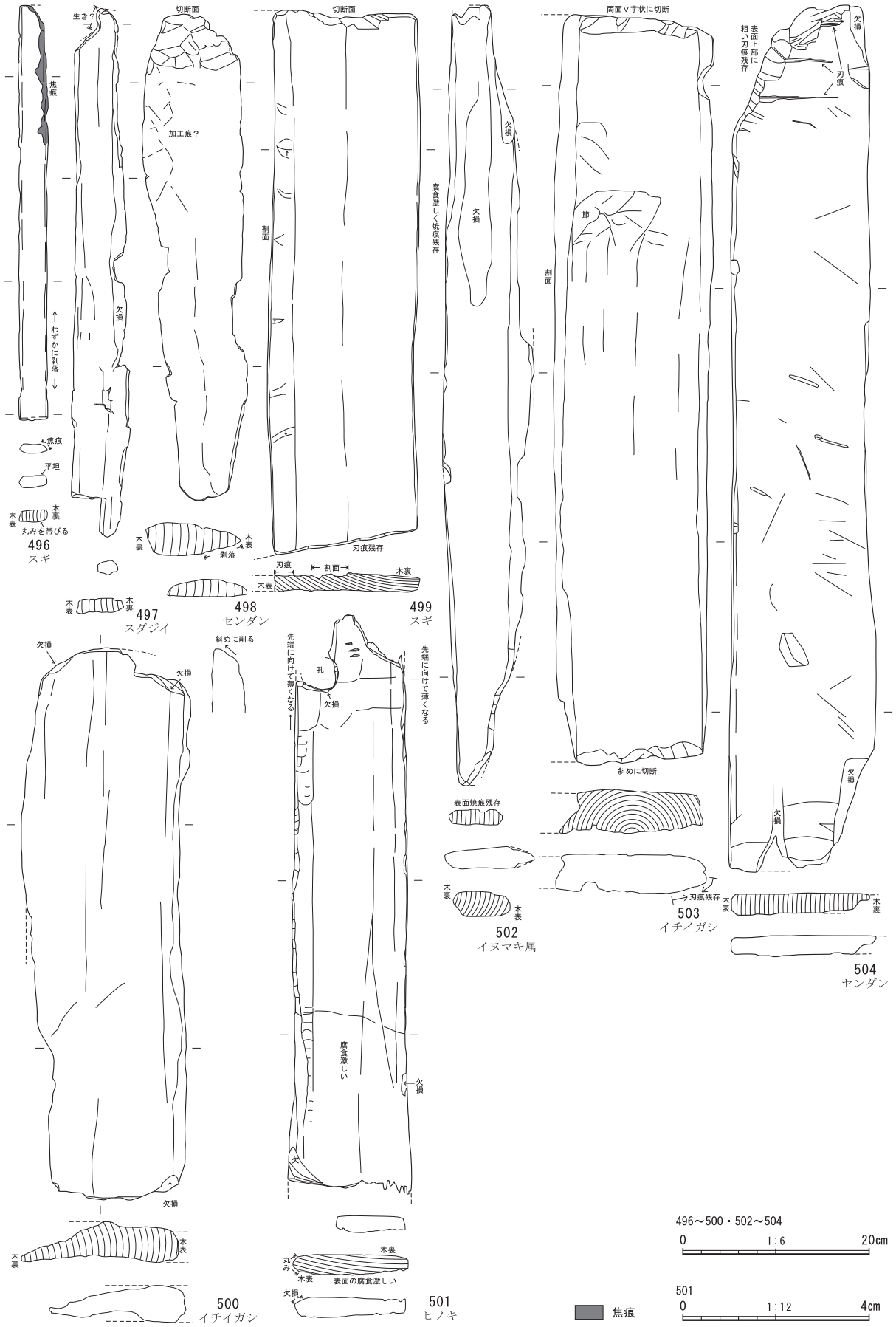
第 96 図　SD206 出土遺物実測図 16

492 は楔状の木製品である。ツブラジイの芯持ち材である。上端部は欠損し、表面は腐食している。表裏面から下端へ削り刃部のようになっている。493 は杭状の加工をもつ木製品である。イヌマキ属の芯持ち材で作られており、樹皮の一部も残っている。494 はコナラ属クヌギ節の芯持ち材で上部は枝分かれした部分が残っている。下端部は刃物で３方向から切られているので杭として使われていたものだろうか。495 は樋状の木製品である。上端部の一部を欠損し中央がひび割れているが、ほぼ完形に近い形状を成している。長さは 143 ㎝、最大幅は 22.8 ㎝、高さは 15 ㎝である。裏面の上部は斜めに削られている。ツブラジイの半裁材の芯材部分を刳り貫いて樋状になっている。材としては切ってすぐ乾燥しないうちに使われたようである。外気にあたる場所に設置されたためか腐食が進んでいる。

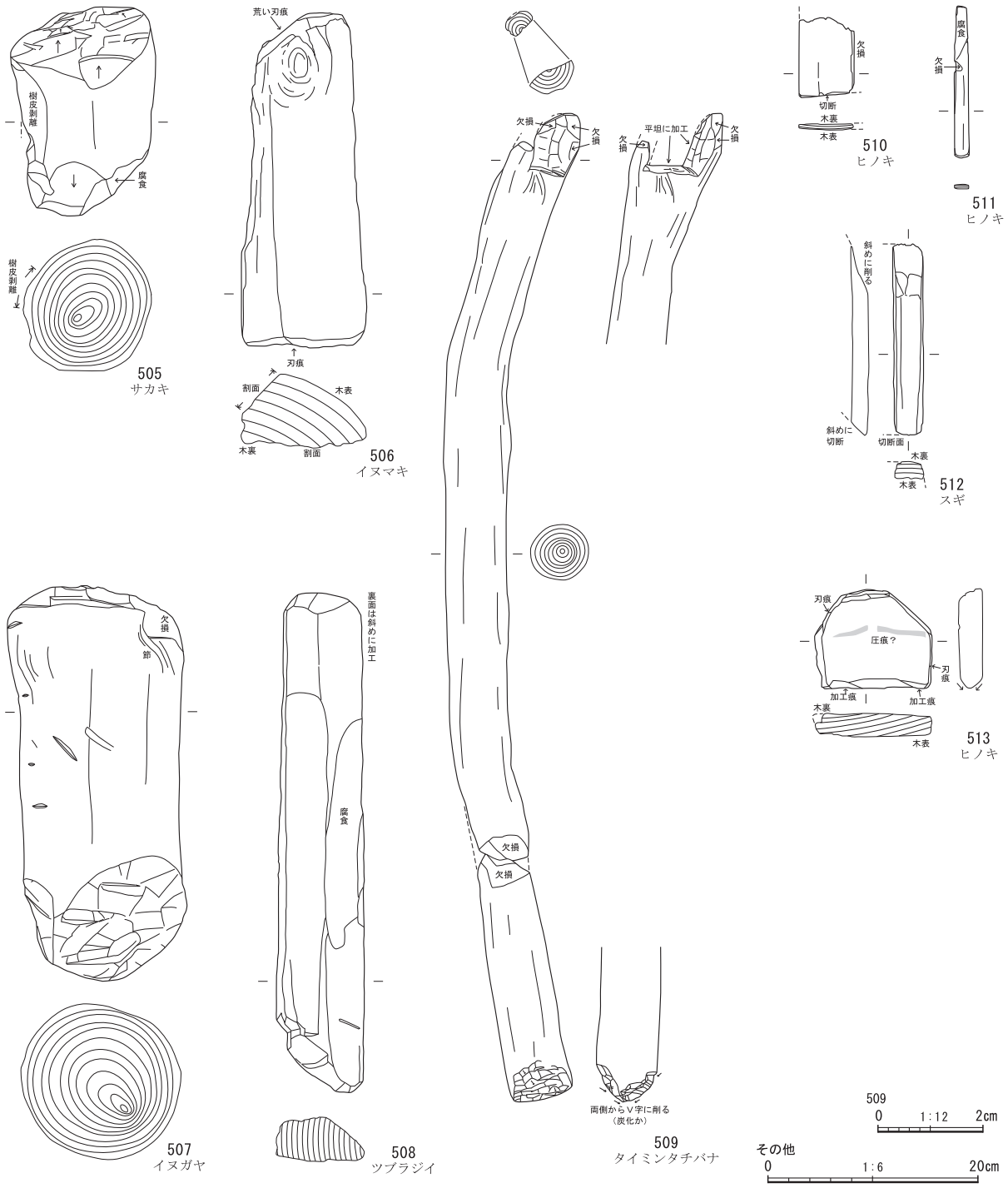


第 97 図　SD206 出土遺物実測図 17

496 ～ 531 は用途不明品である。496 はスギの柾目板で 44.6 ㎝の長さがある。全面加工された面だが下端に少し厚みがあるほかは平坦な板である。上部右側面側が一部炭化している。497 はスダジイの柾目板である。表面の腐食が激しく原形を留めないが、スダジイが多用されている建築部材の可能性がある。498 はセンダンの柾目板である。又鍬の一部とも思われたが、鍬・鋤はカシ材が多く使われていることから用途不明品とした。499 はスギの板目板である。左側面が折損している。500 はイチイガシの柾目材である。イチイガシは本遺跡でも鍬などの農耕土木具に使われている。本品はミカン割り材から厚みのある辺材部分を製材していることから鍬・鋤等に加工する前の製材板であろう。501 はヒノキの板目板で上下端部は欠損している。上部には径８㎝ほどの円形孔の痕跡がある。502 は厚みをもつイヌマキの板である。直径 20 ㎝近いものでイヌマキ材としてはかなりの大径木である。芯持ち材から４面に加工している。建築部材の一部と思われる。503 はイチイガシ材の柾目板である。表面は一部炭化している。用材からして鍬・鋤等の原材料か未製品と考えられる。504 は長さ 93.2 ㎝、センダンの柾目板である。上下端部をわずかに欠くがほぼ全体が残っている。上部は斜めに切られ、表面に

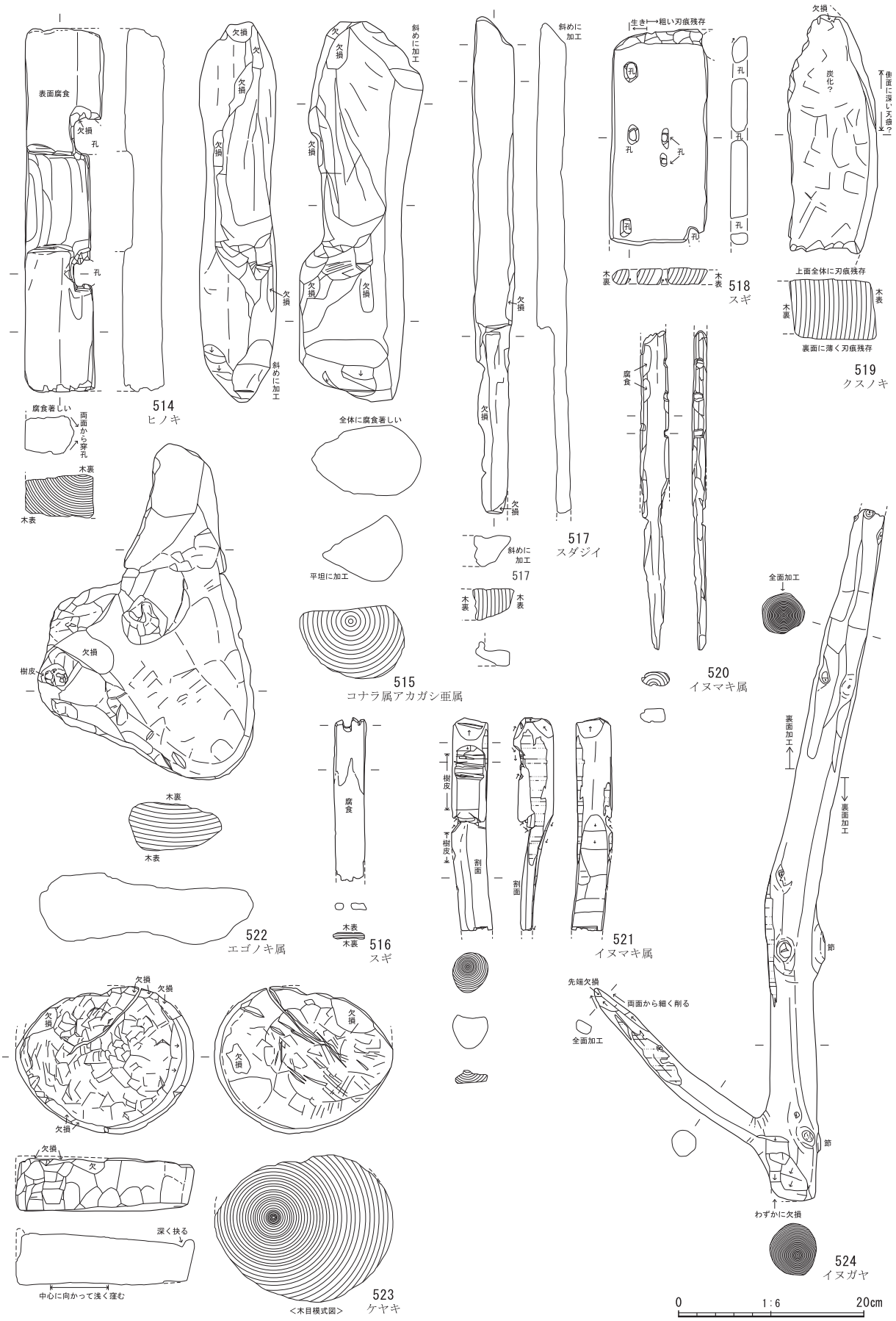


第 98 図　SD206 出土遺物実測図 18

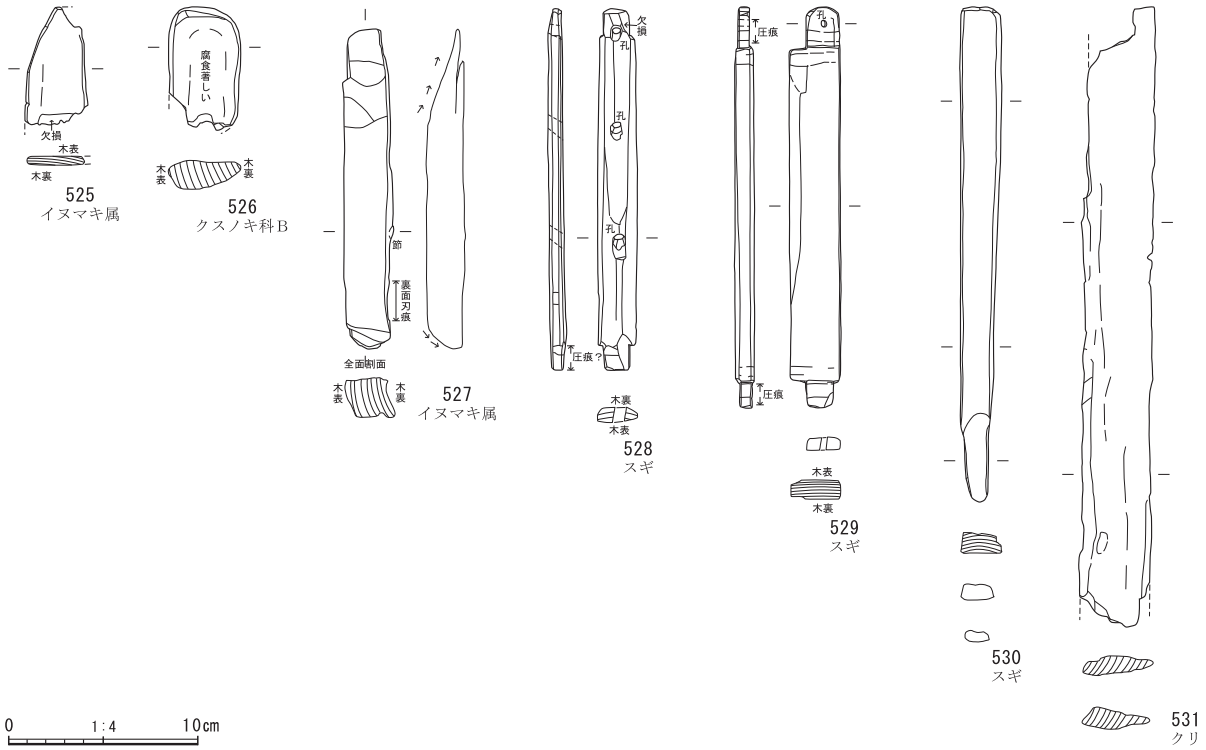


第 99 図　SD206 出土遺物実測図 19

は金属製の刃物痕がある。あまり使用例を聞かない樹種だが、建築部材などの用材であったかもしれない。**505** はサカキの芯持ち材である。長さは 19.9 ㎝、径は最大 13.8 ㎝ほどある。上端部は 5.2 ㎝程の刃幅を持つ道具で切断している。表面には樹皮も一部残っている。製品というよりは、長さを調整するために切り落とされた端材の可能性がある。**506** は表面に樹皮を剥いだ面が残り、周囲は割り面である。上部には節がある。**507** も **505** と同じく端材であろう。芯持ちの丸太材で周囲は加工されていない。上下端部は鋭利な刃物で切断された痕がある。**508** はツブラジイの柾目板である。ミカン割材の辺材部を一部削りおとして製材した板である。**509** は柱である。上端部が一部欠損しているがほぼ完全な形であ



第 100 図　SD206 出土遺物実測図 20



第 101 図　SD206 出土遺物実測図 21

る。長さ 188.4 ㎝で直径は 16.8 ㎝の丸柱である。上部は大きく切り込みを入れて又状にし、梁・桁材を受ける構造になっている。柱の表面は加工がなく、下端部は表裏面からＶ字状に削られている。竪穴住居に伴う柱であろう。**510** ～ **513** は薄板や端材で、樹種はスギかヒノキである。**510** は板目の薄板で上部は欠損している。**511** は 10 ㎝程の薄板だが用途は分からない。**512** は左側と裏面が欠損している。何かの製品から割り剥れたものの可能性があるが元の製品は不明である。**513** は全面加工の痕跡がある。しかし製品としての用途は分からず、余分な部分の切り落としで出た端材であろうか。**514** は 40 ㎝近いヒノキの板目板である。右側が折損している。板表面には２箇所の枘孔と中央には幅 10 ㎝程度を彫り窪めている。**515** はコナラ属アカガシ亜属の芯持ち材である。上下端部は切断されている。一部の面に加工された痕があるものの、ほとんど自然面のままである。**516** はスギの薄板である。上部に切り欠きか枘孔の痕がある。**517** はスダジイ材の用途不明品である。当遺跡ではスダジイは建築部材に使われることが多い。**518** は木目の細かい柾目のスギ板である。右側面は欠損している。板面には全部で７箇所の枘孔の痕がある。**519** はクスノキの最も外側の辺材破片と思われる。表面全体に炭化しており、収縮している。表裏の面には手斧などで面を整えている痕跡がある。**520** は編台の目盛り板と思われる。上下端部は欠損していて乾燥・収縮しているが、残存長 24.4 ㎝、幅３㎝の板状を呈し、左右側面の断面は丸みを持っている。右側面には３箇所の切り込みがある。切り込みの深さは 0.5 ㎝で、間隔は 3.5 ～ 4.0 ㎝である。**521** はイヌマキ属の径 4.4 ㎝の芯持ち材である。表面には樹皮も残っている。上端部は切断された痕があり、やや下には１㎝程の深さを抉り込んでいる。下方は欠損している。裏面は真ん中ほどから斜めに削っている。**522** はエゴノキの枝分かれした部分である。表面の一部に面を削った痕が見える。表裏とも中央部分が窪んでいる。枝分かれしたところは強度があることから作業台として使われていたものであるかもしれない。**523** はケヤキを輪切りにした木製品である。径は大きいところで 19.3 ㎝、厚さは 5.65 ㎝ほどある。表裏両面と側面には面調整痕がある。上面周囲にはわずかに縁を残している。芯持ち材で容器は作らないことから、容器の可能性はない。大型臼の詰め物として使われた

ものであろうか。大型臼は芯材部分が腐食して抜けやすく、こうした部材を埋め込んで使用することも考えられる。524はイヌガヤの枝分かれした部材である。形状は自在鈎のようである。上部は欠損、上に行くほど細く面を削っている。小枝の先端部も斜めに削り細くなっている。下端部は切断している。

525～531は薄板の木製品である。525は下部と右側を欠損している板である。表裏は平坦面に削り、左側面も曲線状に削っている。形代か、ためし等の一部だろうか。526は下方が欠損している。角を落として丸みをもたせた整形をしている。樹種はクスノキ科Ｂの同定結果が出ている。527は全体が割り面の棒状木製品である。材はスギの柾目である。前出の512と似たような形態をもつ。528・529は形態も大きさも同じような加工木製品である。長さ19～21㎝、幅2.0～2.7㎝の板状で、上下に突起上の出枘を作り出している。528は出枘と中央付近に３箇所の円形の枘孔がある。529は出枘に１箇所の孔がある。糸巻きか、その他で製品の部材と思われる。530は長さ26.2㎝のスギの薄板である。下方へ行くほど幅を減じている。531はクリの柾目板である。上下端部は欠損していて全体形は不明である。

このほかにSD206覆土内より種子等が出土している（図版116）。種実同定の結果、イチイガシの果実が１点、イヌガヤの種子が１点、モモの核が３点であった。また図化しなかったが覆土内からは瓢箪や獣骨や歯などが見つかっている。同定分析の結果、獣類や部位は不明であった（第７章第４節）。さらにSD206の左岸側の肩部に当時生えていた立ち木が検出された（図版33-2）。樹種は不明である。

出土した土器等の年代から、SD206は６世紀後半～末および７世紀初頭までの自然流路（河川）で、７世紀の早い段階には埋没していたと考えられる。覆土内の出土遺物は日常的な土器や生活具などとともに祭祀的な土器や木製品などが混在している。こうした状況から本遺構は集落に極めて近い位置にあった流路と考えられる。おそらく、調査区の東側上流域に６世紀後半～末、７世紀初頭の集落が存在する可能性が高いと言える。今後、遺跡の周辺域については集落遺跡の存在する可能性を持って取り扱う必要があるだろう。なお、一部の木製品については首都大学東京教授山田昌久氏に見ていただき調査指導を受けた。内容は本稿に反映している。

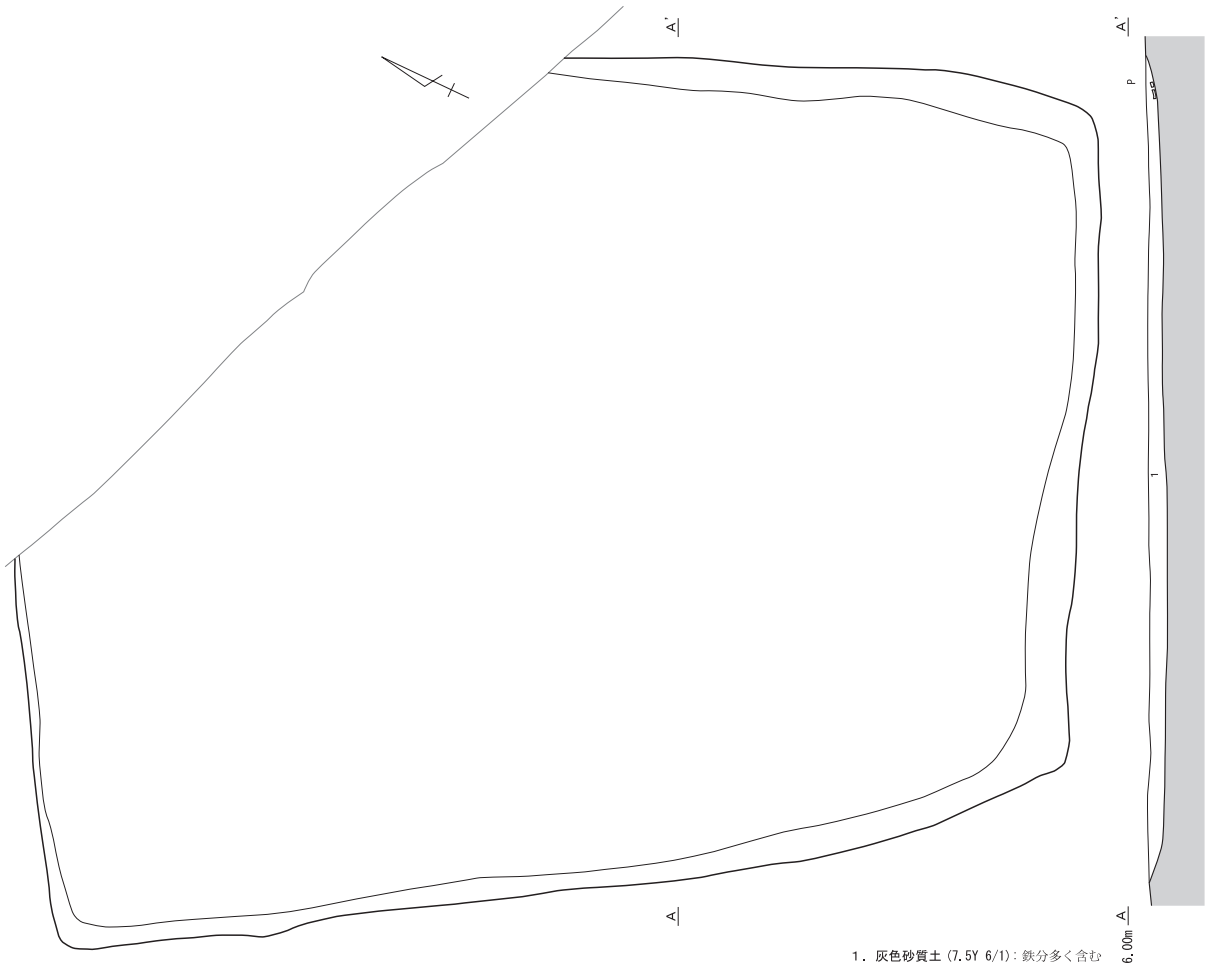
（４）性格不明遺構

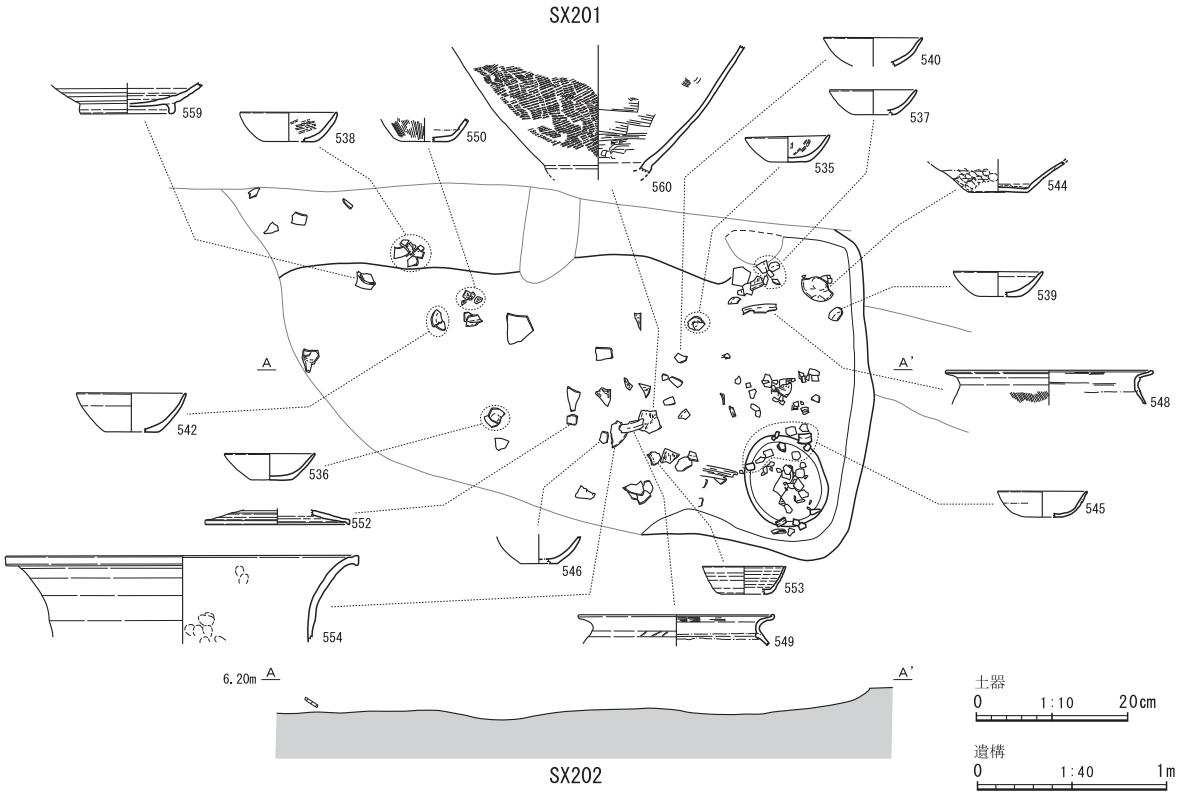
SX201（第102図、図版32）　１区南端の掘立柱建物SB201とSB202と切り合う位置で検出した。土坑SK201やSK202　等とも同じ位置で切り合う。切り合い関係から見てSX201は掘立柱建物よりも前の時期の遺構であろう。SX201は東西方向が4.4m、南北方向は5.6ｍの方形に近い掘形で、深さは10㎝と非常に浅い。調査当初は竪穴建物跡とも考えられたが、主柱穴はなく竪穴建物とする要因が見当たらないことから、不明遺構としている。

覆土から出土した遺物は第103図532～534である。532は土師器の坏である。復元口径は14.2㎝、高さは3.9㎝を測る。箱型に近い形状で無台であることから須恵器の模倣坏の可能性がある。533は土師器の甕口縁部破片である。口径は復元径で23.0㎝である。「コの字」甕と呼ばれるもので口縁部は外側に強く開く。胎土には雲母が微量に混じっている。534はほぼ完形の無台碗である。口径は12.1㎝、高さは3.6㎝で、回転糸切りの底部は5.1㎝の径がある。焼成は軟質で内外面には火襷文のような痕跡がある。須恵器の無台坏か。

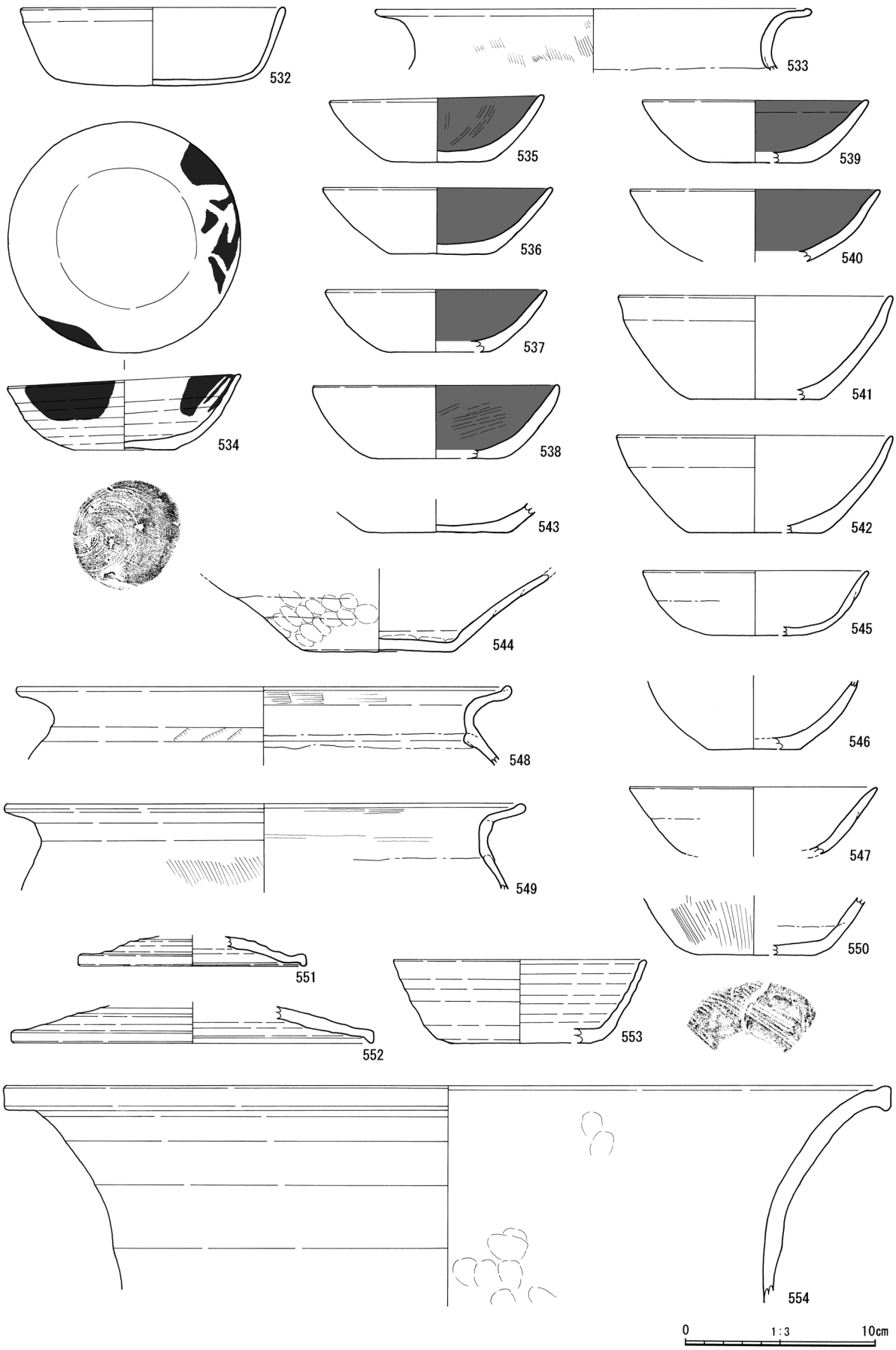
出土した土器の年代から上部で切り合う掘立柱建物群とは、さほど離れていない時期の遺構と思われる。

SX202（第102図、図版32）　１区の第１面調査時に検出した遺構で、北西端のＱ-29グリッドに位置する。第１面調査の際に範囲を拡張して調査しているため、全体図では第１面に掲載している（第114図）。SX202は東西方向が3.5ｍ、南北方向は1.7ｍ程の長方形に近い形状の掘り込みをもつ。遺構の深さは一定ではなく深いところでも15㎝ほどである。第１面で調査した溝SD115よりは古い時期

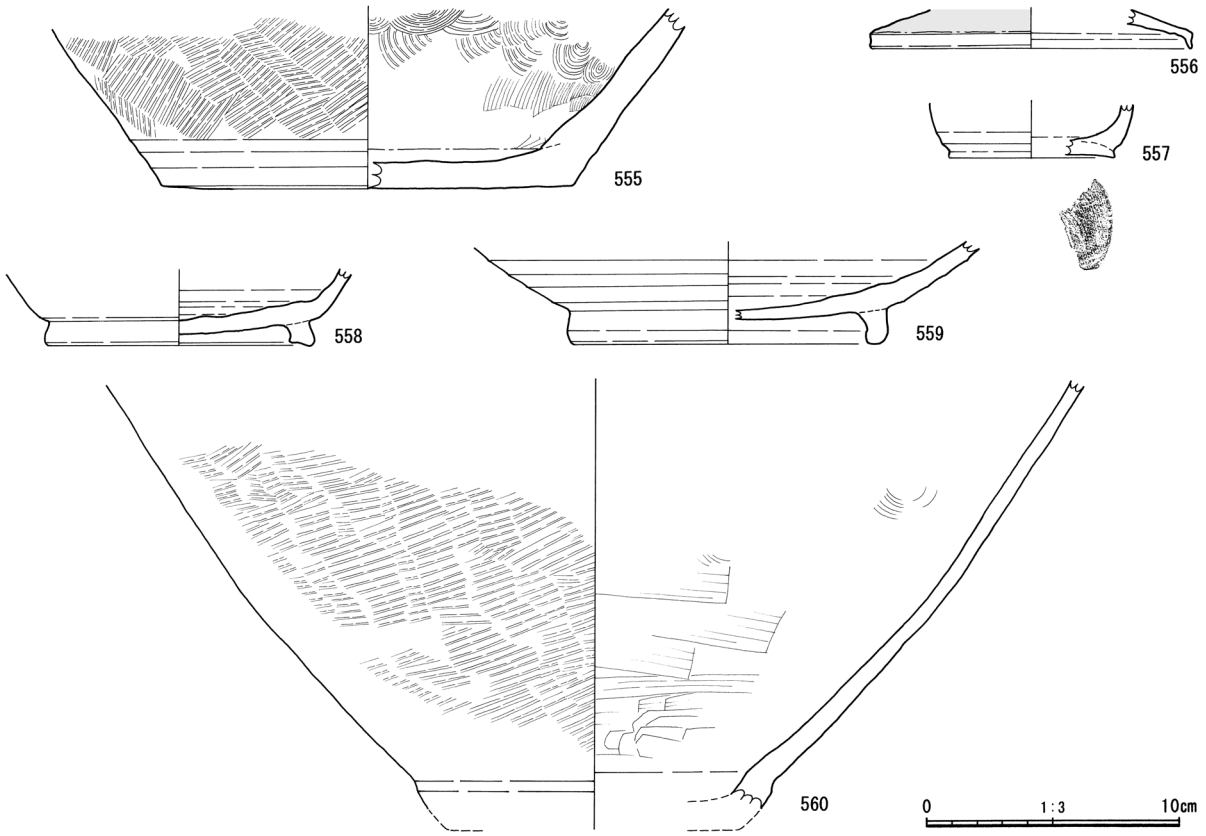




第 102 図　SX201・202 実測図



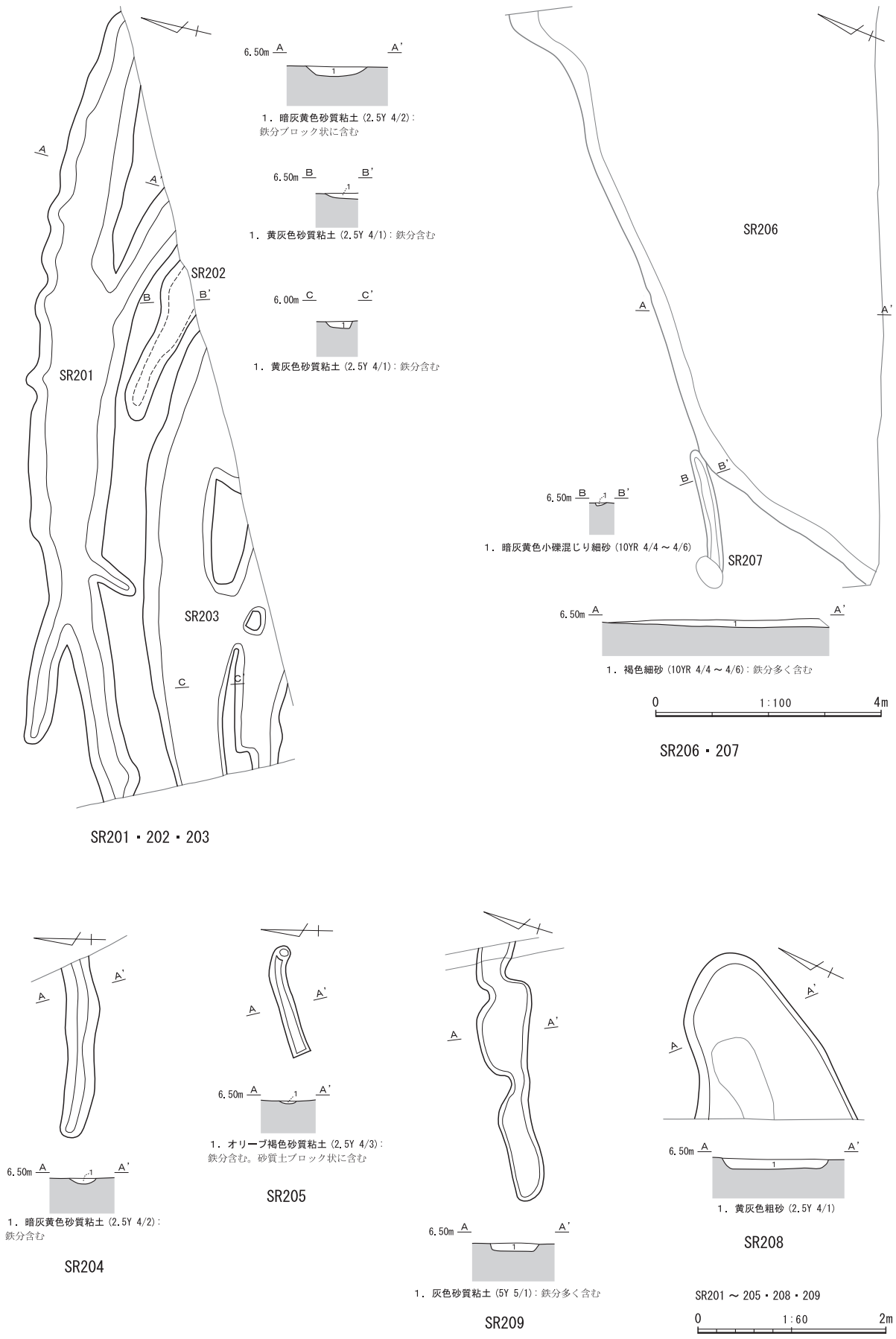
第 103 図　SX201・202 出土遺物実測図 1



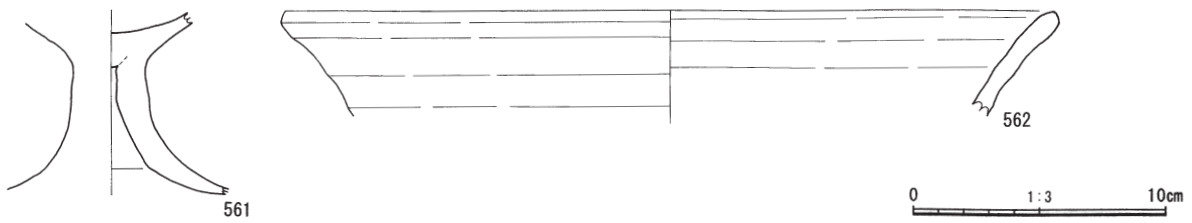
第 104 図　SX202 出土遺物実測図２

の遺構である。調査時は土坑としているが、遺構の性格がわからないため不明遺構とした。

覆土内より出土した遺物は第 103 図 535 ～第 104 図 560 がある。535 ～ 542 は土師器の内黒坏である。内黒坏は口径が 12 ～ 13 ㎝のものと 14㎝を超えるものとがある。535 は口径が 11.2 ㎝と小型の坏である。表面は風化により調整痕が見えないが内碗面は黒くなっている。536 も 12.0 ㎝の口径をもつ小型の内黒坏である。内碗面の黒い部分には雲母状の微粒子がある。537 は 1/4 程の破片で底部が欠損している。538 は 1/2 程残存し、復元口径は 12.8 ㎝である。539 も口径 12 ㎝ほどの破片で底部が厚い。540 は口縁部の小片で口径は復元すると 13 ㎝程である。541･542 は 535 ～ 540 よりも一回り大型で、径は 14.4 ㎝、底径は 7 ㎝、器高は 5.1 ～ 5.4 ㎝とほぼ同じ大きさである。同一個体の可能性もある。543 は土師器の甕の底部片と思われる。底径は 7 ㎝ほどある。544 は土師器の無台の皿だが、形状は灰釉陶器の皿に近い。灰釉陶器の模倣皿であろう。口径は 17.7 ㎝、器高は 3.8 ㎝で、底部から口縁部まで斜めに真っ直ぐ広がる。545 ～ 547 は土師器の坏である。545 は径 11.8 ㎝の小型坏で内面は黒くなっていない。ただ風化が著しく表面は剥がれ落ちている。546 は小片で口径復元が難しいが同形の坏である。547 も口縁部のみの小片だが器面は薄い作りである。548・549 は「コの字」甕の口縁部片である。548 は径が 1/3 程で、復元すると 25.6 ㎝の口縁をもつ甕になる。表面にはハケ調整痕が残っているが、内面はナデ消してある。549 は口径が 27.2 ㎝に復元できる。胎土には微量の雲母が見える。550 は土師器の長胴甕の底部片である。外面は底部から胴部までハケ調整がそのまま残っている。内面はナデて調整痕は消してある。551・552 は須恵器の坏蓋である。口縁部側の小片のため摘みの有無は分からない。径は 15.6 ㎝と復元できる。扁平な作りで返りが非常に短い。552 も扁平な形状でかえりが小型化している。径は 18.7 ㎝で天井側には降灰が掛かっている。裏面には重ね焼きの痕跡がある。553 は須恵器の無台坏である。SX201 で出土した 534 のように焼成は軟質である。口径は 13.6 ㎝、器高は 4.4 ㎝と小型の坏である。



第 105 図　SR201・202・203・204・205・206・207・208・209 実測図



第 106 図　SR201 出土遺物実測図

554 は灰釉陶器の甕口縁部片である。口径は 46.4 ㎝に復元できる。内外面には黄土刷毛塗りの痕が見える。焼成が悪いためか色調は灰黄褐色である。**555** は灰釉陶器の甕底部片である。底径は 16.5 ㎝で、体部には降灰釉が流れている。底部には３箇所ほど焼成時に熔着してしまった小片が張り付いている。また焼き膨れが数箇所ある。**556** は蓋の口縁部片である。径は 12.4 ㎝に復元できる。上面には一面に降灰が掛かっている。灰釉陶器の壷蓋になるだろう。**557** は小瓶の底部片で無高台である。外面の一部と内面底には降灰釉がある。**558** は長頸壷の底部片である。底径は 10.4 ㎝で、高台は内側に傾き接地面は斜めになっている。内面底には降灰釉が付着している。**559** は大碗と呼ばれる灰釉陶器の鉢である。底部が 1/3 程残っていて高台はやや内側へ入る形状をしている。内面には重ね焼きの痕跡と降灰釉がある。**560** は大型甕の底部～胴部の破片である。底部は一部だけ残っている。外面はタタキ目がある。内面には当て具痕はなく、面調整の後に黄土刷毛塗りを施してある。

SX202 で出土した土器は９世紀半ば～ 10 世紀にかけての灰釉陶器や土師器が主体であり、いずれも日常的な器種である。位置的にも第２面の掘立柱建物 SB208 と重なっているところにある。こうした状況から掘立柱建物の時期に伴う廃棄土坑の性格をもった遺構と考えられる。

（５）自然流路

SR201（第 105 図）　SR201 は 2-2 区南端で検出した自然流路である。後述する SR202・SR203　と並行するように東西方向に流れ、最大幅は１ｍ程である。調査区の端であることから流路の全体形は不明である。覆土は暗黄灰色砂質粘土で鉄分を多く含む。SR201 の下層では溝 SD206 も見つかっていることから、もともと地形が低い部分なのであろう。溝 SD206 が埋没した後にできた流路と考えられる。

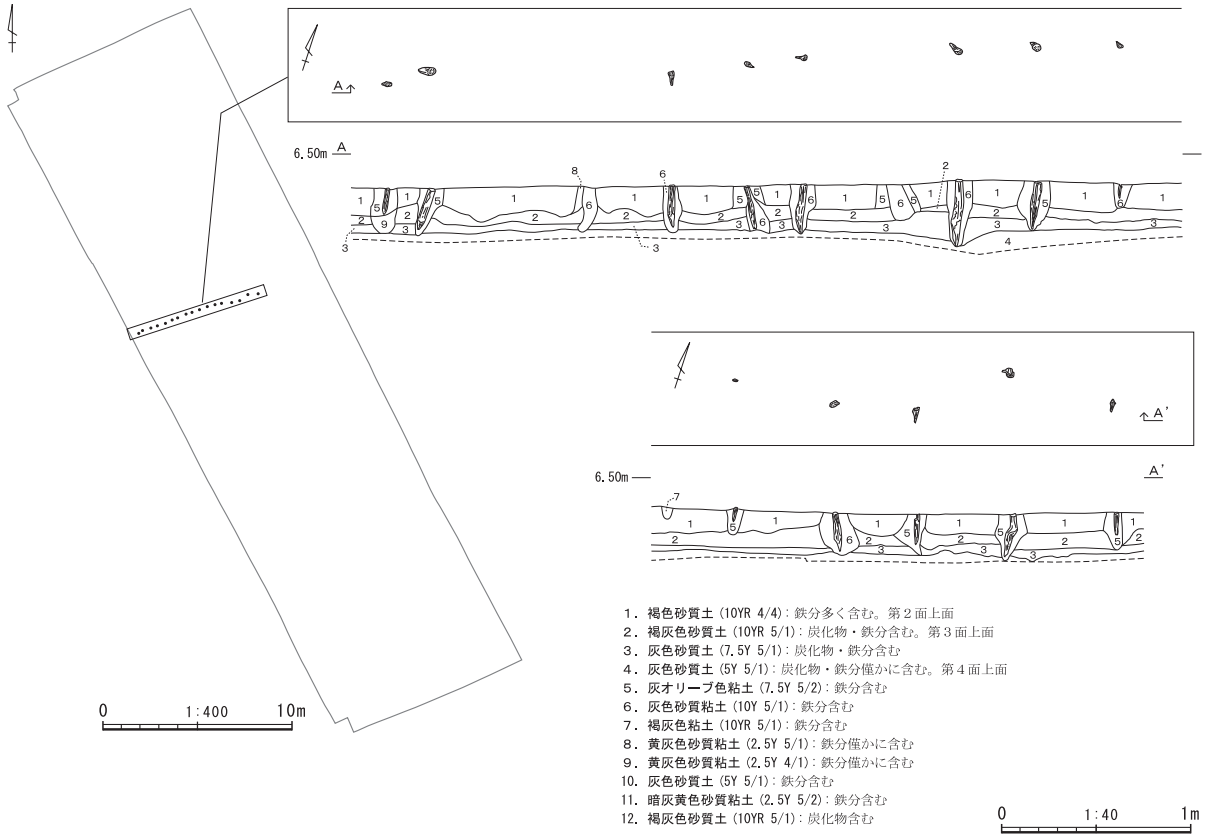
覆土から出土した遺物は第 106 図 **561・562** である。**561** は土師器の高坏である。坏部の一部と脚部が残っている。残存高は 7.1 ㎝を測る。表面調整は風化により残っていないが、坏部と脚部とは別々に作り、後で接合している。脚部内側には絞り痕が見られる。脚部は坏部の付け根から緩やかに幅を増し、円錐形に広がる。**562** は山茶碗の片口鉢の口縁部破片である。口径は復元径で 30.2 ㎝である。土器の胎土から渥美の所産と考えられる。出土した土器の年代幅が広く、また上流部から押し流されてきた可能性もあることから時期を特定することは難しいが、SD206 の埋没以降から 10 世紀代の頃の遺構と思われる。

SR202（第 105 図）　SR202 は SR201 の南側に並行する自然流路である。長さは２ｍ弱、幅も 50 ㎝程度の規模である。覆土は黄灰色砂質粘土で鉄分を多く含む。

SR203（第 105 図）　SR201・202 の南側に並行する自然流路である。数条に枝分かれしているが最大幅は１ｍ弱である。覆土は SR202 と同じであることから、SR201 ～ 203 は一連の遺構と考えられる。

SR204・205（第 105 図）　2-2 区の南半部、溝 SD206 の北側で検出した自然流路である。SR204 は長さ２ｍ、幅 30 ㎝ほど、SR205 は長さ 1.3 ｍ、幅は 20 ㎝と小規模である。やはり溝 SD206 の埋没後にできたものであろう。

SR206 ・207（第 105 図）　自然流路 SR206 と SR207 は 3-1 区の南端で検出した。SR206 は北側の肩の



第 107 図　SA201 実測図

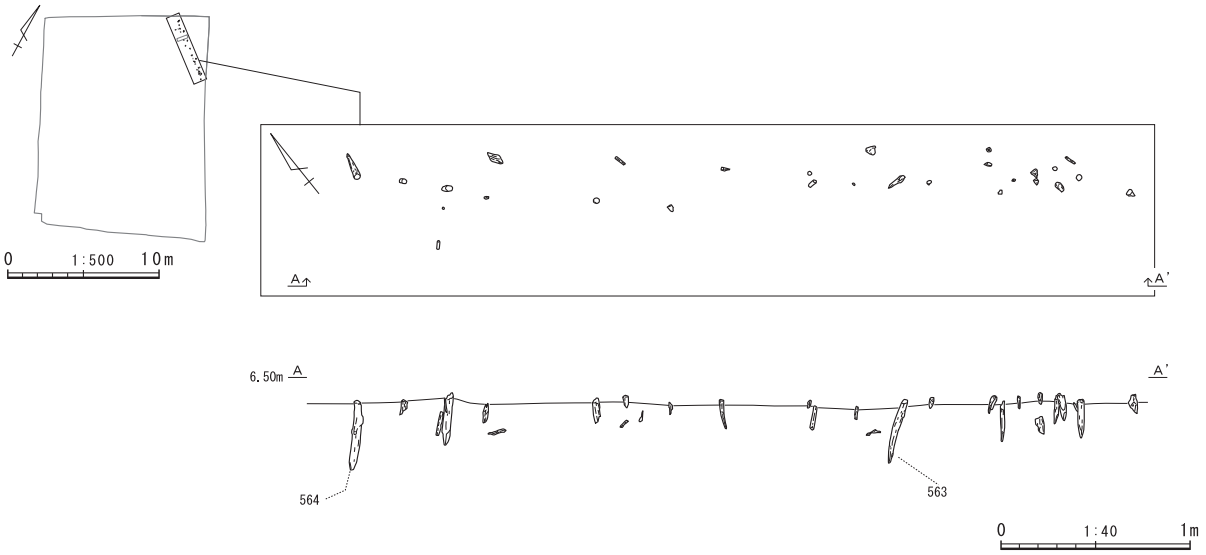
み検出し、南側は調査区外となるため流路幅は分からない。検出できた SR206 の最大幅は６ｍほど確認である。流路とはいえ、褐色細砂層の覆土であることから、近隣河川の氾濫等で一時的な上流部からの流れであろう。SR207 は SR206 の北側にある 2.5 ｍほどの浅い流路で、覆土は小礫混じりの細砂層である。SR206 と同じような過程でできた流れであろう。

SR208（第 105 図）　3-1 区の西側隅で検出した。長さ・幅とも 1.8 ｍほどで、西側は調査区外で全容は不明である。深さは 10 ㎝程度で黄灰色の粗い砂の覆土である。3-1 区内では同じような方向性をもった小さな流れが幾つも確認されていることから、SR208 もこのうちの１つであろう。

SR209（第 105 図）　SR209 は 2-3 区の中央東寄りで検出した流路である。長さ 2.7 ｍ程で、最大幅は 0.5 ｍ、流れは東西方向だが全体は不定形である。

（６）杭列

SA201（第 107 図）　SA201 は 2-3 区の中央付近で検出した杭列である。杭列は南西から北東方向へ伸びるが、ほぼ東西方向に並ぶ。延長は７ｍで東側はＬ -20 グリッド内で途切れている。西側は調査区外へ続いていることから総延長は確認できていない。検出面は第２面上面で、杭の下場は第４面上面辺りまで達しているものもある。杭列の間隔は狭いところで 20 ㎝、広いところで 50 ㎝以上ある。杭の間隔に統一性はないようである。杭の打ち込まれた方向もバラつきがあり同じではない。杭の覆土は褐灰色砂質土で炭化物を含んでいる。杭列の土層断面では杭が抜き取られたところも数箇所確認できた。列としてはほぼ一直線になることから、境界などを意識しているであろう。ただ、杭列の周辺部には南東側に柱穴群があるものの建物の並びにはならず、北側も土坑や自然流路などがある程度で、さして境界を要するところではない。したがって杭列の役割は定かではない。

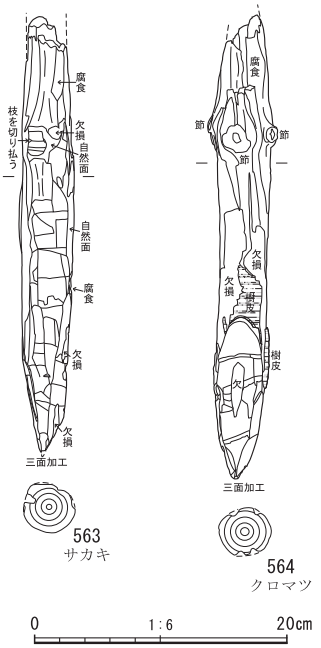


第 108 図　SA202 実測図

SA201 の杭材は 10 ～ 35 ㎝ほどの長さがある。杭は 10 点ほど出土しているが、図化せず、樹種同定を行っていない。

SA202（第 108 図）　SA202 は 3-1 区の北東端で検出した杭列である。杭列は北西から南東方向へ伸びるが、両端はいずれも調査区外へ出ているため全長はわからない。調査区内で確認できた延長は 4.1 m 程である。検出面は第２面上面となる。杭の長さは 10 ～ 35 ㎝、杭列の間隔は狭いところで 10 ㎝、広いところで 50 ㎝以上ある。列はほぼ一直線を成している。2-1 区で検出した SA201 とは方向性が異なることから関連は薄いと思われる。また調査区内での遺構は杭列のほかに土坑と自然流路のみであることから、SA202 の役割用途は不明確である。

SA202 では杭・その他の木材が 30 点出土している。このうち２点を図化した（第 109 図 **563・564**）。**563** はサカキの芯持ち材を杭に加工してある。長さは 35 ㎝程で、直径は４㎝弱である。上部は腐食している。表面を一部削った痕や小枝を打ち払った節の痕跡がある。**564** はクロマツの芯持ち材で下端部を杭状に加工してある。長さは 37 ㎝、直径は 3.7 ㎝である。表面には樹皮が一部残っている。上端部は腐食している。表面には一部加工した痕や枝払いした節痕がある。

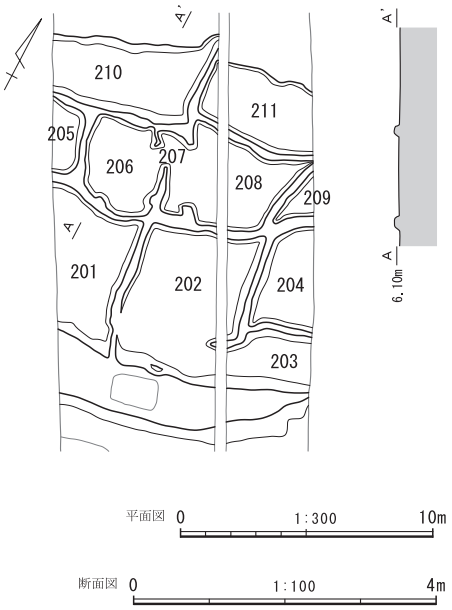


第 109 図　SA202 出土遺物実測図

SA202 で出土した杭･その他の木材の 30 点中、15 点の樹種同定を行っている。樹種の内訳はスダジイ３点、クマノミズキ３点、アカマツ２点、クロマツ１点、マツ属複維管束亜属１点、イボタノキ１点、サカキ１点、スギ１点、ヒサカキ１点、タイミンタチバナ１点である。当遺跡出土の木製品ではスダジイやスギは建築部材として使われているが、それ以外の樹種は遺跡内でも数点の単位でしかなく使用頻度は極めて少ない。またこれらの樹種は集落に近い低丘陵に自生する雑木の類でもある。以上のことから杭列に使われた木材は比較的手近な丘陵部から採取してきた木で構成されているといえる。

（７）水田区画（第 110 図、図版 33）

2-2 区の中央付近で水田区画を検出した。今回、第２面で見つかった水田区画はＭ -23・24 ～Ｎ -23・24、Ｏ -24 グリッド内の約 150 ㎡の範



第 110 図　水田区画実測図

囲である。その北側および南側につながる水田遺構は確認されていない。水田区画は南側に幅２ｍの東西方向の畔が位置し、その北側に小畔が東西南北方向に配され、11 枚の小区画水田（201 ～ 211）の構成である。畔には杭列は伴わず、盛土のみである。平面の配置状況を見ると南端の幅２ｍの畔は大畔と考えてよいであろう。田面の標高値は 6.20 ～ 6.25 ｍ、大畔の頂部は 6.5 ｍ程である。田面全体の地形は南から北へ標高が下がっている。小区画水田の形状は長方形または方形に近い不定形な形状である。なかでも全体形がわかる小区画水田 202 は約 22 ㎡の面積がある。検出された小区画水田は 202 が最も大きく、その他はそれ以下の面積である。206 と 207 の間や 202 と 203 の間に一部小畔が途切れている部分は水口の可能性もある。

今回検出した南北方向の小畔はほぼ 11 度前後の傾きを持っている。菊川流域の坪畦畔は西に 11 度ほど傾いているという指摘もある（註４）ことから、第２面水田も周辺域で見つかっている畔と同じ様相であることが明らかとなった。前述した 2-3 区の杭列 SA201 は東西方向の坪畦畔方向と同じ方向性をもつ。SA201 は水田に伴う杭列ではないが、条里制地割を意識した方向性をもつ杭列と考えることもできるだろう。

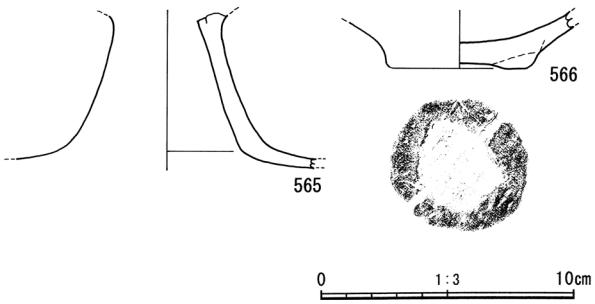
（８）小穴

SP168・208（第 42 図）　１区の第２面で検出した柱穴より出土した土器を第 111 図に掲載した。SP168 は調査区の北東端に位置し、掘立柱建物 SB206 のＰ 10 と同じ位置にある。この覆土内より土師器の壷（**566**）が出土した。**566** は壷の底部で底部径は 5.6 ㎝である。底部は中央がくぼんでいる。底部整形後に体部へ輪積みした痕跡が残っている。内面は荒れているがナデによる整形と思われる。底部径がやや小振りであることから小型壷の底部であろう。SP208 は調査区の北辺端にかかる位置で検出した柱穴である。柱穴は半分ほど調査区外に出ている。覆土内からは土師器の高坏（**565**）が見つかっている。高坏は脚部の一部で 6.4 ㎝ほど残っている。坏部と脚部の裾部分が欠損している。脚部は坏部との接合部から緩やかに広がり、底近くで強く外側へ開く形状である。器面は風化しているため調整痕は不明である。

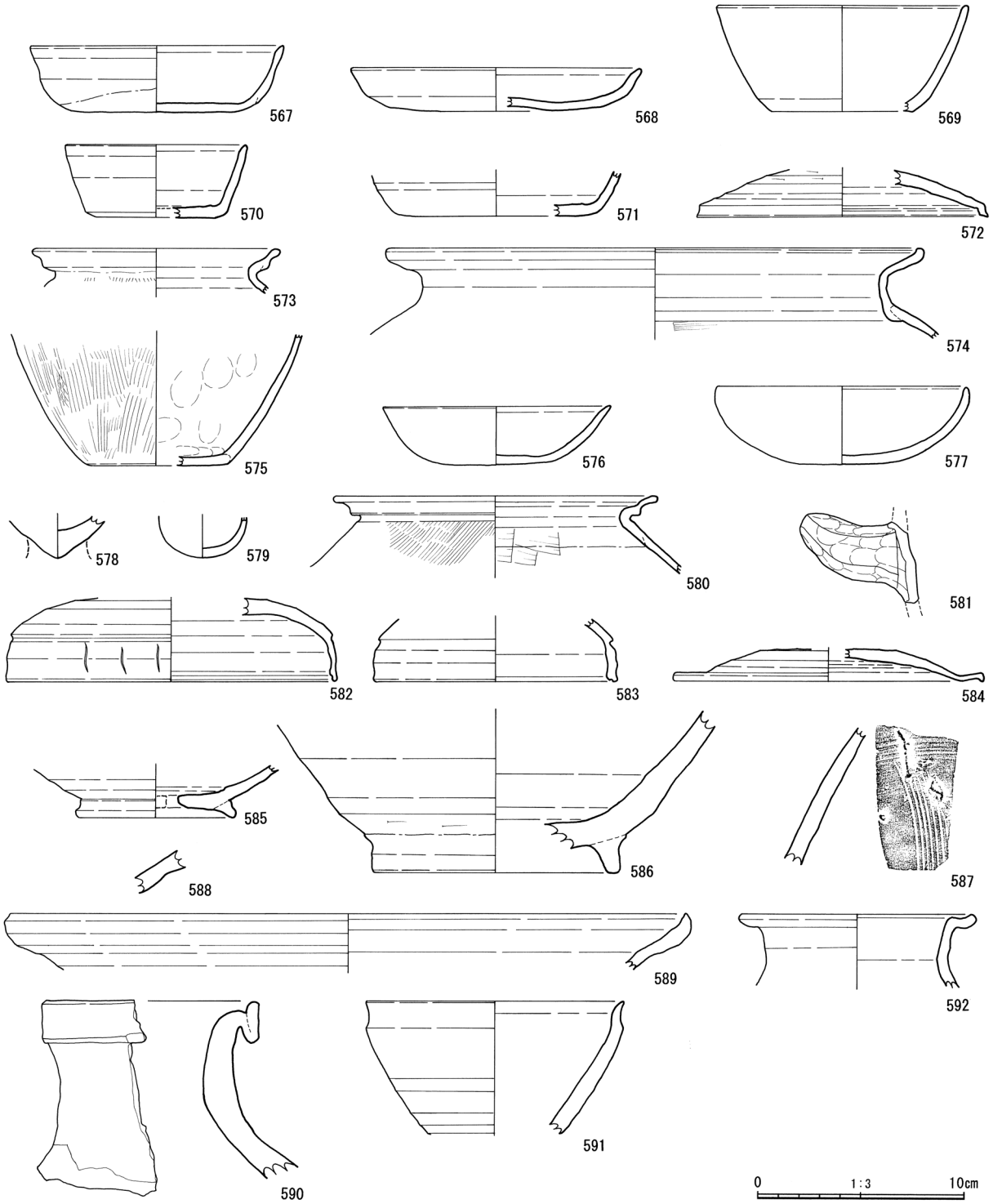
２　包含層出土の遺物（第 112・113 図、図版 61）

１区、2-1 区、2-2 区の第２面包含層より出土した土器は第 112 図 **567** ～ **592** にまとめた。包含層内の土器は土師器、須恵器、陶磁器等がある。

567 は土師器の坏である。復元口径は 12.2 ㎝、器高は 3.2 ㎝、底部径は 6.8 ㎝である。胎土は精製されたものであるが極少量の小礫が混じる。底部には黒斑がある。外面には粘土輪積みの痕跡が見える。形状からして奈良時代の須恵器の無台坏身の模倣であろう。坏としては小型である。**568** は土師器の皿である。皿は無台で、小片から口径は復元すると 14.3 ㎝、器高は 2.1 ㎝である。胎土は精製した粘土を使っているが表面には気泡が多く見られる。やはり奈良時代の須恵器の無台皿の



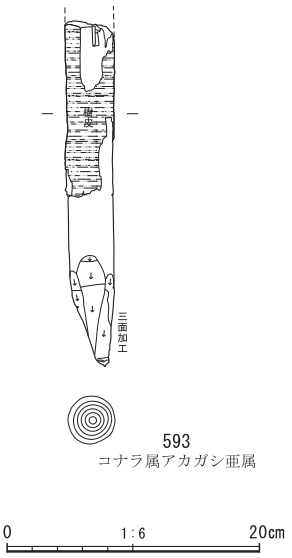
第 111 図　SP168・208 出土遺物実測図



第 112 図　第２面包含層出土遺物実測図１

模倣品であろう。全体に歪んでいる。569 は土師器の坏である。底部を欠損しているため高台の有無は不明だが無台であろう。復元口径は 11.7 ㎝、残存器高は 5.4 ㎝である。側面は立ち気味で深さがある。表面調整はミガキの一部が残っている。外面は黒班があり、内面も黒く変色した部分があることから内黒坏の可能性がある。須恵器の模倣坏であろう。

570 も須恵器の坏身である。底部から口縁部まで残る破片で、復元口径は 9.0 ㎝、器高は 3.4 ㎝、底径は 6.2 ㎝と小型の無台坏身である。底部は平らで回転ヘラケズリ、器面はナデで仕上げられている。



第 113 図　第２面包含層出土遺物実測図２

571 は須恵器の坏身である。口縁部は欠損し、底部から側面の小片である。残存高は 2.1 ㎝、底径は 8.8 ㎝、口径はおそらく 11 ～ 12 ㎝ほどだろう。底部は無台で回転ヘラケズリである。やや焼成が不良のためか全体に灰白色になっている。胎土には小礫がわずかに混じる。572 は須恵器の坏蓋である。全体の 1/4 ほどの残存で摘み部分は残っていない。復元径は 14.0 ㎝、残存器高は 2.1 ㎝である。天井部分は回転ヘラケズリで下方はナデ整形である。返りはほぼ直角に近く、断面形は方形である。567 ～ 572 は奈良時代の土器である。

573 は土師器のＳ字状口縁甕である。口縁部の小片であるが、復元口径は 13.0 ㎝を測る。口縁部断面はＳ字状を呈し、非常に薄いつくりである。色調は淡黄褐色、胎土は微量に雲母を含む。小片のため体部の調整は分からないが４世紀代のものであろう。

574 は遠江以西でよく見られる「コの字」甕の口縁部である。口唇部は内側に巻く。体部外面はハケ調整、内面はナデによる面調整をしている。第２面の時期に伴うものであろう。575 も土師器の甕で、底部片である。底径は７㎝ほどの平坦面で、底部から６㎝の高さまで残っている。外面は縦方向のハケ調整を施し、内面は指ナデ押さえが見える。

576 は土師器の坏身である。口径は 11㎝ほどある。体部から口縁部は緩やかに外側へ開く形状をしている。表面の調整は風化により消滅している。577 も土師器の坏身であるが口縁部は内側へ傾き丸みのある形状である。口径は 12.3 ㎝ほどあり、高さも 3.8 ㎝ある。表面は風化している。第３面に伴う古墳時代後期の坏身である。578 は土師器の小片である。底部に指で絞って摘み出したような形状をしている。胎土に径２～４㎜程の粒子を含むことから、本品は台付甕の胴部底で、台部と接合した部分であろう。第３面包含層で出土した第 40 図 165 と同様の土器である。

579 は土師器のミニチュア土器である。底部の破片であるが小片のため器種が特定できない。おそらく小型の坩か壷の底部であろう。胎土は非常に精製した粘土が使われている。580 は土師器のＳ字状口縁部の甕である。口縁部から胴部の一部がある。復元口径は 14 ㎝ほどある。焼成は硬く焼き締まっており、胎土内には雲母が密に混じる。外面にはハケ調整の痕跡がはっきりと残る。古墳時代前期に属する。581 は土師器の甑で把手の部分である。胴部の一部もある。把手は 4.6 ㎝程の長さがあり、全面指ナデにより整形している。胎土には小粒子が混じる。

582 ～ 584 は須恵器である。582 は坏蓋で、全体の 1/4 程度の残りである。径は 16.2 ㎝、器高は４㎝程である。天井部はヘラケズリで、そのほかは回転ナデ整形されている。天井部と口辺の境には沈線が巡る。また口辺の外面には３本の縦方向のヘラ描き文がある。口辺の内面には接地面に近いところにわずかな段差がある。583 も坏蓋である。小片であるが口径を復元すると 12㎝程になる。口辺の破片で、天上部との境にははっきりとした沈線が巡っている。接地面は内側に斜めにナデているため端部は細くなっている。582・583 ともに古墳時代後期の須恵器で６世紀半ば～後期の年代に属する。584 は摘みを有する坏蓋である。摘み部分は欠損している。全体に歪んでいるが径は 15.1 ㎝程に復元できる。天上部は回転ヘラケズリ、その他は回転ナデにより整形している。外面の縁と内面の周辺に降灰釉が付着していることから重ね焼きされたものであろう。坏蓋の年代は奈良時代に属する。

585 は灰釉陶器の碗または皿であろう。貼付け高台で整形は粗い。胎土は精製された粘土で色調はやや焼きの甘い淡灰褐色である。高台の内側中央に焼成後に開けられたような孔がある。586 は山茶碗の

鉢である。口縁から体部は欠損しているが底径は11.8㎝ほどあり大型である。高台は貼付けの角高台で、体部の貼付け部分はヘラケズリで整形しているところもある。こね鉢として使われていたものか、内面見込みには使用痕跡と思われる擦れがある。

587 以降は陶磁器である。587 は古志戸呂の擂鉢である。体部の破片のみだが内面に縦方向の９本の櫛画きがある。小片のため径は不明である。588 は古瀬戸後期の折縁大皿である。外面と内面に釉薬の一部がある。小片のため径は復元できなかった。589 は古瀬戸後Ⅳ期の陶磁器である。内外面は鉄釉であろう。590 は大型の甕で、常滑産か渥美産であろう。口縁は折り返している。外面は釉薬が付着している。591 は古瀬戸の天目茶碗である。口縁から体部の破片で高台・底部は欠損している。復元口径は11.3㎝、残存高は6.4㎝ほどある。内面の釉薬は焼成が強くとんでいる。592 は瀬戸・美濃の水注か。全面に鉄釉がある。出土した土器は各遺構面の年代と概ね合致している。

3-1 区の第２面包含層より土木材の杭が１点出土した（第 113 図 593）。全長は 27.4 ㎝、直径は 3.8 ㎝である。樹種はコナラ属アカガシ亜属の芯持ち材で表面には一部樹皮が残っている。下端部から９㎝の部分を刃物で加工し尖らせている。

第５節　第１面の遺構と遺物

１　遺構

第１面では１区から 2-1 ～ 3 区、3-1 区で遺構を検出した。遺構は１区と 2-2 区で掘立柱建物、各調査区では土坑、溝、杭列、不明遺構などが見つかっている。検出面の標高値は高低差があるものの、概ね 6.4 ～ 6.5 ｍである。遺構は途中、2-2 区北側と 2-3 区南側に 30 ｍ程の空白地帯があり、南側と北側に別れている。北側は自然流路が多く、集落域はない。一方、南側は掘立柱建物や人為的な溝など集落が存在している。

１区では掘立柱建物 SB101 の１棟を確認した。土坑は SK101 ～ 107 がある。溝はほぼ同じ方向性をもった東西方向と南北方向のものが SD101 ～ 118 まである。溝は直角方向に交わっており区画をもった人為的に掘削されたものである。この他に杭列 SA101 や不明遺構 SX101 ～ 103 が調査区南側に集中している。2-1 区では建物跡は見つかっていない。遺構は溝と土坑がある。溝は SD119 ～ 122・125 で、直線的なものに混じって曲線状になったものも認められた。土坑は SK108 ～ 121 がある。

2-2 区では掘立柱建物が SB102・103 と２棟を検出した。そのほか土坑 SK104、溝 SD123・124・126 ～ 137、自然流路などがある。

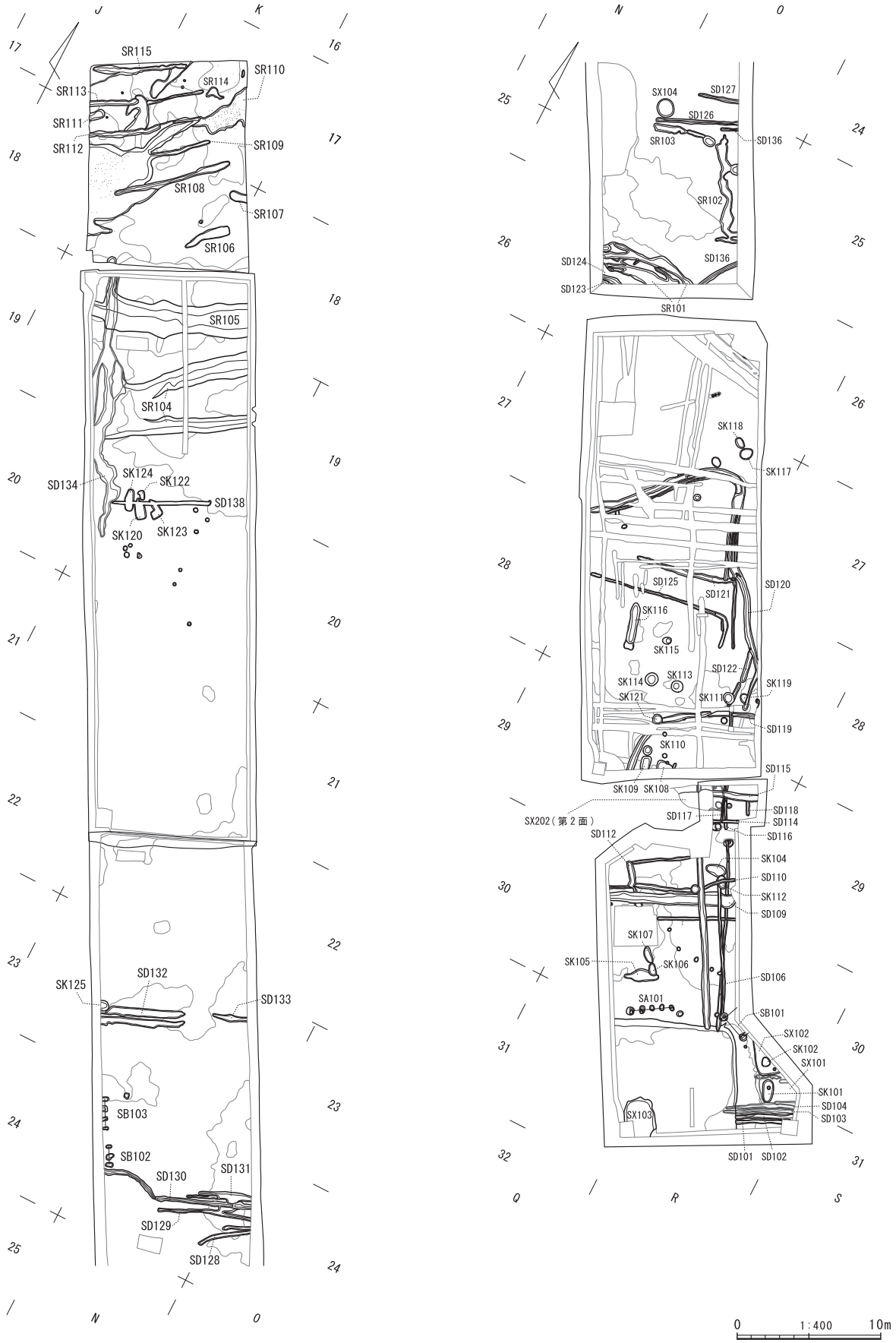
2-3 区は北側半分に遺構が集中している。主な遺構は自然流路 SR104・105 があり、溝 SD134・138、土坑 SK120 ～ 124 が見つかった。3-1 区にも遺構は続いており、自然流路 SR106 ～ 115 がある。

以上、第１面の包含層や遺構内で出土した土器は山茶碗、陶磁器が主体であることから、遺構面の年代は中世以降である。

（１）掘立柱建物

SB101（第 115 図）　掘立柱建物 SB101 は１区の南東、Ｒ -30 グリッド内で検出した。柱穴はＰ１・Ｐ２の２箇所があり、柱間は２ｍを測る。東側は調査区であるため、建物の全景はわからず、梁・桁方向も不明である。柱穴の径は 50 ㎝程でＰ１は柱の抜き去り痕がある。検出面の標高値は 6.11 ｍである。

SB102（第 115 図）　掘立柱建物 SB102 は 2-2 区の中央西寄りで検出した。Ｎ -24 グリッド内に位置する。おそらく建物の桁行き側と思われるが、東の柱穴列だけが見つかっており、西側は調査区外のため全体の規模はわかっていない。SB102 は後述する SB103 の南側に並んでおり、SB103 とは桁行き方向が平行

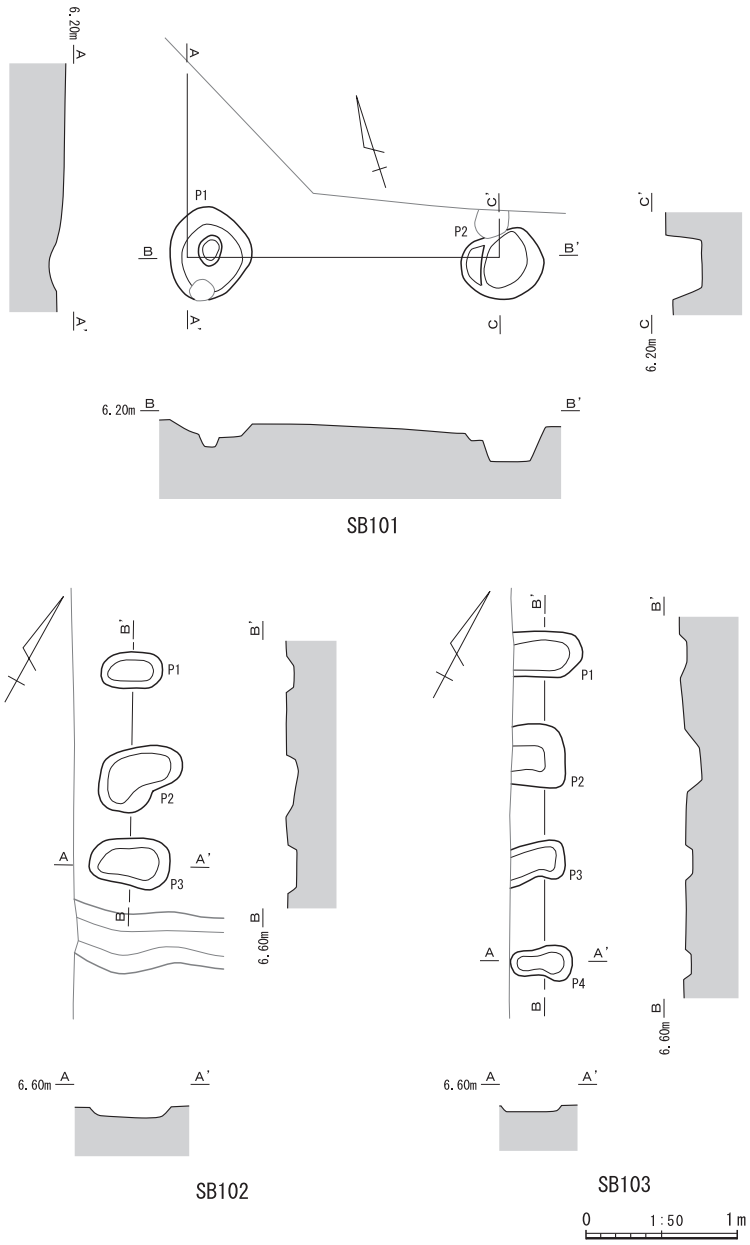


第 114 図　第 1 面全体図

している。柱穴はＰ１からＰ３まであり、直径は 25 ～ 30 ㎝と小さめである。柱穴は円形ではなく楕円形に近い。掘形も 10 ㎝程度と浅く、柱間は 60 ～ 70 ㎝と狭い。建物そのものの規模はあまり大きくはなかったようである。

出土遺物は柱穴Ｐ２より須恵器と山茶碗が見つかっている（第 116 図 **595・596**）。**595** は須恵器の坏身である。口縁と底部が欠損しているが口径 10 ㎝程の坏身であろう。蓋を受ける立ち上がりが強く、小型化してくる７世紀代に入る可能性がある。**596** は山茶碗の小皿である。径は 7.0 ㎝、器高は 1.9 ㎝、底部は回転糸切り痕がある。内面は降灰釉や付着物があることから重ね焼きの最上段で焼かれたものだろう。建物の年代は山茶碗の年代以降であろう。

SB103（第 115 図）　SB103 は SB102 の北側で検出した掘立柱建物である。建物は１ｍ程しか離れていない。SB102 と桁行きは並行するが建物そのものはやや西に寄っている。桁行き方向は北緯より 27 度ほど西側に傾いている。桁行きは２ｍの規模がある。柱穴は４箇所あり、列は東側のみで、西側は調査区外のため建物の規模はわからない。柱間は 70 ㎝ほどで掘形は浅い。柱穴の形状も楕円形である。

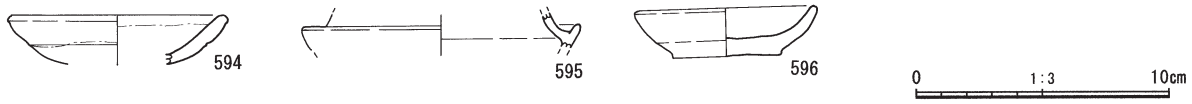


第 115 図　SB101・102・103 実測図

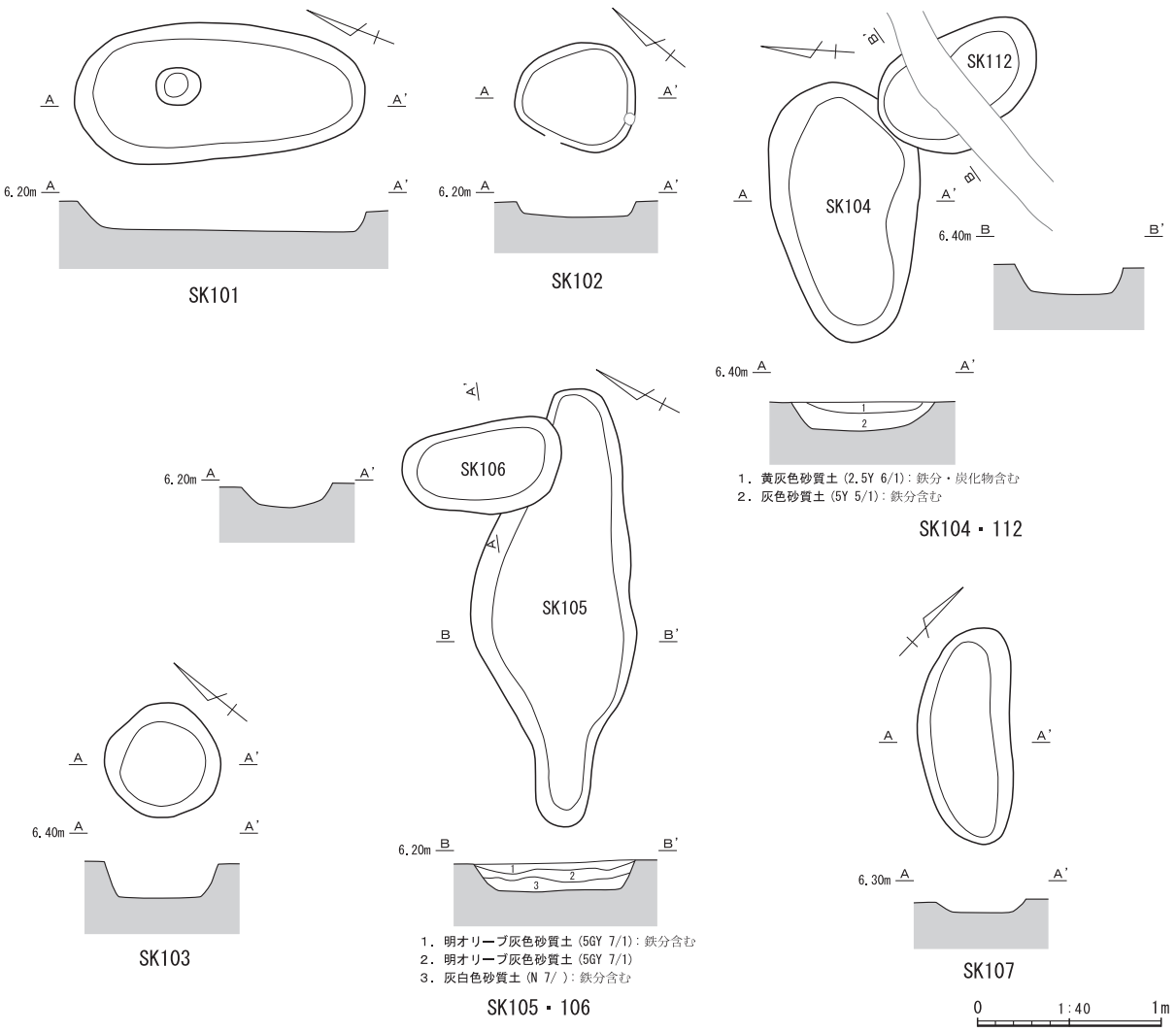
柱穴Ｐ２の覆土より土器が出土している。第 116 図 **594** は古瀬戸の小皿である。口縁部だけ釉薬が付け掛けされている。

周辺域には建物に関連する遺構は見当たらない。強いてあるとすれば建物の５ｍほど北側に２条の溝 SD132・133 が見つかっている。溝は建物の桁行き方向と平行する。溝より北側では遺構が検出されていない。つまり溝は建物群の北端の境界にあたり、人為的に掘削された可能性がある。

覆土より出土した土器の年代から中世代の建物であろう。



第 116 図　SB102・103 出土遺物実測図



第 117 図　SK101・102・103・104・105・106・107・112 実測図

（２）土坑

土坑は１区から 2-3 区まで SK101 ～ 125 まで 25 基を検出した。

SK101（第 117 図）　１区の南東端で検出した長楕円形の土坑である。長軸は２ｍ、短軸は 80 ㎝弱で、深さは 15 ㎝程である。1.5 ｍ北側に SK102 がある。

SK102（第 117 図）　SK101 の 1.5 ｍほど北側で検出した円形の土坑である。１区の南西端にある。径は 65 ㎝、深さは８㎝程度と浅い。不明遺構 SX102 のなかに位置する。

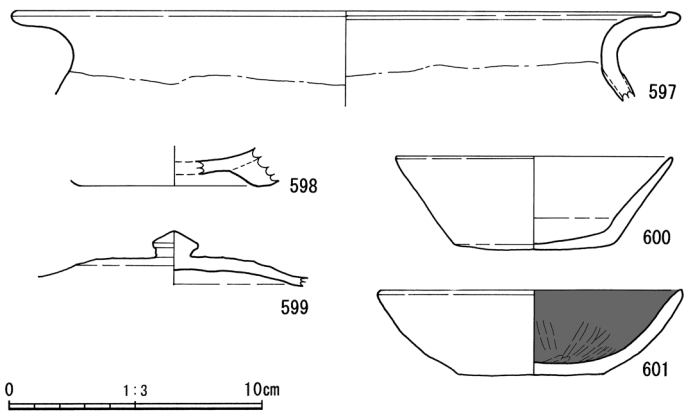
SK103（第 117 図）　１区北半部中央付近で検出した円形土坑である。径は 60 ㎝､深さは 20 ㎝である。北東２ｍの位置に SK104 がある。溝 SD107 や SD110 と切り合っているが、SK103 のほうが時期は新しいだろう。

SK104（第 117 図）　１区北半部の東寄りで見つかった楕円形の土坑である。長軸は 1.4 ｍ、短軸は 80 ㎝、深さは 15 ㎝程である。覆土はレンズ状の堆積で、１層には炭化物が混じる。SK112 と切り合い、溝 SD110 と近接しているが、切り合い関係から見て SK104 が最も古い。覆土より土師器の甕（第 118 図 597）が出土している。いわゆる「コの字」甕で、口縁部は外側へ強く開く形状で、復元口径は 26.0 ㎝である。胎土には小礫と雲母を含む。内外面がわずかに煤けている。

SK105（第 117 図）　１区中央の西寄りで検出したやや不定形な土坑である。長軸は 2.35 ｍ、短軸は

90 ㎝、深さは 10 ㎝程である。覆土は砂質土で鉄分を含む。北側で SK106 と切り合っているが新旧関係は SK105 のほうが古い。

SK106（第 117 図）　１区中央の西寄りで検出した楕円形の小土坑である。南側は SK105 と切り合っている。新旧関係は SK106 のほうが新しい。長軸は 90 ㎝、短軸は 50 ㎝で、深さは 10 ㎝程である。覆土内より土師器の内黒碗（第 118 図 598）が出土した。598 は底部高台の部分で、底径は 7.4 ㎝程に復元できる。高台の一部と内碗面の一部しかない破片のため全体形状がよくわからないが灰釉陶器か山茶碗の模倣品の可能性がある。



第 118 図　SK104・106・113・117・120 出土遺物実測図

SK107（第 117 図）　１区中央西寄りで検出した楕円形土坑である。すぐ南側には SK106 が接する位置にある。長軸は 1.2 ｍ、短軸は 50 ㎝、深さは 10 ㎝に満たない。

SK108（第 119 図）　2-1 区南端で検出した土坑である。南半部が調査区外にかかっているため全形は不明である。東西方向は最大 1.1 ｍ、南北方向は 55 ㎝で、10 ㎝程の深さがある。30 ㎝ほど西側には SK109、北西側には SK110 がある。

SK109（第 119 図）　2-1 区南端で検出したやや角をもった楕円形の土坑である。南半部が調査区外にかかっているため全体の大きさは不明である。長軸は 90 ㎝、短軸は 70 ㎝で、深さは 10 ㎝強ある。30 ㎝ほど東側には SK108、10 ㎝ほど北側には SK110 が位置する。

SK110（第 119 図）　2-1 区南端で検出した円形土坑である。直径は 30 ㎝で 20 ㎝ほどの深さがある。10 ㎝ほど南には SK109、南東方向には SK108 が位置する。

SK111（第 119 図）　2-1 区南半部東寄りで検出した円形土坑である。最大径は 80 ㎝ほどある。SD122 と切り合っているが新旧関係では SK111 のほうが新しい。

SK112(第 117 図)　１区北半部東寄りで検出した楕円形の土坑である。溝 SD110 と切り合っているが、SK112 のほうが古く、SD110 のほうが後である。北側は SK104　と切り合っているが、SK112 のほうが新しい。新旧は SK104 → SK112 → SD110 の順である。長軸は 95 ㎝､短軸は 60 ㎝で､15㎝ほどの深さがある。

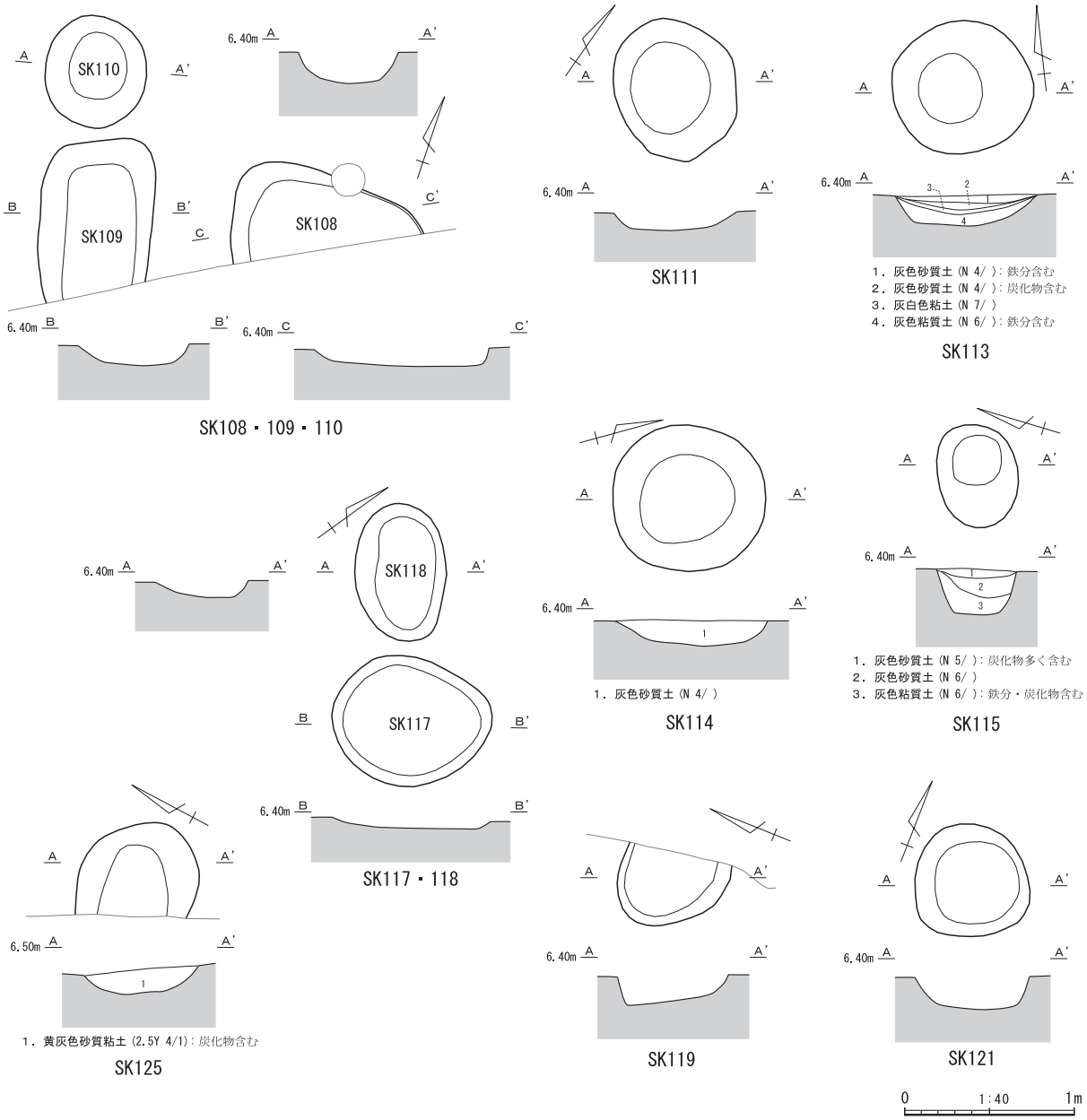
SK113（第 119 図）　2-1 区の南半部中央に位置する円形の土坑である。径は 85 ㎝で、深さは 20 ㎝、覆土は４層に分層できる。SK113 から東側に３ｍ程離れた位置に SK111 があり、1.5 ｍ程西側には SK114　が位置する。覆土内からは須恵器の坏蓋（第 118 図 599）が１点出土した。坏蓋は天井部分の破片で、擬宝珠状の摘みがある。摘みの径は 1.8 ㎝である。

SK114（第 119 図）　2-1 区の南半部中央で検出した円形土坑である。直径は 90 ㎝程で、深さは 10 ㎝強ある。1.5 ｍほど東側には SK113 がある。また北側 2.5 ｍの位置には SK115 がある。

SK115（第 119 図）　2-1 区南半部中央で検出した小型の円形土坑である。径は長いところで 60 ㎝、短いところで 50 ㎝、深さは 25 ㎝ある。南側 2.5m の位置には SK115 があり、西側 2.0 ｍにところには SK116 が位置する。

SK116（第 120 図）　2-1 区中央付近で検出した長楕円形の土坑である。長軸方向は 2.9 ｍ、短軸方向は 60 ㎝ほどあり、10 ㎝ほどと浅い。遺構の性格は良く分かっていない。土坑の東側 2.0 ｍには SK115 があり、2.5 ｍほど南東部には SK114 がある。

SK117（第 119 図）　2-1 区北半部東寄りに位置する楕円形土坑である。長軸は 95 ㎝、短軸方向は 75



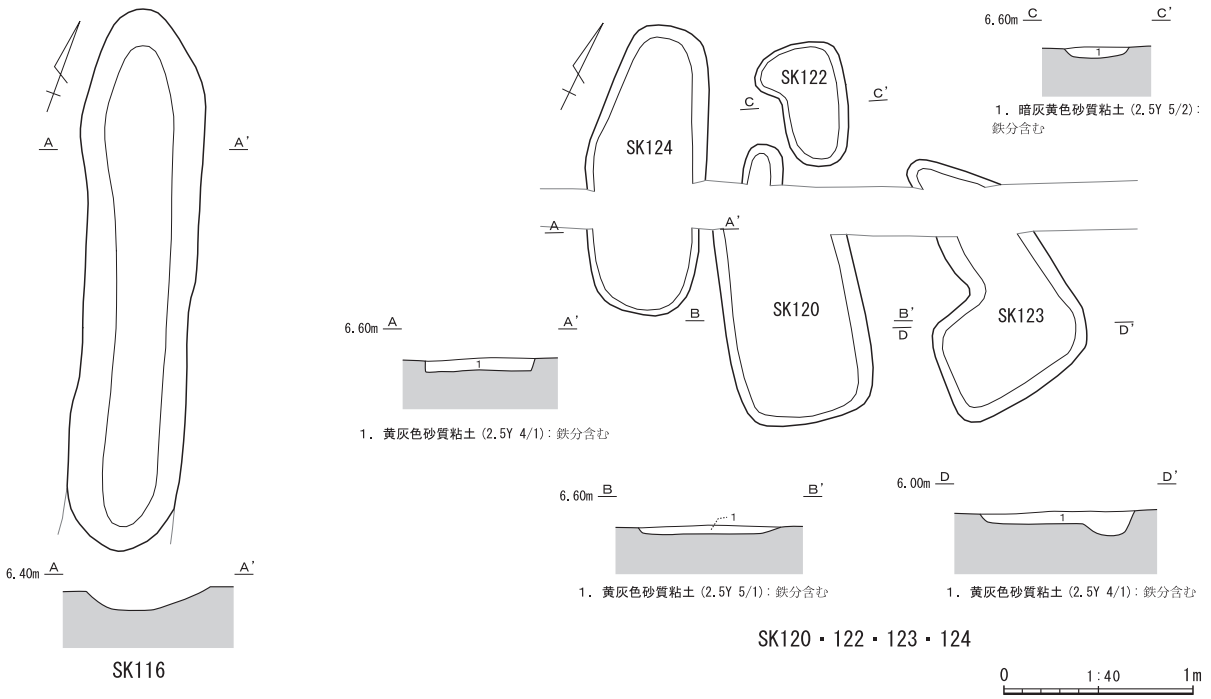
第 119 図　SK108・109・110・111・113・114・115・117・118・119・121・125 実測図

cmで深さは 10 cmに満たない。北西側に SK118 が接している。覆土内からは土師器の坏身（第 118 図 600）が出土した。坏身は半分ほど残存しており、底径 6.6 cmの平底で、復元直径 11.5 cm、器高は 3.6 cmである。手捏ねで作られたようで全体に歪んでおり、薄手の作りではあるものの粘土を継ぎ足した部分は厚みをもっている。

SK118（第 119 図）　2-1 区北半部東寄りで検出した楕円形土坑で、すぐ南西側には SK117 が接している。長軸方向は 80 cm、短軸方向は 55 cmの浅い土坑である。SK117 と SK118 の周囲には同じような土坑は見当たらない。

SK119（第 119 図）　2-1 区南半部東寄りで検出した土坑である。東半部は調査区外に出ており、全体形状は不明だが楕円形を呈するものと思われる。残りが良いところで 65 cmほどの大きさがある。掘形は深いところで 20 cmほどの深さがある。

SK120（第 120 図）　2-3 区中央付近で検出した長方形に近い形状の土坑である。北側は溝 SD138 で削



第 120 図　SK116・120・122・123・124 実測図

平されているため、北側の形状が明確ではない。長軸は南北方向で 1.5 m、短軸方向は 75 cm、５cm 以下の浅い土坑である。周辺には SK122、SK123、SK124 が固まっている。覆土内からは土師器の坏身で内黒碗（第 118 図 601）が１点出土した。601 は 1/2 程残存する破片で、復元口径は 12.1 cm、器高は 3.3 cmを測る。内面は内黒で縦方向のミガキが観察できる。底部は平底である。

SK121（第 119 図）　2-1 区南半部中央に位置する円形土坑である。溝 SD119 と切り合っているが、新旧関係は SK121 のほうが新しい。

SK122（第 120 図）　2-3 区中央付近で検出した不定形な土坑である。すぐ南側には SK120 がある。方向性からして SK120 の一部であった可能性も考えられる。長軸で 65 cm、短軸で 45 cmほどと小型である。西側には SK124 も近接した位置にある。

SK123（第 120 図）　2-3 区中央付近で検出した不定形土坑である。土坑の西側には SK120・SK122・SK124 が近接している。SK123 はその最も東に位置する。長軸は 1.4 m、短軸は 80 cm程の大きさで、東寄りの深いところで 15 cmの深度がある。北側の一部は溝 SD138 に切られている。

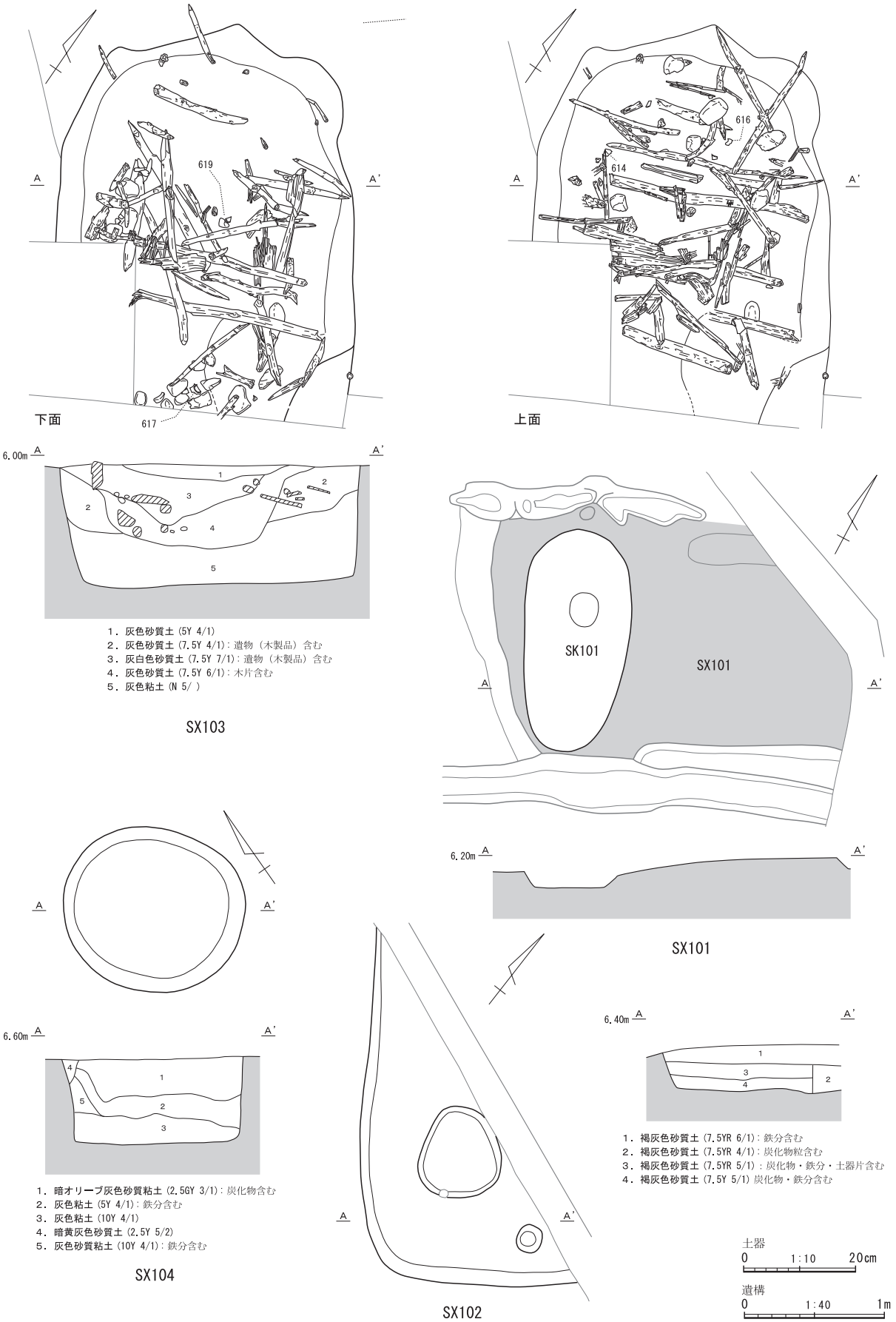
SK124（第 120 図）　2-3 区中央付近で検出した土坑である。形状は長楕円形で長軸方向は 1.5 m、短軸方向は 60 cm、掘形は５cm程度の深さがある。土坑の南側の一部は溝 SD138 により切られている。この土坑の東側には SK120・SK122・SK123 がまとまって位置している。

SK125（第 119 図）　2-2 区北半部西端で検出した土坑である。東側は溝 SD132 と接する位置にある。西側半分ほどは調査区外であったため、全体の形状は不明である。検出できた部分は東西南北方向のいずれも 70 cmほどで、深さは 12 cmと浅い。覆土は砂質粘土層が堆積している。

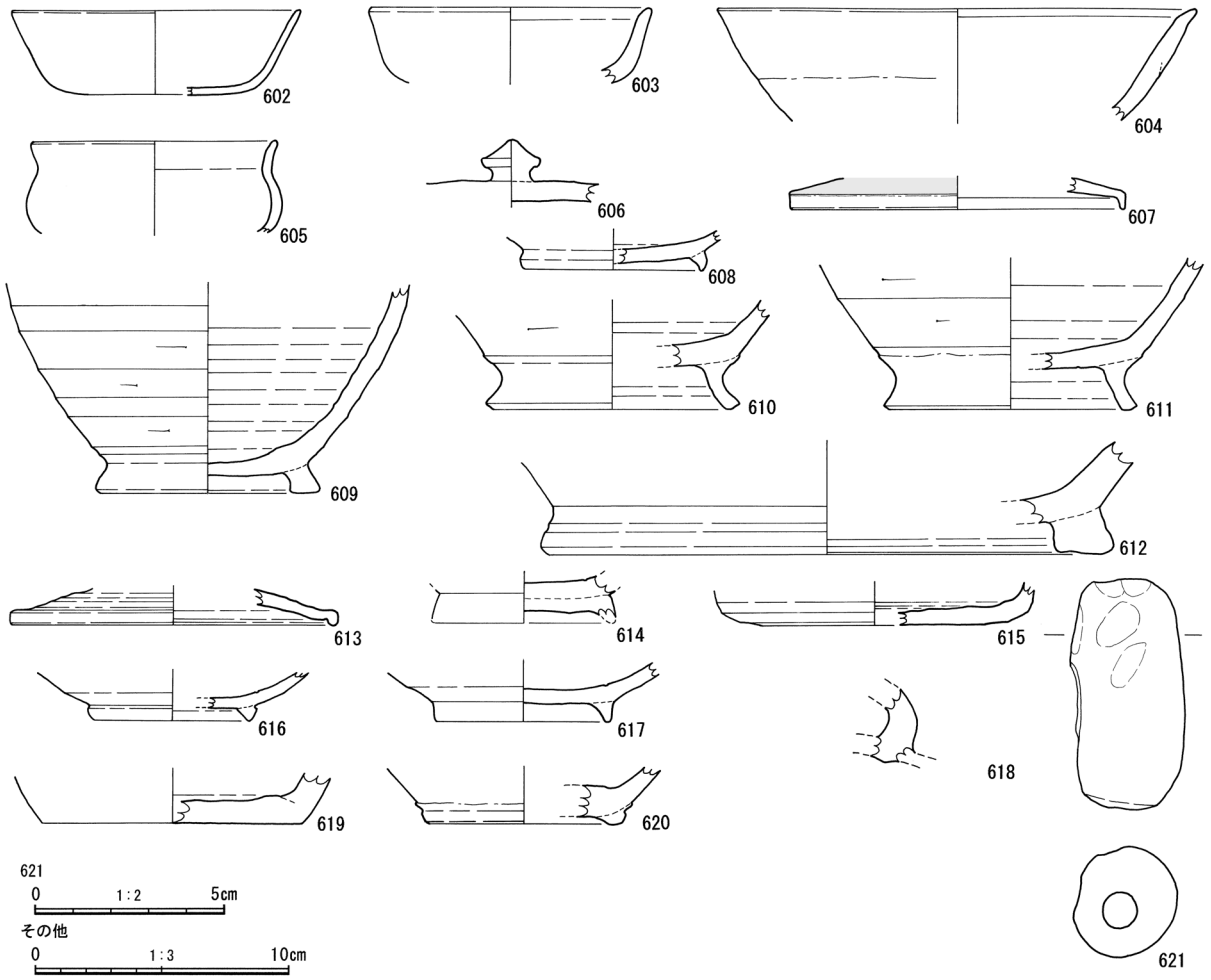
（３）不明遺構

１区と 2-2 区で４基の不明遺構を検出した。１区では SX101 ～ 103、2-2 区で SX104 が見つかった。

SX101（第 121 図）　１区の南東端で検出した不明遺構である。遺構の肩は西辺しか残っておらず、南北は撹乱や溝などで切られ、東側は調査区外になっているため、全容がわからない。確認できた範囲は東西で 2.4 m、南北で 1.8 mあり、はっきりとした掘形が残っているわけではない。遺構範囲内には土



第 121 図　SX101・102・103・104 実測図



第 122 図　SX102・103 出土遺物実測図

坑 SK101 が嵌っている。新旧関係は SX101 の後に SK101 が掘削されている。

SX102（第 121 図、図版 38）　１区の南東端で検出した遺構である。掘形は１箇所に 90 度の角をもつが、東側は調査区外のため全体の形状はわからない。西側の辺は 2.4 m、南側の辺は 1.8 mほどの規模がある。また垂直に近い壁をもち、深さも 30 cmある。覆土内からは土器も出土していることから、調査当初は竪穴住居かと思われたが、住居になる決め手がないことから不明遺構とした。遺構内には土坑 SK102 や柱穴 SP80 が切り合っているが、いずれも SX102 よりも新しい時期の遺構で、いずれも主柱穴ではないだろう。覆土は砂質土で４層に分層され、このうち３層に土器や炭化物、２層と４層に炭化物を含んでいた。

遺構覆土内より出土した土器は 11 点を図化した（第 122 図 602 ～ 612）。602 は土師器の坏身である。復元口径は 12.0 cm、器高は 3.6 cm、薄手のつくりで胎土も精製された粘土である。口唇部はわずかに外側に向く。603 も土師器の坏身である。復元口径は 12.1 cm、器高は 2.9 cm、体部はやや厚みをもつ。604 も土師器の坏身である。口縁部の破片で、口径を復元すると 18.8 cm、残存器高は 4.9 cmと大ぶりである。外面に粘土を継ぎ足した痕が見える。605 は鍋の口縁部か、あるいは鉢であろうか。小片のため口径は不確かである。非常に薄手で内面は薄く煤けている。606 は須恵器の坏蓋の摘み部分である。擬宝珠状の摘みは 2.2 cm径で上端が尖っている。607 は灰釉陶器の壷蓋であろう。復元径は 13.2 cmほどある。天井部分には灰釉が掛かっている。608 は灰釉陶器碗の底部である。底径は 7.0 cmで高台の断面は三日月形を呈する。609 は灰釉陶器の長頸壷底部である。底径は 16.0 cmに復元できる。外面は

黄土刷毛塗りされ、内面の見込み部分には降灰釉の痕がある。610・611 は須恵器の長頸壷底部である。いずれも底径は 9.4 ～ 9.7 ㎝に復元できることから、接合点はないが同一個体と思われる。612 は灰釉陶器の長頸壷底部片である。底径は 13.2 ㎝に復元できる。高台は厚みがあり太い。内面には一面に降灰釉が付着している。やや古手の須恵器が含まれるものの、遺構は灰釉陶器の年代以降の時期であろう。

SX103（第 121 図、図版 38）　１区の南西端で検出した不明遺構である。Q～R -31 グリッドに位置する。掘形は隅丸の長方形に近い形状で、南半部は調査区外に出ているのと南壁際の集水桝にかかっているため全体の形状は不明である。南北方向は 2.8 m、東西方向は 2.1 mの範囲は残っている。SX103 は「コ」の字形に掘り込まれ、深さは１m強ある。覆土は５層に分層された。このうち、２・３層では木製品を含み、４層では木片を含む。土層断面をみると５層のあとに２層が堆積し、その後、また人為的に掘削されたような痕跡がある。掘削後、４層→３層→１層の順に堆積している。覆土内からは大量の木製品と礫、土器も出土している。木製品は中には板状に整形された材があるものの、大半は土木材の杭であった。出土状況図（第 121 図）をみると上層から下層にかけての木製品に規則性はなく、杭として使われていたわけでもなく、10 ～ 20 ㎝大の自然礫ともに混在している。こうした状況から鑑みて廃棄土坑であった可能性が高いと考えられる。年代は出土土器などから平安時代～中世の時期であろう。

覆土内より出土した土器・土製品は第 122 図 613 ～ 621 に示した。613 は須恵器の坏蓋の破片である。奈良時代以降の時期であろう。

614 は山茶碗の底部高台部分である。底部は回転糸切り痕がある。615 は須恵器の無台坏である。底部の径は 12.6 ㎝程に復元できる。616 は灰釉陶器の碗で、底部の破片である。高台断面は三角形になっている。617 は山茶碗の高台部分である。底部径は 6.8 ㎝ある。618 は灰釉陶器の平瓶把手の付け根部分である。表面には降灰釉が付着している。619 は渥美産の鉢である。底は平底になっている。620 は渥美産の山茶碗である。高台は低く、籾痕のような圧痕が付いている。621 は土師質の土錘である。下方が一部欠損している。長さは６㎝、径は３㎝ほどある。木製品は 58 点の樹種同定のみ行った。樹種はマツ属服移管束亜族やアカマツ、クロマツ、ヤブツバキ、スダジイ、クリ、コナラ属コナラ節、ツガ属、クスノキ科Ａ、クスノキ科Ｂ、ヤナギ属、サカキ等、複数種類の樹種が確認された。樹種の構成は、他の杭列より出土した杭の樹種構成とほぼ同じ様相を示している。ただ、第２面以降の杭材に比べるとマツ属複維管束亜属やアカマツ、クロマツなどの種類の割合が多く見られた。

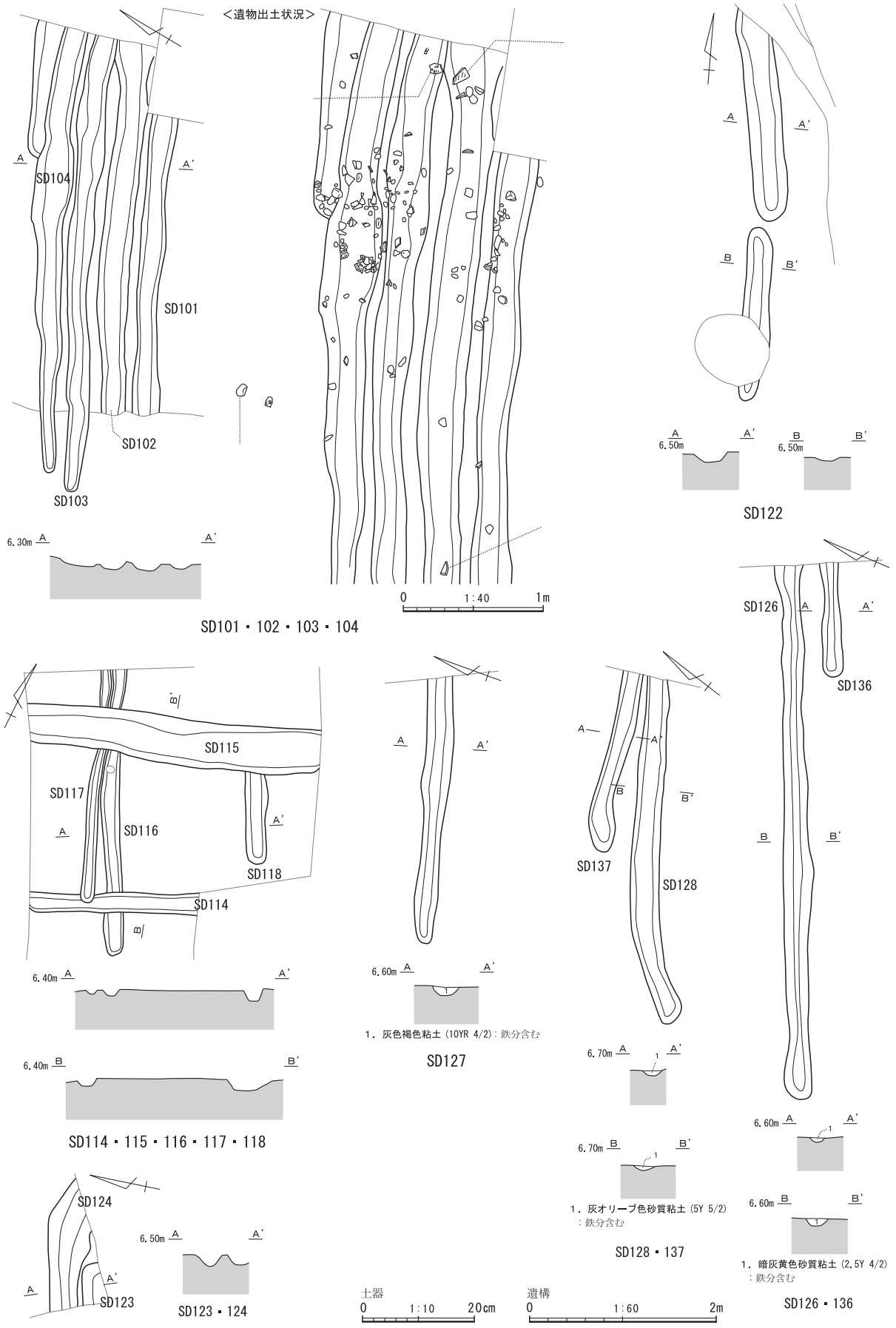
SX104（第 121 図）　１区南半部の中央、O -25 グリッド内で検出した円形の不明遺構である。最大 1.2 m程の円形で、掘形は「コ」の字形に掘削している。覆土は５層に分層され、１層では炭化物を含む。すぐ南側には溝 SD126 や自然流路 SR103 がある。北側に 10 mほど離れた位置に掘立柱建物が２棟見つかっていることから井戸とも思えたが、そのようにも見えない。

（４）溝

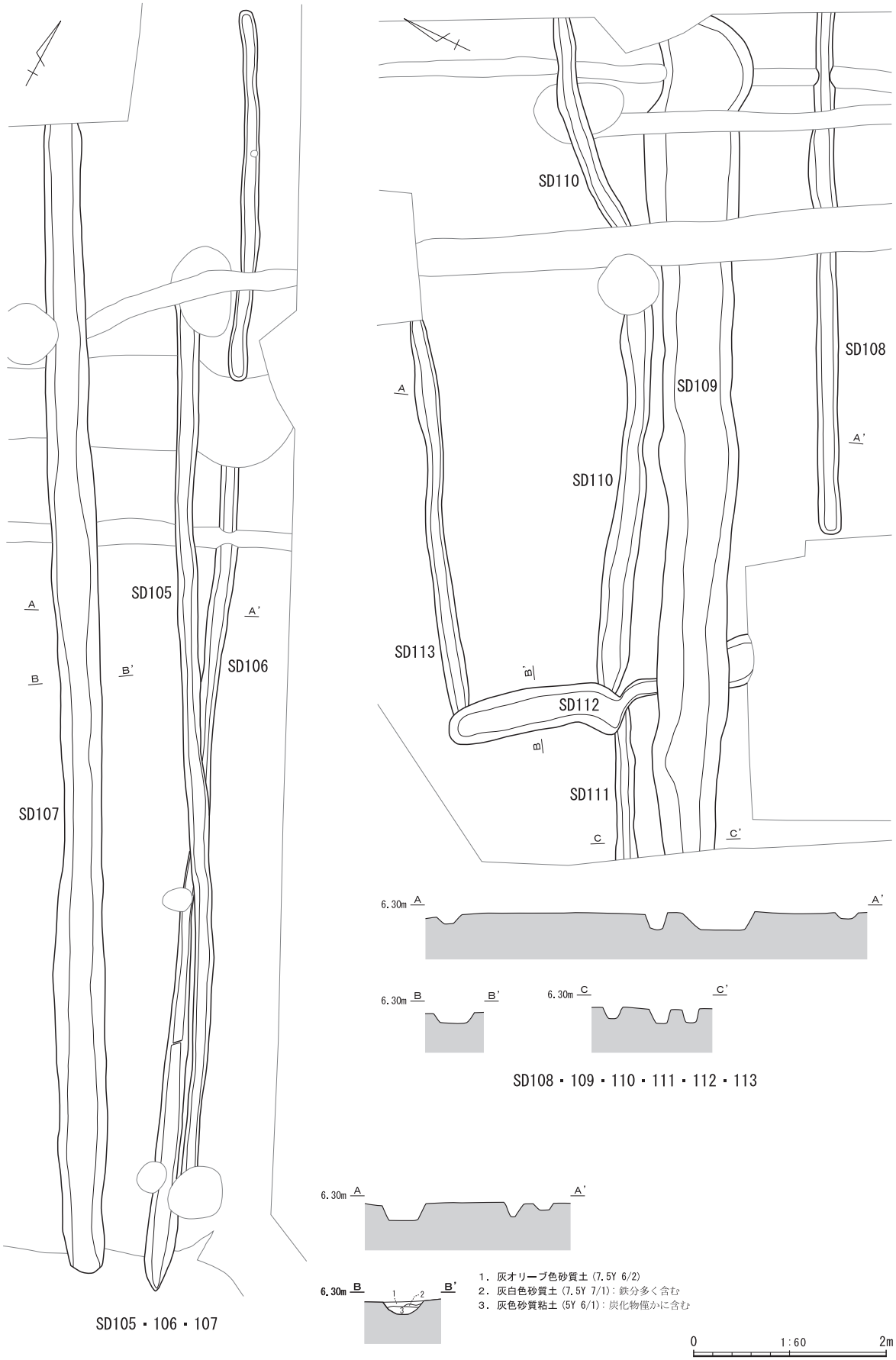
溝は１区から 3-1 区までの区間で、38 箇所ある（SD101 ～ 138）。１区では SD101 ～ 118、2-1 区では SD119 ～ 122・125、2-2 区は SD123・124・126 ～ 133・136 ～ 137、2-3 区は SD134・135・138 を検出した。

SD101・102（第 123 図）　１区南東隅、R -31 グリッド内にある。東西方向の溝で、SD103・104 と並行するなかで最も南に位置する。幅は 20 ～ 25 ㎝程度である。覆土内より土器（第 126 図 622 ～ 624）が出土した。622 は須恵器の坏蓋で復元口径は 18 ㎝である。623 は山茶碗の高台部破片である。高台径は 8.6 ㎝に復元できる。624 は灰釉陶器の甕胴部破片である。SD103 出土の 625 と同一個体の可能性がある。

SD103・104（第 123 図、図版 38）　１区南東隅で検出した溝で SD101・102 の北側に位置し並行している。覆土内より第 126 図 625 ～ 627 の土器が出土した。625 は灰釉陶器の甕。SD102 の 624 と至近距離で出土したことから同一個体の可能性がある。626 は灰釉陶器の甕胴部片である。やや薄手で 624・625 と



第 123 図　SD101・102・103・104・114・115・116・117・118・122・123・124・126・127・128・136・137 実測図



第124図　SD105・106・107・108・109・110・111・112・113実測図

は別個体であろう。627 は常滑産の片口鉢である。７または８型式で 14 世紀代後半の時期に属する。

SD105（第 124 図）　１区東壁寄りの南北方向の溝である。全長は 10 ｍ強で、幅は 20 ㎝程度の掘形である。SD106・107 とほぼ平行している。また SD101 ～ 104 や SD108 ～ 111 と直交することから区画溝の可能性がある。覆土内出土土器は第 126 図 628･629 である。628 は灰釉陶器の長頸壷口縁部である。629 も灰釉陶器壷の口縁と思われるがやや小振りなことから水瓶などの可能性もある。

SD106（第 124 図）　SD105 と平行して切り合う溝である。途中、SD109 に切られ、北側にある SD116 とは途切れているが同じ溝であろう。覆土内より第 126 図 630 ～ 632 が出土した。630 は土師器の「コの字」型の口縁部をもつ長胴甕である。631 は須恵器の坏蓋。632 は灰釉陶器の碗の底部片である。

SD107（第 124 図）　SD105 の西隣で、ほぼ並行している。全長は 12 ｍ、幅は 50 ㎝の規模がある人為的に掘削された溝である。覆土内より出土した土器は第 126 図 633・634 がある。633 は灰釉陶器の碗である。内面は降灰釉が付着している。634 は尾張渥美産の山茶碗であろう。

SD108（第 124 図）　１区北半部のＱ -30 グリッドに位置する東西方向の溝である。SD107 とは直交し、SD109・110・113 とは並行する。延長は 5.5 ｍ程、幅は 20 ㎝程度の小規模な溝である。

SD109（第 124 図）　SD108 の北側に並行する溝である。延長は調査区幅以上にある。溝幅は最大 75 ㎝程になる。溝は西側で二又に分かれる。さらに北側には SD110・111 と並行している。SD107 とは直交するが SD109 のほうが時期は古い。覆土内より山茶碗（第 126 図 635）の碗が出土した。

SD110（第 124 図）　SD109 の北側に並行する溝である。溝の東側はわずかに北東へ向く。溝幅は 20 ㎝強ほどある。覆土より出土した土器は第 126 図 636 ～ 638 がある。636 は土師器の甕である。外面の一部が煤けている。637 も土師器の甕で径は 34 ㎝程に復元できる。638 は「コの字」型口縁の長頸甕である。小片で径は不確かだが 35 ㎝ほどであろう。

SD111（第 124 図）　SD110 の西側延長上にある東西の溝である。途中、SD112 が SD110 と SD111 を横切っている。確認できた延長は 1.4 ｍほどで、幅も 20 ㎝以下と狭い。覆土内からは須恵器の坏蓋（第 127 図 369）が出土した。

SD112（第 124 図）　１区の北西隅で検出した南北方向の溝である。形状は不定形で 3.5 ｍの長さを確認した。幅は 45 ㎝程である。南端は試掘調査による掘削で不明である。

SD113（第 124 図）　SD110 の２ｍ北側に位置する東西方向の溝である。西は SD112 に接する。確認できた全長は 4.5 ｍ、幅は 20 ㎝ほどある。

SD114（第 123 図）　１区の北端で検出した東西方向の溝である。長さは 1.5 ｍ弱､幅も 20 ㎝程である。SD115 と並行し、SD116・117・118 とは直交する。

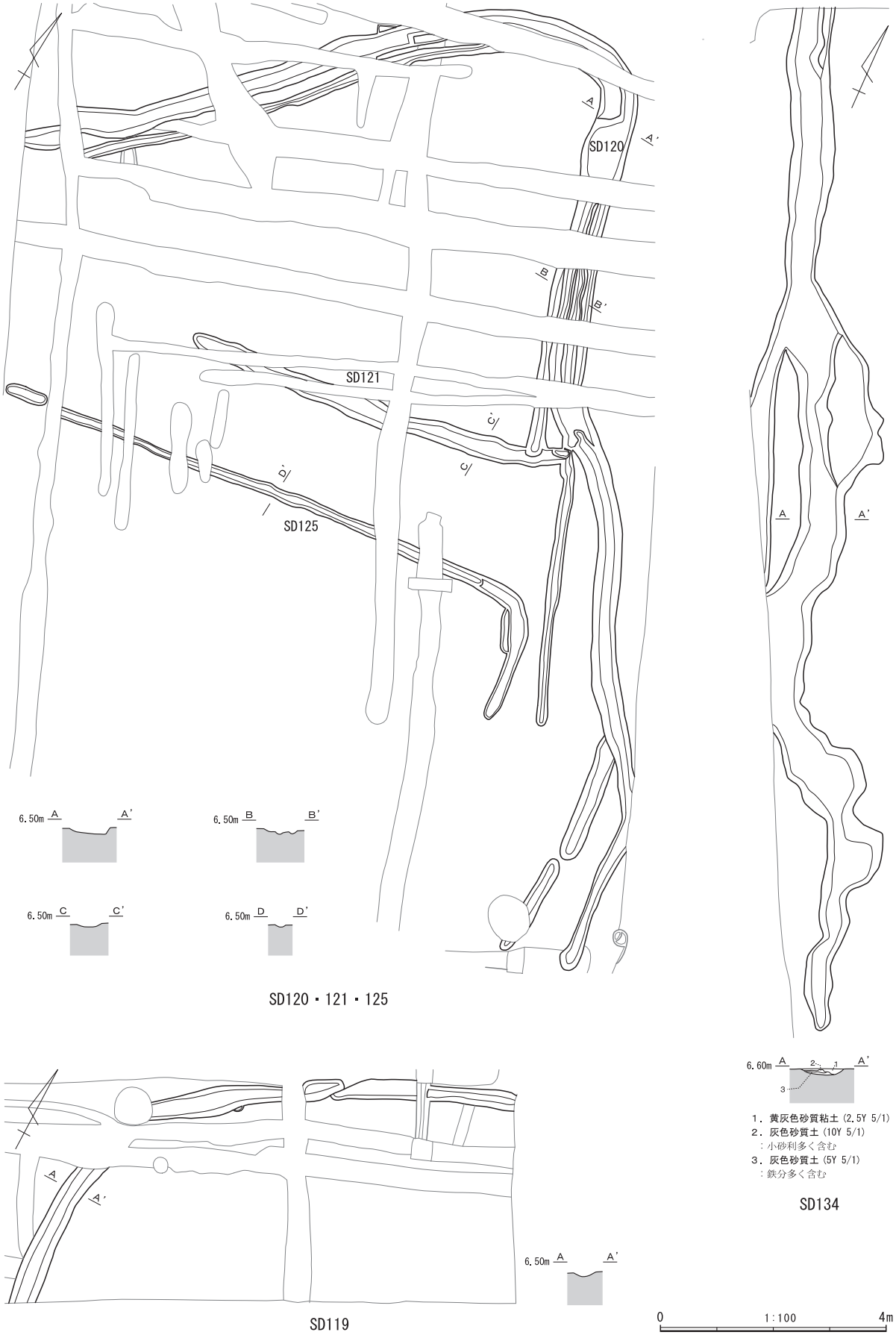
SD115（第 123 図）　１区の最も北端で検出した東西溝である。全長は 3.3 ｍ、溝幅は 50 ㎝ほどある。直交する SD116 ～ 118 よりも新しい時期の遺構であろう。覆土より灰釉陶器（第 127 図 640・641）が出土した。640 は灰釉陶器の甕口縁部である。641 は灰釉陶器の碗である。

SD117（第 123 図）　１区北端に位置し､SD116 や SD118 と並行する南北方向の溝である。全長は 2.5 ｍ、幅は 10 ㎝と小規模である。

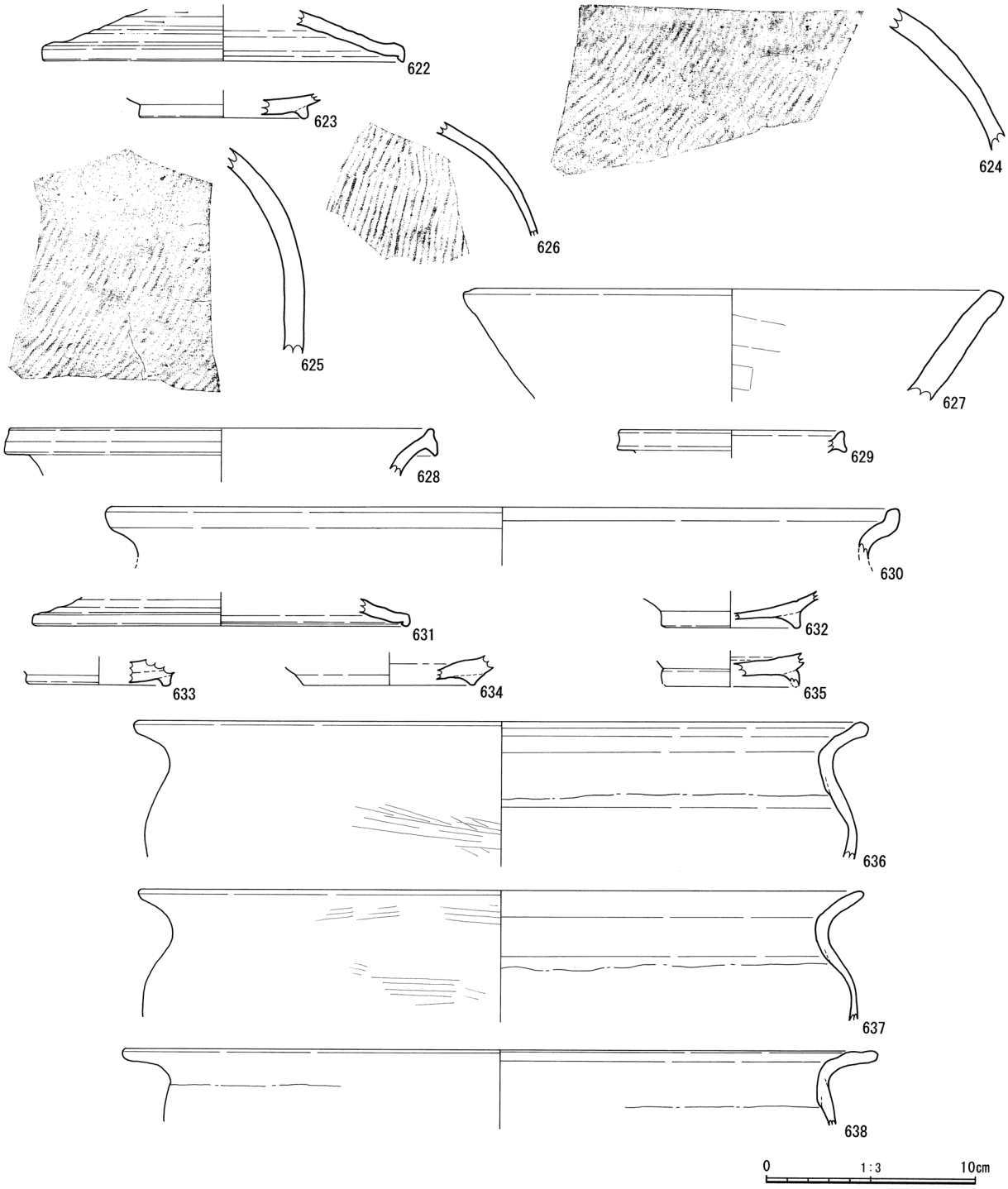
SD118（第 123 図）　１区北東端で検出した南北溝である。北側は SD115 で切られている。確認できたのは１ｍほどで、幅も 20 ㎝程と短い。

SD119（第 125 図）　2-1 区の南端で検出した溝である。溝は北東方向から曲線を描き南西へ進み、南方向へ向かう。延長は 6.5 ㎝､幅は 20 ㎝ほどである。覆土より須恵器の坏蓋(第 127 図 642)が出土した。

SD120（第 125 図）　2-1 区内を大きく蛇行する溝である。Ｏ -27 グリッドを北東へ進み、Ｐ -27 グリッド内で南東へ大きく流れを変え､Ｑ -28 グリッドに至る。直線的な部分はなく規格性は見られない。また溝の掘形も一定ではない。ただ、覆土内より土器が数多く出土した（第 127 図 643 ～ 652）。643・



第 125 図　SD119・120・121・124・125・134 実測図



第 126 図　SD101・102・103・104・105・106・107・109・110 出土遺物実測図

644 は土師器の甕である。いずれも「コの字」型口縁の長胴甕である。643 は外面に煤が付着している。644 は胎土に雲母の微粒子を含む。

645 は須恵器の坏である。体部のみで高台の形状は不明である。復元口径は 15.8 ㎝ある。646 は灰釉陶器の碗で、全体に降灰釉が付着している。口径は 15.8 ㎝である。647 は山茶碗の口径は 9.0 ㎝の小皿である。648 は山茶碗の碗である。高台径は 9.0 ㎝である。内碗面には重ね焼痕がある。649 も山茶碗の碗である。内面は重ね焼や降灰釉の痕跡がある。650 ～ 652 も山茶碗である。いずれも重ね焼痕や降灰釉がある。底部が厚く胎土が白っぽいことから渥美産の山茶碗であろうか。

SD121（第 125 図）　2-1 区の中央付近で検出した東西方向の溝である。全長は 4.2 m、幅は 20 ㎝程である。東側は SD120 に接する。

SD122（第 123 図）　2-1 区南東隅で検出した南北方向の溝で、北側と南側とに途切れている。北側は SD120 に接している。南側は SK111 と切り合うが、SD122 のほうが時期は古い。覆土より土師器の坏（第 127 図 **653**）が出土している。内碗面に黒い付着物があることから内黒碗の可能性もある。

SD123（第 123 図）　2-2 区の南西隅に位置する溝である。SD124 は北側に並行している。覆土から出土した土器は第 129 図 **654** ～ **657** に図示した。**654** は山茶碗の小碗である。**655**・**656** は山茶碗の碗底部片である。**657** は青磁の盤口縁部片である。

SD124（第 125 図）　2-2 区 SD123 の北側に並行する溝である。１mほどの長さで 50 ㎝幅を確認した。

SD125（第 125 図）　2-1 区中央付近で検出した鉤状に角をもつ溝である。総延長は 12 m程ある溝で、西から東に伸び、Q -28 グリッド内で 90 度南に屈曲する。

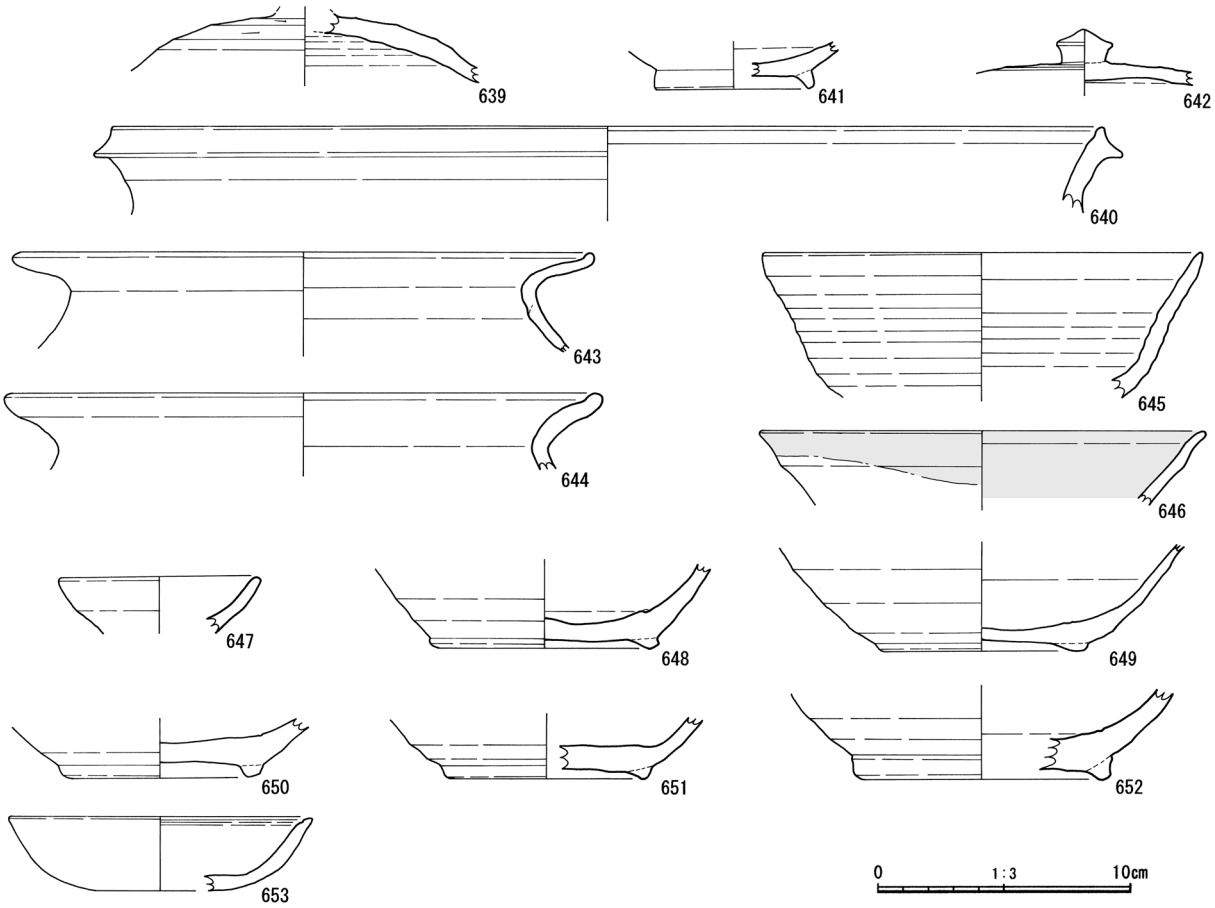
SD126（第 123 図）　2-2 区南半部で検出した東西方向の溝である。延長は 5.8 m、幅は最大 30 ㎝ある。SD127 や SD136 と近く並行する。覆土より灰釉陶器の碗底部（第 127 図 **659**）が出土した。

SD127（第 123 図）　2-2 区 SD126 の北側で検出した東西の溝である。延長は３mほどである。

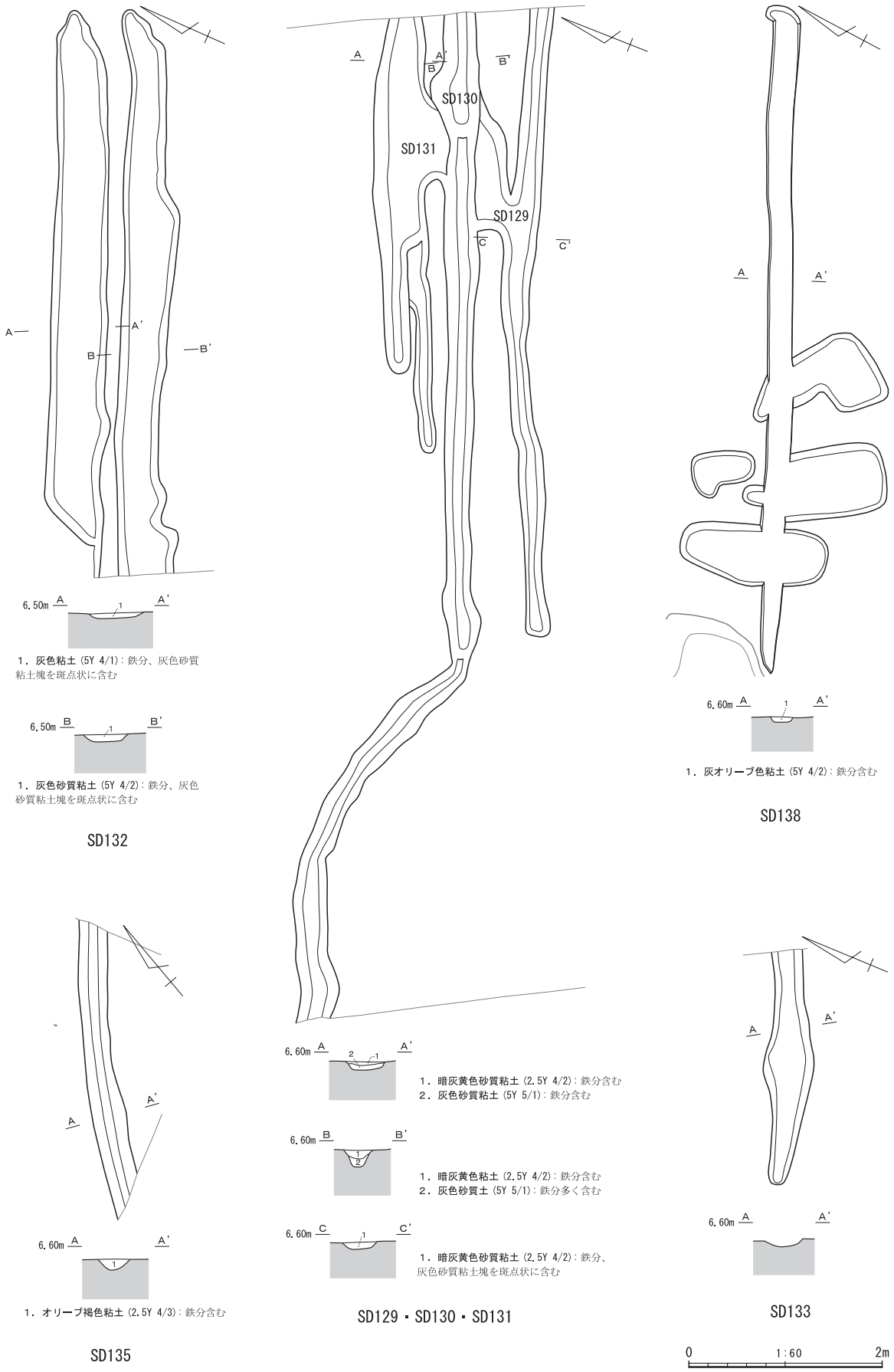
SD128（第 123 図）　2-2 区中央付近東寄りで検出した東西溝である。周辺には同じ方向性をもつ溝 SD137 や SD129 などがある。長さは４mほどある。

SD129（第 128 図）　2-2 区中央付近の東寄りで検出した東西方向の溝である。北側にある SD130 や SD131 と並行している。総延長は７m程ある。

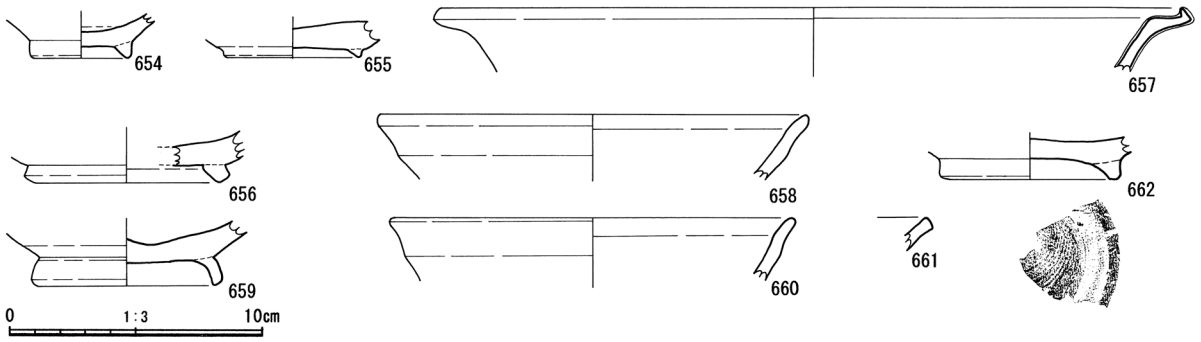
SD130（第 128 図）　2-2 区中央付近で東西に横断する溝である。途中まで南側位置する SD129 と並行しているが、西側は北西へ方向を変えて湾曲している。



第 127 図　SD110・111・115・119・120・122 出土遺物実測図



第 128 図　SD129・130・131・132・133・135・138 実測図



第 129 図　SD123・124・131・134 出土遺物実測図

SD131（第 128 図）　2-2 区中央で SD130 や SD129 の北側に並行している溝である。長さは５ｍほどある。溝は途中で枝分かれしている。覆土より土器の小片が出土している。第 129 図 660 は灰釉陶器碗の小片である。661 は灰釉陶器の瓶口縁部と思われる。小片のため器種が定かではない。

SD132（第 128 図）　2-2 区北半部の西寄りで２本並行する東西の溝である。Ｍ・Ｎ -23 グリッドに位置する。延長は６ｍほどで浅い。

SD133（第 128 図）　2-2 区北半部東寄り、Ｎ -23 グリッド内で検出した東西溝である。SD132 の東側に位置し並行している。長さは 2.5 ｍ程である。

SD134（第 125 図）　2-3 区北半部の西壁寄りを南北に伸びる溝である。不定形で枝分かれしていることから、人為的に掘削された溝ではなく自然流路ではないかと思われる。延長は 18 ｍを超える。覆土からは土器が出土した。第 129 図 658 は山茶碗の碗口縁部の小片である。662 は山茶碗の碗底部片である。底部には回転糸切り痕が残る。

SD135（第 128 図）　2-2 区の南東隅を横切る溝である。溝の端部はいずれも調査区外へと出ているため全体の形状や方向性はわからない。確認できた延長は 1.2 ｍ、幅は 30 ㎝程度である。

SD136（第 123 図）　2-2 区南半部東寄りで検出した。SD126 の南側に位置し並行している。延長は 1.2 ｍ、幅は 20㎝ ほどある。

SD137（第 123 図）　2-2 区中央付近東寄りで検出した溝である。SD128 の北側に位置する溝で、SD128 と並行している。長さは２ｍほどで、幅は 20㎝ である。

SD138（第 128 図）　2-3 区の中央付近で検出した溝である。西は SD134 に接する。溝は土坑 SK120・123・124 と切り合っている。延長は約７ｍ、幅は 20㎝ 程度である。

（５）自然流路

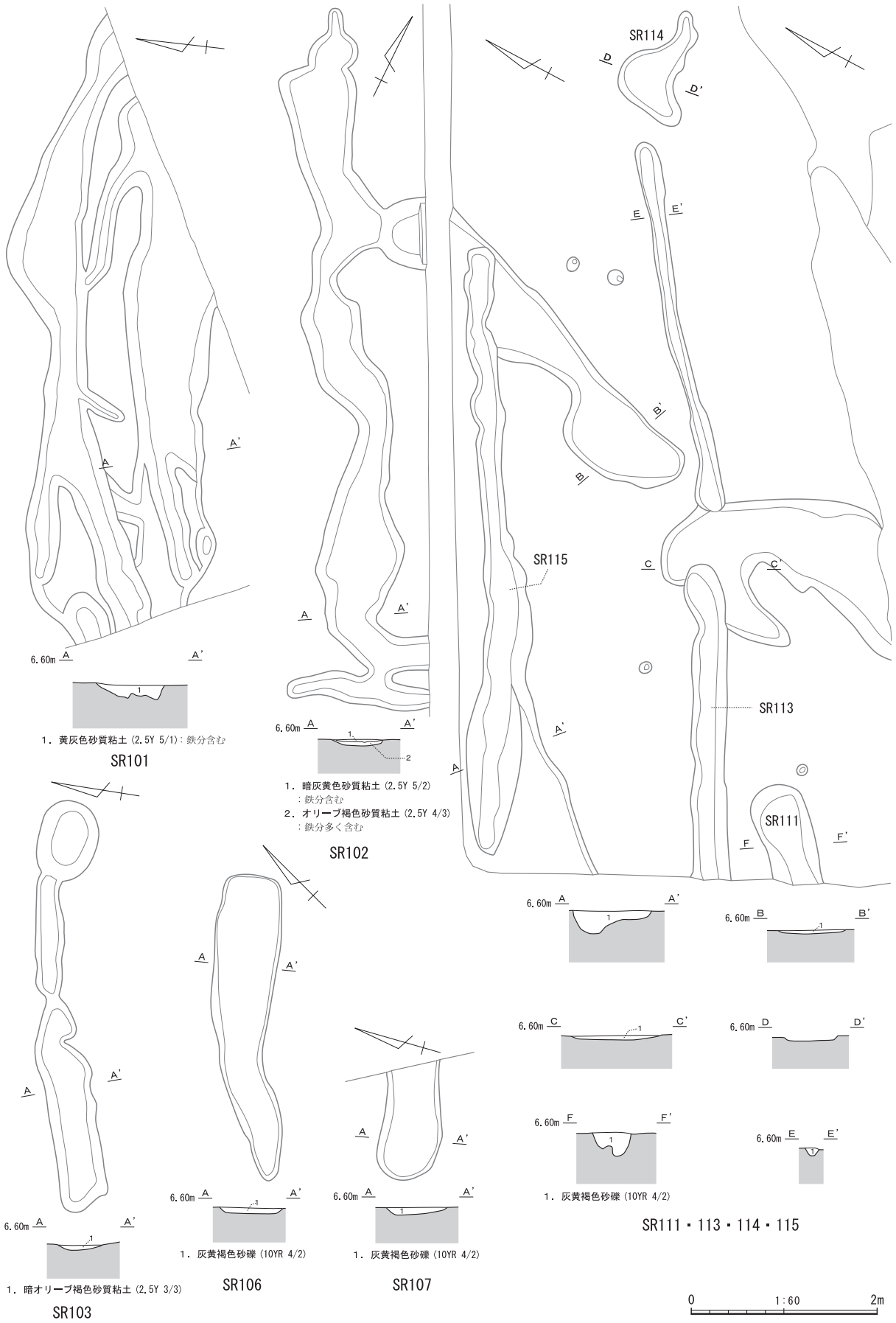
自然流路は 2-2 区以北で検出されている。2-2 区では SR101・102・103、2-3 区では SR104・105、3-1 区では SR106 ～ 115 がある。

SR101（第 130 図）　2-2 区南西端に位置する東西方向の自然流路である。不定形で２条に分かれている。覆土は黄灰色砂質粘土で、水流は東から西へ流れる。延長は 6.7 ｍほどある。流路内覆土より山茶碗の碗底部（第 133 図 663）が出土している。

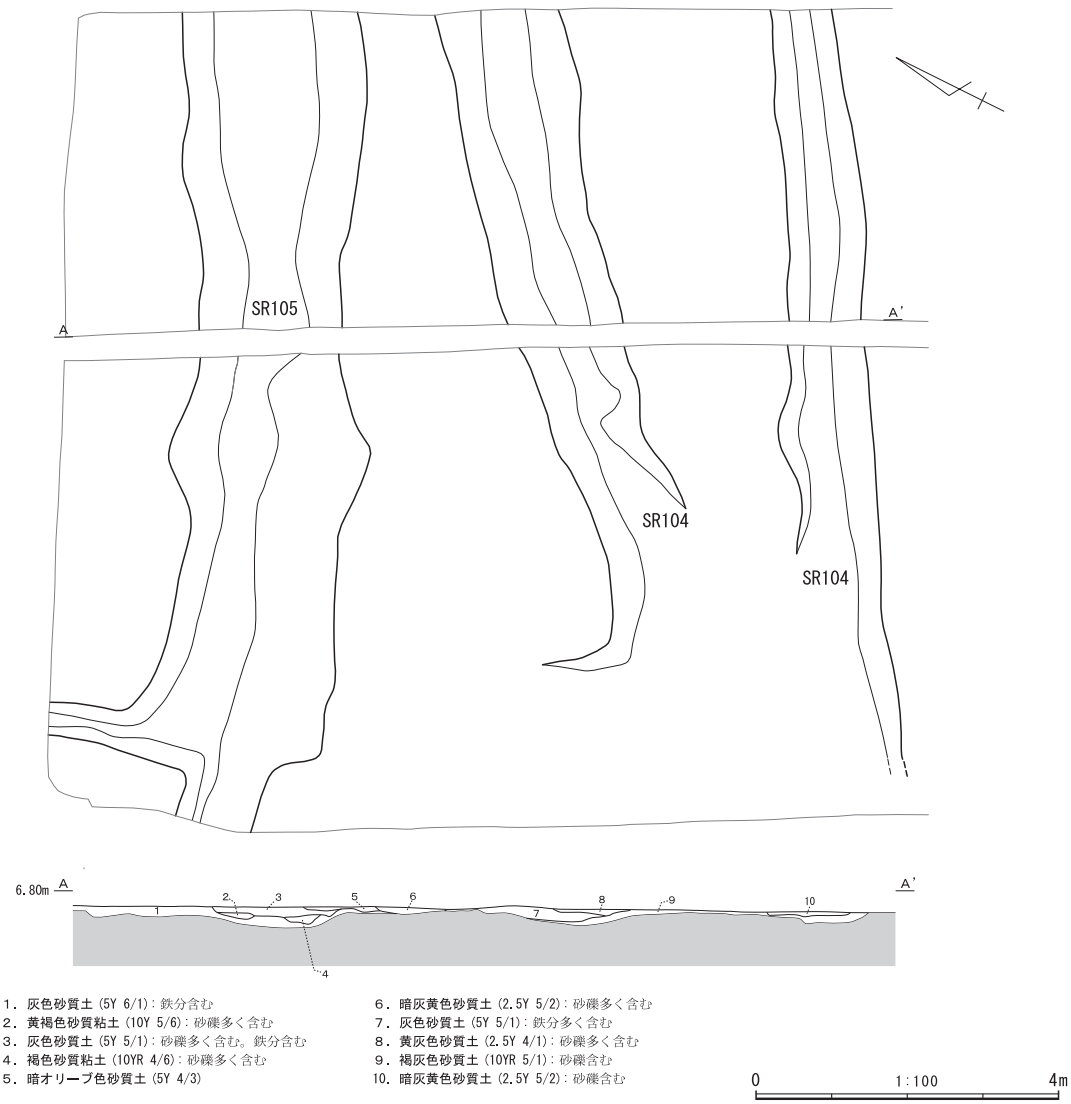
SR102（第 130 図）　2-2 区の南半部、東壁沿いにある。全体形は不定形で、枝分かれしている浅い流路である。南から北方向へ標高値が下がっている。覆土より出土した山茶碗の碗底部（第 133 図 664）は高台部分が剥がれ落ちている。内面には重ね焼痕がある。

SR103（第 130 図）　2-2 区の南半部中央付近で検出した不定形な流路である。北側には溝 SD126 があり、東側は SR102 に近接している。長さは 4.5 ｍ、浅い流路である。

SR104（第 131 図）　2-3 区の北半部で検出した自然流路である。東西方向の流れが２条あり、SR105



第 130 図　SR101・102・103・106・107・111・113・114・115 実測図



第 131 図　SR104・105 実測図

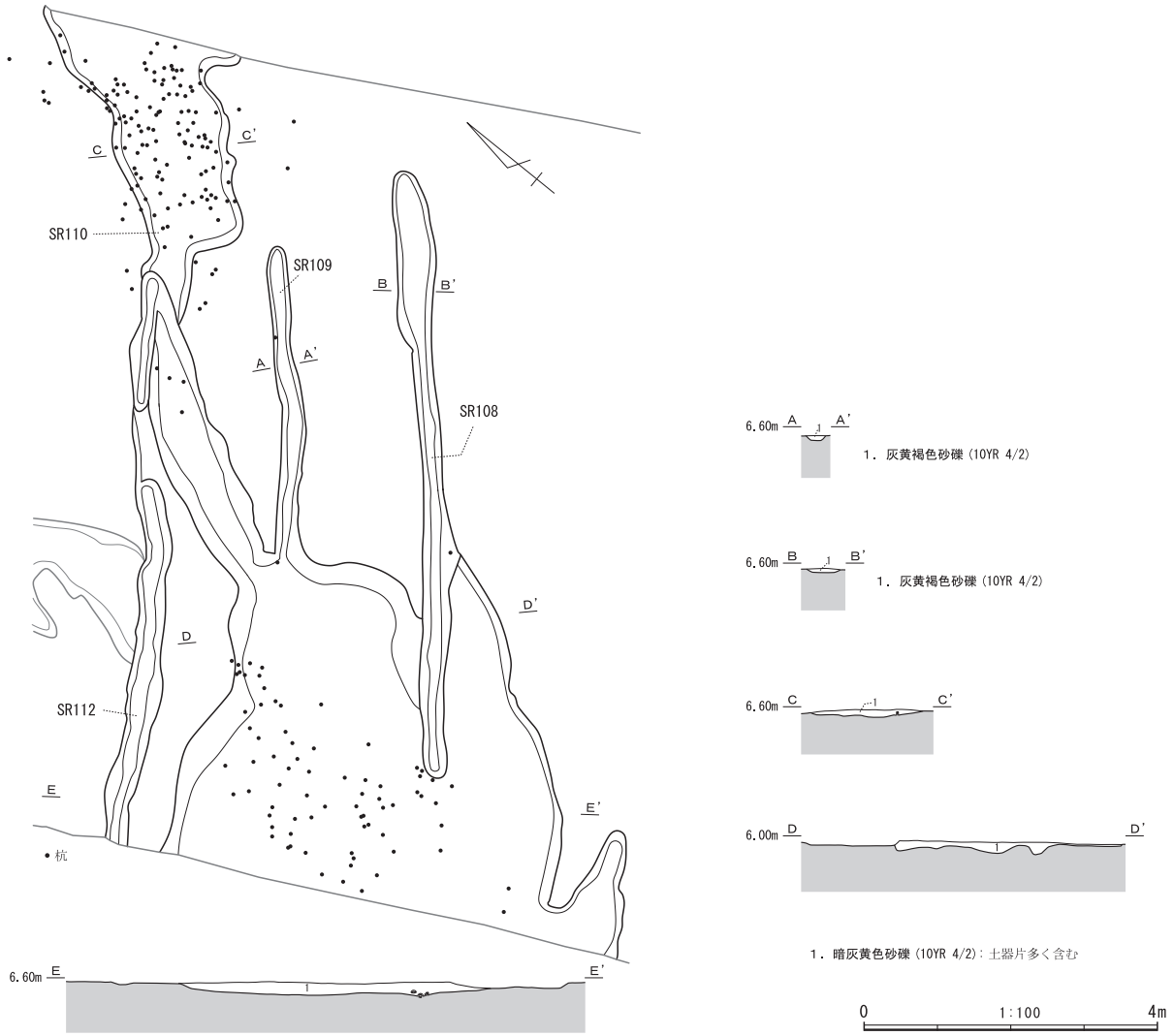
とも並行している。覆土は砂礫を含む砂質土で、洪水等の原因で河川より溢れた水流の痕跡である可能性が高い。覆土より出土した土器は第 133 図 **665** ～ **667** に図示した。**665** は奈良時代の須恵器の高台坏である。**666** は灰釉陶器で水瓶の肩～頸部破片と思われる。肩には降灰釉が付着している。**667** は山茶碗の碗底部破片で、内碗面には漆が付着している。

SR105（第 131 図）　2-3 区で SR104 の北側に並行する自然流路である。同じく覆土には砂礫を含む粘土層が堆積している。洪水等の氾濫流だった可能性がある。

SR106（第 130 図）　3-1 区南東端で検出した。1.3 ｍの長さで不定形な流路である。覆土は砂礫で、氾濫流の一部と思われる。

SR107（第 130 図）　3-1 区南東壁沿いに検出した流路跡である。東側は調査区外へ出ており、覆土は砂礫層である。

SR108（第 132 図）　3-1 区中央部で検出した自然流路である。西側半分ほどが SR110 にかかっているが SR108 のほうが後の年代である。覆土は砂礫層であることから、2-3 区で検出した SR104 や SR105 と同じような洪水等の氾濫流であろう。覆土内からは須恵器の窯で見られる熔着資料が出ている（第 133 図 **696**）。下はタタキ目を持つ甕、上は坏蓋または坏身の破片で、さらに壁の一部が落ちて癒着している。



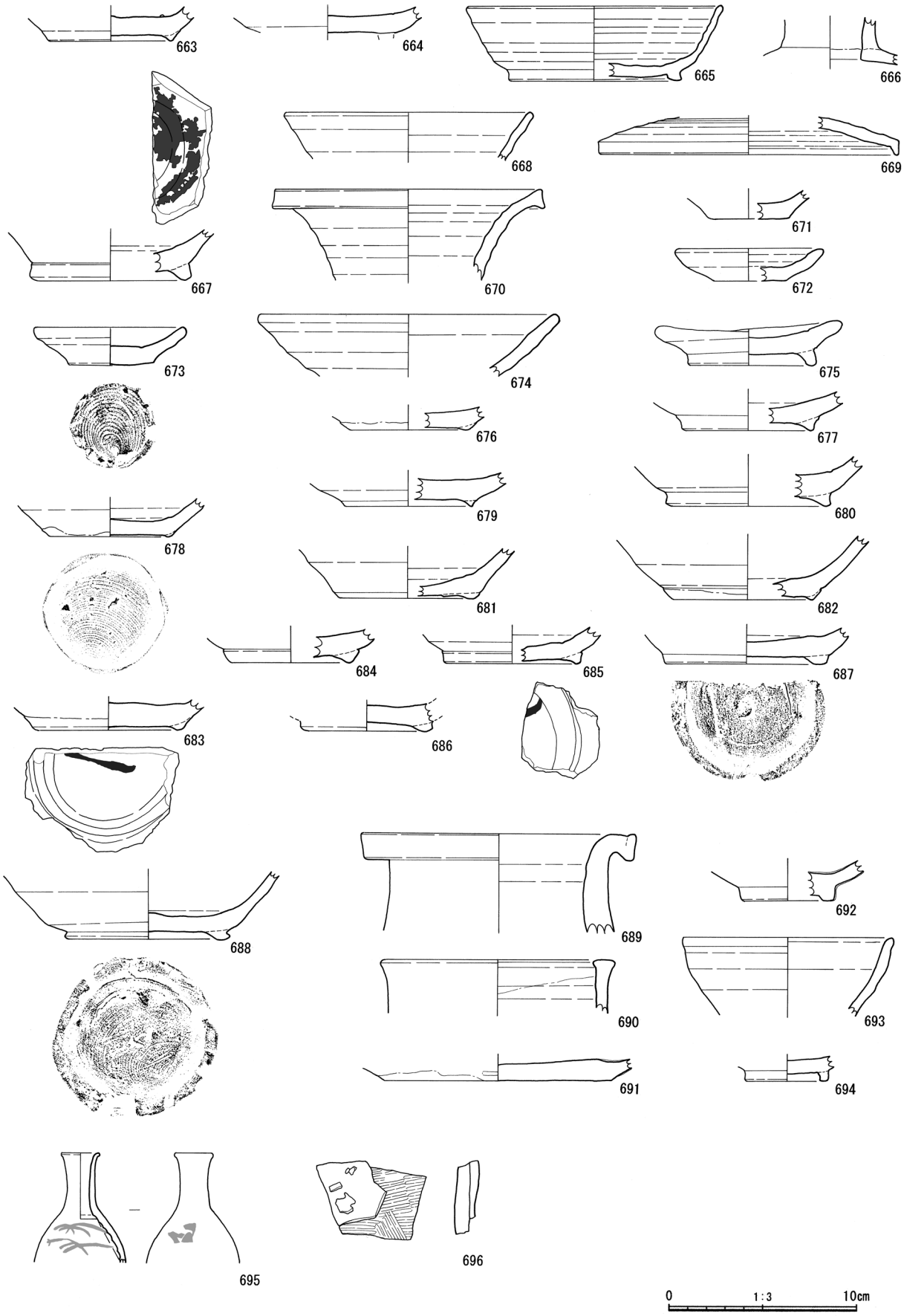
第 132 図　SR108・109・110・112 実測図

当遺跡では珍しい資料であるが、上流部から砂礫とともに流されてきたのであろう。

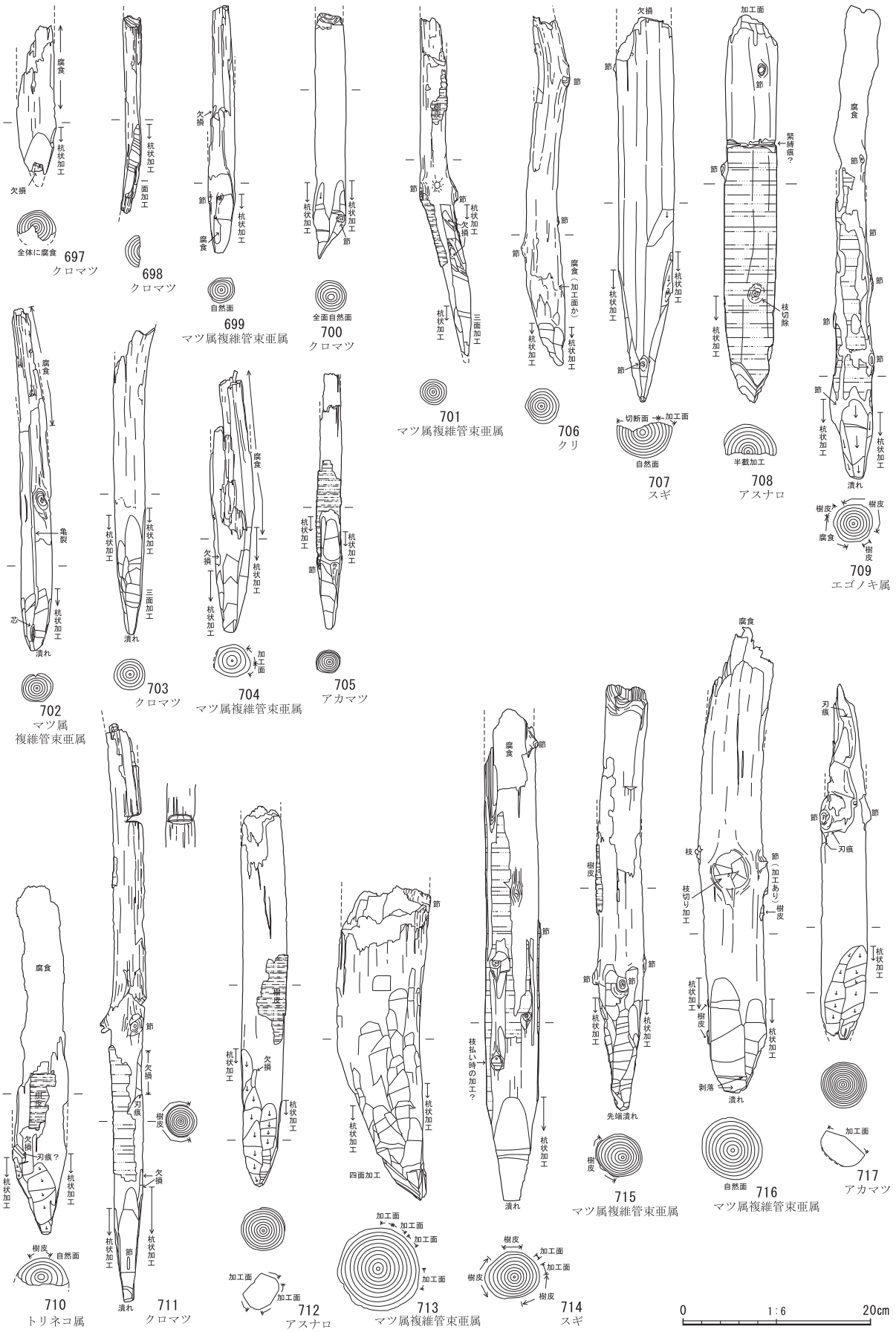
SR109（第 132 図）　3-1 区の SR108 の北側に並行する流路である。西側端は SR110 に繋がっている。覆土は砂礫層である。

SR110（第 132 ～ 135･137 図､図版 37）　調査区を東西に横断する自然流路で 3-1 区中央部に位置する。水流は北東から南西方向に流れる。流路は下流に向かって幅広くなるが、深いところでも 20cm 程度である。覆土は暗灰黄色砂礫層で、土器片を多く含む。土器には磁器があり、瓦も出土していることから江戸時代中期以降の時期である可能性が高い。このほか杭状の木製品や 10 ～ 20 cm大の礫を含む。杭は直径５cm以下の丸杭を乱打してあるが、一部 10 cm程の丸木や板材を使用している。杭は深度が異なり時期差が考えられるものの、どのような目的があったかは不明確である。出土状況については第 137 図に図示している。

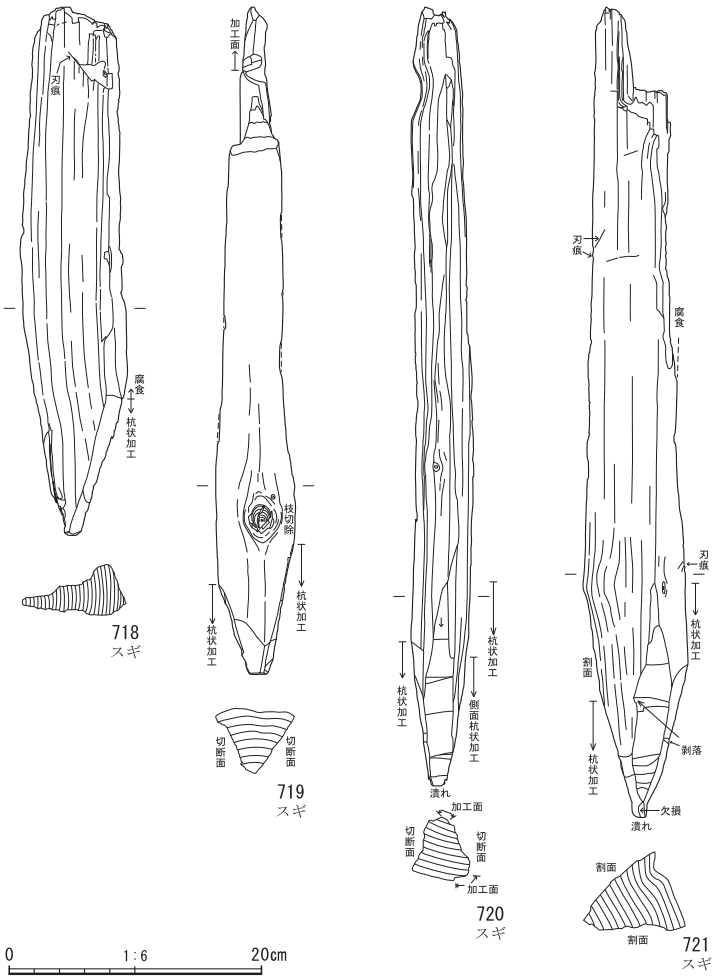
SR110 の覆土内より出土した土器は第 133 図 670 ～ 695 である。670 は灰釉陶器の壷口縁部である。671・672・673 は山茶碗の小皿で東遠江系の所産であろう。674 は東遠江系の山茶碗の碗口縁部である。675 も同じく東遠江系の山茶碗の碗高台部分だが、再加工されたものか、体部の割れ口が摩滅している。676 ～ 680 は東遠江系の山茶碗、碗高台破片である。676・678 は低い高台で糸切り痕がある。681・682 は尾張系の山茶碗で、底部には厚みがある。683 ～ 688 は渥美・湖西の山茶碗、碗高台の破片であ



第 133 図　SR101・102・103・104・110・111・113・118 出土遺物実測図



第 134 図　SR110 出土遺物実測図１



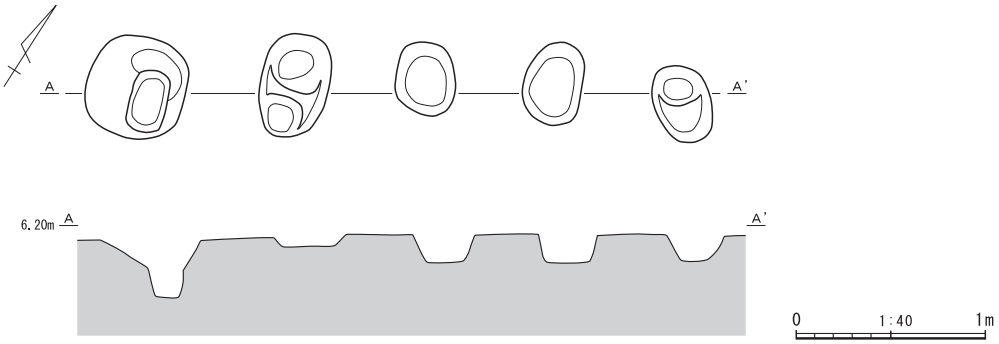
第 135 図　SR110 出土遺物実測図２

る。683･685 は高台底面に墨書がある。688 は内碗面に降灰釉がある。底部は糸切り痕がある。689 は常滑産の壷口縁部破片である。口縁は大きく折り返され､内外面には釉薬が付着している。

690 は志戸呂焼の筒形香炉の口縁部片である。外面と内面の一部が施釉されている。691 は古瀬戸の皿である。底部以外は施釉されている。692 は龍泉窯系の青磁碗である。高台部分の破片で施釉されている。693 は瀬戸・美濃産の天目茶碗である。口径は 11.3 ㎝ほどある。694 は瀬戸・美濃産の碗高台部片である。内面は施釉されている。695 は肥前産の染付けのある小瓶である。土器は時期幅が大きいものの江戸時代中期まで下る時期のものを含む。破片が多く、砂礫とともに上流部から流されてきた可能性がある。

SR110 の杭は第 134・135 図に掲載した 697 ～ 721 である。杭の下端部は先端を尖らせた加工を施しているが、上部の地表面より上に出ていた部分の腐食は著しく進んでいる。697 ～ 717 は自然の丸木を利用して作られた杭である。径は大半が５㎝前後であるが、なかには 10 ㎝に近いものもある。また丸木の小枝を払い落としただけで一部に樹皮が残っている。718 ～ 721 はスギのミカン割り材を杭に加工している。ある程度の径をもつが表面には加工された痕はなく、自然木から割り出されたものであろう。杭の樹種はアカマツ、クロマツ、マツ属複維管束亜属が半数以上を占めている。ついでスギ、アスナロ、クリ、エゴノキ属、トネリコ属がある。樹種を見る限りでは集落の近くにある雑木を使っている様相が見て取れる。

SR111（第 130 図）　3-1 区北西壁寄りで検出した自然流路である。確認できた長さは１ｍほどで西側は調査区外に出てしまう。覆土は砂礫層である。土器片や燻瓦片を含み、上部に樹皮を含む。覆土内よ



第 136 図　SA101 実測図

り須恵器の坏身小片（第 133 図 668）が出土した。668 は坏身口縁部小片であることから口径は正確ではないが、13.3 ㎝ほどある。

SR112(第 132 図)　3-1 区北半部で SR115 と SR110 に挟まれたところに位置する。SR113 とは切り合っており、SR112 のほうが古い時期になる。流れは南北方向で、形状は不定形である。覆土は砂礫層である。

SR113（第 132 図）　3-1 区北西部で東西方向の流路である。SR111 や SR115 と並行している。途中途切れているが、全長で８ｍある。砂礫の覆土より須恵器の坏蓋（第 133 図 669）の小片が出土した。669 は復元径が 16.2 ㎝である。

SR114（第 130 図）　3-1 区、SR113 の東側に位置する。形状は不定形をしており、覆土は砂礫である。洪水層の一部であろう。

SR115（第 130 図）　3-1 区北端で検出した東西方向の自然流路である。全長は約 6.8 ｍ、最大幅は西側で１ｍほどあり、直線状の形状をしている。覆土は灰黄褐色砂礫層である。SR108 や SR110・SR111・SR113 と並行している。

（６）杭列

SA101(第 136 図)　杭列は１区中央部のＱ -30 グリッド内に位置している。ほぼ東西方向に列を成す。杭列の穴は５箇所ある。穴の径は 32 ～ 55 ㎝で、深いもので 29 ㎝、浅いもので６㎝程度の深度をもつ。元々は木杭が存在したと思われるが抜き去られており覆土内には残っていない。また土器等も出土してない。この列に対応する穴は見られなかったことから、現地調査では杭列と判断した。

（７）その他遺構

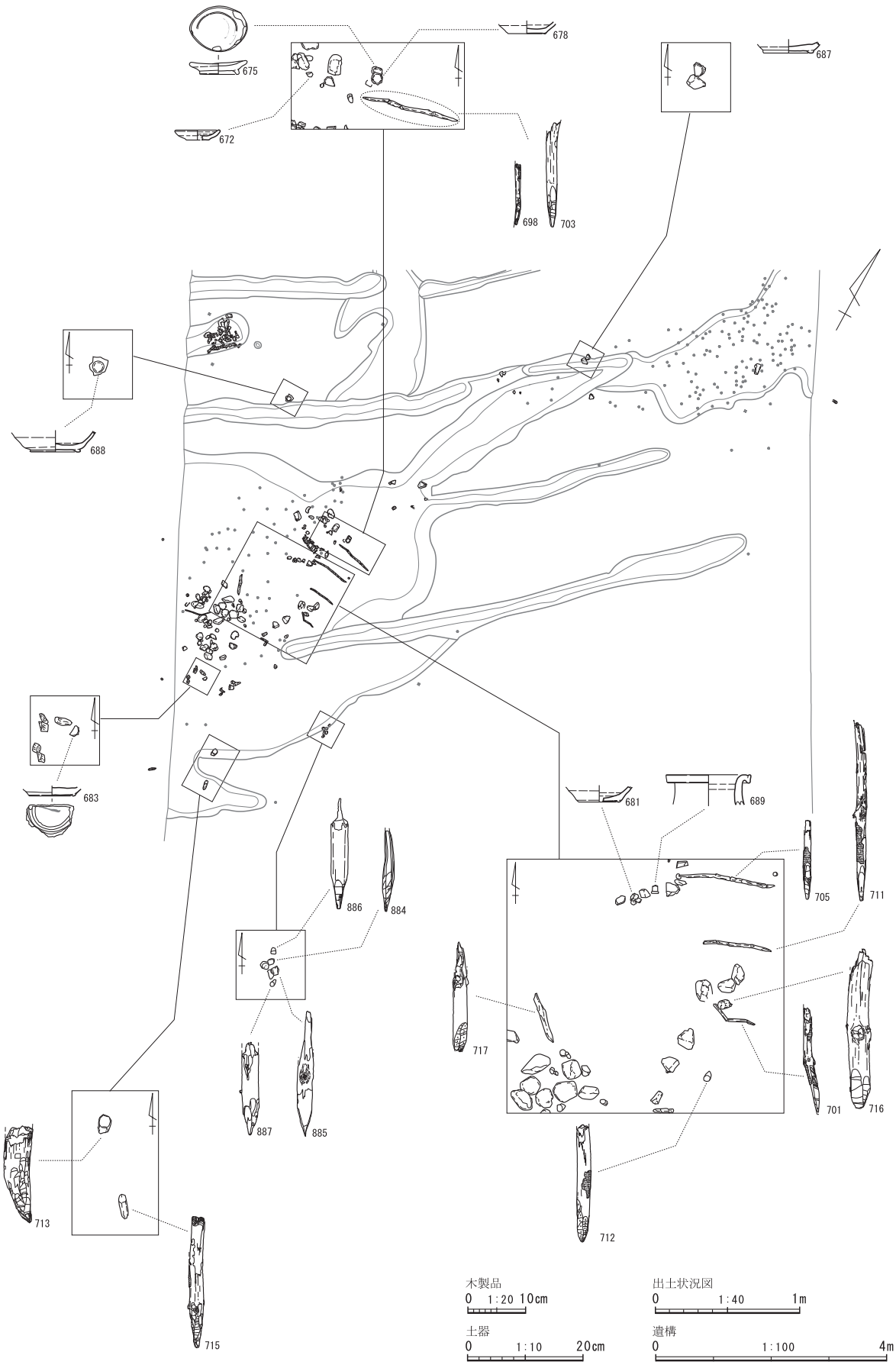
その他遺構は１区で検出した掘立柱建物の柱穴と思われる遺構がある。柱穴は列をなさず単独で見つかっているが、このうち遺物が出土した柱穴について報告する。柱穴 SP65 は１区Ｒ -30 グリッドで検出した。覆土内より灰釉陶器の碗破片が出土した（第 138 図 722)。722 は碗の底部で接地面が細く尖った形状の高台を持つ。同じく１区の柱穴 SP69 より出土した 723 も灰釉陶器の碗である。口縁から底部の一部まで残っており、復元径は 16.3 ㎝ほどある。１区の柱穴 SP78 覆土内より土錘が１点見つかっている（724)。土錘は土師質で、長さ 3.6 ㎝、最大径は 1.45 ㎝、孔径は 0.4 ㎝の完形品である。874 と胎土が類似する。

２　包含層出土の遺物

第１面包含層より出土した土器・土製品・金属製品・木製品は第 139 ～ 145 図にまとめた。

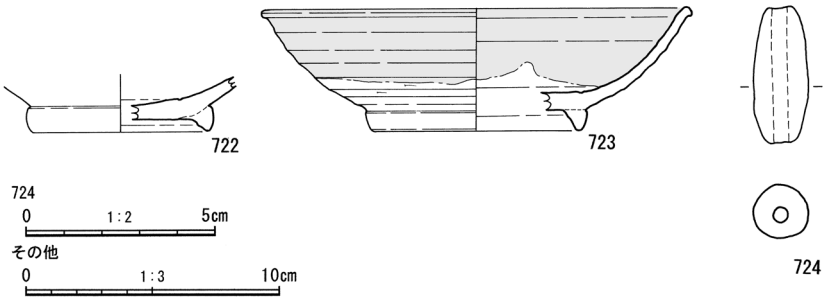
１区の包含層で出土した土器等は第 139 図 725 ～ 751 である。725 は内面が黒い、いわゆる内黒と呼ばれる土師器の坏である。底部から口縁部にかけて丸みのある形状をもつ。復元口径は 11 ㎝ほどある。726 は台付甕の脚台部分で、高さは 4.9 ㎝、底径は 7.8 ㎝である。胎土には微小礫が混じる。727・728 は土師器の「コの字」甕である。727 の口唇部は上部で強く外側へ開く。精製された粘土には微量に雲母が混じる。復元口径は 23.8 ㎝ほどある。728 は外面にハケ調整、内面は指ナデ押さえの痕跡がある。729 は口径が 13 ㎝ほどの土師器の坏である。器高は 3.3 ㎝で、体部の形状は箱型に近く、底部は平底である。730 はほぼ全体が残る内黒の土師器坏である。底部と体部の切り替わりが明瞭で、底面は平坦になっている。内面にはミガキが放射状に入っている。731 ～ 733 は蓋で、いずれも摘み部分である。731 は灰釉陶器の壷蓋であろう。小さな摘みの上部は尖っておらず扁平な形である。上面には緑釉が付着している。

732 は須恵器の坏蓋で擬宝珠状の摘みは高さがある。733 は灰釉陶器の坏蓋で、小型で比較的扁平な擬宝珠状の摘みを持つ。上面は緑色の釉薬が一面にかかっている。734 は須恵器の箱坏である。復元口径は 16.6 ㎝ほどで、器高は 6.6 ㎝、底部はヘラ削りで整形した平底になっている。底部にはわずかに



第 137 図　流路内遺物出土状況図

墨書の痕跡が残っているが解読できない。735 は灰釉陶器の長頸壷の頸部片である。内外面とも整形時のノタ目が明瞭である。表面には降灰釉がかかっている。736 も灰釉陶器の壷口縁部である。口径部の復元径は 18 ㎝を測ることから大型の壷であろう。内外面には降灰釉がある。737 は灰釉陶器の大型甕の口縁部片である。小片のため口径は復元不可能である。表面は黄土刷毛塗りが施されている。738 は須恵器の大甕である。破片は頸部の一部である。外面には刷毛目、内面には当て具の痕跡が残る。739 も須恵器の大甕の底部片である。底部は平底となっており、径は 13.6 ㎝ほどある。740 は灰釉陶器の壷または瓶の蓋である。復元径は 11.4 ㎝。表面に降灰釉が付着している。741 は灰釉陶器の壷口縁部破片である。復元口径は 12.6 ㎝ほどである。頸は短く、繋ぎ目に入ったヒビ割れに降灰釉が入り込んでいる。742 は灰釉陶器の水注の口縁部である。口径は 7.5 ㎝に復元できる。内外面には降灰釉がある。743 は水中または水瓶の把手と思われる小片である。口縁から内面にかけて降灰釉が付着している。744 は灰釉陶器の壷底部片である。底部には太く幅の広い高台がある。内面には降灰釉が一面にある。745 は山茶碗の小皿である。ほぼ完形で口径は 7.2 ㎝、底径は 4.8 ㎝である。

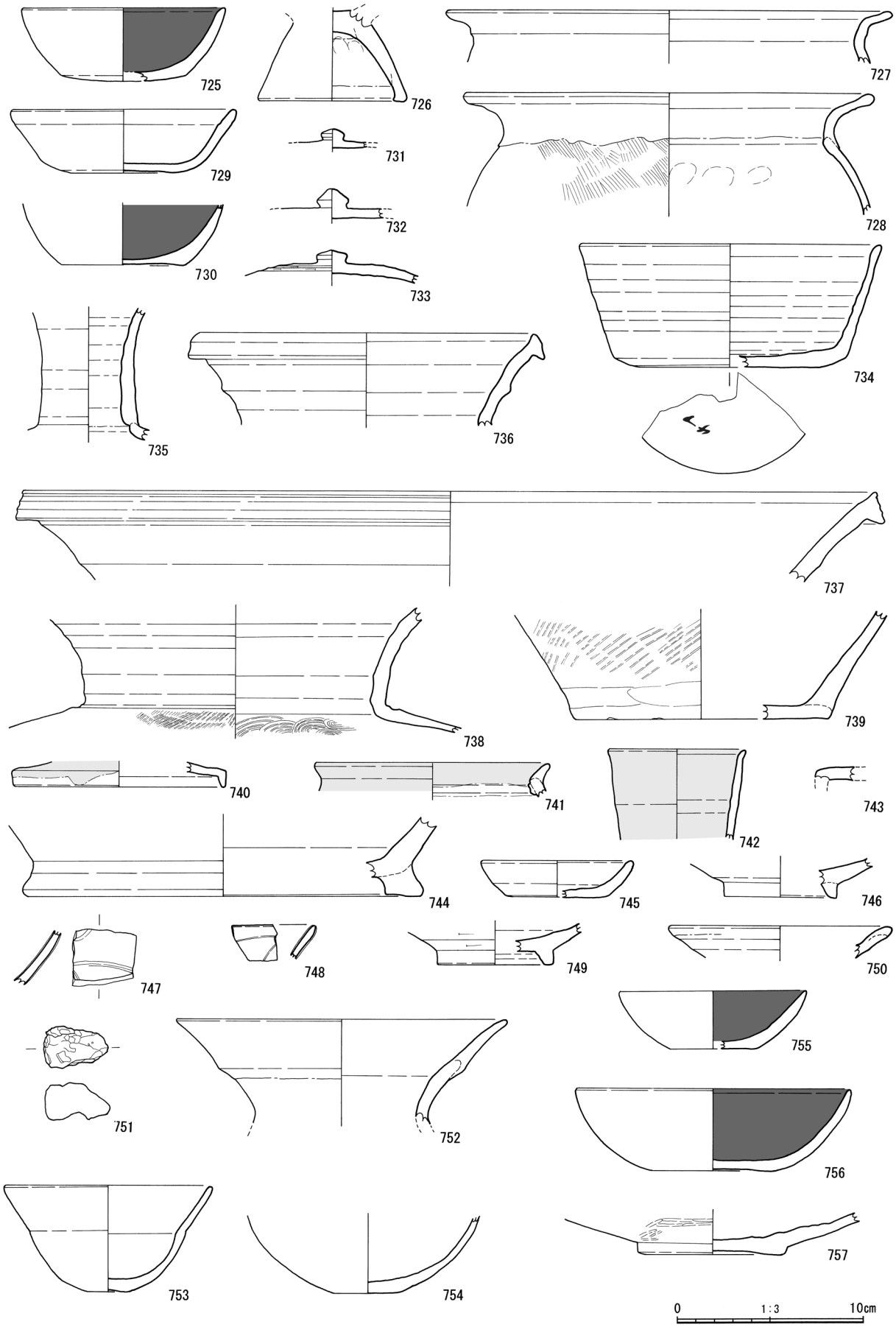


第 138 図　SP65・69・78 出土遺物実測図

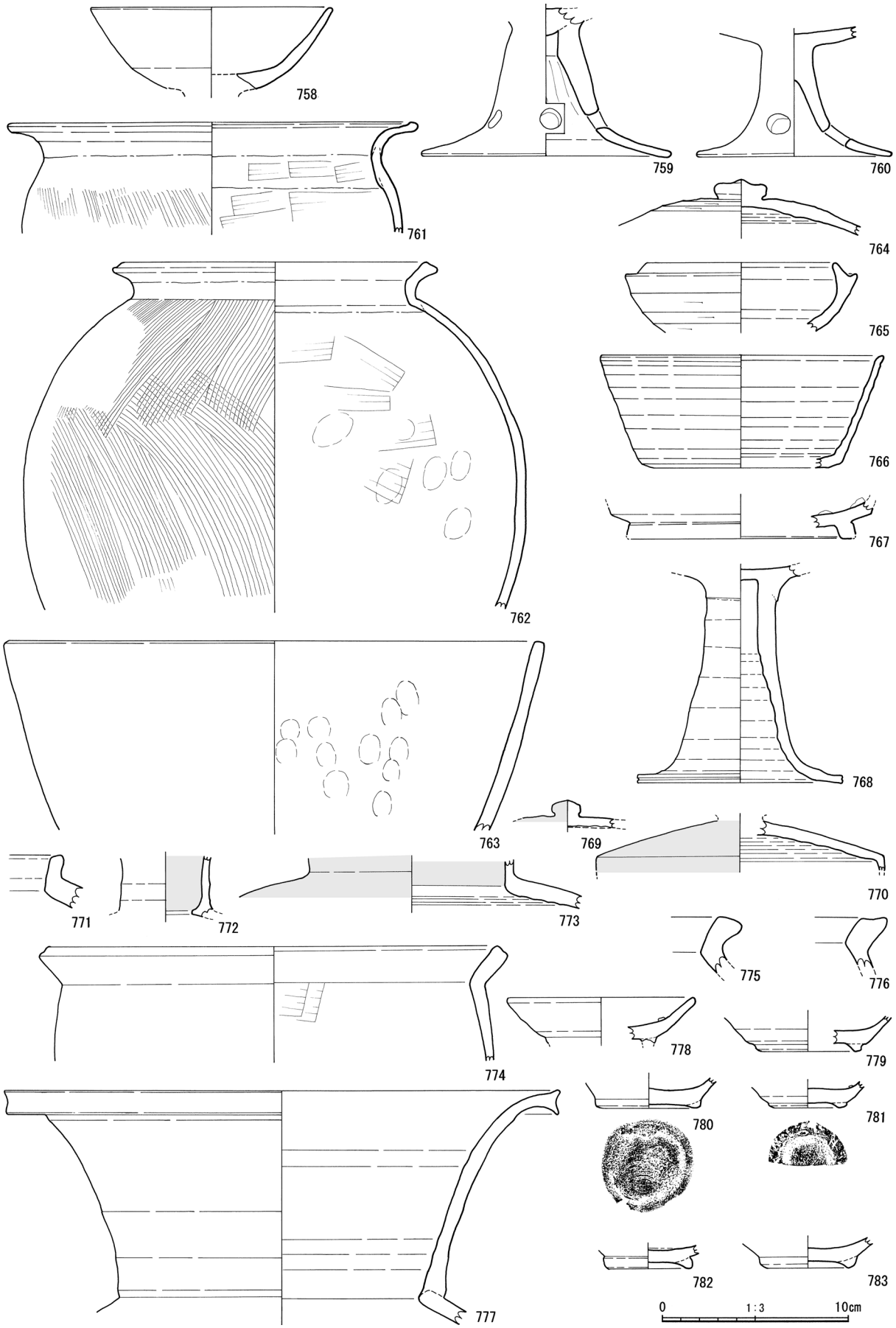
746 は白磁の碗小片である。体部と高台の一部が残っている。外面体部は施釉されている。747 は貿易陶磁器の小片で体部内面に紋様が描かれている。紋様はヘラ描きされている。748 は青磁碗の口縁部片である。小片のため口径は測れない。749 は瀬戸美濃と思われる碗である。内面には乳白色の施釉がある。750 は瀬戸・美濃の縁釉小皿口縁部片である。751 は鉄滓である。年代測定の結果、中世以降の年代であることがわかっている。

2-1 区の第１面包含層からは第 139 図 752 ～第 141 図 787 が出土した。752 は土師器の壷口縁部である。復元口径は約 19 ㎝、表面は摩滅しているため調整痕は不明である。753 は土師器の小型坩である。口唇部が破損しているものの口径は約 11.7 ㎝に復元が可能であろう。器高は 5.7 ㎝と小型で、底部は丸い平底である。754 は土師器の小型鉢である。口唇部を欠く。底部は平底である。755・756 は土師器の坏である。いずれも内面は黒色となっており内黒であろう。755 は口径が 10 ㎝、756 は 15㎝を測る。表面の調整痕は風化して不明瞭となっている。757 は土師器の壷底部である。底部は平底で木葉痕が残っている。底部径は 7.5 ㎝である。758 ～ 760 は土師器の高坏である。758 は坏部片で口径は 12.9 ㎝に復元できる。759 は高坏の脚部で円形孔が４箇所開いている。脚部の上部がわずかに膨らみを持ち、下方で大きく外側へ広がる。760 は高坏の脚部と坏部の一部が残っている。脚部の径は細身で、円形孔は３箇所であろう。761・762 は土師器の甕である。761 は「コの字」甕で 23.3 ㎝程の口径がある。煤の付着はみられない。762 は宇田甕の２類に属するもので、口径は 17.4 ㎝である。胴部には斜め方向のハケ調整痕､内面は指ナデ痕がある。頸部はハケ目をナデ消してある。外面一面に煤が付着している。763 は土師器の鉢か甑と思われる破片である。口径は 29 ㎝ほどある。口唇部の形状から甑の可能性が高い。

764 は須恵器の坏蓋である。上面はヘラ削りされ、中央には扁平で大きめな擬宝珠状の摘みを持つ。765 は須恵器の坏身である。底部は欠損しているが口径は 10.0 ㎝に復元できる小型の坏である。年代は古墳時代後期の６世紀末に属するであろう。766 は須恵器の箱坏である。高台はなく平底である。復元口径は 15.0 ㎝、器高は残存部で 6.0 ㎝を測る。767 は灰釉陶器の碗の底部小片である。768 は須恵



第 139 図　第１面包含層出土遺物実測図１



第 140 図　第１面包含層出土遺物実測図２

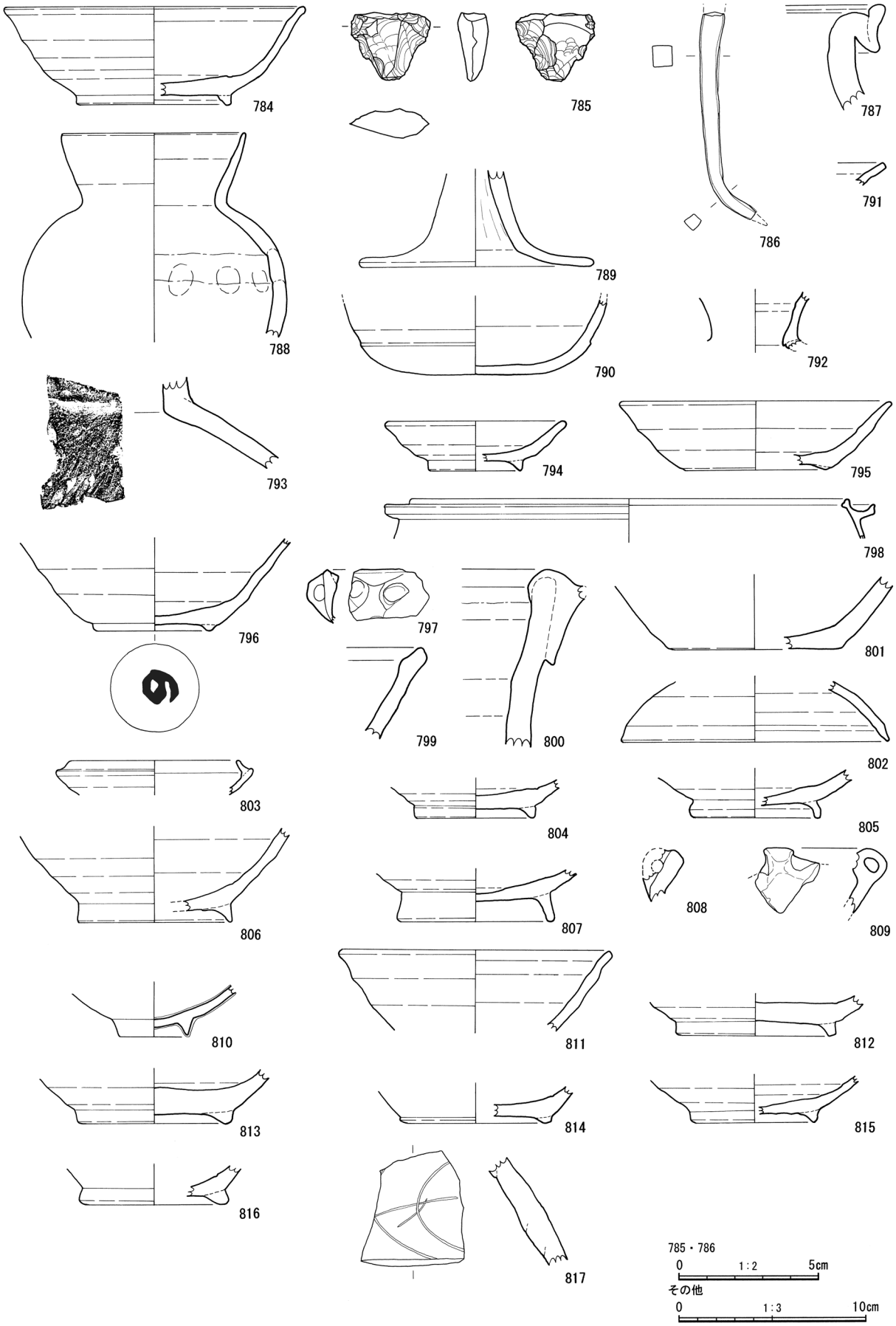
器の高坏脚部である。底径は 11.0 ㎝、脚部高は 11.6 ㎝ほどある。769・770 は擬宝珠状の摘みを有する灰釉陶器の蓋である。769 はやや小振りな摘み部分の破片である。上面には緑色の釉薬がある。770 は灰釉陶器の壷蓋である。径は 15.5 ㎝ほどであったと思われる。上面は淡緑色の釉がかかり、摘みは欠損している。771 は灰釉陶器の短頸壷口縁部片である。小片のため口径は復元できなかった。頸部から肩部にかけて緑色の釉が掛かっている。772 は灰釉陶器の水注口縁部かの破片か。内面には降灰釉が付着している。773 も灰釉陶器の短頸壷である。口唇部は欠けている。口縁の内外面から、肩部にかけて降灰釉がある。774 は土師質の鍋で清郷甕と呼ばれるものである。口径は 24 ㎝ほどに復元できる。内面には板状工具によるナデがみられる。775・776 も清郷甕の口縁部小片である。いずれも小片で口径は復元できなかった。777 は須恵器の甕口縁部である。30 ㎝近い口径をもつことから大型の甕であろう。表面の一部に降灰釉がみられる。

778 は山茶碗の小皿である。内面には重ね焼きの付着物があり、その外側には降灰釉が付着している。高台は欠損している。779 は高台を持つ山茶碗の小碗である。780 は渥美・湖西産山茶碗の小碗である。底部見込みには糸切痕が見える。781 ～ 783 も同じく渥美･湖西産の山茶碗小碗である。胎土は乳白色で、高台は低く、底部見込みには糸切痕がある。781 の高台底には籾痕がある。783 の内面全体には降灰釉がある。784 は 1/2 程が残存している山茶碗の碗である。口径は 15.8 ㎝に復元できる。重ね焼きされ、内面には薄く降灰釉がある。高台内面と外面の一部に墨のような付着範囲がある。

785 は珪質粘板岩製の尖頭器基部である（図は 1/2 縮尺）。上部は破損している。786 は断面が方形の鉄製釘である（図は 1/2 縮尺）。上部と下端部が欠損している。下方は 45 度ほど折れ曲がっている。表面のすぐ下に空洞があるため脆い。787 は常滑産の甕口縁部である。口縁は折り返しの形状になっている。小片のため口径復元は不可能であった。

2-2 区包含層の出土品は第 141 図 788 ～ 800 である。788 は土師器の直口壷である。口縁～胴部までが残っている。口径は 9.6 ㎝である。789 は土師器の高坏脚部である。脚部は低く、孔はなく、底は径 12 ㎝程に広がる。790 は土師器だが須恵器の坏を模した「模倣坏」と呼ばれるものである。径は 13.5cm ほどある。791 は灰釉陶器の皿で、口縁部の小片である。792 は須恵器の壷頸部片である。793 は灰釉陶器の甕肩部だが、小片のため径は出せなかった。肩部にはタタキ目がある。内面はナデと頸部を繋いだときの指頭痕がある。794 ～ 796 は山茶碗である。794 は小碗で､口縁から高台まで残っている。795 は碗である。高台は低く潰れ、高台内側には糸切り痕がある。796 は渥美・湖西産の口縁部が欠けた碗である。高台は低く、籾圧痕がある。高台内面には「の」の字の墨書がある。797 は内耳鍋の小片である。798 は土師質の羽釜の口縁部である。復元口径は 23.6 ㎝を測る。14 ～ 15 世紀代のものであろう。799 は近世常滑産の鉢または擂鉢の小破片であろう。800 も近世常滑産の甕口縁部片である。口縁は折り返され厚みがある。

2-3 区包含層の出土品は第 141 図 801 ～ 818 である。801 は土師質の土器底部だが、器種は不明である。底部は平底で外面の一部に赤色顔料が付着している。802 は須恵器の坏蓋である。径は 14.2 ㎝で、天井部は欠損している。年代は古墳時代後期（６世紀末～７世紀初頭）に属する。803 は古墳時代後期（７世紀初頭）の須恵器の坏身である。復元口径は 8.8 ㎝と小振りである。804 ～ 807 は灰釉陶器の碗である。804 は底部に糸切り痕があり、高台を貼り付けている。805 の高台は接地面が細くなっている。806 は重ね焼き痕があり、高台も一部残っている。胎土から東遠系と思われる。807 は高台が高く、高台径も８㎝ほどある。胎土は乳白色である。808 は口縁が「くの字形」の内耳鍋で、内耳の部分は欠損している。809 は外耳鍋の耳部分の破片である。810 は貿易陶磁器の青磁碗で、底部はほぼ完全に残っている。底部径は 3.7 ㎝ある。畳付け以外は施釉されている。811 は山茶碗の碗で、体部のみが残っている。胎土から渥美・湖西産であろう。812 は山茶椀の底部全体が残っている破片で、内椀底面には墨の痕跡が



第 141 図　第１面包含層出土遺物実測図３

ある。硯として使われた転用硯であろう。813・814 も山茶碗の底部片である。厚みがあり胎土が白いことから渥美・湖西産と考えられる。814 は高台接地面にモミ痕がある。815 は薄手の作りだが山茶碗であろう。底部のみが残る。816 も渥美・湖西産の山茶碗で底部破片である。817 は渥美産の甕である。肩部分の破片であろう。先刻模様に降灰釉が付着している。窯壁の一部か黒い癒着物がある。

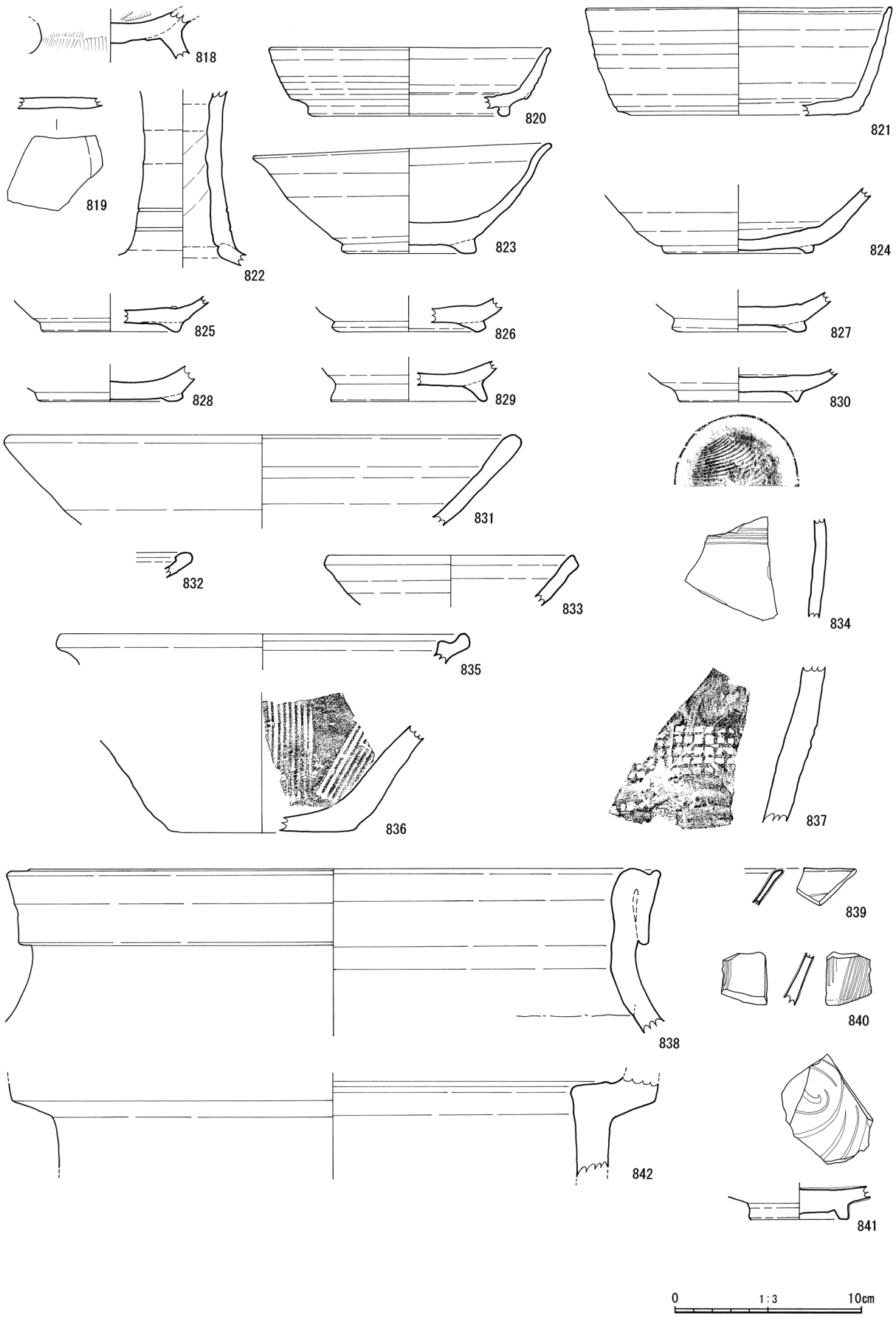
3-1 区包含層の出土品は第 142 図 818 ～ 841 である。818 は土師器の台付甕である。坏部と台部を別に作り繋ぎ合せてある部分だが、割れ口が磨滅している。胎土には微量の雲母が含まれている。819 は須恵器無台坏の底部か。小片のため器種が定かではなく、底部が墨書かどうかも不明瞭である。

820 は須恵器の高台坏である。復元口径は 15 ㎝、高台径 10.8 ㎝程になる。821 は須恵器の無台箱坏である。一部欠けているが、ほぼ全体形が復元できた。復元口径は 16.5 ㎝、器高は 5.8 ㎝である。822 は須恵器か灰釉陶器の長頸瓶の頸部片である。外面には降灰釉が一面に付着している。内面は絞り痕が顕著に見える。823 はほぼ完形の山茶碗の碗である。産地は渥美・湖西産であろう。口縁部に降灰釉薬が付着している。高台径は 7.2 ㎝と小さい。824 ～ 828 までは同じく渥美・湖西産の山茶碗である。824 は底部にモミ痕が付く。825 は底部にモミ痕のほか、内碗面には重ね焼き痕と、その外側に降灰釉が多く付着している。826 は内碗面に重ね焼き痕と降灰釉があり、高台が潰れている。827 は高台全体が残っている。828 も底部全体で高台が潰れている。829 は山茶碗の高台部破片である。高台は外側に張り出した形状である。830 は東遠江系の山茶碗で、高台の断面形は細く小さな三角形をしている。831 は尾張（知多）産の片口鉢、口縁部片である。胎土には 1.8 ㎝大の礫が混じっている。

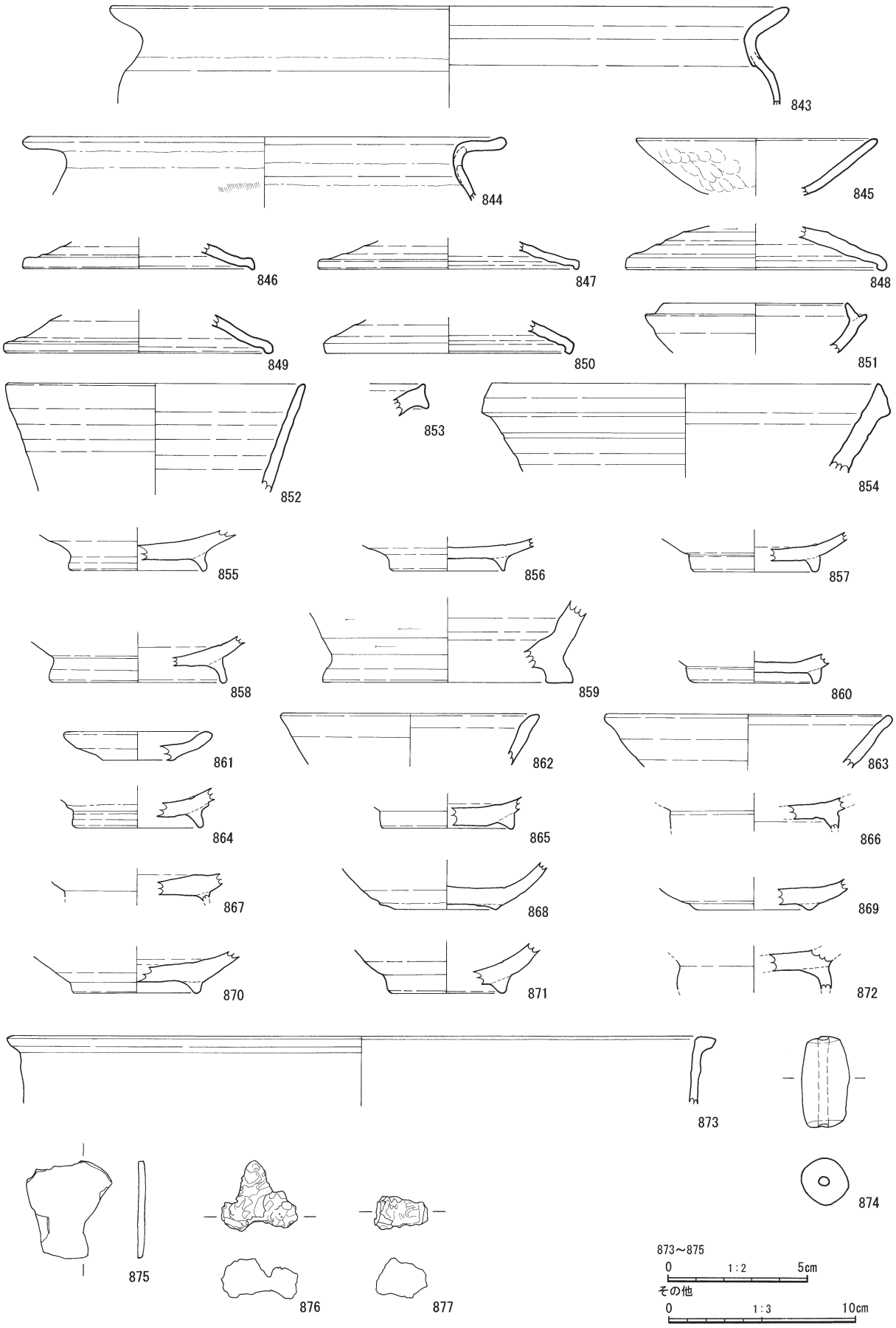
832 は古瀬戸の陶磁器片だが小片のため器種が特定できない。口縁を内面に折り返してあり、全体に淡黄緑色の釉薬が掛っている。833 も古瀬戸で小碗の口縁部か。834 は古瀬戸の三筋壷の小片である。破片上部に横位の筋がある。835 は瀬戸・美濃産の大窯期の擂鉢である。復元口径は 22.2 ㎝ほどと小振りである。836 も同産の擂鉢で底部片である。櫛目は８本ある。837 は渥美産の甕である。小片のため部位が不明であるが、外面には叩き目工具の痕跡がある。838 は常滑産の甕口縁部である。復元口径は 35 ㎝ほどあり大甕であろう。口縁は大きく外側に折り返されている。839 は貿易陶磁器の青磁碗である。厚みは 0.3 ㎝と薄い。840 も青磁で内外面に櫛描きが施されている。841 は青磁碗の底部片である。内面見込部分には曲線状のヘラ描き文がある。842 は常滑産の近世の大甕で、口縁部の破片である。表面はかなり風化している。

攪乱層から出土した金属製品と土製品（第 143 図 873 ～ 877）を掲載した。843・844 は土師器の甕口縁部である。いわゆる「くの字」甕と呼ばれるもので本遺跡内でも数多く出土している。843 は復元口径が 36 ㎝ほどある。844 の口縁部は強く外側へ開いている。頸部には細かいハケ調整痕がある。845 は土師器の坏か。口径は 13 ㎝程あり、灰釉陶器の模倣とも考えられる。

846 ～ 850 は須恵器の坏蓋である。846 は小片だが復元径は 13 ㎝程あったであろう。847 もほぼ同じ大きさの坏蓋である。848 は径が 14.1 ㎝を測る。849 も径が 14.2 ㎝ある。上面には重ね焼きの痕跡がある。850 の径は 13.5 ㎝と小振りである。851 は須恵器の坏身である。復元口径は 11.6 ㎝、古墳時代後期（７世紀代）の年代であろう。852 は須恵器の坏で、復元口径は 16 ㎝ほどある。底部は残っていない。853 は須恵器の壷口縁部である。小片のため径は不明である。854 も須恵器の広口壷口縁部で口径は 20 ㎝を超える。855 は灰釉陶器の碗で高台部分である。高台はやや外側へ開いている。856 は 830 とよく似ている東遠江系の灰釉陶器の碗である。高台の設置面は尖っている。857 も碗の底部だが灰釉陶器だろうか。内面の見込みには重ね焼き痕と降灰釉がある。858 は 855 と同様に外側に開いた高台を持つ碗の底部である。859 は灰釉陶器の壷底部である。高台は太く厚みをもっている。また緑色の降灰釉も高台に厚く付着している。860 は須恵器の高台付き碗の底部である。底径は 6.8cm ほどと小型である。861 ～ 872 は山茶碗である。861 は山茶碗の小皿で底部が欠損している。復元口径は 7.6 ㎝と小さい。



第 142 図　第１面包含層出土遺物実測図４



第 143 図　第１面包含層出土遺物実測図５

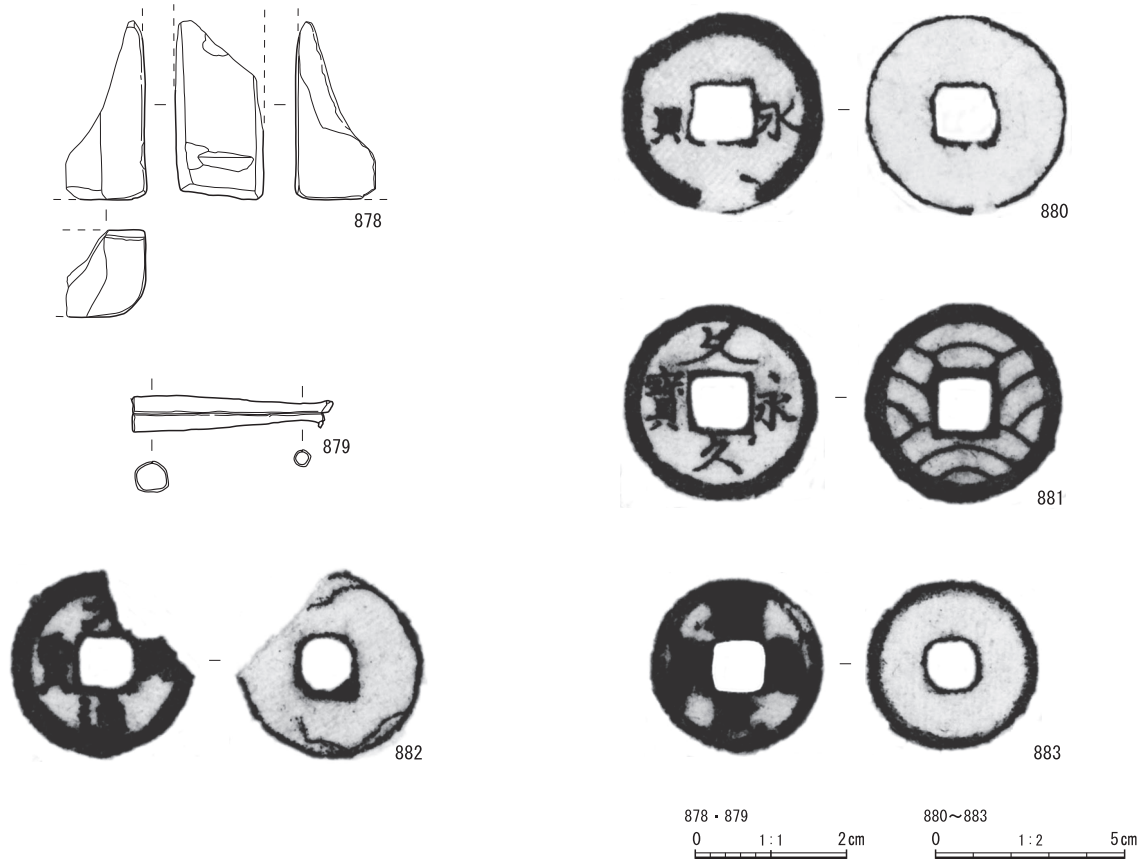
862・863 は口縁部破片である。862 は口径 14cm、863 は 15.5cm ほどある。口縁部には降灰釉が付着している。864 ～ 872 は山茶碗の底部片である。864 は東遠系の碗で高台はやや外側に開く。内面見込みには重ね焼き痕と降灰釉がある。865 は高台が小さく、底部には焼き膨れがあり厚みをもつ。866 は碗の高台破片である。復元底径は 8.1 cmほどある。867 は貼り付けた高台が小さく破損している。糸切りされた底部には墨書の痕跡が見えるが解読はできない。868 も東遠江系の碗で胴部は丸い膨らみをもち、高台は断面が三角形で小さい。高台は潰れている。869 も高台が粗雑に付けられている。外面には粘土の塊が付着したまま焼成されている。870 は東遠江系の碗である。器は全体に厚みをもっている。871 は高台の畳付きがやや内側へ入る。872 はしっかりとした高台でやや外側へ開く形状である。胎土には白い微粒子が多く含まれている。復元底径が９cmとやや大きめの碗である。

873 は鉄製鍋の口縁部で、復元口径は 25.3cm ほどある。口縁部は外側へ屈曲した形状である。

874 は土師質の土錘である。図は 1/2 縮尺で、全長は 3.3 cm、径は最大 1.7 cmを測る。875 は金属の薄い板で鋳造品と思われる。小片のため器種が不明である。876 は鉄滓である。分析の結果、年代は中世であった。877 は化学分析の結果、炉材片であることがわかった。炉材癒着物で中世以降の年代である。

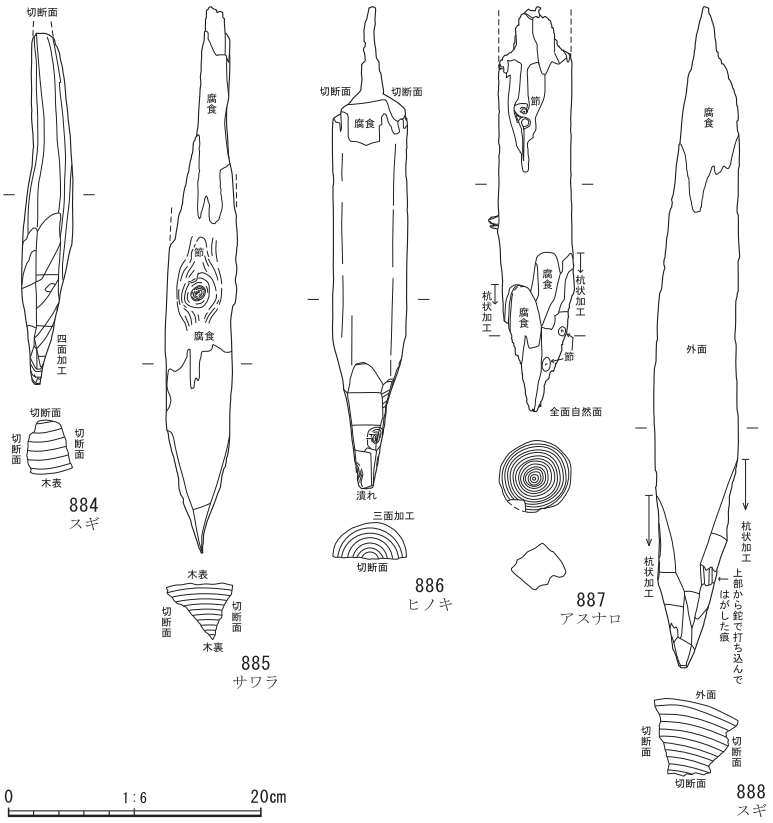
第 144 図 878・879 は 3-1 区より出土した石製品と金属製品である（1/2 縮尺）。878 は乳白色の灰岩製の砥石である。長方形だが上部は欠損している。残存長は 4.7cm で、最大 2.3cm 角の方形断面である。砥面は４面が確認できる。大きさからして手持ちの砥石であろう。手持ち砥石の場合、上部に穿孔して携帯用に紐を通す形状のものが一般的に良く見られるが、本品は上部が欠損しているため穿孔の有無は不明である。

879 はキセルの吸口で、ほぼ完全な形で残っている。銅板を丸め接合部の継ぎ目が見えるが、全体に脆い。



第 144 図　第１面包含層出土遺物実測図６

同図 880 ～ 883 は各区の第１面包含層より出土した銭貨である。拓影図は原寸大で掲載した。880 は表面が風化して文字が見えにくいが「文久永寶」である。錆がひどく、状態が歪んでかなり残りが悪い。881 も「文久永寶」で背には一一波の紋様がある。「文久永寶」の鋳造年代は文久三年（1863）～明治二年（1869）までの近世銭である。江戸幕府の直轄銭と言われる。882 は「元祐通寶」か。上部が欠損し非常に脆くなっている。「元祐通寶」は北宋七代哲宗元祐元年（1086）に鋳造の渡来銭である。883 は表面が著しく風化し判読しづらくなっている。文字影はあるものの銭種はわからない。



第 145 図　第１面包含層出土遺物実測図７

包含層より出土した杭状の木製品は第 145 図 884 ～ 888 にまとめた。丸木または割り材の下端部を尖らせている。割り材でも表皮下の面が残っているため節の痕跡がある。地上に出ていた上端部は腐食している。杭として使われていたものと思われるが、地面に突き刺さった状態ではなく包含層内に含まれている状態で出土した。884 は一部に表皮下面が残るミカン割材である。下端部より 14 ㎝の範囲を３方向から削り、先端を尖らせている。885 もミカン割材から加工された杭である。先端は２方向から削っている。886 は半割材の先端を３方向から加工している。表皮下面が多く残る。887 は径 6.5㎝程のアスナロの丸木を杭に加工している。888 はスギのミカン割材から加工された杭である。下方は数方向から削っている。樹種はスギ２点、ヒノキ１点、サワラ１点、アスナロ１点と針葉樹材が占めている。

註

１　第４面の水田面を覆う土砂から採取した炭化物の年代は B.C.400 ～ 520 年頃の年代が出たとの情報を得ている。これは独立行政法人産業技術総合研究所の藤原治氏が堆積物調査の関連で津波堆積物の可能性がある層を採取し独自に分析をした結果より情報をいただいている。

２　イチイガシ製の農耕土木具は、静岡県内の遺跡でも複数確認されてきている。静岡平野で出土した鍬・鋤のほか、志太平野の北東部に位置する藤枝市寺家前遺跡でもある。今回、小笠平野でもイチイガシ製の鍬鋤が見つかったことにより、古墳時代には広範囲に普及していたことが明らかとなった。

３　県内では袋井市五ヶ山 B2 号墳（古墳時代中期中葉）等に樹皮が残っている鉄剣が見つかっている。

４　菊川市役所の塚本和弘氏よりご教示いただいた。

第５章　一反田遺跡

第１節　調査の概要

１　遺跡の概要

赤土政所遺跡、一反田遺跡は時代により遺跡の境界域が不分明であるが、埋蔵文化財包蔵地としては、１～ 3-1 区が赤土政所遺跡、3-2 ～ 5-2 区が一反田遺跡として登録されている。今回の調査でも赤土政所遺跡と一反田遺跡の境界付近に建物等の明確な遺構が存在しないことがわかっている。調査後に検討した結果、赤土政所遺跡の 2-3 区から続く第４面の水田跡が 3-1 区まで延びることなどから判断して、3-1 区は一反田遺跡として調査したものの、本書では、１～ 3-1 区を赤土政所遺跡、3-2 区～ 5-2 区を一反田遺跡として報告する。

現地調査の経過については第２章第２節で触れていることから、ここでは調査区の区分と基本土層、各遺構面の年代について述べることとする。

5-1・5-2 区では大型溝が確認できること、４区にはほとんど遺構が確認できないことから、４・5-1・5-2 区（北区とする）と、3-2 区（南区とする）とに区分した。なお、赤土政所遺跡の発掘調査と異なり、北区で２面、南区で３面の文化層のみの調査としているため、おおよその対応関係を記す。

基本土層は各調査区の土層注記が異なるため、第２章第２節の第２図で概ね同じような層位をつないでいる。3-1 区と 3-2 区の調査では洪水堆積層が多く水平堆積ではないため、赤土政所遺跡と一反田遺跡をつなげることは困難であった。したがって、一反田遺跡と赤土政所遺跡では同じ標高値で、同一層位の可能性は高いものの、基本土層としては別区分にしている。

調査区と遺構面、年代は次の通りである。

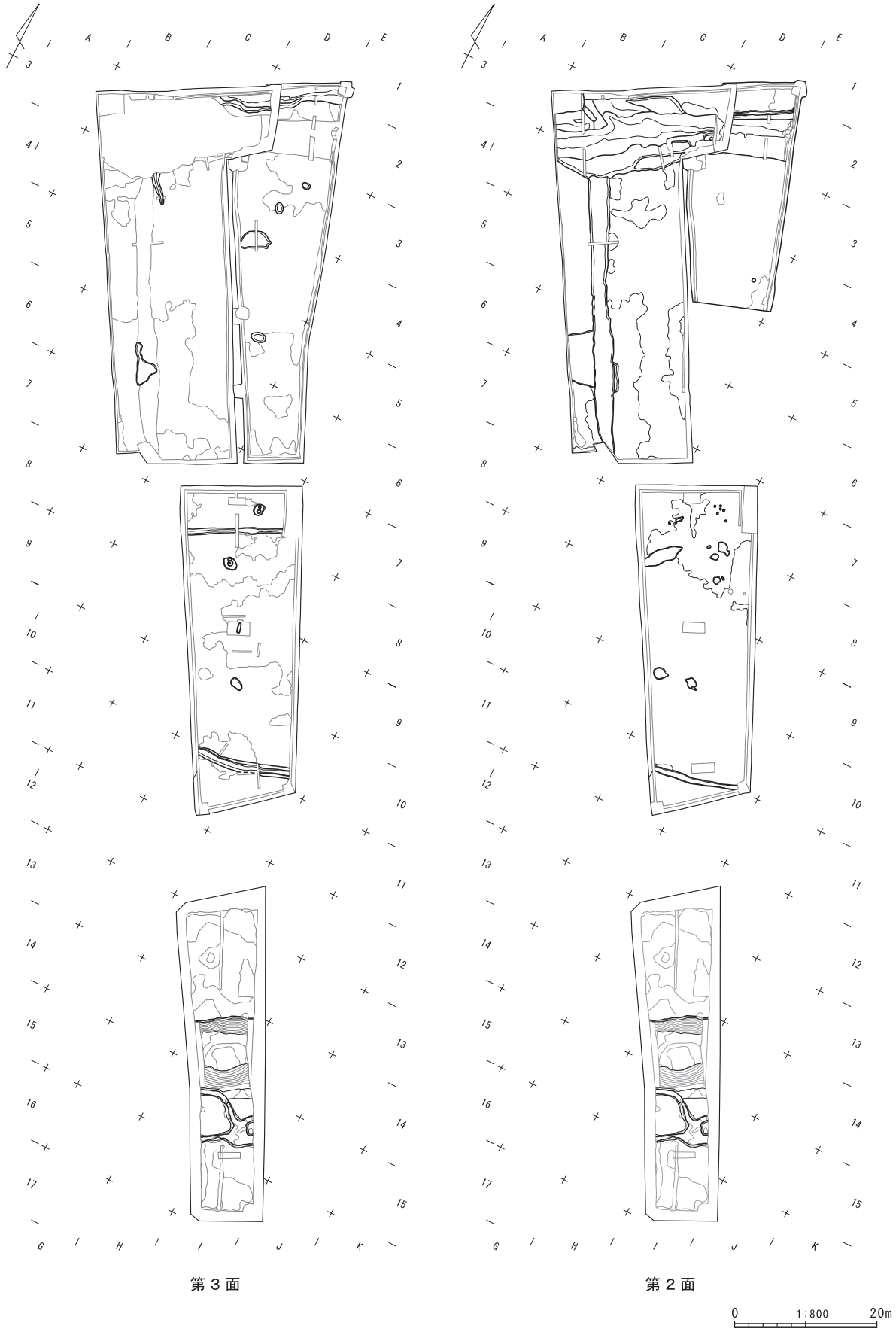
北区では、４区のみ第３面の文化層を調査した。ただし第２面には遺構が確認できなかったことから報告しないこととした。5-1･5-2 区の第１・２面はⅩⅡ層上面で検出した平安時代以降の遺構面である。同区第３面はⅦ層上面で、弥生～古墳時代の年代である。

南区では、第１面が中世である。河川堆積層の上面で区画溝に囲まれた屋敷跡が見つかり、年代は鎌倉から南北朝時代が主体である。第２面は 3-2 区北側ではⅩⅡ層上面、3-2 区南側ではⅧ層上面で奈良～平安時代の自然流路を検出した。第３面はⅦ層上面で水田と杭列（SA301 ・302）が見つかり、年代は古墳時代と考えられる。

次節からは、各層位ごとに報告する。第２節は北区である 5-1・2 区、４区の第３面で検出した遺構と出土遺物、第３節では北区第１面の遺構と遺物、第４節では南区である 3-2 区の第３面の遺構と遺物、第５節では南区第２面の遺構と遺物、第６節では南区第１面の遺構と遺物である。

２　微地形と遺構の広がり

すでに第３章第１節地理的環境や第４章赤土政所遺跡の第１節遺跡の概要でも述べてきたとおり、一反田遺跡は河川に挟まれた沖積地上に立地する。調査区のすぐ北側には丹野川が北東から南西方向へ流れている。立地上、河川の影響を強く受ける土地ではあるものの、微高地を上手く利用して集落と水田が営まれていた痕跡が見つかっている。当地への人為的な開発は赤土政所遺跡と同様、古墳時代前期～中期中頃で、主に低地は水田として利用されていた。奈良～平安時代は北端で流路が見つかっている。中世以降、3-2 区の微高地上に区画溝や掘立柱建物があり、集落地として利用されていた。



第 146 図　第３面・第２面全体図

第２節　北区第２・３面の遺構と遺物

１　遺構・遺物

北区第２・３面では5-1・5-2区、４区で土坑や溝跡を検出した（第146～148図）。土坑は特に5-1区に多く５基あるが、5-2区から４区まで広範囲にある。土坑を検出した標高値は6.00～6.15ｍである。

出土遺物が極めて少なく、年代を特定できる要素がない。溝跡も各区で見つかっているが、人為的に掘られたものは少なく、大半は自然流路の一部と捉えられる。

5-1・5-2区では溝跡が２本、土坑６基（SK301～SK306）を確認した。このうち溝SD301は調査区の北端で検出したが北側半分は調査区外であるため、全体の規模は明らかではない。堆積層の状況から見て自然流路であろう。流路底は東側よりも西側のほうが深く、流路の肩部は北東から北西方向に緩やかに曲がっている。

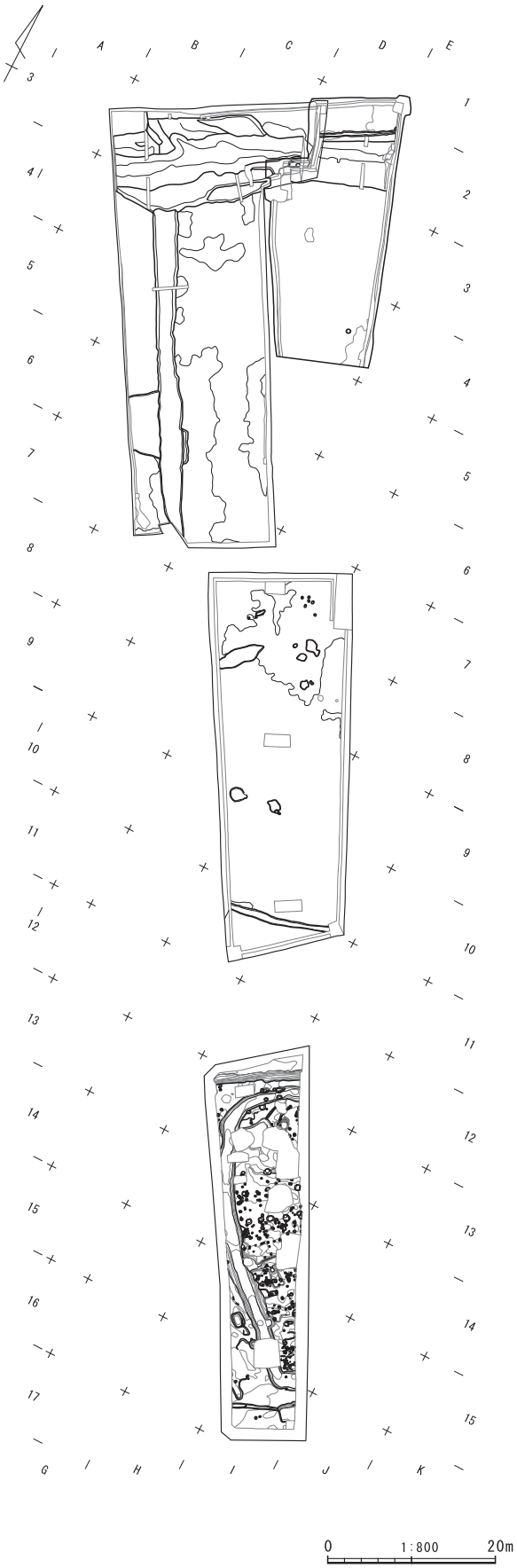
４区では溝跡が３本、土坑は３基（SK307～SK309）を検出した。溝SD303は直線的で掘形が逆台形と均質であることから、区画溝のような性格も考えられる。また溝SD305も、流れは緩やかな曲線を描くが、堆積層を見ると小規模な区画溝ではないかと思われる。流れは東から西へ向かう。

（１）土坑

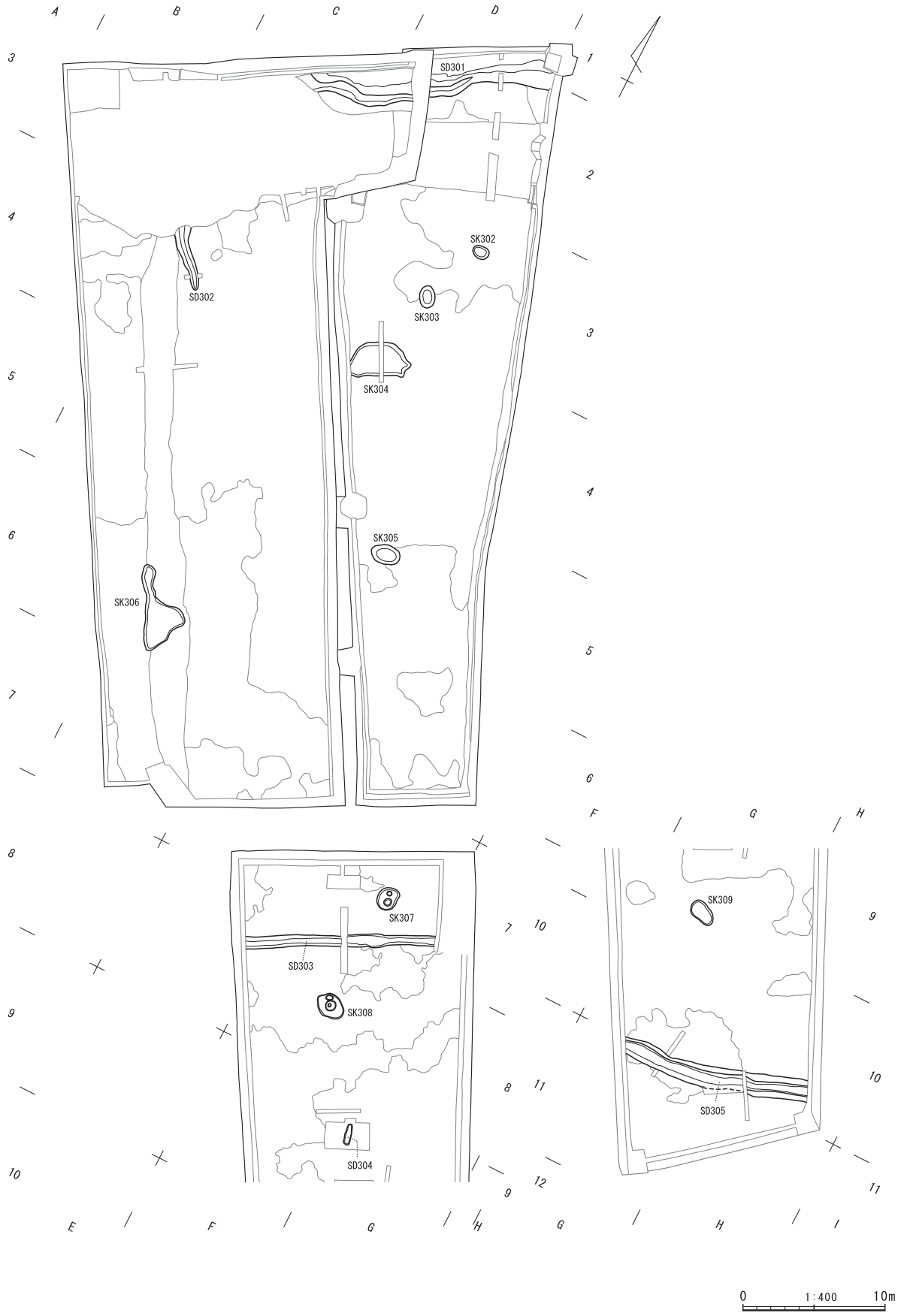
SK301（第149図）　5-1区北側D-3グリッドに位置する。４ｍほど東側にはSK302がある。全体形は楕円形で、長軸方向は1.3ｍ、短軸方向は0.8ｍである。掘形は10cmと浅い。出土遺物はなく年代は特定できない。

SK302（第149図）　5-1区北側のE-3グリッドに位置する土坑である。SK301が西側にある。楕円形を呈し、長軸方向は1.2ｍ程ある。覆土はレンズ状に堆積した明青灰色の粘土で、20cm程の深さをもつ。

SK303（第149図）　5-1区D-3グリッドに位置する。形状は楕円形で長軸方向は1.6ｍ程ある。堆積



第147図　第１面全体図



第 148 図　北区第３面全体図

土はレンズ状で、上層は青灰色砂質土、下層は青灰色の粘土である。

SK304（第 149 図）　5-1 区 D-4 グリッドで検出した浅い土坑で、形状は不定形である。覆土は青灰色粘土で、土器小片が出ている。SK301 ～ 303 より南側に位置する。人為的に掘られたものとは考えにくい。

SK305（第 149 図）　5-1 区 E-5 グリッドに位置する大型の楕円形土坑である。長いところで 2.1 m、狭いところでは 1.3 mを超える。深さは、標高値は 6.0 mのところから 0.8 m程掘り込まれている。覆土は２層の灰色砂質粘土層が大半を占める。

SK306（第 149 図）　5-2 区 D-6 グリッドで検出した不定形な土坑である。SK304 と同様に、広範囲に浅く、形も一定でないことから、人為的なものではなく自然地形の窪みとも考えられる。覆土は灰色粘土層で、暗灰色粘土塊を斑点状に含む。

SK307（第 149 図）　４区 E-7 グリッドに位置する。円形に近い 1.6 m程の土坑だが、底に円形の浅い掘り込みが２箇所ある。同様の特徴は土坑 SK308 にも見られる。

SK308（第 150 図）　４区 E-8 グリッドで検出した土坑で、やや歪な円形をしている。10 m程北側に位置する SK307 と同じように底に円形の浅い掘り込みがある。堆積土の状況から見て、後世の遺構が切り合っている可能性が高い。後世に掘り込まれた６層は炭化物を含む灰色粘土層で、柱穴の可能性もあるが、周囲に対応する柱穴は見られない。

SK309（第 149 図、図版 68）　４区 G-9 グリッドで検出した楕円形土坑である。長軸方向は 2.0 m程の規模をもつ。掘形は浅いレンズ状である。

（２）溝状遺構

SD301（第 152 図、図版 68）　5-1・5-2 区 C ～ D-2 グリッド内、調査区の北端に位置し、東西方向に約 18 m、南北方向は３m弱の規模がある。遺構の南肩が蛇行していることや堆積土の状況から見て、自然流路の一部と考えられる。流路は東から西へと流れており、流れの方向などから丹野川の旧流路とも想定できる。

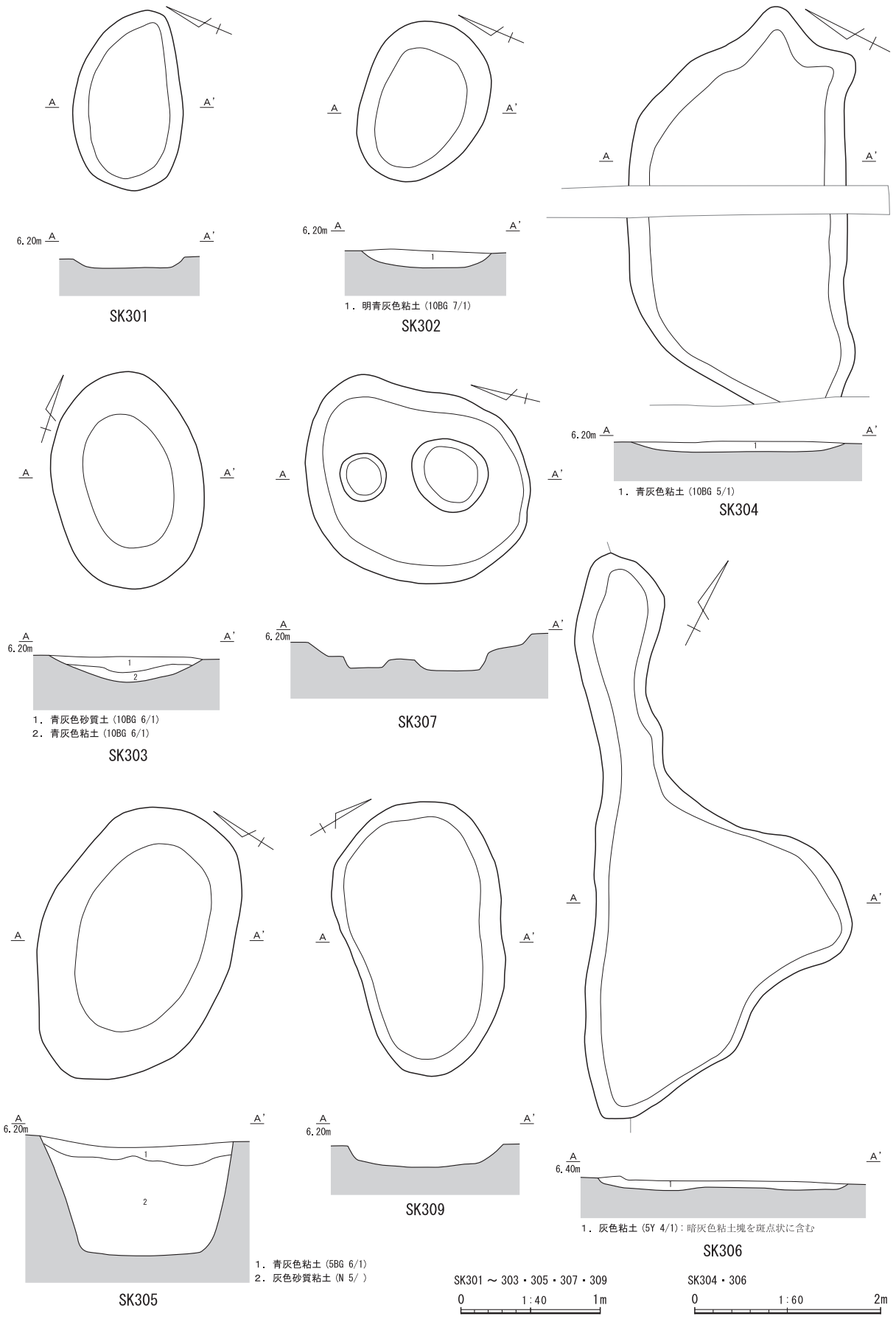
SD301 の覆土からは山茶碗小皿（第 179 図 **256**）・灰釉陶器（**258**）が出土している。小皿（**256**）は口径 7.65 cm、器高は 1.6cm、底径は 5.0cm であり、渥美・湖西産である。体部外面には粘土塊が付着している。山皿の底部に墨書が確認できるが、文字の判読は難しい。記号の可能性もある。灰釉陶器（**258**）は底部片であり、低平な高台を持つ。復元高台径は 7.95cm 程あったと思われる。内碗面には灰釉が全面に付着している。SD301 より出土した土器は古式土師器から山茶碗までと年代幅が広い。この期間、雨水とともに上流から流れ込み、自然流路の縁に土器が堆積していったのであろう。山茶碗以降の土器は含まれないことから、中世までには埋没している。

SD302（第 152 図、図版 68）　溝 SD302 は 5-2 区の北半部、C-4 グリッドに位置する。北西から南東方向に 4.6 mの延長をもち、最大幅は 1.1 mほどある。断面の形状はレンズ状で、堆積土も同様である。北側の河川から派生した自然流路であろう。

SD302 の覆土からは土師器坏（第 179 図 **259**）と灰釉陶器碗の小片（**260**）、打製石鏃（**261**）が出土している。土師器坏（**259**）は復元口径が 12.2cm、器高は 7.75cm の無台坏である。灰釉陶器碗（**260**）は口縁部の小片で、唇部は外側に強く広がる。また口唇内側に釉薬が残っていることから、漬け掛けされたものであろう。

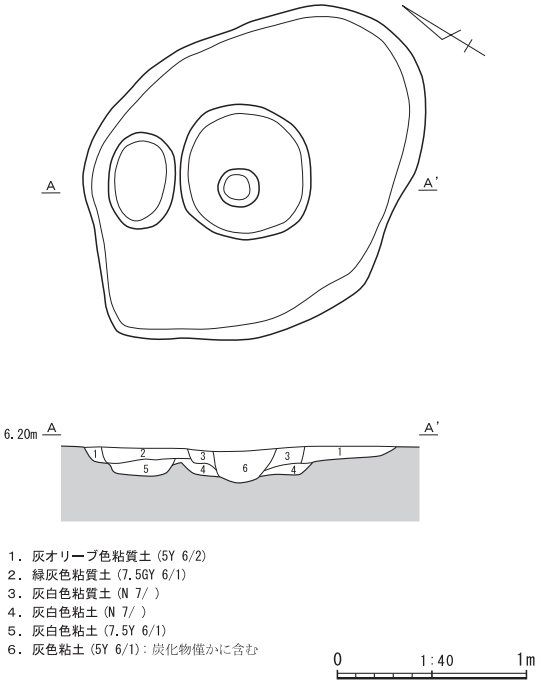
打製石鏃（**261**）はチャート製で、茎を持ち、左右に逆刺を有するものである。茎と逆刺の一部が欠けている。石鏃の年代は縄文時代に位置づけることができる。当遺跡では唯一の縄文時代の遺物であり、丹野川の洪水等に伴って流れ込んだ遺物である可能性が高い。SD302 に含まれるそのほかの土器は古墳時代の土師器が主体である。

SD303（第 152 図、図版 69）　４区 E-7 ～ 8、F-7　グリッドにまたがる溝状遺構である。調査区北側



第 149 図　SK301・302・303・304・305・306・307・309 実測図

をほぼ真横に横断する位置で検出した。溝の方向は北東から南西である。ほぼ直線的で断面形も人為的に掘削されたような形であることから区画溝の性格を持つ可能性がある。溝の総延長は13.2ｍ、幅は最大１ｍ、深さは0.34ｍ程である。溝底も高低差はほとんどない。覆土内の土器は条痕文の土器片と微小の土師器片のみである。本遺構面のなかではSD304とともにもっとも古い年代に属する遺構といえる。



第150図　SK308実測図

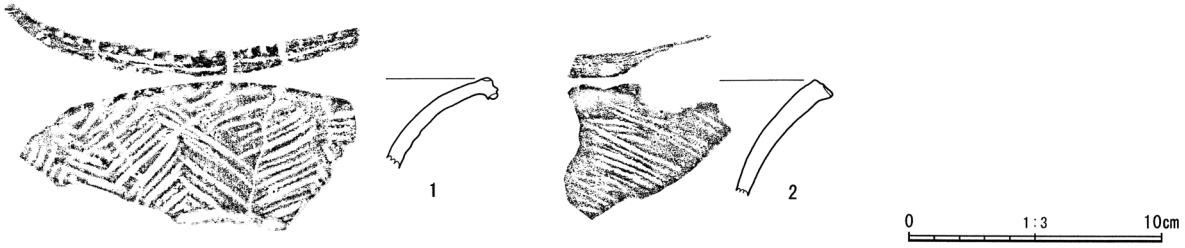
SD304（第152図）　４区のほぼ中央で検出した小規模の溝状遺構である。G-9グリッドの北西端で検出した。溝は長さ1.5ｍ、幅0.4ｍほどで深さは0.13ｍ、南北方向である。溝は人為的に掘削されたようにも見える。

第151図**１・２**は溝の覆土より出土した土器である。器種は弥生土器の深鉢であるが、いずれも口縁部の小破片のため、口径復元は難しい。**１**は弥生時代中期中葉に属する深鉢（嶺田式か）で、口唇部に沈線が１本通り、内・外面から工具による刻みが入る。外面にはヘラ状工具により縦方向の条痕文を羽状に連続して施文されている。内面はナデである。全体に磨滅している。胎土は長石や雲母の微粒子が混じる。

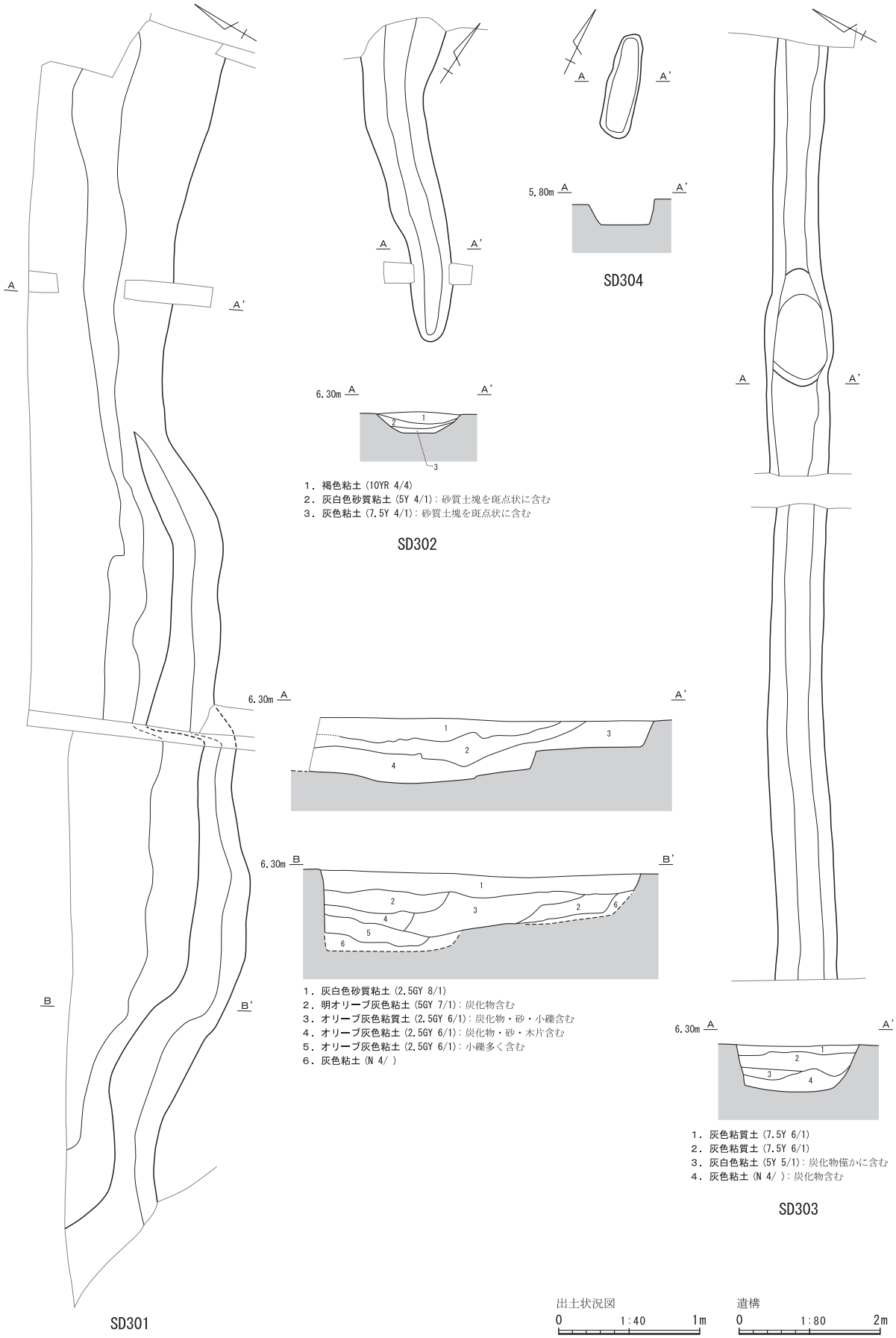
２も弥生時代中期中葉に属する深鉢だが、小片のため径は復元できない。口唇部は摩滅しているが指頭により口唇部を押さえて装飾してある。内面はハケ調整をナデ消してあり、外面には細かい条痕文が見られる。**１**のように羽状に施していた可能性がある。胎土には少量の微細礫が混じる。遺跡の西側に嶺田遺跡が位置していることから、同時期年代の土器であろう。同遺構の土器は弥生時代中期中葉の条痕文土器から古式土師器までを含む。よって遺構の年代もこの時期に存続したであろう。

SD305（第153図、図版69）　４区南端に近い、G-10・11～H-10グリッドにまたがる範囲に位置している。検出した長さは31.4ｍ、最大幅は1.6ｍ、0.7ｍの深さがある。流れは北東から南西方向である。溝の断面形は緩やかなＶ字状で、環濠のような掘形にも見える。土層堆積状況をみると、２層が堆積した後、人為的に再掘削されたような痕跡があり、その後炭化物を含む３・４層が堆積し、さらに１層で埋没している。

覆土内の土器は甕口縁部や台付甕脚部片を含む弥生時代後期末から古墳時代初頭の古式土師器などが主体である。こうしたことから集落に近い人工的に管理された溝と考えられる。



第151図　SD304出土遺物実測図



第 152 図　SD301・302・303・304 実測図

第３節　北区第１面の遺構と遺物

１　遺構・遺物

5-1･5-2 区、４区を含む北区第１面では、溝状遺構や土坑、自然流路、性格不明遺構などを検出した（第 154 図）。第１面で特に注目すべきは 5-1・5-2 区にまたがる SD101 で、覆土内より大量の土器や木製品が出土した。年代の中心は奈良時代から平安時代が主体で、下層からは古墳時代の土器も出土している。5-2 区では、このほかに性格不明遺構（SX101）と土坑（SK101）がある。

４区では土坑（SK102 ～ 109）が８基と自然流路（SR101）、溝状遺構（SD102）、性格不明遺構（SX102）などが見つかった。土坑は不定形で大きさも揃ってはいない。

遺構面の標高値は平均 6.25 ～ 6.35 ｍで、5-1 区北側が 6.40 ｍ、４区南端で 6.20 ｍと、全体にさほど大きな地形変化はない。第１面では集落遺構等はなく、集落域からは離れた場所であったと思われる。

（１）土坑

土坑は北区で９基見つかっている。以下に個別記載する。

SK101（第 155 図）　5-2 区 C･D-6 グリッドに位置している。性格不明遺構 SX101 に切られている。遺構の全体形は不明だが、台形のような角をもつ。長辺は８ｍ程、短辺は 3.5 ｍである。底は平坦で掘形は浅い。黒褐色粘土層には炭化物を若干含んでいる。

SK102（第 155 図）　４区 E-7 グリッドで検出した長楕円形の土坑である。長軸方向に 1.2 ｍ、短軸方向は 0.5 ｍ、深さは７㎝と浅い。SK102 ～ SK107 は列をなしたように並んでおり、SK102 はその北端にある。

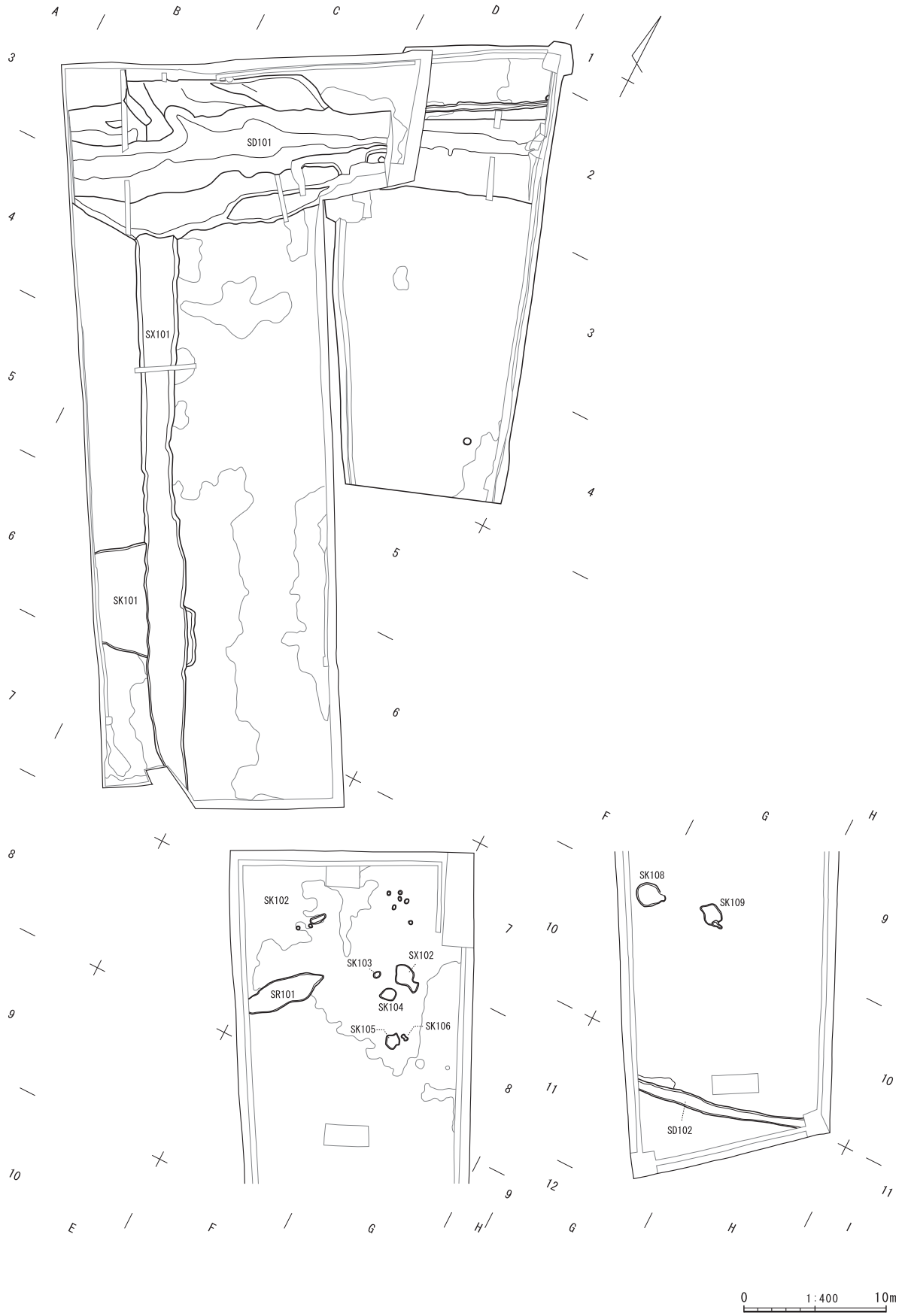
SK103（第 155 図）　４区 E-8 グリッドで検出した円形土坑で、最大幅は 0.56 ｍを測る。掘形は 10 ㎝と浅い。すぐ東側には性格不明遺構 SX102 がある。

SK104（第 155 図）　４区 E-8 グリッドにある。ややいびつな楕円形を呈する。大きさは長いところで 1.2 ｍ程あり、10 ㎝の深さがある。性格不明遺構 SX102 は、すぐ北側に位置し、SK103 が１ｍ程北西側にある。

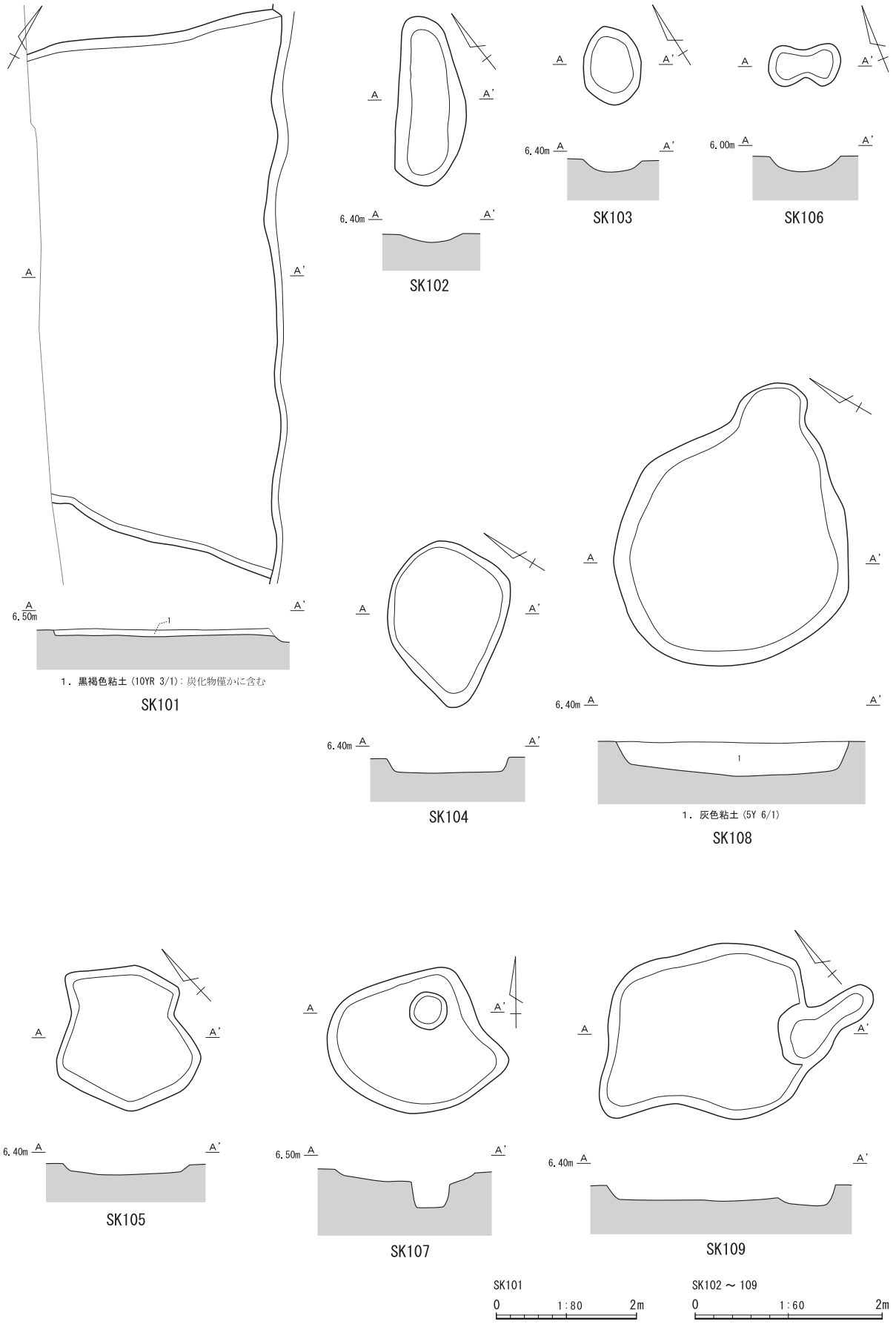
SK105（第 155 図）　４区 G-8 グリッドに位置する不定形な土坑である。すぐ北東横には SK106 がある。最も長いところで 1.2 ｍあり、底まで 10 ㎝足らずと浅い。

SK106（第 155 図）　４区 G-8 グリッド、SK105 のすぐ東側で検出した。小穴が二つ繋がったような形状で、掘形はレン

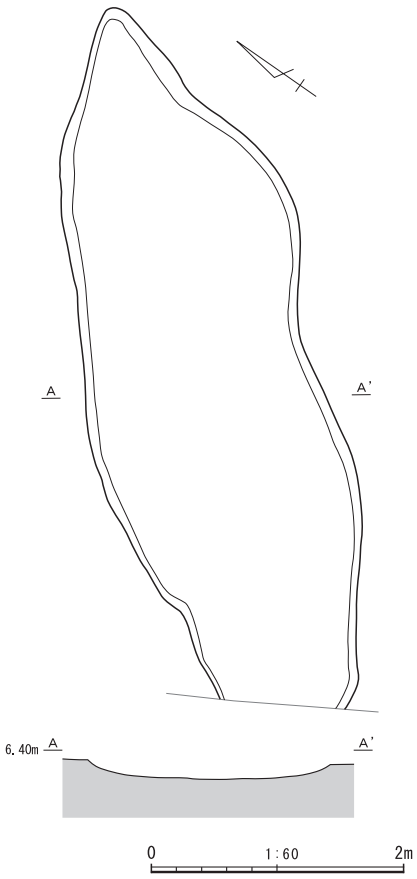
第 153 図　SD305 実測図



第 154 図　北区第１面全体図



第 155 図　SK101・102・103・104・105・106・107・108・109 実測図



第 156 図　SR101 実測図

ズ状、10 ㎝程度の深さがある。

SK107（第 155 図）　４区 G-8 グリッド中央に位置する不定形な土坑である。土坑内には SP03 が切り合っている。土坑との新旧関係は不明である。長軸方向で 1.3 ｍ、深さは 10 ㎝程ある。

SK108（第 155 図）　４区の南半部、F・G-10 グリッドにまたがる位置にある。SK109 は５ｍ程東に隣り合っている。広めの円形を呈するが、北辺に小穴が付いたような形をしている。長いところで 2.1 ｍあり、24 ㎝程の深さがある。覆土は灰色粘土で橙色の鉄分が混じる。

SK109（第 155 図）　４区 G-9 グリッドで検出した土坑で、西側５ｍ先に SK108 がある。平面形状は不定形で、東辺に小穴が切り合っている。長軸は 1.8 ｍ、深さは 10 ㎝程である。

（２）自然流路

SR101（第 156 図、図版 70-2）　４区 F-8 グリッド内にある。長さは６ｍ、幅２ｍ程の浅い落ち込みである。標高 6.30 ｍほどの位置で検出した。東側５ｍ先には SK103 や SX102 が位置している。河川のような常に流れがあったところではなく、一時的な流れでできたようなものであろう。遺物が伴っていないことから年代は特定できない。

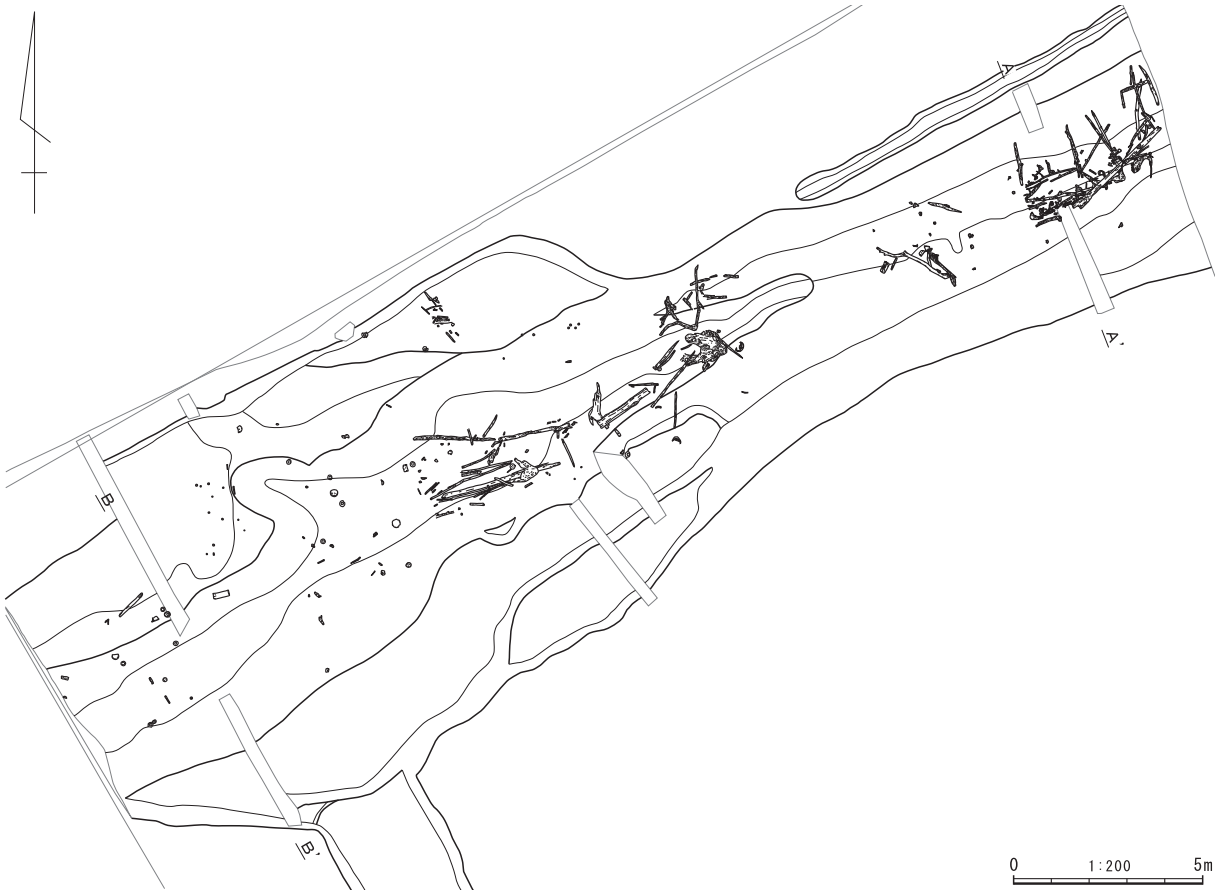
（３）溝状遺構

SD101（第 157 ～ 162 図、図版 71 ～ 73）　5-1・5-2 区の調査区最北部で確認した遺構である（第 157 図）。全長は約 34 ｍ、幅 11 ｍ、深さは 1.8 ｍ程である。幅が広く、断面はレンズ状であること、現在の丹野川と平行であることから判断して、自然河川の可能性が高い。検出面の標高は約 6.30 ｍで、上流部は 5-1 区東側、下流は 5-2 区西側となる。堆積土は上流部で 23 層、下流部で 27 層に分層している（第 158 図）。覆土は主に砂質土と粘土層の互層となっており、砂礫や炭化物等を多量に含んでいる。また上層から下層まで多量の土器や木製品、石製品、金属製品、土製品、骨、種子等が出土した。出土した土器は、土師器、須恵器、灰釉陶器等があり、上層と下層におおむね区分して取上げたため、第 163 図以降では、調査区ごと、上層、下層に分けて掲載した。

SD101 内の出土遺物は第 159 ～ 162 図に分割して掲載し、主要な遺物の位置と実測図を示した。遺物の出土状況は上流から中流部にかけて集中し、下流では疎らである。第 159 図は 5-1 区東端の SD101 上流部の遺物出土状況図である。ここでは土師器の坏や甕、須恵器と共に、鍬や大足、掛矢等の農耕土木具のほか、木皿や鳥形木製品が出土している。第 160 図は SD101 の中流部分で、土師器の甕や灰釉陶器、墨書土器も出土した。木製品では杭や板材、自然の流木も出ている。第 161 図も中流域で遺物が集中して出土している場所である。土師器の坏類が多く、墨書土器も見られる。木製品では日用雑器のほかに斎串が多く目立つ。第 162 図は SD101 の下流域にあたる。上～中流にかけての出土量はなく、出土遺物も疎らだが、土師器の坏類のほか墨書土器やミニチュア土器も見られる。木製品は曲物や斎串が少量出土している。右岸側には杭も打ち込まれている。

第 163 図 **3** ～第 179 図 **257** は 5-1・5-2 区で検出した溝 SD101 より出土した遺物である。

第 163 図 **3** ～ **30** は 5-1 区 SD101 の上層より出土した土器、第 164 図 **31** ～ **58** は 5-2 区 SD101 の上層より出土した土器である。第 165 図 **59** ～ **78** は 5-1 区 SD101 の下層で出土した土師器、第 166 図 **79** ～

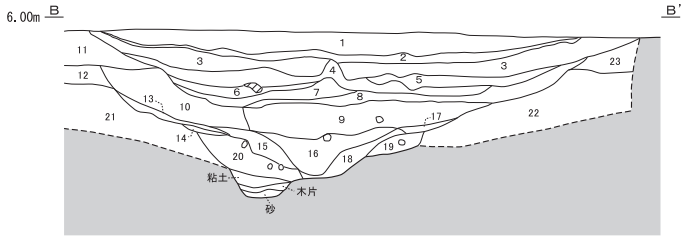


第 157 図　SD101 実測図１

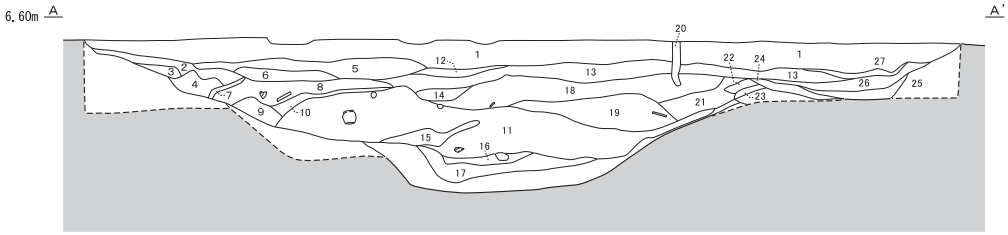
89 は同遺構の須恵器・灰釉陶器である。第 167 図 90 ～第 167 図 172 までは 5-2 区 SD101 の下層より出土した土師器と須恵器をまとめた。第 168 図 173 ～ 189 は 5-2 区下層より出土した灰釉陶器、同図 188 ～ 193 は試掘調査で出土した土器である。第 171 ～ 177 図は SD101 より出土した木製品である。なお、第 178 図は 5-2 区 SD101 で出土した金属製品と石製品、土製品である。

第 163 図３～ 11 は土師器の坏である。３はほぼ全体形が残る。口径は 13.15 ㎝、器高は 4.6 ㎝である。内・外面に指押さえの痕跡がある。４は完形の坏で、体部が直線的に開き 13.2 ㎝の口径をもつ。外面に指押さえと工具によるナデがある。外面が一部剥がれている。５は口径は 13.5 ㎝で、直線的に上部へ開く形状の坏である。底部は厚みをもつが体部は薄い作りである。繋ぎ目には指押さえやナデが残っている。６も無台の坏である。体部は薄く、底部径は 5.8 ㎝と小さく、口縁へ向かって開く形をしている。口径は 12.9 ㎝、器高は 4.25 ㎝である。７は坏の体部分で、底部は剥がれている。体部の形状は灰釉陶器に良く似ており、高台はないものの碗形である。復元口径は 13.05 ㎝程である。８は平底で、ほぼ完形の坏である。口径は 13.2 ㎝、器高は 3.4 ㎝と低いが、口縁部は直線的に開く形状である。内・外面には指押さえやナデが顕著に残っている。外面に黒班がある。９は上記の坏よりもやや小振りで口径 12.1 ㎝の坏である。体部はやや厚めで、内面全体と外面見込みに指押さえ痕がある。10 は完形の坏である。口径は 12.75 ㎝、器高は 3.5 ㎝で、底径は 6.2 ㎝を測る。外面と内面見込みに指押さえ痕がある。11 は土師器の坏で 1/4 程残存している。３～ 10 までの坏とは作りが異なり、復元口径も 11.55 ㎝とかなり小振りである。口縁から体部の形状からみて、古墳時代の土師器坏と思われる。年代も６世紀代の時期にさかのぼる可能性がある。

12 は土師器の高台付碗である。高台は貼り付けで、ハの字状に開き、底径は 6.5 ㎝、２㎝程の高さ



1．褐灰色砂質土（10YR 4/1）
2．黄灰色砂質土（2.5Y 5/1）：砂礫多く含む
3．灰色砂質粘土（5Y 4/1）：砂礫含む
4．暗オリーブ灰色砂質土（5GY 3/1）：砂礫多く含む
5．オリーブ黒色砂質粘土（5Y 4/2）：砂粒多く含む
6．灰色砂質土（7.5Y 4/1）
7．オリーブ黒色粘土（7.5Y 3/1）
8．灰色砂質土（5Y 4/1）：砂礫・木片多く含む
9．黒褐色砂質土（2.5Y 3/1）
10．オリーブ黒色粘土（5Y 3/2）：木片含む
11．暗オリーブ灰色砂質土（2.5GY 3/1）：木片、多量の砂礫含む
12．灰色砂質粘土（7.5Y 4/1）
13．黄灰色砂質粘土（2.5Y 4/1）：木片少量含む
14．黒褐色砂質粘土（2.5Y 3/2）：木片多く含む
15．オリーブ黒色砂質土（5Y 3/1）：木片多く含む
16．灰色粘土（5Y 4/1）：砂質土含む
17．オリーブ黒色砂質粘土（5Y 3/1）：木片少量含む
18．灰色砂質土（7.5Y 4/1）：木片含む
19．オリーブ黒色砂質土（7.5Y 3/1）：木片含む
20．オリーブ黒色砂質土（5Y 3/1）
21．オリーブ黒色砂質粘土（5Y 3/2）
22．オリーブ黒色砂質粘土（7.5Y 3/2）
23．オリーブ黒色粘土（10Y 3/2）：炭化物少量含む
24．オリーブ黒色砂質粘土（10Y3/1）：砂礫多く含む
25．黄灰色粘土（2.5Y 4/1）：炭化物少量含む
26．オリーブ黒色粘土（5Y 3/1）：炭化物含む
27．暗オリーブ褐色粘土（2.5Y 3/3）



1．黒褐色砂質粘土（10YR 3/2）
2．黒褐色粘土（10YR 3/1）：炭化物含む
3．灰黄褐色粘土（10YR 4/2）：炭化物含む
4．オリーブ黒色砂質土（7.5Y 3/1）：炭化物多く含む
5．黒色粘土（7.5Y 2/1）：炭化物多く含む
6．黄灰色砂質粘土（2.5Y 4/）：砂礫・炭化物含む
7．オリーブ黒色砂質土（5Y 3/2）：砂礫・炭化物含む
8．オリーブ黒色砂質土（7.5Y 3/2）：炭化物多く含む
9．黒褐色砂質粘土（10YR 3/1）：炭化物・木片含む
10．オリーブ黒色砂質土（5Y 3/2）：木片含む
11．黄灰色砂質土（2.5Y 4/1）
12．オリーブ黒色粘土（5Y 3/2）
13．暗灰黄色粘土（2.5Y 4/2）
14．黒褐色粘土（10YR 3/1）
15．オリーブ黒色砂質粘土（7.5Y 3/1）：木片含む
16．オリーブ黒色砂質粘土（5Y 3/2）：砂粒・砂礫・木片含む
17．オリーブ黒色粘土（5Y 3/1）
18．黄灰色粘土（2.5Y 4/1）：砂礫・炭化物多く含む
19．オリーブ黒色粘土／（10Y 3/1）
20．暗灰黄色砂礫（2.5Y 4/2）：砂質粘土含む
21．オリーブ黒色粘土（10Y 3/2）
22．オリーブ黒色粘土（7.5Y 3/1）
23．暗灰黄色粘土（2.5Y 4/2）

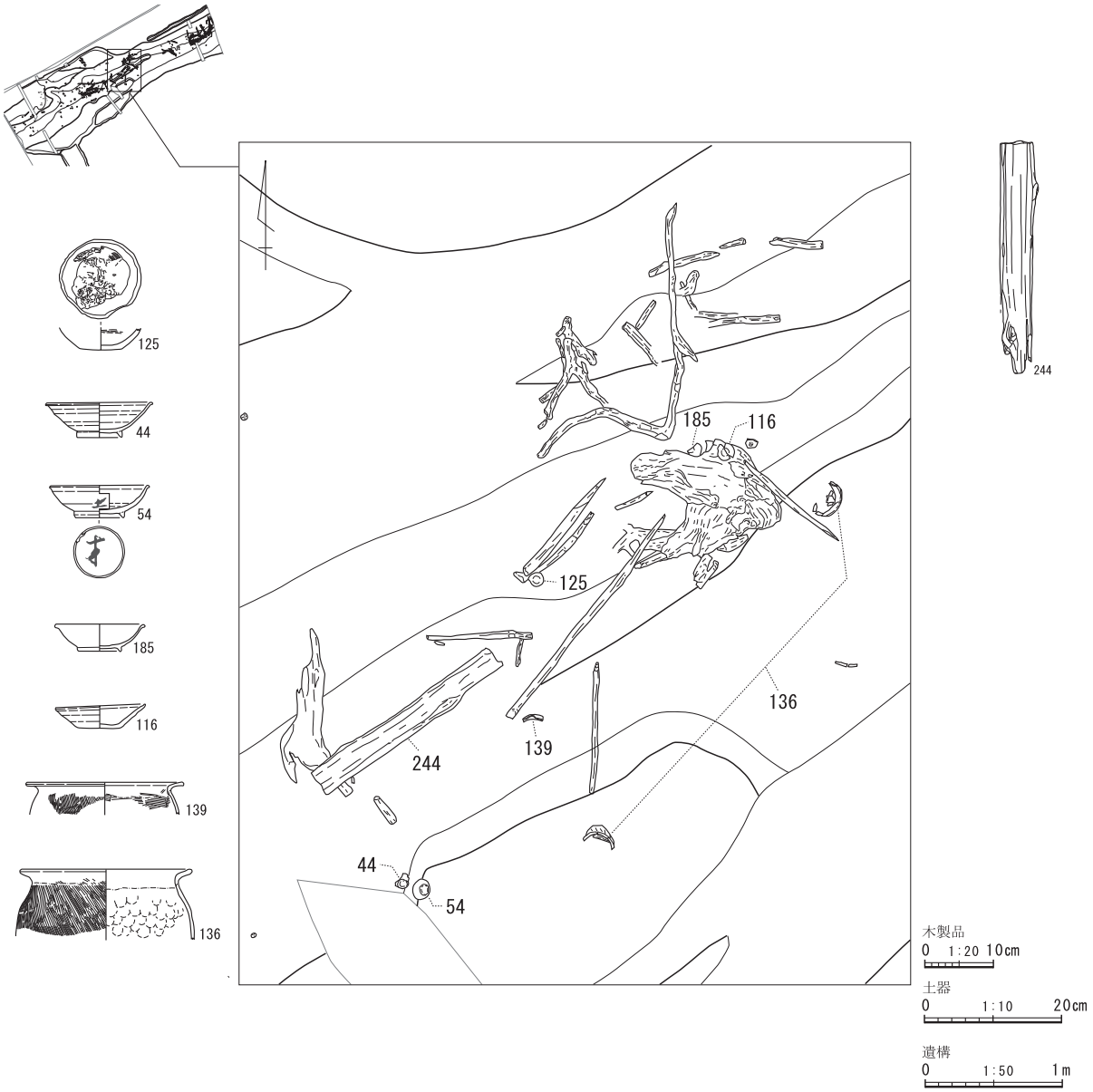
0　1:80　2m

第 158 図　SD101 実測図２

がある。13・14 は土師器の高坏脚部である。いずれも古墳時代に属する。13 は脚部径が 8.3 ㎝、高さも５㎝に届かない小型の高坏であろう。軸部は直線的で緩やかに下方へ広がり、設置面付近で大きく開く。14 は脚部の軸のみが残っている。軸部径は太めだが短く、小型の高坏であろう。

15 は土師器の壷口縁部片である。小片のため口径は正確ではないが、復元口径は 29.85 ㎝と大型である。口縁部は厚みをもち、無文である。16 は土師器の甕口縁～肩部にかけての破片である。ハケ調整は内・外面ともにナデ消されている。口径は 17 ㎝程ある。頸部が直線的に立ち上がり、口唇部で強く外側へ開く。17･18 はＳ字状口縁甕の口縁部である。17 はＳ字状の断面形をしている甕口縁部である。口径は 22.8 ㎝程で、断面形のＳ字はゆるく明確な稜をもっていない。土器の表面は乳白色の胎土で雲母は含まれていない。18 の口縁部形状も、かなりＳ字が崩れている。口径を復元すると 26 ㎝程になる甕である。胎土は白く、雲母は含まれず、表面のハケ調整痕も粗い。19 は須恵器の瓶、注口部分である。

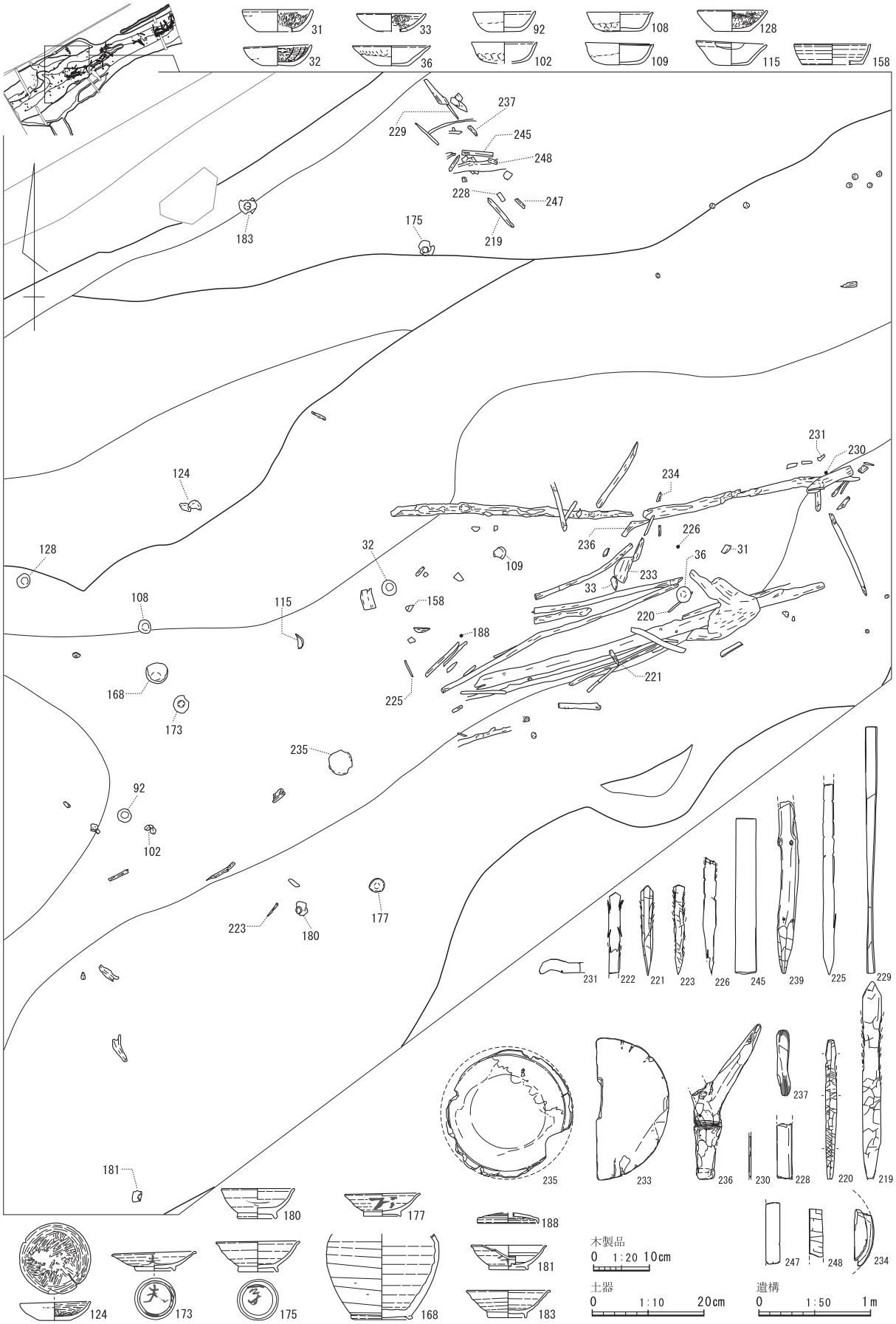
第 159 図　SD101 実測図３



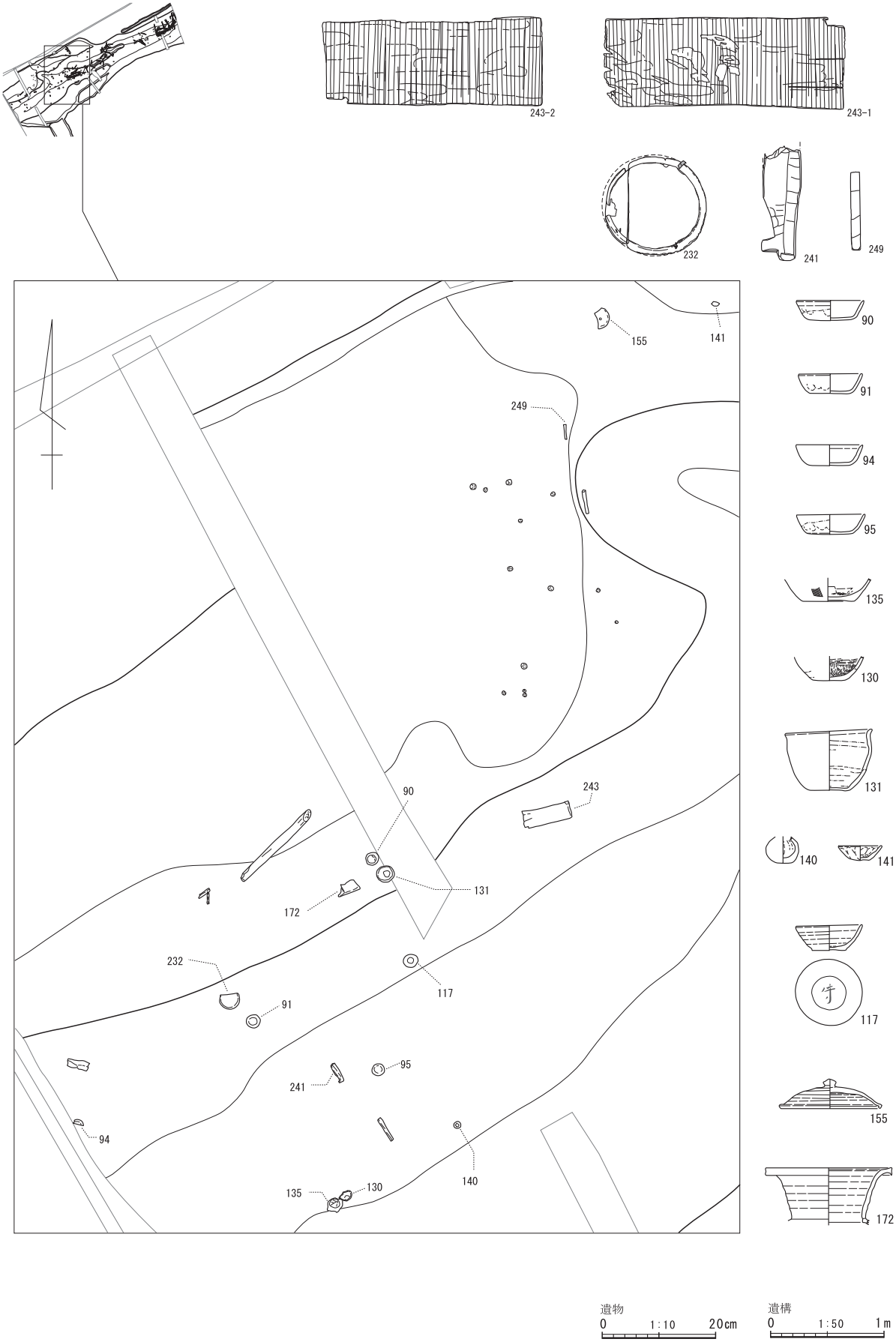
第 160 図　SD101 実測図４

肩の縁には二重沈線が施されている。注口部の径は内側で 1.1cm ある。また注口部分はヘラナデで貼り付けてある。上部には自然釉が付着している。

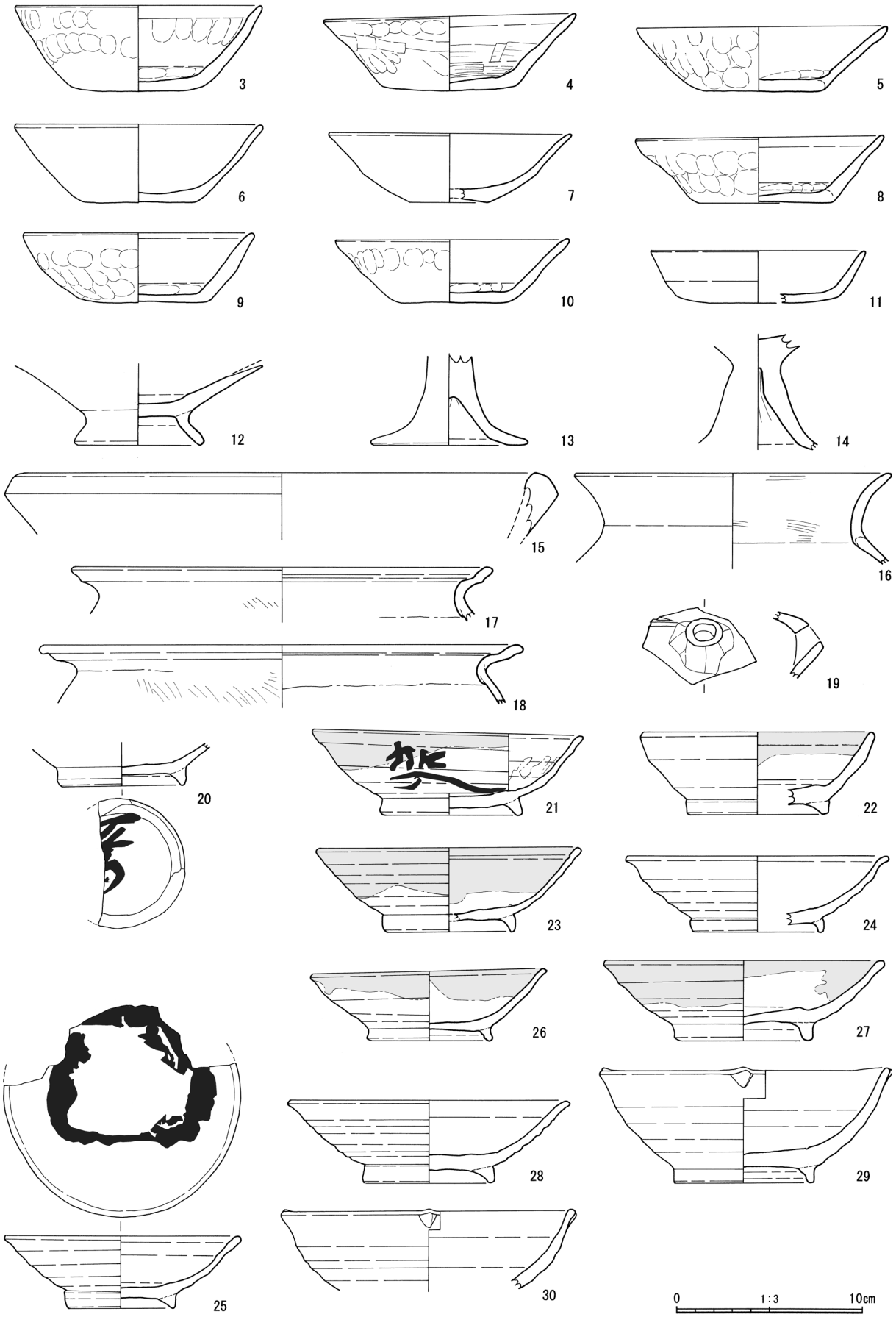
20 ～ 30 は灰釉陶器・山茶碗である。20 は灰釉陶器から山茶碗への移行期ともとれる碗である。貼り付け高台は太めだが、体部は薄く、外側へ開き気味の形状である。高台は半分ほど欠損しているが、内側には「馬」の墨書がある。21 ～ 28 は灰釉陶器の碗である。21 は完存している。口径 14.3 ㎝、器高 4.7 ㎝、底径は 7.6 ㎝である。体部は薄く外側に開く形状であるが、高台は太めでハの字状に開く。山茶碗ともとれるような形である。口縁部は漬け掛けされた釉薬は発色せず白く変色している。外碗面に「賀」の墨書がある。22 は復元口径が 12.7 ㎝と、やや小振りな碗である。高台が太く、体部も厚みがある。口縁部に釉薬を漬け掛けしている。23 は高台から体部が 2/3 程残存している。口径は 14.25 ㎝ほどある。高台はゆるい三日月状で、体部は薄い作りである。口縁内碗部には沈線が廻っている。また内面見込みには重ね焼き痕も見られる。漬け掛けされた釉薬は一部発色している。24 は口径 14cm 程に復元できる碗である。体部は非常に薄い作りで、口縁部は外側に大きく開く形状をもっている。釉薬は



第 161 図　SD101 実測図５



第 162 図　SD101 実測図６



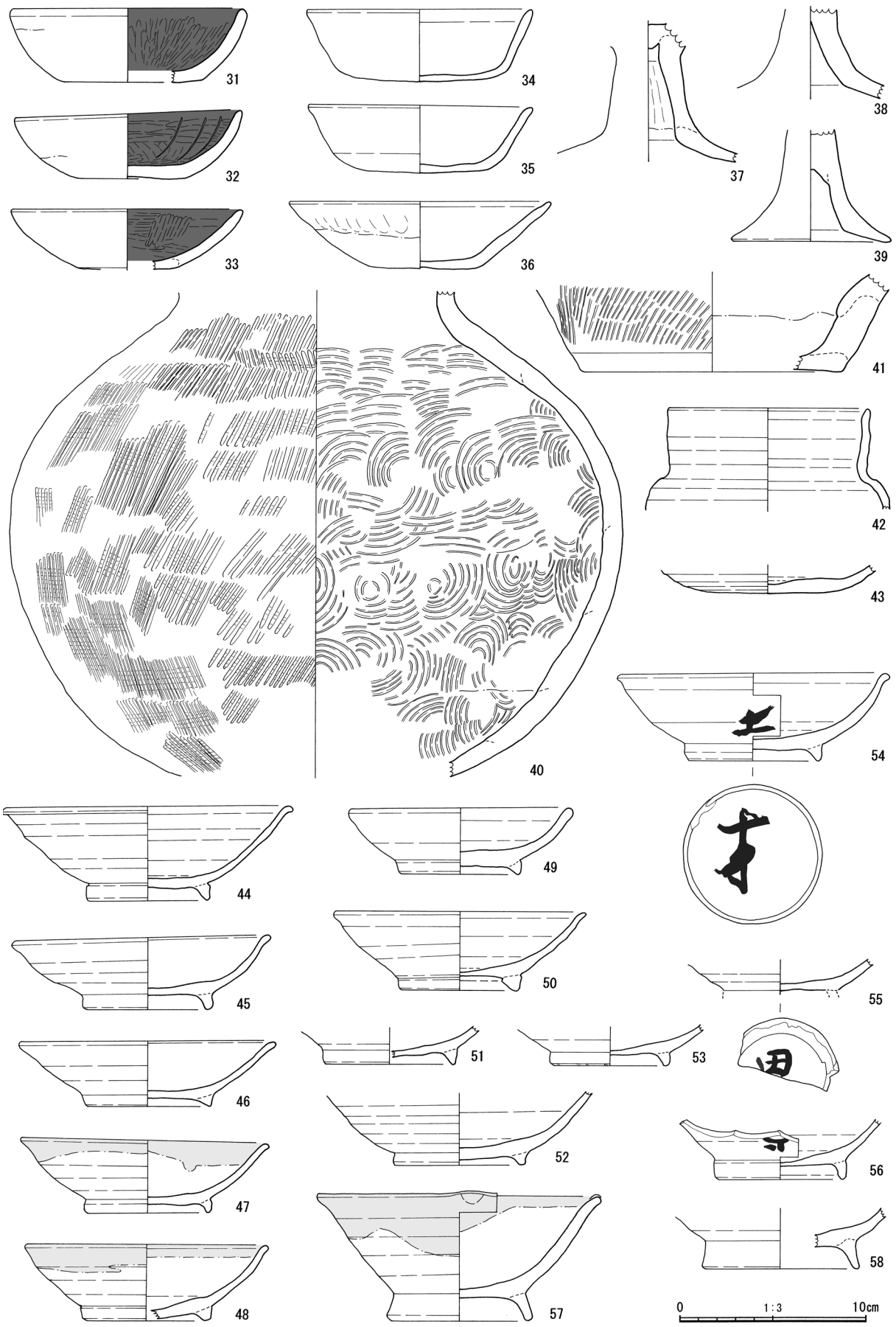
第 163 図　SD101 出土遺物実測図 1

見られない。25 は直径 12.2 ㎝、底径が 5.6 ㎝とやや小振りの碗である。内面見込みが煤けており、灯明皿として使われていたものであろう。煤は内面の縁に輪状に付着している（第 163 図参照）。全体に作りは粗雑な感がある。26 も口径が 12.3cm と小型の碗である。口縁部には釉薬の漬け掛けがされているがほとんど発色せず白色化している。高台は乾燥時の欠損で歪んでいる。27 は 1/4 程残存した碗の破片である。口径は 15.2 ㎝程あったと思われる。口縁の内外面には灰釉が漬け掛けされ発色している。内面見込みには重ね焼き痕や降灰釉もある。ただ、底部は歪み、体部には火膨れが多く、あまり良品とはいえないつくりである。28 も口径が 15.2cm 程の碗である。高台は太く、底部も厚いが、体部は薄い。口唇部に釉薬が漬け掛けされ、内碗面には降灰釉も付着しているが発色していない。29・30 は山茶碗である。29 は残存が 1/2 程で、復元口径が 15.75cm、口唇部を部分的に押し窪めてある輪花碗である。窪みは２箇所確認できるが、おそらく口径から想定して３箇所あったと思われる。30 も輪花碗の口縁部破片である。破片のため正確には出せないが、口径は 15.9 ㎝ほどであろう。

第 164 図 31 ～ 33 は土師器の内黒坏である。口径は 12.5 ㎝前後で、底部は厚く平底である。内面には放射状のミガキ痕が残っている。34 ～ 36 も土師器の坏である。34・35 は須恵器の無台坏に良く似た形状で、12cm の口径で両者とも良く似ている。36 は平底の坏であるが、体部が大きく斜めに開き、灰釉陶器のような形状である。

37 ～ 39 は土師器高坏の脚部である。いずれも坏部は欠損している。胎土は精製された粘土で、特に 38・39 は小型の高坏であろう。古墳時代に属する高坏だが、上流部から流れてきたものが上層部に堆積した可能性がある。40 は須恵器の甕で頸部～胴部の破片である。底部は欠損している。胴部の張り出しは径 33 ㎝ほどの大きさがある。外面には整形時のタタキ目が全面にあり、内面には円形の当て具痕がある。41 は須恵器の甕底部片である。底径は 14 ㎝程に復元できる。体部には焼き膨れがあり、内面には降灰釉が付着している。42 は須恵器の短頸壷の口縁から肩部の破片である。口径は約 10.6 ㎝である。当遺跡ではほかに見られない器種である。43 は須恵器の坏身で底部の破片である。

44 ～ 58 は灰釉陶器・山茶碗である。44 は復元口径が 15.6 ㎝程ある碗である。三日月高台で、体部は薄く、口唇部は強く外側へ摘み出している。重ね焼きされており、内面の降灰釉はわずかに発色している。45 は直径 13.95 ㎝の浅い碗である。内碗面は全体に降灰釉が付着し、やや発色している。焼き膨れや剥離がみられ、粗雑な作りに見える。46 も口径 13.8 ㎝と小振りな碗である。やや焼成が甘い。高台断面も三角形である。47 は口径が 13.4 ㎝程の碗である。口縁部に釉薬を浸け掛けしているが、発色していない。48 は口径 13 ㎝程の碗である。高台が太く底が厚めだが、体部は薄手の作りである。口縁部には刷毛でつけられたように施釉されている。内面見込みには重ね焼き痕があり、口縁部までは降灰釉が発色している。49 は灰釉陶器の小碗である。口径は 12 ㎝、器高は 3.5 ㎝と小さく、口唇部から底部は厚みがある。50 は口径 15.2 ㎝の碗である。高台の貼り付けと整形が粗雑なのに比べ、体部は薄手で上部に開く形状をしている。施釉や降灰釉は見られない。51・52・53 は碗の底部破片である。51・53 は高台から体部の一部まで、薄手の作りをしている。一方、52 はやや厚みがあり、灰釉陶器か山茶碗かを見分けるのが難しい。52・53 には重ね焼き痕が見える。54 はほぼ完形の碗である。底部高台内側と体部外側に「才」の墨書が２箇所確認できる。口径は 14.2 ㎝、器高は 4.6 ㎝、底径は 7.1 ㎝を測る。灰釉陶器としたが、やや体部に厚みがある。55 は碗の底部片で、高台内側に「田ヵ」の墨書がある。全体に薄手の作りで、内面には重ね焼き痕、高台は剥がれ落ちている。56 も碗の底部片で、体部外側に「上」の墨書がある。57 は体部の一部を欠くが完形に近い輪花碗である。径は 15.0 ㎝で高さは 6.8 ㎝、高台径は 7.85 ㎝を測る。高台は高さがあり、外側へ張り出した形状である。口縁部には釉薬が浸け掛けされている。58 は碗の底部片だが、57 と同じような高台を持つことから、輪花碗の底部とも考えられる。高台は高さをもち、復元径は 8.4 ㎝ほどある。



第 164 図　SD101 出土遺物実測図２

第 165 図 59 ～ 65 は土師器の坏である。このうち 59･60 は内碗面が黒い、内黒と呼ばれる土器である。底部は平底で、内碗面には放射状のミガキ痕が見られる。59 は口径が 14.85cm、60 は 10.95cm とやや小振りである。61 はほぼ完形の坏である。口径が 11.7cm、内面はナデ、外面には輪積みと指頭圧痕が残っている。62 は平底で、体部は斜めに大きく開く形状の坏である。坏とはいうものの、形だけを見ると高台のない灰釉陶器の碗に似ている。底面には回転糸切り痕がある。63 ～ 65 も 62 ほどの底部の作りではないが、同じような形状をもつ坏である。64 は内面口唇部に沈線がある。65 は完形品で、口径が 12.9cm、器高は 3.1cm である。体部外面は指押さえをナデ消している。

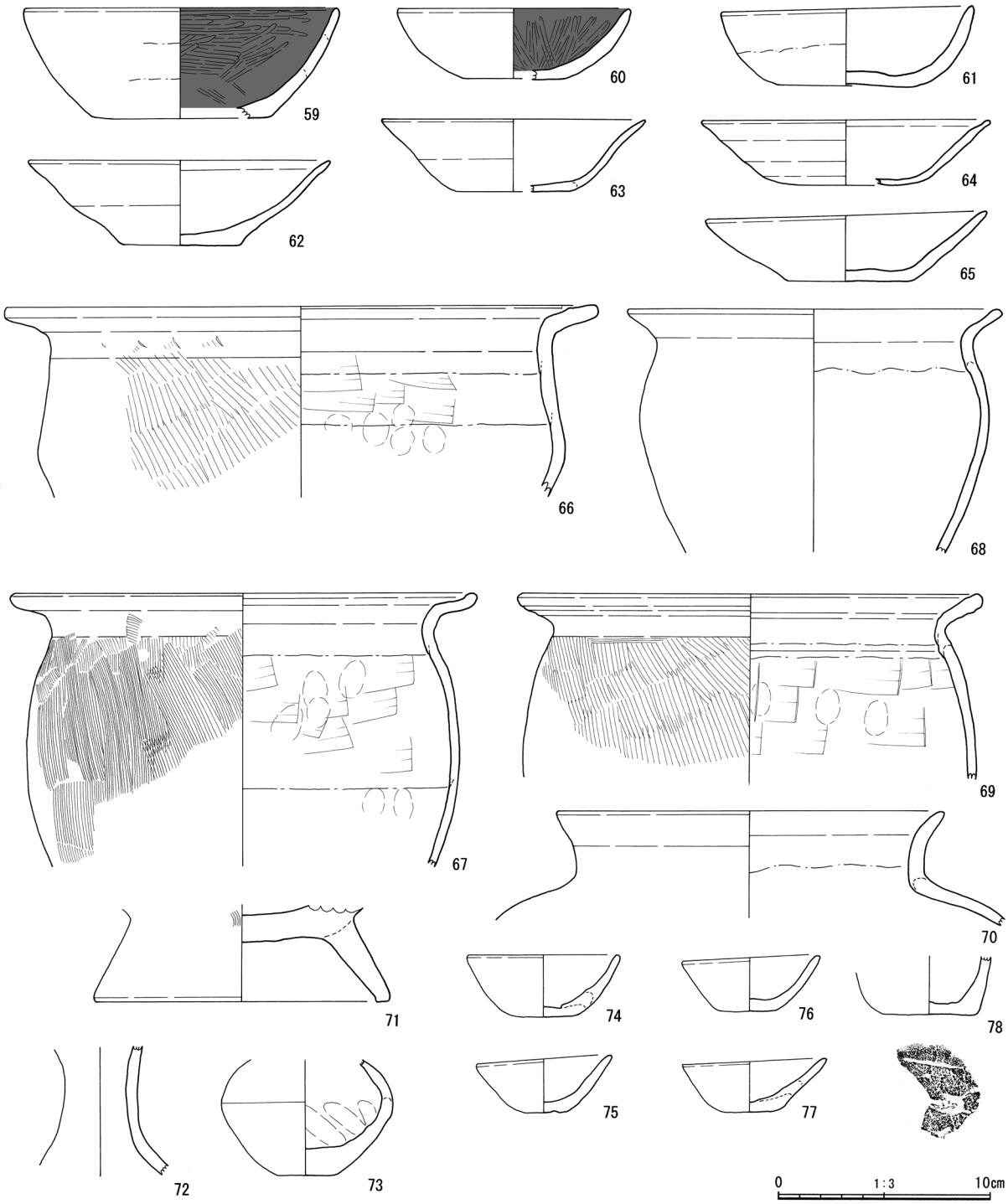
66 ～ 70 は土師器の甕である。66 は長胴甕の口縁部から体部の破片である。復元口径は 28.2cm ほどある。胴部外面は粗いハケ調整があり、内面はナデ整形されている。口縁部は「くの字」に折れ曲がり、外側へ開く。67 は口径が 22.2 ㎝で、口縁から胴部中央まで残っている。外面には非常に細かいハケ調整の痕跡がある。内・外面ともに煤が付着していることから使い込まれているものであろう。口唇部がわずかに立ち上がる形状である。68 は口径が 17.7 ㎝ほどの小型の甕である。底部が欠損している。内外面ともにハケ調整がナデ消されている。69 は復元口径が 22 ㎝程ある。外面はハケ調整、内面には指頭圧痕が残っている。口唇部はやや厚みをもつ。70 は頸部が上に立ち上がり、わずかに外側へ開く短頸の甕である。表面は風化し調整痕が見えない。

71 は台付甕の脚部片である。脚の底径は 14.1 ㎝で、高さは 4.5 ㎝と低い。胎土には１㎜以下の小粒子が多く混じる。72 は弥生時代中期後半期に属する細頸壷の頸部である。表面調整は摩耗して不鮮明である。頸部の内径は２㎝程度しかなく、小型の壷であろう。73 以下に紹介するミニチュア土器に含まれるかもしれない。

73 ～ 78 はミニチュア土器である。73 は土師器の小型壷で、口縁部は欠損している。底部は丸みをもった平底で、胴部中央が 8.1 ㎝と最も張り出している。実用に使われる大きさではない。74 ～ 77 は土師器のミニチュア坏である。最大径は 6.3 ～ 7.0 ㎝と小さく、実用品ではないことがわかる。体部は底部から輪積みし手捏ねで整形している。75 ～ 77 は完形品である。78 も手捏ねで作られたミニチュア土器である。口縁部は欠損している。底部は平底で木葉痕がある。胎土が黒褐色であることから、古い年代の可能性がある。

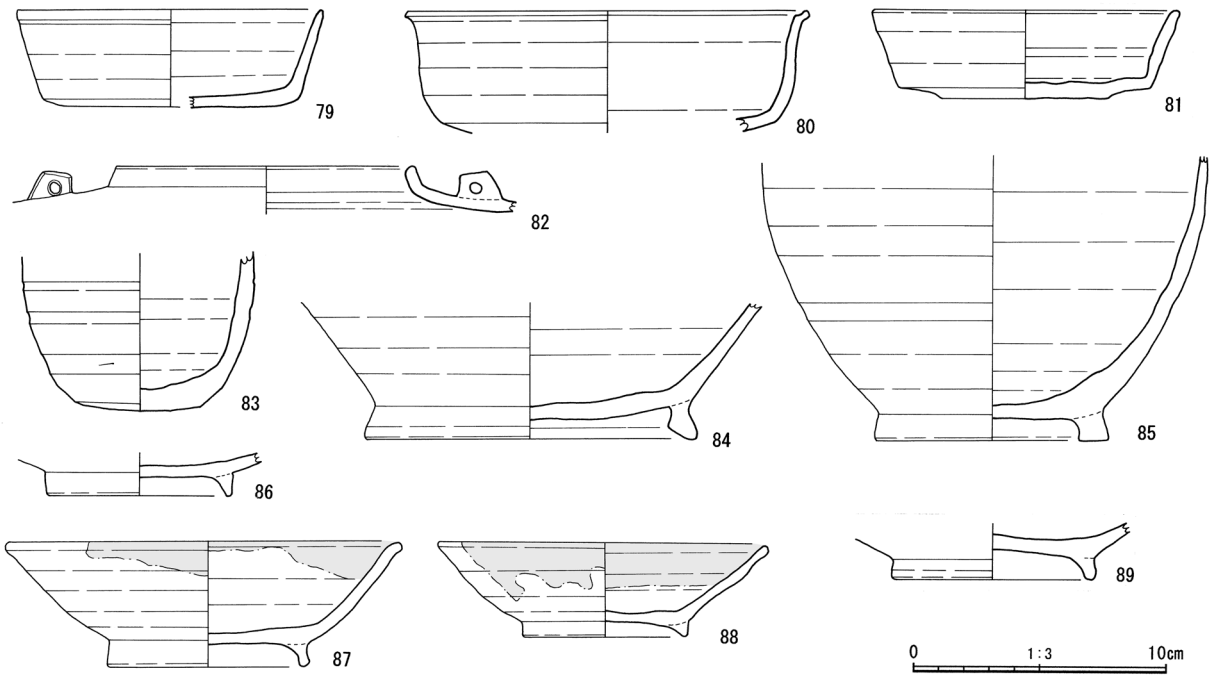
第 166 図 79 ～ 81 は須恵器の坏である。79 は無高台坏で奈良時代に属する。口径は 12.1 ㎝、底径は 8.3 ㎝を測る。80 も無台坏であろう。底から体部に丸みをもち、口唇部がわずかに外へ開く形状である。81 は体部が箱坏のようだが、底部は段が付き、接地面は 7.2 ㎝径の円形に削られた平底になっている。82 は灰釉陶器の短頸壷で、口縁部破片である。肩部に耳が付く双耳または四耳壷であろう。口縁から肩部には降灰釉が掛っている。83 は須恵器の盌である。年代は古墳時代後期、６世紀後半に属するであろう。底部は丸みをもち、体部には２本の沈線が施されている。84 ～ 89 は灰釉陶器である。84 は平瓶の底部片であろうか。底径は 13 ㎝を測る。内面見込部分には偏った位置に自然釉が付着している。85 は長頸壷の体部から底部にかけて残存している。底径は 9.1 ㎝である。86 は灰釉陶器の底部破片である。底部一面に墨が付着していることから硯に転用した転用硯の可能性がある。87 は口径が 15 ㎝強の碗で、口縁部は釉が漬け掛けされている。88 は完形の碗である。口径が 13.1 ㎝と小振りで、全体にやや歪んでいる。内碗面には降灰釉が少量付着している。89 は碗の底部片である。内面見込みは重ね焼き部分が焼き膨れて破損している。

第 167 図 90 ～第 168 図 130 は土師器の坏・碗である。90 ～ 118 は無台坏、119 ～ 122 は高台のある碗、123 ～ 130 は無台坏である。90 ～ 113・118 は底に丸みをもち、体部から口縁までは丸みをもって上部に立ち上がる形状をしている。多くに輪積みや指頭圧痕が見られることから手捏ねで整形している。口径は 11 ～ 12 ㎝前後である。胎土はいずれも精製された粘土が使われている。このうち、97・98・



第 165 図　SD101 出土遺物実測図３

101・103・109 は内面等に赤彩が認められる。112 は内面が黒くなっている。114 ～ 117 は体部の形状が灰釉陶器の椀に似ている。いずれも高台はなく無台で、轆轤により整形されている。高台はないが灰釉陶器の模倣とも考えられる。117 の底部には「守」の墨書がある。118 は平底の坏である。内面には赤彩が残っている。119 は高台の付いた碗である。ただし焼成が不十分で土師質である。整形も外面には指頭圧痕が見られ、精製品とは言えない作りである。灰釉陶器の模倣椀であろうか。120 ～ 122 も土師質で高台付き碗の底部片であることから、119 と同様の模倣椀であろう。122 は高台の内面から体部外面に墨が付着し、硯に転用されている。123 は土師器の皿である。口径は 13 ㎝近くあり、器高は 2.0

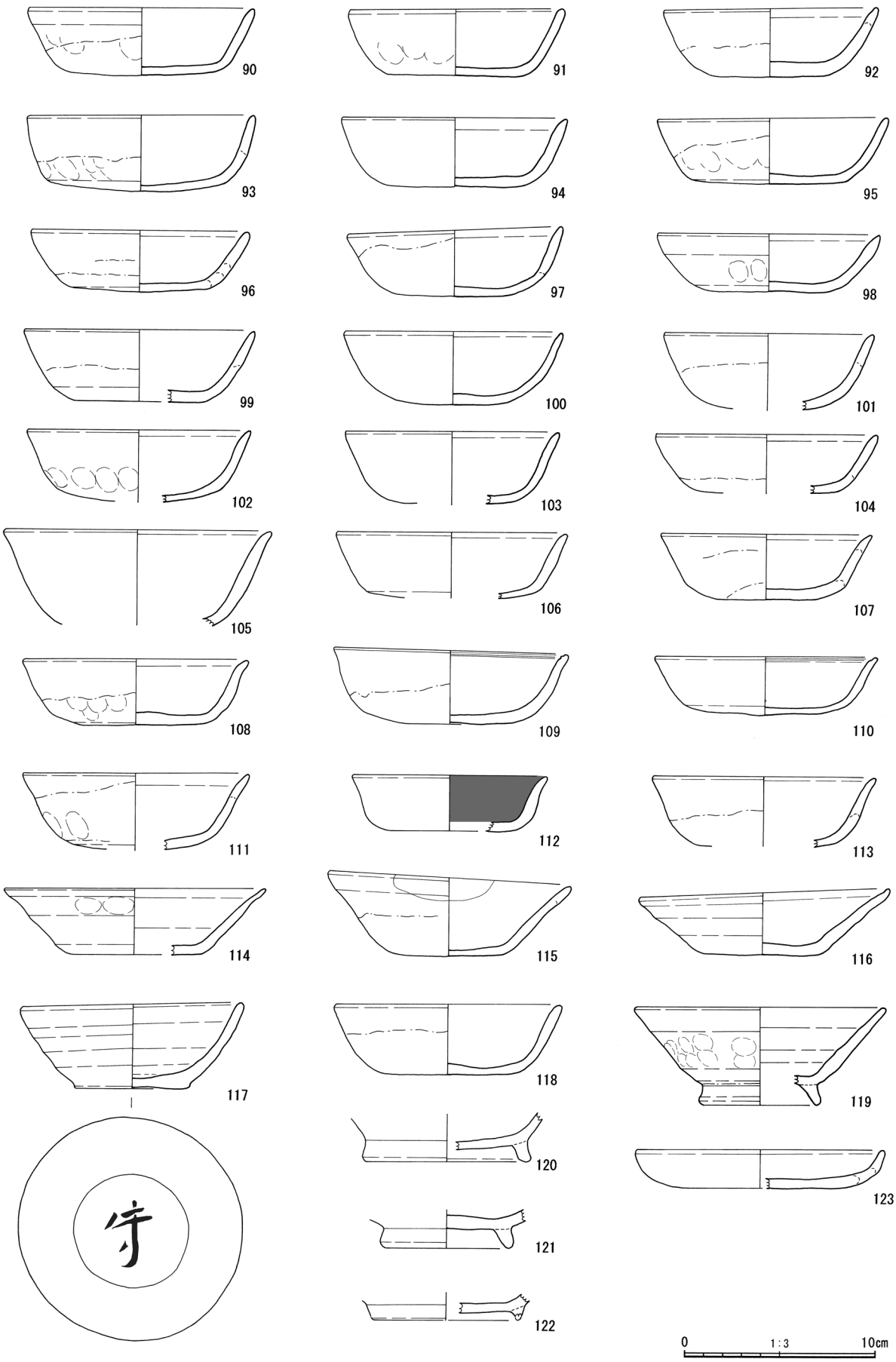


第 166 図　SD101 出土遺物実測図４

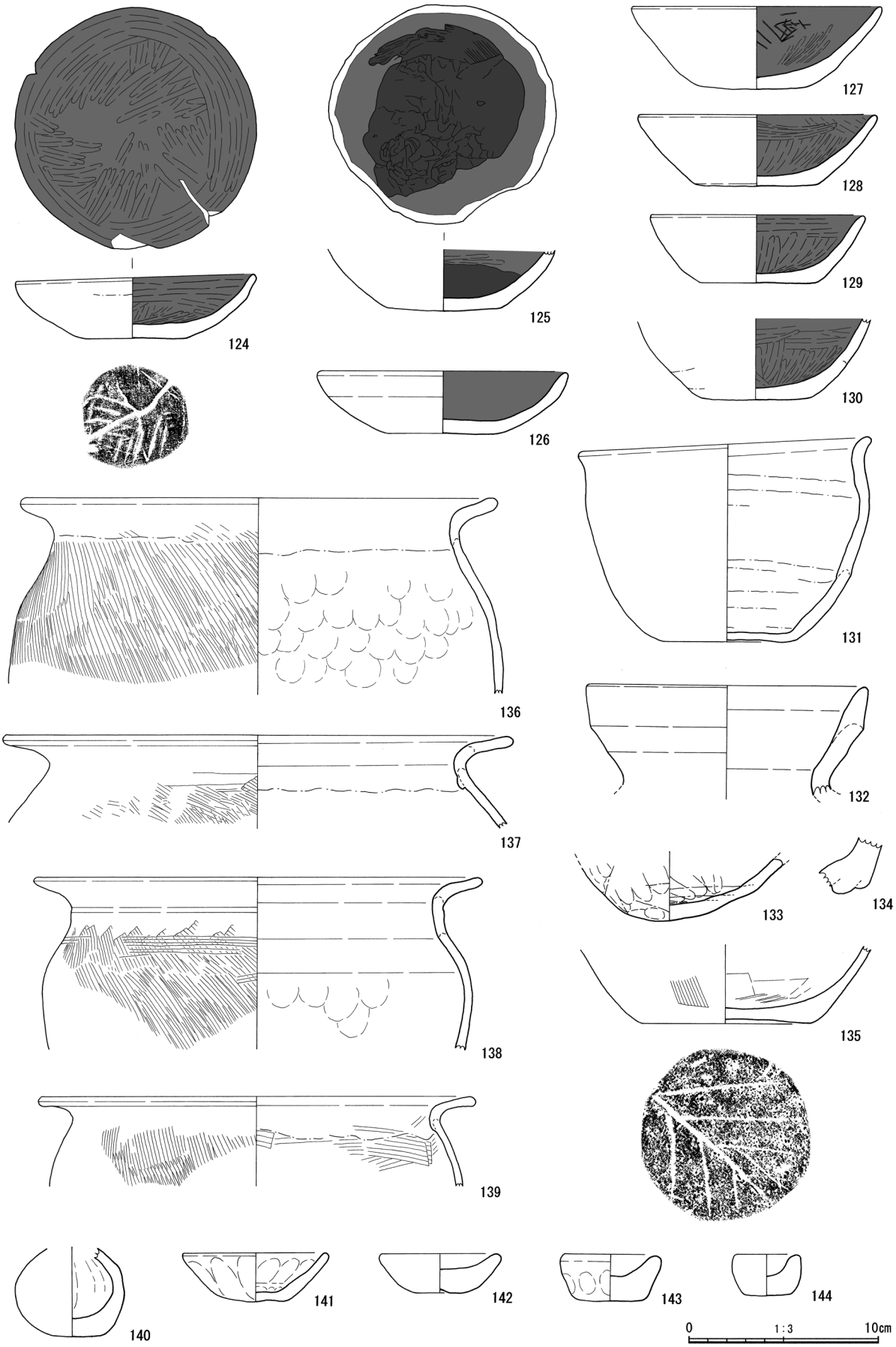
cmである。

第 168 図 124 ～ 130 は土師器の坏である。いずれも内碗面が黒くヘラミガキされ、通称、内黒土器と呼ばれる。124 は口径が 12.6 cmで、ほぼ完形、内面のミガキ痕は非常に残りが良い。平底には木葉痕がある。125 は内面の見込みに漆が付着している。一部にはハケの痕跡もあり、漆をハケで取った痕であろう。126 ～ 130 も同じく内黒土器だが、特に 128・129 には内面のミガキが顕著に残る。131 は完形の鉢である。口径 15.0 cmほどある。粘土の繋ぎ目は指で押さえ、ナデている。作りはあまり丁寧ではなく体部から口縁が歪んでいる。132 は土師器の壷口縁部である。口縁の形状は受け口状になっている。胎土には１mm以下の粒子が多く含まれている。133 は器種や年代は不明だが、おそらく甕の底部と思われる。底は丸底で平坦面を作り出していない。外面には指ナデ押さえ､内面には輪積み痕のほか、わずかに赤彩が見える。134 は壷型土器の折り返し口縁部である。小片のため口径が割り出せないが、かなり大型の壷であろう。胎土が白く、１mm以下の微粒子が多く混じる。135 は甕の底部か。底部は平底で木葉痕がある。胎土には径１mm以下の粒子が混じる。136 ～ 139 は口径が 20 cmを超える土師器の甕である。136 は口縁部から体部にかけて残存している。外面はハケ調整により整形され、内面は輪積み部分を指押さえ後にナデている。137 も同様の整形が見られる。胎土には微細な雲母片が混じっている。138 は外面のハケ調整の最後に横方向のハケ目が周囲を巡っている。胎土には雲母が混じる。外面には煤が付着する。139 も雲母片の混じる胎土である。内面はハケ調整後にハケ目をナデ消している。140 ～ 144 はミニチュア土器である。いずれも手捏ねで製作されている。140 は口縁部が欠損している壷型土器のミニチュアである。粒子は含まれず精製された粘土を使っている。141 は坏状のミニチュアである。粘土紐を底部中央から螺旋状に巻いて体部へと引き上げている。142 も坏のミニチュアであろう。全体に厚みをもち、口唇部だけ上に引き上げて容器状にしている。143 も粘土塊を上部から窪めただけのつくりである。底部は平底になっている。144 は最大径が 3.5 cmと小型のミニチュア坏である。

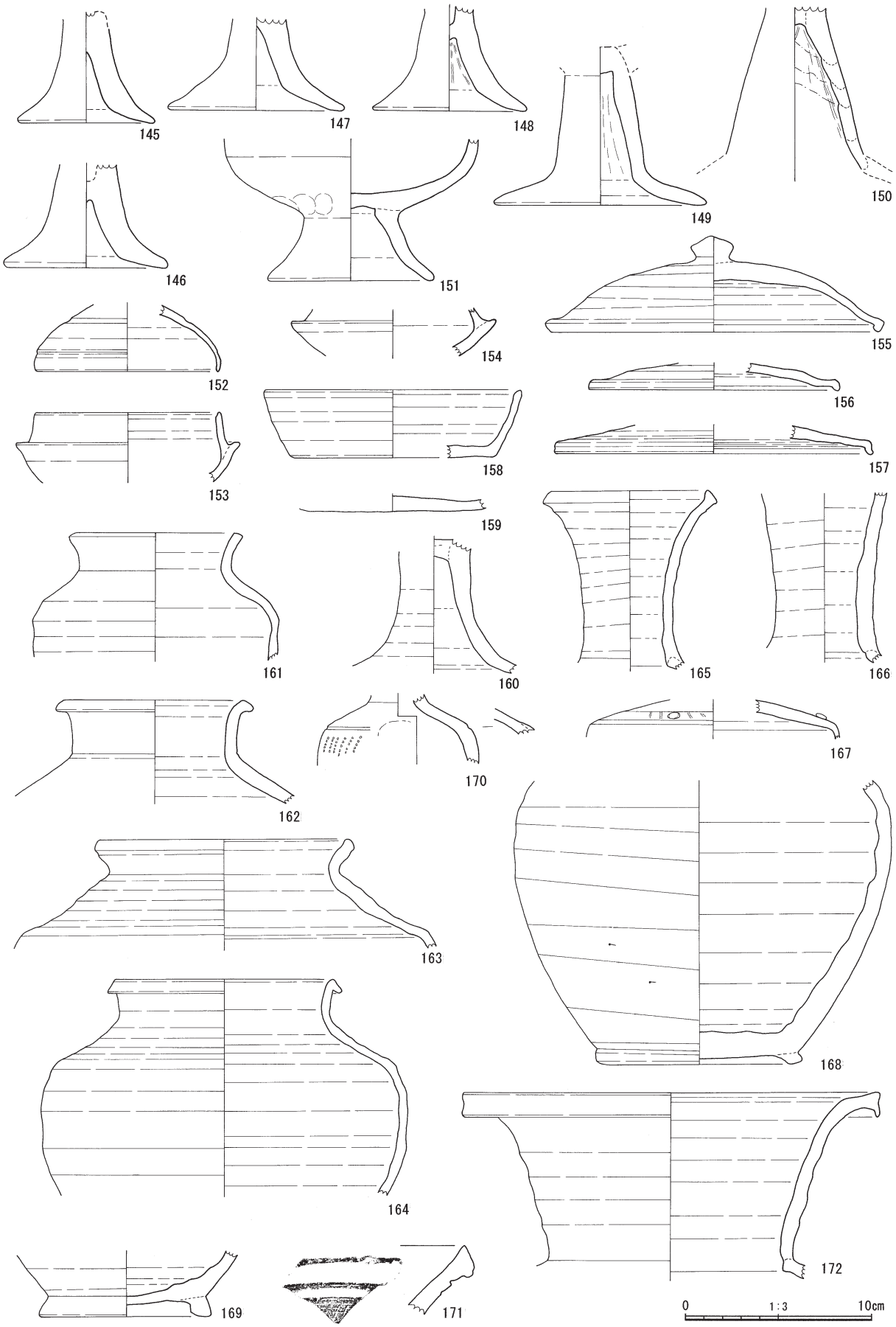
第 169 図 145 ～ 151 は土師器高坏である。いずれも坏部が欠損し脚部のみが残っている。145 は底径が 7.4 cmと小型である。146 は 8.85 cmの脚部径がある。脚部の芯はヘラ状の工具ですり鉢状に刳り抜かれている。147 の最大径は 9.5 cmである。148 は脚の頂部に結合のための穿孔がある。149 は脚部径



第 167 図　SD101 出土遺物実測図５



第 168 図　SD101 出土遺物実測図６

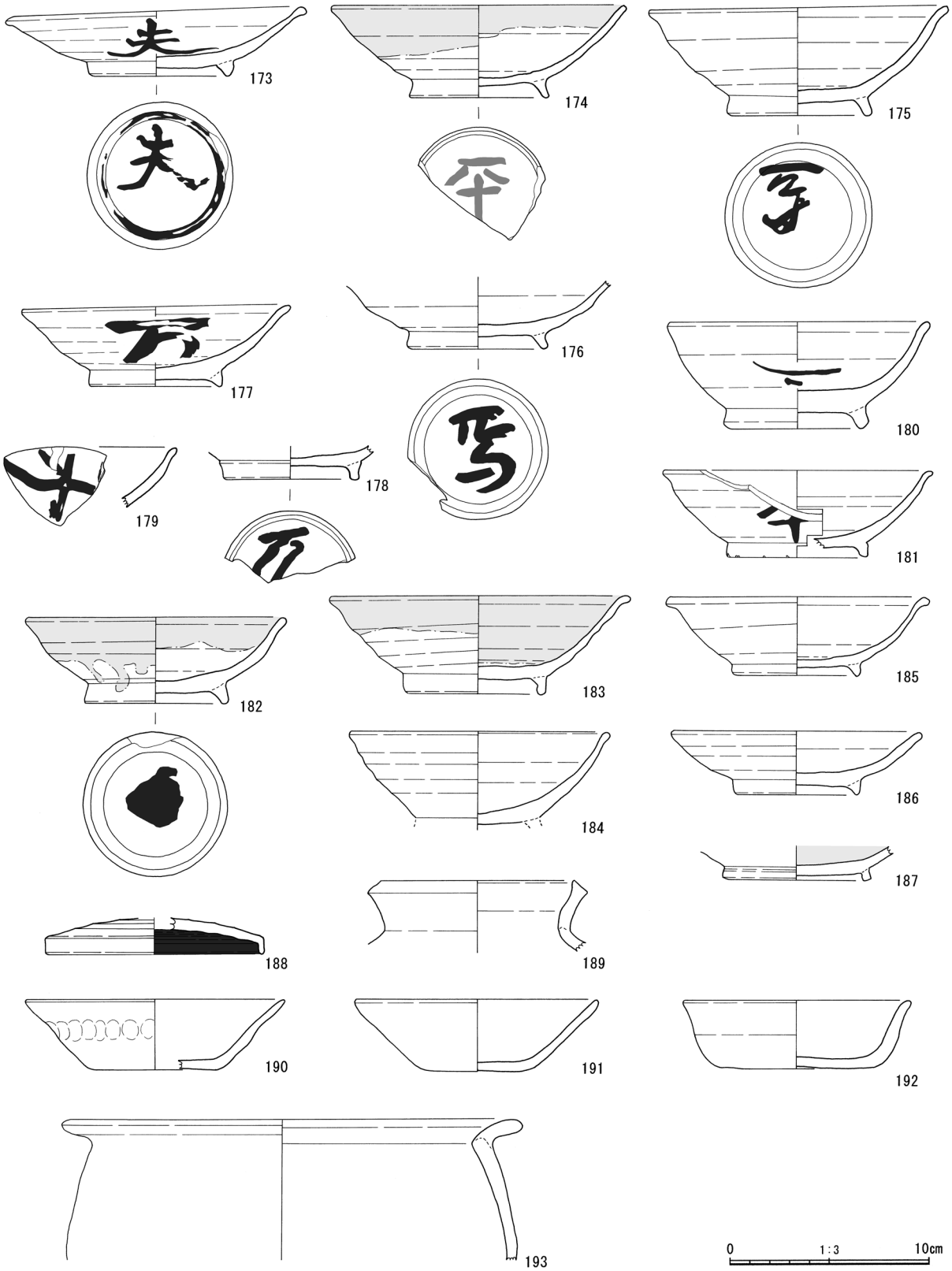


第 169 図　SD101 出土遺物実測図７

が 11.4 ㎝と一回り大きい。150 は坏部と脚部裾が欠損している。脚の中央部に膨らみを持ち、高さも残存しているだけで 8.8 ㎝と高さがある。151 は坏と脚との付け根が幅広く、坏部も丸みをもって立ち上がる形状の高坏である。152 ～ 154 は古墳時代の須恵器である。152 は７世紀代の坏蓋で、口径は 9.7 ㎝に復元できる。153・154 は坏身である。154 は坏蓋と同じく７世紀代、153 は６世紀前半に属するだろうか。155 ～ 157 は奈良時代の須恵器坏蓋である。155 は口径 17.5 ㎝で頂部に擬宝珠状の摘みがある。156・157 は坏蓋の小片である。156 の復元口径は 13.2 ㎝と小振りで、157 は 16.8 ㎝ほどある。158・159 は須恵器の坏身である。158 は無台で、箱型の形状である。159 は底部の破片のため全体の形状は不明である。160 は湖西産の高坏脚部で、坏部と脚裾が欠損している。161 も湖西産で、器種は短頸の小型壷である。口縁部内面から外面肩まで自然降灰釉が付着し、一部発色している。162 ～ 164 も壷である。162 は短頸の壷口縁～肩の破片である。口唇部が強く外へ屈曲する。163・164 は須恵器の壷頸部である。163 は降灰釉が発色している。164 は小型の短頸壷で口縁部が折り返してある。165・166 は長頸壷の頸部である。口径は 8.4 ㎝、自然釉が発色している。166 も同じ器種だが口縁部を欠いている。167 は須恵器壷片である。肩部は屈曲部に近いところを沈線で区画し、そのなかに櫛刺突と円形付紋が配されている。全体に自然釉が発色している。168 は壷胴部から底部まで残っており口縁部は破損している。外面と内面の一部に自然釉がある。169 も壷底部である。170 は須恵器の瑳である。胴部に櫛刺突文がある。第 184 図 270 と接合する。171・172 は広口壷の口縁部である。

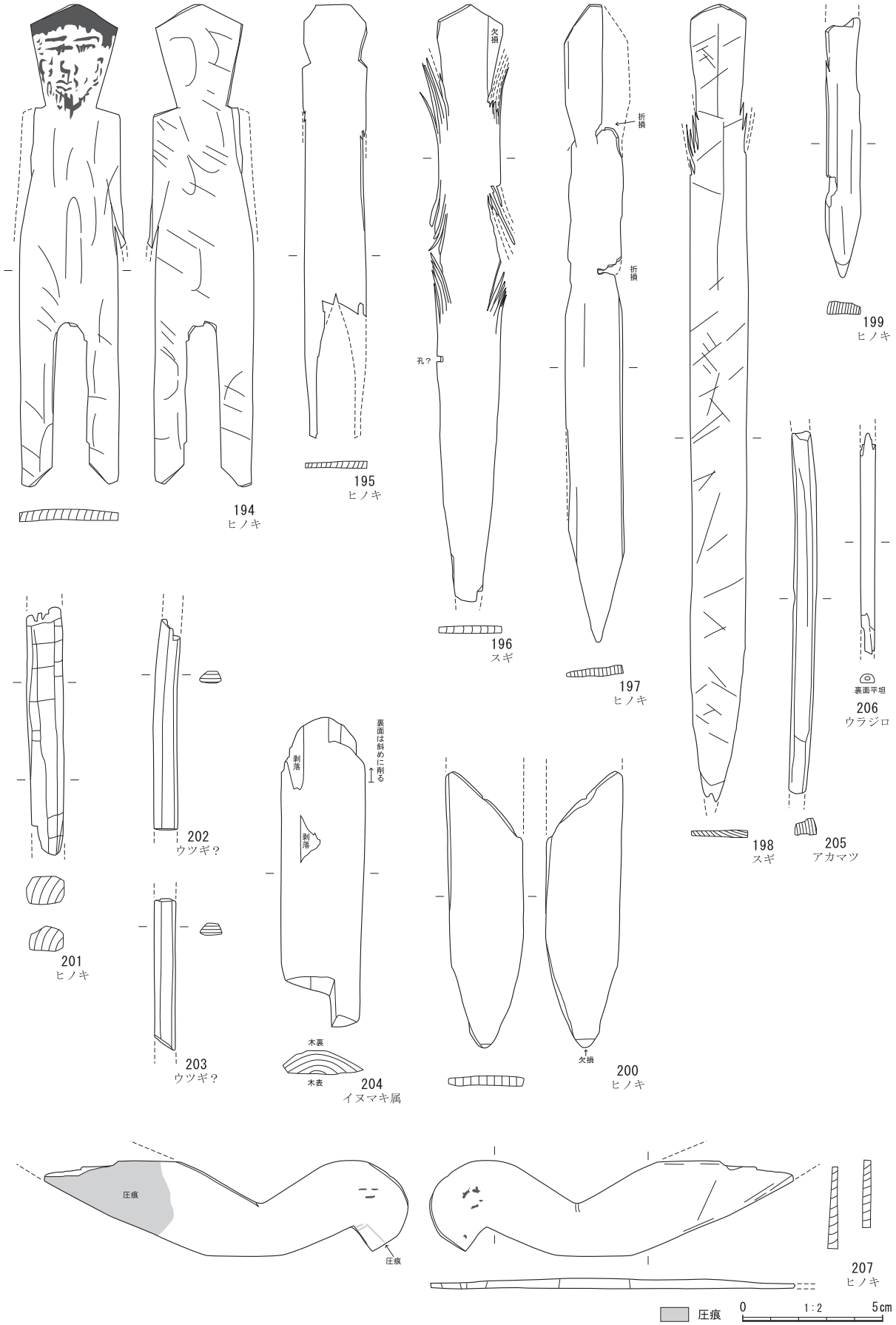
第 170 図 173 ～ 193 は SD101 下層より出土した灰釉陶器、および試掘坑や覆土内より出土した土器である。173 ～ 189 は SD101 下層より出土した灰釉陶器他である。173 は完形の皿で、体部外面と高台内側に「夫」の墨書がある。174 の碗は高台内側に朱書で「平」とある。175 の碗は高台内側に「馬」と墨書がある。内面見込には犬と思われる獣足痕が付いている。176 も高台内側に「馬」の文字がある。内面見込みは硯に転用された墨の痕跡がある。177 も完形の碗で、体部外面に「万」の墨書が見える。178 は同じ「万」の墨書が高台内側にある。179 は碗の外面口縁部付近に墨書があるものの文字は判読できない。180 は碗外面に墨書がある。漢数字の「二」か。181 の碗も体部外面だが、「平」か「本」の墨書であろう。高台内側の底には焼成後に開けられたであろう小穴がある。182 はほぼ完形の碗である。口縁部には釉薬が漬け掛けされている。高台内側中央には墨痕が見える。183 も口縁部に漬け掛けされた釉がある。184 は高台が剥がれ落ちてしまっている碗である。185 はやや小振りな碗である。186 は灰釉陶器の皿だが、焼成不良で土師質のような色調になっている。187 は方形高台で、内面の釉薬が発色している灰釉陶器の皿でＫ 14 号窯式の時期に属する。188 は短頸壷の蓋である。蓋上面には降灰釉がわずかに発色している。蓋は硯に転用され、内側に墨が付着している。189 は短頸壷の口縁部破片である。口径は 9.6 ㎝ほどと小型である。190 ～ 193 は SD101 の試掘坑より出土した。190・191 は 114 ～ 117 と同形の土師器の坏である。192 も土師器の坏だが、体部の立ち上がりが垂直に近い。193 は土師器の甕である。口縁部は「くの字」に屈曲する。外面全体に煤が付着している。

第 171 ～ 177 図 194 ～ 249 は 5-2 区の溝 SD101 より出土した木製品である。第 171 図 194・195 は祭祀具の形代のうちの人形である。SD101 の最下層より出土した。194 は人形の右肩から腕にかけてと左腕の先端一部を欠損しているが、全長 17.25 ㎝の完形品である。最大幅は 3.7 ㎝、ヒノキ材の柾目板を 0.4 ㎝まで薄く削り込んでいる。頭部は圭頭状に加工し、頭頂部から４㎝ほど下を、上部から深く下方から浅く斜めに切り欠き、首から肩を表現している。顔面には髪・眉・目・鼻・口・髭を墨描きしている。腕は下方から上に切り込みを入れている。脚は下方から平行に切り込み、２本の足を作り出している。下端部は斜めに内側へ削り、つま先を表している。195 は顔の墨書がなく表裏の表現がない人形である。ヒノキの柾目板は 0.25 ㎝と非常に薄い。向かって右側の脚が欠損している。頭頂部は六角形に削り、肩は斜めに切り込みを入れてある。腕は下方から側面に切り込みを入れている。腰を表現する切り欠き

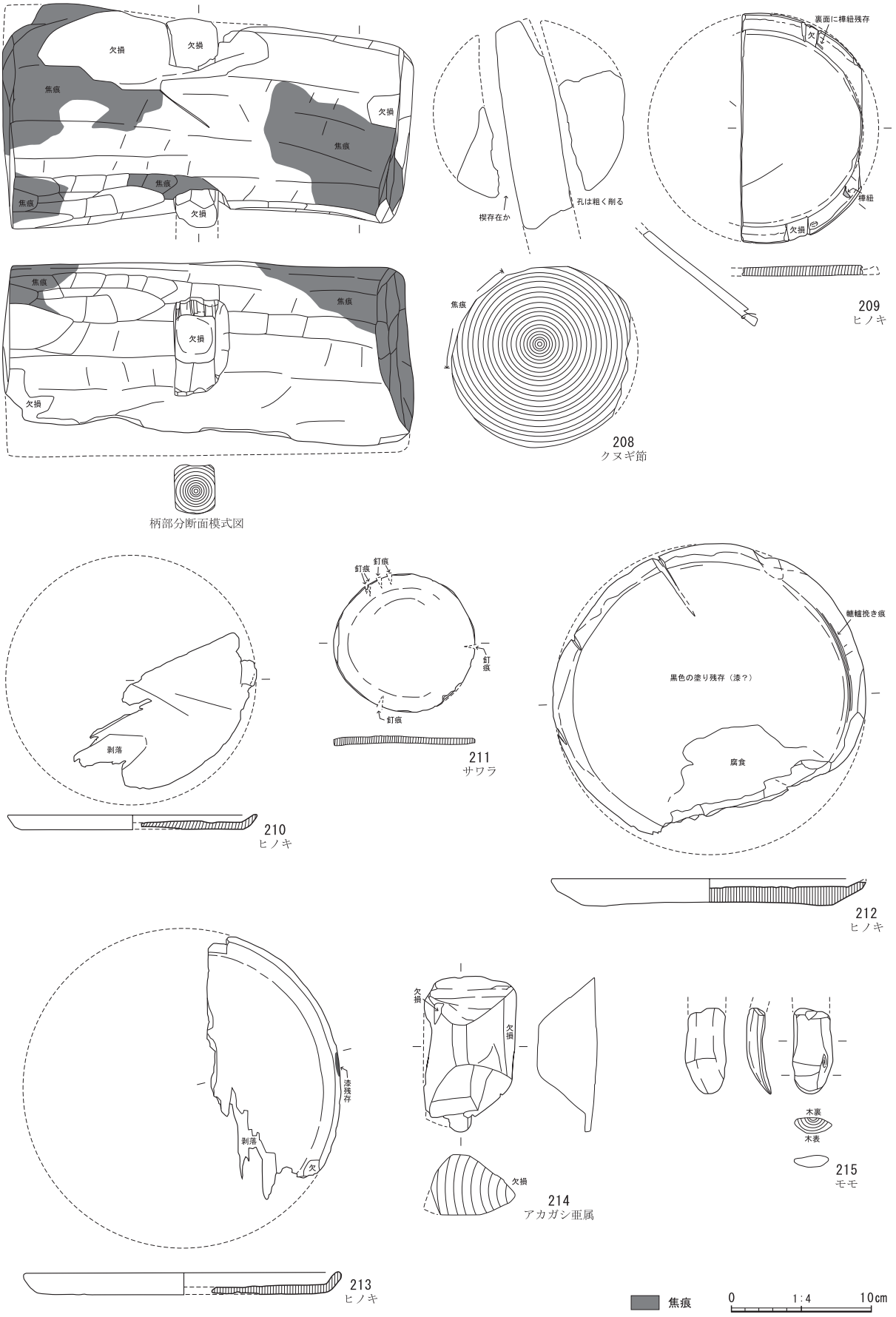


第 170 図　SD101 出土遺物実測図８

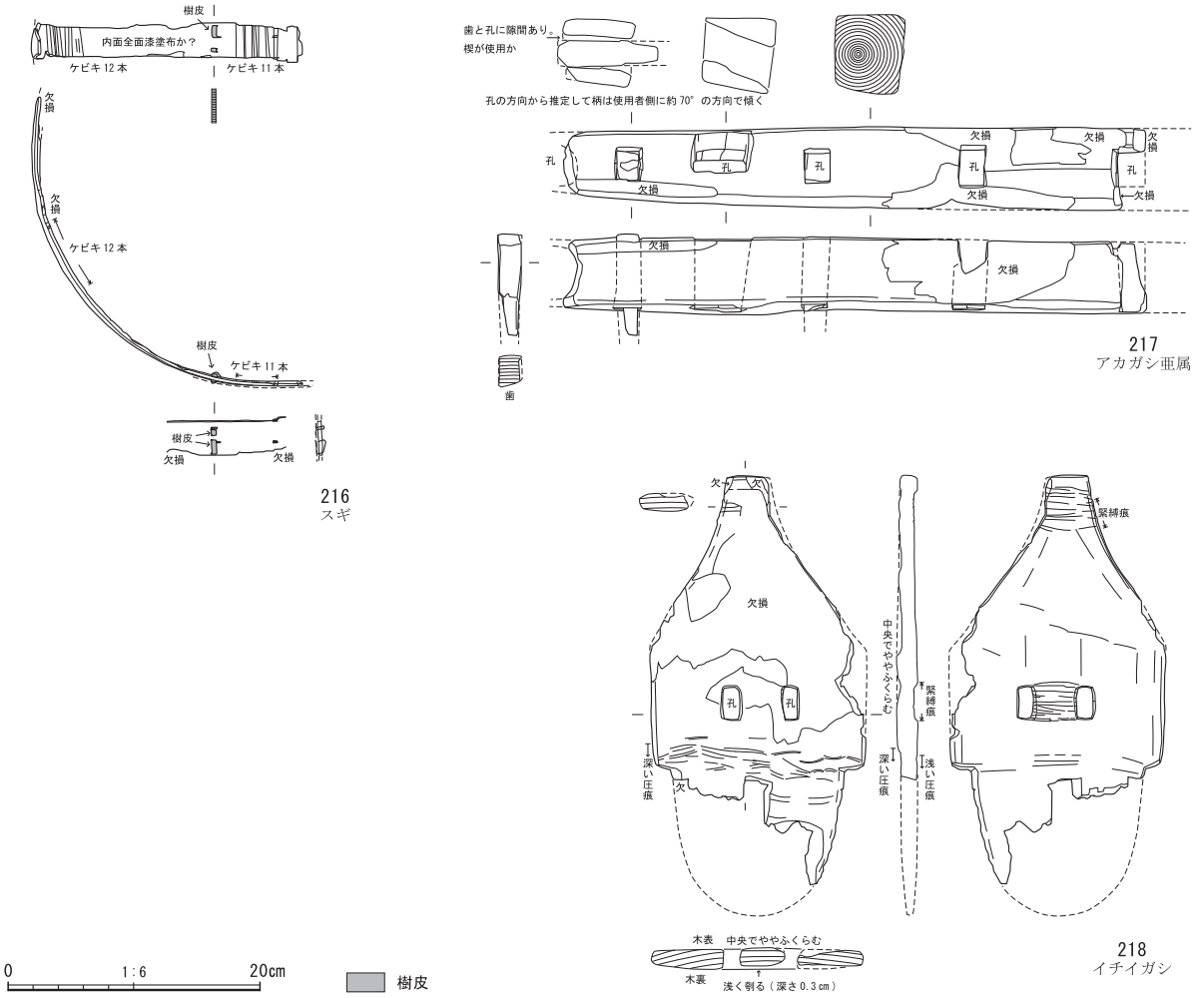
はないが、腕の切り込みの際に、わずかに斜めに削っている。脚間は湾曲した三角形に切り取り、細い足となっている。196 ～ 200 は祭祀具の斎串である。いずれも SD101 覆土下層より出土した。196 は下端部が欠損しているが 21.4 ㎝の残存長、最大幅は 3.4 ㎝である。スギの柾目板を使っている。側面に



第 171 図　SD101 出土遺物実測図９

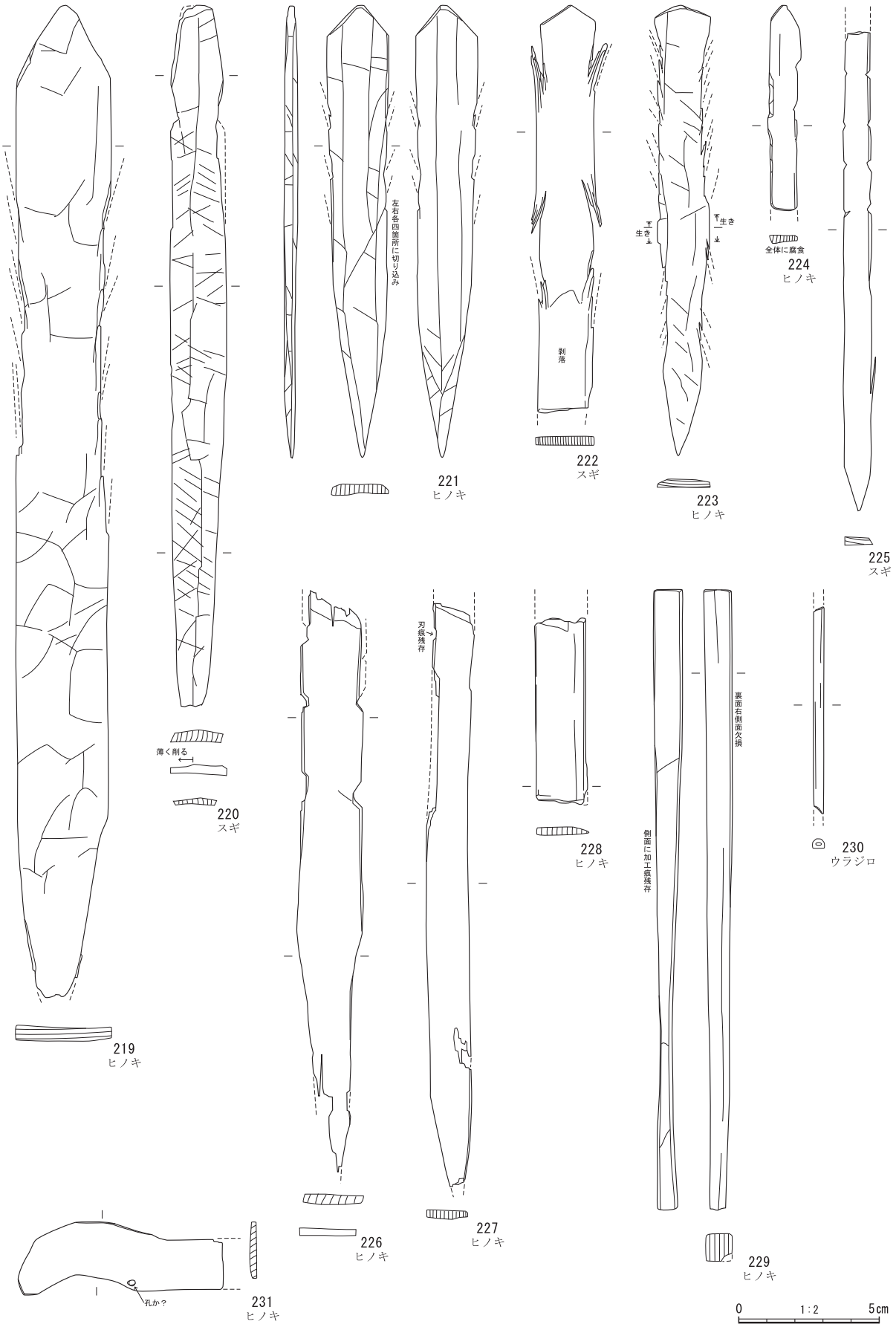


第 172 図　SD101 出土遺物実測図 10

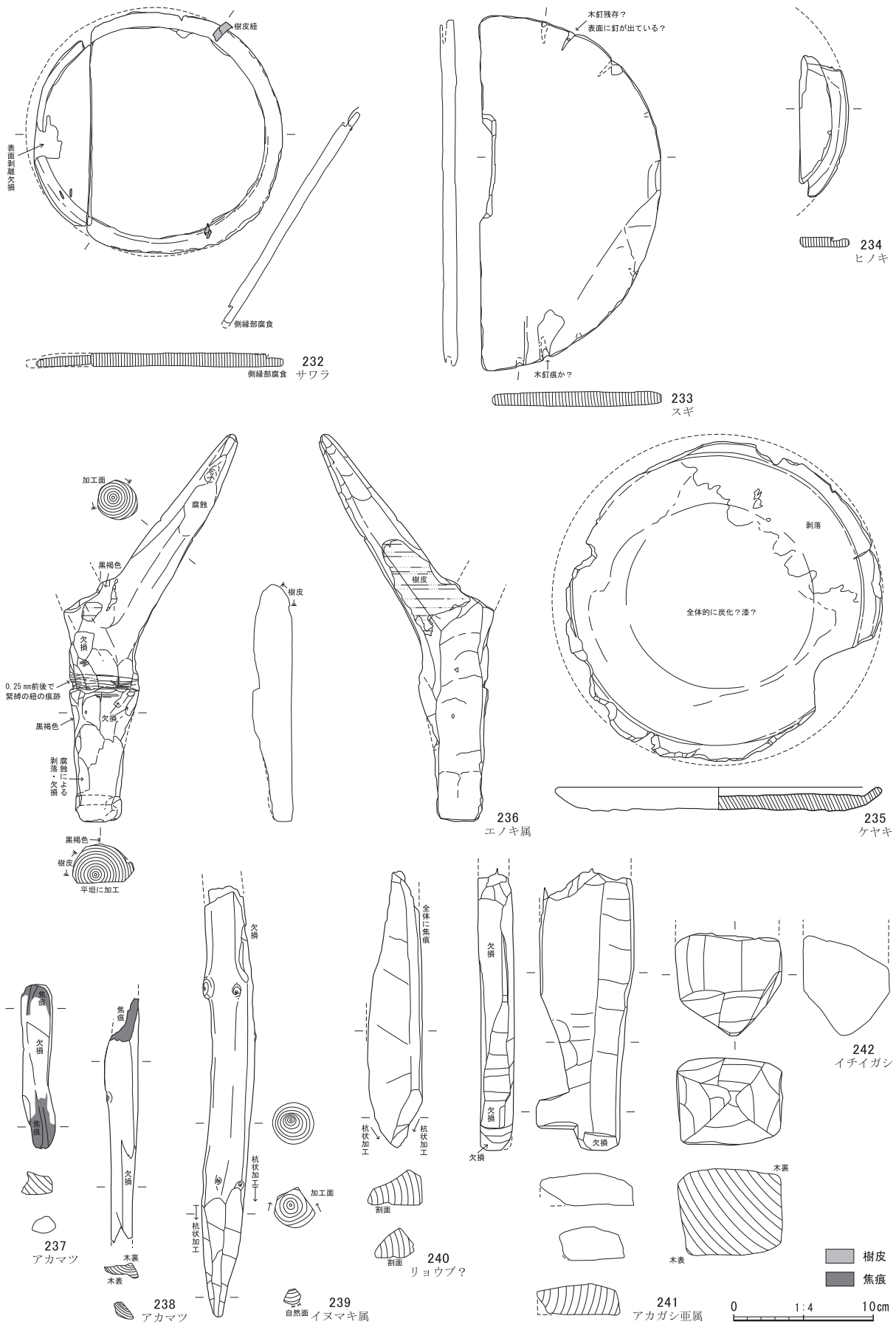


第 173 図　SD101 出土遺物実測図 11

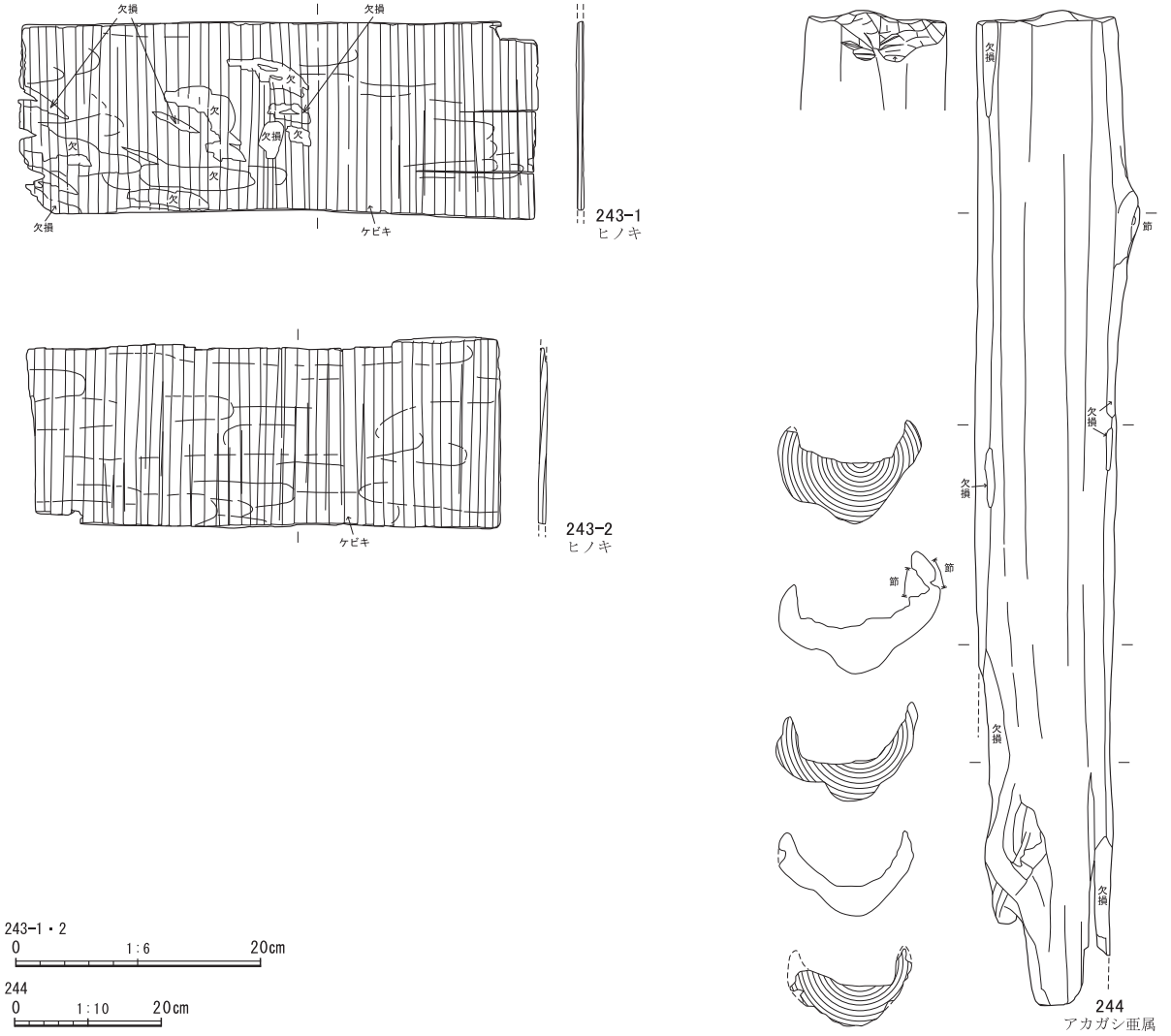
複数ある切り込みの一部も欠損している。上端部は圭頭状に加工し、下端部は剣先状に削っている。左右側面に３箇所ずつの切り込みがあり、上段は上から、中段は下から、下段は上から切り込まれている。各所５～６回ほど刃物を入れて切り込んでいる。**197** は全長 22.8 ㎝、幅は 2.05 ㎝で 0.3 ㎝のヒノキ柾目板で作られた斎串である。頭頂部右側を欠く。頭頂部の上端は水平箇所を残して両側を斜めに削り、胴部は両側から２箇所ずつ切り込みを入れている。下方は剣先状に削られている。墨書などは見られない。**198** はスギの薄板を使った斎串である。下端部がわずかに欠損している。残存帳は 28.4 ㎝、最大幅は 2.1 ㎝と長細い形状をしている。頭頂部は緩やかな圭頭状に削り、下端部は剣先状に尖らせている。上部の両側面に上から４～５回ほど切り込みを入れている。表面に細かい傷跡がある。**199** は斎串の破片であろう。剣先状に削られた下方のみで、9.3 ㎝、幅 1.25 ㎝のヒノキの柾目材である。左右側面には上方向から切り込まれた痕跡が残っている。**200** もヒノキの柾目材の薄板であることから斎串の一部であろう。上部は欠損し、剣先状の下方部だけが残っている。残存長は 9.9 ㎝、最大幅は 2.75 ㎝である。**201** ～ **206** は棒状の木製品だが用途は不明である。**201** は４面に加工されているが上下は欠損している。下方に向かい細くなっている。ヒノキ材で 8.9 ㎝、１㎝強の幅がある。**202・203** は端部が欠損した棒状製品だが、断面形は台形に整形されている。同一固体と思われるが接合点はない。樹種はウツギ？か。**204** は表皮下の面が残るイヌマキ属の木片である。もともとの径はさほど大きくはなく、整形時に発生した断片の可能性もある。**205** は全体に腐食し上下両端は欠損している。アカマツ材から４面の棒状に



第 174 図　SD101 出土遺物実測図 12



第 175 図　SD101 出土遺物実測図 13

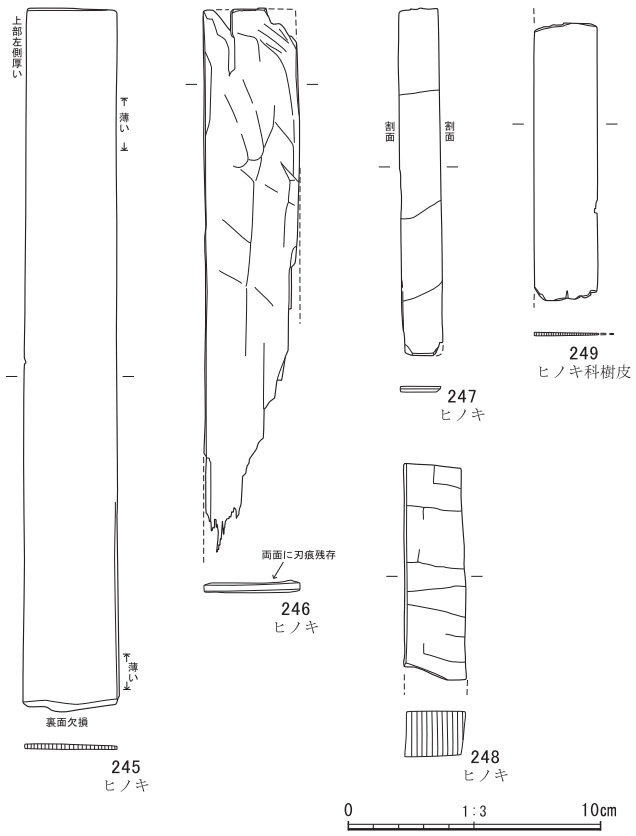


第 176 図　SD101 出土遺物実測図 14

加工してある。**206** の材質はウラジロ（シダ類）である。上下両端が欠損しているため加工品かどうかは判断できない。ただ、材質からして加工品ではなく自然遺物の可能性もある。

207 は溝 SD101 の覆土下層より出土した祭祀具の形代で鳥形を模した製品である。鳥形は側面から見た鳥の頭から胴部を表現したもので、厚さ 0.35 ㎝のヒノキの柾目板を加工している。鳥の尾の方向は欠損している。最大長は 12.9 ㎝、最大幅は 3.5 ㎝を測る。厚みは中央が最も厚く、両端へ行くほど薄くなっている。鳥の頭は丸く削られ、側面から切り欠きを入れることによって嘴を作り出している。同様に首から胴部も側面からＶ字に大きく切り欠きを入れて首と胴部の境を表現している。表裏両面共に目と嘴を墨描きしている。目は径 0.7 ㎝の円形に筆描きされている。嘴は切り欠きによって尖らせた部分に一筋描きされており、嘴の上下の境を表現していると思われる。胴部には羽の表現はなく、何かを組み合わせたような痕跡も見当たらない。また側面に棒状製品を差し込んだような孔も見られない。本品の年代は、人形や斎串と同じ奈良時代と思われるが、同時期に墨書により表現された鳥形は県内でも数少ない。

第 172 図 **208** は工具の槌に属する掛矢である。頭部は最大径 16 ㎝程のクヌギ節の芯持ち材で作られている。表面には加工痕が残っており、槌部もほとんど使用された痕跡が見えないことから、未製品の



第 177 図　SD101 出土遺物実測図 15

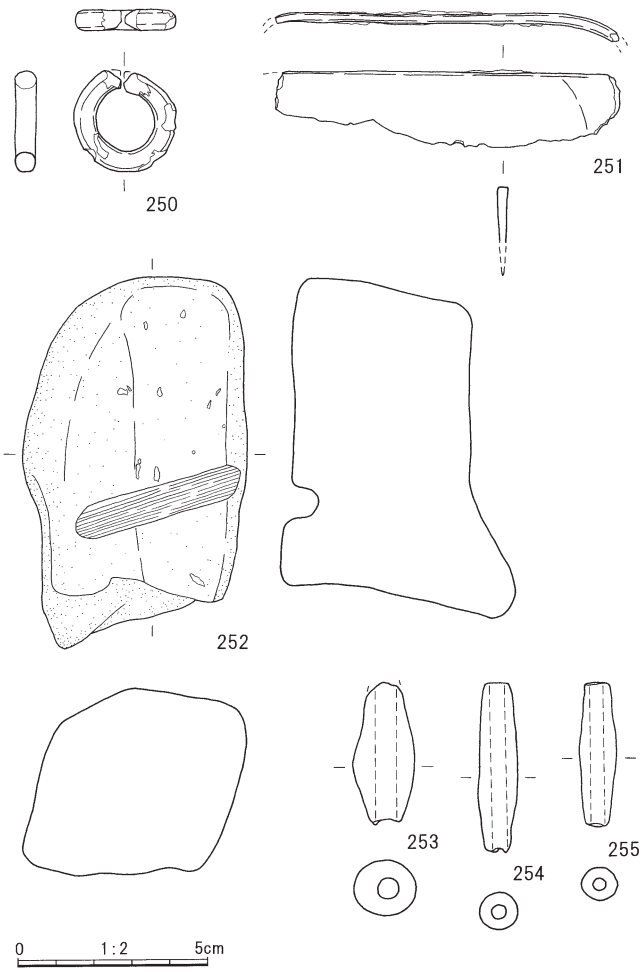
可能性もある。枘孔には柄の一部が残存する。柄もクヌギ節の芯持ち材から方形に加工されている。表面には焦げたところがある。柄孔と柄との間には隙間があることから楔を打ち込んで固定していたと考えられる。209 ～ 211 は容器である。209・211 は底板（蓋板）で円形曲物である。209 はカキゾコの曲物でヒノキ柾目材である。２箇所に樺皮紐が残っている。211 はクレゾコの曲物である。径は 10 ㎝程度であることから柄杓であろうか。側面に木釘痕が５箇所ある。210・212・213 はヒノキ製の挽物の木皿である。210 は直径が 18 ㎝に近い皿で、高さは１㎝程ある。212 は径 22.5 ㎝の木皿である。外面は縁部が黒く顔料が塗られていたものか。内面の立ち上がりには挽き痕が見える。213 は直径が 23 ㎝近くある木皿である。口縁部には漆のような顔料が残っている。214・215 は用途不明品である。214 の樹種はアカガシ亜属であることから農具の可能性が高いが、破片のため種類はわからない。215 は先端が匙状に曲がり、上部は欠損している。樹種は木製品には珍しいモモが使われている。

第 173 図 216 は曲物の側板である。内側にはケビキ線がある。樺皮綴は２箇所残存している。217 は馬鍬の台である。左右両端は欠損しているため全長は測れない。把手は残っていないが、孔の角度から推定して約 70 度傾いている。枘孔には歯が２本残っている。歯の枘穴は４箇所あり、12.3 ㎝ほどの間隔があく。樹種はすべてアカガシ亜属で堅木を使っている。218 は組み合わせ鋤の平鋤である。鉄製のＵ字型鋤先を装着する形態のものである。鋤先は一部欠損しているが、ほぼ全体形がわかる。上部に柄を装着する軸部があり、肩は真横に張り出さず斜め下方に下がる。両側から括れを入れて鉄刃が装着する部分を作り出している。表面は平坦だが、鋤身裏面には膨らみをもたせてある。中央に長方形の枘孔が２箇所並んでいる。柄は軸部と枘孔とで固定する。裏面軸部上端には柄を固定するための突起があり緊縛痕が見える。枘孔間にも柄を固定したときの緊縛痕がある。樹種同定の結果、イチイガシの材であることがわかっている。

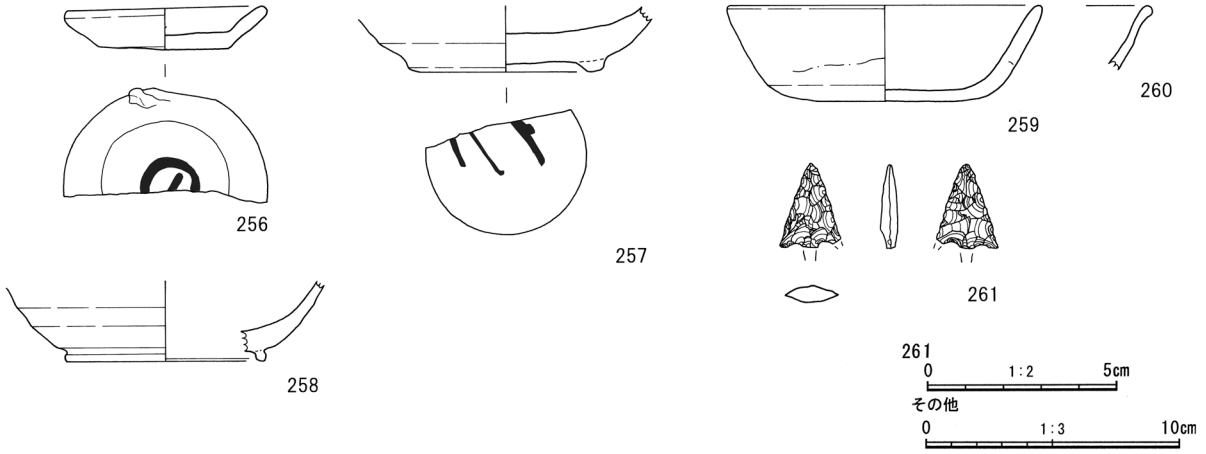
第 174 ～ 177 図 219 ～ 249 は 5-2 区の溝 SD101 より出土した木製品である。219 ～ 228 は薄板に加工された祭祀具の斎串である。10 点中８点がヒノキ材で、残り２点がスギ材で作られている。219 は残存長が 35.2 ㎝ほどある斎串である。下端部はわずかに欠損している。上端部は圭頭状につくり、下端部は剣先状に削る。左右両端部は上から斜めに７箇所切り込みを入れている。220 も先端が丸みをもった圭頭状の斎串である。頭部のすぐ下の肩に上部から切り込みを入れている。221 は完形の斎串で全長 16.1 ㎝である。圭頭状の上部に、下方は剣先状に加工してある。左右側面には上部から刃物で４箇所ずつ切り込みを入れている。222 は下端部が欠損している。左右側面は上方からと下方から６箇所を切り込み、１箇所につき４～６回、同じ場所に切り込みを入れている。223 も左右に上下から複数個所に切り込みを入れている。224 も左右が欠損しているが同じような加工がされていたものであろう。225

は上部が欠損している。左右側面には片側につき４箇所ずつ浅く切り欠いている。226 は腐食が著しく進んでいる。225 と同じく左右に浅い切り欠きが入っている。227 も薄板に加工された斎串だが１箇所だけ切り欠きが認められる。228 は上部が欠損、下部は切断面になっているが斎串の一部であろう。229 は全面加工された箸状の木製品である。上部は太く、下方に向かい細くなっている。230 は径 0.35 ～ 0.4 ㎝細長い箸状木製品である。材はシダ類のウラジロと同定されている。231 は右半部が欠損している。形状から馬形ではないかと思われたが、組み合わせであれば人形の可能性もある。小孔が１箇所ある。

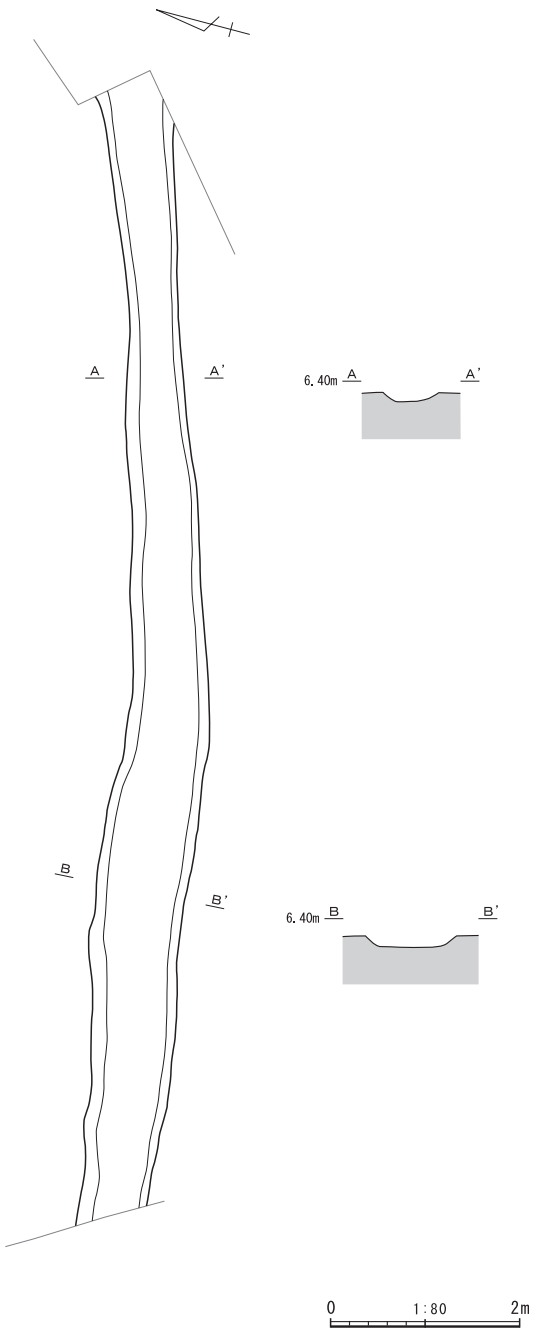
第 175 図 232 ～ 235 は容器である。232 はカキゾコで径 17.7 ㎝程の円形曲物である。側板を固定する樺綴じが４箇所あり、樺皮も一部残っている。233 はスギの柾目板で作られた円形曲物である。直径は 25 ㎝を超える。側面には木釘の穴が８箇所あり、X 線での観察により木釘も残っていることがわかった。234 はカキゾコの曲物破片である。235 は円形の木皿である。復原直径は 23.45 ㎝と想定される。縁の立ち上がりは浅い。内面には挽き痕が見える。全体に黒くなっているが顔料か炭化なのかは判断できない。236 は通称「背負子」といわれる木製品である。エノキ属の枝分かれした部分を使い、加工されている。一部、樹皮が残っている。同形の製品は奈良～平安時代の集落遺跡で出土する例が遠江でも見られる。しかし完存した製品がないことから、背負子としてどのように組み合っていたかは不明である。237・238 は燃え差しと呼ばれる。加工のないアカマツ材の断片端部が焦げていることから、焚き付けに使われたものであろうか。239 は杭状の加工が



第 178 図　SD101 出土遺物実測図 16



第 179 図　SD101 出土遺物実測図 17



第 180 図　SD102 実測図

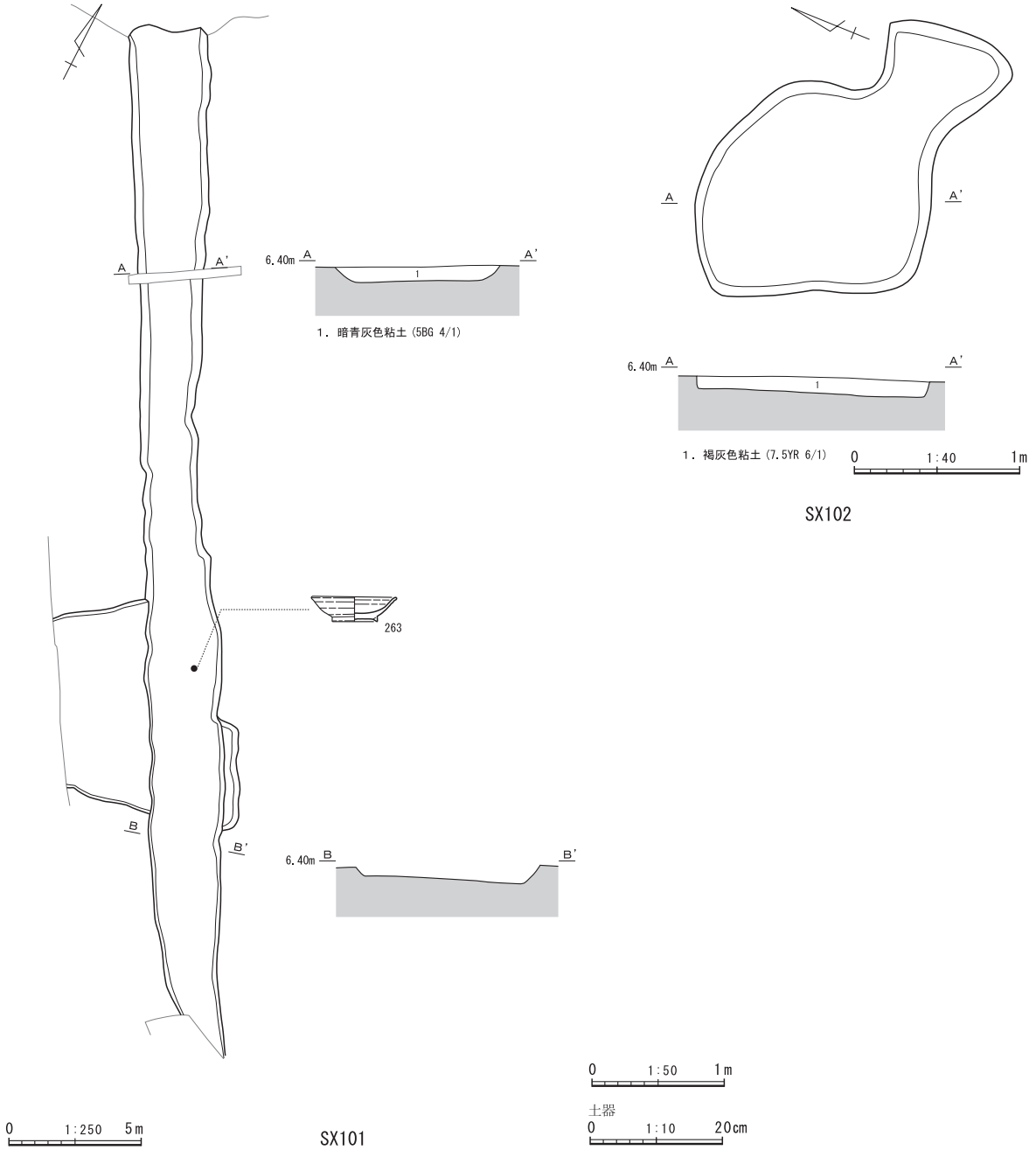
あるイヌマキの芯持ち材である。下端部を尖らせている。240 も下端部に杭状の加工がある。材はリョウブ？か。241 はアカガシ亜属の柾目材で出来た製品だが、用途は不明である。下方の左側面を削り、突起を作り出している。樹種からみて農耕土木具の一部かと思われる。242 は 7 ㎝程の方形で、下方は各面から斜めに削られている。樹種はイチイガシと同定されていることからやはり農耕土木具かと思われるが製品は特定できない。第 176 図 243 は曲物の側板で幅は 16 ㎝ほどある。243-1 と 243-2 はおそらく同一個体だが接合点はない。内面には細かいケビキ線が全体に入っている。244 は木樋状の木製品で、全長は 135.8 ㎝ほどある。丸太材の芯側を刳り抜いてある。上端裏面は斜めに削ってある。第 177 図 245 ～ 249 は用途不明木製品である。245 はヒノキ材の薄板である。特別な加工や墨書は見られない。246・247 も薄板の加工されている。248 はヒノキの角材小片である。不要な部分を切り落とした端材ではないだろうか。249 はヒノキ科の樹皮と同定された。

溝 SD101 の金属製品は耳環と鉄鎌が 1 点ずつ出土した。第 178 図 250 は服飾装身具の耳環で上層から出土した。銅地銀張金銅装である。成分分析の結果、錫製であることが判明した（第 7 章第 1 節参照）。外面も異なる成分の錫である。腐食が激しく小口の志和等は確認できない。ほぼ円形の平面で、直径は 2.7 ㎝である。断面は円形で 0.55 ㎝である。全体に細かい亀裂が入り、脆くなっている。251 は全体に腐食の進んだ金属製品だが、鎌の刃であろう。図面右側が手前に曲がっており、この部分を柄に装着するための折り曲げ部分と判断し鎌と判断した。ただし、図面左側もやや手前に湾曲しており、両端が折り曲げられる鍬先の可能性も排除できない。残存長 9.05 ㎝、刃部幅 1.95 ㎝以上、棟厚 0.25 ㎝である。耳環は古墳時代後期後半～終末期前半に位置づけられる可能性が高い。鉄鎌は形態が不明確なため時期は不明である。石製品は砥石 1 点を図示した（252）。菊川水系に見られる砂質粘製である。図面下位に石材の長軸にほぼ直交する、幅 0.9 ㎝の溝が確認できる。玉類か矢柄を研磨するための砥石である可能性が高い。土製品は土師質の土錘 3 点が出土した（253 ～ 255）。中央が膨らむものと、長筒に近いものの 2 者が存在する。前者は全長 1.65 ㎝、直径 3.7 ㎝、後者は全長 0.95 ～ 1.05 ㎝、直径 3.8 ～ 4.9 ㎝である。

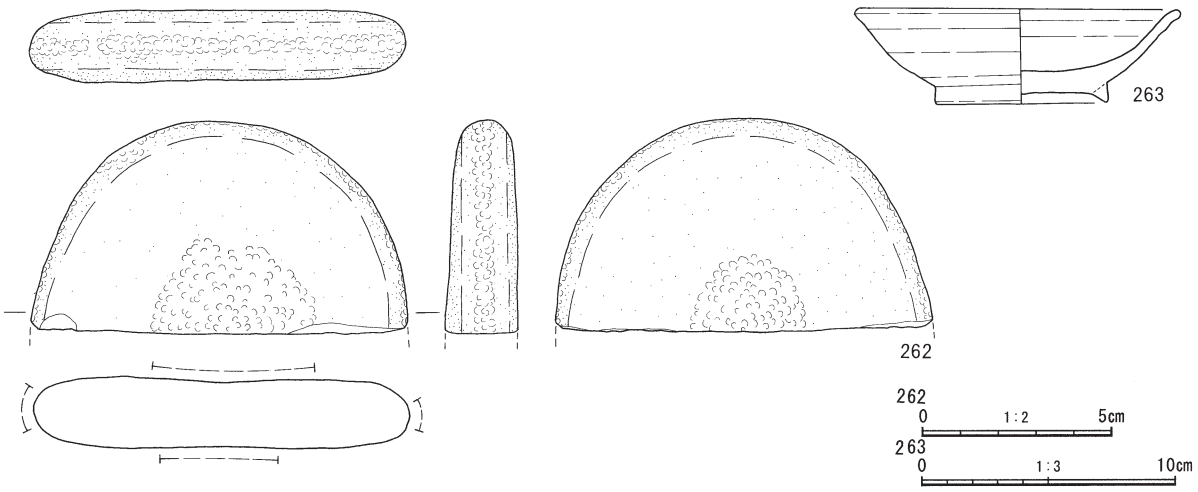
以上をまとめると、溝 SD101 は自然河川の可能性が高い。SD101 は「一反田川」と仮称する洪水堆積により埋没した可能性が高く、後述する SD05 を破壊するように流れる SD101-1 ～ 101-4 は、この部分

が埋没後も小さな流れがあったという証拠になるだろう。試掘調査の結果では、この SD101 の北側では遺構は確認できず、一反田遺跡はこの河川を北境としてこの南側に展開していた可能性が高い。出土土器は土師器では、杯、高杯、壺、甕、ミニチュア土器が出土している。

須恵器は、瑕（19）、長頸壷、甕が出土した。瑕（19）は、胴部注口の破片である。注口は嘴状である。肩部に沈線が施される。遠江Ⅳ期前半からⅤ期に位置づけられる（７世紀）。灰釉陶器は下層から上層まで出土している。碗を主体に、輪花碗、短頸壷蓋、壷が出土した。なお、墨書土器は灰釉陶器では「馬」（あるいは「焉」）（20･175･176）、「賀」（21）、「才」･「才」（54）、「田」あるいは「男」？（55）、「上」？（56）、「夫」・「夫」（173）、「平」（174）、「万」（177・178）、「■（判読不明）」（179）、「二」（180）、「本」か（181）である。木製品は人形、斎串、鳥形、馬形、曲物、用途不明品が主に下層から出土している。195 は四肢が明瞭に区分できるものである。顔には黒墨で髪・眉・目・鼻・顎鬚が描かれている。裏面



第 181 図　SX101・102 実測図



第 182 図　SX101 出土遺物実測図

には墨画はない。頭部は圭頭形で、肩は角張り、両手は板に切り込みを入れた状態で表現され、両脚は太く、股間部分は丸く仕上げられ、脚先は内側に向かう切り欠きが行われている。**195** は頭頂部が平坦で、五角形の顔表現である。肩の張りは少なく、手は薄い板状に切り込みが入れられる程度で、足も細く表現されている。**194** と比較すると製作の簡略化が進んでいることが分かる。こうした SD101 出土遺物からは古墳時代前期～平安時代（11 世紀前半）の遺物が出土していることから、11 世紀前半ごろに埋没した可能性が高い。この河川がどの時期から流れていたかについては明確ではないが、古墳時代前期の遺物があることから、古墳時代前期まで遡る可能性はある。

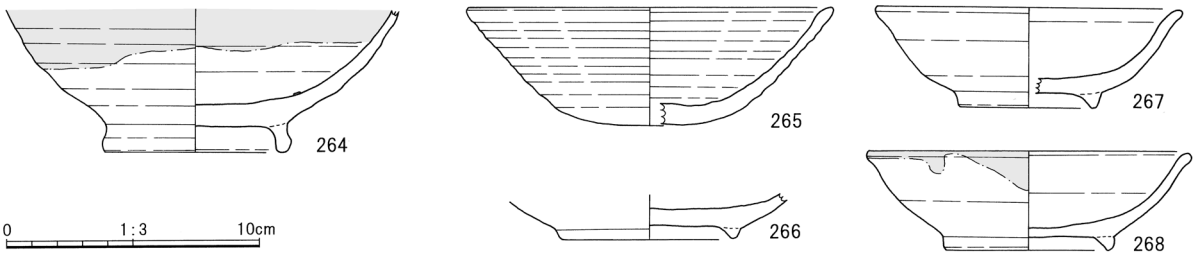
SD101-1 ～ SD101-4　ここでは SD101 の上部で確認された溝状遺構について報告する。SD101-1 ～ SD101-4 はいずれも SD101 が埋没後に流れていた流路で、本流ではなく支流であろう。SD101-4 からは山茶碗（第 179 図 **257**）が覆土より出土した。底部高台内側に墨書がある。

SD102（第 180 図）　４区の南端で検出した溝状遺構である。総延長は 12 mほどあり、最も広い幅のところで１mを測る。４区では周囲に目立った遺構はなく溝の性格はわからない。土器は覆土内より出ているが図化できるものはなかった。

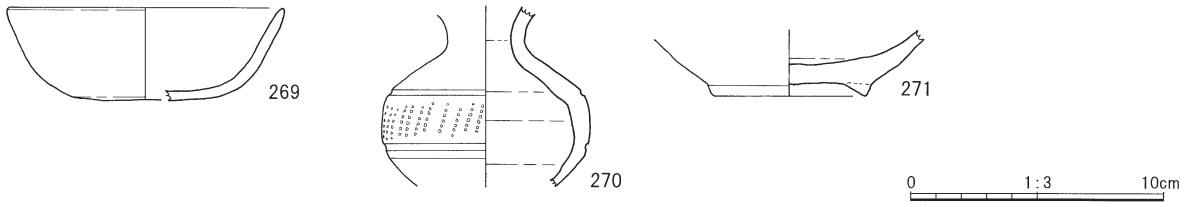
（４）性格不明遺構

SX101（第 181・182 図）　5-2 区の西寄りを縦断する位置で検出した、ほぼ直線的な溝のような遺構である。延長は 40 m弱、幅は２～３mほどある。溝の深さは 20 ㎝程度で、覆土は暗青灰色粘土層である。覆土より敲き石（第 182 図 **262**）と灰釉陶器（**263**）が出土した。**262** の敲き石は扁平な円形の礫で半分に折れている。縁辺部と表裏の中央に敲打した痕跡がある。石材は中粒砂岩製である。**263** はやや小振りな碗である。遺構の年代は SD101 と、さほど変わらない 11 世紀前半までの時期であろう。

SX102（第 181 図）　４区北側で検出した不定形な遺構である。出土遺物はない。



第 183 図　SP12、第１面包含層出土遺物実測図１



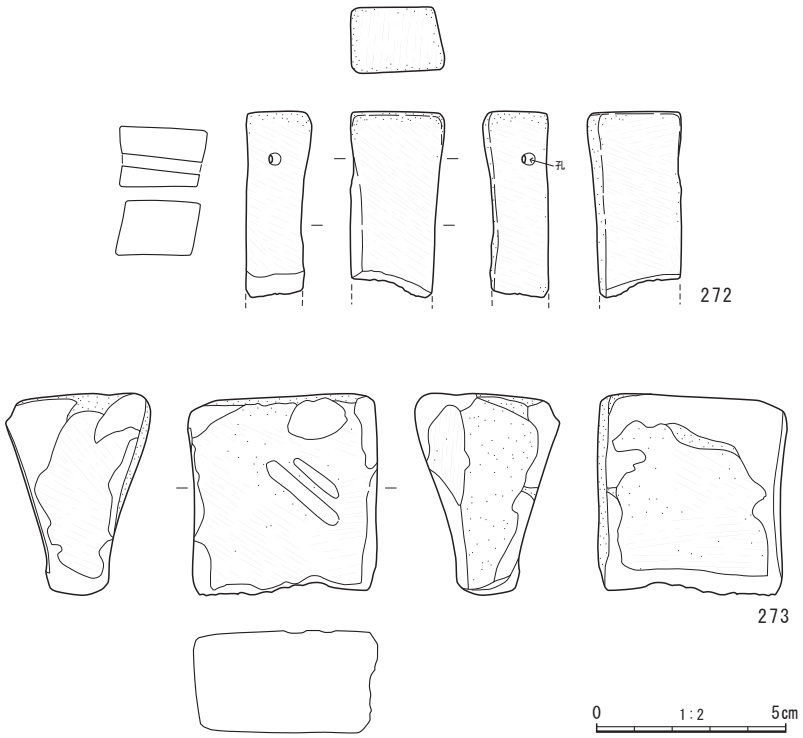
第 184 図　第１面包含層出土遺物実測図２

２　包含層出土の遺物

その他の遺構や包含層からは弥生土器、土師器が少量出土しているが、このうち特徴的な部位が残る遺物を図示した（第 183 ～ 185 図）。第 183 図 **264** は 5-1 区の SP12 より出土した山茶碗である。内面には重ね焼き痕があり降灰釉が緑色に発色している。**265** は表土除去中に出土した須恵器の無台坏である。**266** は山茶碗の高台破片である。第２面包含層より出土した。**267・268** は灰釉陶器である。いずれも 5-1 区北西側の集水枡の掘削時に出土した。位置からして SD101 に伴う土器であろう。**267** は口径が 12 ㎝程の小振りの碗である。やや焼成が不良となっている。**268** も径が 12.3 ㎝と小振りの碗である。口縁部には釉薬を漬け掛けしている。第 184 図 **269** は土師器の坏である。口径は 11 ㎝程に復元できる。**270** は須恵器の瑠である。C-2 グリッド内の包含層より出土したが、おそらく SD101 の覆土内であった可能性がある。また本報告の執筆中に第 169 図 **170** と接合し同一個体とわかった。年代は当遺跡でも出土している須恵器と同様、７世紀初頭であろう。**271** は山茶碗である。表土除去中に出土した。胎土が乳白色で厚みを持つことから渥美・湖西産であろう。

第 185 図 **272・273** は 5-2 区包含層より出土した石製品である。**272** は 5-2 区 C-3 グリッドの表土除去中に出土した砥石である。石材は珪質流紋岩質凝灰岩である。砥石は長方形で下方部は折れている。上部に穿孔があり携帯用であったことがわかる。各面を使用しているが、折れて廃棄されたのであろう。**273** は同区南半部の表土除去時に見つかった砥石である。やはり下方部は折損している。材質はホルンフェルス製で、大井川水系では見られない石材で、天竜川水系や豊川水系、矢作川水系にはある。おそらく流通品なのであろう。使用により使い減りし、中央で折れてしまったと思われる。

北区第１・２面は出土した遺物の年代からみて平安時代以降の面である。自然流路 SD101 の覆土内より古墳時代前期の土器も出土しているが、明らかに上流域から流れてきたものである。また生活していたことを示すような遺構は見られないことから、居住域は北東方面の別の場所にあったと想定される。



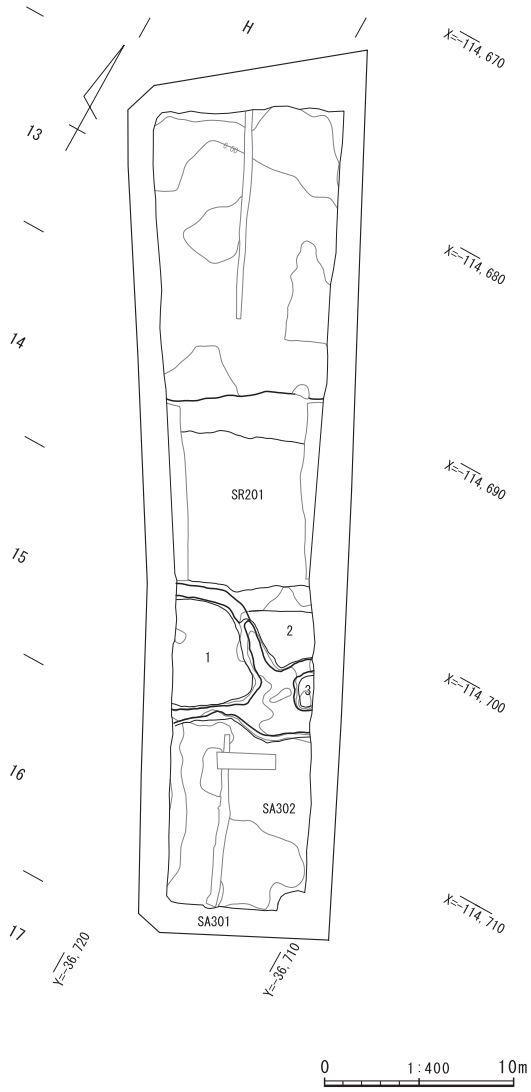
第 185 図　第１面包含層出土遺物実測図３

第４節　南区第３面の遺構と遺物

１　遺構・遺物

3-2 区の第３面では調査区の南半部で水田跡と杭列を検出した（第 186 図）。杭列は SA301 と SA302、水田は３枚の田面と畦がある。SA301・302 は SR201 のような河川に直交する方向に設置されていることや、赤土政所遺跡の水田を覆う土砂の上に数本の杭に渡すように横木が用いられていることから、本来は土留めあるいは堰のような施設であった可能性がある。また第２面で杭の上部を確認できたものもあるが、基本的には、赤土政所遺跡の水田面を覆う土砂の上部に木材を横渡しするものであり、第２面と第３面の間の時期の遺構であった可能性もある。杭の太さにより２時期に区分できる可能性もあるが、これらの杭列の年代は古墳時代中期以降の可能性が高い。

一方、水田は赤土政所遺跡の水田が形成された層位のさらに下位の層位からの検出し、かつ水田の区画も一致しないことから、赤土政所遺跡の水田よりも古い時期である可能性が高い。なお第２面で検出した SR202 よりも北側では試掘溝調査を実施したが、水田畦畔の粘土などは確認できなかったため、水田は SR202 より北側までは続いていなかったと判断した。



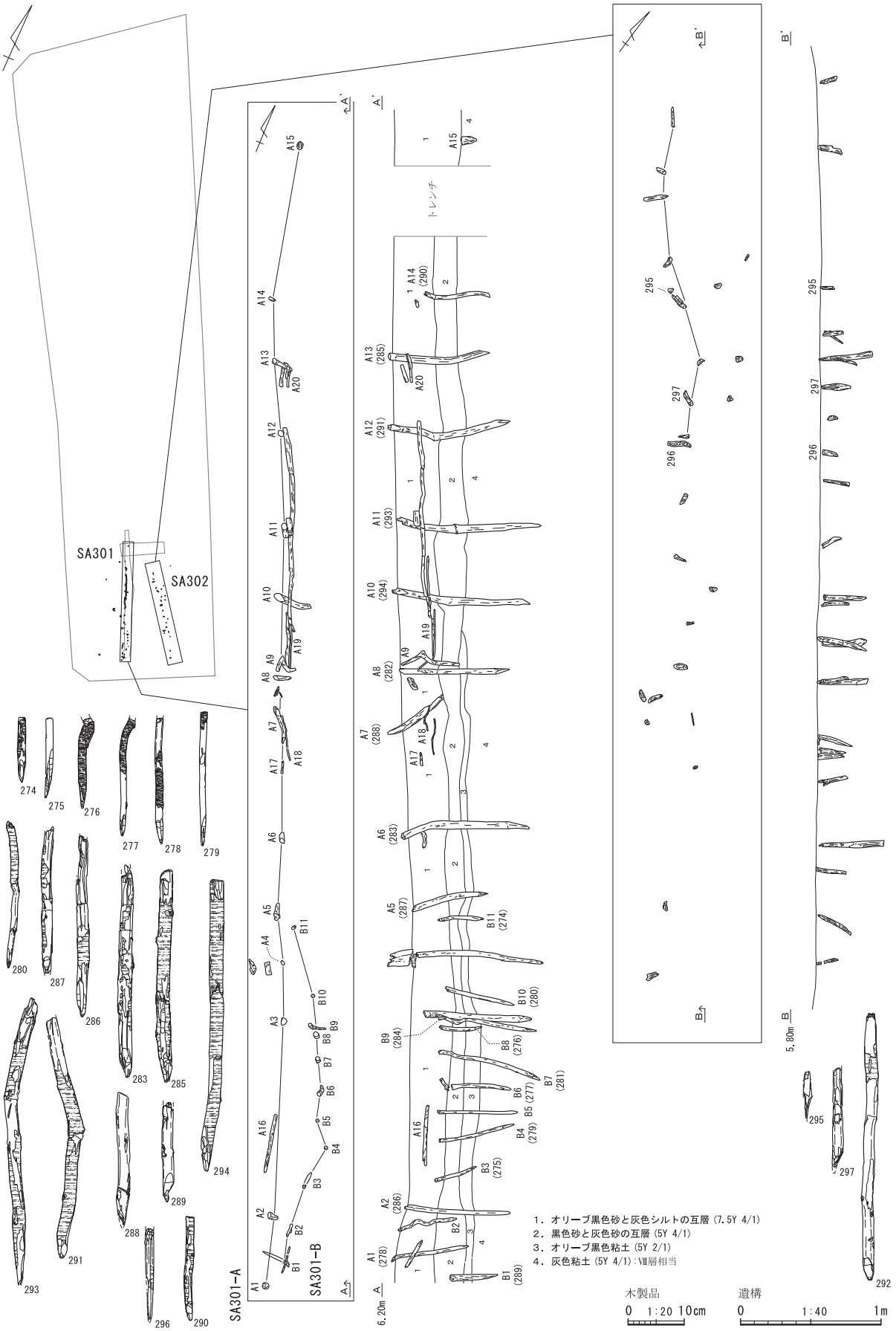
第 186 図　第３面全体図

以下、個別遺構の解説をする。

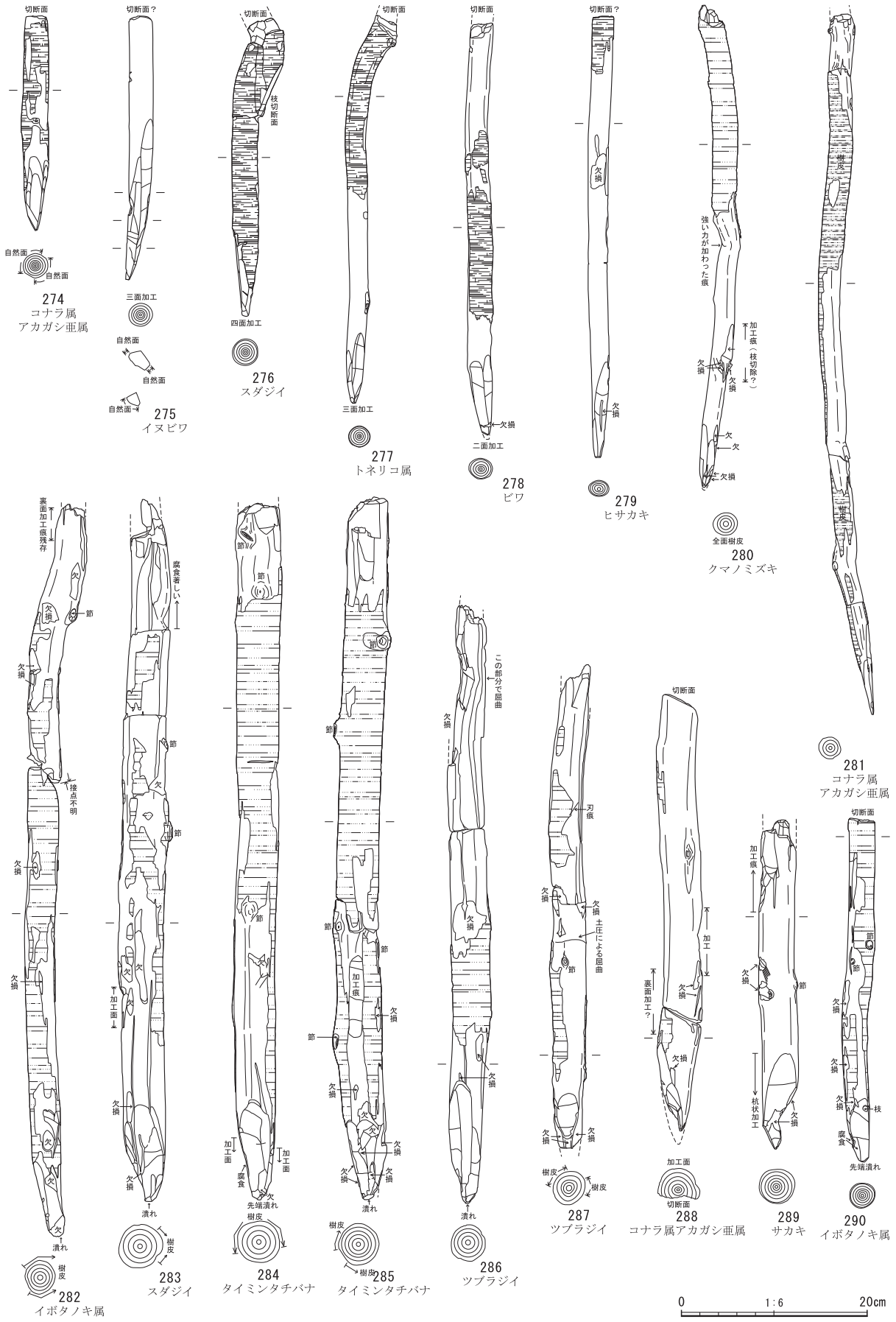
（１）杭列

SA301（第 187 図、図版 91）　3-2 区 J-16 グリッドで検出した杭列である。調査時は SA3301 と呼んでいる。後述する SA302 とほぼ平行する杭列で、SA301 とは同時期に存在した可能性がある。時代は下るが自然流路 SR201 とほぼ直交することから、土留めの杭列であった可能性が高いと現地調査では判断している。SA301 は延長が約８ｍで、打ち込まれた杭と一部に横木を伴った構造で、直線的に列状を成している。杭の材は直径が５㎝前後の太い杭と、３㎝前後の細い杭が確認できる。現地での発掘調査時には同時に確認して同じ遺構番号を付加したが、若干、列が異なることから別の杭列の可能性もある。前者を SA301-A とし、後者を SA301-B とした。SA301-A は、ほぼ直線的に列を成している。間隔は 50 ～ 60 ㎝程である。一方、SA301-B は部分的でところどころ屈曲している。また杭の間隔は 20 ～ 50 ㎝と狭い。こうした状況から SA301-B は SA301-A を補修した杭列と想定した。

出土した杭は第 188・189 図に掲載した（**274** ～ **294**）。**274** ～ **277**・**279** ～ **281** は SA301-B を構成していた杭である。**277** は上部の状態から、トネリコ属の小枝を折り取って枝先を尖らせたことがわかる。SA301 の杭は径が２～３㎝前後と細めで、下方先端を尖らせ、小枝を払い、表面には樹皮が付いた状態である。樹種はアカガシ亜属やスダジイ、イヌビワ、ト



第187図　SA301・302実測図

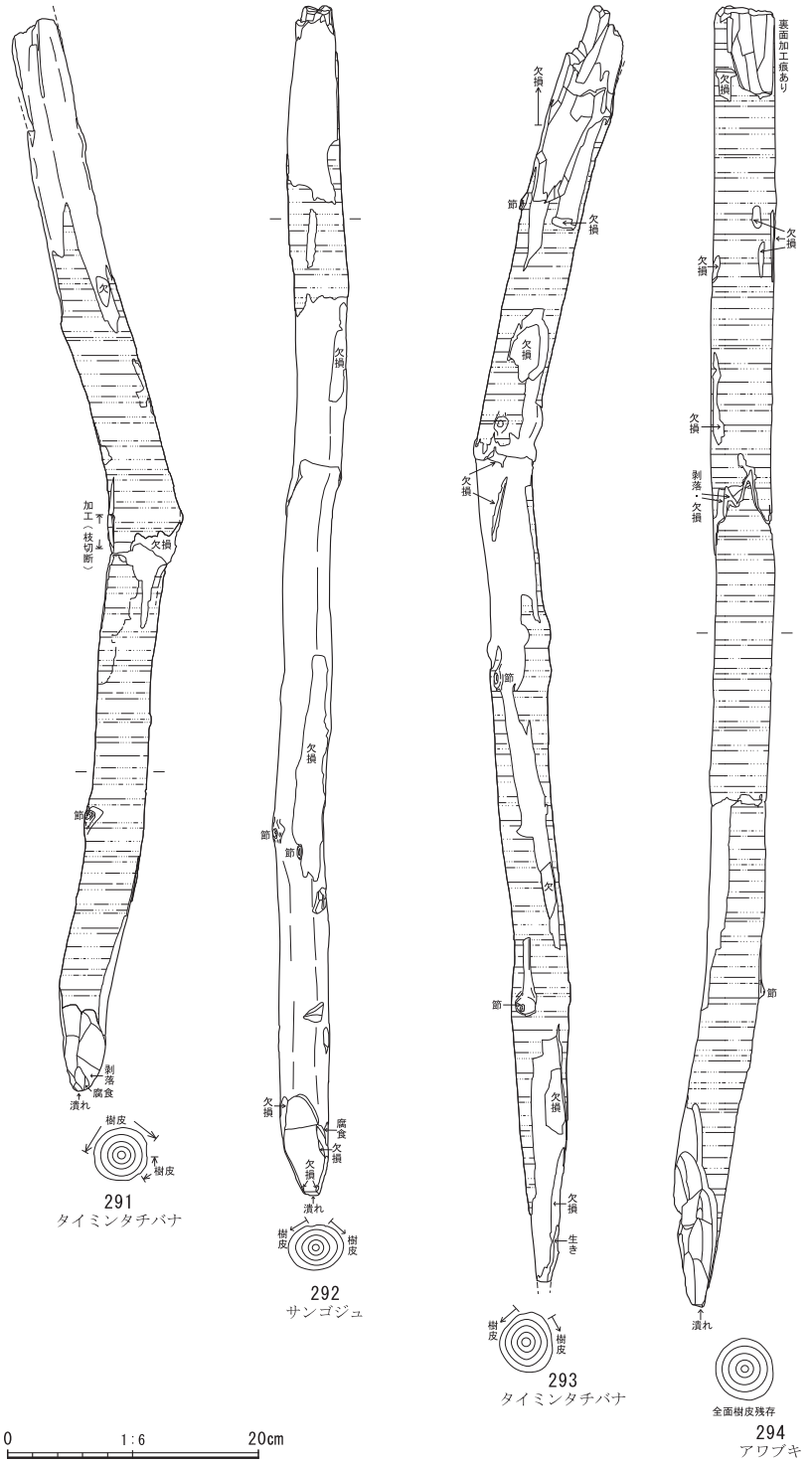


第 188 図　SA301 出土遺物実測図１

ネリコ属、ヒサカキ、クマノミズキ等がある。特にビワ、クマノミズキ、イボタノキ属、タイミンタチバナ、サンゴジュ、アワブキ等は、通常、木製品には使われないような種類の木である。樹種が多岐にわたることから近隣の低丘陵から切り出してきた低木の雑木を杭として利用している様相が見える。278・282 ～ 294 は直径４～５㎝前後の太い丸木を使った杭である。樹種はイボタノキ属やスダジイ、タイミンタチバナ、ツブラジイ、サカキ、アカガシ亜属、サンゴジュ、ビワ、アワブキ等、低木の雑木が利用されている。広葉樹材と針葉樹材の幼木が入り混じっている。

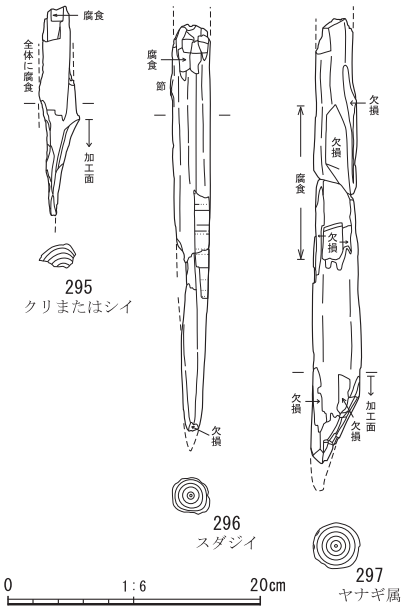
SA302（第 187 図、図版 91）

3-2 区 J-16 グリッド内で、SA301 の東隣でほぼ平行する杭列である。調査時は SA3302 の遺構番号を付けている。前述した SA301 とほぼ平行するため、同時に存在した可能性がある。延長は 6.6 mほどあり、列は直線的ではなく間隔も一定していない。また杭自体は短めで杭列の用途がはっきりとはしない。ただ SA301 と同様、自然流路 SR201 と直交する方向の杭列であることから、やはり土留めとして打ち込まれた可能性が考えられる。



第 189 図　SA301 出土遺物実測図２

出土した杭は第 190 図に３点を図化して掲載した（295 ～ 297）。295 はクリまたはシイの割り材で作られている。腐食が著しく進んでいる。296 はスダジイの芯持ち材である。297 はヤナギ属の芯持ち材を杭に加工している。径は３～４㎝で、クリまたはスダジイ、ヤナギ属の木を杭に加工している。木材は周辺の低丘陵から持ち込まれたものであろう。前述した SA301 と位置は異なるが、構築した時期差はないものと思われる。

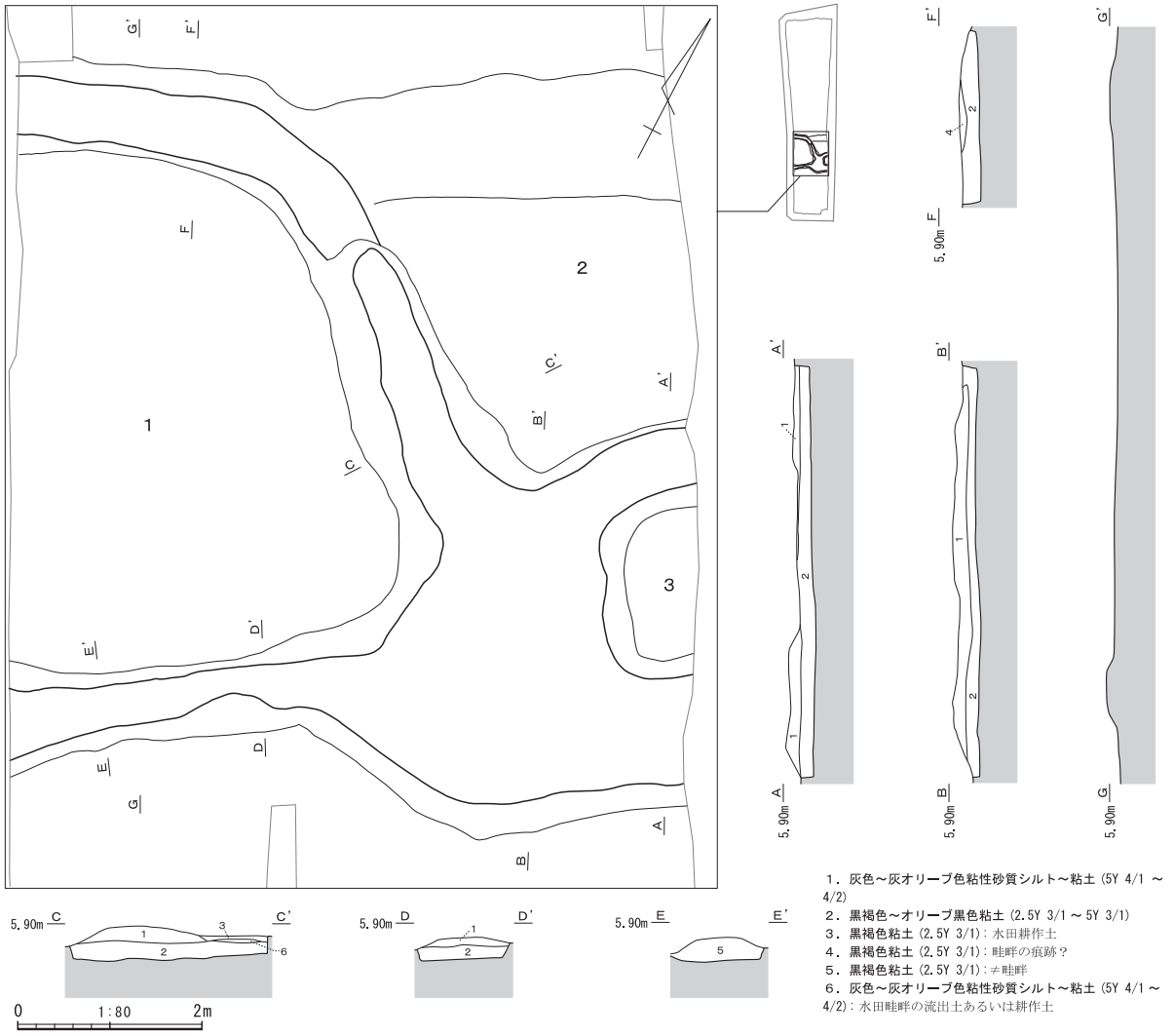


第 190 図　SA302 出土遺物実測図

（１）水田

畦畔と田面（第 191 図、図版 90）　3-2 区の中央南寄り、Ｉ～ J-15 グリッドで検出した水田は、赤土政所遺跡の 3-1 区で確認された水田面を覆う層に覆われ、さらに 3-1 区での水田基盤層より下位で確認したものである。水田は３枚確認できる。周りを囲う畦畔の形態も不整形である。畦畔には粘土を利用しており、土質や色調も赤土政所遺跡第４面の水田の畦畔とは大きく異なる。また南側は洪水等の堆積により消失した可能性が高い。赤土政所遺跡では第４面の調査後下層の確認を行ったが、この水田面の広がりは確認できなかった。水田については赤土政所遺跡で確認した水田とは畦畔や区画の形状が異なること、より深い位置で確認したことから、赤土政所遺跡の水田よりも時期的に古い可能性がある。

畦畔の構造は黒褐色基盤層の上に黄灰色の粘土を盛り上げることで畦畔の高まりを作り出している。検出面は水田面で標高 5.63 ～ 5.78 m、最も高い畦畔上で標高 5.85 m であり、赤

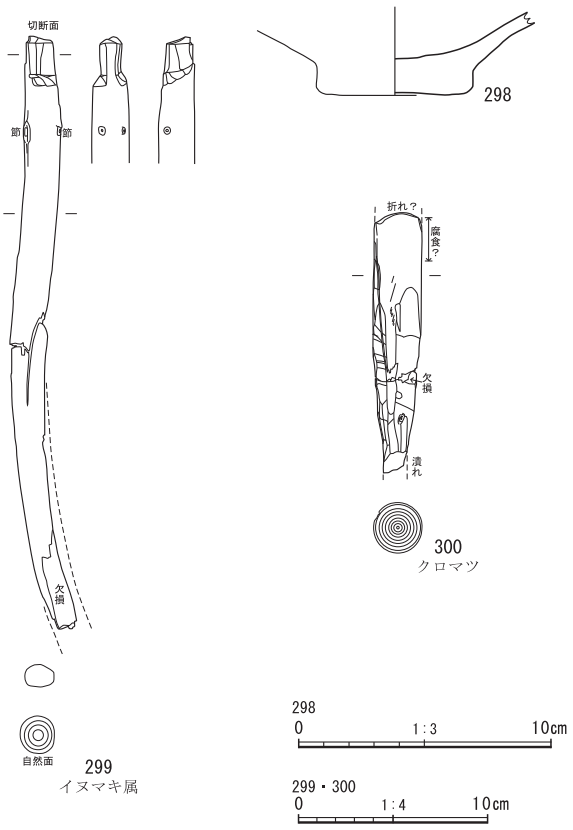


第 191 図　畦畔実測図

土政所遺跡の第４文化層で確認した水田面より 0.2 m程低い位置での検出である。田面と畦の比高差は 10 cm程度である。田面は畦に囲まれた全面が出ている訳ではなく、調査区の境に切られている。よって水田面の規模は現状では測ることができない。さらに上述したように、赤土政所遺跡の水田が基盤層とする層位の下で確認されており、時期が異なる可能性が高い。

２　包含層出土の遺物

3-2 区の包含層より出土した遺物は第 192 図 298 ～ 300 である。298 は土師器の壷底部である。表面は磨滅しているため調整痕は不明である。胎土には少量の微粒子が混じる。299 は丸木の一部に加工のある木製品である。上端部は弓弭状に突起を作り出している。丸木の表面には目立った加工はない。下方は欠損している。材質はイヌマキ属である。形態や樹種などから丸木弓の一部とも考えられる。300 はクロマツの丸木で下方は杭のように先端を尖らせている。上下は欠損している。



第 192 図　第３面包含層出土遺物実測図

第５節 南区第２面の遺構と遺物

１　遺構・遺物

3-2 区第２面では奈良時代から平安時代の自然流路 SR201・202 とそれに伴う杭列 SA201・202 が見つかっている（第 193 図）。また調査区の北端では東西方向の畦畔の痕跡があった。各遺構については以下に詳細を記載する。

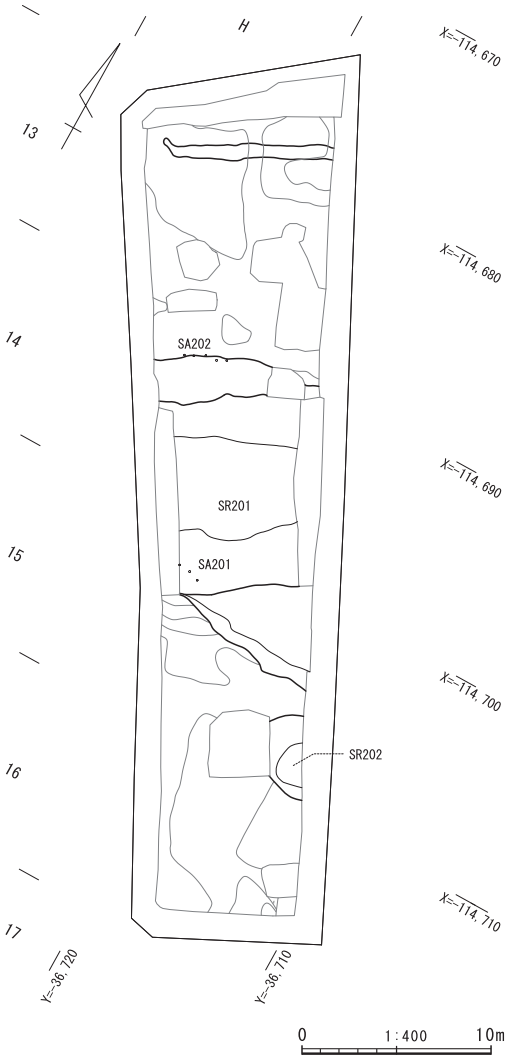
（１）杭列

SA201（第 194 図、図版 93）　I-15 グリッド内、自然流路 SR201 の左岸で検出した杭列である。杭３本が東西方向の列を成している。流路の水流方向から見ると、上流からの水の流れを緩和する、または堰きとめる方向に杭列が打ち込まれている。西側は調査区外に出てしまうが、西側に列が続く可能性がある。

杭は第 204 図 435 ～ 437 に図示した。いずれも割り材を利用した杭で、樹種はアカガシ亜属とクリなどの広葉樹材である。435 は芯の部分がある割り材で側面には加工がない。下端部だけ２方向から斜めに削り尖らせている。436 はミカン割材を杭に加工している。437 も腐食が進んでいるが恐らくミカン割材であろう。

SA202（第 194 図、図版 93）I-14 グリッド北西隅、SR201 の右岸にある杭列である。杭や木片が６箇所以上確認できた。杭列は右岸側の肩に平行するように打ち込まれている。前後には同じ間隔で続く杭は検出されておらず、ここだけで完結しているものと思われる。

杭は第 204 図 438 ～ 441 に掲載した。いずれも芯持ち材を加工した杭である。438 は 3.5 cm径のアカ



第 193 図　第２面全体図

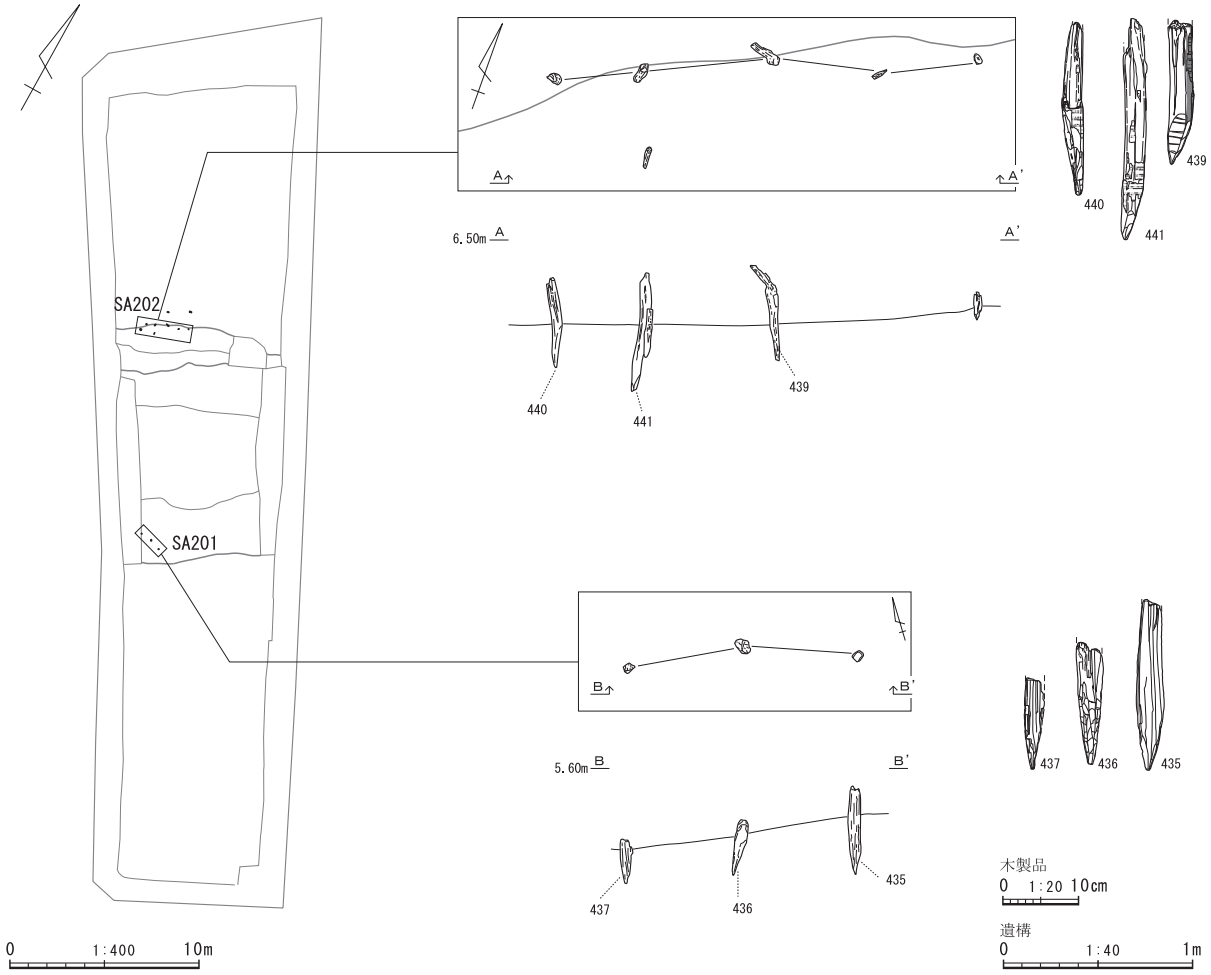
ガシ亜属材を使った杭である。樹皮はない。439 もアカガシ亜属材で径は最大 6.5 ㎝である。一部に樹皮が残り、表面は火を受けて焦げている。440 は径 6.0 ㎝のスダジイ材の杭である。わずかに樹皮がある。441 は約 5 ㎝径の杭で、樹種はイヌマキ属である。表面には樹皮が残っている。

前節で触れた第１面の SA301・SA302 と同様、杭に使われた木材は近隣の低丘陵に自生する雑木を使っている。ただ SA201 では割材を使い、SA202 では芯持ち材を使っていることから構築時期は異なるであろう。

（２）自然流路

SR201（第 195 図、図版 93）　SR201 は 3-2 区のほぼ中央を流れる自然の河川である。調査区を横断するように東から西へと流れる流路で、検出した長さは 8.8 m、最大幅は 12.7 m、深さは 1.6 mの規模がある。覆土は砂層または砂礫層が堆積している。１層の灰色細砂層では細かい流木や植物遺体とともにやや多くの土器が含まれていた。２層の暗オリーブ灰色砂層では土器片は少なく、木片が多く含まれていた。３層の暗オリーブ砂礫層では最も多く土器片が含まれていた。調査所見から SR201 は旧丹野川の本流（奈良時代ごろの本流）の可能性が高い。本報告ではこの SR201 を「赤土川」と呼称することとする。SR201 は大きく砂礫層（下層）と砂層（上層）に区分することができる。さらに下層は砂礫層を区分する砂層の堆積を何回か挟むことから、人工的に埋め戻されたわけではなく、数回にわたる砂礫を運ぶような洪水堆積と穏やかな流れを繰り返して堆積したものと想定できる。SR201 の堆積と、SR202 の堆積状況、及び東壁の土層を確認すると、奈良時代以降 SR201 を埋めながら徐々に南側へ流路を変えたか、南側へ氾濫した土砂が堆積していった可能性が高く、この流路の変更により、3-2 区部分は砂質シルトの堆積が進み、平安時代～鎌倉時代ごろには周囲よりも高くなり、屋敷地を築くのに都合のよい地盤となっていた可能性が高い。出土遺物は上流の比較的近いところから、流れにより運ばれてきたものであろう。上流部に古墳時代中期から後期の集落が存在する可能性が高い。土器は古墳時代の土器は比較的下層に多く、上層では奈良時代の土器が見られる。木製品の出土状況がわかるものについては第 195 図に図示した。右岸の肩部では農具の一部かと思われる製品が出土した（第 280 図 428）。覆土内より見つかった 431・433・434 の杭は上層より出土した。

自然流路 SR201 の覆土より出土した遺物は第 196 ～ 203 図に掲載した（301 ～ 434）。第 196 図 301 は弥生時代後期に属する壷形土器の口縁部である。流路下層より出土した。口唇部には櫛状の刺突紋が連続している。内面には櫛状工具による羽状紋が３段確認できる。弥生土器の出土量は当遺跡では数少なく、こうした河川のなかに小片が混じる程度である。302 は須恵器の甕口縁部の小片である。破片の断面は磨滅している。甕の外面にはヘラ描き文がある。303 も流路下層より出土した弥生土器の壷で肩

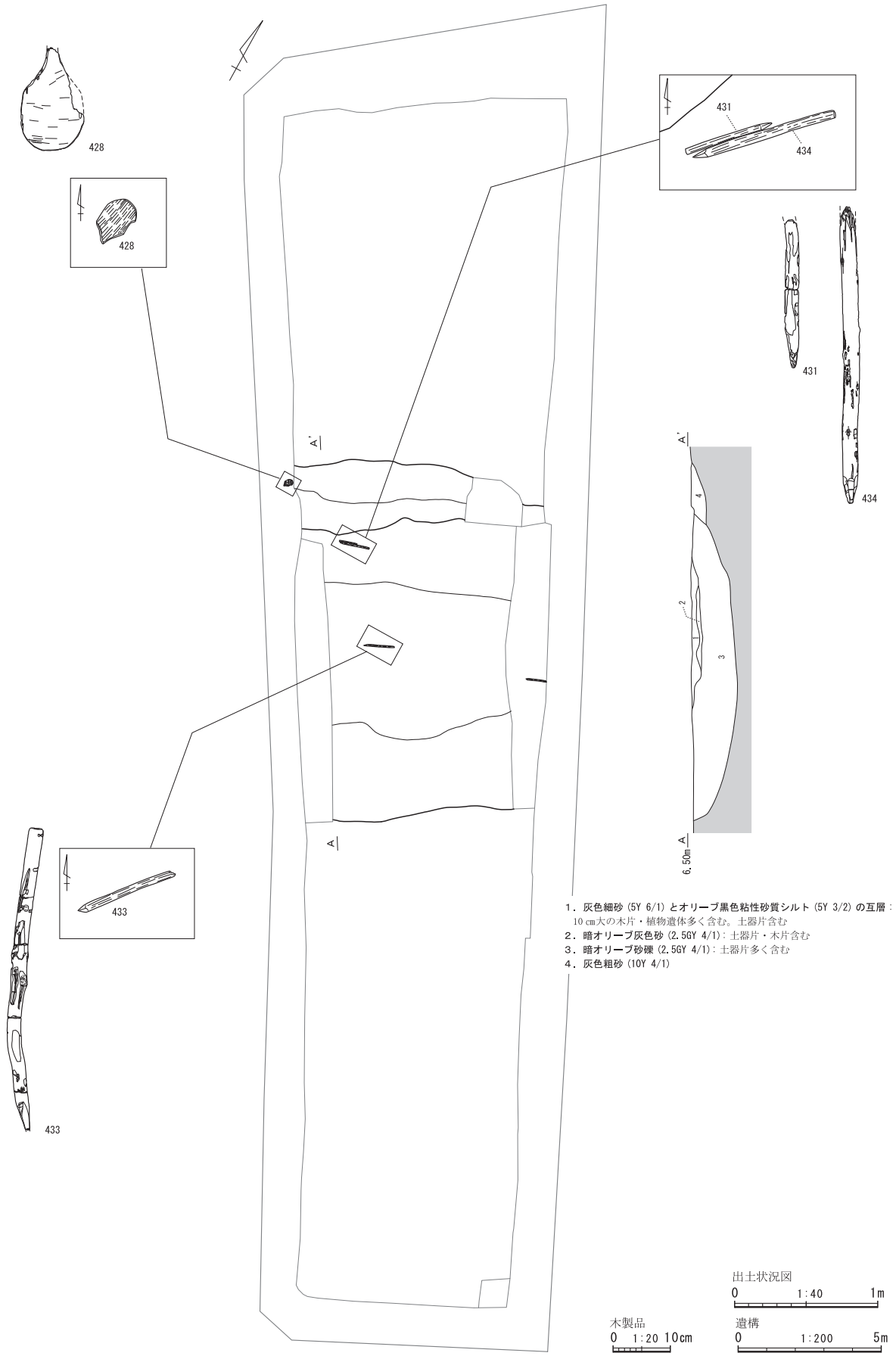


第 194 図　SA201・202 実測図

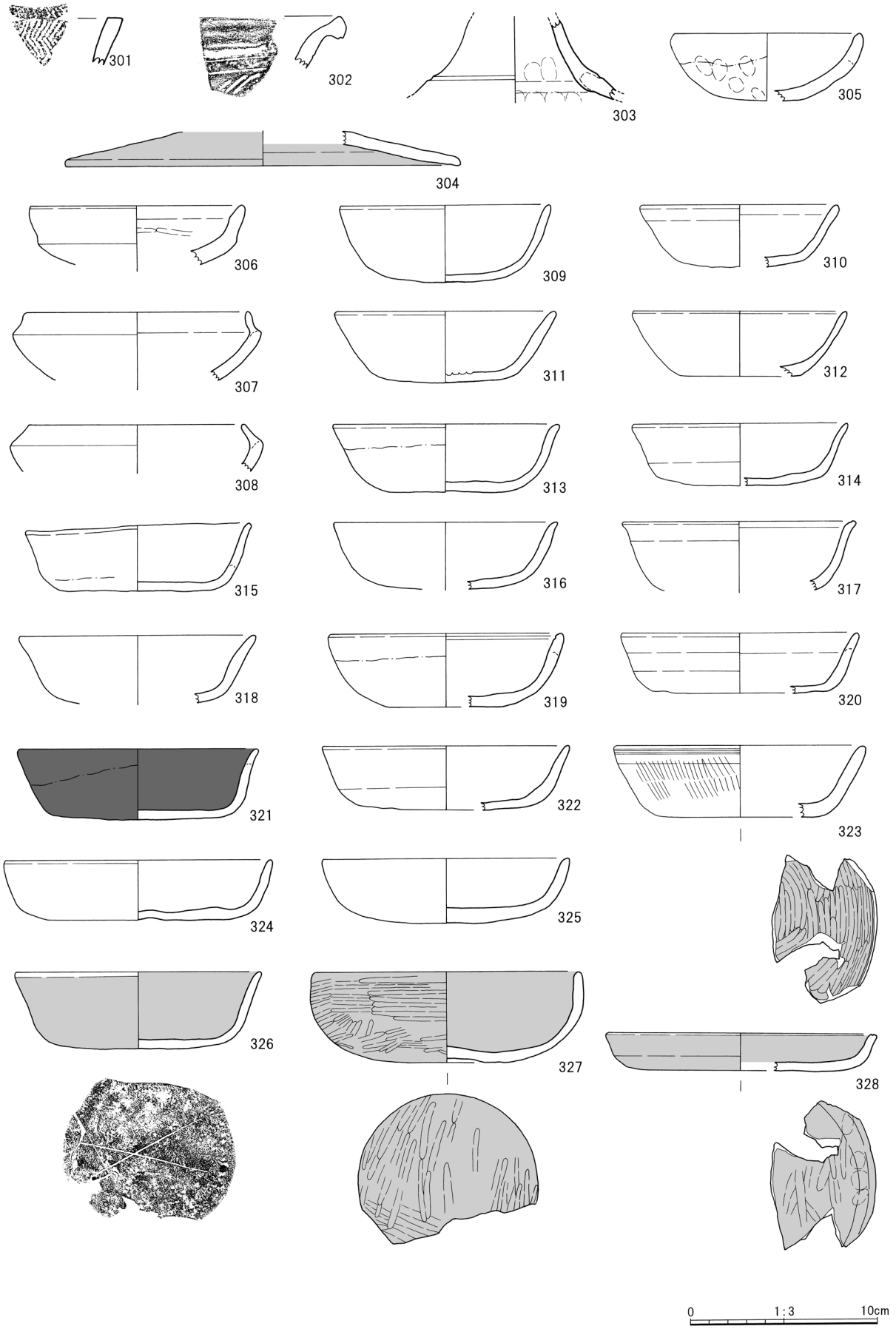
～頸部の破片である。図よりもやや細頸になる可能性がある。外面の肩～頸部の付け根の位置には工具による沈線が１本、廻っている。磨滅がひどく詳細はわからない。胎土は白っぽく、砂礫は少ないが微量に雲母が混じる。304 は土師器の蓋か。内外面は赤彩されている。復原口径は 21.3 ㎝であった。胎土には微量な雲母が混じる。305 は土師器の坏である。口径は 10 ㎝程しかなく小型である。また外面には指押えや粘土の繋ぎ目が残っている。

306 ～ 328 は土師器の坏である。このうち 306 ～ 308 は須恵器を模倣した坏であろう。306 の復元口径は 11.6 ㎝である。受け部は稜線があり、器体は厚みがある。307 は 306 よりも受け部がはっきりと表現されている。器体も薄くなっている。308 も摸倣坏だが表面は調整痕が磨滅し、輪積みの痕跡が見えている。309 は上層の砂層より出土した坏で、表面にわずかだが赤彩が残っている。317・319・320・324 にもわずかだが赤彩が認められる。310 の口径は 10.4 ㎝程のやや小振りな坏である。321 は全体に煤が付着している。内面には赤彩の痕跡がわずかに残っている。322･324･326 は上層の砂層より出土し、323・325 は下層より出土している。323・325 は胎土も白っぽくよく似ている。326 は上層より出土した坏で、内外面共に赤彩がはっきりと確認できる。底面には「×」状の線刻がある。327 は古墳時代中期の土師器坏である。口径は 14.6 ㎝と大きく体部は丸みをもっている。全体に赤彩色されており、外面は磨き調整してある。328 は古代に属する土師器の皿である。下層より出土した。底部は平底で、復元口径は 14.1 ㎝、器高は 2.0 ㎝と浅い。内外面に赤彩があり、全面ミガキ調整されている。

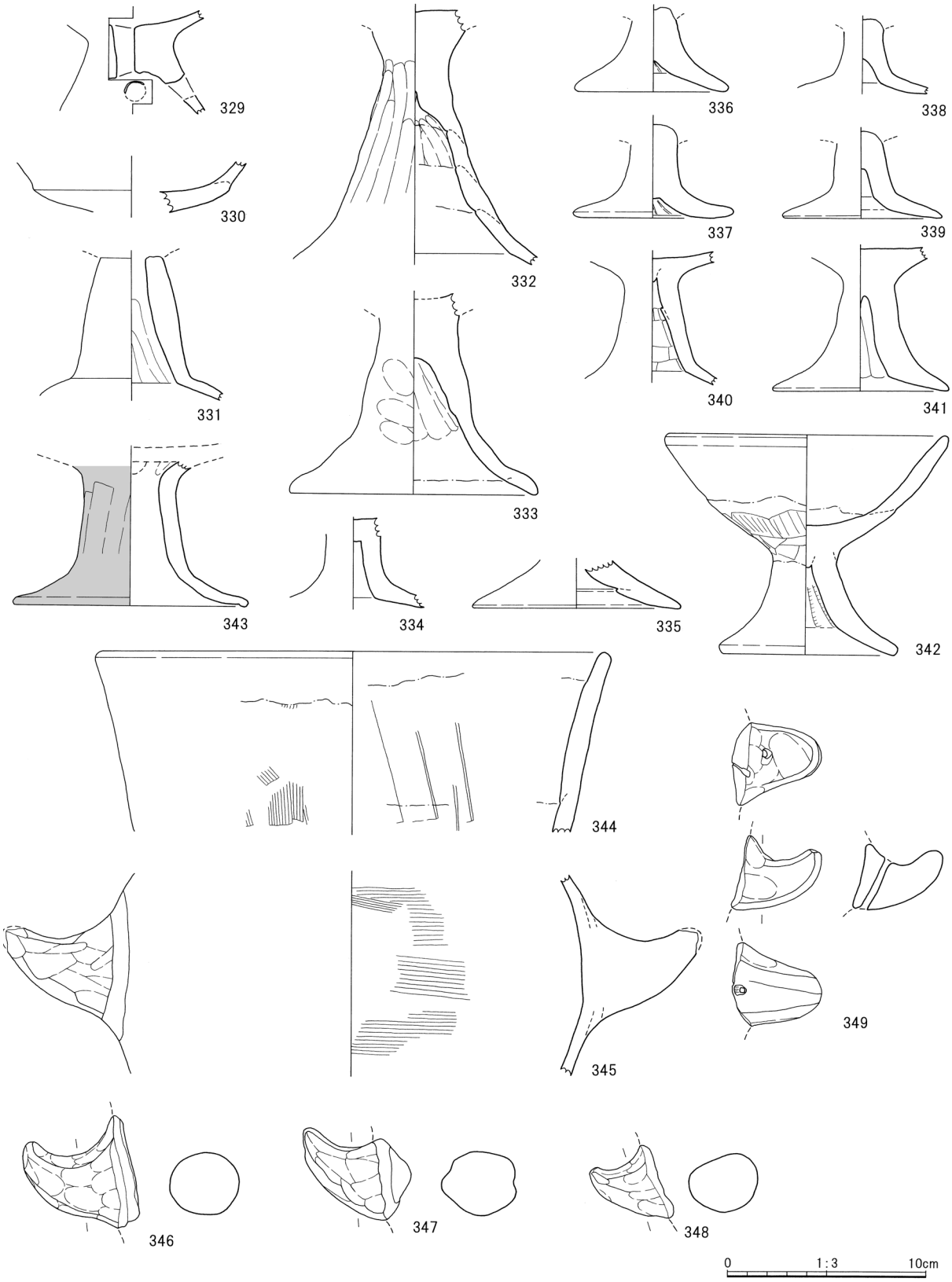
329 ～ 342 は土師器の器台と高坏である。329 は SR201 の下層より出土した器台である。上部と脚の



第 195 図　SR201 実測図



第 196 図　SR201 出土遺物実測図 1



第 197 図　SR201 出土遺物実測図２

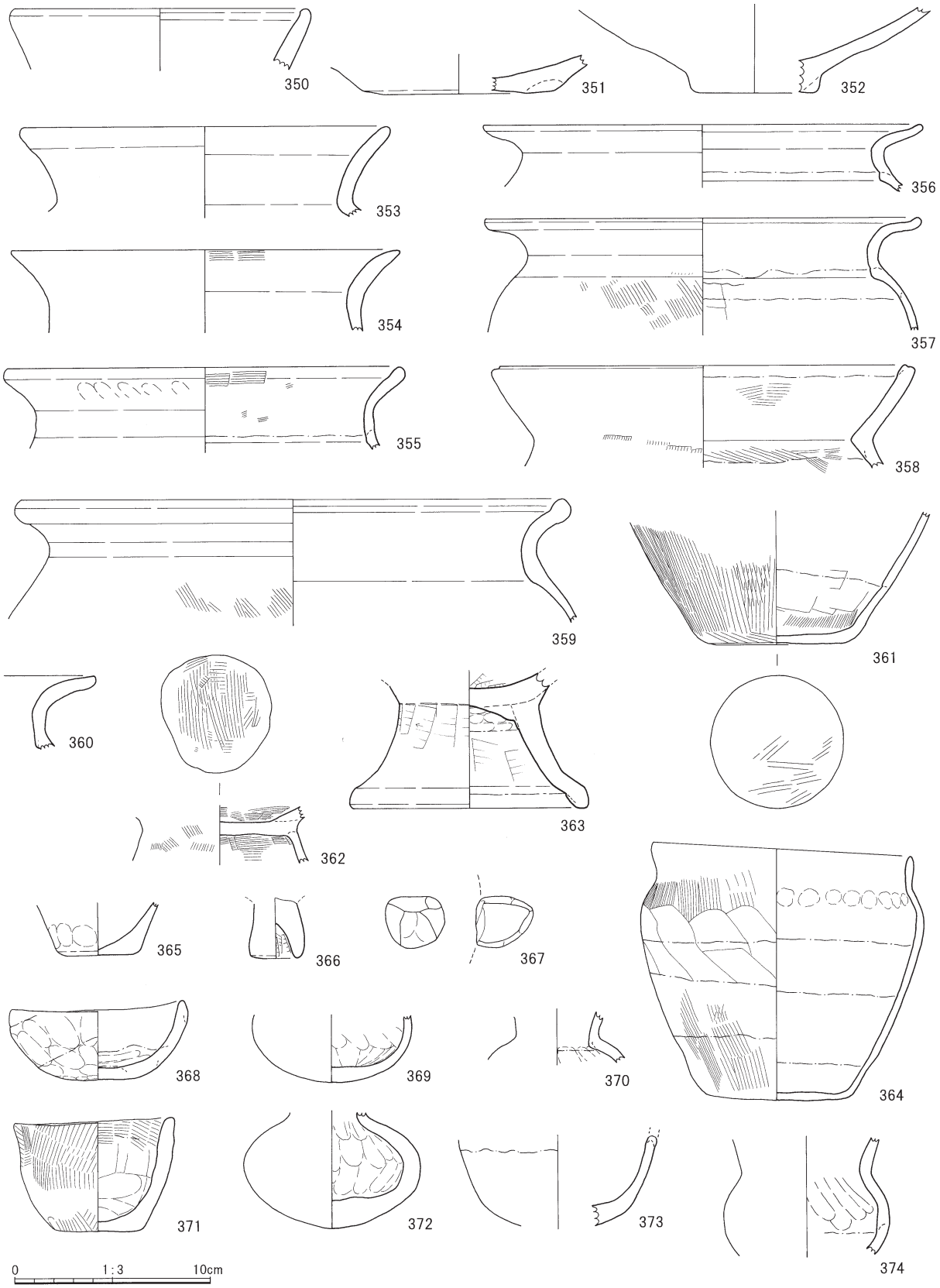
裾が欠損している。器台上部から脚部中央は円形の孔が貫通している。脚部には４箇所の円形孔がある。胎土には微小な礫の粒子が混じっている。330 は高坏の坏部破片である。口縁部は欠損している。胎土は精製された粘土が使われている。331 は脚部の半分ほどの破片である。欠損部分は流路内で流れてきたためか磨滅している。脚部の形状は中央に膨らみをもっている。脚部内面には絞り痕が見える。332 は下層より出土した高坏で、脚部から坏部の根本まで残存している。脚の形状はなだらかな円錐状で裾部も極端に広がらない。胎土は器台（329）のような礫の微小粒子が混じる。333 も下層より出土した脚部片である。裾部は下方で開く。内面は指ナデで粗く整形されている。334 ～ 339 は小型の高坏である。大きさからして実用とは考えにくく、非実用的なミニチュアであろう。334 は上層より出土した。脚部の破片だが裾部は欠けている。335 は小片だが高坏の脚部裾であろう。上層より出土している。336 ～ 339 は下層より出土した高坏の脚部である。表面の調整痕は剥がれ落ち、欠損部分は磨滅している。340・341 は坏部の一部と脚部が残っている。340 の脚部内面は絞り込んだ後にヨコナデしてある。342 は下層より出土した。脚部裾を一部欠くがほぼ完形に近い形状が残っている。ただし作りは粗雑で、外面には輪積み痕や工具による押さえなどの調整痕がそのまま残り、ナデやミガキなどは見られない。胎土は精製された粘土を使うが、作りの面では儀礼用の可能性もある。

343 は土師器の高盤である。皿部分と脚の裾の一部が欠損している。外面全体に赤彩が施されている。内面裾にはわずかに赤彩が見える。脚部は板状工具のようなもので縦方向に面調整された痕がある。胎土には微量に雲母が混じる。

344 ～ 348 は甑である。344・346・348・349 は下層より出土した。344 は甑の口縁部片である。345 は把手部分と体部が一部残っている。346 ～ 349 は甑の把手部分である。348 はやや小振りである。349 には把手の付け根に小さな貫通孔がある。

350 ～ 352 は土師器の壷、353 ～ 364 は甕である。350 は短頸壷の口縁部である。胎土には微細な粒子が混じっている。351・352 は下層より出土した壷の底部片である。351 の欠損面はかなり磨滅している。352 は平底で、固く焼き締まっている。353・354 は古墳時代の甕口縁部片である。いずれも下層より出土している。胎土には微小な礫などの粒子が少量混じる。355 は上層から出土した。奈良時代以降の甕であろう。胎土には非常に細かい雲母が混じっている。356・357 も上層より出土した甕で、口縁部を外側に強く張り出した「コの字甕」である。煤などの付着は見られない。358 は下層より出土した駿東甕の口縁部である。口縁部はくの字に屈曲している。359 は復元口径が 27.8 ㎝程の甕口縁部片である。外面の頸部には煤が付着している。360 は下層で出土した甕の小片で、外面には煤が付いている。361 はコの字甕の底部～体部である。外面はハケ調整、内面はナデ整形している。底部には大きな黒斑がある。362 は大型台付甕の胴と脚部の接合部破片である。細かい目のハケで接合部を調整してある。胎土には雲母片が多く混じる。363 も台付甕の脚部か。下層より出土した。脚部は厚みをもち、裾部はさらに厚みをもたせている。脚部と胴部の接合部には煤が付いている。364 は上層より出土した小型の甕である。一部の破片を欠くものの、ほぼ全体形がわかる。外面はハケ、内面はナデによる調整がある。

365 ～ 374 は土師器のミニチュア製品である。いずれも実用に適するものではなく、非実用品である。儀礼などに用いられたものであろう。すべて下層より出土していることから古墳時代に属する手捏ね土器である。365 は甕を模したものの底部であろうか。366 は杯状の手捏ねである。欠損部があるものの器種が特定できない。あるいは逆さにすると台付甕の脚部になるであろうか。367 は手捏ねの甑把手である。368 は坏の手捏ね品である。内外面には輪積みの痕が見えるほど粗雑な作りである。369 は丸底坩の底部である。内面には見込みから放射状に指ナデ整形した痕が見える。370 は坩か壷を模した手捏ねであろう。頸部も一部残っている。371 は小型の杯状の形をしている。外面と内面の口縁部にハケ調整がある。内面の下方は指でナデている。胎土には雲母が混じる。372 は丸底坩か壷であろう。算盤玉



第 198 図　SR201 出土遺物実測図３

状に近い胴部が張り出した形状をしている。373 は丸底の容器だが、器種は鉢であろうか。374 は丸底坩の手捏ね品である。

375 ～ 421 は須恵器である。375 は流路下層で出土した坏蓋である。７世紀前半代に属する。外面には明瞭な沈線がめぐる。376 ～ 380 は奈良時代の坏蓋である。376 は扁平な擬宝珠状の摘みを持つ。割れ口はかなり磨滅しており川の流れによって運ばれてきたものと思われる。377 は小振りな摘みを持つ坏蓋である。胎土は白い。径もやや小さい。378 は上層で出土した坏蓋である。箱型坏の蓋になる。379・380 も坏蓋の小破片で下層より出土した。380 は内面に墨が付着している。381 ～ 386 は古墳時代の須恵器坏身である。384・385 だけが上層から出土しているが、あとはすべて下層で見つかっている。381 は６世紀後半～末の TK43 または TK209 型式の時期に属する。上部に坏蓋の一部と思われる破片が付いている。382 は口縁部の立ち上がりが大きい。383 は 375 と同様に径が小さく、７世紀前半代の坏身である。坏蓋の 375 と同年代になる。384 ～ 386 も口径が 10 ㎝以下と小型の坏身である。年代は７世紀前半代であろう。

387 ～ 391 は有台の須恵器坏身である。すべて下層より出土した。387 は半身が残存している。388 は胴部下にはっきりとした稜をもつ。389 は坏身の底部小片である。湖西産であろうか。392 は長頸壷の底部片である。393 ～ 398 は無台の坏である。393 は復元口径が 17.7 ㎝の大型の坏身である。底部には「月嶋」の墨書がある。394 は「澤」の墨書がある。外面は黒くなっている。395 は上層の砂層より出土した。397 も底部に墨書があるが判読不明である。398 の墨書は「益人」と読める。399 も底部に墨書が見えるものの判読はできない。400 ～ 403 は須恵器の高坏である。いずれも脚部の破片で、下層より出土している。400 の表面には回転によるナデがある。401 は脚部に縦方向の透かしが２方向、上下に入る。透かしの間には２条の沈線が施されている。402・403 は脚部の小片である。

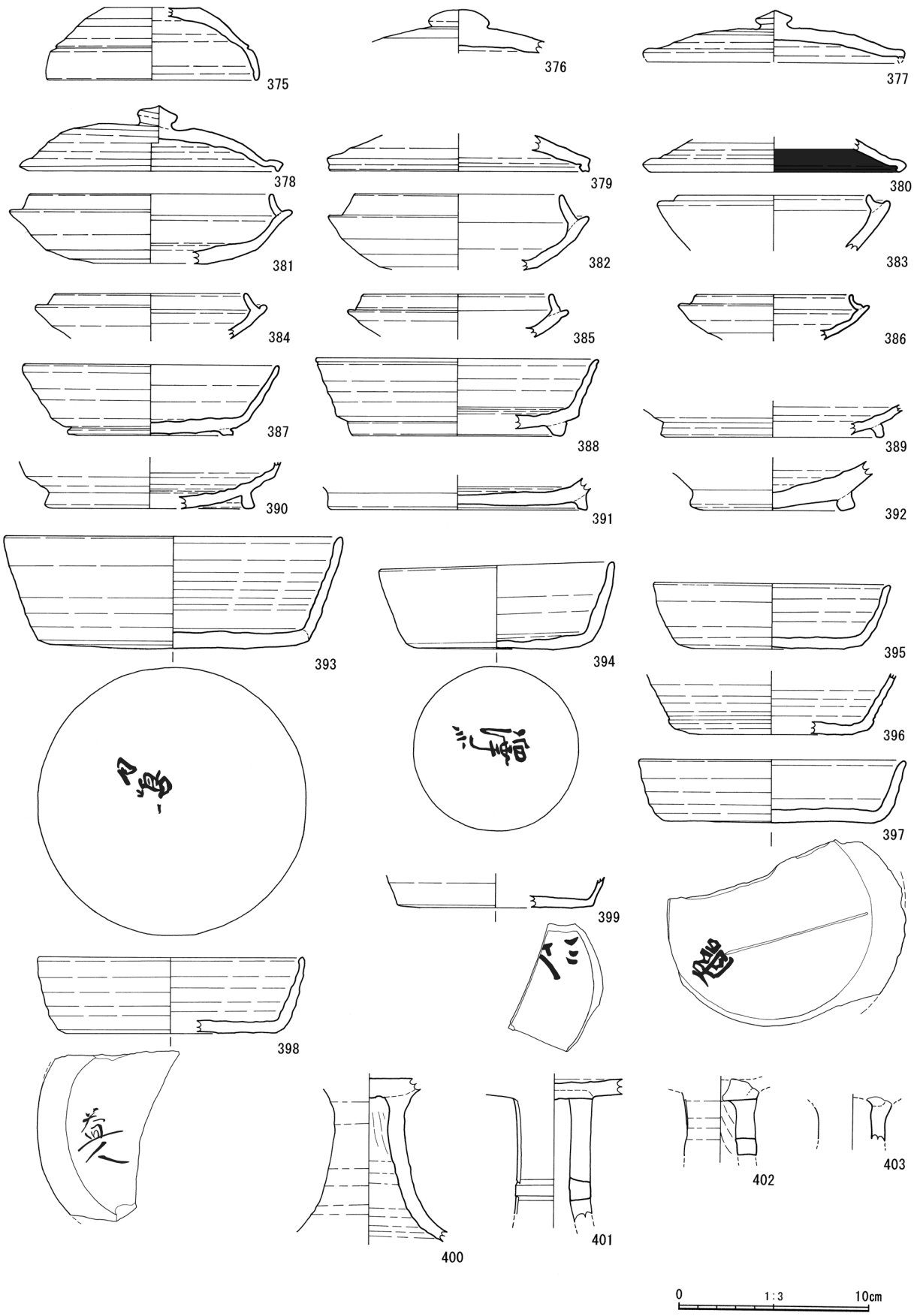
404 は須恵器の盌か。胴部中央が帯状に突出している。405 は下層より出土した須恵器の細頸壷の肩部である。406 は短頸壷の口縁部である。407 は壷の肩部片である。降灰釉が緑色に発色している。408 は甕の口縁部である。409 は壷の頸部から肩部の破片である。肩部の降灰釉は発色している。410 も大型の須恵器甕の口縁部である。口唇部は欠損している。411 も大型の甕の口縁部片である。外面には波状のヘラ描き紋が２条の沈線によって区画されている。412 は甕の肩部である。外面にはタタキ目があり、内面には同心円形の当て具痕が見える。413 も下層より出土した平瓶の頸部である。頸部外面には２条の沈線がある。414 は 413 に比べて薄手の平瓶である。415 も平瓶の口縁部である。内面には降灰釉が発色している。

416 ～ 420 は下層より出土した須恵器の壷底部である。416・417 は丸底である。416 は湖西産の須恵器と見られる。乾燥時の圧痕が底部に数条ある。417 は底部に乾燥段階の圧痕のほかに「×」状のヘラ描きがある。418・419 は回転ヘラケズリされた平底の底部である。418 は坏身とも見える。底部には３条の細いヘラ描きがある。420 は高台の付いた壷底部である。高台は貼り付けで高台内側は丸く膨らみをもつ。高台内側には「×」状のヘラ描きがある。

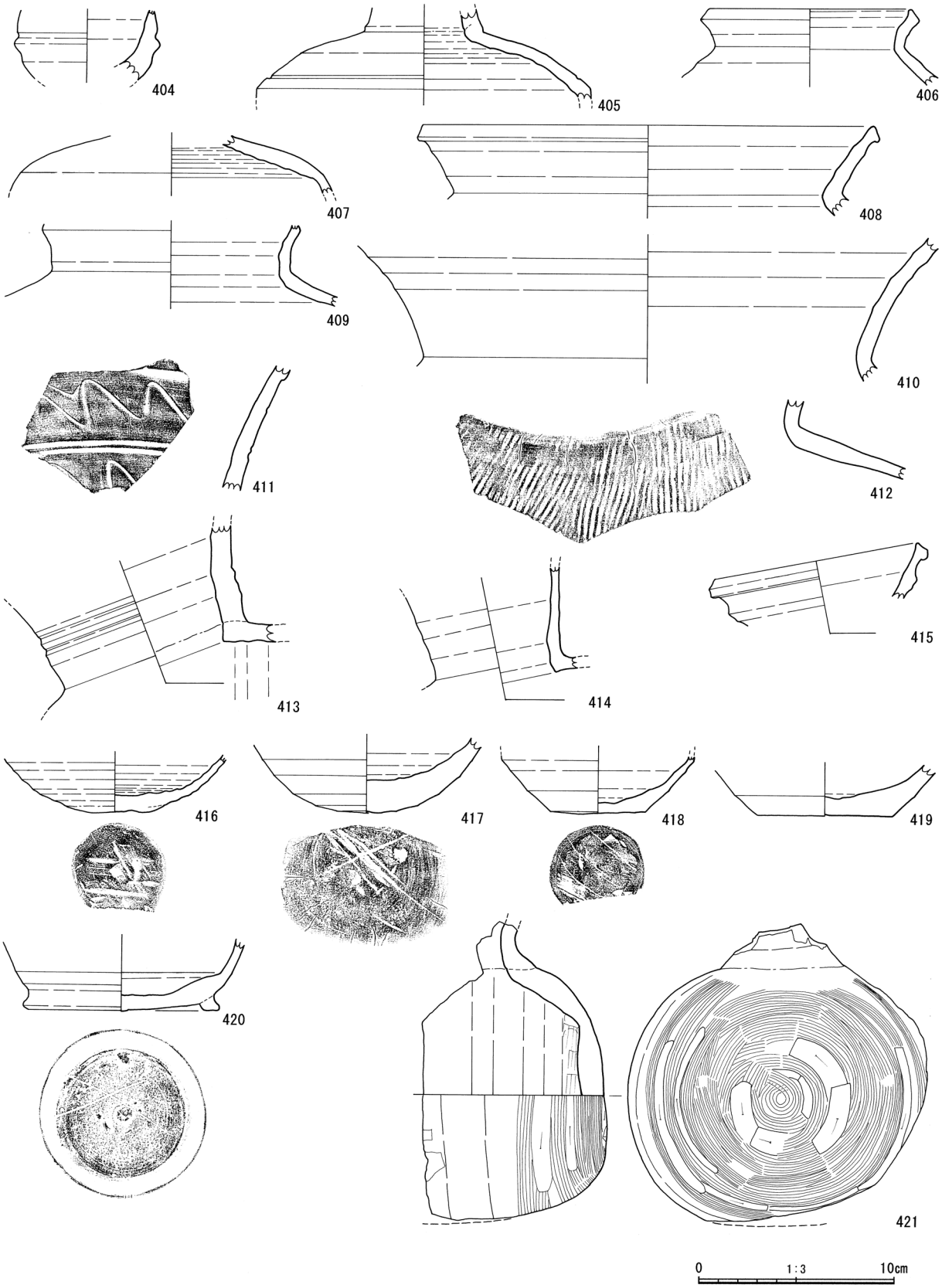
421 は同じく下層より出土した横瓶である。半身と頸部の一部が残っている。表面には単位６本ぐらいの櫛描き紋が渦巻き状に施されている。頸部は貼り付けられた痕跡が見える。肩部には自然の降灰釉がかかり、一部は発色している。

422 は須恵器の大甕の破片である外面にはタタキ目、内面には当て具の痕がある。自然降灰釉は発色している。外面には甕の口縁部破片が釉着している。

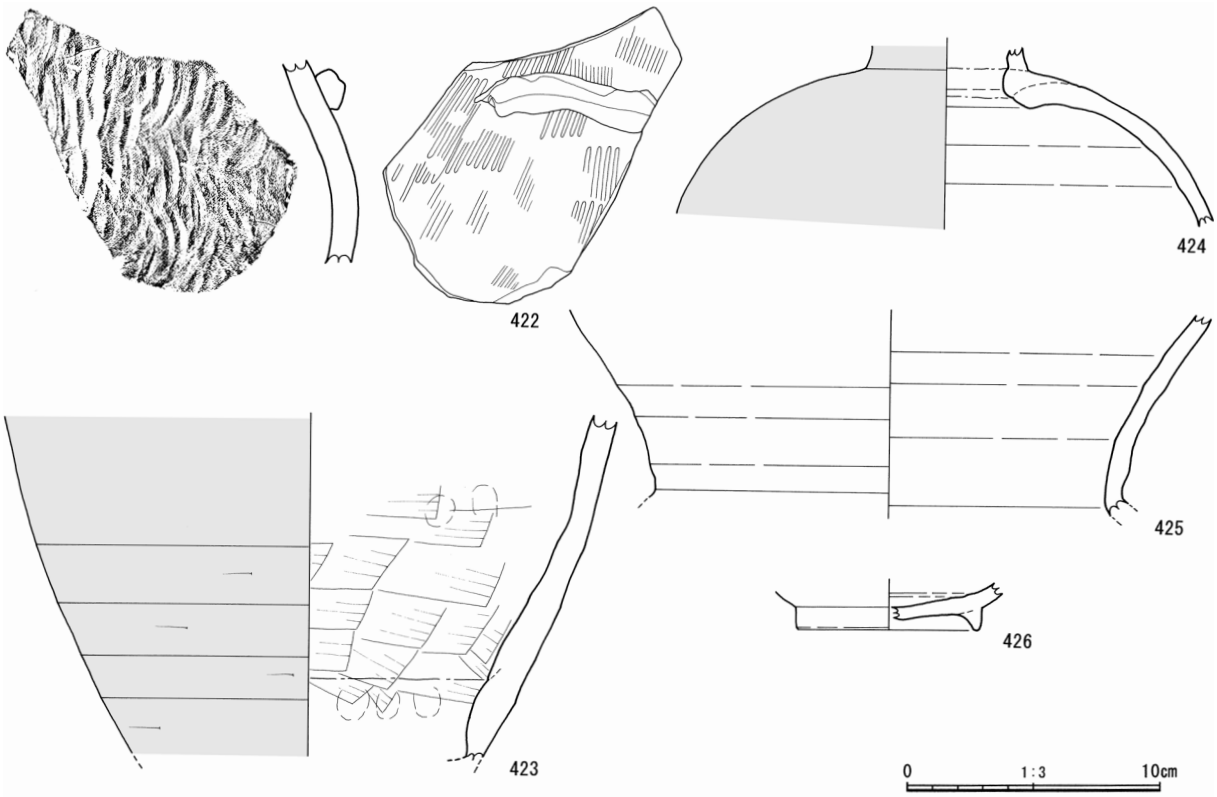
423 ～ 426 は灰釉陶器である。423 は長頸壷の体部片である。底部は欠損している。外面は全体に釉薬が付き発色している。灰釉は一部内面にも付着する。424 は上層で出土した長頸壷の肩部である。頸部は内面に貼り付け痕がある。肩部の降灰釉は緑色に発色している。425 は壷の頸部破片である。内外



第 199 図　SR201 出土遺物実測図４



第 200 図　SR201 出土遺物実測図５

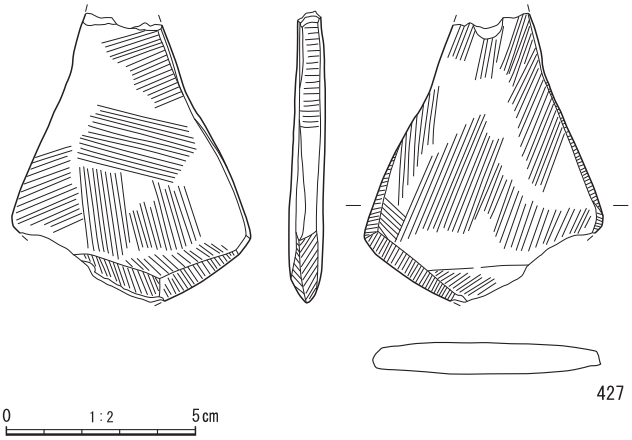


第 201 図　SR201 出土遺物実測図６

面ともに黄土刷毛塗りがされている。降灰釉は溶けて発色している。426 は碗底部の破片である。

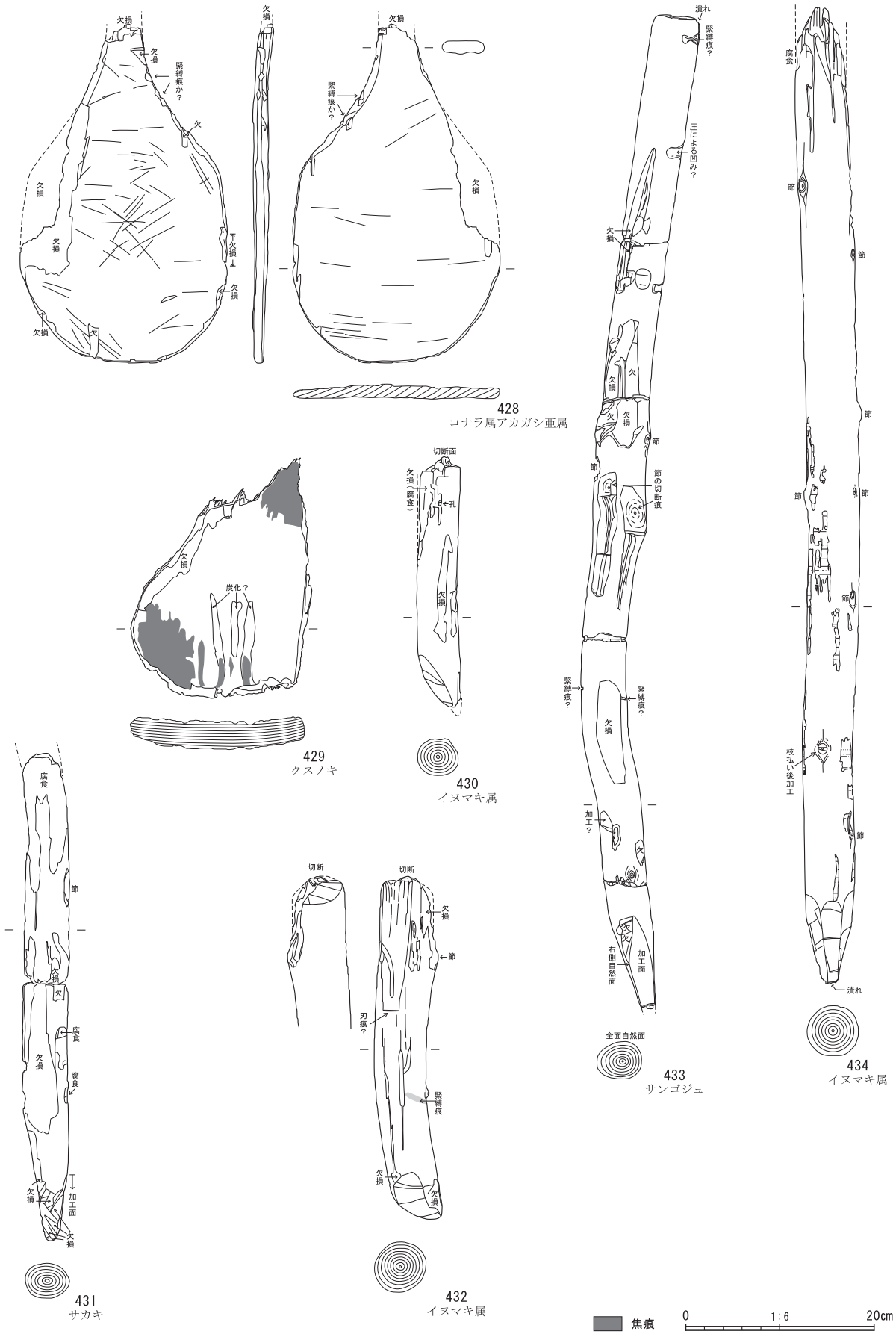
427 は石製品の砥石である。上層より出土している。薄い板状で、形状は菱形に近い。上部には穿孔があったようだが欠損している。表裏側面とも研ぎ面として使われている。手持ち砥石であったのだろうが、孔部の欠損により廃棄されたのであろう。

428 ～ 434 は木製品である。428 はコナラ属アカガシ亜属で作られた製品である。上部と側面の一部を欠く。残存長が 36.0 ㎝、幅が 21.95 ㎝、厚みは 1.1 ～ 1.65 ㎝と非常に薄い。上部は幅 4.45 ㎝幅の軸部状をしており、下方は円形に近い板状である。樹種と形状だけでみると農耕土木具の一木鍬に見える。しかし鋤にしては軸部が薄く強度に不安がある。そのため、ほかの器種である可能性も捨てきれない。表裏面には刃物痕が複数見られる。壊れたあとに俎板として転用されたものかもしれない。429 はクスノキの板目材である。全体に欠損しており整形された痕跡をもっていない。内径側は一部欠損している。クスノキは一般的に生活用品等の製品に使うことが少ない樹種である。香りが強く樟脳の役割で使われていたこともある。本品は樹皮の可能性もある。

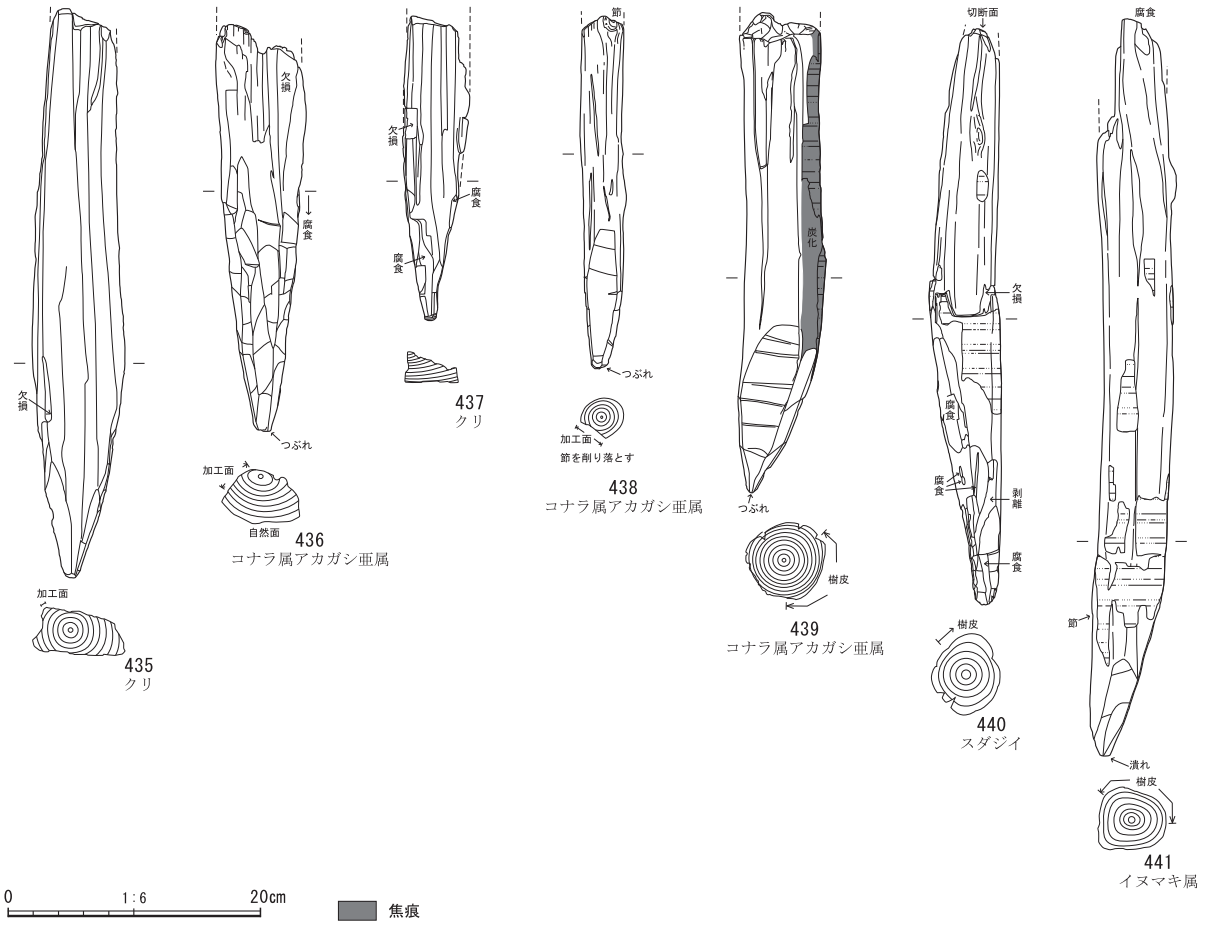


第 202 図　SR201 出土遺物実測図７

430・432 は杭状の加工があるイヌマキ属の丸木である。30 ㎝前後の丸木で、下端部には斜めに削られた痕がある。431・433・434 も杭である。431 は上層で出土した。下端部は先端を尖らせている。433 は１ｍ程の長さがあるサンゴジュの丸木杭である。径は 4.5 ㎝である。434 はイヌマキ属の丸木杭で、長さは 103 ㎝、



第 203 図　SR201 出土遺物実測図８



第 204 図　SA201・202 出土遺物実測図

径は７㎝である。**431・433・434** はいずれも遺跡近隣の低丘陵に自生する雑木を利用しているものと思われる。

SR202（第 205 図、図版 94）　SR202 は南側の東壁面に掛かる位置で検出した自然流路である。Ｊ～Ｋ－15 グリッドに位置する。一部が検出されたに過ぎないが SR202 は SR201 を破壊しているものであり、SR201 よりも新しいことが判明している。南側傾斜面に須恵器の坏蓋が正置状態で、その横に土師器坏が置かれた状態で出土した。

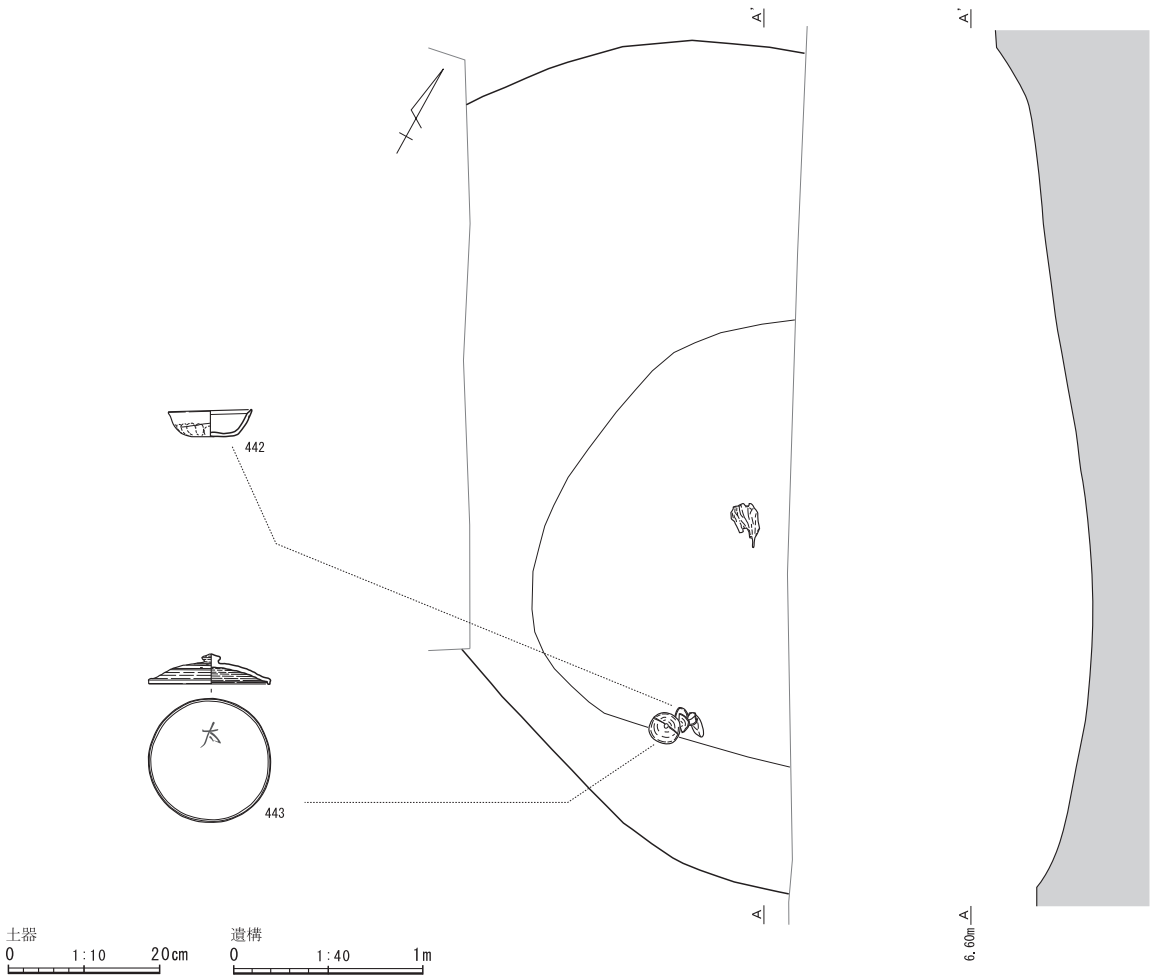
SR202 より出土した遺物は第 206 図 **442・443** に示した。**442** は土師器の坏である。口径は 11 ㎝程と割れているが､ほぼ完形に近い形状が残っている。表面の調整痕は磨滅しているが外面には黒斑がある。口唇部は薄手になっている。**443** も完形で出土した須恵器の坏蓋である。口径は 16 ㎝ほどある。蓋の頂部には擬宝珠状の摘みが付いている。蓋の内面には｢太｣の墨書が見える。焼成は内面側が上部になっていたようで、内面側に自然降灰釉が付着している。ただし、重ね焼きされていたようで、見込み部分に降灰釉が付着していない範囲がある。そのほか同流路からは流木などの木片が見つかっている。

（３）水田の畦の痕跡（第 193 図）

3-2 区の北端で東西方向に近い畦畔の痕跡が見つかっている。本調査区では水田の跡は見つかっておらず、上面でも確認されていない。恐らく第１面と第２面の間の層にあった畦畔の可能性が高い。

２　包含層出土の遺物

3-2 区第２面の包含層で見つかった土器は第 207 図 **444** ～ **453** に示した。**444** ～ **446** は土師器の坏で

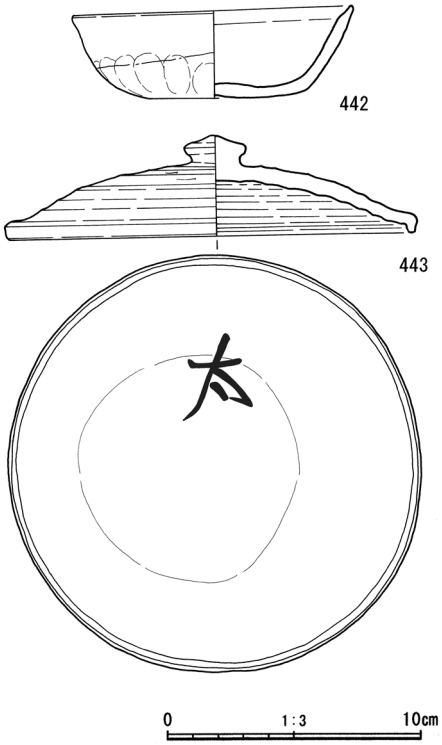


第 205 図　SR202 実測図

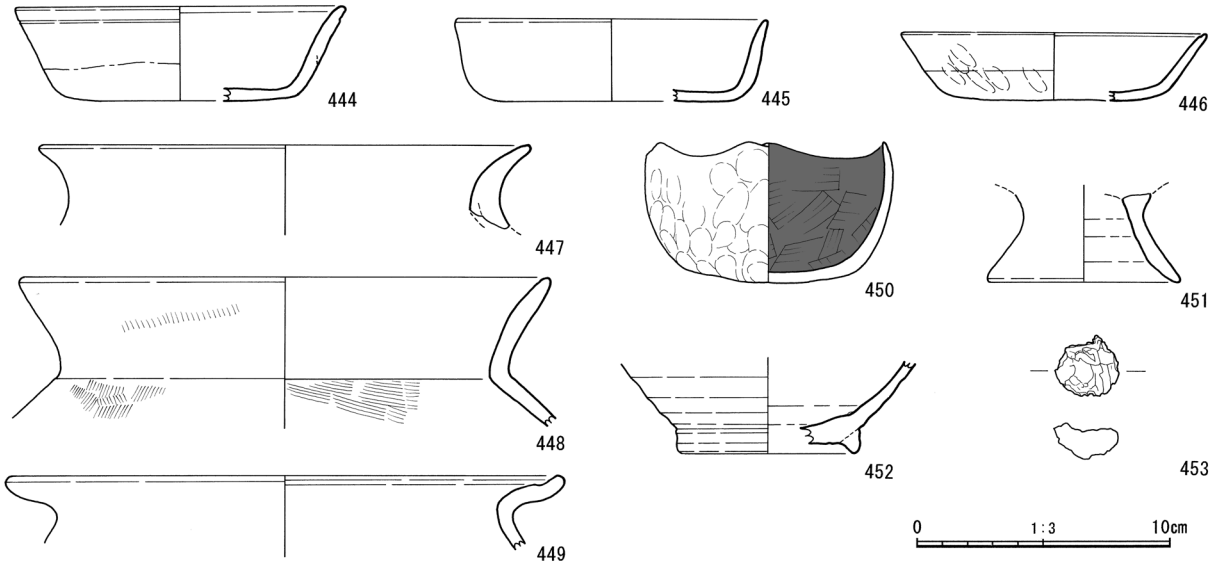
ある。444 は口縁外面に粘土を継ぎ足した跡が見える。445 は体部が直線的に立ち上がる形状の坏である。非常に焼き締まっている。446 は内外面に赤彩が残っている。447 ～ 449 は土師器の甕で口縁部破片である。447 は頸部に厚みをもつ。448 は口縁の立ち上がりが直線的になっている。449 は口唇部が強く外側に開く。「くの字」甕と呼ばれる形状の甕であろう。450 はやや変わった形状の土師器の坏である。内面は黒くなっており「内黒」と呼ぶ坏の一つと考えられる。ただ、手捏ねされたものと思われ、外面は指頭圧痕で整形され、内面は細い板状工具で板ナデされている。また口縁部は一定の高さに揃えられておらず、不定形である。451 は台付甕の脚部と思われる小片である。胎土は精製された粘土が使われている。ミニチュア品の可能性が高い。

452 は灰釉陶器の碗である。底部高台部分が一部残っている。内面見込には降灰釉がわずかに発色している。

453 は鉄滓の微粒子である。科学分析の結果、奈良～平安時代の年代が出ている（第７章）。



第 206 図　SR202 出土遺物実測図



第 207 図　第２面包含層出土遺物実測図

第６節　南区第１面の遺構と遺物

１　遺構・遺物

一反田遺跡の南区にあたる 3-2 区第１面では中世の区画溝に囲まれた屋敷地を検出した（第 208 図）。年代は鎌倉時代から南北朝頃が主体である。掘立柱建物跡は７棟が確認できた(SB101 ～ 107)。ただし、赤土政所遺跡でも同様であったが、後世に第２面の SR201 を埋めた土砂を起源とする噴砂が発生し、第１面の掘立柱建物 SB102 などの柱穴の一部が沈下している可能性が高く、対応する掘立柱建物の柱穴が確認できない部分もあった。掘立柱建物の柱穴からは古瀬戸、大窯期の遺物、区画溝北西から江戸期の遺物が一部出土している。だが、これは撹乱で上位から紛れ込んだ可能性がある。区画溝北西の石材は遺構としては認識できなかったが、これも撹乱の可能性がある。

第１面のほぼ全域にわたる区画溝 SD105 は、基本的には北から南に向かって傾斜していた可能性が高いが、上述したように噴砂により溝の基盤である砂礫層が沈下したために、掘立柱建物の西側の標高が低くなっていることが考えられる。このほか調査区の最北端では溝 SD104 を検出した。

第１面で検出した土坑（SK110 ～ 121）は、区画溝を伴う掘立柱建物（屋敷跡）の溝を埋めた土砂を掘削している。よって、土坑の年代は室町時代以降江戸時代のものである。

その他の遺構としては、3-2 区の南側で自然流路 SR102・103、調査区の中央付近で柵列 SA101、調査区の南では SA102 を検出した。柱穴も区画溝内で数多く検出したが､本遺構面は狭小な上に撹乱が多く、建物のような並びが確認できたのはごくわずかであった。礎板などが出ている柱穴も散見されたが、建物として成り立たないものが多かった。

以降、個別遺構の解説を記述するとともに、出土遺物についても合わせて解説する。

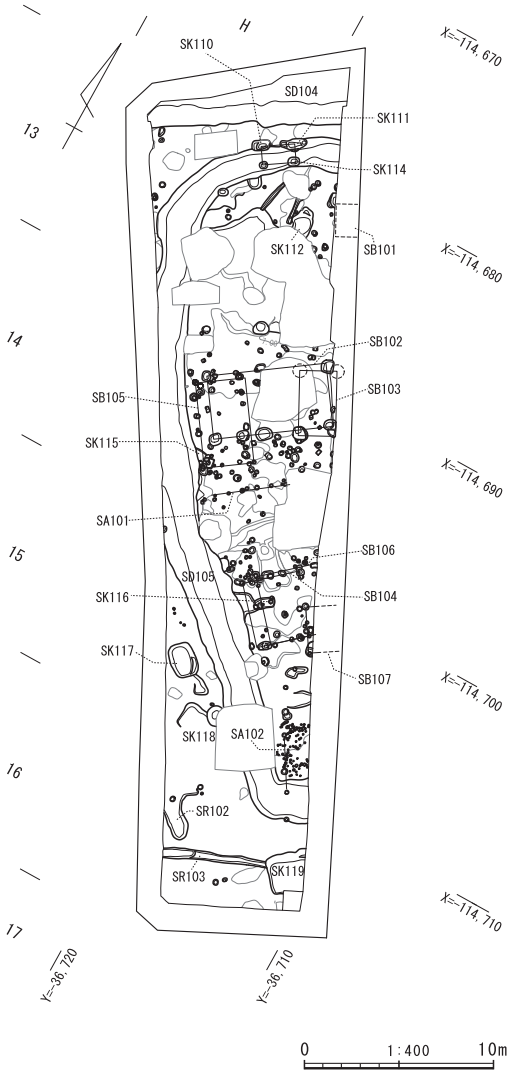
（１）掘立柱建物

SB101（SP02）（第 209 図、図版 95）　3-2 区のＩ -13 グリッド内、区画溝 SD105 の北辺からやや南、排水溝内で確認した柱穴である。Ｐ１のみしか確認できず、周囲に対応する柱穴も見当たらない。掘立柱建物かどうかの確証はないが、出土した柱根の太さを考えると、掘立柱建物の柱穴の可能性が高い。建物は東側に展開すると考えられ、Ｐ１は北西の角柱の可能性がある。桁行き方向や梁行き方向は現状

では判断できない。柱穴の掘形上端は6.96ｍで、西側の一部しか残っていない。柱根は排水溝内で直立した状態で出土した。

第215図472はSP02より出土した柱の根本部分である。残存長は50㎝、直径は33㎝とかなり太い。樹種はスダジイで芯持ち材である。下端面には面を整えた鉄製の刃物痕が全面に見られる。柱としては丸柱である。

SB102（第209図、図版96・97）　3-2区のＩ-14グリッド内で検出した掘立柱建物である。梁行きは東西方向に４間、桁行きは南北方向に１間で、梁行き方向は6.15ｍ、桁行きは3.4ｍを測る大型の建物である。まずはSB102を構成する柱穴群の柱の設置方法について報告する。SB102では構成する柱穴Ｐ５やＰ４では柱の礎板として建築材を再利用していることから、建て替えられた建物であることが想定できる。南東角柱のＰ６を破壊してほぼ同規模のSB103のＰ２が構築されており、Ｐ５も同じ位置に掘形の切りあい関係が確認できる。このことから後述するSB103を壊してSB102を建設したことが、掘形の切りあい関係とともに、柱や礎板への建築材を転用からもその可能性が想定できる。なお、転用された礎板には焦げたような痕跡が確認できることから、建て替えの要因は火災であった可能性もある。

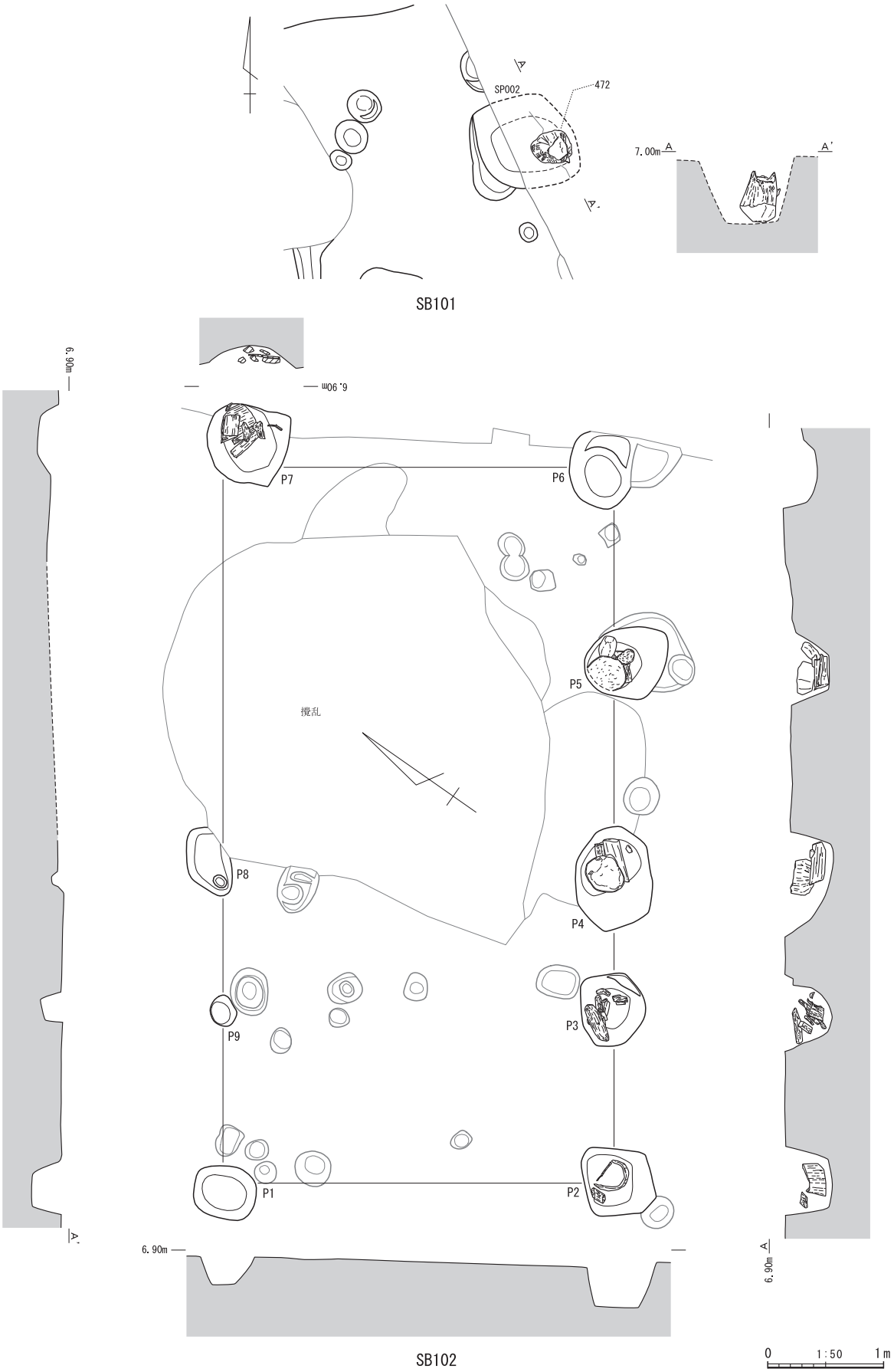


第208図　第１面全体図

柱穴は９箇所が確認できた。検出状況は以下のとおりである。Ｐ１は北西角柱である。Ｐ２は南西角柱で径60㎝の掘形がある。覆土からは柱根（Ｗ321）と木片（第215図473）が出土している。柱根は樹皮のみであったため樹種同定されていない。473はクロマツ材の木片であるが、転用された材と思われ、礎板または添木等の一部と考えられる。

Ｐ３では覆土内より木片が数多く出土した（第215図474～478）。いずれも不定形な端材で、建て替えられた際に再利用したもので、礎板や柱を支える添木として使われていたであろう。474はマツ属複維管束亜属の板材だが中央の孔は節の抜けた痕か。475はもともと面整形された角材だったものであろう。腐食や欠損が著しいが、一面には金属製の刃物で面整形された痕跡がある。樹種はマツ属複維管束亜属である。476は長さ33㎝、幅10㎝の長方形の板材である。樹種はカキノキ属で、節があることから樹皮に近い部分であろう。表面には一部焦げたような煤が付着していることから、前述したような再利用された材の可能性が高い。477はアカマツの板目材である。表面には面調整された刃物痕がある。小口面には枘孔を切ったような痕があることから端材であろう。反対の小口面は切断されている。478は長さ14㎝程のコナラ属アカガシ亜属の板目材である。表面には面調整された面が二面ある。煤が付着した面もあることから、これも再利用品であろう。上下端部は切断されている。

Ｐ４は径90㎝程の掘形をもつ柱穴である。覆土内からは第214図454の土器片が出ている。454は瀬戸美濃産で大窯期の稜皿の口縁部である。小片のため直径の復原には至らなかった。同柱穴では木製



第 209 図　SB101・102 実測図

品も３点出ている（第 215 図 479 ～ 481）。479 は柱根でスダジイの芯持ち材である。径は約 30 ㎝で残存長は 18.8 ㎝である。腐食が激しく割れているが、元は一木で、下端面には金属製の刃物で面調整した痕跡がある。腐食した上端面には所々に焦痕がある。480・481 は 479 の下に敷かれた礎板に使われていた木材である。480 は 26.7 ㎝、幅 10.1 ㎝のクロマツ製の柾目材である。全面に鋸痕か、金属製の刃物で面調整されている。上下端部には炭化した煤の痕が見える。481 は直径 11.8 ㎝のクロマツの芯持ち材である。側面には全面に面調整した刃物痕が縦方向にある。上端部は小口面をほぼ水平に切断している。下端部は斜めに削られ、一部は鋸状の工具で挽いている。側面には部分的に炭化の痕が所々に残る。柱を礎板として再利用したものか。

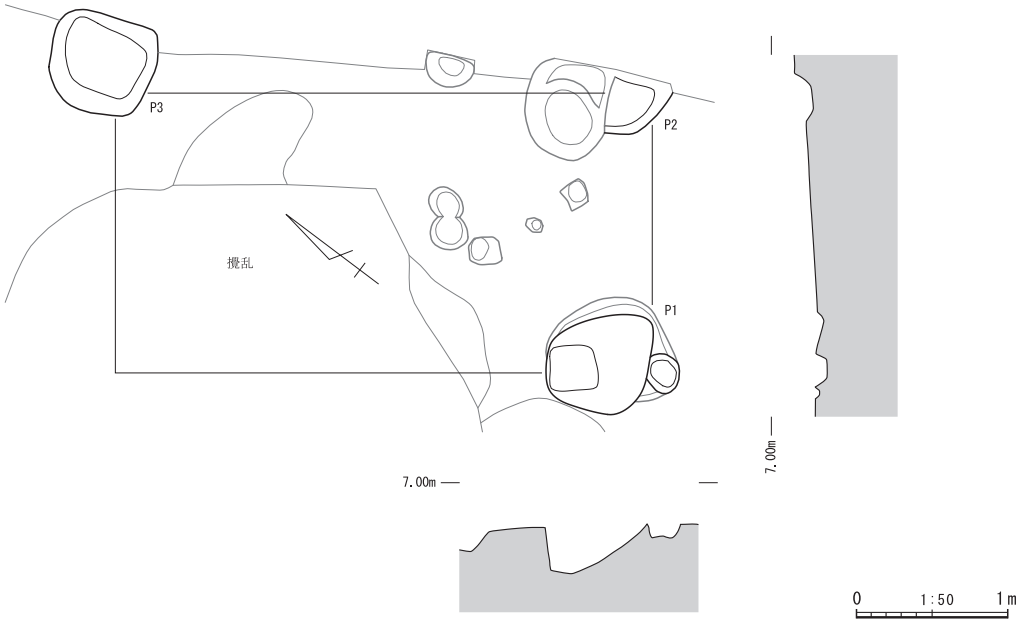
Ｐ５は覆土内より木製品が出土している。柱根は痕跡だけが残っていて取り上げに耐えうる状態ではなかった。第 216 図 482･483 は礎板として使われていた。482 は長さ 26.8 ㎝、幅 19.55 ㎝、厚さが 5.7 ㎝のツガ属の追柾目である。表裏ともに面調整されている。側面は割面、上下端部の小口面は切断されている。片面中央には金属製の刃物が複数個所に深く入っており、俎板状の用途に使われていたのだろうか。もう一方の面には一部煤が付着している。板の上半部には長方形の枘孔が２箇所穿たれている。483 はクロマツの柾目材である。芯に近い部分でもある。長さ 23.15 ㎝、幅が 13.1 ㎝、厚みは 3.3 ㎝の礎板である。全体に面を調整した刃物痕がある。正面の下半分と側面に著しく焼け焦げた痕がある。

Ｐ６は南東の角柱である。遺物は特に出土していない。Ｐ７は木片が複数覆土内より出ている。いずれも底に近い場所へ敷き込まれたような状態であったことから礎板として使っていたものであろう（第 216 図 484 ～ 486）。484 はクロマツの樹皮に近い辺材である。一部には樹皮も残っている。腐食が激しく、加工痕は見当たらない。485 は長さ 18.2 ㎝の長方形の板である。ツガ属の板目材で左側面だけが欠損している。486 は長さ 27.8 ㎝、幅 8.2 ㎝、厚さ 5.7 ㎝の長方形をしている。材はクスノキ科Ａである。上下端部は切断されているが表面は腐蝕が激しく加工痕が見えない。Ｐ８とＰ９は北面の柱穴だが、いずれも柱根や礎板は出ていない。

SB103（第 210 図､図版 96）　3-2 区Ｉ・Ｊ -14 グリッドで検出した建物跡である。SB102 と重複する。梁・桁行きともに１間だが、梁間のほうが長く長方形である。建物の主軸方法は SB102 とは異なり、SB105 と同じ方向性もつ。建物の時期は、SB103 よりも後に SB102 が建て替えられている。Ｐ１は SB102 のＰ５と切り合っている。長径は 80 ㎝ほどを測る。Ｐ２も SB102 のＰ６と切り合っている。北西角柱は撹乱により不明である。出土した遺物は特にない。

SB104（第 211 図、図版 96・97）　3-2 区のＪ -15 グリッド内で検出した。SB102 の南側８ｍ程のところに建てられた掘立柱建物である。SB102 とは主軸を同一にすることから同時期の建物である可能性が高い。建物は梁行きが東西方向の建物で、東面は調査区外に出ているため全体の規模は不明である。同じ場所で SB106 や SB107 と重複している。特に SB106 とは位置や規模が似通っていることから建て替えであることも考えられる。調査区内に残存している部分は梁行きが２間で３ｍ以上、桁行きは１間で 3.4 ｍである。柱穴はこれまでの建物と違って小規模で 35 ㎝程である。柱そのものは残っていないが、掘形内の痕跡を見ると 10 ㎝程度だったと想定される。また SB104 付近には柱穴内に炭化物粒が確認できることから、火災にあっていることが想定できる。出土遺物は特に目立ったものはない。

SB105（第 212 図）　3-2 区、Ｉ -14 グリッド内で検出した掘立柱建物である。SB102 の西面と切り合っている。後述する区画溝 SD105 の西面際に建つ。建物の規模は４間×２間で、梁行きは 4.6 ｍ、桁行きは 2.5 ｍである。主軸方向は西に 53 度である。SB103 と主軸方向が同一であることから同時期の建物と考えられる。つまり、これまでの記述に基づくと、SB103 ・105 がほぼ同時期に存在し、その後、火災等が原因で SB102 に建て替えられたことが想定される。柱穴の掘形は大半が 20 ～ 30 ㎝であるが、南西角柱のＰ５のみは 60 ㎝の掘形がある。本建物に関係する柱穴はＰ１～ 12 まである。このうち、南



第 210 図　SB103 実測図

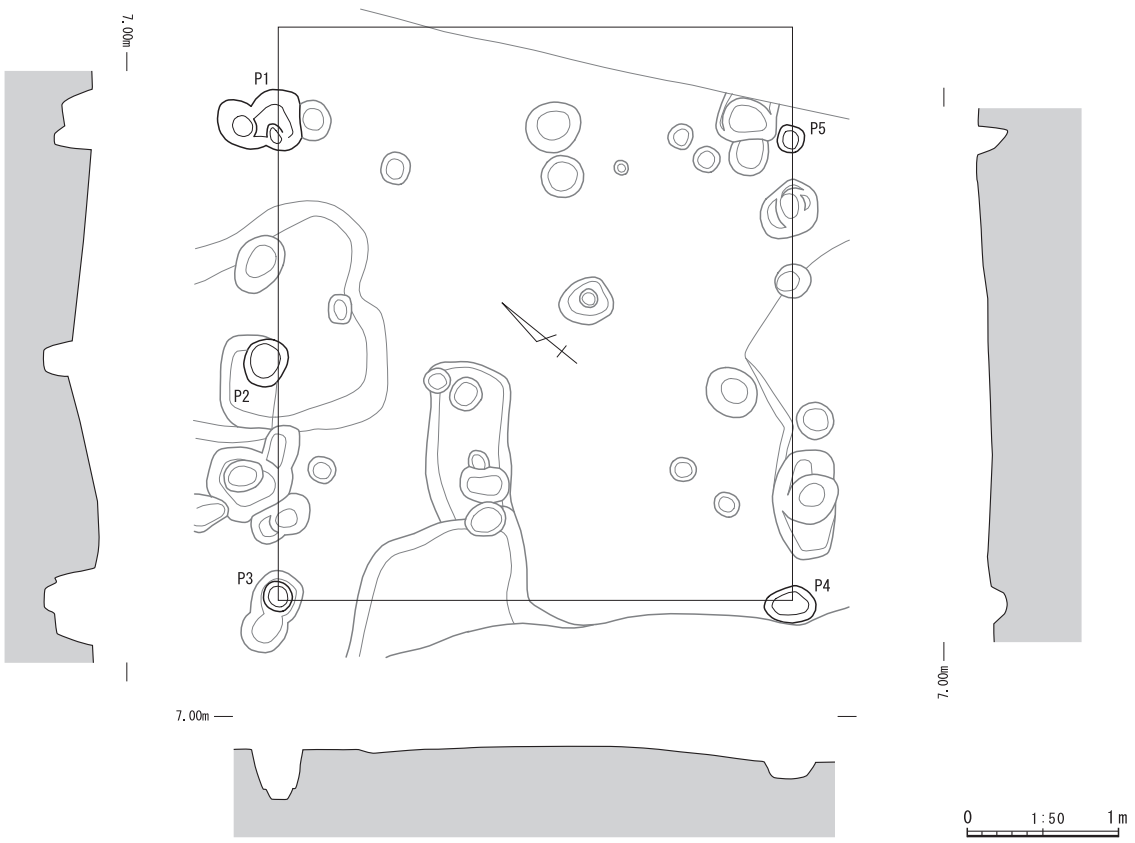
東角の柱穴は２箇所ある。建て替えか補強が行われた可能性がある。また建物内の梁行き方向は、やや位置がずれるものの SP52 や SP58（旧遺構番号）などの小穴がある。Ｐ 12 と共に、床を支える床束柱の可能性がある。

SB105 に伴う遺物は柱穴の覆土内より出土している。北西角柱のＰ１では覆土より灰釉陶器の碗底部片が出土した（第 214 図 455）。内面見込みには降灰釉がわずかに発色している。高台内側には糸切痕がある。南西角柱のＰ５では土師器の坏が出土した（456）。復元口径は 10.5 ㎝で口縁部から体部までの破片である。高台の有無は不明である。口縁部は体部よりも薄く、外面側には沈線のような稜がある。外面にはわずかだが黒い炭のような付着物が残っている。同遺構からは柱穴底から礎版も出土している（第 216 図 487）。487 は長さ 34.25 ㎝、幅 17.65 ㎝、厚みは 7.4 ㎝の板材で、材はスダジイである。さほど大きな径ではないスダジイの根本に近い部分で、半裁してから木表面を割り落として板状にしている。上下端部の小口面には金属製の刃物で削られた痕がある。柱根は残っていないが掘形の形状から 10 ㎝前後の柱であったと思われる。

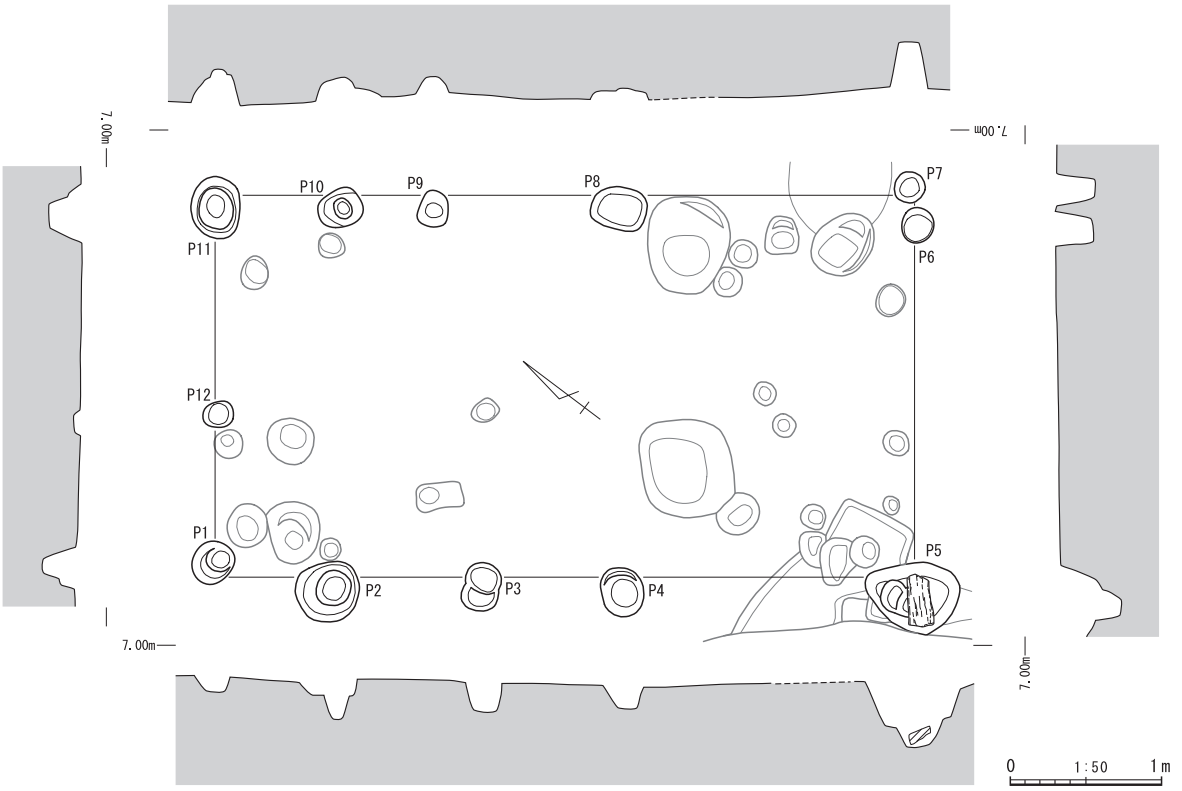
SB106（第 213 図、図版 95）　3-2 区のＪ -14・15 グリッドで検出した掘立柱建物である。SB104 や SB107　と切り合っている。特に SB104 とは位置や規模がほぼ同等であることから建て替えの可能性が高い。建物は梁行きが東西方向の建物で、東面は調査区外に出ているため全体の規模は不明である。調査区内に残存している部分は梁行きが２間で３ｍ以上、桁行きは２間で 3.6 ｍの規模である。北西の角と南西の角柱の掘形は 50 ～ 70 ㎝と大きめである。一方、角柱以外は小規模な柱穴で 35 ㎝前後である。柱そのものは残っていないが、掘形内の痕跡を見ると柱の太さは 10 ㎝程度だったと想定される。

SB106 のＰ２覆土内からは木片が出土している。木片（第 216 図 488）はイヌマキ属で、樹皮と樹皮に近い辺材の部分である。柱か礎板の一部である可能性が考えられる。

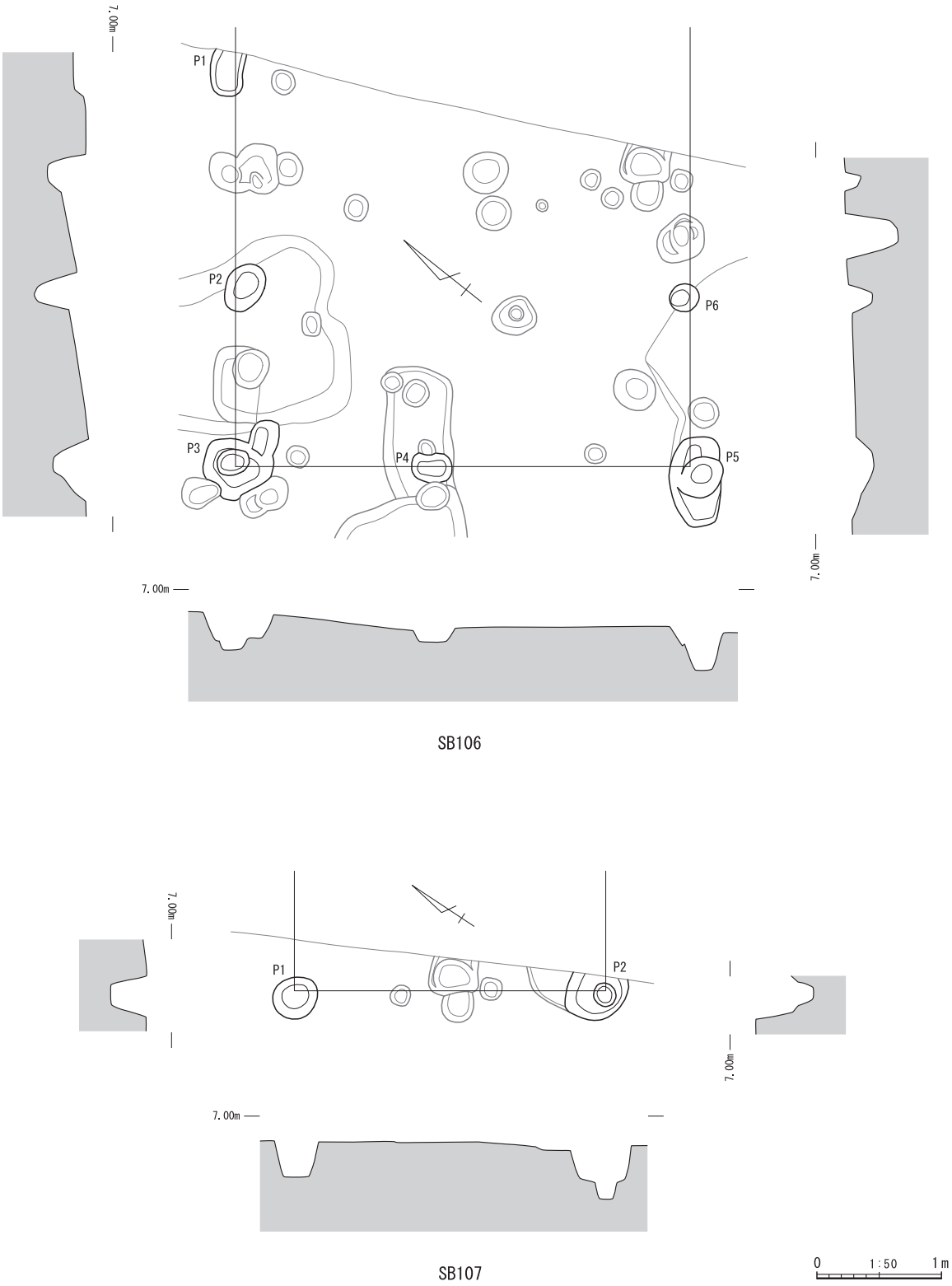
SB107（第 213 図、図版 95）　3-2 区、Ｊ -15 グリッド内に位置する掘立柱建物跡である。SB104 や SB106 の南面と切り合っている。おそらく SB104 や SB106 と同じ梁行き方向の建物で、調査区内にある部分は西面の桁間であり、東側は大半が調査区外であろう。西面の桁間は 2.5 ｍの規模がある。Ｐ１は径 30 ㎝、Ｐ２は径 50 ㎝の掘形である。掘形内に柱根は残っていないが、穴底の抜き去り痕から想定し



第 211 図　SB104 実測図



第 212 図　SB105 実測図

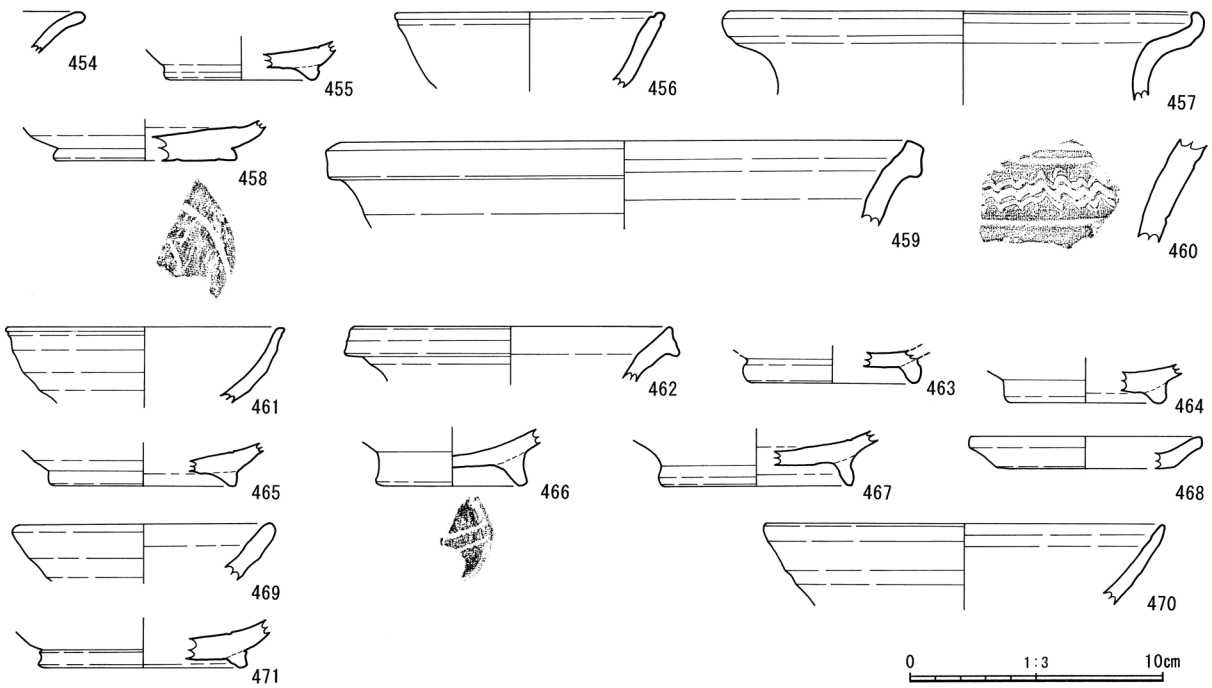


第 213 図　SB106・107 実測図

て 10 ㎝前後の柱だったであろう。

SB107 のＰ２覆土内より土師器の甕口縁部片が出土している（第 214 図 457）。復元口径は 18.6 ㎝で、口縁の断面形状は頸部から外側に開き、口唇部が屈曲して立ち上がる。

このほか、柱穴（SP）より土器・木製品が出土しているが、建物にはならなかったことから、個別



第 214 図　SP 出土遺物実測図

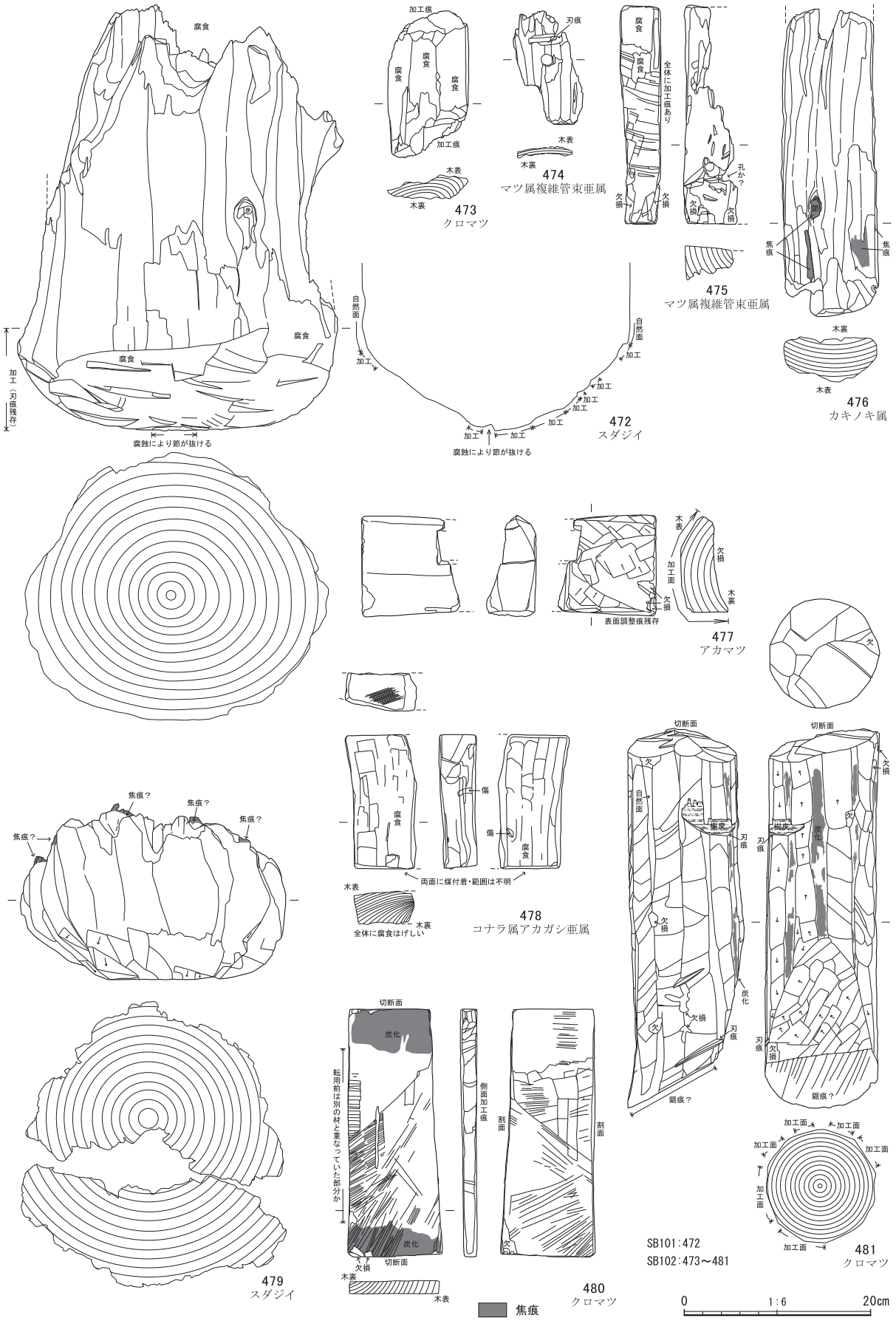
に報告する。土器は第 214 図 **458** ～ **471**、木製品は第 216 図 **489** にまとめた。**458** は SP123 より出土した土師器の高台坏である。底部は高台のような形状だが平坦面で、糸切り面にヘラ描きされている。SP113・114 からは須恵器の甕口縁部片が出土している。**460** は SP163 より出土した須恵器である。小片だが甕の頸部片であろう。外面には区画された沈線の間に波状の櫛描き文がある。**461** は SP115 覆土内より見つかった灰釉陶器の碗である。復元口径は 10.3 ㎝と小振りである。**462** は SP92 より出土した灰釉陶器の壷口縁部である。**463** ～ **467** は灰釉陶器の碗でいずれも高台の破片である。**463** は SP29、**464** は SP113、**465** は SP96、**466** は SP115、**467** は SP141 より出土した。**468** ～ **471** は山茶碗である。**468** は渥美・湖西産の小皿である。**469** は東遠江産の小皿である。**470** は東遠江産の碗口縁部片である。**471** は渥美・湖西産の碗高台片で、内面には降灰釉が発色している。第 216 図 **489** は SP84 の穴底より出土した木製品である。イヌマキ属の材で作られた曲物の底板・蓋板である。SP84 は SB105 の近くに位置する柱穴だが、建物跡には復元できなかった。曲物の底板・蓋板が柱穴の礎板に転用されている。板目材で非常に薄いのは腐食の影響もあるだろう。表面には漆と思われる付着物があった。

（２）溝

SD104（第 217 図、図版 98）　3-2 区の北端で検出した遺構である。東西方向で北東から南西に向かう流れがある。長さは調査区幅の 10.5 m、左岸側のみ検出したので遺構全体の形状や幅は不明であるが、最大で３m幅を確認した。深さは 80 ㎝程あり、土層は自然埋没したようなレンズ状の堆積状況である。土層の堆積状態からみて SD104 は人為的に掘削された溝ではなく、本遺跡内でも数箇所で確認されている自然流路（河川・旧流路）としたほうがよい遺構だろう。

覆土内では２箇所で遺物がまとまって出土した。上流部では棒状木製品（第 223 図 **549**）と土器（第 222 図 **541**）、下流部では土器（同図 **537**・**538**）の出土状況を記録した。これらを含む流路内より出土した土器・木製品については第 222・223 図にまとめた。

第 222 図 **536** は陶磁器の甕口縁部である。**537** は灰釉陶器の壷である。外面全体に降灰釉薬が発色している。**538** ～ **542** は山茶碗である。**538** は東遠江産で口縁部は欠損している。高台設置面には籾痕がある。**539** ～ **542** は渥美・湖西産の山茶碗である。**539** の高台接地面には籾痕が付着している。**543**・

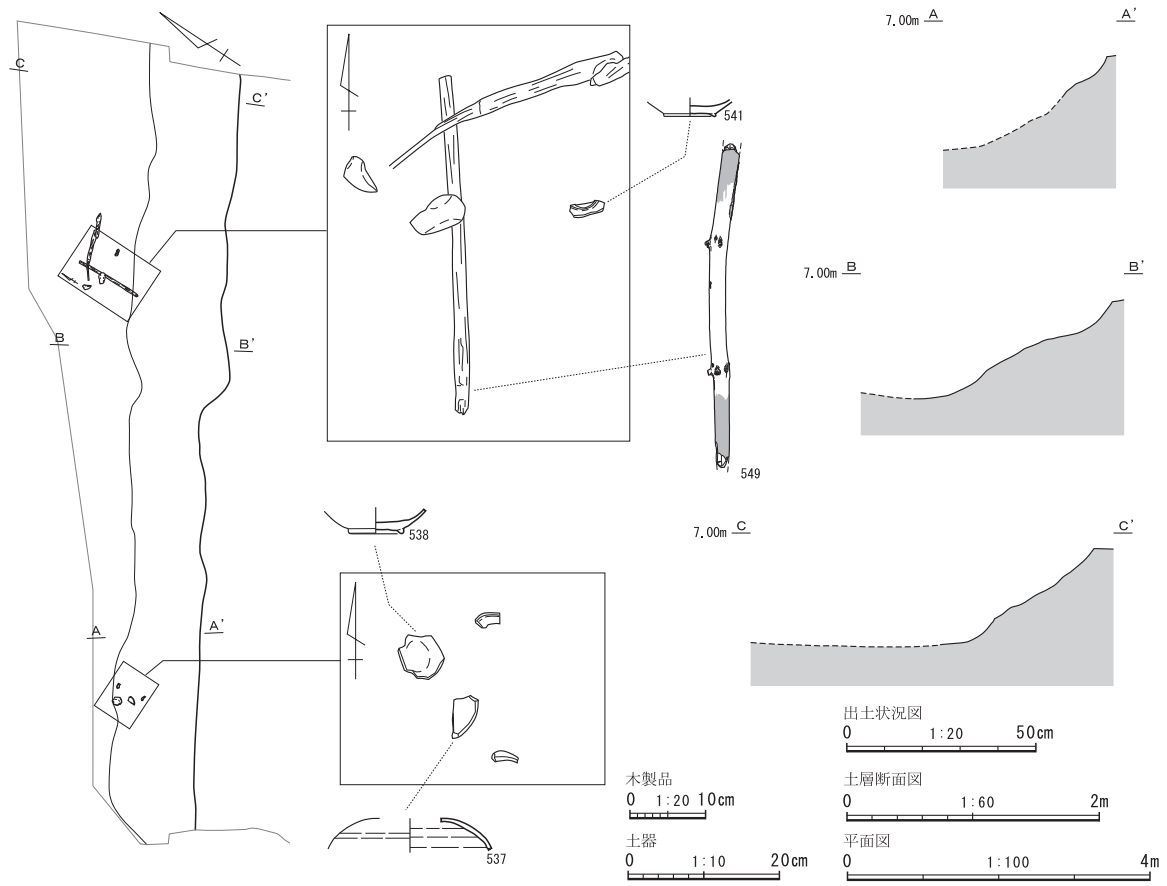


第 215 図　SB101・102 出土遺物実測図

第 216 図　SB102・105・106、SP84 出土遺物実測図

544 は渥美産の大型甕である。部位は胴部であろうが、内面は指ナデ押さえ、外面には叩き目文がある。両者は同一個体の甕の可能性もある。545 は瀬戸・美濃産の大窯期に属する天目茶碗である。口縁部のみだが釉薬は茶色に発色している。546 は瀬戸・美濃産の大窯期に属する建水である。平底で外面体部には施釉されている。547 は県内志戸呂産の徳利であろうか。548 は鉄滓である。科学分析の結果、年代は近世となっている（第７章）。

第 223 図 549 は SD104 の上流部覆土より出土した棒状の木製品である。樹種はマツ属複維管束亜属で、径 4.3 ㎝程の丸木である。上下端部は欠損し、両方とも樹皮部分が焼けて炭化している。そのほかに目立った加工は見られない。

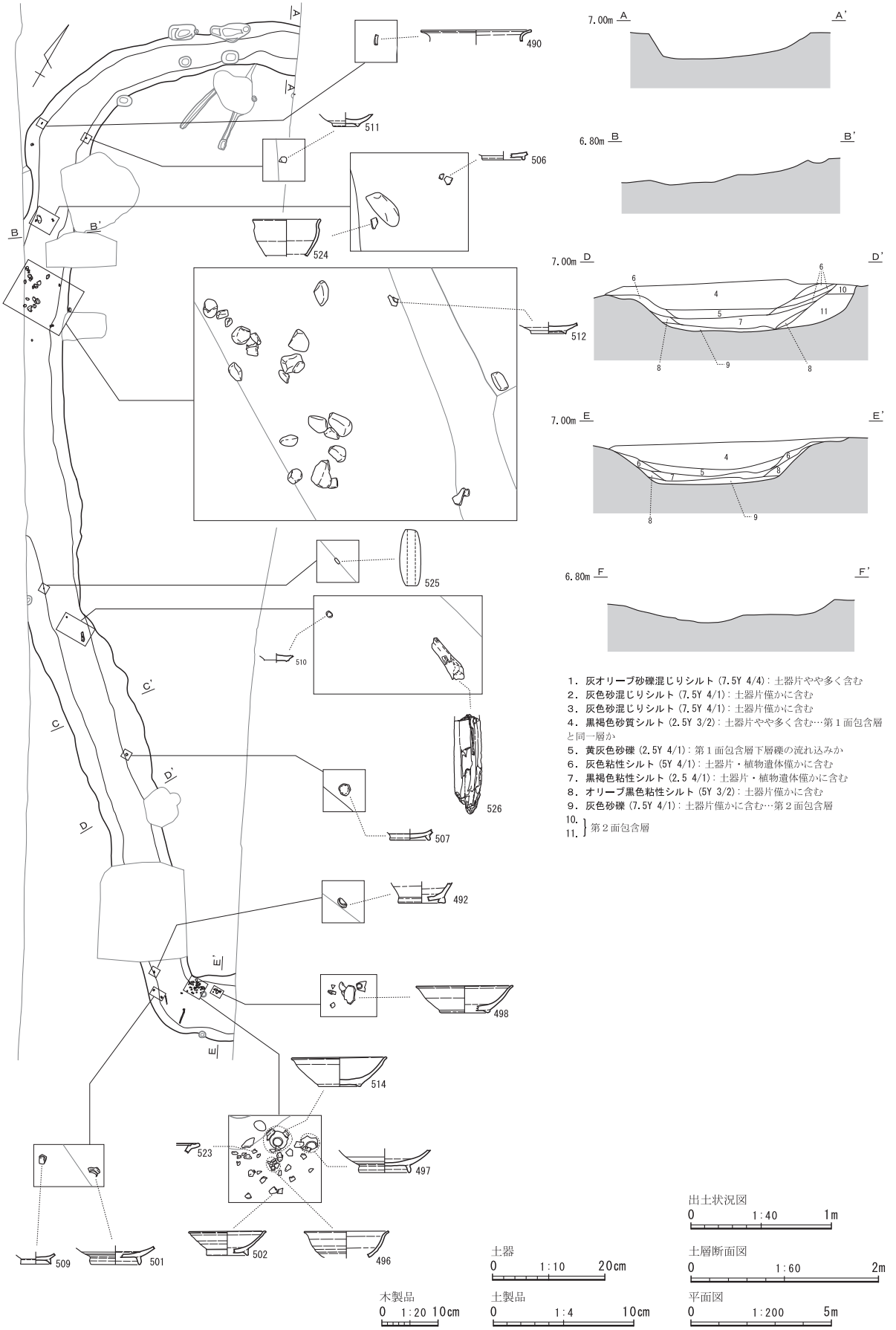


第 217 図　SD104 実測図

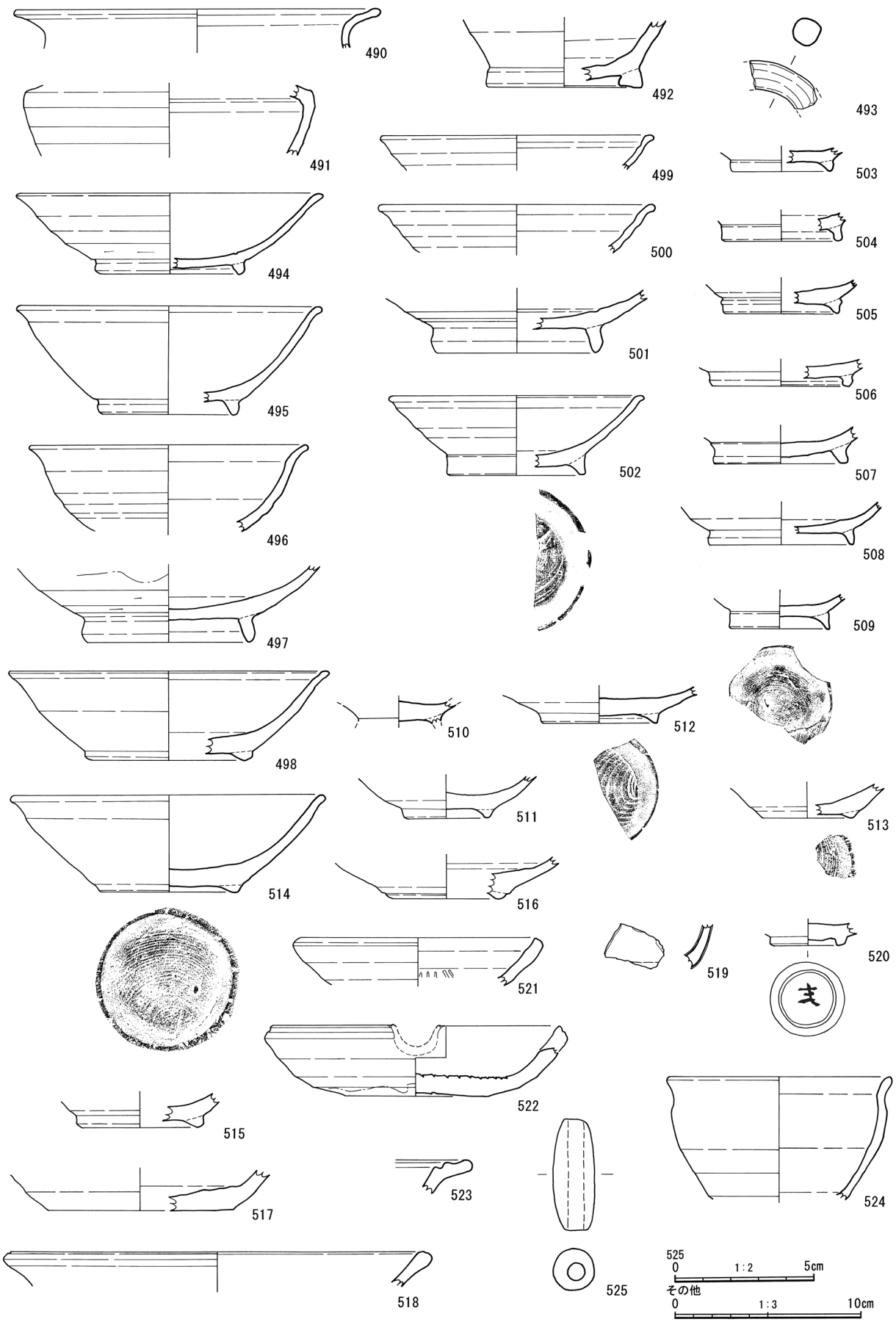
SD105（第 218 図、図版 98）　SD105 は 3-2 区のほぼ全体に及んでおり、調査区の北から南にかけて検出した溝状遺構である。調査区北側では北東方向から南西方向に向かい、Ｉ -13 グリッド付近でほぼ直角に南東方向へと方向が変わる。そこから 35 ｍ程溝は南下し、Ｊ -15 グリッド付近で、また直角に南東方向へ向きを変える。形状は逆コの字形で、方形区画溝の西側部分が検出されたと想定される。溝の幅は 2.0 ｍから最大 2.5m 程ある。溝の深さは浅いところで 30 ㎝、深いところでは 60 ㎝である。区画溝全体が検出できたわけではないが、SD105 は明らかに人為的に掘削された人口溝であり、溝内に掘立柱建物跡が見つかっている通り、屋敷地の周囲を囲む区画溝という性格をもつ。区画溝内では掘立柱建物跡を複数棟検出した。建て替えの痕跡も見られることから、ある程度の期間は屋敷地が存続していたであろう。

溝の堆積状況をみると、管理された様相が見て取れるが、それでも徐々に埋没しており、覆土内には土器片や木片、礫等も含んでいる。上層には SD105 の南側に広がる洪水堆積層が流れ込んでおり、最終的には、この洪水により埋没した可能性が高い。区画溝内でまとまって土器などが出土した部分について、出土状況図を第 218 図に示した。いずれも特別な出方をしたものではなく、基本的には埋没していく過程のなかで廃棄されたであろうものが紛れ込んでいると考えられる。

流路内より出土した土器・木製品他については第 219・220 図 **490** ～ **526** にまとめた。**490** は上流部で出土した土師器の甕の口縁部である。胎土は乳白色で、復元口径は約 20.5 ㎝である。**491** は灰釉陶器の長頸瓶である。肩部の破片で肩上面には灰釉が良好に発色している。口縁部と底部は欠損している。**492** は水瓶の底部であろう。内面見込み部分には自然降灰釉が付着して発色している。**493** は把手部分であろうが器種は大型の長頸壷等の把手であろう。表面にはうっすらと自然釉が付着している。

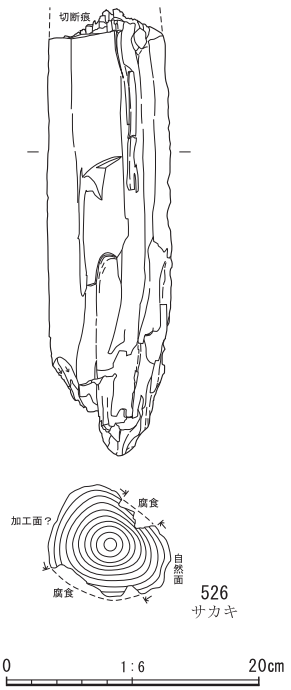


第 218 図　SD105 実測図



第 219 図　SD105 出土遺物実測図 1

494 ～ 497、499 ～ 509 は灰釉陶器である。494 は内面見込みに重ね焼き痕が見える。495 は口縁部に灰釉が漬け掛けされているか。496 は東遠江系の灰釉陶器で、内面には煤のような付着物がある。497 も口縁部に漬け掛けが見える。499 は口縁部の小片だが内外面ともに全面に灰釉が発色している良品である。500 も口縁部片である。501 は高い高台をもつ。焼き膨れが目立つ。502 も重ね焼きの痕が見え、内面側には灰釉がわずかに発色する。503 ～ 509 は高台部分の破片である。503 は内面見込みにまで降灰釉が発色している。509 は東遠江系の灰釉陶器である。498・510 ～ 516 は山茶碗である。510 ～ 512･516 は東遠江産、513 は尾張（知多半島）産、498・514・515 は渥美・湖西産である。498 は重ね焼き痕があり、内面には降灰釉が少量発色している。510・511 は小碗である。514 は非常に残りが良好である。内面見込みには黒ずみがある。517 は渥美･湖西産の徳利か？平底の部分のみである。518 も同じく渥美･湖西産で、器種は鉢である。



第 220 図　SD105 出土遺物実測図２

519・520 は貿易陶磁器である。器種は碗であろう。519 は青磁の碗底部に近い体部片である。520 は白磁の碗で高台部分である。高台内面には「主」の墨書がある。521･522 は古瀬戸産の卸し皿である。521 の復元口径は 12.7 ㎝で、卸し面がわずかに残っている。全面に施釉されている。522 は当初 SD105 出土としていたが、検討の結果、切り合っていた掘立柱建物 SB104 のＰ１で出土したものであることがわかった。復元口径は 15.3 ㎝で、内外面の体部まで釉薬がある。内面見込み部分には縦横格子状に切り込まれた卸し面がある。口縁部には口唇の一部が片口状に張り出している。底部には糸切り痕の後にソダ痕がある。523 は小片だが古瀬戸産の折縁大皿の口縁部か。全面に釉薬が発色している。小片のため口径の復元は不可能であった。524 は近世瀬戸・美濃産の天目茶碗である。525 は完形の土師質の錘である。焼きは非常に良く固く焼き締まっているため須恵器のような質感がある。長さは 3.9 ㎝で中央に膨らみをもつ紡錘形をしている。中央には径６㎜の孔が貫通している。

第 220 図 526 は溝内覆土より出土した。サカキの芯持ち材で径は 10 ㎝ほどある。上端部は切断痕がある。外面は腐食が激しいものの樹皮下の面が残っている。下端部は杭状に斜めに加工されているようだが腐食や欠損が激しく杭かどうかは特定できない。

（３）土坑

3-2 区第１面では土坑が 12 基検出された。土坑 SK110 ～ SK121 は撹乱と同様に第１面よりも後世に掘り込まれたもので、区画溝を伴う掘立柱建物（屋敷跡）の溝を埋めた土砂を掘削している。特に SK114 ～ 116 は SD105 を破壊していることから、屋敷地よりも新しいことが判明する。よって、土坑の年代は室町時代以降江戸時代のものである。土坑は遺構の性格が掴めないものが多かった。

SK110（第 224 図）　3-2 区Ｈ -13 グリッドの北東部で検出した土坑である。東側には SK111 が位置している。溝 SD105 の北側肩の位置にあるが、この溝よりも後で掘り込まれた遺構であることは確実である。長軸が 1.1 ｍ、短軸は 0.55 ｍ程で隅丸の長方形を呈する。

SK111（第 224 図）　3-2 区Ｈ・Ｉ -12 グリッド内で、SD105 の北側掘形上で検出した土坑である。１ｍ程西側には SK110 がある。長軸は 1.4 ｍ、短軸は 0.7 ｍ、全体の形状は不定形で、掘形はレンズ状の浅い掘り込みである。

SK112（第 224 図、図版 94）　3-2 区のＩ -13 グリッドで検出した SK112 は、SD105 の北辺よりやや南

側で確認した土坑である。南側の縁は更に後世の撹乱で壊されている。形状は不定形で、南北は1.6m、東西も1.6ｍ程の規模がある。土坑の年代は少なくとも区画溝で囲まれた屋敷跡の時期よりも時代が下る。

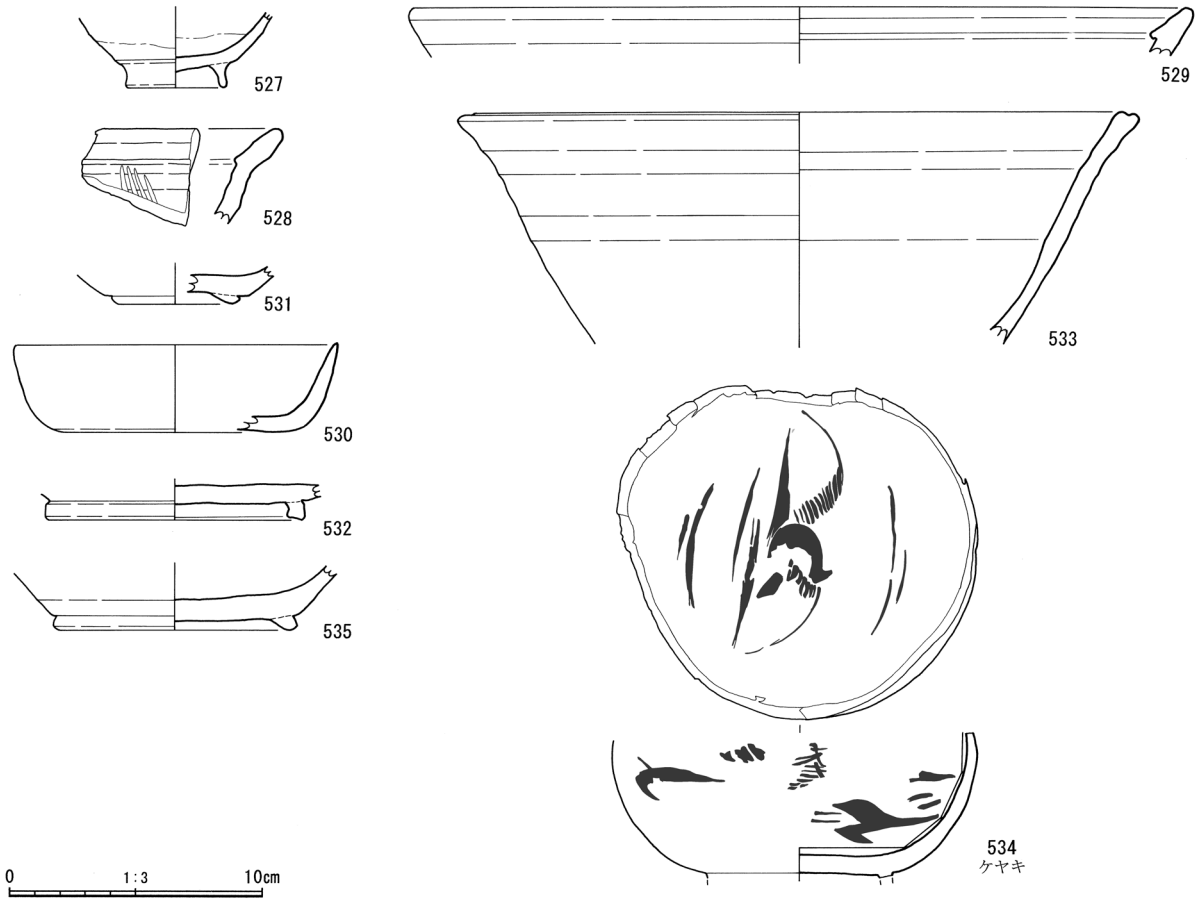
土坑覆土内の１層より土器や木片、礫等が出土している。第221図**527**は近世志戸呂焼の丸碗である。内外面には体部より上に漬け掛けの釉がある。**528**は近世の上志戸呂焼の大窯期に属する擂鉢である。口縁部の破片だが、内面には４本単位の櫛目がある。実測図はやや外側に傾く。

SK113（第224図）　3-2区のＨ-13グリッドで検出した半円形の土坑である。北側はSD105に切られている。長さは60㎝、幅は74㎝程あり、深さは10㎝と浅い。その他の土坑よりも古い時期の可能性があるが、出土した土器はごく少量であり、年代の決定には乏しい。第221図**529**は近世志戸呂産の擂鉢である。口縁はもう少し外側に開く形状である。出土した土器から近世以降の土坑の可能性が高い。

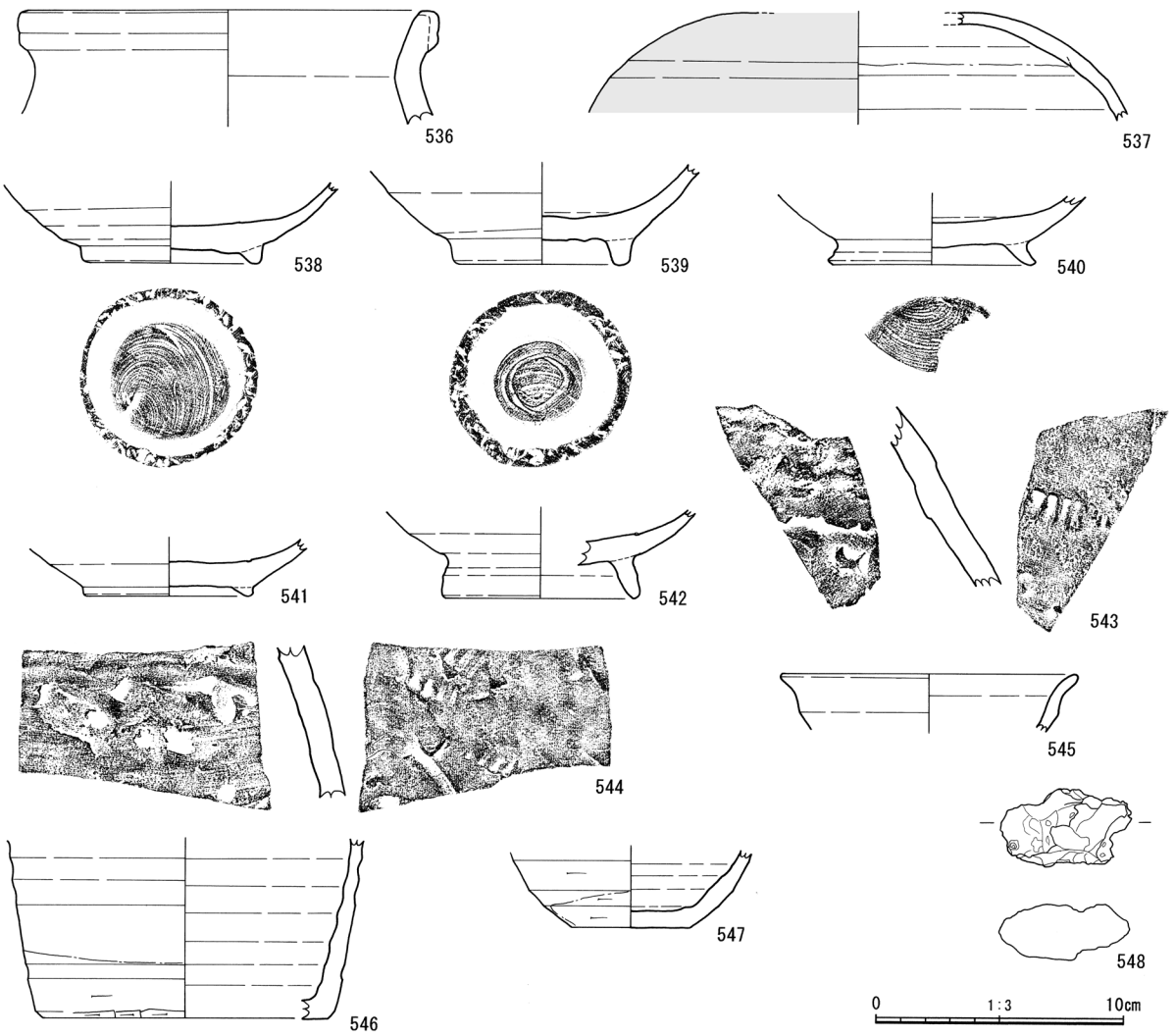
SK114（第224図）　3-2区Ｉ-13グリッドで検出した。SD105の北側で、SK110やSK111と近い位置にある。SD105のなかにあることから、溝が埋没した後に掘り込まれた土坑である。長軸は60㎝、短軸は48㎝で楕円形を呈する。掘形は10㎝と浅い。土器は出土していないが近世の土坑であろう。

SK115（第224図）　3-2区Ｉ-14グリッド内で見つかっている。掘立柱建物SB105の南西角と重複している。最大65㎝ほどの不定形な土坑で、掘形は非常に浅い。南側の一部が撹乱で切られている。すぐ西側にはSK120・121がある。覆土には土器片を少量含む。ただし小片で図化できない。

SK116（第224図）　3-2区Ｊ-15グリッドで検出した土坑である。西側は撹乱で切られている。最大1.5mの長さがあり、幅は50㎝程ある。もともと平面形は長方形であっただろうか。掘形は５㎝程度と浅い。遺構内には５つの柱穴が切り合っている。柱穴のほうが土坑よりも後の年代であろう。土器は出土していない。



第221図　SK112・117・119出土遺物実測図

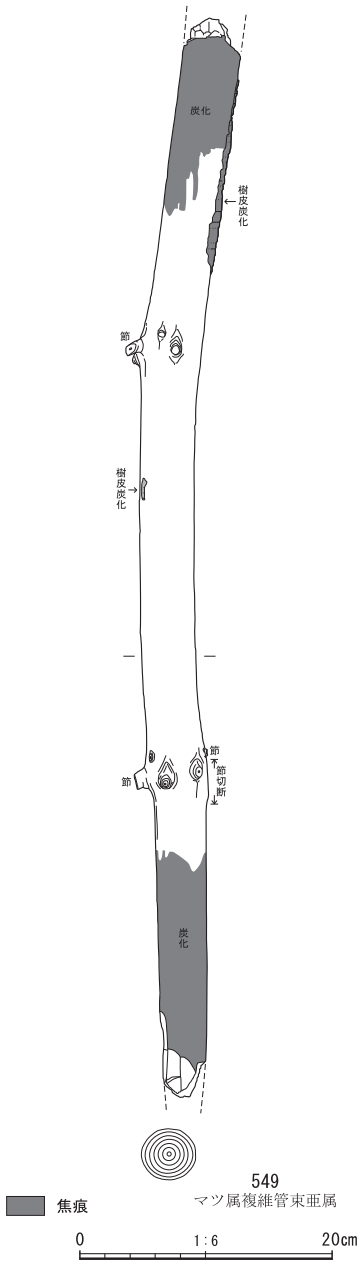


第 222 図　SD104 出土遺物実測図 1

SK117（第 224 図、図版 94）　3-2 区Ｉ -15 グリッド内で検出した。やや方形がかった楕円形の形状である。長軸方向は約 1.7 m、短軸方向は 1.3 m、深さは 26 ㎝程ある。土坑内には十数㎝から人頭大の礫が中央に並んだように置かれている。置かれているとしたのは、これらの礫は外部から持ち込まれたものの可能性が考えられるからである。掘形を見ても人為的に掘られた坑で間違いないであろう。土坑 SK117 は溝 SD105 を埋めた砂礫層を掘り込んでいることから、SD105 よりも新しいことが判明している。炭化物は見つかっていない。土器の年代幅も大きく年代の決め手を欠くが､山茶碗期以降であろう。遺構の性格は不明である。

SK117 からは漆椀、土師器などが出土した。第 221 図 **530・531・532・533・534** は SK117 の覆土より見つかっている。**530** は土師器の坏である。形状から箱型に近い。口径は 12.8 ㎝に復元できる。表面風化のため面調整は残っていない。**531** は渥美･湖西産の山茶碗である。高台径から小碗か小皿であろう。内面には降灰釉がわずかに発色している。**532** は須恵器の高台坏である。奈良時代のものであろう。内面は回転によるナデ、高台内面にはヘラケズリがある。**533** は山茶碗の時期に併行する鉢であろう。陶質だが粒子の混じりが多く、産地は不明である。このほかに棒状の木片も数点覆土内にあったが、加工痕はないものであった。

漆椀（第 221 図 **534**）は口縁部と高台が欠損している。黒色の生地に赤色で彩色したもので、内面に



第 223 図　SD104 出土遺物実測図２

は飛翔する鶴が、外面には鶴等が描かれている。室町時代以降に位置づけられる。

SK118（第 224 図）　3-2 区 J-15 グリッドで検出した円形土坑である。平成 24 年度の試掘確認調査坑で東側が切られている。残存部の最大径は 1.1 ｍで深さは 33 ㎝ほどある。堆積土は１～３層まで土器片が多く含まれるが図化には至らない小片ばかりであった。

SK118 は SK117 の南東側で確認した遺構であり、SD105 を埋めた砂礫を掘りこんで掘削していることから SD105 より新しいことが判明する。３層の最下部の底面には木葉や砂礫層が層状に堆積していた。遺構の時期及び性格については不明である。

SK119（第 224 図、図版 94）　3-2 区 J -16 グリッドで検出した土坑である。SK119 は 3-2 区南東隅角で確認した。東側・南側が調査区外に及んでおり、本来の平面形は不明であるが、方形あるいは長方形であった可能性が高い。西側は SR103 と重複しているが、SK119 のほうが後に掘り込まれている。南北方向は 2.0m、東西方向は 2.25 ｍの規模がある。掘形も 40 ㎝程ある。

SK119 の覆土より出土した土器がある。第 221 図 **535** は渥美・湖西産の山茶碗である。高台には籾痕が付いている。山茶碗のほか、覆土上層から「炭化米」が出土した。種子同定とともに放射性炭素 14 年代分析を実施した結果､「イネ」と「ヒエ」であることが判明した（第 7 章）。

SK120（第 224 図）　3-2 区 I -14 グリッドで検出した小土坑である。SK115 の西隣に位置する。径 35 ㎝程の不定形な円で、掘形は非常に浅い。覆土には土器片を少量含む。遺構の性格は不明である。

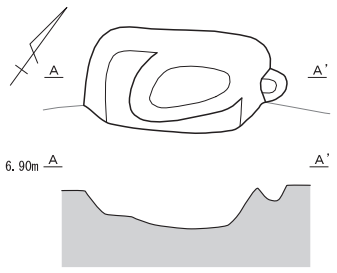
SK121（第 224 図）　3-2 区 I -14 グリッドにある小土坑である。SK115 の西隣で、SK120 は北側に接する。南側は撹乱により切られている。25 ㎝程の方形で、掘形は非常に浅い。覆土には土器片を少量含む。遺構の性格は不明である。

（４）自然流路

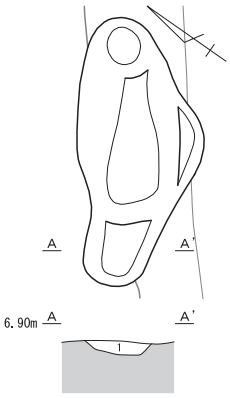
3-2 区では自然流路を調査区の南側で検出している。調査区の大部分を占める方形区画溝より外側で、区画溝の南西以南の位置である。3-2 区以南は赤土政所遺跡の範囲であるが、3-1 区から 2-3 区、2-2 区は全体に土地が低く、居住域のような遺構は見つかっていない（第６図）。今回の調査区内でも周辺の河川から流れ出た枝のような流路が無数に走っている。区画溝よりも南側は低地であることから、SR102・103 ともこうした流れの一部なのであろう。

SR102（第 225 図）　3-2 区 J -16 グリッド内で検出した自然流路である。長さは 2.0 ｍ、幅は最大１ｍ程の規模で、東西方向である。ただし遺構の深さは 10 ㎝と非常に浅く、形状も不定形である。また西側は調査区外であるため、全体の形状は不明である。覆土は砂礫層で小礫や土器片をわずかに含む。

第 226 図 **550** は SR102 より出土した土器である。**550** は渥美・湖西産の山茶碗である。底部の破片で体部は欠損している。内面見込みには重ね焼き痕があり、そこから体部内面は降灰釉が緑色に発色している。

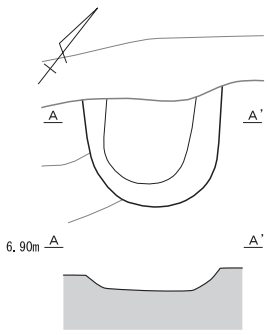


SK110

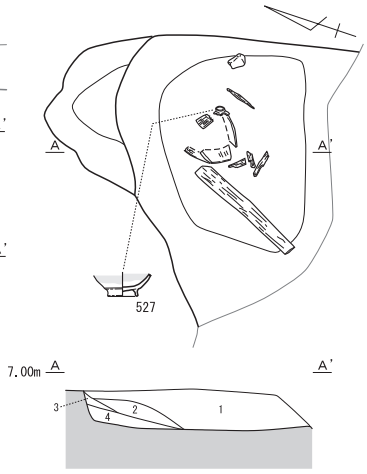


1．オリーブ黒色シルト（5Y 3/2）：土器片僅かに含む

SK111

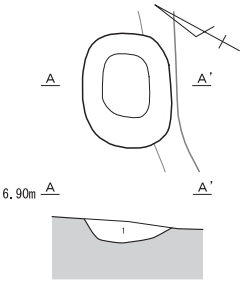


SK113



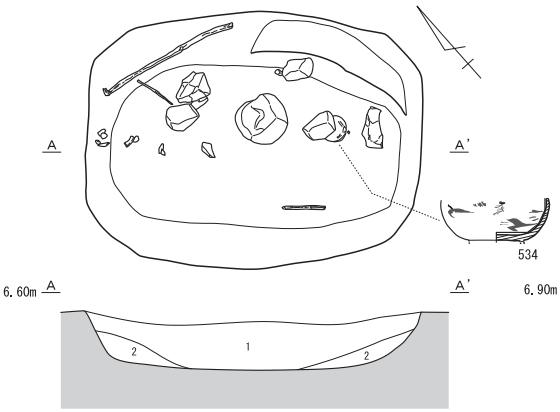
1．オリーブ黒色シルト（5Y 3/2）：土器片僅かに含む
2．灰色砂礫混じりシルト（5Y 4/1）
3．黒褐色シルト（2.5Y 3/1）
4．灰色シルト（5Y 3/2）

SK112



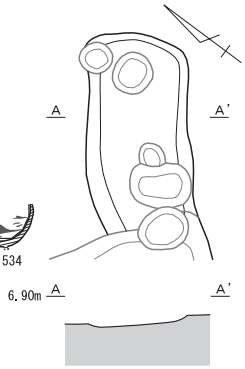
1．暗オリーブ黒色シルト（2.5Y 3/3）：土器片僅かに含む

SK114

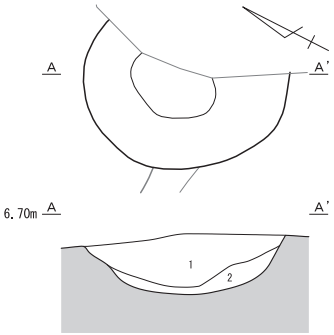


1．オリーブ黒色粘性シルト（5Y 3/2）：土器片含む。植物遺体・木片・人頭大礫僅かに含む
2．オリーブ黒色砂礫（5Y 3/2）：土器片僅かに含む

SK117

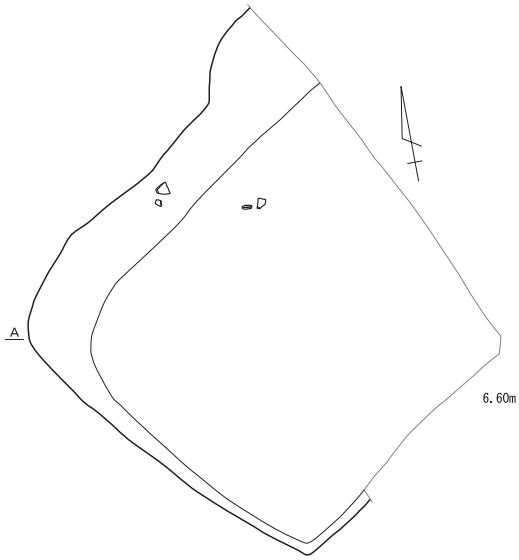


SK116

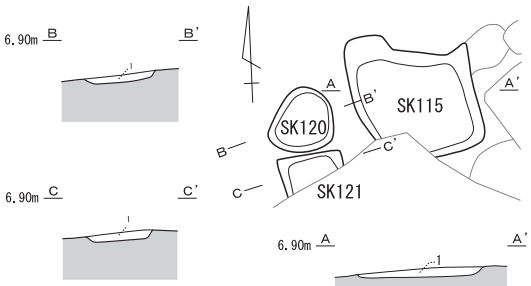


1．黒褐色～黄灰色砂質シルト（2.5Y 3/2～2.5Y 4/1）：土器片やや多く含む
2．灰色砂質土（2.5Y 3/2～2.5Y 4/1）：土器片やや多く含む。最下部に植物遺体堆積。灰色砂礫を層状に含む

SK118



SK119

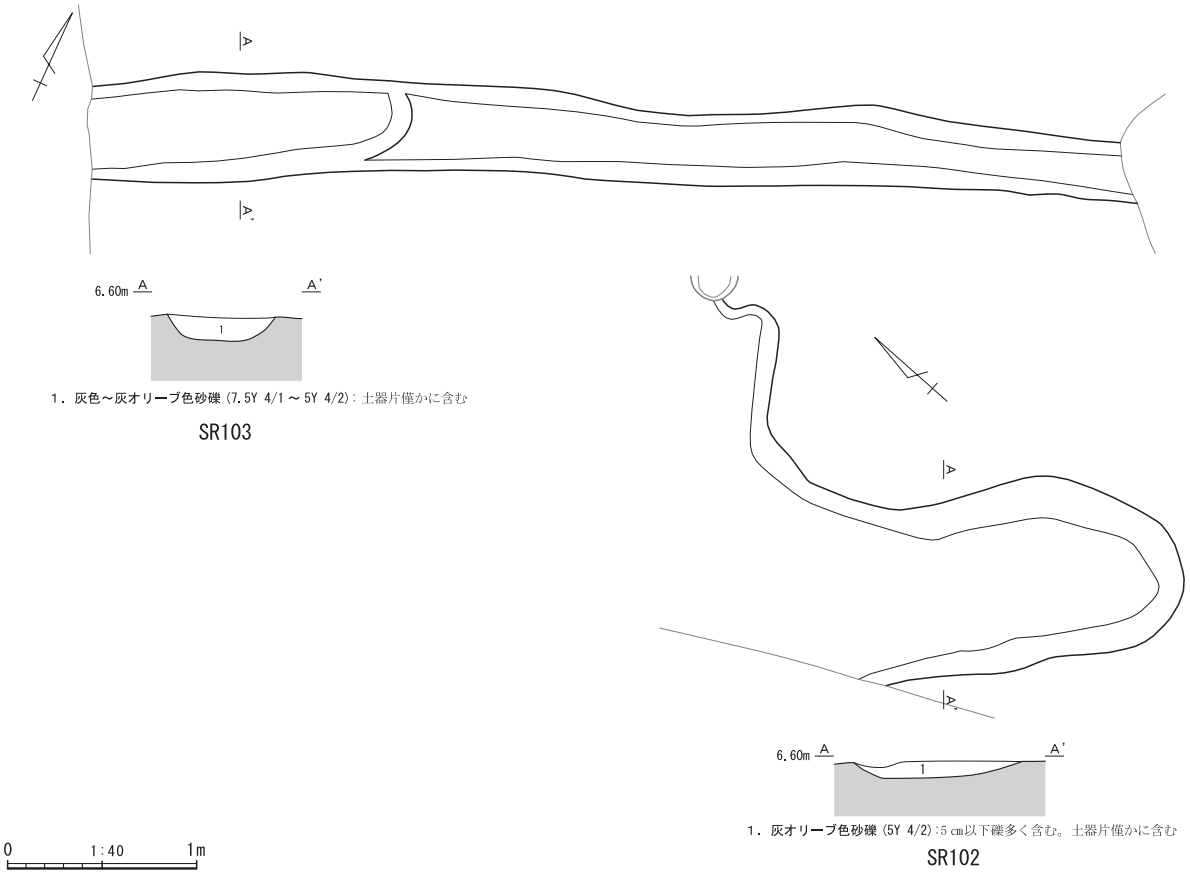


1．オリーブ黒色シルト（5Y 3/2）：土器片僅かに含む

SK115・120・121

遺物　0　1:10　20cm　　遺構　0　1:40　1m

第 224 図　SK110・111・112・113・114・115・116・117・118・119・120・121 実測図



第 225 図　SR102 ・103 実測図

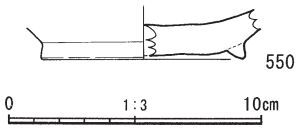
SR103（第 225 図）　3-2 区Ｊ -16 グリッドで検出した。北東方向から南西方向へ流れる直線的な流路で、総延長は 5.6m である。幅は最大 0.6m で下流部のほうへ幅が広くなる。上流部は土坑 SK119 によって切られている。覆土は砂礫層で土器片を若干量含む。

（５）柵列

柵列は基本的には区画溝の内側で検出した遺構である。区画溝の内側は掘立柱建物群があり、柵列 SA101 はそれに伴う遺構と考える。しかし SA102 のように区画溝の内部に入る場合、建物群とは関係のない遺構かもしれない。

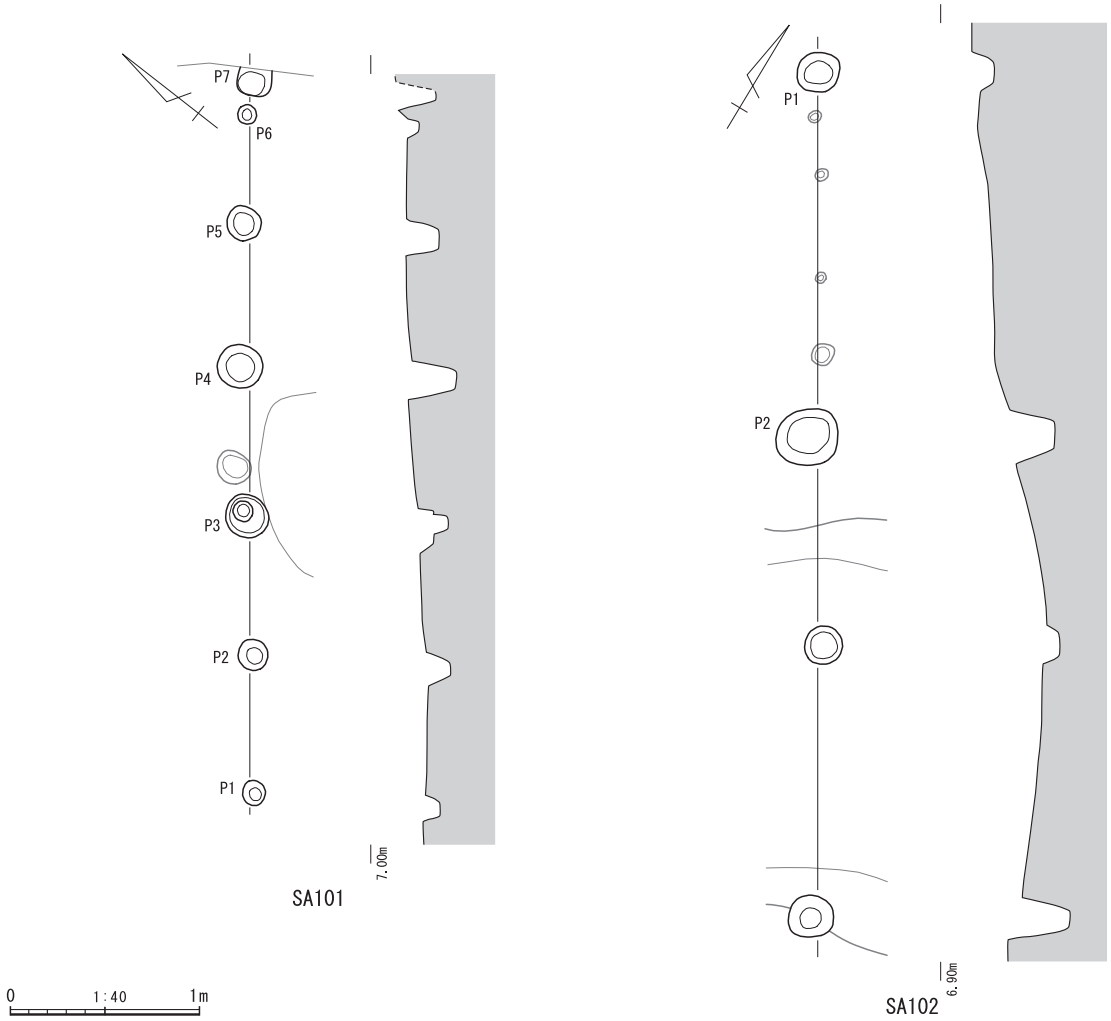
SA101（第 227 図）　3-2 区Ｉ -14 グリッドで検出した柵列である。北東方向から南東方向に１列に伸びる。延長は４ｍ程でさらに東側へ伸びるであろうが、東側は撹乱により壊れている。西側は SD105 に接する。SD105 側には一部に突出部分があり、この柵列と接する位置にある。突出部と柵列の関連性については今のところ解らない。柱間は 75 ～ 80 ㎝、穴は 15 ～ 20 ㎝と小さめで、なかには木材のあった痕跡が残っているＰ３もある。柵は径 10 ㎝以下の木材が並んでいたとも想定される。

この柵列は北側に位置している SB102 や SB103、SB105 の南面と並行している。このことから３棟のいずれかの時期、もしくは建て替えも含めて、掘立柱建物の南面を区画する柵列だったのであろう。こうした建物に付随する柵列は、県内でも複数個所の遺跡で見られる。例えば、県内では藤枝市寺家前遺跡や菊川市伊平遺跡、島田市ミョウガ原遺跡、裾野市大畑遺跡、静岡市大田切遺跡などで類例が見られる（平野 2014）。



第 226 図　SR102 出土遺物実測図

SA102（第 227 図）　3-2 区Ｊ -15 グリッドで検出した柵列である。北



第 227 図　SA101・102 実測図

西から南東に伸びるが、南半分ほどは SD105 と切り合っている。延長は 4.5 ｍで、柱間は 1.4 ｍ、1.1 ｍ、1.9 ｍと一定していない。しかしＰ１とＰ２の間には４個所の細い穴が並ぶ。このことから大型の材と小型の材を組み合わせて作っていることも考えられる。時期的に掘立柱建物跡と同時か、もしくはその後なのかということは判断できなかった。

２　包含層出土の遺物

3 - 2・3 区第 1 面包含層より出土した遺物は第 228 ～ 229 図（551 ～ 610）に掲載した。主に第 228 図には土師器と須恵器・灰釉陶器、第 229 図には灰釉陶器の碗と山茶碗をまとめた。

551 ～ 558 は土師器の坏である。551 は内面が黒い、いわゆる「内黒」と呼ばれる。内面は磨かれている。調査区の南側で砂礫層上面より出土した。552 も南側で出土した坏である。底部は欠損している。553 は中央付近で出土した。内外面の調整痕は表面が風化のため見えない。554 は調査区南側で見つかっている。口唇部が薄く内面側に稜を持つ。555 は 551 と同じく砂礫層の上より出土した。無高台の坏だが、体部はかなり外側へ開く形状である。556 は高台を持つ。形状から見て、灰釉陶器の皿に近い。土師質だが灰釉陶器の模倣品と考えられる。557 は高台を持つ土師器である。調査区南側の砂礫層より出土した。556 と同じく灰釉陶器の模倣と思われる。558 は土師器の高台を持つ碗形の土器である。調査区南側の砂礫層上より出土している。表面は摩耗しているため調整は不明である。土師質だがこれも灰釉陶

器の模倣の可能性がある。外面の一部に黒斑がある。555 ～ 558 は形状から灰釉陶器と同じ時期に属すると考えられる。

559 は高坏の脚部～坏の一部である。脚部裾は欠損している。調査区中央部の表土撹乱より出土した。表面は摩耗しているため調整は不明である。古墳時代中～後期以降の年代の高坏であろう。

560 ～ 562 は甕形土器である。560 は口縁部の 1/3 が残っている。調査区南側の砂礫層上より出土した。復原口径は 20 ㎝を超える。口縁の形状は体部から直角に近く外側へ屈曲する。内外面の調整は最後に全体にナデている。561 も砂礫層上で見つかった甕である。口縁部の外面は屈曲して稜がある。外面はハケ調整の痕が見えるものの、仕上げに全体をナデている。562 は灰色粘土層から砂礫層の間で出土した。口径は 21.6 ㎝程に復元できるが小片のため正確ではない。体部は厚く、胎土中には粒子が多く混じる。表面は摩耗しているため調整痕は見えない。胎土や形状から見て弥生時代末か古墳時代の甕ではないだろうか。

563 は壷か甕の肩部か。小片のため器種が特定できない。外面は細かいハケ調整の後、表面に赤い顔料が塗られている「赤彩」土器である。内面には頸部との接合痕があり、ナデにより調整は見えない。胎土には粒子はなく精製された粘土で、微小な雲母が混じっている。古墳時代以前の土器であろう。

564 は中央部の表土撹乱層より出土したミニチュア土器である。手捏ねで作られており指頭圧痕がある。器種は坏か。565 は調査区南側の砂礫層上より出土した。2.7 ㎝の土製玉のような形状だが、平坦面がある。そこは欠損というよりもどこかに付いていたものが剥がれたように見える。土製の玉ではなく、ミニチュア土器の一部であった可能性がある。第 198 図 367 のようなミニチュア甑の把手とも考えられようか。

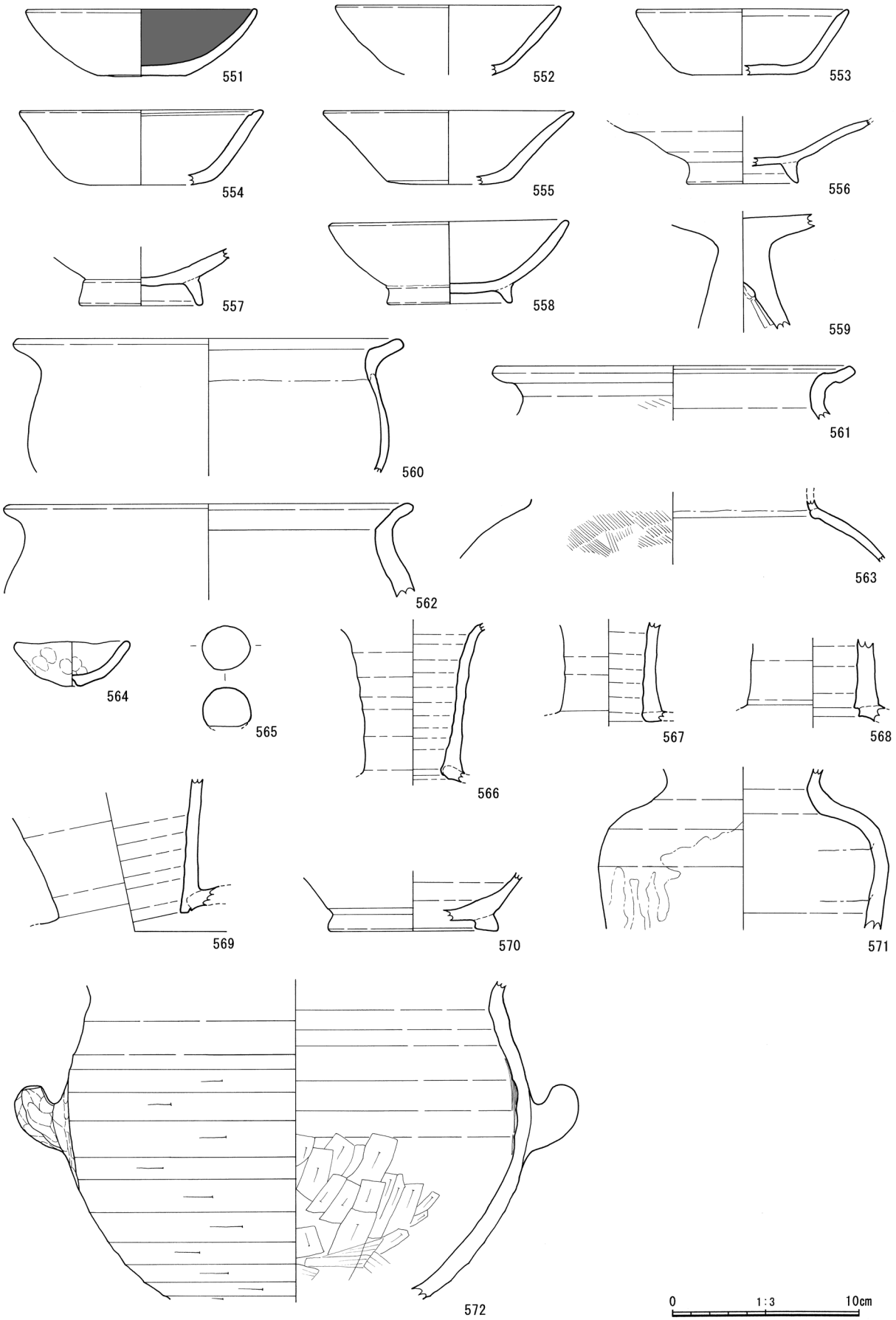
566・567 は須恵器の壷頸部である。566 は調査区南側の砂礫層上より出土した。口縁部と体部は失われている。外面と内面上部に自然降灰釉が発色している。下端部には頸部と体部を接合した痕跡がある。567 は 3-2 区南東部の SD105 南辺北側で出土した。頸部の破片で口縁部と体部は欠損している。外面には片側だけ厚く降り積もった降灰釉が流れ落ちるほどガラス質を形成して緑色に発色している。

568 ～ 571 は灰釉陶器である。568 は長頸壷の頸部か平瓶の頸部である。第１面南側の砂礫層から出土した。内面側に降灰釉がわずかに発色している。頸部と体部との接合部も残っている。569 と形状や胎土がよく似ていることから同一個体の可能性がある。569 は平瓶の口縁部である。3-2 区の南西側包含層より出土した。頸部の内側と外面肩部分に降灰釉が発色している。頸部と体部の接合状態もよくわかる資料である。当遺跡では横瓶の数は少ないものの赤土政所遺跡でも横瓶が出土している。

570 は水瓶の底部であろう。第１面の砂礫層より出土した。内面底部には自然降灰釉が見込み部分にわずかにある。571 は須恵器または灰釉陶器の壷か。調査区南側の砂礫層上層より出土した。頸部や底部は失われている。頸から肩にかけて釉薬が体部へ流れて、白く発色している。

572 は須恵器の甑である。3-2 区南側の砂礫層の上層より出土した。口縁部と底部は欠損している。体部の最も張り出しているところで 25.5 ㎝程の径がある。把手は１箇所残存している。内面の調整痕は底部のほうは工具によるナデ、上部は横ナデされている。把手の接着部分は器面の調整とは別の工具が使われている。把手は太く短い形状である。

573 ～ 589・596 は灰釉陶器の碗・皿である。573 は高台～体部の破片で口縁部は欠損している。重ね焼きされているが灰釉の発色は見られない。574 は碗の底部破片である。内面見込部分には降灰釉が発色し、重ね焼きの痕跡が見える。575 は砂礫層上より出土した碗である。重ね焼きされているが内面と高台側面に降灰釉が発色している。高台がやや小さめなことから小碗と思われる。576 も高台の破片である。調査区中央付近の暗灰褐色土層より出土した。577 は高台内側に糸切り痕がある。内面の見込み付近には重ね焼き痕と白色に発色した降灰釉がある。578 も高台の破片である。釉薬の発色は見られ



第 228 図　第１面包含層出土遺物実測図１

ないが、高台内側に中央が黒ずんでいる。

579 は表土・撹乱層より出土した。内面体部には降灰釉がわずかに発色している。580 は灰色粘土層から砂礫層で出土した。碗の高台部分で高台は接地面が薄く仕上げられている。581 は砂礫層上層で出土した。内面見込から体部に降灰釉が濃い緑色に発色している。582 は同じく砂礫層上層で出土した高台の破片である。やや厚みをもっており、作りが粗い。583 は灰釉陶器の碗だが高台が低く、体部は薄く作られている。584 は高台径が 7.7 ㎝程ある。内面には重ね焼き痕があり、その外側には降灰釉がわずかに見られる。585 は重ね焼き痕が見られるが釉薬の痕は見られない。586 は高台径が 8.6 ㎝程ある大振りな碗である。灰色粘土～砂礫層より出土した。587 は清ケ谷産の碗か。高台径は 7.3 ㎝程ある。内面には重ね焼き痕があり､その外側は降灰釉が緑色に発色している。内面見込みには焼き膨れがある。

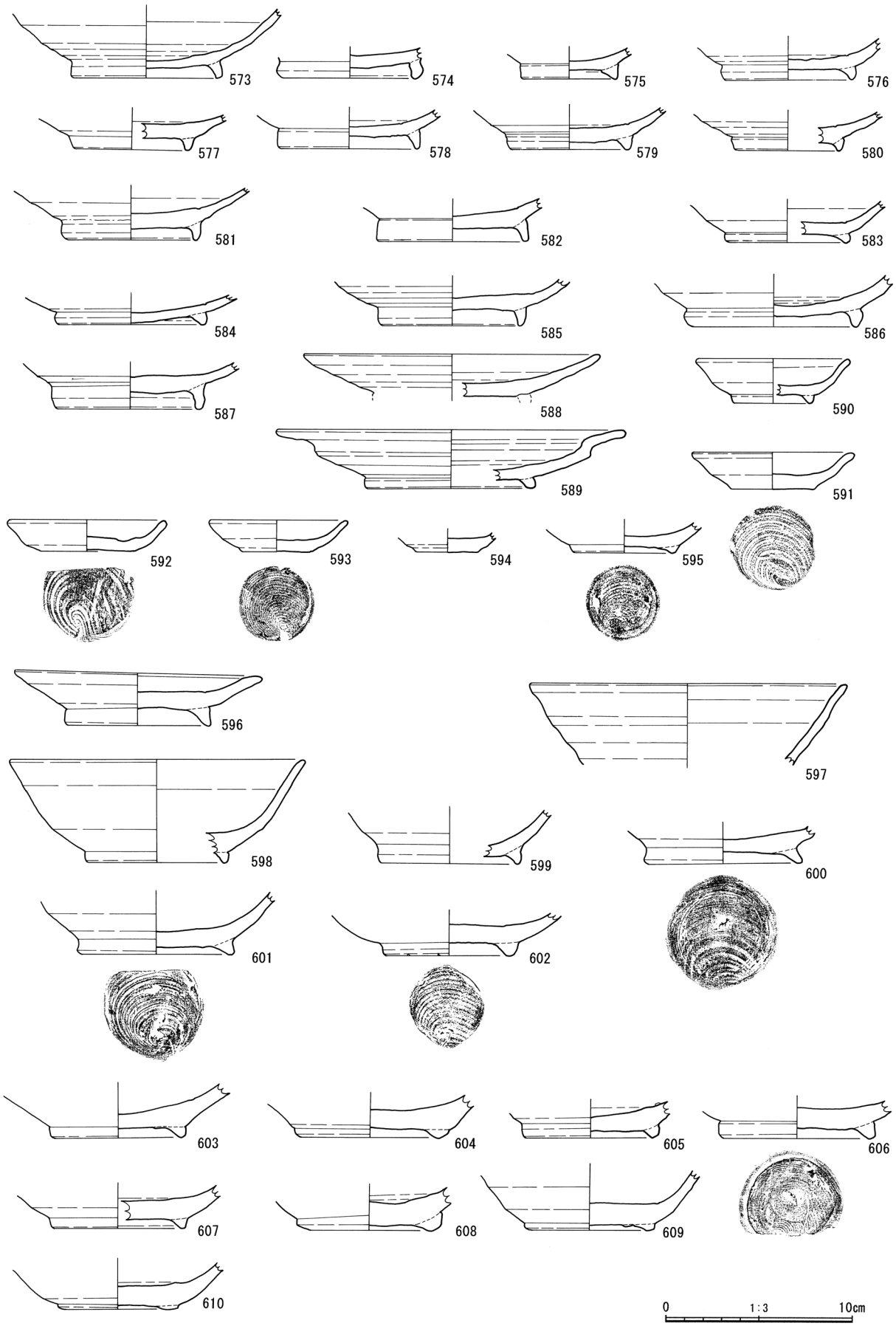
588 は灰釉陶器の皿である。復原口径は 15.8 ㎝程ある。高台は欠損している。589 は段皿である。当遺跡のなかでは一番古い時期の灰釉陶器である。猿投窯産であろうか。口径は 18.6 ㎝に復元できる。内面には中央部にトチン痕が２箇所確認できる。半分程度の範囲で降灰釉が緑色に発色している。９世紀代に属するであろう。596 は皿である。半分ほど欠損しているが全体形は復元できる。重ね焼きの外側は降灰釉がガラス質に変わり薄く発色している。全体にやや厚みがある。10 世紀後半代の旗指古窯の所産であろう。

590 ～ 595 は山茶碗の小皿・小碗、597 ～ 610 は山茶碗である。大半は 3-2 区南側の砂礫層の上層より出土した。590 は高台の付く東遠江系の小皿である。砂礫層の上層より出土した。591 は回転糸切りの底部で、渥美・湖西産の小皿である。内面は全面に降灰釉が付着し発色している。592・593 は東遠江系の小皿である。いずれも底部には回転糸切り痕がある。592 は撹乱層、593 は砂礫層上層より出土した。594 は山茶碗の小皿か。口縁部が欠損している。渥美・湖西産か。595 は高台付きの小碗である。口縁は欠損、高台内面には糸切り痕がある。渥美・湖西産の胎土である。597・598 は渥美・湖西産の山茶碗である。597 は砂礫層上層より出土した口縁～体部の破片である。598 は高台まで残っている。内碗面は降灰釉がわずかに発色している。599・600・602 は東遠江系の山茶碗である。599 は高台部分の破片である。内面見込みには重ね焼きの痕があり、体部までは自然釉が付着している。600 の高台径は 8.4 ㎝で、高台内面には糸切りの痕がある。内碗見込み部分は煤が付着している。602 も底部の破片である。全体に厚みをもっていて、やや粗雑な作りである。601・603 は渥美・湖西産の碗である。601 は口縁部を欠く。高台は厚みのある逆台形で、高台内面には回転糸切り痕がある。内面見込み部分は重ね焼きの高台が付着し、体部には降灰釉が発色している。604 ～ 610 は渥美・湖西産の山茶碗の底部である。604 は外面が被熱したように変色している。605 は重ね焼きと釉の発色が見られる。606 は高台に籾痕が見える。607 ～ 610 は高台が低く潰れている。609 の内面は降灰釉の発色がある。

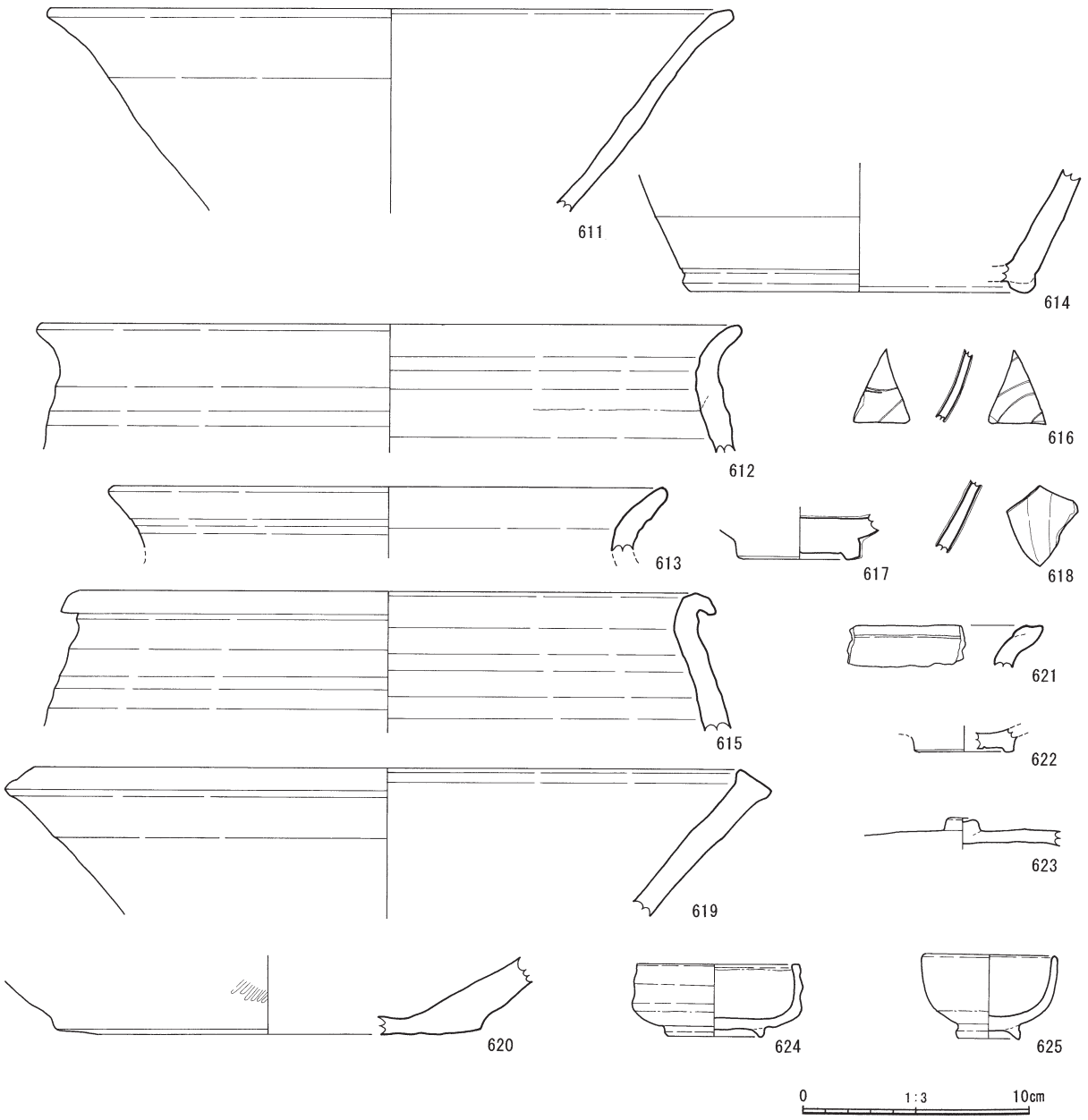
３　包含層・撹乱出土の遺物

3-2・3 区の第１面包含層・撹乱出土の土器は、第 230 ～ 231 図（611 ～ 629）にまとめた。

第 230 図 611 は東遠江系の鉢の口縁部である。山茶碗の時期に併行する。陶質だが粒子の混じりが多く、産地は不明である。土坑 SK117 の覆土内より出土した第 221 図 533 と非常によく似ており、同一個体であった可能性が高い。612 は同じく東遠江系の甕の口縁部と思われる。砂礫層の上層より出土した。復原口径は 31.2 ㎝である。胎土には粒子が多く混じる。613 も甕の口縁部である。砂礫層の上層で出土した。口径は 24.6 ㎝に復元できる。胎土には粒子が少量混じる。東遠江系に属する。614 は鉢の底部に近い破片である。高台の残存部だけで 15 ㎝程の径があることから大型の鉢であろう。底に近い体部と高台の一部が残っている。胎土からみると渥美・湖西産と思われる。615 は東遠江系の甕口縁部である。表土層より出土した。胎土は 533・611 と同じような粗い粒子が入っており、表面は荒れて



第 229 図　第１面包含層出土遺物実測図２

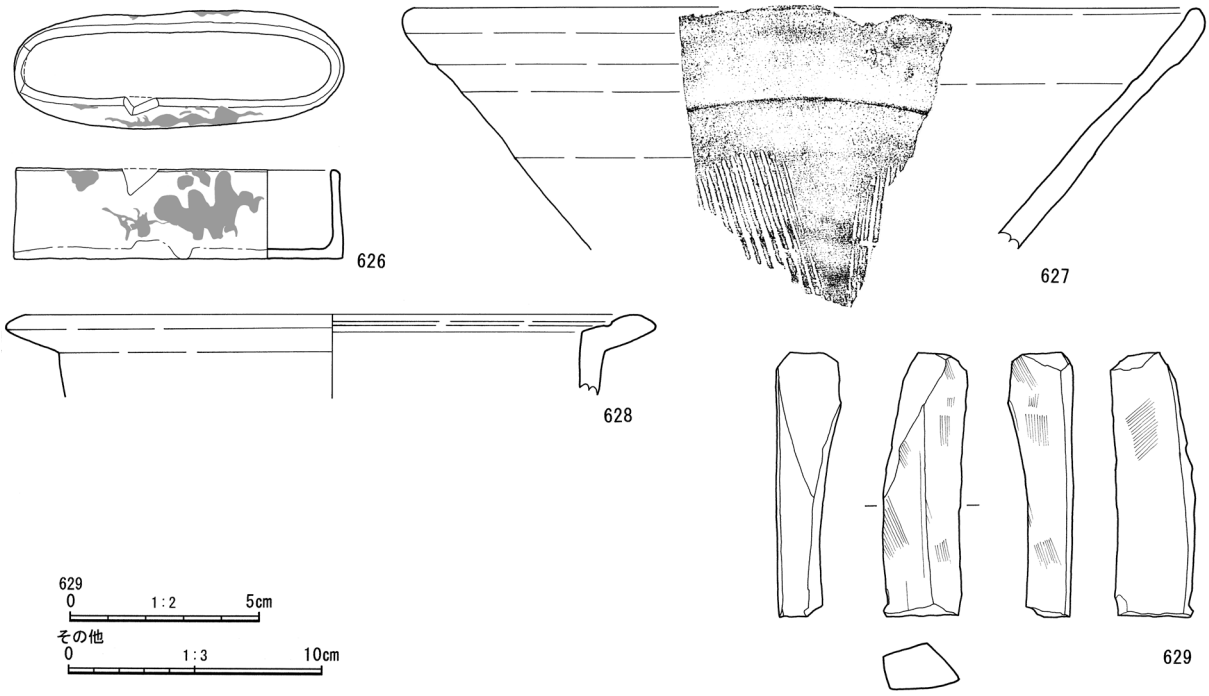


第 230 図　第１面包含層・攪乱出土遺物実測図１

いる。口縁部の形状は口唇のところで折れ曲がるように外側へ屈曲している。

616 ～ 618 は貿易陶磁である。616 は白磁の端反碗である。体部の小破片で径の復元は出来なかった。内・外面には線刻が施されている。617 は青磁碗の高台部分である。底部は厚みがある。618 も青磁碗である。体部の小片であることから径は復元できなかった。外面には蓮弁紋が施されている。

619 は常滑産の片口鉢である。攪乱層より出土した。口縁部の破片で、口径は 31.5 ㎝に復元できることから大型の片口鉢であろう。620 は同じく常滑産の甕の底部と思われる。底径を復元すると 18.8 ㎝程になることから大型品であろう。外面にはハケ調整の痕がある。また焼き膨れが入っている。621 は伊勢型鍋の口縁部破片である。3-2・3 区南側の灰色粘土砂礫層より出土した。小片のため口径は復元できない。口縁部は内側に折り返されている。外面には全体に煤が付着している。日常的に使われていたことが想定できる。622 は瀬戸美濃産の大窯期に属する天目茶碗である。高台の部分が半分ほど残っている。623 は攪乱層より出土した。志戸呂焼の蓋である。蓋の体部はほぼ平坦で上面は回転ヘラケズ



第 231 図　第１面包含層・攪乱出土遺物実測図２

リされている。上部に付く摘みは不定形な粘土塊で、指で押し付けてある。624 は近世志戸呂焼の陶磁器である。表土層より出土した。外面の上部と内面は口縁にだけ施釉されている。625 は近世瀬戸美濃産の猪口である。外面上部と内面全体に施釉されている。

第 231 図 626 は近世瀬戸美濃産の陶磁器である。上部から見ると楕円形で、平底から垂直に 3.5 ㎝程、体部が立ち上がる。口径の最大幅は 13 ㎝である。底部以外の部分は施釉されている。側面には前後に植物のような文様が描かれている。花器などに使われていたものであろうか。

627 は近世瀬戸美濃産の擂鉢である。口縁から体部の破片である。擂面の櫛描きは 11 本以上である。628 は表土層より出土した土器の口縁部だが、鍋か、壷か、器種は不明である。復原口径は 18.3 ㎝である。表面は瓦のような色調をしている。

629 は砥石である。表土層より出土した。上下端部は欠損している。砥面は側面に四面ある。小型の手持ち砥石であっただろう。

４　自然災害の痕跡について

（１）噴砂の確認

南区では、調査区中央付近で噴砂の痕跡を確認した（図版 98）。この噴砂は SR201 を埋めた砂礫層を起源とし、第１面を引き裂くように噴出している。噴砂を確認した場所は表土と包含層が攪乱によって失われていたため、この噴砂がどの層位まで噴き上がっていたかは不明である。時期が明確な柱穴や遺構での噴砂の噴き上げの状況が不明確であり、第１面（鎌倉時代）よりは新しい可能性が高い。

液状化が発生するのは震度５強以上であることが多いようであり、この規模の揺れを引き起こすのは東海地震の可能性が高い。したがって、鎌倉時代（14 世紀後半）以降の東海地震であるとすれば、1498 年の明応東海地震、1707 年の宝永東海地震、1854 年の嘉永・安政東海地震、1944 年の昭和 19 年の東海地震の可能性が高い。今回の調査では時期を特定できないが、今後周辺の遺跡で発掘調査が行われていけば時期を特定できる可能性がある。

また、赤土政所遺跡では写真等は撮影していないが、SD205 や SD401 など自然河川の上層で噴砂が確認できた。一反田遺跡のように河川に堆積した砂礫層を起源とする噴砂の可能性が高い。赤土政所遺跡の噴砂も一反田遺跡と同じ時期の噴砂である可能性が高い。

さらに、菊川市教育委員会杉井尊器氏の御教示によれば、一反田遺跡の北約１km ほどにある川田・東原田遺跡でも噴砂を確認したということである。距離がそれほど離れていないことからもこの噴砂も同時期の可能性が高い。

（２）津波堆積層の未確認

国立研究開発法人産業技術総合研究所地質調査総合センターの藤原治氏の現地での調査所見（3-1 区東壁の土層調査）では、津波堆積物は確認できない。

報告書抄録

ふりがな	あかつちまんどころいせき・いったんだいせき（だいいちぶんさつ）
書名	赤土政所遺跡・一反田遺跡（第１分冊）
副書名	平成 19 ～ 20 年度（掛川浜岡線原発関連道路整備事業）及び平成 24 年度（掛川浜岡線原発関連道路整備事業）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ名	静岡県埋蔵文化財センター調査報告
シリーズ番号	第 51 集
編著者名	中川律子　大谷宏治　鈴木三男
編集機関	静岡県埋蔵文化財センター
所在地	〒 422-8002　静岡県静岡市駿河区谷田 23 番 20 号　　TEL　054 － 262 － 4261（代）
発行年月日	2016 年 3 月 31 日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町	コード 遺跡番号	北緯	東経	発掘期間	発掘面積 ㎡	発掘原因
あかつちまんどころいせき 赤土政所遺跡	しずおかけんきくがわしあかつち 静岡県菊川市赤土 502	22224		34°　41’38”	138°　05’59”	20080910 ～ 20130329	6,432 ㎡	記録保存調査
いったんだいせき 一反田遺跡	しずおかけんきくがわしあかつち 静岡県菊川市赤土 あざいったんだ 字一反田 608-2 他	22224		34°　41’45”	138°　05’54”	20080910 ～ 20130329		記録保存調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
赤土政所遺跡 ・一反田遺跡	集落	古墳時代、奈良時代、平安時代、中世、近世	竪穴建物、掘立柱建物、溝、土坑、流路	弥生土器、土師器、須恵器、灰釉陶器（墨書土器を含む）、山茶碗、陶磁器、ミニチュア土器、土錘、転用硯、砥石、石鏃、石錘、硯、滑石製有孔円盤、鉄鏃、銭貨、耳環、鍬、鋤、鎌、大足、斎串、人形、鳥形、曲物、掛矢、編錘、皿、建築材（柱根・礎板）、種子、馬骨、琥珀製棗玉	
	水田	弥生時代、古墳時代、奈良時代、平安時代	杭列、大畦畔	杭	

要約

赤土政所遺跡・一反田遺跡は菊川市南部中央の旧小笠町赤土地区に所在する。丹野川によって形成された沖積平野に立地し、川の南岸一帯に広がっている。遺跡周辺には弥生時代中期の標識遺跡である嶺田遺跡をはじめ多くの遺跡が存在する地域でもある。赤土地区には平安時代末に「赤土荘」が置かれ、「政所」という地名も残っている。

赤土政所遺跡では４面の遺構面が見つかっている。第１面では中世以降の掘立柱建物と土坑、区画溝、自然流路、不明遺構等がある。第２面は奈良時代末から平安時代で、大型の掘立柱建物群と土坑、区画溝、水田、自然流路、不明遺構等が検出された。掘立柱建物跡は 16 棟あり、第３回ほど建て替えられていることがわかった。第３面は古墳時代中期から終末期までの竪穴建物、溝、土坑、自然流路などが見つかっている。第４面は古墳時代前期から中期中頃までの遺構面で、南半部には竪穴建物のほか、溝、土坑、自然流路があり、北半部一帯に水田が見つかった。

一反田遺跡では３面の調査が行われた。第１面では鎌倉時代から南北朝期の区画溝に囲まれた屋敷跡を確認した。区画溝内には６×３ｍの大型掘立柱建物が見つかっていることから政所の一角である可能性が考えられる。第２面では旧丹野川の支流と思われる奈良時代から平安時代の流路を検出した。流路内では多量の土器や木製品が出土したが、覆土下層では古代の木製祭祀具として斎串や人形、鳥形木製品、墨書のある灰釉陶器が見つかっている。第３面では古墳時代と思われる水田と杭列を検出した。水田は赤土政所遺跡の水田よりも深い位置で確認したことから時期的に古い可能性がある。

静岡県埋蔵文化財センター調査報告　第 51 集
赤土政所遺跡・一反田遺跡

掛川浜岡線原発関連道路整備に伴う事業

第 1 分冊

平成 28 年 3 月 31 日発行

編集・発行　静岡県埋蔵文化財センター
〒422-8002　静岡県静岡市駿河区谷田 23-20
TEL　054-262-4261（代）
FAX　054-262-4266
印　刷　所　株式会社　三創
〒422-8047　静岡県静岡市中村町 166-1
TEL　054-282-4031